



みどり色の四季だより



青潟大学附属シリーズ
中学編短編集

舞夜じよんぬ

1 中学三年・七月末 西月小春の記憶

車のライトが炎に見えた。数限りなく、ひとつ、ふたつ、みっつと燃えて、最後には道路いっぱいに広がりそうだった。

こんな時間に一人で歩いていたら、きっとお母さんに叱られるだろう。どうしてそんなところへ出かけたの、としつこく聞かれるかもしれない。ただそういう時に私の口は開かないことを知っている。自分の意志でも開かないのだから、しょうがない。誰も責めないだろう。私の心はしっかりと、うっかりしたことでも開かないように作られていた。

誰か、拾ってくれないかな、とか思ったりもする。

誰か、悪いことをしてもいいよって、教えてくれないかなとも思う。

それができないのは、私がいい子だからではない。

そうしたって、どうしようもないことが見えているから。

何をしたって、ほしいものを望んだって、無駄なんだとわかっているから。

また黒いつややかな車が私の目の前を過ぎた。

一度Uターンして、タクシーみたいに反対車線を横切った。危ないことするな、と思いながら見ていると、今度は十字路でもう一度曲がった。私の立っているガード下へ、つうっと止まった。

運転席から身を乗り出すような格好で、黒いめがねの男性が、助手席の車窓を開けた。私と目が合うと、にやんと笑った。

「小春ちゃん、だよなあ、よかったよかった。さ、早く乗った乗った」

知らない人の車に乗ってはいけません、というには複雑な関係だった。この人、知っている。私を「小春ちゃん」と呼んでも不思議はない人なんだって知っている。だけど、安心して助手席に座り、どこに連れて行かれるかを考えると、そのあたりさっぱりわからない。よい子の私なら「知らない人の車に乗るなんて狼に襲われるようなものなのよ」と思うだろう。

私は首をかしげてみた。どうすればいいか、答えてくれるのはきっと向こうの人だ。言葉が出ないので相手任せですむ。

「いやさ、さっきお母さんから電話があったんだよな。俺も今から司を迎えに行くところだったしさ。そうだそうだ。小春ちゃん、ちょっとこれから、司を迎えに塾の前で待っている予定なんでさ、いっしょに話し相手になってもらえないかなあ」

話し相手？

できるわけがない。だって私は話せない。べったりした髪の毛をかきながら、その人はさらに続けた。

「ほら、すぐに帰ったら、小春ちゃんお母さんに叱られるだろ。司と俺と偶然会って、お茶を飲んで話をしたってことにすればいいだろう？ いや本当にそうしてもいいけどなあ。なんか、食べたいものある？」

首を振った。どこかで私は計算していた。そうだ、片岡くんといっしょに大人の人がいて、いっしょにどこかに行ったんだ、ということにすれば、誰もが納得してくれる。たぶん、お母さんにも叱られない。たぶん、お兄ちゃんも、おじいちゃんも、お父さんも文句言わない。みな安心してくれる。

私は開きかけた助手席のドアを静かに引いて、一礼し、それからゆっくり座り込んだ。車の中にはちゃんと、自動車電話が備え付けられていた。桂さんは受話器みたいな自動車電話からボタンをひとつ押し、

「西月さまのお宅でしょうか、先ほどご連絡をいただきました桂と申します」

丁寧に、かつ穏やかに、私が無事であることを話し始めた。

2

片岡くんのおうちが青潟では知らない人のいないくらいお金持ちだってことは、誰もが知っていることだと思う。私も片岡くんとかうやってお付き合いをするようになるまではそれ以上のことを知ろうとも思わなかった。ただ、クラスで「誤解」されたままでかわいそうだなって思ったことと、同じクラスでありながら犯罪者を抱えているなんてやだなって感じたことだけは覚えている。

結果、私が思っていたこととはまったく正反対の答えが出てきて、今にいたる。私が本当は、片岡くんをクラスの中になじませてあげるきっかけをほかの男子と一緒に作り、卒業時にはクラス全員で「いいクラスだったね！」って笑いあいたい。そういう気持ちだけがあふれていたのに。私のしたことといえば、片岡くんに口にすることも許しがたい罪を認めさせただけだった。

あんなことなんて、知らない方が、本当はよかった。

知らないまま、同じクラスで、終わってればよかった。

私のしたことは、誰のためにもならなかったのだから、また思い知らされた。一生懸命やればやるほど、自分の見たいものが浮かび上がってこなくて、代わりに見たくないものばかりが近寄ってくる、それが、十五歳の私だった。

車はそのまま、暗がりに入り、自転車がたくさん並んでいるちっちゃな家の前で止まった。ガラス戸から黄色い光が洩れている以外は、ふつうのおうちに見えた。暗がりによく見えないけれども、たぶん家からはかなり遠いんじゃないかなってことは、電信柱の住所表示を見てほしい見当ついた。塾、って桂さんは言っていたけど、こんな遠いところまでどうしてなんだろう。それに塾？　なんで塾に通う必要あるんだろう。だって桂さんは、片岡くんの家庭教師なのに。

「あ、小春ちゃん、なんでって顔してるなあ」

桂さんはそばの自動販売機でオレンジジュースを買ってきてくれた。冷たくて指先が気持ち

よかった。お礼代わりに頭を下げてから飲んだ。甘かった。私の好きなタイプだった。

「司さ、あいつ英語だけ得意だろ？ ほかの科目もなあもっとがんばってくれればなあいいんだけど、な。司の勉強は今まで俺が全部見てきたけどな、やっぱり俺も最近、記憶力の低下が著しくてさ、どうも最近の内容にはついていけねえ。奴も生言っちゃってな」

くっくと笑いながら、桂さんは手の甲で口をぬぐい、缶コーヒーを飲んだ。たぶん、私のもらったオレンジジュースよりも背の低い缶だからきっとそうだ。

「『英語だけは絶対一番になるんだから、塾に行くんだ！』とか言い出してな。英語なんてテレビとかラジオで十分だろがって俺も思ったんだけどなあ、本人のやる気がもうマックスだからさ。やらせねえわけにはいかねえよ」

プライド傷つけられてもいいはずなのに、桂さんの笑顔はまったく変わらなかった。どうしてだろう。男の人なのに裏表なく見える。

「これもな、本当はみんな、小春ちゃんのおかげなんだよ」

桂さんは、どうして私のおかげなのか、ってことを説明してくれなかった。

英語が得意なのは、小テストの全クラス成績優秀者発表を聞いていたので知っていた。だって、D組の立村くんの次なんだもの。語学の天才と言われている立村くんの次、ということは普通の人として最高順位だってこと。前からよかったのかもしれないけど、確か私が口きけなくなっただけで二番を守っている。

それを言ってるのかな、桂さんは。

私なんて、どんなに役立つとしても嫌われてしまうのに。

片岡くんには、どうして役立つってしまうんだろう。

3

甘い光がすうっと戸口から広がった。自転車がたくさん並んでいるのだから、きっと塾の生徒もたくさんいるんだろうと思っていたけれど、そうでもなかったみたいだ。高校生っぽい感じの、ひげを生やした男子生徒とか、おばさんっぽい感じの人とか、年齢層の高めな人が多かった。本当に塾だったんだろうか。

一番後から、半そでのワイシャツをふわっと膨らませた感じの男子生徒がこくっと頭を下げて、出てきた。たぶんそうだ。

「ははん、残され坊主だったなあいつ」

桂さんが鼻毛をつまむようにしてつぶやいた。

「ご近所迷惑だし、クラクションは鳴らせねえな」

暗闇だけど、車をつけているのは一台だけだし、気づかないことはないと思う。すぐ斜め左にいるのに、片岡くんはこっちをきょろ、あっちをきょろと何度も首を回している。かなりの方向

音痴なのかもしれない。

「しゃあねえなあ、小春ちゃんちょっと待ってな。あいつ捕獲してくるからさ」

言った後で大きく肩をすくめ、桂さんは車から降りた。エンジンはふかさないで、きちんと止めたあとでだった。

さすがに片岡くんも桂さんが肩をたたくと、気づいてくれたらしい。耳もとでなにかささやいている桂さん、きっと私がいるってことを話しているんだろう。片岡くんがこちらを見て、ぱたっと動かなくなった。きっと、びっくりしたんだろう。片岡くんは私がいなくても、「あっちにいけ」とか「半径五メートル以内に近づくな！」なんてことは言わないから怒らないだろう。でも、迷惑だとは思っているんじゃないだろうか。私も、本当だったら来る気なかった。ひとりで学校帰りふらふら繁華街を歩いていて、補導員につかまる前に桂さんに保護されたなんて。あまり聞かれないことではない。

唯一救いなのは、たとえ片岡くんに嫌われても、私がこれ以上孤独になるなんてこと、ないってことだろうか。もう、ゼロ以下の場所なんてないと、知っている。

ふたりが私に背を向けた。ふと、片岡くんの頭が桂さんに向けてまたこっくりした。駆け出したのに、桂さんは追わなかった。桂さんもそのまま立ったままにいる。塾らしい家の脇にいきなりしゃがみこみ、指差した。きょろきょろすると同時に、いきなり手を伸ばそうとした。すぐに桂さんが片岡くんに近づいて行って、思いっきり頭をはたいた。少し話をした後、片岡くんだけがもう一度塾の玄関に入っていき、すぐに戻ってきた。片手になにか光るものを持っていた。同じ場所にしゃがみこみ、何かをしていた。桂さんがじっとそのまま、待っていた。立ち上がるのと同時に何かを持って、車のそばに走ってきた。私の座っている助手席まで近づいてきた。

灯りがぼやけていて片岡くんの顔が読み取れなかった。

窓ガラスをとんとんたたいた。

私は車窓を開けるためのレバーをくるくる回した。

「今、これ、取ったから、あげる」

私の鼻先に差し出されたのは、土がついたままの小さな薔薇の花だった。もう咲ききっていて、あとは散るのを待っているようなさびしい花びらがひざに落ちた。

受け取るしか、私にはできなかった。同じようにこっくりとうなづくことしか、私にはできることがなかった。

——早く終わらないかなあ。

時計の針がなかなか進まない。先週のテストが返却され、僕は黙って結果の「七十点」を見据えるだけだった。僕の周りにいる同級生たち……と言っていいんだよな……はみな、ずっと年上の人ばかりだった。日本人みたいな髪の毛と顔つきだけど、アジア系の人ばかりなんだって後で知った。みな、真剣な顔して、先生の答えを手写ししている。

僕と同じくらいの歳の子は誰もいない。

桂さんに「英語をもっと勉強したい」と訴えたら、つれてこられたのがここの塾だった。もっとたくさん青瀉の中学生が全市から集まってくるころだと思っていたら、「司にはそういうとこ合わねえだろ」の一言で決められた。かなりショックだったけどしょうがない。毎週木曜と土曜、桂さんの車で通っている。

桂さんいわく、「英語を使う人ってのはな、西洋人ばっかじゃねえんだからな、そこんところよく覚えとけ!」。うん、そりゃ、わかってる。英語は世界共通語だから、アラビアの人もしゃべるし中国の人もベトナムの人もみーんなしゃべるんだって知っている。でも、それとこれとは違うだろ?って僕は言いたい。だってここの塾、日本語をしゃべること厳禁だっていうのはわかっていたけど、中国語や韓国語を始めとするアジア系の言葉はみな解禁だってこと、なにか不公平じゃないかって思えてしまう。そうだよ、日本語だって、アジア語じゃないか!

アジア語の「さよなら」を繰り返し、年上の同級生たちを見送った後、僕もやっと教室から出ることができた。教室といっても、以前は茶の間だったんだって、先生が言っていた。だからなんだ。畳にテーブル並べているのは。菅野先生……僕の知っている限り、唯一の日本人だ……が手で「つかっちゃん、つかっちゃん」と日本語で呼んだ。

「テーブル、たたむの手伝ってくれるか」

「はい」

断るわけにはいかない。一番年下の塾生だからこそ、断れないってわかっているから菅野先生は僕を指名するわけなんだ。細長いテーブルをまず畳にひっくり返し、足のところを軽く蹴飛ばして平べったくした。それをふたりがかりでよっこらしよと隅っこへ運ぶ。その繰り返しだ。

「ほんと、よくついてきてるよなあ、つかっちゃん」

「はあ」

たぶん狩野先生よりは年上で、駒方先生よりは年下だと思う。ひげがきれいに牧師さんみたくまとまっているところが、年齢不詳っぽい。白髪まじりじゃあない。細長い顔に銀縁めがね。ほんと、何歳なんだろう。

「ここはな、インターナショナルな世界だから、カルチャーショック受けただろ？」

「はい」

否定しない。ほんとだもん。菅野先生は最後の机を立てかけた後、僕の顔を覗き込み、
「いいか、これが、日本の中の世界なんだぞ」

意味不明なことをつぶやいた。

「日本の中にはいろんな世界の人がいるけれどもな。英語をしゃべるからといって必ずしもアメリカ人とかイギリス人なわけではないんだからな」

桂さんだって同じこと言ってる。

「日本にはな、アジアの人たちがたくさんいるんだ。もちろん顔でどここの国の人、とわかることもあるけれども、見た目にはまったくわからないこともある だろ。しゃべってみても、日本語がぺらぺらだから日本人だと疑わなかったら、違うお国の人だったってことだってあるよなあ」

知ってるよ、ほんとそのくらい。僕がつまんないって顔しているのに気づいたのか、菅野先生は僕の額をいきなり手の平でたたいた後、

「ま、いっか。つかっちゃん、今日はここまでだ」

お許しを得て、僕はダッシュして教室を出た。ちゃんと日本語で、あいさつして。

「お先に失礼します！」

3 中学三年修学旅行四日目夕方・片岡司の記憶

前から、聞いたことはあった。

青大附中始まって以来の語学の天才がいるってことを。

もちろん、聞いたこと、あるさ。

僕がいくら勉強したって、そいつにはかなわないってことを。

顔はわからなかったけど、去年の秋くらいから今度評議委員長になるのはあいつだって話、聞いたことはあった。

けどそんなの、僕には関係ないことだと思っていた。

僕がまともな点数を取ることのできる学科は、唯一英語だったけど、最初はぜんぜん、そんな「語学の天才」に立ち向かおうなんて思ってやしなかった。

修学旅行四日目夕方、あいつが、あの人とホテルの土産売り場でにこにこしながらしゃべっているところ見るまでは。

あの人はずっと言葉を発しなかった。

だけど、僕には見せないにことした笑顔を、ちらちら見せていた。何度か手元のお土産……鏡みたいなもの……をもってはふたりで「あれがいいこれがいい」っぽいことをしゃべりあっていた。いや、しゃべりあっていたって表現は間違ってる。あいつがひとりで一方的に語り尽くしていたってだけのことだ。

「ほら、これが絶対……に合うと思うんだけど、西月さん、どう思う？」

白いワイシャツにネクタイをそのまま締めたまま、黒い財布を握り締めたまま、一生懸命あの人を説得している。しかもあの人は、あいつに対して別の鏡らしいものを持ち上げては、首振ったり身振り手振りを大きくしたりして、楽しげに意思表示しているじゃないか！ 僕とさっきまで一緒に歩いていたときは、じっとおとなしくうつむいていただけなのにだ。僕だってちゃんと、やることはやったつもりなのにだ。ちゃんと、荷物持たなくちゃって思ったし、アイスクリームも僕のお小遣いで……桂さんに「彼女にはな、自分からご馳走しないとだめだぞ！ これはな、男としての、心意気なんだ！」とかわけのわからないこと言われたから……買ったのに。

それとも僕、また変なこと、言っちゃったかなあ。

ああ、泉州さんがいてくれたら、場が持ったかもしれないのにな。けどさ、あの人はちゃんと僕に向かって、何度か、本当に何度かだけど、にことしてくれたよ。無視は一度もしなかったよ。それだけで十分だって思っていたのに、なんで、あんな奴の前では僕の何十倍も語ってるって顔、するんだろう。

奴はずっとあの人と語り合った後、柄の長くついた鏡を持ってレジに向かった。僕がじっと背中越しに見つめているのたぶん気づいていないだろう。視線がレーザー光線だったら、きっと心臓ぐぐっと貫いてるはずだ。あの人が少しうなだれて指をかんでいたけれど、あいつまた変な

こと、言ったんじゃないだろうなあ。

「ありがとう、西月さん、助かったよ。じゃあこれ、……に直接渡しておいてもらえるかな。俺だとやっぱりまずいからさ」

また、僕にはちっとも見せなかった笑顔、溢れ出してる。

ほっぺたのえくぼが、あんなに深いなんて。

——あいつが英語の天才なんだよな。

不意に、僕の方を振り向いた。絶対に、目線のレーザー効果じゃないはずだ。そんなびびらないでもいいのにな。

あの人は最後まで、僕に気づいてくれなかった。そのままエレベーターの方へ向かって歩いていった。

4 高校二年初夏 西月清明の記憶

父さんたちはふたりっきりでパドックに出かけ語らっている。学生は馬券購入禁止と言う決まりだということを僕は知らないわけではない。だから今日は素直に馬よりもルイ子を観察することを選んだ。

平日で、大きなレースが行われているわけでもない。たまたま僕が開校記念日で休みだったこと、ルイ子の母の仕事柄どうしても競馬場に行かなくてはならなかったこと、ルイ子はいつも学校を休んでかまわなかったこと、いろいろな要素が絡み合い、今日は四人、本当の「家族」として出かけることとなった。

「静かね」

ギャンブルの場所とは思えない言葉を、ルイ子は発した。

「そうだよな」

「母さんもきっと、静かよ」

「ふうん」

しばらく僕たちはサイダーを片手に移ろいでいた。まだ幼稚園にも入っていないであろう子どもをよちよちある歩かせながら拍手している親子連れ。カメラでその姿を撮っている父親らしき人。僕たちはぼんやりと彼らを眺めながら屋根のついた休憩所へと向かった。青潟から少し離れた場所にある地方競馬場。外馬場 方面ではいわゆる競馬新聞と赤鉛筆を持ったおやっさんたちが群れている。いつもだったら僕も混じっていたのだろうが、せっかくのデートを邪魔するほど野暮でもない。真なる妻、真なる夫。子たる僕たちも、彼らを妨害するほど、幼くはない。

「お前、身体、大丈夫なのか」

ベンチに腰掛けた後もまだ息が上がったままのルイ子に僕は尋ねた。ここ一ヶ月ほど、妙にルイ子が呼吸に困難をきたしているような気がしてならなかったからだった。ルイ子の身体が弱いということは、一度も聞いたことがなかったけれどもだ。まさかとは思いが僕の手がルイ子に触れたから、というわけでもあるまい。

「うん、大丈夫、清明くんのせいじゃない」

「ばか」

頬をそっと撫でてみた。熱く、やわらかい。

緑色に染まる目の前の樹木たち、その陰から荒々しく競走馬たちが駆け出していくのが見えた。外馬場からのけたたましいざわめき。僕たちとはまったく別の次元で行われているレースだ。父もルイ子の母も、大人の世界からそれを見つめているのだろう。僕も、おそらくルイ子も、「真」の場所から、たぶん馬たちのいななきを聞いているのだろう。

レースは1200メートルの短距離戦だったこともあり、すぐに決着がついた。途中、一頭「落馬競走中止」……必ずしも騎手が落馬するわけではなく、競争馬が骨折したり歩様に異常を感じた時などにも使われる……の馬がいたらしく、緑色の馬運車がすうととおりぬけていくのが見えた。場内放送によれば特に問題は無いらしい。配当金にも影響はない。僕たちは所詮、競馬を「観戦」するだけの人間だ。関係ないことである。

「競走馬は骨折したら、すぐ殺されちゃうのね」

「時と場合によるよ」

「私も、そうなるのかな」

ルイ子の瞳は薄く茶色かった。髪の毛を指ですくうと、ところどころ赤茶けていた。手入れは行き届いているはずなのに、髪の毛の細さがあぶなっかしかった。

「一部の馬は、熱狂的なファンによって大切に守られたりもするらしいよ。もちろんほんの一部だけだよ」

ルイ子にとって、その一部のファンが、僕であることに気づかないらしい。首を振るルイ子の肩を、僕は思わず抱きしめた。

「それに、変な話さ、G1をたくさん獲って、鳴り物入りで種牡馬入り、繁殖入りしても、いい仔を出さなければそれきり、畜産業者に処分されるらしいよ。これもすべてではないけどさ。ファンは移り気だから、忘れられた頃に、いつのまにか消えてしまった、そういうパターンだっ
て多々あるわけさ」

ルイ子がなぜおびえているのか、僕にはうすうすわかるものがある。僕の妹でかつ父の娘、さらに言うなら「望まれない子」であった彼女の将来について、僕たちが案じていることを彼女は察しているのだ。僕にとって妹とは、「悪の根源」でありかつ「生まれてはならなかった生き物」だった。早い段階で、そうだ、存在する前に淘汰されるべき子どもだった。父がルイ子の母の元へ馳せ参ずる直前に仕掛けられた、女の形をした爆弾だとも。

父が妹をわずかも愛していない。男同士理解しているつもりだ。僕の存在でもって無理やり母とつながれた父に、僕なりの償いをしたくて、それが父の味方になるということだった。ならば、存在したゆえにたくさんの人々を傷つけ、縄で縛った妹にも、その一環を担ってもらうべきではないだろうか？ もちろん真実を話す気もなければ、僕たち男衆も「可愛い妹を守る父と兄」の顔を崩す気はない。ただ、気が付かないうちに妹の存在でもって賠償を行うことは、父も、ルイ子の母も、そしてルイ子も願っていることではないか。少なくとも僕は妹にその賠償方法を教える前には死ぬわけにいかない。ルイ子を「妹」にできなかった僕としては、一生今の「妹」を許すわけにはいかないのだ。

僕が存在した責任をとるためにも。

「今年の夏にさ、ルイ子」

僕はひとつ、計画を口にした。

「妹がああ御曹司のうちに長期滞在するらしいんだ。その時期を利用して、僕も長期一人旅をする予定を立てたんだ」

「一人旅？ そんなに長いの？」

僕は口を軽く覆って黙らせた。

「ついでに父も長期出張を入れる予定なんだ。地方競馬で知られる土地柄らしいけれども、観光

にも事欠かない穏やかな場所らしいよ」

よくわけのわからない顔で、ルイ子が僕を見つめる。

「そこでまた、今日と同じように、いっしょに四人で、馬を観るっていうのはどう？」

天は曇り気味だった。雨が降らないうちに僕たちは父たちを探しに外馬場へ戻ることにした。まだ時間はある。少し贅沢をして、屋根付きの指定席を取って、そこでゆっくりと話をしよう。

狩野先生へ

狩野先生、お元気ですか。湊則子です。七月のせいかだんだん暑くなってきて、私はもうすっかりばてばてです。かの子さんもお元気でしょうか。去年の夏休み、最後の素敵な思い出が今でも胸に残っています。あの時は本当にありがとうございました。

私にとって青潟大学附属中学での生活は、狩野先生たちと一緒に過ごしたあの旅行だけでしたが、学校に三年間通ったよりもずっと、重みのあるときだったなと思います。今は公立の中学で、小学校時代から付き合いのある親友たちといっしょにすごしています。両親からも、せっかく入った学校なのだからと退学を反対されましたけれども、今でもまったく後悔していません。あの時、狩野先生が私のために一番いい道を選んでほしい、とおっしゃってくださったからこそ、私は自分の一番求めてみた道を選べたのだと思っています。本当は狩野先生も一緒に、公立中学で担任として入ってきてほしいと思っていましたけれども、そんなことは無理ですね。私は先生がいたからこそ、青大附中のことを憎まずにすみました。かの子さんの作ってくれたふりふりの真っ白いエプロンは今でも、時々広げてみています。（着てません！もったいなくて！）

一年経って、本当の友だちに恵まれてからやっと、私もあの頃の自分がどうしてあんなにおびえていたのかをつかむことができました。そのことをどうしてもきちんとしておきたくて、今日手紙を書かせていただきました。

私はもともと、本当に心を許すことのできる友達を選ぶくせがあるみたいです。広く浅くというよりも深く狭く、本当のことを語り合える友だちだければいい、それも二人か三人いれば十分という内向的な性格です。だから、本当は青大附中で仲良しの友だち（青木さんと富津さん）がいればそれでいいと思ってました。どうしても最初入学式で感じた、異様に明るすぎる空気が息苦しくて、すぐに学校を休んでしまいましたが、それでも最初の日に知り合った青木さんと富津さんとはうちが近かったことと同じ小学校だったこともあって、いまだに友だちでいます。正直なところ、彼女たちだければいいと思ってました。

なんで、西月さんがあんなにしつこく私にまとわりついてきたのか、どうしても理解できず、かといって青木さんと富津さんも学校に通っている以上文句を言えず、だんだん私は息が詰まりそうになってきました。毎日、それこそ本当に毎日です。ノートは富津さんが持ってきてくれるからいいのに、住所を調べてわざわざ遠くから通ってくるなんて。うちの両親は「いい友達ね」と言っていましたけど、私は退学するまであの人と話をしたことがまったくありません。あの人と顔を合わせるのもいやだったので、いつもきそうな時間帯には近所のスーパーへお使いにでかけたりしていました。

でもまさか、待ち伏せされるなんて思ってなかったんです。

いきなり、私の肩をたたいて、「湊さん、みんな待ってるよ、早く学校に来てみんなと仲良く

しようね」とにっこり笑われた時の私は、どうすればよかったのでしょうか。手を振り払って逃げるのが精一杯でした。あの段階で、私はもう二度と青大附中に近寄るまいと心に決めました。今だから書くことのできることでありますが、それ以外の理由というのは、二番手、三番手にまわしていいものでした。私はただ、西月さんという人のいるクラスにいるのが耐えられなくなったんです。でも口にしたら個人攻撃になってしまうし、彼女は決して悪いことをしているわけではないし、クラス学級委員……評議委員のことですよ……としてはクラスメートを思いやる暖かい心の持ち主、と言われるんでしょうね。暖かい思いやりを受け取れない私の方が問題あるといわれるんでしょうね。わかってました。でもだめだったんです。息苦しくて、想像するだけでも窒息しそうでした。いつも小学校時代の友だちに手紙を書いて（電話では話せませんでした。両親が目を光らせていたので）助けてほしいと訴えてました。どうすればよかったのか、今でもわかりません。

なんでこんなことを書いたのかというと、その後富津さんたちが西月さんのその後どうなったかを教えてくれたからです。

彼女がどういうことになったのか、またかの子さんの妹さん（たしか近江さんですよ？ 私は彼女と一度も話をしませんでしたけれど、富津さんたちから聞いたところによると私と話が合いそうだなって気がしました）が評議委員になったこと、いろいろ聞いて、私は正直、やっと彼女も私の気持ちを理解してくれるかもしれないと期待してしまいました。西月さんはきっと、私が学校で口を利けなくなりそうなくらい恐れていたことを、自分で感じているはずだと思います。どんなに追い詰められてもそれが善意である以上、受け手は当然のごとく感謝しなくちゃいけない。それに耐えられず私は逃げました。卑怯だったかもしれません。でも、もしあの場で残っていたら、私も西月さんを傷つけたという男子と同じようなことをきつとしたに違いないと思います。

すごく汚いことばかり書いてしまいました。ごめんなさい。今度、夏休み、ぜひ狩野先生とかの子さんにお会いしたいです。私も来年の受験に備えて（もちろん公立です！でも公立中学の悲しさで先生たちがまったく頼りになりません…）いろいろご相談に乗っていただければと虫のいいことばかり考えてます。ほんとはかの子さんにまたひとつ、聞いてもらいたいこともあるのですが、それは狩野先生には内緒です。ごめんなさい。

では、また近くなったらお手紙出します。先生夏ばてしないでくださいね！

湊 則子

「遅れるな！ 走れ！」

「でも、でも」

「お前、逃げたくねえのかよ！」

俺の手を振り払うかのようなしぐさをする千草。

「里希、でも」

「お前が走らねえんだからしょうがねえだろが！」

俺だって息が切れている。青潟夜のネオン街はいつもならば慣れた顔してうろつける場所なのに、今の俺はそんな余裕がまったくない。ただ、せかそうとするだけだ。千草を早く改札口に押し込んで、さっさと出してみたい、そんなあせりだった。待つことができない。いや待つてはいけない。

「いいの、里希、ここでいい」

千草は俺の手をもう一回振り払った。思わずよろけた拍子に握り締めていた指先が緩んだ。青潟駅の切符売り場には、まだ会社帰りのおっさんたちが、また高校生くらいの不良連中、あと里理あたりが目をつけそうな奴ら、ぱらぱらとふらついていた。

「早く、帰らないとだめだよ、里希、明日試験よね」

「楽勝だったの、どうせ公立だ」

「試験は生ものだってみんな先生たち言ってるよ！」

「あのな、千草」

俺はもう一度、今度はあいつの身体ごと、俺の腕に引き寄せた。

周りの視線が集まってきているのが痛い。俺の顔見て、明日公立高校試験を目前としている中学生だとは思わないだろうが、千草はまずい。どうみたって、中学生そのものだ。あいつの身体をよだれたらして見ているどこぞのやつらにはわからねえだろうが、確かにこいつは、十五歳の女子なんだ。

千草とは小学校六年からの付き合いだった。

もっと言うなら、大人同士と同じ、という感じだった。

このあたりは偶然といじめの副産物と、その他いろいろあるが、一部の連中にしかそのあたりのことは話していない。そうだ、立村にも言ったことはない。俺が青大附中随一の女ったらしで百人切りを目指している、という噂を、果たしてどこまで真実と言い切れればいいのか俺にはわからない。実際、こなした数だけは「百人切り」だったろう。俺が近づくだけで妊娠するという噂まで流れている。俺にだって選ぶ権利があるとは正直な本音であるけれども。

俺は、青大附中の女子には一度も手を出したことなんてない。

千草と、もうひとりだけだ。

「けど、里希、これは私だけの問題だもの」

「じゃあとっとと金持って切符買えよ！ 行く場所わかってるんだろ？」

千草がなぜ戸惑っているのか、俺にはわからない。こいつが今まで置かれていた環境下は、俺だったら即逃げ出すか児童保護所に救いを求めるか、そのどちらかだろう。本当にほれてたであろう俺とか、他の奴と一対一であることを、千草は不特定多数の奴らに見せるため、カメラの前でそういうことを「させられていた」。しかも、自分の親の命で、だ。

俺はポケットから有り金全部引っ張り出した。まあいいさ、しばらくは里理にせびればいい。かっこよく札束ぽんと渡せればそれでいいんだろうが。早く金を稼ぎたい、高校になんぞ行かなくて。

「千草、かばんだせ」

出そうとしないので、俺の方から無理やりポシェットらしきものをひっぱり、チャックを開けた。あいつが逃げるんでないかってことで、片腕でしっかり押さえたままやるから、なんかエッチっぽい。財布を出してその中に金を入れるのがいいんだろうが、できる余裕なんてない。俺の財布のじゃらじゃらを全部ポシェットに落とし込んだ。息が止まったような気配、千草が生きている両方の手でそれを押しとどめようとする。俺が自分の両腕に力をこめて身動きできないくらいに。だんだん視線がきつくなる。このままこんなことやってたら、補導されちまう。

千草の耳元でささやくのが精一杯だろう、もうあと、もう少しで最終列車が出るはずだ。

「いいか、千草」

腕を緩めた。頬と頬をくっつけあう一瞬。熱い。

「とにかく、そのおばさんところに行け！ 汽車に乗ったらたぶん一晩くらいはなんとかなるだろう。朝一番で到着したら、そのおばさんところにダッシュするか、警察か、児童相談所を電話帳で探して、そこへ行け！」

「けどむりよ」

「無理じゃねえよ。千草、お前、もうおっさんたちにあんなことこんなところ見せる必要なんてねえんだからな！」

「でも、里希には、してあげれない」

「ばか！」

俺は正気を保たせるため両方の頬を、包み込むようにして軽く打った。

「俺のことなんか忘れろ、俺にはもうひとりいるってこと、知ってるだろ、お前知らん振りしてたろうがな。これから俺は高校での一んびり、そいつとたっぷり楽しませてもらうんだ」

口が半開きになった千草を、俺はもう一度肩を抱いた。もう、改札口に押し込むまでは、離さない。千草の鬼父がカメラとビデオを持って追いかけてきても、俺は絶対に、渡さない。

「さ、行くぞ」

千草はうなづいたまま、顔を上げなかった。もう二度と、触れることのない身体を、改札口の向こうへ追いやり、俺の記憶からも抹消したかった。

「俺のことなんか、忘れちまえ」

もう一度、つぶやいた。千草は顔を横向きにして、俺から目をそらすように、そのまま改札口へ進んでいった。

各学年の委員が決定するかどうか、大至急確認しなくてはならなかった。各クラス委員決定がすんなりいくかどうか、予定通りの面々か。これはかなり大きな問題だ。一年はまだまだ単なる顔合わせ状態だからしかたないとしても、二年、三年に関してはあまりにも予想外の人選ばれてしまっても困ってしまう。「委員会優先主義」の青大附中だが、一応は各クラス、担任教師の権限ですべてが決まる場合もあるし、できるだけ早い段階で情報を集めなくてはいけなかった。

「どうだった？」

「うちのクラスはもうばっちり！」

「俺んところもまあ予想通りかな」

「うちは当然っしょ、ひっくり返るわけないじゃん」

天羽、難波、更科、それぞれのクラス評議メンバーはまったく持って安泰。天羽のいるA組だけが女子評議の変更を要したもののこれは、前もって情報を得ているから大丈夫だった。近江さんという人、よくわからないけど清坂氏と仲がいいし、きつとうまくいくんじゃないだろうか。見捨てられた……と言っていいのかな……西月さんには申し訳ないし、あまりにもかわいそうだと思うけれど、評議委員の立場からするとそれも仕方ないのではと感じる。

「で、問題は二年だよな」

「二Bだよな、問題は」

「立村が一番心配しているのは、そこだろ」

三人それぞれ一番の問題点を突きながら話すのはいいが、僕がほしいのは正確な情報だ。

「悪い、俺、先に確認してくる」

三人が「はあ？」と口を半開きにしている様を無視して、僕は即、二年教室の並ぶ廊下へ駆け下りていった。

こういう場合誰が頼りになるか。本来だったら二年B組のおそらく評議委員に選ばれたであろう新井林をとっ捕まえるのが筋だが、そう簡単にはいかないだろう。一週間前に新井林の前で僕は、本条先輩に思いっきり殴られた。非常にばつが悪いが、そんなこと言ってもらえない。まだ戸が開いていない二年B組の教室前を何度か僕は往復した。ずいぶん長引いているようすだ。かなり荒れているのだろうか。廊下に聞こえてくる声は杉本梨南のものではないし、新井林のながら声でもなかった。もっとやわらかく、落ち着いた女子の声だった。

——やっぱり、杉本はずされたな。

一年時女子評議として活動してくれてくれた杉本梨南をおろさねばならなかった現実は、いまだに尾を引いている。代替りの居場所は用意してあるし、そちらの方で活動させるという計画もすでに立っている。だからその辺は心配していない。あとで杉本本人から聞き出せばいいことだ。しかし問題は、次の女子評議が誰か？という一点にある。噂によると、杉本の元親友で新井林の最愛たる恋人・佐賀はるみではないか？という情報も流れている。

——けど、いくらなんでもな。俺のところに顔を出すことになるなんて、居心地悪くないか？
ああいうことがあったんだからさ。

ある意味、弱みを握っている、と言って過言ではないと、僕は思う。

あそこまで深く愛情注がれている佐賀さんがだ、まさか水鳥中学の男子と……。

新井林の前では百パーセント否定したので、まったく問題はないように繕っている。でも、ある程度真実に気づいている相手の前に出られるほど、心臓強い女子だろうか。佐賀さんは。男子受けはよく、女子たちも最近杉本よりも佐賀さんをバックアップする方向に動いているとも聞く。でも、まさか評議にはこないだろう、いくらなんでも、僕と毎週顔を合わせて、あの佐川との関係を思い出させるような気持ちになるなんて、求めるわけがない。

他の二年クラスがどんどん放課後に突入している中、B組だけはまだまだ討論している真っ最中だった。確かB組の担任・松山先生が言うには、杉本を「保健委員にしたい」と口走っていたらしい。「人の心をわからせるため」だそうだ。ものすごく安易な発想だ。ただ、もしもそちらに入っていってうまくやっていけるのだったら、それでもいいだろうと僕は考えていた。うちのクラスの保健委員は、杉本が来るらしいという情報を聞きつけて無言でため息ついていたが、噂ばかりが広がっていているだけだ。うまくはまればそれでいいだろう。保健委員の三年には、奈良岡さんもいる。奈良岡さんだったら女子に対しても面倒見いいから、それはそれでいいんじゃないだろうか。僕とはどうもずれてしまう感覚の持ち主だけど、女子同士だったらかえって杉本も心を安らがせるかもしれないし。

——どうせ俺は、不細工で頭の悪い裏切り者だからな。

もう、去年のように、「立村先輩は顔が不細工ですけども、まともな頭の持ち主ですね、男子で唯一の」と言ってくれることはないだろう。それならしかたない。不細工で馬鹿な頭の持ち主として、精一杯、努力するしかない。

すでに他の二年クラス情報は通りがかりの二年たちから仕入れることができた。やはりこのあたりは予想通り、それほどゆれも感じない。ただ誰もがB組の状況については、言葉を濁す奴が多かった。今度二年用の英語教科書完全和訳を用意することをえさにして、聞き出したところによると、

「なんか、三学期に入ってから、B組、ものすごく仲良くなっちゃったんですね。それぞれの委員同士、ほら、男女すごくあそこっぴいがみ合ってたじゃあないっすか。それがね」

「新井林が指示してか？」

二人の証言者いわく、

「違うんですよ！ それが！ 二学期の大もめをきっかけにして、それぞれの委員がね、団結しちゃったらしいんですよ。『杉本に割り込まれたくないから、互い協力しあおう』って男子の方から折れだして！」

「そうそう、杉本さんとコンビ組むくらいなら、他の人とくっついた方がましって、男子たちみんな思っているようで、とにかく必死に女子のご機嫌取ってるって、有名だったんですよ」

——そこまで嫌われてるのかよ。

知らないわけではなかったけれど、こうやって第三者からはっきり言い切られると、やっぱりめげる。もちろん担任の桧山先生サイドからしたら「クラスの団結力がよくなる」からいいことだろうし、応援もするだろう。新井林も「いじめ」は決してしないというモットーでもって杉本に接することを誓っている。あふれんばかりの嫌悪感を押さえて、懸命に普通に接しようとしている。誰もが、ちゃんと評価されるやりかたでもって杉本を排除しようとしているわけだ。そして、その排除する側の一人に、僕もいたわけだ。もうクラスには親友もいない、ひとりぼっちの杉本を猫の子摘み上げるみたいに、ひょいと持ち上げて外に放り出した、それが僕だ。

B組の前扉が開いた。一番最初に出てきたのは杉本だった。きちんとポニーテールに髪の毛を結い上げ、唇を一字にして背を伸ばし、少し不自然に見えるくらい足をぴっぴとリズムカルに出して歩いていた。続々と他の連中が出てくるが新井林と佐賀さんのふたり、および主だった委員に選ばれたらしい連中……たぶん男女混じって桧山先生の教卓に集まっていたところみると、そうだろう……ははしゃぐように笑顔一杯先に語りかけていた。黒板には少しやわらかい文字で委員名が連ねられていた。しかたない、僕は杉本を追うことにした。

「杉本、少しいいか」

「何か御用ですか」

思ったとおり、杉本は無表情のまま直角に身体を僕の方へ向けた。しゅしゅといったふうに九十度しっかりと身体を折り曲げ礼をした。

「途中までいっしょに帰ろう」

「いやです。先輩みたいな不細工で頭の悪い人と一緒に歩いたら、私のレベルが下がりますから」

「俺は杉本と歩くと自分のレベルが上がるからそれでいいけどさ」

返事を待たず、隣に並んだ。生徒玄関で靴を履き替えるのもそこそこに、杉本に逃げられないようしっかりと足早に歩いた。

「委員の結果なんだけどどうだった」

「やっぱり私を物笑いにしたくていらしたのですね。結構です」

「いや、そういうわけじゃないよ。俺はこれから杉本にたくさん頼まないといけないことがあるんだよ」

「すべての委員から追い出された私を馬鹿にするためですね。立村先輩は頭が悪いだけではなくて他の男子たちよりもずっと、性格が冷酷だったということがよくわかりました」

相変わらず、まっすぐな抑揚のない口調で続ける杉本。本人のくせだ。気にしない。

「つまり、今回は委員に特に入らないことになったんだな」

「相当私を馬鹿にしたいんですね」

そう思われてもしかたないだろう。事実関係だけ確認できればそれでいい。僕は無視して続けた。ひょいと頭の上に花びらが降ってきた。まだ桜は咲いていない。梅、もしくは桃だろうか

。何かの桃色の花だった。

「俺は事実を知りたいだけなんだよ。保健委員には」

「なる気ありません。私、保健委員には最初からなる気ありませんでしたから」

唯一、委員会活動につながる可能性のあった「保健委員」も、手に入れられなかったということだろう。仕方ないといえば仕方ないことだし、想像してないこともなかった。でも、一年間しっかりと評議委員を務めてきた杉本にとってこれだけ屈辱的なものもないだろう。

「評議には新井林と佐賀さんが無条件で決まりました。私以外の人たちは、私を追い出すためにみな団結してます。結局この世に私はいないほうがいいということがよくわかりました。死んでもあの人たちは泣かないでしょうね。葬式になんてこない方がいいですけども、そんなに死んでほしいのだったら私も殺したいと思ってどこがいけないのですか」

「いや、殺したいとは……」

「どうせ立村先輩は、私をもう二度と評議委員にしたいと思ってないんでしょうから、おろしたのですよね。最初は評議委員長に育てると言っていたくせに、手のひら返したような態度取って新井林に乗り換えて佐賀さんに色目使うなんて最低です。清坂先輩が哀れです」

言葉はまっすぐ、きりりとしていた。

「私は、あの人のために、あの屈辱を耐えたのです。さっさと先輩、消えてください」

「消えないよ」

反射的に僕は答えていた。

「杉本はいやかかもしれないけど、俺は杉本にこれから、交流会メンバーとして活動してほしいから、思いっきりしつこく声かけるよ。西月さんの手伝いしてもらわないと困るしさ」

「それとこれとは別です」

「いやほんとだよ」

何を言っても今の杉本には伝わらないってわかっている。横顔を覗き込めばいつもどおり無表情な杉本の表情が見えるし、その中にはちっとも傷ついていないという風にしか思われなないながかある。三学期までだったらまだ、花森さんもいた。でも今は誰もいないのだ。同級の中で誰一人、甘えられる相手がない。

僕は杉本が無視しながらもしゃべりつづけるのを黙って聞いた。それしかできなかった。

「私は最初から保健委員になる気はありません。少しリサーチしましたが、保健委員の先輩たちとはどうしても肌が合いませんので、最初から落とされて楽でした」

「肌が合わなかった？」

意外な言葉だった。ざらついたやすりみみたいなものが、僕にこすりつけられてしまったような感触があった。杉本は続けた。

「みな、すべての人がいい人だと決め付けているところが好きになれません。みんなすべて楽観的に受け取ることは、もちろん必要なのですが、私には賛成できません」

「楽観的、って、それは、誰のことだよ」

思わず周囲を見渡した。思い当たる節がある人が約一名、内のクラスにいる。またもしその人が「楽観的過ぎる保健委員で好きになれない相手」だったらばれたら困る男子が約一名、また

いる。聞かれたら大変だ。あいつに恨まれたら、いくら僕でも杉本をかばえない。

「人には裏と表があるはずですよ。立村先輩のように、私を正当に扱ってくれたふりをして、後ろから突き落とすくせのある人だっています。それは裏表としか私は思えません。佐賀さんのようにずっと私にかばわれていたくせに、いきなり寝返って私から評議委員の座を奪い取って踏ん反りかえっている人もいます。新井林は私の前では殺してやりたいくらいの行為をしますが、他の人間に対してはそれらしい行動を取っています。うちの親はずっと私を評価していたくせに、いきなり態度を変えて半殺しにしようとしています。人間はすべて悪魔の部分を持っています。それを知らないふりして、すべての事柄を平気な顔して、『私のそばにいる人はみんないい人よ！』と決め付ける神経が私には理解できません」

僕はいったい何を言えばよかったのだろう。ただ黙って、杉本が言葉を飲み込むのを待つだけだった。決して個人名を出したりはしなかった。保健委員たちに対してというよりも「楽観的な価値観」を持つ人たちへの批判だから、悪口ではない。杉本の言う通り、きっと保健委員に回されてもうまくいくことはなかっただろう。それで、やはりよかったのだ。桧山先生の采配も、新井林と佐賀さんの行動も、すべて正しかったのだ。僕にはそれしか言えない。

——そばにいる人は、みないい人よ、か。

前向きな価値観の持ち主たちに傷つけられている杉本の言葉は、僕とすっぽり重なっていった。羽飛も、清坂氏も、みな僕を大切な友だちだと思ってきている。僕が本当はどれだけどろどろした汚い気持ちの人間か、殺意を持ってすべてを切り刻みたいと恨みを抱えていきていることを知らない。「昼行灯」と呼ばれている自分でいいと思っていた。逆恨みばかりして、回りの価値観を受け入れられない自分がいる。明るく楽しい価値観を押し付けられる、と感じて反抗しなくなってしまう自分がいる。

——きっと、いい人なんだよな。俺の大嫌いな人たちも。

——でもどうしても、俺は嫌いにしかなれない。

その考えをまた笑顔で押しつぶそうとする「楽天的」な人たち。

——そう考えるから、また不幸になるんだよ、立村くん。そんなの普通の人は気にしないんだから、さらっと流せばいいのよ。

さらっとか。杉本も、僕も、感じてしまう。それすらも、許されない。

感じるお前が悪いんだ、とあっさり切り捨てられてしまう。それに沿わない人間は、存在してはならない。杉本も、僕も。

「杉本、予定変更だ。これから話があるから、こっちへ来い」

「命令しないでください」

きつと言い返す杉本を無視して、僕は反対側の林へ足を向けた。

「『おちうど』で、まずは水鳥中学との交流会についてのアウトラインを作ろう。それからだ。委員会活動がないということは、じっくりそちらに力注げるもんな、杉本」

水鳥中学、という単語をアクセントつけて発音し、僕は杉本の腕をかばんで軽く押すようにし

、方向転換させた。

写真集というもんは、やたらと厚ぼったくてしかも高級な紙を使っている。破くのに人一倍力がある。古書収集……主にシャーロック・ホームズに関するもの……を続けている俺にとって、書籍を引きちぎるっていうことは、絶対やっちゃいけないことだと思っていた。どんな薄っぺらい冊子だって、スーパーで配られているお歳暮カタログだって、少しでも指紋や傷をつけてしまったら、本の神様にぶん殴られる。

俺は橋の欄干にもたれたまま、かばんの中から一冊、A4版の冊子を取り出した。

本、というよりも文集、って言った方が正しいだろうな。これは。

俺の持っている「日本少女宮」写真集にくらべると実にちゃちい代物だった。一応は写真集なのだが、やたらとてかてかしているのにページがしのらないという、読みづらいことこの上ないものだった。観る側のこと、ちっとも考えてねえってことは、手に取った瞬間すぐに伝わってきた。

午前中は結城先輩の友だちが住んでいるアパートにもぐらせてもらった。俺が「日本少女宮」のコンサートに行きたいと言い出したのを聞きつけて、「交通費と食べ物代だけあれば、チケットただでやるぞ！」とお誘いしてくれた。ただ青潟ではなく、車で少しばかり遠くの街だったので、親の説得には若干時間がかかった。まあ、結城先輩の「友だち」が大人ということと、ある芸能プロダクションの社長さんらしいということもあって、両親の抵抗は程なくやんだ。とはいえ、俺だって金持ちなわけではない。買い食いをあきらめ、缶ジュースは買わずに蛇口から水を飲み、貯金通帳にぶち込んだお年玉を全部下ろした。もっともらっていたはずなのに、ずいぶん少ないのは、きつとうちの親がくすねたかなんかしたんだろう。交通費と食べ物代はまかなえる程度の量だったのでまだ文句は言っていないけれども、帰ったらさっそく金返せってわめかなくちゃあならない。

結城先輩とそのお友だちは、よくよく聞くと結城先輩父の仕事仲間とかだという。「プロダクションの社長」も嘘ではないが、問題はタレントがいないことくらいだという。つまり、ちょうど独立したばかりなのだという。いろいろ忙しいこともあるとは聞いているけれども、俺が話をした感じだとそれほどあくの強い雰囲気はなかった。コンサート開演は六時半と聞いている。空き時間を使って俺は、その街の図書館で少し調べ物をしたかった。同時に、ひとりだからできることをひとつ、片付けてしまいたかった。

この街に橋のかかった池が存在することに気づいた段階で、即思いついたこと。

——ここなら、誰にも気づかれまい。

俺は、同じ表紙の素人っぽい写真集を十冊、かばんから取り出した。ビニールのかかったまま、手がついていないものばかり。古本屋で入手したものだから、ちゃんと値札が張ってあるのが笑えた。店によってぜんぜん値段が違っている。五百円のものもあれば五千円のものも。こんな薄っぺらい写真集なんぞに五千円なんて俺の小遣い二ヵ月分になるかならないかが飛んでいってしまう。こんなのに金使うなんて、やっぱり世の中、病んでいる。

あえて表紙は見なかった。俺がこの写真集もどきをめくったのは一回きりだ。もちろん一冊のみだった。ビニール袋のかかっている、傷のほとんどない写真集。「きらめきの少女」などという、安易な題名がついている。作ったやつらの頭の悪さがよくわかる。もっと俺だったら「ロリコンおっさんいらっしやい」だとか「アリスマニアの病人写真集」とか書いて、思いっきり読み手に罪悪感を与えてやるんだが。

空の青さがなぜか、水辺には映っていない。緑色のおそらくこけが、水面いっぱい広がっている。時々黒っぽい魚が不気味に下をもぐっていた。ほんとうだったらもっと、鯉だとか鴨だとか、かわいらしい感じの生物が哺乳類鳥類魚類関係なく漂っていても不思議はないのに。両手側に一杯広がっている、木々の葉と、時折咲いている白っぽい花。俺は花なんて知らないけれども、ここから橋の向こうを眺めているとすうっと自分も沈んでしまいそうな気になる。

——沈めるのは、俺じゃない。

——沈めて静めるのは、これだ。

人はこない。

今俺がしようとしていることを人が見たら何というだろうか。

有名な観光公園の池に、何を血迷ってごみなんぞ捨てるのかと怒鳴るだろう。

この街は青潟と違って俺の顔を知っている人がいないから、決めたことだけど。

それに、あいつも。

——あいつの顔は、この街の連中、誰も知らないんだ。

——だから。

まだ午前中、公園を巡る客なんてほとんどいない。

今だ。

俺は、すべての写真集をそのまま、橋の上から水の中に落とした。

ぱたっと、水っぽくない着水の音が響き、捨てた分の半分……だいたい五冊分……はすぐに沈んでいった。ビニールがかかっている分はすべてだった。なのに、一冊だけが表紙を表にしたままぷかぷか浮いている。水の流れがゆっくりしているせいか、俺の視界から消えようとしないう。あれだけ目をそらしてきたのに、早く沈んでほしいのに、俺の顔を表紙の女子はずっと見つめていた。長い髪をふわふらゆらすような顔でもって、花束を抱えて微笑んでいる、あいつの顔だった。

——とっとと沈めよ！

長い棒があったらすぐに、つつ、とつついて無理やり押し込んでいただろう。紙がしっかりと水分を吸い込んで、ゆっくりと消えていくはずだ。そう思ってもまだ粘っこく、写真の女子小学生はにっこりと笑いかけるままだった。

この本はまだ青澗に出回っているはずだ。別にこんな趣味の悪いロリコン写真集などに金をかける必要なんてないし、第一俺の命は「日本少女宮」のつぐみちゃんだ。あんな小学生のにっこり女子なんかに関心なんてない。すっぱだかで寝ている姿をとられるなんて、うっかり女子銭湯に入り込んでしまうことでもしなければ、まずありえないだろう。こんな趣味の悪いロリコン写真集、俺にはどうだっていいんだ。

ただ、せっかく古本屋でシャーロキアンな本を集めようとしているところに偶然、あんな勘違いロリータ女の写真集が飾られていたりしたら気分が悪くなる。俺とは天敵同士の、あの女子の過去の写真集で、裏ものだとわかっていて、そんなのたぶんほとんどの人が気づかないはずと頭ではわかっているけれども、だめだ。高校生の顔して金払い「兄のやつです」と頼まれてもいないのに言い訳して買っちまいたくなる。何もこんなつまんないものに、なんで五千円も出そうとするんだろう。金の無駄だ。

——まだ青澗にはあるんだろうな。

——帰ったら、また古本屋回ってみるか。

あんな見苦しいロリータ写真、青澗に一冊も残してはいけない。

即、この世から消し去るべきだ。

もう二度と、あんなものを手にされないようにするために。

俺はもう一度水面を眺めた。ちょうど橋の下から白いアヒルか水鳥かわからんけど、ゆっくり泳いでいくのが見えた。うまく写真集を迂回して進む調子に、波がゆれた。息を呑む間もなく、ロリータ写真集は沈んでいった。

幼馴染という言葉が決して心地よく聞こえない時が、故郷では流れている。

なにかの折にかの子も、両親かもしくは近所の人から、聞いているはずだ。

——狩野さんちの息子さんは、結婚の口約束をしたくせに、いざ縁談を持ち出されると即刻断った。その代わりすぐにきれいな青瀧のお嫁さんをもって連れてきた。口約束を反故にされた、ほら、あそこの文房具屋さんとかの娘さんは、それ以来家に閉じこもったまま、誰とも会おうとしないってよ。



「皇人さーん、早く行きましょうよ！」

甘ったれた声でかの子が助手席に座り込み、スカートを丁寧にひざの裏に畳み込んでいた。しわになると困るのだそうだ。夏休み、所詮僕の実家に戻るだけのことだ。気をいれてしゃれ込む必要もなかろうにと思うのだが、女性にはいろいろな事情もあるのだろう。

「ほら、途中でね、おなかすいたら困るでしょ？ ケーキも持っていかなきゃ！ 『アルベルチーヌ』お盆休み、開いてるかしら？」

かの子がこよなく愛する喫茶店のケーキだ。三時間のドライブ中、しかも真夏、クリームが溶けるだけではなくあめてしまう恐れありだというのに。わがままな姫君を乗せて僕は、「アルベルチーヌ」の前を通り過ぎた。ぶうぶうふくれているかの子の髪が、僕の肩に触れた。薄いシャツにも響くくらい、かの子の髪は豊かだった。

周囲からは、「どうしてこういうタイプの女を選んだのか？」と飽きるほど質問を浴びせ掛けられたものだった。友人たちも、家族も、そしてかの子自身も。

「どうして私みたいないいかげんな女が気に入ったわけ？」

時々すねられて困り果てたこともある。もちろんかの子は、僕がうんざりして投げ出したくなる寸前でぱたとわがままをやめ、

「まあいいわ、長く付き合っていけばわかるわよね」

とつぶやくのが常だった。

見合い結婚という、いささか古風な出会いとはいえ、与えられたかの子関連の情報にはそれほど眼を引くものはなかったはずだった。アパレル会社で経理を担当していたので数字には強いとか、派手な容姿にもかかわらず今まで浮いた話がなかったとか、その程度のことだった。もちろん見合いの釣書にかの子自身の情報を事細かに書くわけにはいかないだろう。付き合った男たちとはいろいろごたごたを起こして別れてきたらしいとか、もしかしたら同性愛者かもしれないとか、結婚しても別の男とは付き合い続けたいとか。

そういうかの子の防御服を、僕は幸い、この手で脱がすことができた。

女性とのかかわりをそれほど求めてこなかった僕が、初めて我が物にしたいと感じた、たった

一人のひとだった。

「皇人さーん、あそこ、なに？ ほら、赤い筒型のポストのそこ」

すねて騒いで甘え続けた三時間過ぎ、まだまだ元気いっぱいのかの子は窓をたたき、指差した。少しスピードを落とした。赤い筒型のポスト……なかなか青濁では見かけなくなった旧型のポストがかの子には珍しいらしい。僕にはそれほど珍しいものでもないのだけれども、そこらへんがかの子の都会育ちなところだろう。

「ここは、昔の郵便局だよ」

「昔のって、えーっ、だってこのうち、昔のほら、江戸時代の呉服屋さんとかそういう雰囲気建物のなに？なんで？」

歴史にはそれほど詳しくないかの子。時代劇で観たものをさしているのだろう。

「大学を出る頃まではこの郵便局が現役だったんだよ」

「えーっ！」

黄葉町に来るのはかの子にとって初めてではないはずなのに、なぜか彼女ははしゃぐ。

「そんなあ、だって、ちゃんと年賀状とか、郵便の仕分けとか、できてたの？」

「もちろんだよ。僕もここから、大学の願書を出したりしたものだから」

「ちゃんと届いた、のよね？」

「あたりまえだよ」

このポストから斜め向かいの家には、かの子は一切関心を示さなかった。

本当ならば、「こんなところ通らないでよ！」「私を馬鹿にするつもり！」とわがまま言って、わざと迂回させても不思議はないだろう。それだけのことをかの子は僕にされてきた。僕はかの子を傷つけるようなことを、してしまった場所だというのに、それでも関係ないかのように楽しげにはしゃいでいる。

「じゃあ、このポストに乾杯ね！ そうだ、セシルにおたよりだすのに、このポストから出してもいいよね！」

「別に、違うところがあるだろう？」

「いいの、このポスト、なんか気に入っちゃったの！」

かわいらしいもの、華やかなものが好きなかの子には、筒型のとぼけたポストがいとおしく思えたのかもしれない。僕は黙って車のスピードを上げた。斜め向こうの家には一切眼を向けず、かの子はまた肩に頭をもたせかけてきた。首筋にかかる髪の毛が痒くて、軽く押しやると

「いーだ、せっかく甘えてやったのに！」

唇を尖らせた。



ポスト斜め前の家は文房具店だった。その娘と僕とは、いわゆる「幼馴染」の関係だった。旅館の一人息子と三人姉妹の末っ子の彼女と。親同士のつながりもあって、無理やり仲良くさせられたような感じがあった。町内の会合が行われている間は子ども同士で集まって、安全な場所で遊んでいるように言いつけられたりもした。あまり群れることを好まない僕には苦痛な時ではあったけれども、しかたないとも感じていた。話をうまくあわせて、それなりに気遣いをする程度のことだった。

いつからだろう。文房具屋の彼女が僕に好意を示してきたのは。

おそらく彼女自身の意思では、なかっただろう。

親同士、なんとなく「あそこの息子と娘を娶わせたい」というような意思が芽生えてきて、意識的にふたりを見合いさせるような雰囲気、黄葉町には存在していた。そのあからさまな態度が好きになれず、僕は中学を青大附中にしたいと言い張ったのだった。周りからは青大附高からにするよう説得されたが、僕は一刻も早く黄葉から出たかった。このまま、親のいいなりで学校も決められてしまうのだけは避けたかった。恋愛感情などはまったく理解できず、それどころか女子たちの視線がなぜ将来につながってしまうのか、そのあたりの事情が耐え切れなかった。小学生の段階でなぜ、結婚の意識をもたなくてはならないのだろう。結婚青田買いの町だとわかっていても、耐え切れなかった。

男子の場合は「学業」でなんとか切り抜けることができた。でももし、女子でそれほど「学業」の切り札が生きない子だったとしたら？ 文房具屋の彼女はそういうタイプの子だった。また、無気力と言っては失礼だが、とにかくおとなしすぎて存在感の薄い少女だった。同じようなタイプの僕とはきつとうまくいくだろうと、周囲の大人たちは感じていたのだろうが、結局のところかの子を選んでしまったのだから世の中わからない。

僕自身が、彼女のことをまったく眼中になく、青潟に逃げ出した後、周囲の大人たちは彼女をターゲットにしているろいろと言って聞かせたらしい。このあたりの事情も両親および故郷の友だちから聞いたにすぎないけれども、僕が高校を卒業する頃には

「私は皇人くんのお嫁さんになるの！ もう決まってるの！」

と口にするようになったという。

彼女の両親も、僕の両親も、そして彼女本人も。

就職が決まった段階で縁談を持ち出された。最初から気持ちもなければ結婚の意志もなかった。両親の目の前できっぱり断った、それだけだ。

最初のうちは両親も「面子が立たない」と文句を言っていたけれども、次に用意されたかの子との縁談がすぐにまとまったこともあって、とりあえずは丸く収まった。

すでに文房具店も不景気のあおりを受けて店じまいを考える時期だったということもありそれ以上の責め立てはなかった。

親同士で盛り上がったものであって、子どもたちとは関係のないことだった、ただそれだけといえればそれまでだ。

両親に言わせると

「ちょっと断られただけですぐにいじける陰気な子を嫁さんにしたらあとあとお前が苦しむだけなのだから、かえってそれでよかったのだ」
そう納得したらしい。

僕はもっと早く告げておくべきだった。

小学校の時に僕がきっちりと拒絶しておけば少女時代を僕の面影追いで終わらせずにすんだだろう。たとえ彼女をずたずたに傷つけたとしても……たとえば僕のクラスで起きた生徒恋愛問題のように……時間を無駄にせずにすんだはずだ。

生徒たちに僕の過ちを繰り返させてはならない。

かの子の笑顔と長い髪の毛の快感に酔うかわりに、僕は罪を償わねばならない。

立村くんを図書館に向かわせた後、私はタクシーを拾いすべてのスタンプ経由地まで回っていった。青大附中の制服はそれほど目だたなかったけれども、たぶん一部のクラスメートたちには知られていただろうし、ばれることももう覚悟の上だった。いくら天羽くんと更科くんがうまく繕ってくれたって、所詮中学生のやること、期待はさほどしていない。むしろこれから、私たち……もちろん立村くんとだけ……が無事、修学旅行後生活できるかどうかを見極める時間が必要だな、とは思っていた。

団体バスツアーの人たちにまぎれて、まずは赤いスタンプを押す。

すぐに車に戻り、次は教会へ。

次は神社へ。

大急ぎ走って昔の城が残っているという濠へ。

タクシーの運転手さんにもけげんそうに尋ねられた。

「学生さん、修学旅行かい？ 高校生かい？」

説明するとややこしいことになるのは目に見えていたので、当然答えた。

「はい、高校なんです」

信用してくれたかどうかわからないけど、ちゃんと仕事をしてくれたタクシーの運ちゃんに感謝だ。

直接図書館に乗り付けるのは危険だ。地図であらかじめ調べておいた、城下町の家前で私は降りた。歩いて図書館まではだいたい十分くらいかかる。昔の家老のお宅らしいけれども、中に入ってスタンプを押そうとしたら、なんと六畳くらいの広さしか庭が残ってなくてびっくりした。建物がなくて、ただ、放置された庭だけ。それでも湧き水と隣にスタンプ台は用意されている。パンフレットもある。二人分、しっかり受け取った。

きちんとゆがみなく押されていると思う。

私のもそうだし、立村くんのも。

二年半近く私は立村くんの言動を事細かに見つめてきたつもりだけれども、彼はさすがおとめ座の性格だけあってきっちりしている。そう、彼の誕生日は九月十四日なのだ。私よりもまだ、ひとつ年下のはずだ。評議委員グループの中では誕生日が一番遅い。

よく美里が、女子グループだけでしゃべっている時に、鼻の穴を膨らませるようにして、「立村くんねえ、ほんっと、どうでもいいことにこだわるんだから。誕生日一番遅いとか、背が低いとか、そんなこと、誰も気にしてないのに、わざと気にしたようなこと言うんだもの、あきれられるよね」

自分の恋人に対して、よくもそんなこと言えるものだ。帰ってから私は、日記にすべて美里へののしり文句をつづった。もちろん読まれても困らないように、ひとりでマスターした速記文字でだけれども。私は彼女たちからしたら、速記文字の読解不能で醜い文字。一番身近な文字な

のに、誰もわかりはしないってことを知っている。



中学一年、評議委員会が初めて開かれた時、私は同学年の評議委員たちを眺めていた。

クラスで一緒に評議を勤めることになった難波くんやたまたま話をする機会の多かった天羽くん、その他うまく紛れ込んできた更科くん。不思議なことだけど、この三人とは女子たちの居ないところでいっぱい話をする機会が多くて、もうこの段階で友だちっぽい雰囲気を作られていた。特に天羽くんとは、とある場所で顔見知りだったこともあって、かなり濃い事情を語り合うようになっていた。もっともそれは、天羽くんの家庭事情もあって、あえて私も口には出さなかったけれども。

むしろ女子たちとどうやってなじんでいくか、が私のテーマだった。

大げさだけでも、このあたりは難しい問題だった。

もともと私の顔は出っ歯の出目金。歯の矯正をする機会もなかったし、うちの親にもそこまでの財力はなかった。青大附中に入ったのは親戚が私の能力に惚れてあしながおじさんをしてくれたから。「あしながおじさん」の主人公が必死に手紙を書く気持ちが痛いほど、よくわかる。もっとも私の「あしながおじさん」は短足のでぶちんおじさんだった。おじさんとハッピーエンドを迎える主人公とは違う。きっと彼女は、私なんかよりもずっと美人だろうし、人受けもする子だったんだろうな。

私の場合、もちろん「若草物語」を読むといった、女子としての素養はそれなりに持っていたけれども、クラスの女子たちが読むくらないマンガとかアニメに対して全く興味をもてなかった。テレビドラマについても、詳しく内容をチェックして矛盾点を探す方が面白かった。それであらためて、自分なりに構成しなおしてみる、そういう楽しみ方をする方がいい。でも、それをうっかり口に出すと瞬時に女子たちから袋叩きにあう、もしくは無視されることも知っていた。私が経験したわけではなくて、彼女たちが気づかないでしている子に行った態度を見て判断した。だからこそ、私は決して落ち度なく、振舞うことが必要だった。

美里たちはまさに、クラスのいわゆる、「いじめっこ」たちの代表だったから。

小春ちゃんやゆいちゃんにはそれほど、「いじめっこ」パワーを感じなかったのはなぜだろうか。なぜか彼女たちふたりには、私もやさしく感じることもできた。当時から今までよくわからなかったのだけでも、私は彼女たちがすべて、背伸びしているようにしか見えなかったからだ、今は思う。ゆいちゃんが懸命に男子たちへライバル意識をもつのは、全く自分に自信がなくて、一度おっこちたらそれで人生終りだ、と感じているからとか。小春ちゃんが一生懸命クラスに明るさをもたらそうとするのは、みんなから実は軽蔑されていることを感じてなんとか受け入れられようとしていることとか。

その中でひとり、美里に対してだけ、私はどぶくさい気持ちになってしまうのを抑えられなかった。決して悪い子ではないし、男子たちの受けも悪くないし。はっきり物事をいうのが悪いとは思わない。いや、それだったら小春ちゃんとゆいちゃんの方が目立っている。

理由がつかめなかった。ただ自分でもはっきりしていたのは、美里をうっかり敵に回したら、ろくなことにはならないという判断を下さねばならないことだった。

疑いない、「真」を持っている子。

私が知っている限り、そういう女子は、美里だけだった。

そしてその「真」が刃になることを、知らないでいるのも、たぶん美里だけだった。

私はとことん美里を代表とする女子たちにこびた。

「こびる」と言えば、それはいやらしく思われるかもしれない。

天羽くんにも、難波くんにも、更科くんにも言われた。

「トドさん、もう少しさ、女子たちをどんと突けよな。お前それくらいの才能あるだろが」才能か。男子たちにはわからないのだと、改めて思う。

女子の世界において、頭のよさよりも一番評価されるものは、美しさなのだとすることを。

醜いことは、それだけで、相手に優越感を与えてしまうということ。

私の顔かたちを「嫌悪」として感じるか、それとも「見下し」の対象とするか。

女子たちのほとんどは、見下す対象として、私を受け入れてくれた。

——轟さんよりは、ましよね。目もふつうだし、私、歯もきれいだし。

ささやかかれても、私は傷つかなかった。もう慣れていたから。

醜さを私は武器にして、女子世界を生き残らねばならなかった。

そして今も。私は「醜さ」ゆえに、他の女子たちを敵に回さずに、あの人とふたりの時を持つ。



家老宅の門を出た後、ゆっくりと石畳を歩いていく。

松の木が両脇に立ち並び、大学生やハネムーンらしい観光客がうろうろしていた。

青大附中の生徒はいなかった。

楽しそうに語り合っている男女カップルを眺めると、みなきれいな顔をしていることに気が付いた。私みたいに醜い女子なんて、誰もいなかった。男性はみな、普通の人ばかりなのになぜ、すれ違う人たちはみな、見られる顔をしているのだろう。

嫌いな人ほど美しい。これが、私の現実。

好きでかつきれいな人は、立村くんしかいなかった。

——たぶん、あの時の女子だ。

隣でやたらとうるさく話し掛けるクラスの女子を振り切るため、

「じゃあ、悪いけどさ、俺んち、門限あるし先に帰るわ、じゃあ、また明日会おうな！」

と笑顔をこしらえ、俺は教室を出た。評議委員に選ばれたのは単純に、俺の名前が出席番号順でいくと一番最初だからだろう。俺の名前が書かれるやいなや、一番苦手なタイプの女子が女子評議に立候補しちまって、正直、身の不運を呪っていたのだが。

でも意外な出会いというのはあるもんだ。俺はすばやく、先に教室を出たB組の女子を追いかけた。あの目、歯を忘れるなんてことは、そう簡単にできはしないだろう。俺だって、もちろん他の奴だって。

「ちょいと、そこのおねーさん」

呼びかけたが気が付かないらしい。簡単に一言、

「おい、ちょっと待てよ、そこの出っ歯、出目金」

と呼ぶのも一案だが、最初っから学校内に敵を作る気なんぞさらさらしない。

「ええと、B組の女子評議さん、ちょっとこっち、むいてえな」

二番目に呼びかけた時、やっとその女子は振り向いてくれた。

顔を確認した。

やっぱりあの時の女子だ。

「なんか、用事？」

怒っちゃいないんだろう。俺は少しほっとして、近づいた。廊下を曲がり靴を脱ぐまではとりあえず待つことにして、

「悪いけどな、去年の十月ぐらいにさ、俺たち、会ったことねえか？」

まずは確認をば。向こうは背中を丸め、下唇を歯で押さえながら首をかしげた。

「会ったこと、あったかなあ」

「まあ覚えてなくても、当然かもな」

まずは校門を出て、それから確認した方がいいだろう。

「いいよ、それの方が私もいいと、思うんだ」

思うに、その段階で向こうさんは、俺の顔を思い出したんだと推測する。

顔がインパクト強いかどうかはわからんし、たぶん集団その一にまぎれこんでいた小学六年の俺なんて、記憶に残るとも思えない。ただ、あの時、俺くらいの年齢の奴は、二人くらいしかいなかったし、そのうちの一人は女子だ。途中俺の顔をじっと見上げるようにして、こっくり頷いたのは、たぶんそれが理由だろう。

校門を出て、俺たちはのんびりと自転車を押した。

「天羽くんだったけ？ よく私のこと覚えていたわよね」

いきなり顔を合わせるなり切り出され、思わず自転車をこけさせるとこだった。

覚えていたっていうのか、やっぱり。しかも名前まで。

「私も今日顔を合わせた時にね、もしかしたらあの時の小学生部長なのかなと思ったけどね。そんなことしゃべったら、あとあとまずいだろうなと思って言わなかっただけよ」

「いや、よくぞ覚えててくださった」

おどけて答えてみた。向こうさん、しっかり記憶してたってわけだ。

「口封じなら安心してよ。どうせ、知られたくないでしょ」

「そうしていただけると、本当に助かりますがな」

両手を合わせて、お得意のくねくねポーズを取ってみた。こうすると結構、女子たちは受けてくれるのだ。幸い、向こうさんはあっさりとし、

「だけど、天羽くんも大変よね。あんな宗教、やめたくても、あの状況じゃあやめられないよねえ」

俺は答えられず、しばし黙った。自転車を押していくうちに、白い花びらがさらっと落ちてきた。まだ桜は咲いていない。ひとひらだけだった。

「あんときの、あんさん、すごかったよなあ」

向こうさん、とは呼べず、苗字も思い出せず、まずは「あんさん」でいくことにした。

「ああ、あのくらいたいしたことじゃないわよ」

やっぱり覚えているらしい。「あんさん」はあっさりとは細かく頷きながら、

「だって変よね。なんでそんなに寄付金が必要なのか、それがまずわからなかったもの。確か聖書では、十パーセントの寄付を要求していると聞いたことあったし、それはそれで理由聞いて納得したけど、あの人たちが求めているのはそれ以上よね。『寄付』が悪いことだとは思わないけど、十パーセント以上の寄付金を、いったい何に回してるわけ？ あの巨大な建物？ それともあのトリップしたようなこと口走るおじさんに？ あ、ごめん。天羽くんはまだ信じているふり、してるのよね。立場上」

「あんさん」の言う通りだ。俺はまだ「信じたふり」をしているだけだ。いや、信じなくちゃいけないと思っ込んでいるだけだ。本当だったら、去年の十月に「あんさん」が俺の信仰する宗教団体の集会で、一気にまくし立てたことに対して、激しく言い返さねばならないはずだった。もう地獄に落ちるのは見え見えだ、今から悔い改めて俺たちの信じている路に進もう、と説得するのが、俺としての義務のはずだった。

「一応、俺もただいま、中学部のペーパーセざるを得ないんで、その辺はノーコメントな」

「もちろん、事情はよっく存じてますわよ」

このあたりはおふざけ調に「あんさん」が答えた。

俺もそうだし、家族も今、少しずつ「地獄」へ落ちる準備をしていることを、まだ「あんさん」には言えなかった。

俺のじいちゃんがもともと書道家で、いろいろあってこの宗教に入り、家族にそれを無理強い

した、というのが今の段階での答えだ。じいちゃんも最近は少しずつぼけてきたのか、あまり熱心な信者ではなくなったけど、それでも「寄付金」は毎回しつこいくらい出している。うちのとうちゃんはかなり気合入れて洗脳……もとい、信者を増やして押し倒すことに燃えている。けどかあちゃんはなんとなく、違うんでないかって顔をしていた。この当たりの温度差を俺はガキの頃から感じていた。ま、うちのかあちゃんの場合、じいちゃんととうちゃんには、絶対服従せざるを得ないんだもん。しょうがないだろう。ただ、あんまりにもあんまりな教えには反発してるという気がした。何が、って聞かれると迷うけど、たとえば、「学校よりも宗教団体の合宿が大事」とかなんとか。これに関してはとうちゃんたちを必死に言いくるめてくれた。おかげで俺は修学旅行にも遠足にも行くことができたわけだ。他の信者の子たちは、行けねえの。悲惨すぎ。

この宗教を信じたら、「天国」に行ける。信じない奴は死んだら「地獄」に落ちる。
単純明快な答えだな、これは。

かあちゃんと俺だけでも、「地獄」に落ちる準備を、ただいましている最中だ。

ただ、できたらとうちゃんじいちゃんも一緒に、「地獄」へ行きたい。

生きているうちはそれの方が、楽しいはずだもん。

かあちゃんはただいま陰で、その準備に没頭しているはずだ。

俺はそれに気づいていながら、知らん振りを決め込んでいる、地獄候補生だ。

たまたま十月の勉強会というのが開かれた時、この出っ歯出目金の「あんさん」が連れてこられ、小学部・中学部・高校部の連中を集めて熱くこの宗教について語ったわけだ。

ところが俺たち……俺も一応小学部の部長だったし、かっこはつけなくてはいけなかったけど、ほとんど出る幕がなかった。なぜなら、「あんさん」の相手をする論客が、残念ながら高校部の部長と世話役の大人しかいなかったからだ。半分以上、情けなくも俺は理解できなかった。いったいなんで、そんなに熱く語れるんだこいつは？と思わずにはいられなかった。

「収入の一部を寄付することによって、人は痛みと苦しみを分かち合える。それを学ぶゆえの寄付金ならわかります。お小遣いが入ったら入れる、それも私は理解できます」

いや、理解できねえよ、本当は。俺だって「小遣いもらったらそのうちの半分を寄付する」なんて決まり、納得できねえよ。ただでさえわびしいのに。

「ですが、なぜ半分なんですか？ もちろん寄付がいけないとは思いません。ですがそのお金はどこに回っているのですか？ 本当に苦しんでいる人のもとに流れている証拠があるのですか？

あるならそれを見せてもらいたいんです。それを見て、もしまっとうにお金が使われているのならば納得しますが、こんな大きな建物代とか、全く関係のない人たちのもとに流れているとしたら、それはおかしいとしかいいようありません」

いや、俺も半分以上理解できなかったが、半分寄付することによって、ところが安らぐということからして納得いかんぞ。

いろいろと思うところはあった。けど、高校部の先輩たちがばんばん言い返していたので、結局は丸め込まれただろう。途中、いくら話しても平行線だと判断した高校部の部長が、

「わかった、君は地獄に落ちてもいいんだな」

と切り捨て、「あんさん」が帰った。それだけのことだ。

そうだよな、俺だって納得いかんよ。

けど、「あんさん」みたいにばしばし切り崩せるだけの言葉がないんだよ、俺には。なんだか落ち込むぜ。

「あんさん、ちょっとお尋ねしやすが」

しかたないんで俺は、おふざけモードで話を進めることにした。

「そういう知識、どうやって身に付けたっすか？」

「もちろん、本よ。あの時ね、うちの親が危うく丸め込まれそうだったから、私なりになんとかしなくちゃなって思ったの。たまたまよ、あてずっぽだったわよ。私もやばいなって思ったもん。でも、いやなものはいやだったしね。宗教をすべて否定しないけど、天羽くんのとこの教えにはどうしても納得いかないのよ。ま、うちの親については、知り合いのおじさんがすべてうまくとりなしてくれたから、無事逃げられたけどね」

「さすがっすねえ」

本だけでそこまで語れるか？ 俺には信じられん。

「天羽くん、もしよかったら、私、その時読んだ本のリスト、持ってるんだ」

「本のリストっすか？」

いきなり「あんさん」は、歯の隙間からしゅうしゅうと音をさせながら、かばんを開けた。

「名簿観た段階で、あ、この人だって思ったのよ。なんか私の顔見て納得してたでしょ。あの時もさ。たぶんこの人、この宗教信じるのやなんだなあって思ったのよ。今日評議委員会で会えるとは思ってなかったんだけどね」

「俺も同意」

「いつか廊下ですれ違った時にでも、渡したかったんだ。いざとなったらラブレターのふりして」

思わず吹き出す。何考えてるんだ、この人。ちっとも気負わずつぶやいてしまうこの態度。

いかにも、本人の言う通り、白い封筒、これはラブレターののりだ。ごていねいに赤い色鉛筆で「ハート」が書かれている。

「この中に全部、私が勉強した本の名前が載ってるわ。私も全部理解したわけじゃないけど、あの宗教団体に関して疑問を持っている人とか、脱会した人とか、そういう人たちの本がいっぱいあるの。私みたいな小学生でも理解できたんだから、天羽くんならわかるわよ」

やたらと心臓がドキドキしてきた。ラブレターをもらうより、痛い。

「じゃあね、また」

俺はその「ラブレター」もどきの封筒をポケットに押し込んだ。

すぐに封を切ることはできなかった。

確かに俺は「あんさん」に対して「信じてない」っぽい信号を送ったのかもしれない。

けど、もしそれがばれたらどうするんだろうか。

今のところかあちゃんだけが動いているけど、もし俺が同じ風に動き出したら、絶対とうちゃんたちにばれるだろう。それに、あの中で俺は、ずっと呼吸してきた。楽に歩いてきた。いや、青大附中に入ることができたのも、実はそちらからまわされてきた寄付金のおかげだ。もっと言うなら、合宿や集団研修が行われ参加した時、なぜかすごく「快感」を感じるのも事実だ。

今の俺は、それを捨てられない。

けど、この手紙は捨てない。

俺はかばんの隠しチャックポケットに、「あんさん」からもらった「ラブレター」を押し込んだ。

修学旅行後ぐらいいは休ませてくれよな、と俺が言い張ったこともあって、二週間後の日曜夕方に待ち合わせることで話はついた。あの果てしなくエネルギーを暴走させる我が三年D組の連中をある時は怒鳴り、ある時ははたき、ある時は抱きしめる教師という仕事がどれだけしんどいか、きっと彼女には理解できないの だろう。口では

「わかってるわよ、守は一つのことしか集中できないのよね。教師の時間は生徒のことしか頭がないんだから、わかってるわよ！」

と泣かせることを言ってくれたものの、帰ってきたらいきなり留守電の嵐ときた。付き合い長いし、こういう時は何も考えずに放置してくれるのが本当の「愛情」ってものじゃないかと俺は思う。正直言って、しゃべるのもしんどい。

教師という仕事は口が利けねば何もできない。

だから一日中唇を筋肉痛になるくらい動かしている。

せめて休みくらい、黙らせてくれってのが俺の本音でもある。

まずは予定を立てた。夕食をその辺のファミリーレストランで片付けた後、久々に俺のアパートで少し休むか、という話となった。それがいつものパターンだったからだ。

「先週はどうしたのよ」

「ああ、生徒の家に不幸があった関係でいろいろとあったんだ」

あまり暗い話をするのもなんだが、事実なのだからしかたない。

窓辺にはまだ白い三日月が浮かんでいた。彼女は車から手を伸ばすと、

「あの月、きれいよね。白くて」

男の俺には理解できない言葉をつぶやいた。何を言いたいのかわからない。

「私、あの月がほしいな」

ますます理解できない。

「とにかく、いつものところで食うか、それでいいな」

ロマンチックを求める彼女には悪いが、俺にはそんな余裕がない。とにかく腹ごしらえして、ある程度時間を取ったら今夜は早めに帰すつもりでいた。自宅で暮らしていることは最初から頭にあったし、嫁入り前の娘さんをそうそう男の部屋に泊めるわけにもいかないだろう。

——守、今後のことなんだけど、どうするつもりなの。

ちょうど修学旅行直前の日、彼女からいきなり電話がかかってきた。くそ忙しい時に何時間を取らせるんだらうと、いささかむっとしながら、

「今後って何をだよ」

と答えた。これ以上何を望めというの だろう。今の俺はそんな色恋沙汰に現を抜かしているひまなんてない。むしろ生徒たちのやらかすあれやこれやのはなは だしいラブ・アフェアに振り回されている。あいつらはまさに「愛」だぜ、と思うようなことを平気でやらかす。そんな純真さ

と裏腹のスケベ心の共存が許されている、不思議なものだ。

——今のままでいいのか、って聞いているの。

——別にいいんじゃないか。

——あっそう。

単純明快。まずは現在受け持っている連中を無事に高校まで送り届けなくてはならない。そういう仕事を背負っている俺が、それ以外のこと考えていられるか。

これ以上悪さをやらかして首切られる寸前の奴もいれば、うっかりぽきっと折れそうな女子もいる。少しアンバランスな力関係が生徒間に観られる三年D組だが、俺にとっては今一番大切な塊だ。悪いが、彼女のことを考えているほど、ひまではない。

空の月を助手席から眺めたまま、彼女はもう一度車窓から指を出すようにして、

「ほんと、あれがほしいんだけどな」

「何がほしいんだよ」

しつこく繰り返した。

「それよりもこれから何食いたいか考えておけよ」

「守は私といる時、しゃべらないよね」

「今さら何話すことがあるんだ」

俺ももし仕事のことについて聞かれたとしたら……修学旅行中、クラスの評議委員が計画したというとんでもない計画のことだとか、純愛カップルの涙涙の物語だとか、第二次性徴でパニックになる男女たちとか、いろいろ語るべきことはある。そうだ、教師・菱本守としてならいくらでもある。でもそんなのを彼女は聞きたくないのだそう。ただ一方的に、語りたいこと……仕事場でお局様まらいやみを言われたなど、また同僚が結婚したとか、どうしておごってくれないのとか、今度立派なホテルに連れて行けだの、そういうつまらん会話ばかりだ。理由はわからないが、どうしようもなくいらいらしてきて、途中、

「悪いがそれはお前も悪いんじゃないのか？ 人を変えようとするよりも、お前の態度をきちんとしろよ」

ときっぱり答えを出したくなる。いや、出してしまう。すると彼女はふくれて、ただ食うだけの一本槍だ。仕方ないので、俺としては、

「じゃあ、今夜、うちに泊まっていくか」

と声をかける。部屋には入るが、必ず二十一時にはアパートから出て行く。一夜を明かしたりはしない。それが無言のルールだった。

「守、私が本当にほしいもの、どうして気付かないの？」

アクセルを踏みなおし、俺は目線を真正面のライトに向けたまま生返事を返した。

「ほしいものって、あの月か」

「月に似ているものって、あるでしょ、ほら」

指先で何度も窓ガラスを叩く。全くわからない。

「爪きりか」

「ばか！」

「静かにしろ」

だんだん会話が息苦しくなってきた。どうしてだろうか。生徒たちを相手にしている時とは違う、この黒い空気がもこもこ煙突の煙のように詰まってくる。

「そんなにいやだったら今日はやめるか」

突然、おとなしくなる。これも魔法の言葉だった。彼女が訳のわからない言葉を言い出したときには、必ず伝えておく。

「何でそんなこと言うのよ、私はただ」

「楽しい時を過ごしたいのに、俺が楽しくさせてやれないんだったら、意味ないからな」

彼女は黙った。やっぱり、予定通りだった。

「わからずや」

とか言いながら、彼女はそれきりおとなしく項垂れていた。いつものファミリーレストランに到着したところで彼女は車から降りた。もう一度空を見上げると、わざとらしく薬指を天に指差すような風にして、

「あれよ、そんなにあれってわからない？」

ひとりで呟いていた。

空から細く消えかけている三日月と一緒に、俺たちの時ももうすぐ終わるのだろうか。

関崎がこの廊下を通り過ぎる前に、僕にはやるべきことがあった。

誰がどんなに邪魔しようとも、これだけはしなくてはならなかった。

「どうしたの立村くん」

「悪い、少し待っていてくれないかな」

隣で尋ねてきた清坂氏には悪いけど無視して、僕は向かい側に座っている水鳥中学の副会長に一声かけた。ふたりいるんだけど、やたらと馬鹿にしたような視線を送ってくる奴ではない。無口だが、じっと腰を据えて僕のことを待っている一人に対してだ。

「俺はかまわないが」

ぶっきらぼうながら、OKはしてくれたようだ。

「ありがとう。すぐに戻るからさ」

僕はすばやく廊下に出た。たぶん他の評議連中がいろいろ片をつけてくれるだろう。天羽がこれから後の裏打ち上げを近所の喫茶店借りてやってくれるはずだし、更科は他の先生たちに頭を下げまくって無事に終わったことを報告してくれるだろうし、難波は女子たちを使ってなんだかんだいってきちんとこの場を片付けてくれるだろう。他の二年生連中も、僕よりは女子三年評議たちの言うことを良く聞いてくれるはずなので、そのあたりは清坂氏たちに任せておけばいい。はりきっている霧島さんを表において後、轟さんが指示どおり動いた振りをして男子連中に連絡をいれてくれる。清坂氏と難波が表向ききっちりと片付けてくれるはずだ。後輩連中については、新井林と佐賀さんに一括しておけばすむことだ。僕なんていてもいなくても、丸く収まるのが現実なのだ。

だから、僕しかできないことを、今するしかない。

階段を昇り、三階の図書館まで駆け抜ける。息が苦しくて途中むせた。心臓の音がじわじわと響いてめまいがした。夏が近いからだろうか。いるだろうか、いないわけがない。

図書館の戸を開け、カウンター席の図書局員たちに一礼。すばやく窓辺に向かう。一番端っこの、古い辞書とか児童書が放置されている棚へ一直線。

「杉本、待たせて悪かった」

声をかけると、杉本はひとつにまとめた長い髪の毛を一振りして、じっと僕を見据えた。ほこりだらけの本をめぐっているようだった。

「別に待ってません。時間があるからいるだけです」

「よかった」

何がよかったのかわからないけど、僕はそれしか言えなかった。

これから僕たち評議委員会の参加希望者と、水鳥中学生徒会たちとの間で、内緒の打ち上げ反省会を行うことになっている。もちろん学校側には内緒だ。少し離れた場所で、ジュースを飲みながら今後の流れについて話し合う予定だった。

内容そのものは成功だったと思う。他の参加希望生徒がなかなか集まらなくて、規律委員長の

南雲の後光を借りていろいろ声をかけたりしたけれども、結局は満席。企画を立てた評議委員長としての面目が立った。もっとも、当の本人南雲が、おばあさんの忌引休暇もあって欠席だったので大変騒動だったのはしかたないことだけでも、だ。

三年生たちがある程度脚本をこしらえて盛り上げていくつもりでいたが、ふたをあけてみると二年たちの積極的質問の嵐に飲み込まれてしまった。きっと僕たち三年が修学旅行でいない間に、後輩たちがみな団結して準備にいそしんでくれたのだろう。

——結局は、二年に飲まれたな。

修学旅行中、霧島さんにかみつかれて女子たちをもっと有効に活用しなくては、とそれなりに振り分けしたのだが結局は、二年女子たちに三年女子たちが食われてしまった。これは嬉しいのか哀しいのかわからないけれども、誤算だった。霧島さんは完全な「華」として水鳥中学生徒会男子一同の視線をくぎ付けだったが、能力の点でいえば二年の佐賀さんがさりげなく新井林のフォローに回り、好感度ナンバーワンの人気を誇っていた。後で先生たちにも言われた。

——二年の佐賀がいればもう女子、要らないな。

さすがにこの言葉、他の連中には言えない。言ってはならない。

杉本にももちろん。

この会を終わらせて改めて、杉本が評議に「いてはならない」存在なのだと思います。それを気付かなかったとは言わない。僕も男子の目、先輩の目、評議委員長の目を持っている。いなくなったおかげで評議委員会がだんだんまともな活動路線に落ち着いてきた。それを認めざるを得ない。それ以上に佐賀さんという女子が、杉本以上の能力を持つ人だということを証明してしまった。決して割り込むことはしないけれども、相手に不快感を持たせない形で場を静かに盛り上げる能力。今の三年女子には誰も持っていない能力。

たぶん、杉本には永遠に手の届かないものだろう。

——いや、新井林以上かもしれない。

「何か御用ですか」

「今すぐ来い」

僕は杉本の腕を軽く取ると、すばやく図書館から出た。怪訝な顔をして僕たちを見送る図書局員たちのことなんてどうでもいい。今の僕は、あの教室に戻るまでは評議委員長ではない。ただの、頭の悪く後輩たちに馬鹿にされきった、使えない三年D組の生徒に過ぎない。杉本から、「先輩は救いようのない馬鹿」と言われるのも、しかたのないことだ。

だから、ここでは救いようのない馬鹿な先輩として、杉本に接するしかない。

二階の踊り場窓辺に杉本を立たせた。

「ここからとにかく、外見てろ」

それだけを指示した。

「何も考えるな、とにかくここから動くなよ」

すくっと窓辺にそびえる大木から、白い光りが杉本と僕に突き刺さり、反射する。

「窓を少しだけ開けて、外を見下ろしてろ。俺が戻ってくるまでそうしてろ。わかったか」

それだけ言い放ち、僕は勢い良く階段を下りていった。あぶなく一段踏み外しそうだったが、かろうじてこけるのだけは避けられた。うっかり杉本の前でこけてみる、「先輩はやっぱり、無能なのですね」と冷たく言い放たれるだけじゃないか。

関崎たちはまだ僕が戻ってくるのを待っているはずだ。他の奴らはともかく、関崎とは約束したのだからいるはずだ。駆け足で戸を開いたとたん息が止まった。

「佐賀さん、あれ、外に行かなかったのか？」

「私も待ってました」

相変わらずくるくると耳元に丸い玉をこしらえている佐賀さんが、関崎となにやら話をしていた。

「ひとり他校の人だけだと大変だと思いましたので」

「でも、それだったら清坂さんに」

一応、清坂氏だけが僕を待っていてくれるものだと思っていた。なんで佐賀さん、二年がいるっていうのだろうか。

「じゃあ僕ひとりだけでいいよ。佐賀さん、先に会場に行っても」

「いいえ、私、新井林さんに頼まれました。立村先輩と一緒に来なさいと言われてました」

——新井林の奴、何考えてるんだ！

思わず僕は心中罵った。

つつたまま、関崎は衿のシャツを広げるようにして、額の汗を拭いた。

「悪い、俺ひとりでいいと思ったんだけどな」

万事休すとはこのことだ。僕は顔に出さないよう、大きく深呼吸した後、ふたりに告げた。

「わかった。とにかく早く行こう」

僕の計画としては、二階踊り場の窓から見下ろせる場所をわざと通り……そうすると遠回りになる……杉本に一瞬だけでも関崎と顔を合わせられるようにする、そこにあった。

確かに僕は、あの問題が起こった際に「もう杉本と関崎を一切会わせないようにする」と約束はした。「会わせる」「会話をさせる」ことはしない。でも、一方的に見つめること、それは間違いではないはずだ。偶然下を見下ろしていたら、目が合った。それがどこ悪いのだろうか。もちろん杉本の性格上、勢い良く飛び出してきて関崎に飛びつくかもしれない。でもそれは百パーセントありえないだろう。杉本は決して約束を破らない。絶対に守る。見つめるだけでいい。きちんと守るはずだ。僕はそれを知っている。だから、たった一度だけでも杉本に、関崎の最近の顔を見させてやりたかった。

しかし、佐賀さんとセットとなると、かなり苦しい。

佐賀さんは前もって杉本に「絶対顔を出さないで」などと脅しをかけたのだという。

杉本の「絶対に約束を守る」性格を逆手にとってだ。

もちろんそれは「評議委員会」に余計な波風を立てさせないためには当然のことかもしれない

。でも、それは決して僕の命令ではないし、一方的に勝手なことをするのは言語道断。最悪の場合は佐賀さんのアキレス腱である、「佐川とのこと」をにおわせるしかないかもしれない。そんなことは僕もしたくないから、できればさりげなく終わらせたかった。

——しかたないな。せめて顔だけでも覗かせてやればな。

「先輩、こちらは遠回りですけれども」

「いや、いいんだ」

なんと言われようが、僕はこの計画を押し通すつもりでいた。佐賀さんがあとで新井林たちになんと報告しようが知ったことではない。

「関崎、悪いな。少しだけ付き合ってくれ」

「俺も道わからないからいい。でも、お前、これからやること、学校側には内緒なのか」

「大丈夫だよ、酒なんて入らないし見つかっても怒られない」

本当のことだから困らない。

佐賀さんは僕と関崎の顔を交互に見つめ、耳に手をやるようにして小首をかしげた。いきなり関崎が緊張した風の下を向いた。こいつ、まさか、こういうタイプが好みなのだろうか。

「とにかくさっさと行こう」

突然、佐賀さんが走り出した。いきなりだったから僕も不意を突かれた。

「関崎さん、少し頭を下げて歩いてください」

澄んだ声で関崎へ声をかけた。緑色の光が黒く目を焼いた。

「どうした、佐賀さん」

「先輩、関崎さんに顔を上げないようにお伝えください」

「どうして」

息を呑んだ。なぜだ。なぜ見透かされている？

佐賀さんは続けた。

「関崎さん、上に、梨南ちゃんがいるんです」

——どこでばれた？

僕の表情が変わったのを、はたして佐賀さんは見抜いただろうか。佐賀さんの瞳はかすかに潤んでいた。口元が引き締まっている。真剣な表情だった。

「え、杉本さん」

関崎が呟いた後、足を止めた。ちょうど窓辺から十歩くらい離れたところだった。かろうじて頭を見ることはできるだろうか。僕は佐賀さんの出方を待った。いったい、どうして、どこで。

「梨南ちゃんと私、ちゃんと約束したんです。絶対に、交流会の時には顔を出さないでって。そうしたら交流会が大失敗してしまうかもしれないからって。私、心を鬼にして言ったんです。梨南ちゃん、絶対約束守る子だから、もし約束破ってしまったことに気付いたらショック受けてしまいます。関崎さんの顔を見るよりも、もっと辛い思いをさせてしまうんです。だから、願いです。顔を見せないようにして歩いてください。大丈夫です。梨南ちゃんは顔を見なければ会

ったことにカウントしません」

——約束を守る子だから、か。

関崎は僕の顔を黙って見た。

何も言わずに、問うように。

「そうだな、あいつは絶対に約束守るからな」

「俺は、どうすればいい、立村」

何を言えばよかったのだろう。僕はやっぱり出来そこないの評議委員長でしかない。

「うつむいて歩いてくれ。悪い、俺も後でいく」

僕は佐賀さんに何か声をかけようと思っただけで、やめてすぐに背を向けた。

黙っていたってあの人の能力だったら、ためらうことなく近道通って会場に連れていくだろうから。僕よりもはるかに、頭のいい人だから。

ふたりに背を向けて玄関に飛び込み、階段を駆け上がった。

杉本が壁にもたれるようにして、ひとつにまとめた髪の毛を握り締めるようにして立っていた。今の会話が聴かれたかどうか、わからない。聞いていなければいい。それだけを祈って声をかけた。

「杉本、あのさ」

「先輩は私をそこまで殺したいのですか」

——殺す？

顔をあげると同時に、杉本は抑揚のない声で僕を刺した。

「私に約束を破らせたいのですか」

大きな瞳が、かすかに潤んでいる。

「いや、破ったことにはならないよ」

「だったらなぜ、あの方の通るのを見させようとしたんですか！」

決して高いトーンの声ではないのに、なぜちくちくと突き刺さるのだろう。

あがっている息とは無関係に、心臓が苦しい。

「いや、たまたま通るから、説明したらいろいろまずいかなと」

「私をうそつきにしたいのですか！」

叫びがかすかに涙交じりで、驚いた。僕は杉本の顔に何か変わったものがあるのかを探した。瞳が今までになく潤んでいる。こぼれそうなほどに。

「私が佐賀さんと約束したことを、先輩はご存知のはず。なのにどうして、佐賀さんが高笑いするようなことをさせようとするんですか！」

「お前、聞いていたのか」

僕は尋ねた。杉本は答えずに、ただまっすぐ僕を見据えると、きびすを返して階段を下りようとした。不意に振り返り、

「あの方は、どちらから帰りましたか？」

やっぱり感情のこもらない言葉を発した。

「たぶん、反対側から」

「会わないようにします。約束は守ります。見下されるようなことはしたくないです」

かすかに揺れる一つに結んだ髪の毛を僕は、踊り場から見下ろしていた。これから会場に向かわなくてはならない。僕ひとりで緑色に包まれた黒い光りのおちる道を通っていかねばならない。佐賀さんの機転で杉本にも関崎にも傷のつかないようにできたことは、おそらく正しいのだろう。

正しい、そう感じられない僕が、弱いのだろう。

自分の立っている場所にまた暑苦しい光が刺して来て眩暈がした。

「その言い方は、立村に対して失礼だろう」

目の前では真赤な顔をして新井林くんがうつむいている。隣でおそろしいくらい静かに佐賀さんが立村くんと、発した言葉の相手を見つめている。

他の子たちはみな先に喫茶店から出ていた。私と立村くんが最後に支払いをしようというところで、突然新井林くんが立ち上がったのがきっかけだった。もう テーブルのグラスもみんな片付けられていて、あとは帰るだけなのに。水鳥中学生徒会の副会長さんひとりだけ、立村くに何かを話し掛けようとしていた時に割りこんだ。もともと新井林くんは立村くんのことをあまり好きでないようだし、「評議委員長のくせに遅れてきた」だけではなくて、また別の何かをしでかしたとかで腹を立てていた。その理由については確かに私も、ちょっと立村くんやりすぎだと思ったけど、しょうがない、あとでこっそり責めればいいのになって思っていた。新井林くん、佐賀さんからきっと全部話聞いたのね。

「いや、関崎さんに対してなんでそんな余計なことをしようとしたか、俺はそれが言いたいだけです。なんで余計なことするんですか。評議委員として関係ない奴を」

言いかけた新井林くんをさえぎったのが、最初の言葉だった。

「別に俺は腹立てていないし、迷惑もかけられていない。立村にも何もされていない。それだけだ」

もう一度、副会長さんは唇をまっすぐにして言い放った。放ったって表現はふさわしくないかも。投げ出したって感じだろうか。立村くんが慌ててその副会長さんに何かを言おうとしたけれども、そちらもさえぎり、

「とにかく、今日は本当にありがとうございます。成功、感謝します」

ちょっと変な言い方をして、副会長さんは深く一礼した。本当に九十度、かくっと。

「じゃ、また今度な」

立村くんも間抜け。もったきちっとかっこいいこと、どうして言えないんだろう。

二年生の後輩たちに完全に尻に敷かれているってことが証明されちゃった、今回の「水鳥中学」との交流会だったのに。ちっとも、評議委員長らしくない。一緒に手伝っていた私の方が情けなくなってしまうくらいだった。あとでふたりになった時、もっとはっきり言っちゃおう。なんかここに二年生ふたりと立村くん といると、とんでもないこと言ってしまうそうだった。

「私、バス停まで送ります」

とっさに口走ってしまった。

立村くんが一瞬にらんだのをしっかり見てしまった。

きっと、かっとなってるに決まっている。

新井林くんが、

「清坂先輩、あの、俺後輩だし、俺が行きます」

口をはさんだ。立村くんには決して使わない「先輩」を、私にはくっつけてくれる。

「いいえ、私が」

本日の一番の立役者、佐賀さんが首を振った。どちらにも私は答えなかった。

「とにかく、先に帰っていい。立村くん、あとで電話するから」

きっぱり言い捨てて私は、副会長さんの背中を軽く押した。いきなり硬直して「きょーつけ！」のポーズを取った彼に、ちょっと驚いた。

外に出てみるとだいぶ日も落ちていた。あんなに明るかった空が、雲に覆われて真っ白け。喫茶店から一番近いバスターミナルを調べておいた。たぶん立村くんが案内したらまた馬鹿正直に遠回りして案内するだろうけど、私ならちゃんと裏道近道知っている。喫茶店裏に白い四階建てのビルが建っていて、その隙間をするする抜けるとすぐバス停に出られる。

「ここを通ろうよ」

つい、ため口。

「え？」

さすがにこれは失礼だった。言い直した。

「ここを通ると近いですよ」

「あ、はい」

片腕程度の幅しかないけど特につっかかることもなくすり抜けられた。

コンクリートの待合室付バス停にたどり着き、私と副会長さんはまず、どかっと腰を下ろした。

「あの、今日は最後の最後にほんっと、ごめんなさい」

誰も待合客がいなくて、言葉に戸惑う。横目で副会長さんの姿を見やる。けどこういうのって私らしくない。すぐ身体ごと副会長さんに向けて、真正面から見つめた。

「いや、俺はすごくよかったですと思います。立村のおかげだと」

なんで私にいきなり立村くんを呼びつけるようなこと言うんだらう？

確か、副会長さんとは一度、水鳥中学の生徒会室で会ったことがあるんだっけ。

言葉をとつ、とつと落としていく、無口なんだけど男っぽいなって感じの人だった。

ただ杉本さんがあんなに夢中になるような人だらうか、とは思ったけども。

葉牡丹もらってこの副会長さん、何思ったのかな、といろいろ想像してみた。

「立村くん、一生懸命なんだけど、どうしても目立たないんだよなあ」

このあたりは独り言っぽく。だって、丁寧語使うと変にひっかかってしまいそうだった。もちろん会の間は「です」を使っていたけど、ふたりっきりだとなぜか、同い年を意識してしまう。

「でも、新井林くんたちが怒るのも無理ないと思うんですよね」

「いや、それはない」

違う、副会長さんは何も気付いていないんだらう。ここで言うておかないと。

「杉本さんのことになると、立村くん理性失ってしまうんです。本当に、こっちでも見ていて

腹立っちゃうくらいに。そうなんですよ！ 立村くん、杉本さんのことをほんっと可愛がってるから。でも約束は約束です。立村くんの余計なお世話については、私もあとできっちり怒っておきますから大丈夫です」

意味不明、脈略なし。けど言わずにられない。

「いや、言わなくても、俺はすごくよかったし」

「いいえ、今日の会みたいに、評議委員長らしくないところばかり見せすぎて、三年の威厳がなさ過ぎます！ もう、二年のみんながいなかったらどうなってたかって思うと、もう」

「あの、清坂、さん」

——私の苗字、覚えてる？ 副会長さん、私が立村くんと付き合ってること、知っているんだろうか？

不意にのどがこわばった。私は副会長さん、としかこの人を呼んでいないのに。

「立村はすごい奴だと思う。清坂さん、一番知ってると思ったんだ」

評議委員長でありながらほとんど存在感のない形で会を終わらせてしまった立村くんに、なんとなくいらいらしていた。最初から予定していたこととはいえ、二年生の新井林くんとあと佐賀さんを中心にまとめてしまったことについては、三年女子としてもかなりむかつくところがあった。三年が主役でなぜだめだったんだろう？ なぜ、ゆいちゃんや近江さん、琴音ちゃんよりも、水鳥中学生徒会の人たちはみな佐賀さんに視線を集中させてしまったんだろう？ 私だってまともな発言一杯したかったのに立村くんにさえぎられ、二年と一年、その他の人たちに振られてしまった。

二年ばかり目立って、ずるい！

水鳥中学の人たちだって、最後に頭を笑顔で下げたのは、みんな佐賀さん相手じゃない。名前を覚えてくれたのは新井林くんと佐賀さんの二人だけ。

けど、副会長さんは、私の名前を覚えてくれていた。

佐賀さんじゃなくて、私を。

立村くんと私のことを、見ていてくれていた。

私はうつむき衿のボタンをひとつはずした副会長さんの、胸の名札をのぞき見た。

もうこの人を、「副会長さん」と誰にでもつけられるような呼び名で呼びたくない。

「関崎」と、金色のプレートに黒く掘り込まれていた。

「あの、関崎くんていいの？」

ちょっときつめなまなざしと、戸惑った口元、彫りの深い鼻筋。全然立村くんと違う。

何も言葉を出さなくて、こくっと頷いたところだけは似ているかもしれない。

「ありがとう、関崎くん」

私はもう一度、はっきりと名前を呼んだ。

A「おい、聞いたか聞いたか？」

B「なにをだよ？」

A「ほら、九月の球技大会なんだけどな、競技種目の卓球、削られるんだと！」

B「えー、それまじかよまじかよ！ ネタ、どこから仕入れてきた？」

A「さっき職員室で、先公たちの集団がくっちゃべっててさ、聞いたらなんと」

C「まじかよお……」

A「あ、お前、三連覇狙っていただろ？ 卓球部ナンバーワンの意地にかけて、今年こそやるぜってなあ。かわいそうに、哀れなり、哀れなり」

C「うるせーなあっ！ 悪いか、卓球部のどこが悪い！」

A「拍手禁止されているスポーツって、そうねえだろ？ なあ、みなの中」

全員「んだんだ」

C「けど、そんな、あんまりにも、理不尽なこと、どうしてだよ。俺、抗議してくるぜ。卓球部の顧問にまずはねじ込みだ」

A「その理由なんだけどな。今まで卓球みたいな単独競技ばかり狙って出たがる奴が決まりきっていて、教師連中みなおかんむり。とにかく全員、チームワークを必要とする競技に絞ろうというのが真相」

C「卓球のどこが暗いんだよ……ちくしょう……」

B「おいおい、泣くな、おい、まじこいつ泣きそう。ひゃあー、どうするどうする」

——しばらくCのむせび泣くのを放置する連中。

A「いいじゃねえの。部活以外で卓球なんかやりたかねえだろ。それよかハンドボールとかさ、男子バレーとか、バスケとか、いろいろあるだろが」

C「（まだ泣いている）そんなのできねえよ」

B「（Aに向かって）こいつ、もともと卓球一筋できただろ？ それがさ、青大附中にきてからすぱっと球技大会で勝ったことねえから、いじけてやんの」

C「一応でも勝ってるさ、文句あるかよ！」

A「ああ、そうそう、みんな因縁つきの優勝な。一年、二年と続けて決勝戦で、誤審だって騒がれるのはたまったもんじゃあねえよな」

B「しかも、同じ相手だもんな。卓球部じゃあねえし」

C「（思い当たるふしあり）何度も誘ったけどこねえだけだよ、ったく」

A「まあ向こうも来る気はねえだろな。天下の評議委員長様だもんな」

B「ま、一年、二年の時はまだ委員長でなかったにせよ、だ」

C「知るかよ。勝ち上がってきたらいつもあいつだってだけだ。曲がりなりにも」

B「勝っては、いるよな」

A「アウトラインに落ちたかどうか、誤審騒ぎが毎回続くって伝説の対決だよなあ。なんでそんな面白い対決が待ち受けている卓球を減らすときたか、だよな」

B「たぶんあれじゃねえか。球技大会の競技を選ぶのって、3Dの担任だろ？」

A「はいはい、菱本先生な」

B「あの評議委員長殿、三年来、そっちの担任と戦ってるだろ？」

A「はいはいはいはい！」

B「たぶん、そのあたりの嫌がらせっぽいものじゃあねえかなと、俺は思うんだがどうだろう？」

C「まさか、そんな下らん理由でかよ！ あの野郎、俺の三連覇にけちつけやがって！」

A「おいおい、違うぞ。怒る相手が違うだろうが。まったくお前ってばガキなんだから」

B「そうそう、恨み過ぎ」

C「だってさあ、あいつ、むかつくんだぞ。手、抜くんだぞ。試合中」

B「試合中？」

C「そうさ。あいつな、わざと俺が打ちやすそうなところ狙って打ってくるんだぞ。信じられるか？ さっさと負かしてくださいってなめたまねしやがって！」

A「けど、接戦、誤審負けってのが続くのは？」

C「しょうがねえだろ、向こうさっさと負けたがってるかもしれねえけど、身体が動くんだから。だったら本気だせってんだ。手抜きで三連覇ってもちっともうれしかねえよ」

A「……素朴な疑問なんだが、なんであいつ、卓球部入らなかったんだ？ 委員会やるならまあしゃあねえけど、それだけ腕あるなら」

C「集団活動死ぬほどいやなんだとさ、それで評議委員長様かよ、信じらんねえ」

B「ははん、そういうことか」

C「なにをだよ」

A「つまり、評議委員長殿は集団競技が大嫌い、ということで卓球を選んでいと。菱本先生そりゃあ、いらだつわな」

C「よくわからん、どういうことだよ」

B「わからんか？ つまりだな。あいつが一匹狼やりたがると、3D担任の菱本先生としてはそりゃあ頭くるわ。なんとかしたいと思うよな。団体行動するように仕込みたいって思うわな。けど卓球なんて個人競技があるなんてことになると逃げられちゃう、ということで」

C「それで俺の三連覇はなしかよ！ ばっかやろうー！」

——その後、ひとり暴れるCをなだめるのにA、Bがいかなる苦勞をしたのかは、定かではない。

なにせ、彼女の外見に惹きつけられて声をかけた男子連中がみな、第一段階の喫茶店ですぐに

、「もう少し女性に対してのマナーを身に付けたらどうかしら、男だからといっていつもふんぞり返っているような相手とは、これ以上同じ空気を吸いたくないの」

もちろん相手に全部払わせて、さっさと消える。

僕からするとその男子連中も決して「マナー違反」をしたわけではない。男らしく振舞ったはずだろうし、もちろん洗練されたレディーファーストなんぞできるわけもないけれども、それなりに「男気」を出していたはずだ。他の女子たちには受けのいい、男らしさというものが彼らには確かに存在した。それが彼女には気に食わなかったらしい。ひとり、ふたり、三人と、切りつけるせりふであっさりと振られる男子の屍が積み重ねられるのを、僕は他人事のように眺めていた。別の世界の物語として受け止めていた。

——僕には、最初からその「男らしさ」もなければ、プライドもなかったから。

十八歳の、まだ大学に入学して三ヶ月の僕には手に入らないものばかりだった。

だから、あの彼女が僕に興味を示し、

「立村くん、どこかおいしいところでも連れて行ってもらえない？」

と声をかけてきた時には、正直どうやって断るべきか迷った。彼女が好むようなお上品な店をそれほど知っているわけでもないし、それ以上に「レディーファースト」なんぞできるものでもない。椅子を相手の女性のために引いてあげることくらいは知っているけれども、それ以上に何ができるだろう？ 話もそれほど盛り上がるようなネタを用意しているわけでもない。

幼い頃から日本伝統文化の稽古事に通い、茶道と華道では師範級だとか、黙っていれば気品のあるお嬢様なのに、歯に物着せぬ物言いで周囲から遠巻きに眺められている女子学生。もちろん成績も優秀だという噂は耳にしている。他の女子学生がジーンズにTシャツというラフな格好をしているのに対し、彼女はいつもシンプルなスーツ姿にシュークリーム風のアップした髪形だった。大学生というよりも、OLといった感じだろうか。明らかに学校内では浮いた存在ではあった。

「でも、僕もあまりしゃれた店など知らないし」

「いいのよ、立村くんが普段好んで使っている店とかあるでしょう。喫茶店でも」

「本当に、いいんですか」

結局僕は言われるがままに、親の行き着けだった和風喫茶店へと彼女をいざなうことにした。他の女子学生に、そんな地味な店へ連れていっても「立村くんって陰気」と、僕のイメージをさらに強化するだけのことだろう。もともと僕は中学高校を通じて、女子と口を利いたことがほとんどなかった。流行していた派手な歌謡曲とは縁もなく、小唄や三味線の世界にほんの少し心の安らぎを感じていた程度のことだった。一般的な大学生とは言えない僕を、なぜ彼女は誘うつもりになったのだろう。

いつ席を立たれるか、今度は何を言われるか、びくびくしながらも彼女とのひとはほっと落ち着くものがあった。噂にたがわず彼女の言葉は、一般的女子学生のものとは違っていた。」メニューを手にするなり、すぐに「抹茶と和菓子のセットね」と声高らかに告げた彼女の態度を見ると、おそらく男子連中もおごる気にはなれなかったのではないかと思われる。そうだ、この段階で、彼女を恋愛対象としてみる気がしなくなるのだろう。

「立村くんってずいぶん、クラスでは地味にしているじゃない？」

「え……？」

「言いたいことがあるくせに、いつも飲み込んでしまっているって感じよ。で、他の男子たちに全部言われてしまって、しかたなくおとなしくうつむいているって、そう見えるんだけど、どう？」

——どうって言われてもさ。

僕は答えるのに迷った。目の前に届いた二人分の「抹茶と和菓子」のセットをうつむいて眺めた。表面がかすかにあわ立った黄緑の液体と、隣にちょこなんと飾られている琥珀羊羹。ひょうたんの形で、かすかに小豆が透けて見える。そういえばそろそろ夏なのだ。

「本当は、いろいろと仕切りたいことだってあるはずなのにね、どうして？」

——どうしてって言われてもさ。

僕は彼女が言うだけ言ったあと、ゆっくりと黒文字を扱い口に運ぶのを見つめていた。やはりしぐさひとつひとつは、しつけの行き届いた家の娘といった風だろう。あの口調さえなければ、少しでも黙っていられば。

「あまり僕は、目立つの好きじゃないから」

「ふうん、自分が馬鹿だってばれるのがいやだから？」

かすかにぴりりときたけれど、口元をもぐもぐ動かしながら呟く彼女に文句なんていえるわけがない。

「そうかもしれないな。もともと僕はあまり、頭のいい方じゃなかったからさ」

「あら、そう思ってるの」

——思うしかないじゃないか。

ほとんど会話を交わしたことのない女子に対して、僕がどう返事できようか。僕の通っていた高校のレベルでは、決してこういう学校へ進学することなどできなかったはずだ。たまたま小論文の試験で高得点を取ったのがきっかけで、国語の教師からお墨付きを受けて指定校推薦を受け合格しただけのことだ。授業のレベルが高すぎるのと、クラスの連中が今はやりの政治および哲学的議論を交わしつづけるのについていけず、いつのまにか無口になったそれだけのことだ。もっとも今目の前にいる彼女も議論では負けていなかった。彼女に言い返すだけの論理を持っている男子がいたとは思えず、当然僕も無理だとわかっていて、だから近づかなかっただけのことだった。

「君もそのあたりはわかっているだろう？ クラスの男子たちは決して君に勝つことができないけれども、僕よりはるかに高校時代勉強もしてきた、本も読んできた。そういう奴がほとんど

だよ。そんな中で僕がでしゃばったとしても、それこそ『馬鹿がばれる』ことになってしまうだろう？　そこまで僕も、自分をさらけ出したいとは思わない」

「ふうん、そう、そういうわけなの」

結局僕が手をつける前に琥珀羊羹は、「ね、私がもらっていい？　あまり甘いもの好きでないんでしょう？　立村くんは」と決め付けられ、彼女の口へと飛んでいった。

きっと、男尊女卑の価値観を持つ男子連中を打破する一環として、僕に近づいてきたのかもしれない。会話をしているうちにそんな気がしてきた。さすがに抹茶までは僕から奪う気もなかったのか、彼女は両手でガラスの茶碗を持ち、

「立村くんがどう思っているか知らないけれども、私は別にあのおろかな価値観を持つ男子たちを馬鹿にしているわけではないのよ。さぞかし高校時代は成績もよかったですし、サルトルヤカント、ニーチェくらいはさらさら読んでいたでしょうよ。立村くんは誰が好きだと話してたかしら。太宰？　それとも漱石？　鷗外？」

「まあ、そんなところ」

日本文学全集をたまたま親が持っていたから、それを読みあさっただけのことだ。自慢できることではないので黙っていた。彼女は大きくため息をつき、真正面から僕を射た。らんらんとした、つややかな瞳が薄化粧の顔から光ったように見えた。キャッツアイという宝石はきっと彼女の瞳にそっくりだろう。ぼんやりと思った。

「そう、それも人それぞれよね。でもいくら日本の改革をと学生が叫んだところで、大人たちにあっさり踏み潰されるのもまた定めというものよ。それが正しいかどうかは別として。それよりも私たちは、これから生きていく上で次の世代に対しての教育を意識していくべきじゃないかしらん、と思うのよ」

——何言いたいんだ、彼女は。

他の男子たち相手に論破する厳しい口調ではない。クラスの女子たちをぴしぴしとしっかりつけるような風でもない。今まで彼女が、他のクラスメートに対して見せたことのない口調だった。まだなじめないけれども、いやな感じはしなかった。

「つまり、今後の日本の行く末を語るひまがあったら、あんたらの身近な男女たちをきっちりと教育しなさいよ、ってことよ。いい、立村くん。君は将来、結婚したいと思っている？　はっきり答えなさい」

——この人、絶対変だ。

だんまり決め込むのは危険だ。僕は頷いた。

「将来的には、まあ」

「まさかと思うけど、三つ指突いてお迎えしてくれるような、時代錯誤の良妻賢母なんて求めているんでしょうねえ」

「それは求めてないと思う」

このあたりは断言できた。というのも、僕の家庭はもともと共稼ぎだった。だからというわけでもないが、結婚の際に「女性は家にいろ」などという発想はもともとない。第一いられたら鬱

陶しいじゃないか。

「そう、珍しいのね」

「普通はそうじゃないのか？」

「なあと馬鹿なこと言ってるのよ立村くん。今まで私と交際を求めてきた男子連中みな同じこと言うのよね。『もっと女らしくしろ』ですってよ。勘違いするのもいいかげんにしろって言いたいわよね。ドアを開けて待っているような礼儀のしっかりした男にだったら、こちらも少しは考えてあげないこともないけど、なんで高飛車にそんなこと言われなくちゃならないのよねえ。どう思う、立村くん」

——どう思うたって。

目の前の彼女は、らんらんと輝く瞳をまた僕にぶつけた。

なんで僕なんだか、わからない。

「私はね、できるだけ早く結婚したいと思っているの」

話が飛んだ。追いついていけなかった。

「できるだけ早く子どもを作って、女の子だったら礼儀作法とたしなみはもちろんのこと、男女同権の認識をしっかりと持ってしなやかに社会の波を渡っていく、そういう子に育てたいのよ。必ずしもウーマンリブの思想に与するものではないけれども、日本の伝統文化や営みはきっちりと伝えていくのが常よ。でも、だからといって男子学生たちに『女らしくしろ』と文句を言われて素直に頷くような教育はしたくないの。礼儀知らずではないけれども、人間らしい扱いを求められることのできる、自分の思ったことをきちんと言える子に育てたいの」

「はあ……」

なんでそれを僕に話すのだろうか。茶碗で抹茶をすする。ここちいい苦味が広がる。幼い頃から茶の味には親しんでいた。

「ただ子どもを作るには、相手が必要よね。もちろん必要だとは思うけれども、子どもがもし、親の言う建前の理想と実際の夫婦間の繋がりギャップを感じたらどうなるかしら。社会の流れが相変わらず男女差別の厳しいものであるならば、なおさら、教育なんて効果なくなるわ。もちろんよ。だから、そのあたりをしっかりと理解し、子育てがある程度終わったら女性がきちんと社会に復帰できるような家庭にしたいのよ」

「あの、ひとつ聞いていいかな」

立て板に水。なんとかせき止めた。

「生まれた子が男だとしても、同じなのかな。男子にはやっぱり男子なりの教育方針が必要だと思うけれども」

「そうね、男の子だったらね」

答えを用意していなかったわけではなさそう。彼女は唇を軽くハンカチで押さえるしぐさをした。下を向くと、かげりがほわっと浮かぶ。漆器の艶のようなものだった。

「残念ながら私は女性の教育しか受けてきていないから、百パーセント男子向けの理想的子育てができるかどうかわからないわ。ただ、母親があまりべったり息子に張り付いているというのは、不自然だと思うわ。ある程度、そうねえ、中学入学までは母性をたっぷり与えるけれども、色

気づく頃になったら一度完全に手放す必要があると思うのよ。父親に教育させるというのかしら。完全に男の手で男の教育を行うというのかしらね。その時に母親がべったりしていると、女性に対して勘違いした認識を持ちそうよ。だからこそ、父親が男尊女卑の思想から逃れていることが大切なのよ。そのあたりを私は、きちんと見極めたくて」

言葉を切った。また、うるっとした瞳で僕を見つめた。

「立村くん、ずっと気になっていたのよね、下の名前はなんていうの？」

「……和也、だけど」

彼女はゆっくりと僕の名前を繰り返し「和也、ね」、そう呟いた。

「じゃあこれから、悪いけど君のこと、和也くんと呼ぶわ」

「え？」

「私の名前も、覚えていないなんて言わないわよね」

メニューをもう一度店員さんに要求し、彼女は「野点珈琲を二人分、お願いします」と注文を入れた。

まだ整理しきれしていない情報を処理するため、まだ飲み終わっていない抹茶を黒いお盆の上に置いた。珈琲を注文してくれたのはありがたかった。たとえ二人分すべて僕が支払うことに……おそくなるだろうが……今から僕は彼女を目の前にして確認すべきことがひとつある。

——下の名前、「さなこ」さんでいいのかな。

——卓球がなくなるのかよ。

B組評議・難波から情報を得たのは、先週、評議委員会が終わってからだった。

「うちのクラスの連中がさ、なんか話してたぞ。秋の球技大会の種目がな、減るんだとよ」

「減るってなんでだよ」

僕は全然そんな話、聞いていない。体育委員の連中からも噂全く届いていない。

なんで難波が知っているんだろう？

「別に、トップシークレット扱いしているわけじゃないよな」

「あくまでも噂だし、卓球がなくなろうが、部活動関連の奴以外にダメージがないからじゃないか？」

難波は僕の顔を真正面から見据えると、どこぞの探偵さんみたいに髪の毛をぼりぼりとかいた。これって、ホームズの癖ではないはずだが。手元のシャープペンをそのまま、とんがった難波の口元に差してやった。パイプ代わりに、さて、「青大附中のシャーロック・ホームズ」様だ。

——じゃあ俺何に出ればいいんだよ。

青大附中では毎年十月に、球技大会が行われる。うちの中学の特色通り、やたらとクラス一丸になって盛り上がる……盛り上がりたがる、ともいう……行事で、開始一週間前からは日々特訓が始まる。男子バレー、女子バレー、ソフトボール、卓球、クラス対抗リレー、バドミントン、テニス、結構種目はそろっている。学年別に一応は区切られていて、それぞれが出たい種目を選ぶことができるようになっている。

とにかく集団競技からは逃げたい僕としては、得意分野でかつ、ひとりでいられる卓球を選ぶのがいつものことだった。子どもの頃から母に卓球の技を叩き込まれ、小学校に通っていた頃はしょっちゅう児童館の卓球場でひとり打ちして遊んでいた。もちろん自己流だし、もともと運動関連の集団に関係したくなかったのも、部活動に入ることはなかった。今だって絶対にいやだ。何度も卓球部の川田に、

「立村、お前絶対卓球やれば、いい線いけるって。どうしてやらねえのさ」

と誘われたけれども、丁重にお断りした。もっとも青大附中という学校が、部活動よりも委員活動の方を重視……あくまでも現在に限定して、だが……している部分も助けてくれたんだろうと思う。評議委員に入っててよかった。本当によかった。

だからこそ、唯一卓球とかかわる時というのが、この「球技大会」だった。

一年、二年と僕は最終セットを落として二位で終わっている。なんというのか、どうしても途中でうんざりしてくるというのか、それとも周囲の盛り上がりが息苦しくなってくるというのか。うまく言えないけれども、どうも慣れない。同じ集団でも評議委員会がらみの行事だったらそれほどでもないのだが。たとえば評議委員長として、壇上に立って挨拶をする時よりもはるかに

心臓が苦しくなる。

球はそれなりに見えているし、どの辺に打ち込めば勝負がつくか、というのもなんとなくが見当がついている。でもあえてここで本気を出してどうするんだ、早く終わらせたいんじゃないのかみんな、とかいろいろな声が出てきて混乱してきて、結局、アウトかインかわからない球で勝負を預ける、そんな終り方がほとんどだった。

決勝で二年連続当たった川田にも、どやされる。

「立村、お前どうして本気出してこねえんだ！」

「いや、出してないわけじゃなくて、強いのは川田だしさ」

「そーいう問題じゃねえだろ！ この手抜き評議委員がっ！」

別に手を抜いているわけではない。なんだか卓球のリズムに身体を動かすのが、突然いやになってきてしまう。それだけだった。こんな奴が部活に入ったって迷惑をかけるだけ、そういうものだ。

いやしかした。

どうする？

本当に、どうしたらいい？

難波からもらった情報を片手に、聞き込み調査を轟さんをお願いしたところ、やはり噂は本当のことだったと確認できた。しかも言い出した教師がああ、菱本 守氏ときている。あいつはいつたい何考えてるんだろうか。僕の神経を逆なでするようなことを、嬉々としてやるのはやめてほしい。授業中にいきなり僕を当てて、

「お前、恋人の前でもっといいところ見せないでどうするんだ、ほら、逃げるなよ」

——逃げてなんかないのに。

「ああいう風に恋人宣言したんだったら、もっと男としてだなあ、堂々と立て」

——授業とプライベートを混ぜてすすめるのはやめろよな。

ただでさえ相手は教師だ。生徒の僕は文句を言えない。

なのに一体今度は何を考えてるんだろうか。

いつどこで僕をはめようと思っているんだろうか？

中学卒業まであと半年。なんとしても僕を「なつかせ」ようとたくらんでいるというわけか。悪かったな。僕は意地でも半年間、評議委員としての慇懃無礼な態度を崩す気なんてない。

「へえ、そうなんだ、卓球ないとすると、お前何やりたいわけ？」

羽飛がちっとも同情を感じない表情でもって僕をからかう。いらいらするがしかたない。事実だからしょうがない。

「卓球以外だとあとは陸上か。砲丸投げくらいしかねえよなあ」

「でもあれはもう、指定席になってるだろ」

「まあなあ」

羽飛の場合はいつもバスケと陸上競技、状況によっては男子バレーにしっかりと参加している。とにかくあいつはスポーツ万能だから、ひとつやふたつ種目が減ったって痛くも痒くもないだろう。

「まあ、これを機会に立村、お前も集団競技に顔を出すしかねえんじゃねえの？ お前だってそんなに運動神経鈍いわけじゃねえし、なんてったって卓球二位ときたらそれなりに、いい線行ってるんじゃねえの」

「……行ってないよ」

一人で集中して球を叩いている時はすっきりしている。卓球の試合中は原則として、声を出す応援が禁止されている。実はそれが卓球という競技を選んだ理由のひとつでもあるのだが。どうしても「はとば一行け一突っ走れ！」……古川さん中心……とか、「立村、いいかげん本気だしな皮むきな！」……同じく古川さん……などと声援を送られると、気が抜ける。頼むから何も言わないでくれ、プレッシャーかけないでくれ、余計な音声入れるなよ、そう叫びたくなる。

「基本として、応援の声がかからない地味な競技って……」

「ねえよそんなもん」

あっさり切られた。

「だからなあ、立村、お前が要するにいつもひとりになりたがるから、菱本さんだっていらいらして逃げ場無くしただけじゃねえのか？ お前頼むからさ、大人になってくれよ」

羽飛にそんなこと、言われたくはない。言い返したくてもあいつの足はすばしこく、とつてもだがおっかけられやしない。中腰で見送る僕に一言、

「もしバスケに入ることになったら、お前のこと、とことんしばくからな、覚悟しろよ！」

——バスケだけは絶対やめよう。

心に誓った。

席に戻り、隣の南雲にも同じ相談を持ちかけた。

「そっか、りっちゃん、それは災難だよなあ」

「行くところないよ、このままだとさ」

規律委員長・南雲はしばらくノートにぐるぐると輪を書きつづけた。スペースに「球技大会」「種目」そう書き付けた後、

「りっちゃんそういえばさ、この前の百メートル走、タイム、クラスで何番くらいだった？」

先週行われたばかりだ。覚えている。

「たぶん、五、六番くらいかな」

南雲と羽飛より下だが、それほど落としていないはずだ。去年も、おととしも僕のタイムは六番くらいだったはずだ。このくらいの順位がちょうどいい。

「実はさ、これもまだ未確認情報なんだけどさ」

南雲は声を潜めた。耳たぶを軽くいじりながら、

「球技大会の日程がさ、中体連の大きい大会と重なりそうなんだって」

「どの種目なんだろう」

「陸上関連だって言ってたよ」

九月のことというと、少し遠い話でぴんとこない。

「俺が覚えているところによると、なんだけど」

少し首をかしげるようにして、二人の名前を書いた。ふたりとも陸上部。

「タイムがたぶん、俺の記憶によると二番か三番かそのあたりを占めているはずなんだよね」

「それと、どう、関係ある……？」

恐る恐る尋ねる。なんだか南雲の言葉には、静かに波打つものがある。

「つまりさ、もしあのふたりが球技大会を蹴って、大会を選んだとしたらなんだけど、自動的に繰り上がるわけなんだ。りっちゃんが仮に六番だとすると、上のふたりが抜ける」

「ごめん俺は数字に弱いんだ」

「りっちゃん、毎年、クラス別リレーの選手は、陸上部から選んでたよな？」

「ああ、そうだよな」

何も考えなくてもいいもんな。

「ふたりが抜けると、りっちゃんは自動的に、四番に入るよな」

「ああ、なぐちゃんと羽飛の下にな」

「ということは、どういうことか、わかる？」

——まさか！

「りっちゃん、自動的にクラス対抗リレーの選手に回されるんじゃないかねえかなって、思うんだけど、どう？」

しばらく僕は立ち直れず、机の上に突っ伏していた。隣で南雲の声がまだ聞こえる。

「こういったら何だけど、リレーの練習って半端じゃなくきついよ。俺も正直言って、音を上げそうになったもんな。去年なんて最悪だったよ。羽飛と戦うのがえらく大変でさ。まありっちゃんがもし入ってくれるんだったらそれはそれでいいけど、菱本先生もほかの奴もリレーに対してはめちゃくちゃ力入ってるしさ。そのあたりは、覚悟したほういいよ。でも、どっちにしても走っている時は一人だし、バトンを渡すのが共同作業なだけだから、りっちゃんには向いてるかもなあ、ま、その時には一緒にがんばりましょうや、りっちゃん」

——帰ったら、関崎に電話してみよう。

元陸上部の長距離走者にまずは、相談しよう。

だーかーらー！ 最初っから私だってこんなことになるなんて思ってなかったわよ！
もうあんまり腹立ちちゃったから、今日思い切って自分にごほうびあげちゃったわよ。
ん？ 今？ ひとりで、ホテルのレディースプラン使って、優雅なひと時堪能中。
いいでしょ？ 学校の先生だから春休みがひまなんてこと、絶対ないけどね。でも、たまには
こういう贅沢、したっていいじゃない？ 四月から地獄なんだからあー！
もともと私みたいな、二年目の教師にね、なんでいきなり五年生の担任持たせなくちゃいけない
わけ？ 常識じゃあ考えられないよねえ。一番難しい、神経質で、それも荒れそうな子たちじゃ
ない？ 色気づいてきてやたら男女が仲悪くなるってこと、目に見えてるじゃない。しかもさ
、修学旅行があるのよ！ 自分たちが行く分にはいいけど、これ、担任の立場だったらきっと
寝られないわよ。お肌はとっくに曲がりきってるけど、もう身体もたないわよ。え？ そうよ、
私 どうせ、教職命賭けてるわよ。もちろん！ だからあの地獄の教育実習も耐えたんじゃない
のよ！ 子どもは「基本的」に好きだし、もちろん、育てたいなって思ってるわよ。でもでも、
今回はちょっと話が違いすぎるのよ！

今度五年にあがってくる子どもたちの中にね、ひとり、少し頭に問題のある子がいるのよ。
障がい児、とかそういうわけじゃないの。勉強はできるのよ。百科事典を丸暗記するのが好きで
、やたらと言葉が棒読みで、感情表現がめっちゃくちゃ苦手な子。女の子なんだけどね。知能
指数はものすごく高いんだけど、何かがずれてるって感じの子なの。

うちの学校ってもともと、障がい児教育に力入れてるってことは、前話したよね。それが悪い
ってわけじゃないのよ。で、ひとりね、本気で障がい児教育に情熱燃やしてますって先生がい
てね、結構その先生に担任してほしいってことで頼んでくる親御さんが多いのよ。

え？ 教師に生徒を選ぶ権利があるのかって？ まあいろいろよね。学校にもよるわよ。この
まえみちゃんと話したら、そっちは完全に親の意見が入る余地なしだったって。けど、うちの
学校の場合はまあ、いろいろあるみたいで、力関係。二月の段階では、その問題児ちゃんはその
先生のクラスに入ってもらおう予定だったのよ。

私もそのあたりの事情は聞かせてもらった程度のことしか知らないけどもね。

その女子を受け持っていた人が言うのには、やはり、「障がい」と認められていない障がい
を持つ子ではないかってことなんだよね。友だちとのコミュニケーションに難があるとか、感情表
現が鈍いとか。人として成長していくうえで、かなり欠けているものがあるって言うのよ。思
春期を迎えて、難しい時期に入って、その時にうまく面倒を見てあげられる教師でないと話にな
らないよね、ってことで、あえてその子を障がい児おとくいの先生にお願いする形で、話はま
まだったのよ。

ところがね、三月に入って、その先生、目にみえる障がいを持つ子どもの面倒を見てもらう

よう、他の方から頼まれたらしいの。小児麻痺の子で、本当だったら養護学校がいいのでは、ってすすめていたんだけど、親御さんがねえ、どうしても普通学級に通わせたいってことで。このあたり、教育委員会や校長をはさんでの話になったみたいだから、私もよくわかんないんだけどね。結局、その子をクラスに入れる代わりに、例の女の子を別クラスに振り分けることになっちゃったってわけ。

その女の子ね、前から噂聞いてたけど、はっきり言って日本語が通じないの。

ううん、もちろん知能は高いから、言葉は交わせるの。

ただ、人間らしい会話って感じがしないの。

ロボットと話をしているみたいって感じなの。

これじゃあ、学校ではうまくいかないわよねえ。

たまたまその子が騒ぎ出した時お守りしてくれている女の子がいるから、その子と一緒にして話だったんだけど、問題はね。その女の子、どう見ても私からしたら、いじめられてるのよね。誰にとって？ その、問題のある女子によ。わがまま一杯のお姫さまって感じで、召使をこき使ってるって感じ。

私、言ったのよ。せめてその子とは別のクラスにしてあげたほうがいいわよって。

もちろん面倒みてくれたら、担任としては少し楽よね。

でも考えても見てよ。たった十一歳の女の子がよ。いくら友だちだからってわがママをみんな聞いてあげなくちゃいけないとか、お母さん代わりにならなくちゃいけないとかそんなの、できる？ かえってその子の方が参っちゃうわよ。問題のある子は自分が正しいと思い込んでいるらしくって、自分が一番えらいんだって勘違いしてるのよ。そこらへんをうまく、うまーくごまかしてあげてるらしいのがその女の子なんだけど。五、六年の時期をお守りで過ごすのはかわいそうすぎるわよ。

そうそう、最近の小学生ませてね。

好きな男子がいるととにかく必死にアピールしちゃうんだ。

お守り役の女の子にはね、ちゃんとナイトがいるのよ。

運動万能でクラスのリーダーくんがね。

でも、そのわがママ娘がそのリーダー君のこと大好きで、好きってことをはっきり言えないで騒ぐもんだから、恋の旅路はまだまだ遠いってわけ。

リーダー君はとにかくそんなわがママ娘になんて、ちっとも心動かされなくって、お守り役の子にとにかくべったりなの。三角関係なんだけど、ね。悪いけど、もう赤ちゃんには勝ち目ないわよね、って話なの。

だから、早く解放してあげなよって、私は言いたいんだけど、結局おはちが私に回ってきちゃったってわけ。しかも三人セットだよ！

いったいどうやって面倒みればいいのかねえ。赤ちゃん娘の親も、話によると勘違いもいいところみたいで、やっぱり同じような棒読みのせりふをしゃべる人らしいのよ。やはり遺伝なのねえ、って話してたけど、前の担任も。

要するにね、みんなわかってるのよ。

迷惑かけられてて、もうたくさんってことが。

けど、知能指数に問題がないから、どうしようもないのよ。

成績がいい子がおかしいわけない、って思い込み、なんとかしてよって感じよね。

あーあ、なんかまだ言い足りないよねえ。

ね、今からさ、一緒にホテルに泊まりにこない？ どうせこの部屋ツインだし。

ワインも一本サービスで来るのよ。今夜、飲み明かそうよ、ね！

期末試験が終った。どういう結果かはわからねえけども、俺なりのベストは尽くしたつもりだ。百パーセント全力投球が俺のモットーだし、やるだけのことはやった。たとえあの女にまたトップを奪われようがどうだっていい。最近の俺はずいぶん悟った人間になってしまっている。闘争本能を失ったわけでもないんだけどなあ。

「健吾、私、評議委員のお仕事行って来るわ」

「適当に切り上げてもどってこい」

はるみがいつものように、耳のところに片手を挙げるようなしぐさを残し、教室から出て行った。本当はあいつに評議委員なんぞ、いらいらするようなところに押し込みたくなかったんだが、本人の希望なのだからしょうがないだろう。それに、俺なりにちゃんと見張りができるような環境に置いときたかったってのもある。やはり、どうしても、目の行き届かないところはあるわけで、俺なりにそれも考えてはいるわけだ。

「新井林、すごいぞ。お前ずいぶんはりきってるなあ」

桧山先生から呼び出しを受けて職員室へと向かった。夏の宿泊研修準備もだいぶ進んでいて、あとはクラス連中内でバスの座席とか部屋割りとかしおり作りくらいしか残っていない。上の三年生連中が言うには「かなり苦労するぞ」「前もって準備しとけ」などなど、ご助言賜ったがちょろいもんだ。現評議委員長が疲労困憊するような仕事ではないような気がする。「とうとうお前が一番だぞ！」

「なにがですか」

「期末だよ、今数字結果が出た」

まじかよ！ 思わず俺は桧山先生の顔をまじまじと見つめてしまった。言葉が出ない。桧山先生が興奮気味で説明するのを聞くしかない。

「お前過去最高点数取ってるだろ。とにかくすごいぞ。数学百点、英語九十五点、国語八十九点でこれは惜しいな、その他……」

保健体育、美術、音楽、などの数字は入らない。五教科オンリーだ。

「とにかく、このままでいくと合計点数順位が学年トップだ。よくやったぞ！」

「ありがとうございます」

素直に「やったぜ！」と叫べないのは、一つ確認事項があるからだ。

「先生、ほんとに、俺がトップなんですか？」

「ああそうだぞ」

「けど、俺より上に」

言いたいことを桧山先生はさえぎるようにして、一応小声でささやいた。

「ああ、E組の姫だな。あれは例外だ」

「例外？」

「姫」と暗号を使って呼ぶのは、一応彼女も二年B組のクラスメートに属するからだった。形

式上は、一応は。

「計算に入っていないんだ。一応、同じ試験は行うし点数も多分出ているけどな」

「けど？」

さらに潜めた声で。他の教師たちに気づかれぬように。

「大きい声では言えないが、別計算になるから、順位としては挙がってこない。今回の期末試験からそういう方式を取るようになったわけなんだけどな。今までは全部順位がずらっと出てくるもんだっただがな、E組が出来たおかげでトータルでの順位決定ができなくなってしまったんだ。一応は順位発表はない」

「じゃあ俺が一番なんてわからないんじゃ」

俺もあまり認めたくねえことだが、あの女は常識の代りに頭脳をもらってしまったんじゃないかってくらい、頭が切れる。ずっと俺もあいつの学年トップを奪うことができずにいた。もし、正々堂々と結果を出しているのだとしたら、それはそれで納得するけれどもだ。

「いいか、新井林」

桧山先生はもう一度、断言した。

「同じラインの上に立っているもの同士での勝負なら順位もつけられるが、最初から勝負が決まっている連中とは、話が違うんだ。その辺もわかるよな」

勝負が決まっている連中。ごろんとした石が耳の奥に転がったような気がした。

「それとだ、今回の宿泊研修についてなんだがな。そろそろバスの席決めも絡んでいるからお前にだけは話しておくけどな」

またも桧山先生、俺にささやきかけてくる。どっちにせよ俺も、気にかかる問題が一つ絡まっていたこともあって、だまって耳を傾けた。

「例の姫の件についてだが、計算に入れなくてどんどん進めてしまっていていい」

「ほんとですか」

一年前の俺だったら「でかした！ よっしゃあ！」とガッツポーズを決めていたに違いない。そうだった。俺もこのあたり頭が痛いところだった。

あの女が一応は二年B組のメンバーとして数えられているならば、バスの席決めも班分けもすべて、計算に入れなくてはいけない。すでに二年一学期の途中から「E組」という名の特別クラスへ振り分けられてしまったとはいえ、授業そのものは受けにくる。ただ、はるみのことがあるのと、うちの男子連中があの女を一切シカトしつづけていることもあって、一切会話はなし。ほとんど幽霊扱いとなっているが、少なくともいじめをしないだけまだましではないかと俺は思っている。本来だったら半殺しに遭っても言い訳できないわけなのだ。俺のところにもたまに「あの女をランチしようぜ」とお誘いがくるが、正々堂々たる行為でなければ受け付ける気はないし、きっぱり断っている。

そんな女を、もう二年B組で受け入れられるだろうか？

少なくとも、あいつが消えてから後、クラスの団結力と男女の交流がうまくいき始めたのは事

実だ。

桧山先生以外の先生たちからも言われる。この前は菱本先生も、「どうした2B、すごいなあ。何をやるにもみな、男子と女子が協力しあっているなあ。うちのクラスも見習ってほしいもんだ」

俺の背中をばしんと叩いて言い残していった。まあ、あの先生のクラスのこと考えたら、そりゃそうだな、と俺は見送った。

一学期でだ。いや、一学期も丸々使ったわけではないのにだ。

せっかくうまくいったクラスの団結を、またこなごなに崩しにくるのか、あの女は。

はるみはもうあんな女のことなど一切関心ないかのように振舞っているし、女子連中も最近はおますりにきているようだ。はるみは出来た女子だからそのあたりもきっちりと受け答えしている。もっとも今まで無視しつづけた女子連中と仲良しこよしをするつもりはないらしく、他のクラス女子連中といつもは行動しているようだが。女子のことなんでよくわからん。

「つまりだな、本人の意志で、今回の宿泊研修は参加する気がないと、先ほど連絡が入ったというわけなんだ」

「本人の意思？」

あの女本人が怖がって身を引いたとは思わずらい。

「一応」と繰り返しながら桧山先生は続けた。

「宿泊研修は本来集団で行うべきものなんだがな、ただ特殊なケースの場合を除くとされているんだ。そのあたりもちゃんと説明を行った上でご本人の判断を待ったところ、ご両親と相談されたんだろうな。きっちりと、返事が来た」

要するに親が決めたのか。

納得はする。あそこの親は、少し変だ。

「じゃあどっちにしても、二十八人で編成していいっすか」

俺は一礼して職員室を出た。そろそろはるみが戻ってきているところだろう。

「健吾、ごめんなさい、少し遅くなってしまったわ」

俺たちを遠巻きで眺めるように、他の女子連中が一步、二歩と引いている。からかう奴はほとんどいない。ただ、おびえている、一線を引いて接しているそんな感じだ。はるみはそんな雰囲気をもともせず、俺の隣に立った。さっき桧山先生が話した耳とは反対側の方からささやいた。

「さっきちょっと気になったので行ってきたの。宿泊研修のこと」

「ああ、桧山先生もなんか言ってたな」

「女子、十八人で班分けしていいかしらって」

唇に人差し指を当てるようにして、はるみは小首をかしげた。思わず呼吸が速くなりそうで、俺は時計をちらと眺めたふりをした。

「だって、梨南ちゃんを入れるかどうかによって班分けの形も変わってくると思うし、奇数でし

よう。そうだったら。だから、本人に聞いてみたの。駒方先生もいらしたし、ちゃんと話をしてくれたわ。そしたらね」

「あんな女、無視しとけて」

「ううん、だめよ。そろそろしおり完成させなくちゃ」

はるみの言葉を聞きながら、俺はずっと時計の文字盤がデジタル文字で変化していくのを追っていた。

「お母さんが絶対に行かせないって決めてしまったらしいの。変でしょう。梨南ちゃんは意地でも行くつもりだったらしいけれどもね。ただ駒方先生が代りの単位になるような宿泊会みたいなのを行うから、問題ないとは話しておられたけど」

どういう事情かややこしいことはどうだっていい。

俺は俺、正々堂々たるやり方を貫くだけだ。

「佐賀、もう少し待て。はっきり決まるまでまだ時間あるだろ」

あの女を死に物狂いで守ろうとしている人間にその旨、きっちり確認しても遅くはないだろう

。

離れたクラスの話だし、私も噂しか聞いていなかったのだから当時はあまり考えたりしなかった。ただ、必修クラブの時間でいつもひとり編物をしている佐賀さんを見かけていたから、悪口を耳に入れたくないなと思っていた程度だった。

「佐賀さんってさ、新井林がかばってくれるからってさ、ぶりっこしてさ、すっごくむかつくよね。なにさ、可愛いふりして男子に受け狙ってさ、あの髪形」

別に、耳の上にもあるくふたつに固めただけじゃないの。可愛いと思うけど。

「それにさ、親友だった杉本さんをさあっさり縁切ろうとして、学校に入るなりいきなりより戻そうとしてるんだよ。最低だよ。新井林を選んだって、杉本さんが怒るのは当然だよ」

「そうそう、ほんっと、なんかわかんないけどむかつく」

私は途中でいつも手を止めた。席を離れた。

——親友だった杉本さんを。

この言葉にいつも立ち止まる。

「親友」っていったいなんだろう？

私はいつもD組の教室で、なんとなくつるんでいる友だちと話を合わせる学校生活にうんざりしていた。学校をサボりたいとか、行きたくないとか、そういう気持ちではなくて、ただ、面倒だった。

友だちとは、じっくりと付き合っていきたい。だからできるだけ、付き合いを絞るようにしていた。小学校時代からの友だち三人が運良く青大附中に合格したこともあって、休み時間は彼女たちと行動を共にしていたのでそれほど苦ではない。ただ、三人とも別クラスだったこともあり、どうしても教室ではクラスメートと話すしかなくなる。

性格が悪いとか、むかつくとか、そういうのではない。

ただ、話すことが疲れるだけなのだ。もしテープレコーダーだったらすぐにストップボタンを押すだろう。一方的に他のクラスの子に関する悪口を聞かされて、いやな気持ちになるのはごめんだった。

それも、顔だけは見知っている女子に対して。

その子の顔を、悪口のイメージで重ねて見たくなかった。

「ねえ、風見さん、どう思う？ 絶対、むかつくよねえ」

席を離れた私にまた話し掛ける女子の一人。

どう答えればいいのか。

しかたない、社交辞令を口にするか。

「たぶん、親友じゃなかったんじゃないの、最初から」

意味不明な返答だったかもしれない。返事を待ってはいない。私は教室を出た。本当だったら「親友」と呼べる友達三人とつるみたかったけれども、他クラスの付き合いもあるだろう、できないできない。

——親友と勝手に思ってた、勝手に切られてヒステリー起こしているんじゃないのかな。

噂なんて聞きたくないと思っている私ですら、B組の杉本さんに関する話は相当耳にしている

。小学時代から親友だった佐賀さんに裏切られたことが原因で、クラスの女子たち全員に無視するよう命令しているとか。

いじめが酷すぎてとうとうB組から追い出され、特別指導の必要なクラス「E組」に押し込まれている。しかも本人は、自分の成績がよいからレベルの高い授業を受けていると勘違いしているとか。

いつも真正面しか見ないで、抑揚のない変わったしゃべり方をする。

精神科で診てもらいなさいと、とある先生から助言を受けている。

オペラが好きとか言っているが、自分がとてつもない音痴であることに気づいていないとか

。などなど。

私の頭の中で展開していくに。

杉本さんという人は、最初から佐賀さんにとって「どうでもいい人」だったんじゃないだろうか

。私の目に映る佐賀さんは、髪形のかわいらしい雰囲気もそうだけど、人に対する受け答えがいつもきちんとしている。礼儀正しい、というのとも違う。いつも人の目を見て、笑顔をやわらかく添えて、「どうもありがとう」と微笑む。しぐさひとつにしても、耳のところに片手を挙げるくせも、決してあざとくないのだ。お辞儀をする時も、必ず立ち止まって、こちらが退かない程度のやわらかい角度で頭を下げる。

頭がいい人なのだという印象は持っていた。

また、常識をきちんとわきまえた人なのだなとも。

たぶん私たちの学年でそこまで、きちんとした態度を取ることのできる女子はそれほどいないのではないだろうか。

だからそういう子は、いてもらおうと困るのだ。

自分もそうしろ、と言われるから。

佐賀さんみたいにきちんとした動作が身につけていないのに、するとばかっぽく見えるから。いじめまではいかないけれども、他の女子たちが佐賀さんについて悪口を言い合うのは、単なる

嫉妬とねたみでしかない、そう私は見ている。

本人に聞いたわけではないからわからないけれども。

佐賀さんに杉本さんという人は、「どうでもいい人」だった。

それなりの扱いをしたら、杉本さんがヒステリーを起こした。ただそれだけのことじゃないだろうか。私にとってのクラスメートが「どうでもいい人」であるように。

今度の必修クラブの時間にでも、声かけて聞いてみようか。

——佐賀さん、本当は杉本さんのこと、最初から嫌いだったんでしょ？

まあもちろん、こんな露骨な聞き方はしない。

「どうでもいい人」扱いになってしまったら淋しいから。

「佐川くん、これからどこか行くの？」

なんでさっきたんは「行くの？」なんて言い方をするんだろう。

「うん、でも家に帰ってから行く」

こう言って置けば、うちの配達手伝いだと勘違いしてくれるだろう。

「もしよかったら、うちに遊びにこない？ お母さんがいるし」

「ごめん、もう約束してるんだ。また今度」

「そう、だったら今度ね」

さっきたとふたり、帰るようになってからもう三ヶ月が経とうとしている。最初のうちは、さんざんクラス連中に冷やかされたけれども、さっきたんがちっとも隠し立てしないことと、僕もうまく他の連中の弱みを握っておいたりして、今はだいぶ静かに過ごしている。

唯一、おとひっちゃんの顔だけは真正面から見られないけれども。

今日もいつものように、仲良く一緒に帰っているのだと、みんな思っているだろう。

僕がさっきたと一緒に帰る日は、必ず約束があるのだと、誰も気づいていないだろう。

コンクリート塀の上に、白地に黒斑の猫が黙って座っていた。ちょうど僕とさっきたんを見下ろす格好でいた。撫でてやりたそうにさっきたんが手を伸ばすと、うるさそうな顔して立ち上がり、位置を変える。でもやっぱり座りなおすところみると、動く気はなさそうだった。

「じゃ、明日またね」

「うん」

さっきたんを門の前まで送った後、僕はちょうど猫が座っている位置まで黙って歩き、そこから先ダッシュで駆け出した。家に戻るのは本当だ。だって、制服のままで行くわけじゃないか。

だって、これから、佐賀さんに会うんだから。

「佐川さん」

いつも僕を「さん」付けで呼ぶ。たったひとりの人だった。今日もエレクトーンのお稽古帰りだとかで、白いブラウスに水色のカーディガンを羽織っていた。スカートは薄めの青。六月っぽい、なんとなく大人っぽく見える格好だった。

いつもの待ち合わせ場所、郷土資料館の長いすに腰掛けて、両手をきちんとひざに乗せて待っている。

「ごめん、遅くなっちゃったよね」

「大丈夫です」

いつもながら人のいない資料館。ここ、本当に、閉館にならないといいんだけどな。

「あめ、なめる？」

僕はポケットから、家でくすねてきたフルーツあめをふたつづ佐賀さんに渡した。

「ありがとうございます」

口に放り込み、ちょっとおちょぼ口にする佐賀さん。観たことのない表情だった。

僕が今日、なんで佐賀さんと会う約束をしたかということ、最近いろいろと青大附中評議委員会の動きが気ぜわしいとの情報が流れてきたからだった。正式な情報源は健吾くんなのだけど、やはり男としてカッコいいとこしか教えてくれない。気持ちはわかるんだ。おとひっちゃんだって同じだし。みっともないとこなんて、見せたくはないだろう。

ただ、僕としてはどうしても、公平な目で読まないといつぞやのようにとんでもないしくじりをやらかすかもしれない。たとえば立村評議委員長を甘く見すぎたために手厳しいしっぺ返しを受けたとかなんとか。

だから、佐賀さんから、公平な目でみた意見を聞きたかった。ほんと、それだけだ。

最近だと、水鳥中学生徒会と青大附中評議委員会との交流会でいろいろあったらしいとかなんとか。おとひっちゃんも三月の出来事以来、僕に詳しい情報を流してくれない。もちろん総田がうまくフォローしてくれているから情報には困ってないけども。

「一応、先輩たちは二年中心の話し合いでまとめられるつもりだったようです。そちらの会長が同じ二年生だし」

頷きながら聞いていた。それは、確かに、そうだ。

「そのあと、打ち上げを喫茶店で行いました。そのあたりは先輩たちが用意してくれたのですけれども。盛り上がりました」

「そうなんだ、ふうん」

なんだか佐賀さんの口調が冷めているような気がした。もしこれが健吾くんから流れてきた情報だとしたら、もっとエキサイトしたものになっているだろう。佐賀さん、正直なところどうなんだろう。あまり、楽しくなかったのかな。

「けど、無事に終わってよかったよね」

「はい、関崎副会長を近づけないですんだので、ほっとしてます」

「杉本さんのこと？」

「はい」

詳しくは聞かなかった。おとひっちゃんがおびえてなかったこととか、総田が特に何も言っていなかったところみると、たぶん顔を合わせなくてもよかったんだろう。めでたしめでたしだ。

「あのさあ、佐賀さん、ひとつ、聞いていいかな」

「なんですか？」

佐賀さんが小首を傾げ、耳元のほつれ毛を指ですくった。

「なんだか、佐賀さんはあまり交流会に乗り気じゃないのかなってなんとなく、思ったんだけどさ」

「え？」

息を呑むように、またおちょぼ口を一瞬。

僕は畳み掛けることにした。

「はっきり言って、出来がよくなかったんじゃないのかなあ。交流会って。健吾くんたちからは成功していると思っているだろうけど、佐賀さんにとってははいまいちだったとか」

佐賀さんの顔が今度は眼もまん丸。ちょっぴり面白い顔になる。でも、観てて飽きないからいい。

しばらく口籠もっていたけれど、僕がもう一粒あめを渡した頃から言葉が流れ始めた。

「私の感じ方が変なのかもしれないんですけど」

一呼吸置いて、

「なんだか、みんな、赤ちゃんみたいって思えるんです」

「どこが？」

「みんな、こんなどうでもいいことに、なぜみんな情熱をかけていられるのかなって」

僕がおとひっちゃんに感じたものと同じだろうか。

「私、ずっと健吾……新井林くんの側でお手伝いしてきました。三年の先輩たちが必死になって準備している様もちらっと見てきました。でも、なんだか小さなことばかりに夢中になっているみたいで、もっと他にやることあるはずなのに、なんでだろうって思っていました」

「言いたいことは大体わかるよ」

素早く言葉の意味を読解した。

健吾くんから直接話を聞いた感じでは「とにかく、絶対、二年が中心となって成功させますよ！三年の人たちはみんな修学旅行に行っちゃって実際活動できるのは俺たちだけですから！」なんて気合十分だったけれども。おとひっちゃんと同じく、ひとりで熱くなっていただけなんだろうか？ いや、おとひっちゃんと違い健吾くんは人望もあるし、孤独にはならないと思う。ただどうしても、しらっとしてしまう奴がひとりかふたりはいるだろうな。そんな気はしていた。

でもまさか、「お付き合い」相手の佐賀さんにそう思われているとは思わないだろう。

佐賀さんはそういうの、隠せる人だから。

「せっかく生徒会の人たちも参加してくれたのですから、本来だったら生徒会同士の話し合いに持ち込んでいって、同じ立場として話し合いをすればよかったのになって思うんです。その方が会長さんもやりやすかっただろうし。結局、水鳥中学の生徒会の人たちと、うちの学校の生徒会の人たちはほとんど会話を交わす機会がなかったんです」

「けど、話によるとさ、現評議委員長としては来年以降、力関係を生徒会に移行させようとしているとか」

健吾くんからの情報だ。

「もちろん、それはわかっています。けど、それは来年だったら遅すぎると思うんです」

佐賀さんのきっぱりした口調に、ちょっとびびった。

「それはどうしてかなあ」

「立村先輩はまだ、来年の三月まで評議委員長のままのはずです。だけど、生徒会の人たちは十月で改選されます。自動的に二年生が集まる形になります。でも、話し合いを評議委員会とする場合、どうしても三年の先輩相手だと勝ち目がないはずですよ。どうしても、生徒会には不利なんです」

「そうだね、そう言われてみれば」

「だから、立村先輩に結局は押さえ込まれたままなんです。そんなに早く生徒会の方に移行させたいんだったら、後期に二年生の委員長にしてしまうとか、そうしないと、つりあいが取れないと思うんです。来年以降健吾がどういうことするかわかりませんが。それに」

「うん、大体飲み込めた」

僕はまとめてみた。

「つまり、佐賀さんとしては、立村を後期の委員長からおろしたいんだろ？」

黙った。きっと、その通りなんだよね、きっと。

僕もその考えを頭によぎらせなかったわけではなかった。

青大附中という特殊な環境下の中、委員会活動が生徒会よりも上という信じ難い状態は、僕も正直頷けない。その点、立村が主導して、評議委員会よりも生徒会の方へと権力を移行させてつりあいをとらせたいというのはわかるような気がする。健吾くんは複雑かもしれないけれども、これから先、本当の意味でいろいろな交流会を開きたいんだったら、委員会よりも生徒会の活動の方がうまくいくと思うのだ。だって、おとひっちゃんたちだって、本当は委員会よりも生徒会同士の情報を交換したかったはずだから。

でも、まさか、佐賀さんも同じことを考えていたとは。

「あのさ、佐賀さん。ひとつ聞きたいんだけど、青大附中の委員会って、前期と後期にわかれているんだよね。ちゃんとクラス内で選出されるような形なんだよね」

「はい。クラス内では、でも決まっているようなものです」

「じゃあもしもだよ、後期の委員長が変わった場合、何かトラブル起きるのかな」

佐賀さんは頷いた。

「今までの顧問の先生だったらたぶん、そのまま通させたと思うんです。でも今の顧問の先生は、民主主義にのっとってないから今のやり方がおかしいのでは、ってたまに言います。私もそう思います。みんなの挙手投票だったら、変わってくるかもしれませんが。前委員長の指名というやり方に疑問の声、あがってもおかしくないのに、なんでか誰も言わないんです」

「まあ、部活と一緒にだもんね」

僕はひとつひとつ、ゆっくりと指を折って行った。

「佐賀さん、まだ後期まで間があるだろ。俺も佐賀さんの意見、これからじっくり考えてみたいんだ。少し待っててくれるかな。今は内緒にしようよ」

「え？」

「二期制のことに気が付いたのはきっと、今のところ佐賀さんと俺だけだよ。たとえばさ、仮に

健吾くんを後期の委員長に選んだとするよね。そうすると、生徒会長も二年になるかな。うちの
ように一年をわざと選んで手もあるけど、それはおいといて。そうすると佐賀さんの言う通り
、対等になると思うんだ。けど、せっかく生徒会にもう少し下駄履かせたいんだったら」

僕は言葉を切った。続けた。

「思い切って誰か、評議委員の二年が、生徒会に立候補しちゃえばいいんだよ。生徒会長でもな
んでも全部関係なく。今まで評議委員会に偏っていたものが生徒会に流れるわけだから、ちょう
どとんととなるし。それにたぶん、生徒会って全部人が変わるなんてことないから、持ち上が
りの人たちの手助けも借りればいいし。一気に秋の段階で権力交代だよ。そうだ。健吾くん、
思い切って生徒会長に立候補すればいいじゃないかな。それがベストだよ！」

僕は思わず飛び出した名案に拍手したくなってしまった。

そうだ、健吾くんが生徒会長になっちゃえばいいんだよ！

佐賀さんはいまひとつ腑に落ちないようすで、

「そうですか、健吾を」

慌てて

「新井林くんを」

言い直した。

しばらく別のことをしゃべったあと、僕は佐賀さんと別々に資料館を出た。ふたりで歩いてい
るところが、うっかりさっきたんの眼に触れるのだけはさげたい。いや、一番怖いのはおとひ
っちゃんかもしれない。決して悪いことをしているわけではないのだけれども。

帰り道、さっきたんの家の前を通ったとき、斜め左上の方に光る物体がちらりと見えた。

見張られたんじゃないかって、どきっとした。

近づいてみると、さっき見かけた黒ぶちの猫だったらしい。毛並みはあいまいにしか見えない
けれども、闇に光るちっちゃな光がしろっと掠めていった。

さあて、どうしようか。

わざと僕は、猫に聞こえるようつぶやいた。

ひさびさにデートらしいデートができるかな。なんだかこの一年間は私らしくないお付き合いばかりで、少々疲れ気味だった。ほんと、可愛いミニのスカートでフレンチスリーブのちょっとエッチっぽい感じのTシャツを選んで着てみた。うん、似合う。

デートのお相手とは、青潟から一駅離れたところで待ち合わせすることになっていた。

いろいろと差し障りがあるんだって。

私も全く、異存はない。青潟駅から汽車に乗り込み私は時計を覗き込んだ。

大丈夫、待ち合わせ場所へはちょうど五分遅れて、到着だ。

けどなんで、いきなり私と会いたいなんて言い出したんだろう。

昔の彼氏、というほどには私もその子とは深い付き合いをしていなかったし。一応、中学時代になかなかかっこいいタイプの男の子がいたので一声かけてみたら、喜んでくっついてきた。ただそれだけといえばそれだけだった。あの頃から私は、男子と気さくに付き合うことが多かったし、ちょうど当時付き合っていた子と別れたばかりだったし、じゃあ次にいこっかって軽い乗りだった。

学年の規律委員ってことは、がんじがらめの校則大好き野郎……なわけがなく、おしゃれにうるさいタイプのかっこつけ野郎かもな、とは思っていた。実際見た目はどう考えても中学一年になんて見えなかったし。だけど話をしてみたら、意外と古風でまじめ。やることはきっちりやってるし、いかにも「いいところのおぼっちゃん」って感じだった。読みを誤ったかなとは思ったけど、悪いわけじゃないんだからいいんじゃない。結局彼とは、私が青大附高へ進学するまで続いた。

でも、今思えばなんだけど、向こうもそれほど私のことを好きだったわけじゃないんだろうな。だって、卒業してから全然音沙汰なかったんだもの。私も高校に進学してからはバトン部の稽古とか、クラスの友だちとかといろいろ付き合いがあって忙しかったし、まだ中学にいる彼氏の相手なんてしてられないって事情もあったんだけどね。でも、少しでも気持ちが残っていたら、そりゃあ、電話の一本くらいくれるんじゃないのかな。

だってだって、一度は、部屋でいいところまで行ったのにね。

——そっか、それなのかなあ。

私はちょっと汗ばんできた鼻の頭を油とり紙で拭き取った。

やっぱりあの頃の私は、あせっていたんだろうな、そう思う。

早く、誰よりも早く大人になりたかったから、ああいっただけなのかもしれない。

結局本当に経験してみて、ちっとも大人になんてなれなかったけどね。

駅に着いた。やっぱり彼が改札口で、にっこりと手を振っていた。

中学時代と全くその笑顔が変わっていないのは驚きだった。もちろん背もこの二年でだいぶ伸びたようだし、髪形もずいぶんあやつけてる。きっとドライヤーの使いすぎかもしれない。近づいてみると髪の毛の先が枝毛っぽくなっている。

「ちゃんとトリートメントしなきゃだめだよ、もう」

切符を渡して改札口を出ると、一気にわっと熱がまとわりついてくる。彼の髪の毛を思いっきり整えてやりたくなる。つまんでひっぱってやった。

「最近、美容院行ってねえからなあ、いいとこないっすか、先輩」

「美容院でないとだめってところが、君らしいところよ」

細身のジーンズに黄緑のシャツを羽織り、白いスカーフを軽く結んでいる。顔立ちも当時から言われていた「パール・シティー」のIKUに似た雰囲気。最近 はどンドン近づいているんじゃないかなって気がした。ほんと、並んで歩くと一目を引くみたい。駅を出てすれ違った中学生らしい子が、振り返ったもの。何か ささやいてるみたいだった。

「青大附属の関係者はこの辺いないよなあ」

「たぶんね」

私の知り合いはたぶん、いない。彼の方はわからない。とにかく彼は、同じ学年の連中には気づかれたくないようなことをぼそっと話していた。あまり外歩くよりも、もっと気付かれにくい場所に身を潜めた方がよさそうだ。

二年先輩の意味もこめて、尋ねてみた。

「どこか行きたいところ、ない？」

「適当に喫茶店でよくないですか」

ずいぶん大人になったこと。私と付き合ってた頃なんて、ほとんど駅前のソフトクリーム屋さんでまかなってたくせに。少年の成長はほんと、早い。

彼も私にすべて任せてくれたので、長居できそうな小さい喫茶店に入ることにした。

入ってみると、ほとんどお客さんがいないみたいで、正直、見本のオムレツも薄汚れていてまずそうだった。でもクーラーがしっかり効いているというだけでもよしとしようかな。

「ここでいい？」

「OKで一す」

かなりいいかげんな乗りで奥の席まで進んだ。彼は先に壁際へべたっと座り込み、私はメニューを開いて、ランチの内容をチェックした。ふむふむ、ナポリタンに珈琲か紅茶かオレンジジュース、それともハンバーグリランチに同じく飲み物か。

「どれにする？」

「先輩の好きな方でいいですよ。同じで」

「じゃあ、ナポリタンに……オレンジジュースでいい？」

「はい」

ずいぶん素直な彼。この辺、少し不安を感じなくもなかった。だって今まで付き合っていた人

のほとんどは、私が決めるのを嫌がって「俺が決めてやるから」とリーダーシップを取ってくれていたから。その良し悪しは別として、ここまで私が面倒を見てあげる関係っていうのも無理があるんじゃないかって思った。

——やっぱり、付き合うって感じじゃ、ないんだろうなあ。

育ち盛りはおなかがよく。私もそうだけど彼はやっぱり子どもの尻尾丸出しだった。

一気にナポリタンに食らいつく。口の周りをトマトソースで真赤にしている。服につけないようにと、ハンカチをわざわざ首にかけているところがいかにも、よだれかけっぽくて幼い。

「ふー、うまかった」

満足そうに口を手の甲でぬぐう。ティッシュを一枚渡した。全く、なんだか息子を連れてやってきたお母さんじゃあないんだから。

「あ、ありがとうございます、先輩」

「こんな風に彼女にしてもらってるわけ？」

「まさか」

そこのとこだけぶっきらぼうに返されても困る。せっかく現在の彼女にばれないところでデートしましょってことで、わざわざ汽車使ってきたっていうのに。

「彼女とは最近どうなのかなあ？」

「一応、そこそこですよ」

噂によると、めちゃくちゃ惚れぬいている彼女らしいけども。

「向こうは、夏休み、夏期講習に行っちゃったし」

「あれ、青大附中の子じゃないの」

「なんだけど、外の学校受験するから」

そうか、だからすねてるのか。なんだか笑えた。こういうのってあるんだよなあ、附属中学の定めっていうのかな。彼氏、彼女が外に行ってしまったら大抵終りになるのが、お約束。

「大丈夫よ、まさかねえ君のことを」

「いやそれはいいですよ。どうせ俺、どうでもいいから」

またまたこうやってすねてる。私は後で届いたアイス珈琲のストローをくわえてじっと見つめた。彼も、じっと私の口元あたりを……たぶん……見据えていた。

「水菜先輩、今の彼氏とはうまくやってるの？」

「やってるって？ どういうこと？ 最後まで行ったかってこと？」

真夏の太陽の下では話すことができない返事をしてやった。

思った通り、お子さまな彼は口籠もるかな。

「いや、もしうまく行ってないんだったら、俺もそれなりに経験豊富だし、相談に乗ってあげますよ」

——こいつ、何考えてるわけ？ いきなり？

前歯で思いっきりストローをかみ締めてしまったじゃないの。

「それも、ひとりやふたりじゃないし」

いったいこの子に何が起こったって言うんだろう？

言っとくけど、私は目の前の彼に対して、もう一度よりを戻そうとか、遊んじゃおうとか思っているわけではない。一年前の私だったらきっと、やけぼっくに火がついたとか言ってすぐに飛びついているかもしれない。あの頃の私はとにかく、男は顔だとしか思ってなかったし、ベットでいちゃいちゃしちゃうことですべてうまくいくって信じていたからだった。

けど今は違う。

遊び専用の女子だと烙印を押されてしまったら最後、どんなに本気の男子を追いかけても無駄だってことを、私はこの一年で経験してしまっている。しょせん「させ子」のくせにと軽蔑される惨めさを、もう味わいたくはない。

だから今日だって、本当は迷ったんだから。

絶対に青大附高の同学年と顔を合わせないですむところを指定したかったのは、私なんだから。ここでまた、「水菜はやっぱり、誰でも寝る女なんだ」と決め付けるようなことはしてほしくない。もう、これ以上。

「相談に乗ってあげたいのは、私の方なんだけどな。一応、私の方が先輩なんだし。わかった？

南雲くん。女子の扱い方で悩める問題いろいろあるんじゃないの？」

「そうきましたか、どうも」

やはり、しゃべりたかったのは彼の方だったのだろう。彼はほっとした風にさらりとした笑顔でもって語りかけてきた。私も黙ってまずは尋ねることに徹した。私の今までしてきた経験が、彼にはきっと役立つ言葉として届くだろうし、そうでもしなければ私の「させ子」の過去は決して洗い流せないのだから。

7 今、喉から手が出るほどほしいものが手に入らないのは、自業自得の記憶を背負っているから。だからほしいなら、いくらでも持ってってって。

そうすれば私が過ごした、たくさんの男子とのひと時も、決して無駄にはならない。思わせてほしいから。

立村くんは無理やり教室の外へ連れ出された。すれ違う他の人たちの視線が痛くてなんないのに。

「何よ、何か言いたいことあるんだったらちゃんと言いなさいよ！」

「とにかくこっちへ来てくれ」

かなりきつい言い方だった。手を振り払いたくって思いっきりひっぱったら、すごい目でらみつけられた。何でだろう。私だって言いたいことある。

結局連れていかれたのは生徒玄関前の砂利道だった。引っ張り具合からすると、どうも立村くん、自転車置き場まで連れていきたくったみたいだけど、冗談じゃないわ。そんなの誰が言うこときくかって、ひっぱたいてやりたい。

「清坂氏、あのさ」

「人の邪魔して聞き耳立てて、最低よね！」

「最低だって、どっちもどっちだろう」

声を荒げたわけではないけれども、立村くんがこんなかたくなな言い方をするってことは、かなり怒っているって証拠だ。

「私も彰子ちゃんも、悪いことしようとしてたって言いたいわけ？」

「結果的に悪いことになる可能性大だろ。だからやめろって言いたいだけなんだ」

「冗談じゃないわよ。何が悪いことよ。実際やってみなくちゃ、どう転ぶかわからないわけでしょ。立村くんみたいにならなくても、びくびくして一歩も前に足を踏み出そうとしないよりはましじゃないの。なんで男子って力づくで物事を片付けようとするわけ？ 私たちはただ」

「力づくって、女子の方がそうしてるようなもんじゃないか」

怒鳴りはしなかった。けど、こういう時の立村くんが怖いことも、私は経験上、よく知っていた。この人はいつも、静かに別れ話を切り出す人だ。一度言い出したらよっぽどこちらが折れない限り、言うこと聞いてくれない。一度かなり派手なけんかをしたことがあって、私もそれなりにあきらめてきたのだ。けど、今の話は絶対に変。許せない。

教室に残してきた彰子ちゃん、大丈夫だろうか。勘違いした南雲くん怒られるなんて、きつと想像なんてしてないよ。絶対に。傷ついて泣いちゃうかもしれない。あんなにやさしかった南雲くん、いったいどうしてあんなくだらないことで怒っちゃうんだろう。

私は立村くんの目をしっかりと見据えた。絶対に、言いなりになんて、なってやんないから。

なぜこんなに立村くんが怒っているのか、もちろんわからないわけじゃない。

三年D組の男子保健委員・東堂くんの彼女が、かなりまずいことになってるらしいってことを聞いて、彰子ちゃんがいろいろと相談に乗ってあげようとしていたみたい。一度は別れちゃったらしいけど、やはりどうしても気になるみたいでちょくちょく二年の教室へ向かっていたとかいらないとか。彰子ちゃんもやっぱり、同じ委員同士だもの、心配になるのは当然だと思う。

東堂くんの彼女なんだけど、私も遠目にしかみたことがない。だって雰囲気完全に私と縁のない世界の子なんだもの。髪の毛は薄く茶色っぽいし、目つきがやたらとおっかないし、唇がやたらとてかてかしてるんだもの。あれ、絶対メイクしてるよね、って良くこずえと話していたもの。私たちはただ見ているだけだったけど、他の三年女子たちチームが目をつけて、いろいろと指導したらしいってことも、噂に聞いている。言っとくけどそれは決してリンチとかそういうものじゃない。悪いことしてるんだから、ちゃんと注意するってそれだけなんだから。

ちなみに東堂くんって人は、南雲くんの親友らしくおちゃらけたところもあるんだけど、押さえるところはしっかり押さえる。言ってみれば白みたいな人かな。男っぽいんだけど、あまり付き合いの浅い人には軽く流すタイプの人。立村くんとはやっぱりちょっと違う。南雲くんをつるんでよく、馬鹿話しているもん。そういうタイプの人が、なんでそんな不良っぽい子を好きになったのか、私にはわからない。こずえ曰く「きっと自分にはないものを持っている人に惹かれたんじゃないの？」って。そうかなあ。わかんない。そんなの私の目を見て言わないでよ、こずえって言いたかった。

とにかく、このままでは東堂くんの努力が実らないよね、ってこともあって、私と彰子ちゃんは前からプロジェクトを考えていたってわけなのだ。いつだったか、立村くんが杉本さん相手にいろいろしたというパターンでもって、「東堂くんの彼女を図書館へ連れ込んで、三年女子たちが精一杯面倒みてあげよう」ってこと。立村くんに文句言われるとは思ってなかったけど、女子同士のことは女子で片付けるのが一番だしね。だから、準備してただけなのにね。なんでそんなに立村くんが怒るわけ？

「清坂氏、いいか。それって言うのは、大きなお世話だよ」

立村くんはため息をついて落ち着いた風に見せようとしながら、

「東堂の立場になって考えてみたらそう思うに決まってるだろう。自分とその二年女子とは、個人的な話をしてるんであって、外部からうるさく言われたらかえってこんがらがらるさ」

「でも、このままだったら退学になっちゃうかもしれないじゃない！ あの子、すっごく悪いことしてるらしいし。先生たちにばれたらどうするのよ」

私も言い返した。立村くんが私に文句を言う権利なんて、絶対ないはずなんだから。きっと立村くんは、その子がもし杉本さんだったら同じことしてるに決まってる。東堂くんの彼女の顔、知らないからこうやって脳天気な返事できるんだわ。きっと。

「東堂くんは男子だから、力づくで物事を片付ければいいって思い込んでるよね。でもそれは違うと思うの。男子たちが無理やりあしろうしろって怒鳴ったって、彼女が売春をやめることなんてないと思う。それよりも、私たち女子が直接、彼女を守ってあげるとかしたら、きっと変わる、絶対変わるはずよ」

「かえって悪い方向に進んだらどうするんだよ。どこかの担任みたいなこと考えるなよ」

菱本先生に最近、思いっきり負けっぱなしだから、八つ当たりしてるんだきっと。

「どういうことよ！」

「本当にしてほしいことって、本人しかわからない。赤の他人がずかずか入り込んできてお礼を

言わなくてはならない立場に追い込まれて、本人たちがどれだけ傷つくか想像したことないのか」

「あんたにそれ言われたくないわよ！」

そうだ、私はいつもそう思ってた。

立村くんの方じゃないの。杉本さんに「ずかずか入り込む」こととして、さんざん嫌がられて傷つけて、それでもまだやめようとしな、あんたなんかに！

「いいか、これだけは俺も譲らないから」

唇をぎゅっと結び、一呼吸置いた後、立村くんは私を鋭く射た。怖くないもん。そんなもの。「東堂は保健委員なんだ。他委員会の話の評議委員として口出ししたらいけないんだ。本人同士で話し合いすればいいことであって、あとは俺たちが口出すことじゃないんだ。いいか、清坂氏、東堂たちの件については、一切かかわるな。評議委員長命令として、それだけは絶対だ」

なあに、勘違いしたこと言ってるんだらう。この人は。

私は即、言い返した。

「なにが評議委員長命令よ。肩書きに頼ろうとするなんて最低よね。立村くん。じゃあどうして杉本さんの時、そういう風にクールに対応しなかったわけ？ 私たちに杉本さんのことかばわせようとしたけど、あれは違うわけ？」

「なんで杉本のことが出てくるんだよ！」

慌ててる。立村くん、やっぱり痛いところを突かれたんだ。私は負けない。

「杉本さんが本当は嫌がっていることわかってるでしょ。本当は思いっきり杉本さんに好きなようにやらせてあげたかったのに、結局評議委員から下ろしたり、クラスにいられないようにしたり。結局私よりも立村くんが杉本さんのこと、どつぽに落としてるんじゃないの？」

立村くんの目が、ずっと私から離れた。空を見上げるようなそぶりをした。

「おいおい、委員長殿が揃わないと、委員会始まんから早く来いよ」

B組の難波くんが私たちに声をかけてきたのはその直後だった。私と目が合ったとたん、咳払いしたとこみると、全部今の話聞いていたに違いない。なんだかばつが悪い。

「あ、ああ、わかった、すぐ行く」

難波くんは立村くんの腕を軽くはたくようなそぶりをして、そのまま生徒玄関へ走り抜けていった。立村くんもしばらく私から目をそらしていたけれども、言葉をそれ以上発せずに追いかけていった。結局私だけ取り残されたってわけだった。

夏の日差しで、顔が焼けてきてる。早く日焼け止め塗らないと。

頬がなんとなくひりひりしてきた。熱く火照る。ぐっと喉からこみ上げてくる。

——自分でできなかつたくせに、なんで私がやろうとしたら邪魔するのよ！

私は空を思いっきり見上げた。さっき立村くんが見据えたところと同じなんだろう。真っ白いまぶしい太陽が、また私の眼をちかちかさせた。たらっと涙がこぼれた。

頭がよくてもよくなくても、どこか拾ってくれる高校がある。私の場合、すでに私立の女子校推薦をもらうことに決めていた。バトン部で活動してきて部活動面でのプラスももらえたと、公立高校を受けてみてもたぶん、たいしたところにはいけないってわかっている。これ以上勉強もしたくない。だったら、楽しんで入った方がいい。

やりたいことは、またいっぱいあるんだもの。

「よお、藤野、お前どこ受けんの？」

バトン部の練習が終わり、着替え終えて体育館から出ようとする、隣のクラスの木村に話し掛けられた。全身から汗の匂いいっぱい。私はちゃんとスプレーかけておいたけど、男子って全然そういうのかまわないからいや。一步離れて廊下を歩いた。

「わかんない」

「俺さ、推薦貰ったんだ。いいだろ？」

まだ十一月になったばかりだというのに、ずいぶん早いもの。

でも、木村なら考えられないこともないかなって思う。

「スポーツ推薦？」

「もち、すげえだろ」

自慢したがる男子ってばっかみたい。私は適当に聞き流した。

「夏休みに、サッカー部のキャプテンから手紙貰っててさ、絶対俺のミラクルシュートを炸裂させてほしいってな。期待してるから是非来てくれってな。すげえだろ」

「それが？」

木村は少しむっとしたみたいだ。別にこいつが怒ったって困ることはない。小学校の頃から木村はサッカー一筋でグラウンドを転がっていた。私は全く興味なんてなかったけど、クラスの女子たちが木村のことを追い掛け回してきゃあきゃあ騒いでいたのは知っていた。学生服をずるずるに、足が短くなるようなズボンのはきかた、見るからに間抜け。まあ、リーゼントしていないだけまだましだ。完全にスポーツ刈りなので、見た目には息苦しくない。

「せめておめでとうとか言えよ」

「あっそ、おめでと」

「もう少し心込めろよな」

かばんを肩にかけるようにして、木村は私の周りをハエみたいにぐるりと回った。

「で、藤野はどこいくんだ？」

「そんなのあんたに関係ないでしょ」

「お前の頭だったら、きっと俺と同じレベルのとこだよなあ」

「うるさいわね！」

セーラー服のリボンが少しずれているみたいだ。これ以上木村と歩いていると、汗の匂いが移ってしまいそうだった。何よ、そりゃ私は木村と同じくらいの学年順位よ。下から数えた方が早

いかかもしれない。木村がたぶん推薦を貰ったっていう学校は、私の行く予定の女子校が姉妹校で、いやおうなしに顔を合わせることになるかもしれない。でも、男子と女子が分かれているんだから、そんなの教える必要ない。

——頭がよければ。

これでも私は、小学校六年の冬に青大附中を受けたことがあるのだ。

親友、と思っていた子が、青大附中を受けると言い出したからだった。

もちろん、私だって自分の成績レベルがどのくらいなものなのか、わからないわけではなかった。青潟大学附属中学といえば、青潟の優秀な小学生が受験するといわれているエリート学校だし、入ったらきっと勉強一直線の灰色生活だろうとも聞いていた。けど、親友がいればそんなの関係ない、って信じていた。ずっと、そう。

私にとって、友だちが一番大切だったもの。

結果はもちろん落ちこちたけど、だからといって友情がなくなるなんてこと、考えたこともなかった。中学が別になるだけじゃない。家を引っ越すわけじゃないんだし。いつだって遊べるさ。そう、信じていたのに。

——頭の悪い私なんかとは、遊びたくないんだよね。

もうだいぶ冷え込んでいた。木造校舎のせいか、風が隙間からすり抜けてくる。喉がいがいがしてきた。こっそりポケットに隠していたキャンディを口に放りこんだ。校内での飲食禁止だからきっとみつかったら怒られる。教室に戻って木村がさっさと廊下を通り抜けるのを待つつもりでいた。

三年二組の教室に戻ると、赤いビニールテープで二メートル四方の場所を区切られていたのが目についた。きっと石炭ストーブを置くためだろう。また馬鹿男子たちが上履きをストーブにかけてあっためて、ゴムがにおってくさくなるんだ。いやな時期がやってきた。私は手ぶくろをかばんから取り出して、指を覆った。

——美里が言ってたな。

かつての親友が、手紙に書いて送ってくれたこと。

——青大附中は全部セントラルヒーティングだから、隅から隅まで暖房が効いていて暖かいんだって。石炭運び当番なんてないんだもんね。

みしり、みしり、音が胸から響きそう。ひび割れそう。

「藤野、おーい」

なんだろう。またしつこく追っかけてくる奴。木村が飽きもせず私を追いかけてくる。何が楽しくてそんなことしたがるんだろう。もともと小学校の頃から木村ってそういう奴だった。私がバトン部に入ってあいつがしょっちゅう練習を覗きにきて、足を見て騒いでいたことだって覚え

ている。なんてスケベなんだろ うっていつも思った。あいつの顔でみんな許されているとこあったけど、私は全然そんなこと思わなかったんだから。

「おい、お前さ」

「何よ、しつこいわよ」

「お前、あそこの学校だろ？ 受けるんだろ？ 推薦で」

木村は私の受ける予定の学校名を口にした。

「だってお前、最初から私立専願だって言ってたじゃねえか」

「あんたになんて言ってない」

なんでそんな情報が勝手に流れてしまうんだろう。手袋をはめた手で思わずこぶしを作ってしまった。

全く何も考えていない木村は、私の目の前にでんとつたって、近くの机の上に座った。あーあ、ここの席の奴、明日くさいなって絶対思うぞ。心ひそかに同情した。

「じゃあ、俺と同じ推薦だろ？」

「だからどうして！」

「みんな知ってるだろ、推薦受ける連中同士、先公のしゃべってるの聞いてりゃ誰だって」

「そんなのあんたに関係ないじゃないの！」

手袋、投げつけて決闘申し込んでやろうかな。それとも急所を蹴り上げてやろうかな。

迷う間に、木村はいきなりにやっと笑った。顔が一瞬白く見えた。不覚にも、本場のスポーツ選手みたいにかっこよく映ったのは、やっぱり私の目がどうかしてたんだろう。

「関係あるぜ。だってな」

私の鼻先まで指を持ってきて、つんつんと差した。

「一緒に高校通えるじゃねえか」

「はあ？」

全く何考えてるんだろう。この男。

さらに想像力たくましくしゃべり続けている。

「藤野、高校行ってもバトン続けるんだろ？」

「一応ね」

「じゃあ、やっぱりあの女子校じゃねえの。あそこ、全国大会にも出てるしさ、それに俺たち男子高の応援によく借り出されるって聞いているぜ」

「まだ受かったわけじゃないでしょうが。あんたも私も」

「もう受かったも同然じゃねえか。俺とお前のおつむでも入れてくれるありがたーい学校なんだぜ」

否定できないのが悔しい。頭がよければ、頭が。

「ほらさ、中学ではさすがになんもできねえけど、高校になればなんでもできるって先輩たちも言ってるしな。ほらさ、羽飛と清坂みたいに仲良くしようぜ」

「悪いけど、あんた美里に彼氏がいること知らないの」

つい意味不明なことを言い返してしまった。

今でも続いているんだろうか。あの、時辻さんの息子と、付き合いが。

真っ白い顔して、いつも折れそうな腕で荷物運びしている、紙みたいな顔した軟弱男をなんで美里は選んだんだろう。「彼が好き」ってどうして言えたんだろう。やはり、青大附中の同級生だからだろうか。やはり、私のように頭が悪いと、話しててもつまらないんだろうか。もう、なんだか頭の中が混乱してきた。ただ木村をにらみつけて、必死にこらえるしかなかった。

目の前の木村はなにが楽しいんだか、まだぺらぺらしゃべっている。

「いやな、なんか清坂の付き合ってる奴って、羽飛の友だちなんだろ。羽飛とたまにバッティングセンターに行ったりするんだけどな、あいつ運動能力ばりばりなのになんで部活やらねえんだろうっていつも不思議に思ってたんだ。バッティングセンターでホームランの嵐だったのによ。表向きは鈴蘭優の追っかけやってるからって言ってたけど、どうもそうじゃねえなあ」

「何があるのよ」

「あいつ、すべてにおいてだ」

木村はわざとらしく、言葉をためるようにして続けた。

「清坂最優先主義をとことん貫いてるってことよ」

「美里を？」

わからないわけじゃない。みしり、みしり、また心が割れてしまう。

「清坂の付き合ってる男って、なんだか情けねえ奴らしいな。運動神経はそれほどでもねえし、頭もそれほど切れねえし、悪い奴じゃあねえんだが、だから憎めねえよって言ってた。そんな間抜け野郎に、あいつの大好きな清坂を預けっぱなしにはできねえし、かといって付き合っちゃったら別れた時悲惨だし、ってことで」

「あんた、そんなこと羽飛が言ったの？」

「俺の想像力万歳。お前よりも頭いいってことが証明されたろ？」

はあ、何考えてるんだろう。

けど、木村の言っていることは、みんな私の気付いてきたことと重なってる。

「あんたの言いたいことくらい、気付いてたわよ」

私は言い返すのが精一杯だった。

「美里は、羽飛と付き合ったら、別れた時に友だちでいられなくなるってわかってるのよ。だから、付き合わないのよ」

さっさと帰ってよ。消えてよ。一人にしてよ。

こんなみっともない私、さっさと消えてよ。

あの一言を言い切った瞬間、どうして泣いてしまったんだろう。

「お前さ、清坂となんかあったのかよ」

「縁、切られただけよ」

泣きじゃくりんがらずと顔を手袋で覆っていた。消えて消えてってあれだけ言ってるのに、木村の奴、動こうとしなかった。匂いと体温の熱気だけが伝わってくる。

「私が、私がべったりしすぎてるからって、美里にべったいくつつきすぎてるから、あっち行ってって。美里には今の彼氏だっているし、羽飛だっているし。今の彼氏、あんな頭悪そうな奴なのに、それでも好きだから付き合ってるけど、別れたって羽飛がいるから平気なのよ」

「ふうん、それ何時頃なんだよ」

「去年の、十月」

「お前がバトン部始めた頃じゃねえか」

はっと顔を上げた。そんなの、なんであんたが知ってるのよ。

「だってさ、お前バトン部にいきなり入部しただろ。周りの連中も顧問もびびってたんだぞ。あれだけ日舞に夢中だったお前がだぜ。なんでいきなり方向転換したわけなんだってな」

「踊りだって続けてるわよ。なんでバトン部じゃあまずいのよ」

「いや、んなわけじゃねくて」

いやらしい顔して足見て喜んでる馬鹿男に何がわかるっていうのよ。私は目を手袋でこすりにらみかえそうとした。びっくりした。まじめな顔してた木村がいた。

「やっと、藤野にぴったりしたことやるなってな」

木村はゆっくり私の周りを回った。

「清坂が何言ったか知らねえけどな、お前も無視したっていいじゃねえか。なーに、あいつもばっかだなあ。藤野が今、こんなすげえかっこいい女になってるのに、全然知らねえで青大附中の連中と遊んでるんだもんなあ。藤野のすげえ足長いとことかな、はねてるとことかな、ぜんぜん知らねえんだ。もったいねえの」

何言われてるか全然わけがわからなかった。

「とにかくな、今度一緒にだ。そのことしゃべらね？ どうせ今月中には推薦お互いに貰って合格するはずだろ。俺もお前もとりあえず部活が一息つけるだろ。そしたらまず、遊園地とかいこうぜ。それから、羽飛と清坂ごっこしてもいいだろ？」

「なにが、ごっこよ」

一方的にしゃべり続けている木村。

聞き流しながら私は、両手でもう一度顔をぬぐった。

木村の言う通りだ。私が「玉兎」でつまらない日舞演目を踊ってから、バトン部に入ったのも、美里の言葉を跳ね返すためだった。けど、美里は今この一瞬、全く私のことを思い出してなんていない。今こんなに私が泣いてるのに、気が付いてるのは目の前で汗臭い木村だけだ。また、涙があふれてきた。声を出して私は泣いた。

1

きのう、小春ちゃんからハガキが届いていた。

暑中見舞いのはずなのに、なぜ「残暑見舞い」って書いてるんだろう。八月十日なんてまだまだ暑いのにね。暑中見舞いでいいじゃない。

——ゆいちゃんへ。

夏休み楽しんでますか？

今、私は神乃世二います。

夏休みが終わるまでこっちにいます。

帰ったらまたどこかいこうね。

——西月 小春——

あんな下着ドロの彼女にさせられて。

あんなに天羽の馬鹿にずたずたにされて。

それでも小春ちゃんは一言も悪口を言わなかった。

毒入りジュース造って飲ませてやったって、誰も文句言うわけないのにね。

2

朝から太陽かんかん照りの中、私たち三年評議委員はずっと、大学の学食で話をしつづけていた。夏休みでも学食だけは運営しているし、人も大学生ばかりだし、それだったら教室に籠るよりも飲み物たくさん飲めていいし、ってことでここに集まることになった。

立村の発案だとか言ってたけど、本当は美里の口添えなんだろうって私には大体わかっていた。やっぱり男子ってそういうところ、プライド高い癖に気がつかないんだからね。

暑くたって私は平気だけど、委員長の立村ときたら昼食を食べるところか気力限界みたいな顔して水ばかり飲んでた。隣で美里が、

「ほら、立村くん、これ食べれば」

とか声かけているけど、首振っている。

「胃が受け付けないんだ」

美里は口を尖らせて座っていた。一応は彼女なんだからそれなりになにかしたいんだろうな。でも立村が露骨に嫌がるから黙っているみたいだ。なんでこんな軟弱男好きなんだろう。

「美里、どうしたのよ」

「ううん、なんでもない」

「お前ら、まずこっちむけ」

私たちがちょこっと話しているのを無理やり割り込むのは、三年男子評議委員の中でも一番の大馬鹿野郎、難波だった。ほんとは一発二発けりを入れてやりたいのに。悔しいけど、弱みを握られている。どうせこいつの脅しネタはばれたってかまわないことだし、言われたら言われたらで開き直るつもりでもいる。むしろあいつの方が「知ってるんだぞ、知ってるんだぞ」ってひらひら見せては隠ししているみたいで、いらいらしてくる。そんなに私を馬鹿にしたいんだったら、勝手に好きなようにすればいいのよ。私のことを馬鹿扱いするならさっさと知らないところでわめけばいいのよ。どうせあんたより私が成績悪いのは本当なんだから。似非ホームズ野郎、こんな奴となんで修学旅行の時、貴重な時間を使って自由行動してしまったんだろう。ばっかみたい。ほんと、私も。

「うるさいのはあんたじゃないのよ」

「てめえみたいな馬鹿にそんなこと言われたくねえよ」

そのくせ、やたらとむっとりスケベな顔して女子たちを眺めるのはやめてよねって言いたい。それと、欲しくもないのに現像した写真を押し付けてくるのもいいかげんにしてよって文句言いたい。あんな、化粧けばけばしくして、人形みたいなふりふりドレス着せられて、どこの誰だかわからないみっともない顔をした私なんて、もう思い出すのもいやなのにね。さっさと私、貰った段階で公園のごみ箱に捨てちゃったわよ。

「お前ら、学校祭のことをもう少しまじめに考えろよな。立村は例年どおりクイズ大会を仕切る一方で、水鳥中学との交流会パート2、あとはクラス単位で手の足りなさそうなイベントに手伝いしに出るか、そのあたりで考えてるんだぞ」

「それでいいよ。私も、賛成」

美里は少し面倒くさそうに答えた。

夏休みに入ってから、少しだけふんわりウェーブのかかった髪形に替えたみたいだった。はたして立村が気付いているかどうかはわからないけど、まあまあ似合ってるんじゃないかって気がする。ただ今は休みだからいいけど、学校が始まったら元に戻さないと怒られるんじゃないかな。美里はきっと、立村に気付いてもらえるまでそうするつもりみたいだけどね。

「去年もそうだったよね。たぶんなんだけど、みんな一、二年の評議委員たち、きつとてんてこ舞いしてると思うんだ。クラスの行事の手伝いもそうだし。評議委員会のクイズ大会まで手が回らないんじゃないかって思うの。だから、そっちに集中してもらった方がいいかな」

「そうだね、清坂氏」

意外にもあっさり立村がOKを出した。それもずいぶんやさしい言い方で。にっこりしてるじゃない。あらどうしたのよ美里、ちらっと視線を逸らして真赤になって。

「俺も清坂氏の意見に賛成なんだ。一年生はやはり、クラス中心に動いてなじんでもらった方がいいよ。あと二年も場合にもよるけどな」

「けど、そうしたら私たちは？」

どうなんだろう。なんだか無視されたっぽくてむかつくと思うんだけどな。質問したら、また三Bの馬鹿男が口出しする。

「あたりまえだろうが、俺たちが中心になるに決まってるだろうが！」

あんたに聞いたんじゃないのに、ああむかつく！

「あとは新井林を手元に置いておけばいいしさ」

立村は次に、男子たちへ「だろう？」と話を振った。女子たちをどうして無視するわけ？ 話を持ち出したのは美里だって言うのに！

「あいつも、なんだかんだ言って、立村に懐きだしたしなあ」

何をしみじみ言ってるのよ、天羽の馬鹿男が！ そんなこと言ってる暇あったら、ずっとコーヒーゼリを食べながら頬杖ついてるやる気なさげなA組女子評議を叱れっていうの。

「あれがあ？」

なんか男子連中みな、ねじ一本外れたようなことばかり言っている。懐くって、何がよ。あの男尊女卑馬鹿後輩の新井林を野放しにしてるくせに！ 可哀想な杉本さんが小春ちゃんと一緒にポイ投げされてるっていうのに！ ああむかつく、ひっぱたきたい。目の前の男子連中の脳天全部ごりごりやって、急所ダメージで男の仕事ができないようにしてやりたい！

私は食べ終わったプリンに入れ物で思いっきりテーブルを叩いた。

「先輩と呼ばせなさいよ！ ったく立村くん、あんたってば、なんて情けない委員長なわけ？」

「まあまあ、霧島姐さん、人それぞれ、やり方があるんだからさ」

仲介役とはこいつのこと。私と三年来の相棒、更級日記の登場。夏なのにこいつもふわふわパーマをそのままにしている。天然パーマ届はとっくの昔に出してるから、規律委員会に文句言われることもないって開き直ってるけど、水にぬらしたらぴろんと伸びて一発でばれるって知ってるんだろうか。ま、永年の付き合いで黙ってあげてるんだからね。まあ、話のわかる男子だし、こういう奴も悪くはない。難波よりはまし。それに、あいつの弱みもちゃんとつかんでいるしね。年上にしか興味ないのはおめでたいことだけど、私があえて保健室通いの訳を黙ってあげてるから、仲良くできてるんでしょうが。感謝しろって、この馬鹿って言いたい。

「あのさ、俺が思うにな、皆の衆」

みな黙る。くやしいな。これも天羽の力なんだよね。

「あのこともそうなんだが、とにかく今、俺たちがやんなくちゃいけないことについて、少し語ろうよなあ、霧島姐さん。ちっとばかり、話聞いてもらっていいっすか」

憎めない語り口。小春ちゃんが本気で好きになったのは、この愛想のよさ。

いつかメガトン級のダメージをとことん浴びせて、小春ちゃんの敵、討ってあげたい。

一年の時の「忠臣蔵」ストーリーを思い浮かべ、

——今は「一力茶屋」で酔っ払って踊ってるのよ、がまんよがまん。

言い聞かせた。

「今、俺たちがやらねばなんねってことはな。評議と生徒会との連結、これなんだよな」

天羽の話をも男子連中がみな素直に聞いている。美里も、琴音ちゃんも、近江さんも黙っている。まあ、近江さんは面倒くさそうにスプーンをなめてるけど。天羽の奴、視線を投げる回数、近江さんへ向けてることが圧倒的に多い。

「立村がさ、今、一生懸命、生徒会に出入りしてるのはな。生徒会との関係を均等にしようとし

てるからなんだよ。けどさ、なかなかうまくいくもんじゃないよなあ。今までずうっとさ、評議が陰の実力者だと言われてきて、生徒会は先生たちの御用組織だと言われてきてな。そりゃあ、辛いわな。なあ、轟さん」

「そうねえ」

美里の隣で、背中を丸めこくこく頷くのは琴音ちゃんだった。私の方もまたちろりんと見る。どうでもいいけど、そんなに私たちを怖がるような態度しないでよ。おどおどしたり、へへ、って笑うのやめてくれる？ 何かあると「私、ブスだから」って、何がよ。あんたにはそんなことよりもずっと素晴らしい頭があるじゃない。噂で聞ってるわよ。琴音ちゃんの将来の夢は弁護士だって。青澗大学の法学部では司法試験が大変だから、大学は別の、それこそ司法試験に強い学校に行くんだって話、どっかからちゃんと聞ってるんだから。小春ちゃんがまだ口利けた頃、琴音ちゃんのこと心配して、どこかの大学のパンフレット集めてたの知ってる？ 感謝しなさいよ！

「できれば俺たちの代で、やり遂げたいことでもあるんだよな。やっぱし同期としてだ。立村に評議委員長としての花を持たせてやりたいってか」

「そんな、いいよ。俺よりみんなの」

また、卑屈な男がひとり。

美里も少し、顔をしかめた。

「まあ、俺たちの代で、今までの評議委員会組織を終了させるってことになるわけ。それできるのって、立村しかいねえ。新井林体制にそれを持っていかせるなんてことは、まず、できねえな」

またルパンを気取ってる。わざとらしい歌舞伎口調。

「生徒会与と部活動とが同じくらい盛り上がって、今まで委員会で行ってきたことが少しずつ部に回っていくとだ。演劇部、合唱部、雑誌作成部、文芸部、あと、旅行研究会」

「なにそれ？ 旅行研究会？」

思わず声をあげてしまった。また琴音ちゃんが目をでかでかさせてひよっとこ顔をする。

答えたのは立村だ。

「俺たちが今までしてきたことを、誰にでもできるようにって、やり方を公開するための会なんだ」

「なんでそんなことする必要あるわけ？ だってあれは評議委員だからすべきことであって、一般の生徒になんで、教える必要あるわけ？」

また、立村が寝ぼけた声で返事する。

「だからさ、天羽も言うとおりの、俺たちはものすごく今まで面白い経験してきたと思うんだ。中にはもう面倒だなんてこともあったけど、俺にとっては貴重な機会ばかりだったな。それなりにいいこともあったしさ。ただ、それを一委員会の中に閉じ込めてしまうのは何か違うんじゃないかって気が、どうしてもするんだ。もったいないよ。ほら、『ビデオ演劇』も、他の学校ではあまりやっていると聞いたことないんだ」

「そりゃあそうよ。演劇部だってやってないわよ」

「だよな。ビデオで全部、台本から撮影から自分たちでやるなんて、演劇部でも網羅できないと思うんだ。だからそういうのが個人的にやりたいって奴がいたら、ぜひ一緒にやろうよって誘って、ビデオ演劇自体をレベルアップさせることもできるんじゃないかな」

「立村くん、自分でやりたくないことを他の人たちに押し付けているように見えるよ」

美里の鋭い発言に、ちらとひとにらみしたのを、私はちゃんと見た。

「とにかく、このまま委員会主導のままでいくのはもったいないよ。だから」

「そうね、委員長もたまったもんじゃないわよね」

存在がいることを忘れられていたように見える、近江さんのめんどくさそうな声。黙っていたいんだったら黙ってなさいよ。どうせ天羽とふたりの時は私たちの悪口言い放ってるくせにさ。膝を打って、天羽が頷いた。

「近江ちゃん、だろだろ」

小春ちゃんにこの顔、見せたことないんだよね、天羽は。

「要するに何が言いたいのか私、さっぱりわかんない。もっとわかりやすく言いなさいよ」

私はうんざりしていた。男子たちがなんだかえらそんなことばかり議論しているけど、評議委員会を今までの形でなくしてしまうんだったら、その後何もすることなくなっちゃうじゃない。

「ばか、お前、ほんつとに馬鹿だよな。だから鳥頭だって言うんだ。いいかよっく聞け」

ちっとも聞いてなんてないのに、声を張り上げるのは似非ホームズ難波。暑苦しいめがね面を見ているだけでいらいらしちゃう。目に入らないところに消えてよって言いたい。

「あんたとしゃべる気ないわ」

「うるせえ、俺がわざわざ教えてやるってのに、感謝しろ！」

「だれがあんたなんか感謝するわけ、あんたみたいな大馬鹿に！」

「てめえに言われたくねえよ。おい、お前、期末の結果どうだった？ まともに黒い数字じゃねえだろ」

「あたりまえじゃない。みんな黒いペンで書くじゃない」

「お前、馬鹿だなほんつとに。俺が言ってるのはな、通知表の数字が何色のペンで書いてあるかってことじゃねえ。赤点のことだってどうして気付かないんだよ！」

馬鹿と話していてもらちがあかない。私は立ち上がり、少し頭を冷やそうと思った。

こういう時は、仲良しの子と語り合うのが一番。小春ちゃんがいた頃はいつもそうしていた。なのに、立村がいきなり立ち上がり、美里に向かって、

「悪いけど、ちょっと来てくれないかな」

ときたものだ。何よ、いきなりデートの誘い？ 見ると天羽も同じように近江さんへ誘いをかけてるじゃないの。琴音ちゃんにはあらら、更科が。B組評議なんだから、難波、あんたが誘いなさい。なんでいきなり立ち上がって、場所移動しようとするわけ。

「そうだな、おーい、難波」

天羽は難波に一声かけた。

「とにかく、おふたりさん、少しとことん語り合うのも手だよなあ」

「ざけんな、お前ら、何しようとしてる？」

難波がはっと冷静に戻ろうとしている。それを言いかけた瞬間いきなり、難波に何かを手渡した。本みたい？ いや、生徒手帳だった。一度ぱかっと見開きにして、立村と更科ふたりに見せた後、そのまま難波へ。

「お前ら！ 人のもん勝手に見るなよ！」

「まあ、いいじゃんいいじゃん、青春真っ只中だし」

「ホームズ、逆境を乗り越えるのが名探偵の仕事だろう？」

「ああ、そういうことか。しかたないな、それなら」

三人納得してなんで頷いてるんだろう。それに、なんであせってるんだろう難波。私をちらちら見るや、慌てて手帳を閉じて、それ持った絶句したまま突っ立ってるなんて。さっさと立村たちと消えなさいよ。それと、美里も琴音ちゃんもなんで天羽たちにくっついて行っちゃうわけ？

まあ、美里は困った顔してたから許すけど、琴音ちゃん、なにふんふんくっついてくわけ？
なんでよなんで！

「じゃあ、霧島姐さん、悪いけどとことんホームズ難波と語り合ってくれよ。でねえとこいつ、落ちつかねえし」

天羽の言葉を合図に、評議委員みんな、いきなり背を向けて出て行ってしまった。

3

椅子には荷物が置きっぱなし。戻ってくると思う。けど、なんで難波なんかと残されなくちゃなんないわけ？ 私はおっかけようとした。とたん、すごい声で怒鳴られた。

「待てよ！」

「何が待てよ、よ。あんたもおっかけるんでしょが！」

「まだ話、終わってねえだろうが！」

「あんたなんかと何話すのよ！」

「何にもわかってねえって言ったのは、霧島、てめえだろうが。とにかく座れ！」

無視して追いかけようとした。

「とにかく座れって！」

腕をとられてふらっとした。手を振り払おうとした。拍子にあいつの手からぽろっと手帳が落ちた。数枚、はららと落ちたもの。無視しようとした。

——何よ、これ。

足元にいかにも見てください、って感じで、それが落ちた。

這いつくばって拾おうとした難波の手を、私は思いっきり振り払った。

「うるせえ、何する！」

「こんなもの、なんで持ってるのよ！」

一歩、足を引いた。難波は私の顔をちらとも見ず、慌てて散らばった写真らしきものを集めている。なんで、そんなもの持っているんだろう。

全部、返したはずじゃあなかったわけ？

なんで私の写真なんて持ってるわけ？

なんで、アリスの写真とか、制服の写真とか持ってるわけ？

いや、そうか。

あいつは、これを売ろうとしてるんだ。

私も、売りたいんだったら売ってしまえって言ったんだ。

だから、責めるわけにはいかないんだ。

けど、なんで。

私らしき女子が花壇の前で花を手にとってしゃがみこんでいる写真が真上に重なっている。

またご丁寧になんで生徒手帳なんかにはさむんだらう。

スケベおやじに売りたいんだたらもう少し要領よくできなかつたんだらうか。

こんなものこずかい稼ぎにしたいんだたらそれはそれでいい。けど、もう二度と私の目に触れさせないでよ！ 天羽たちに見られて、たぶん美里たちにも知られて、もうおおっぴらに売れなくなるかもしれないのに。ばっかみたい。本当よ。こいつが一番の馬鹿よ。

「これはな、良く聞け」

「聞く気もないわ。どうせ、売るんでしょ。勝手にすればいいのよ」

冷静に戻りたい。知らん振りをして向こう向きたい。なのに、難波は動かなかつた。

「誰が売るんだ！」

「だってネガ持ってるんでしょ。売りたいんでしょ。こんな顔を好む親父連中に」

難波の眼がぎらぎらし始めた。殴りなさいよ。文句言いなさいよ。こっちだって受けてやるわよ。

「ああ、持ってるさ。持ってるけどな、俺をなめんなよ」

「はあ？ なめる？」

「これはな、あのカメラマンの人たちに送るんだ」

「今更？」

「お前の顔、いって言ってたあの人たちに、手紙書いて、送るんだ。わかつたか」

「じゃあもうネガはいらないわよね。捨てれば」

「いや、捨てねえよ。でねえとお前」

ゆっくりと、私に指を差して、

「お前に渡したら、どうせ捨てちまうだろ！」

私は黙った。

「とにかく、座れよ。今からさっき、天羽と立村が説明してたこと、俺がわかりやすく図解で説

明してやる。だから、座れっての！」

スラックスのポケットをいきなりまさぐり出して、難波はいきなり自動販売機に走り寄り、あっという間に二本オレンジジュースを持ってきた。

果汁百パーセントのオレンジジュース。そう書いていた。

「座れよ」

もう一度、難波は私に命令した。

——こんな奴、最低。

向かい合って座ったのは、決して難波に屈服したからじゃない。

「つまりだな、立村と天羽が言ったのはな……」

さらにわけのわかんないことを説明し始めた難波の言葉を聞き流しながら、私は頭がさらに茹であがるのを感じていた。ネガを捨てたらなんでいけないのよ。あんな写真、どうして欲しがるのよ。ばれるならばれたっていいわよ。けどなんで、あんたがそこまであの写真にこだわるわけ？ そんな必死に、あの写真を丁寧に、紙に包んでしまわなくたって、いいじゃない。

こんな奴より、私は。

——小春ちゃん、どうして青瀉にいないんだろう。

うちに帰ったらすぐ、小春ちゃんに手紙を書こう。言葉遣い間違ってるかもしれないけど、漢字間違えてるとか送り仮名間違えてるとか、怒られることないから、小春ちゃんならきっと、今の私の気持ち、わかってくれるから。

こんなに自慢げにしゃべりつづける、馬鹿ホームズよりはずっと。

話別小説情報

一学期の成績ががた落ちなのは、うちのばあちゃんが死んだからだと誰もが思ってくれていると信じていた。実際その通りなんだからしかたないだろう。なのに、いつのまにか続教授を中心に、うちの親たちがなにやら相談している様子だった。俺も気にしていないわけではなかったけども、なによりも親たちと顔を合わせるのがいやだったし、とりあえずは知らん振りをしていた。なあと、どうせ規律委員長の肩書もあるし、十一月の段階で高校の推薦をうまくやっちゃえば大丈夫ってことだ。

そう、俺は甘く見ていた。

そう、俺は甘かった。

夏休みに入り、彰子さんと水口からの暑中見舞いハガキを机に置きっぱなしにしたまま、俺は水菜さんと連絡を取り合っていた。

やはり、学校のある時期に声をかけるのは、気が引けた。

いろいろあってすでに「現彼女」の彰子さんにはもう気持ちがない。

けど、大嫌いになったわけではない。実際しゃべっているとほっとするし、それはそれで楽しい。ただ、以前だったら素直に「悪口言う女子の前から守ってやりたい」と思えたのに対し、今は「夏木の想う人を、夏木のために、守ってやりたい」そう変わっただけのことだ。

ただ、そうなると今度は俺の内部から湧き出る、欲しい感情の処理がつかなくなってしまう。これもかなり俺ってやらしいよな、と感じるのだけどしょうがない。一度経験してしまうと、とにかく発散する方法が限られてしまう。手を伸ばそうと思えばいくらでも伸ばせるのだけど、なにせ俺は病気持ちのまま、病院にもまだいけずじまいだ。このまま街で流れのまんま、というやり方が通用すれば一番よかったのだろうが、他人様に病気を移す可能性を考えるとそうもいかない。

ということで、今のところ、話をして少し刺激的な彼女ということもあり。

水菜さんにアプローチしたというわけだ。

水菜さんとは中学一年の後半から彼女の中学卒業まで付き合ったことがある。

その当時はもちろん俺もばりばりのチェリーボーイだったし、女子となんで付き合うのかその意味さえよくわからずにいた。難しい話もしないし、俺に合わせていろいろと音楽のネタとか、テレビドラマの話とか、そういう脳天気なことばかりしゃべっていられた。楽だったのは事実だ。

ただ、ものすごく側にいたいとか、ものすごく大切にしたいとか、そう感じたことは一度もなかった。男子で、そういう風を感じる奴ってこの世にいるんだろうか？ 当時の俺はかなりクールだったこともあって、水菜さんが卒業後一切連絡をくれなくなっても気にしなかった。次にまた、付き合う子もいたしな。

けど、その後試行錯誤して、彰子さんと一年間たっぷり付き合い、本当に人を好きになるってこんなに気持ちいだだだっとなんか散されるものなんだと知った。もう心が冷め切っているとはいえ、俺なりに彼女の事を一時的ながら大切にしてきたつもりではいる。なんであのぽっちゃりした顔を見て、キスしたいと思ったのだろう。なぜ、あのどふりふりドレスでデートに来られた時に可愛いと思えたのだろう。今の俺ではどうしても理解できない感情に他ならない。いや、なによりも、彰子さんを見て、俺の身体がばりばりに反応していたのはなんでだろう。あの頃の俺がどう考えていたのか、思い出したくても思い出せない。

とはいえ、性格美人の彰子さんと付き合うことで、女子の見方が百八十度変わったのは認めざるを得ない。人を好きになることによって、今まで顔を分別できなかったタイプの女子がどんどん可愛く見えてくる。俺からすると「なんだよあの女子」と言いたくなるようなタイプの子も、惚れ薬を振りかけられたとたんお姫様に見える不思議だ。

この経験を得たことによって、俺は百パーセント、何かが変わった。

水菜さんに何か、違うものが確かに見えた。

もともと水菜さんって人は、しゃきしゃきはっきり言いたいことを言うくせに、突然くにゃっと甘えてくる両極端なところがあった。前者の性格については、俺もまんざらでもないけど、甘えられると少し鬱陶しく感じたりもしたものだ。なんで俺が、他の女子たちとのごたごたに対処しなくちゃいけないんだか、と思ったりもした。

けど、最近の俺は後者の甘えんぼ水菜さんでもまあいっかと割り切っている。

多少甘えられたとしても、うまく慰めるコツ、みたいなのをつかんでいる。

これは彰子さんが教えてくれたというよりも、街の女性たちから学んだというべきか。

一夜を共にするタイプの女性は、俺の経験上、とにかく愚痴がこぼしたい、現実逃避したい、そういう人がほとんどだった。なんでベッドの上でのごたごたと仕事場の愚痴をこぼすんだ？俺中学生なのにそんなのわからないよ、って言ってやりたい。

けど、女性って、それを聞いてくれればそれで満足みたいだ。

だったら、俺も水菜さんから話をふんふん聞いてあげればいい。

それだけだったら、俺もできる。

結局のところ、俺は、水菜さんの存在が「いてもいなくても別に」タイプの女子ではなくて、「面倒なところはとりあえずそのまんまにしておいて、いいとこだけ見ておけばそれでOK」タイプ、すなわち及第点タイプの女性だと気付いたわけだ。

彰子さんが嫌いと言うわけではないけれども、今の俺には、恋愛感情を持って話をする事ができない。はっきり言ってしまえば、他のクラスメイト女子とほぼ変わらない存在だ。学校を休んでも「夏木の想い人」という枕詞がつかない限り、たいして気にもしなくなってしまう、そういうタイプの女子だ。

けど、水菜さんがもし学校を休んだとしたら、何も考えずに、

「あれ、どうしたの、風邪引いた？」

と一声かけて、様子伺いたくなる。

「お見舞いに、バナナをどうぞ。いや、変な意味じゃあごぜんせんよ」

とか言っちゃって。

この差なのだろう。

まあ、向こうだって現在は彼氏がいるし、話の雰囲気からするとかなりお熱いようだし、俺も割り込む気はない。ただし水菜さん自身は俺と話すことをいやがっていないし、いろいろ男心を知りたそうな顔をしている。それならそれでいい。俺と水菜さんとの間で、恋愛感情なんて面倒なものよりも、「一緒にしゃべりたくなる」だけの関係としてゆっくり時間を費やしていけばいいだけのことだ。義務じゃあなくてだ。

なんてことを俺はこの夏、なんとはなしに考えていたのだけども、知らないところで話がだんだん膨れ上がっていたらしい。終戦記念日の午後、俺は教授に呼び出された。夏休みだっていうのに、大学の研究室はしっかり開いていて、クーラーも利いていた。例によってコーヒーのサービスもあり、俺は冷やした奴をがぶがぶ飲んだ。

学校の様子や規律委員会の話、最近の妙子さんの様子、などなどそれなりにたわいもなく交わっていた。何かあるなどは勘付いていたけれども。

「秋世くん。そういえば将来、君は何になりたかったのかな」

「まあ、無難なサラリーマンでしょうか」

うまくごまかしながら、へらへらと笑う俺がいる。教授はご自分用のコーヒーを、マグカップに注ぎながら、

「今の時代、資格がないと厳しいぞ。女子もみな、懸命に簿記だとか公認会計士だとか宅建だとか、資格を取るのに必死だ」

「そうですか」

妙子さんは確か教職課程取ってるって聞いている。先生になるんじゃないのか？

「君は文系と理系だとどちらが得意かい？」

「一応、理系ですけど、理科系ってわけじゃなくてですね、数学が人並みって程度です」

「そうか、じゃ、お父さんと同じ、会計士を目指すという気はないのかい」

——なんでだよ。

いや、それも考えたことがないわけではないけど、あの激務を見ていたらとてもだがやっていけないと思う。それに試験も面倒そう。ただ資格はあって損はないだろう。

「そうですねえ。俺もそれなりに考えてはいます」

「そうか、だったら話は早い」

次に出てきた続教授の言葉に、俺はしばらく全身が硬直して動かなかった。

完全に、生け捕られた。

「いやね、君のご両親とお話していたのだけどね。中学を卒業してからしばらく、他の家で飯を食う訓練をした方がいいのではないかという話をしていたんだよ。前から話をしていたけれども、君は一度、第三者として自分の家を見つめ直したほうがいい。しかしご両親と一緒にどうしても甘えが出てくる。同時に、青年期には一度、完全に親の庇護から離れて、自分ひとりで生きていけるかどうか訓練した方がいい。これは私も前から思っていたことだ。そのためにだ」

教授は俺の目の前に、ホチキスで留めた冊子っぽいものを置いた。

「全寮制私塾」と書いてあるが、そんなの俺は知らないぞ。

「なんすかそれ」

「これは、私の知り合いが開いている私塾なんだがね」

続教授はなんともなさげに話しつづけた。

「若者が一人暮らしをすると、どうしてもいろいろな欲望に飲み込まれるし、しかも危険だ。食事の栄養も偏りがちになる。男所帯ならなおさらだ。だが、この下宿型塾だと、まず食事がすべてついているし、下宿に戻ってからは毎日勉強するための体制が整えられている。もちろん定期的に運動をするためのプログラムも組まれている。順調にいくと、大学卒業前には公認会計士をはじめとした将来に役立つ資格もしっかり取得できるというわけだ」

「あの、つまり、俺そこに？」

おそろおそろ尋ねると、教授は大きく頷いた。

「君の性格上、ある程度きっちりと、枠があった方がいいとご両親も理解しておられたようでね。君も一度、あの南雲家から出て、じっくりと自分を見つめ直すべきだと私も思う。男子にとって自分をしっかりと確立するための時期、甘えは許されない環境でとことん、悩んで見たまえ。ま、君の場合一番危険なのは、肉欲への耽溺かな」

——たんでき？ なんだそれ。

つまり、うちの親たちと教授は、俺がさんざん遊びほうけているのを見るに見かねて、地獄の環境下に置こうというのか？ 資格というえさにつられて、俺が、

「ありがとうございます！ そうっすねえ、やっぱり将来楽に行きたいですからねえ」

などと勘違いした言葉でも吐くと思っていたのだろうか。

冗談じゃない。なんでそんなところに閉じ込められなければならないんだ？

俺が青大附中で一番気に入っていたのは、やりたいことが好きなようにできるってことだ。

委員会も放課後も、なにもかも。それを、なんで取り上げる？

「あの、けど自分で自分を律することができれば、いいんですよ、そういうとこいかなくても」

「律することはできるかい？」

続教授の眼には「なわけねえだろ」みたいな笑いが浮かんでいた。

評議委員長殿は夏休み中忙しすぎてご機嫌斜め、ってこともあり、俺は金沢に付き合いがてら、美術館通いに没頭していた。もちろん金のかからない常設展しか観に行くわけがないが、いろいろとけちをつけながら金沢の熱い語りに付き合うのも悪くはなかった。

今までは美里相手だったんだが、そもいかねえだろうしな。評議委員長殿がああもぴりぴりしてちゃあな。いろいろと、お守りもせねばならんだろう。

「おい、羽飛、聞ってるのか」

隣でスケッチブックを持ったまま、でかい野郎の裸前で立ち止まっている金沢。気が付いてないわけじゃあないんだが、なんか、居心地悪すぎるんじゃないのか、目の前に大切なところがどかんとか来るってのは、視線逸らしたくないもんな。銅像だし動かないからってっただって、やっぱやだろ。

「お前、いいかげんこっちに来い」

不承不承に金沢は俺のいるわんこの銅像前まで来た。すでに奴のスケッチブックには、2Bの鉛筆でクロッキー画がばりばり描かれているはずだった。いや早い。ほんと天才は早い。俺が鼻歌いながら一周している間に、もう完成させちゃまっている。このまま夏休みの宿題って出しても大丈夫に違いない。もっとも金沢からしたらまだ「習作」段階。完成させるにはさらに色づけが必要なんだそう。なるほどねえ。

常設展にはあまり人がいない。ってか、ここの美術館、採算取れてるのか？ 心配だ。

青潟市立美術館とかいうけど、今のところ来ているのは俺たちとどっかのおばさん集団だけだ。しかもさっさと喫茶店の方に行っちゃいやがった。青潟に芸術は存在するのかって言いたくなるだろうよ、なあ、金沢。

しばらく金沢は自分の世界に没入状態。俺の出番は一切なし。

一通り真夏の芸術を堪能した後で、俺たちは外に出た。食うものと言ったらやはり、コンビニかスーパーかどっかで、パンでも買うのが関の山だ。いつも小じゃれた喫茶店なんかに入ってもらえるかよ。美里相手でもあるまいし。

「けど、暑いよなあ、羽飛」

「スーパーまであと少しだ。我慢しろ」

「早く入ろうよ」

芸術家はひ弱なんだろうか。よくわからん。こいつが真っ赤なトランクスをはいてるような隠れサイケな奴だってことは、修学旅行でよくわかった。憧れの画家住職に会うためならと思いつめちまう奴だとも。おとなしそうに見えてひそかに金沢は爆竹を持って歩いてるんだってこと。立村を相手にしててもそれはよくわかっていたんだが、ふたりめともなると、なんとも言えねえわけだ。

とうとうへばっちまった金沢は、街路樹の下にしゃがみこんだ。うんちんぐスタイルともいう

。

「おいおい、なんだよ、なにめげてるんだよ」

「だって、もうだいぶ歩いたよ」

しゃがみこんだ後すぐに立ち上がると、金沢は目ざとく自動販売機を発見するや否や、すぐに百円玉握り締めて走り出した。ただあれっと思えば、世の中うまく出来てるもんだ、その自動販売機クジ付だったらしく、けたたましい電子音が鳴り響いた。あともう一本、って奴だ。金沢は振り返ると、当然のごとく、

「羽飛はコーラーだろ？」

返事を聞く間もなく、ボタンを押した。

「ありがとよ」

後で俺が払うから、とは言わなかった。こういう時はありがたーく、いただきまうのが、俺の流儀だった。

ふらつきながらもなんとかスーパー「リーズン」にたどり着き、俺たちはベーコンエッグパンとカツレツパン、それぞれを買って、いつもの階段踊り場椅子へと座り込んだ。金のない中学生にはこういうところてありがたい休み場なんだな。目の前に銀色の灰皿がやにでいっぱい状態でどんと置いてあった。

「お前さ、あの坊さんから手紙来たか？」

「うん、来たよ」

食料と水分を補給して、なんとか生き返った顔の金沢。顔がだいぶ浅黒くなっている。運動してばりばりに焼けたんじゃねえことは、俺も重々よく知っている。たぶん、青潟の海を写生したり、どっかの植物園にもぐりこんで貧血起こす寸前まで色塗りしたりしてたんだきっと。

「修学旅行の後さ、お礼状と一緒にもう一作送ったんだ。返事くれるとは思わなかったけどさ」

「へえへえ、そいで」

「したら、いきなりさ」

金沢は声を潜めた。

「いきなり電話がかかってきたんだよ」

「坊さんがか？」

「違う違う、住職の知り合いの、また知り合いの、先生が」

俺にはわからない名前を金沢は告げた。素直に万歳できない相手なんだろうか。こわごわとしやべっている。

「ふうん、スカウトかなんかか？ この学校に来てくださいとかそういう感じか？」

「違う違う、大学の話」

「はあ？」

だいたい金沢の話をもとめてみると、次のように話を持ってかれたらしい。

金沢が突撃したお坊さん画家は、やはり忙しい人らしくて直接金沢に連絡をしたわけではないらしい。もちろん誉めてはいたようだし、それなりのアドバイス……芸術家同士の会話なんでその辺はわからん……を受けたいけどな。

ただ、話が進んだのはもっと先だ。

画家には画家の友だちがいて、それなりにネットワークが広がっているとかで、そのお坊画家は金沢のことを別の画家に紹介したらしい。この辺どういう風な話だったのかは全く謎だが、知ったことじゃねえ。で、その画家の先生にあたる人が、どっかの美大の教授とかでまたその絵が渡っていき……というわけらしい。

実質的、大学へいらっしやい、のお誘いじゃねえか？

「金沢、美大ってどんな風にいきゃあいんだ？ 青大附属の高校に進学する気、あんの」

「ある。俺、才能ないかもしれないから」

気弱だ。相当この前、A組の片岡に負けたのが悔しかったんだべな。

「けど、才能があったら、やっぱり行きたい学校なのか」

美術関連のレベルなんて俺にはとんとわからんが。金沢は首を振った。

「俺が好きな絵じゃないし、その先生。なんで俺の絵見て、それがいいって言ったんだろう」

「結構、アバンギャルドな絵を描くタイプの教授か？」

「アバンギャルドってなんだよ」

口を尖らせた後、金沢はぼそっと一言呟いた。

「そりゃ、デッサンの勉強するつもりだけどさあ。俺、彫刻なんて考えてねえよ」

一瞬、どでかい一物をぶら下げて仁王立ちしていた、常設展の銅像が浮かび上がった。

男の裸なんて思い出したくもねえ！

よくわからんことになっているらしい。

つまりだ。金沢は美術と言えどもいわゆる「絵画」一本でやっていきたいのに、謎の教授は「彫刻」「塑造」このあたりに命かけてみたらどうなのか、と聞いたらしい。俺が思うに、どうかんがえたって金沢の画風は、

「とにかくきれいなんだが、それだけ」

っぽい雰囲気だ。悪くはないんだが、俺好みじゃあない。ただそれだけなんだ。

少なくとも、あの仁王立ち野郎とはイメージが違う。

いや、人間以外のものをこしらえるのかもしれねえが、とにかくそんなダイナミックなのをこしらえるような奴には、俺には見えねえ。

——だからか。

さっきずっと、金沢が裸の銅像をまじまじと眺めていたのは。

「で、お前どうすんの」

「だから、夏休みかけて、さっきのあれ、模作してみる」

大まじめに金沢は答え、頷いた。

「あれって、まさか、あのどでかい……」

「だって、ああいうのを粘土でこしらえてみろって、手紙に書いてたし」

「金沢、まさかとは思いますが、それ、夏休みの自由研究代わりに出そうなんて」

「時間かかるからあれ以外の、こしらえる余裕、たぶんないよ。だから」

俺は両膝を抑え、ひたすら笑いこけていた。なんと、今まできれいな絵で売ってきた金沢がだ。芸風変えて大勝負ときた。これはもう、二学期早々、すごいことになるぞ。女子たちがあのどでかい銅像の……ま、もちろんミニチュアにするんだろうが……すげえのを観たら、どういう反応しめすんだか。

「金沢、わかった。よーくわかった」

おもむろに頷き、俺は金沢の黄色いTシャツ裾をぐいと引っ張った。

「これもなんかのご縁だ。お前、とことんあのすっぱだか野郎、そのまんま、写し取ってこい。俺が全面的にバックアップしてやるぞ。そう、昔でいうパトロンになってやる！」

「そんなに簡単じゃないよ……」

「いや、ここはお前の実力が勝負なんだぞ、いいか、金沢」

もう一度俺は金沢に、拳固と親指をぐいと挙げてやった。

「三年D組において、金沢、お前は芸術革命の旗を掲げるってことなんだからな！」

そろそろ次期規律委員長としての指名をしなくてはならない時期にきている。服装違反毎度恒例の俺がよくも堅苦しい規律委員長なんぞ務められたものだと思うが、それも時代の流れだろう。とりたてて問題が起こったこともないし、委員会内はどこぞと違い全くもって平和だ。波風立たず、かといって活気がないわけでもない。あと半年任期が残っているけれども、俺なりになんとかかなりそうな気がしている。先生のいるところでは、衿のボタンをかけておいて少し膨らみ大きめにタイの結び目をこしらえておくとか、髪形はきちんと「天然パーマ届け」を出しておくことを新入生たちに伝えておくとか、「青潟大学附属中学ファッション通信」でできるだけおしゃれな制服の着こなしを伝えていくとか。規律委員長としてやることはすべてやったつもりだ。

ただ、やっぱり毎度のことながら胃が痛いのは、次期規律委員長指名というややこしい約束事だ。

評議委員長の立村が言うには、

「とっくの昔にそんなの終わってるよ」

だそうだ。

「去年の十二月段階で、俺は新井林に話をしたから。いつ俺が降りたとしても別に問題なく進むと思うんだ。向こうの方が頭いいからな。大丈夫だろう」

ずいぶん自信なさげなことを呟いている。立村の癖だし、俺はあまり気にしていなかった。でも去年の十二月段階？ 本条先輩、まだ卒業してなかったらろう？ ずいぶん手の早い……こういう時に言うことじゃねえかな……ことだ。俺としては非常にあきれれる。そんなに面倒なことを教えなくちゃいけないほど、委員長って忙しいか？

俺もかなり早い段階で規律委員長の指名を頂いた。たぶんりっちゃんと同じくらいの時期だし、二年の六月に前委員長からお話を頂戴したわけだ。ただ、それは俺の一般的任期を加味したものであって決して能力を買われたわけではなかったはずだ。ここだけの話、かなり俺は男子として、やっかまれていたらしいしなあ……。 「女たらし」のイメージは、男子先輩たちからかなりやあな目で見られていたものだった。本当の意味で「女好き」の本条さんが全校生徒からたたえられた評議委員長だったのに、この差はいったいなんだろう。

とにかく、規律委員長としての「教育」らしきものは受けたけど、はっきり言ってあまり役立つものではなかった。一年の頃からどんどんファッションイラスト描かされるわ、取材に洋服店周りするわ、写真撮らされるわで俺なりに腕は磨いてたのもあった。先生たちとの付き合いも、少なくとも他の先輩たちよりはよかった。あまり言いたくないとこだが、俺ひとりで一年時から委員長やっても、なんとかあったような気がする。

俺みたいな脳天気野郎でも大丈夫だったんだ。そんなあせって指名なんぞしなくてもいい。後期委員選出の段階で考えたっていいじゃん、俺はそう思っていた。

「南雲、お前ずいぶんとのんびりさんだこと」

本条さんの部屋に転がり込み、俺は手土産代わりにバナナをひたすら食いまくっていた。客が手土産を半分以上食うというのは失礼と言われたらそれまでだが、腹がすいてるんだしょうがない。育ち盛り、それは定めって奴だ。本条先輩もしばらくあきれているようだったが、俺に負けじと二本一気に皮をむいてぱくついた。

「まあ、規律と評議とは違うすよ。本条さんの時代とはもう違ってきちまってるんですよ」

一応、一年先輩だ。敬語を遣う。

「たかが一年だろうが。そうそう革命が起こってどうする」

「革命したがっている奴が評議委員長にいますよ。先輩のお気に入り」

「ああ、奴どうしてる」

「あれ、連絡とってないっすか」

今日も立村は評議委員の野郎仲間とつるみ、眉間にしわを寄せそうな顔で語り合っているのを俺は廊下で見た。せっかく本条さんのところに遊びにいくんだから、一番の弟分たるりっちゃん……あ、これは立村の俺用呼び名……も誘ってやりたかったんだけどな。まあ、評議委員会は今すったもんだの大騒ぎだし、あまり余計なこと言わないほうがいいのかもしれない。

けど、ちょっとばかり意外だった。だって、立村は俺よりはるかに、本条さん大好きで、何かあるとすぐ「本条さん、相談に乗ってもらえますか」と甘ったれていたのにだ。女子みたいな雰囲気ですぐ頼るくせがあったのに、めずらしい。男子同士で語り合うなんてことは、修学旅行のような特殊環境に置かれてもしない限りめったにないっていうのに、本条さんに対してのみ立村は、あまったれの小学生的態度を取っている。気持ちはわかるけどさ。

「俺に話しても、怒鳴られると思ってるんだらうなあ。まったくガキはしょうがねえよ」

「あれ、本条さんもずいぶん、楽しみにしてたみたいですねえ」

「んなわけねえだろが。俺だっていそがしいってな。一応これでも、演劇部地区大会に向けて猛練習の最中なんだ」

とかいいながら、本条さん、こんな時間にもう部屋に戻ってきてていいんだらうか。

「本条さん、つかぬことお伺いたしますが、演劇部地区大会っていつ？」

「十月あたまだ」

「ってことは、ただいま猛練習の真っ最中とか」

「悪かったな。どうせ俺は大道具作り担当だ」

そうか。それですねてるのか。本条さんといえば、青大附中時代、評議委員会名物「ビデオ演劇」で主役を張った人だ。栄光のスターがいつのまにか裏方に回されてたらそりゃあ、すねたくもなるだらう。俺なりに配慮して、その話はこれで終りにした。

「あいつ、相変わらずボケかましてるんだろ」

「どうなんですかねえ。規律委員長の立場からすると、評議委員会相当厳しい状況に追い込まれてるようすですね。りっちゃんも胃が痛いんじゃないかと。胃薬とドリンク剤差し入れしてやりたくになりますわな」

さっきちらっと覗いた立村の表情を思い出した。授業中、ノートになにやらいろいろ書いては

すぐに黒く塗りつぶし、唇をかみ締めている様子だった。なにせ立村とは隣の席なので様子がよくわかるのだ。

「けど、りっちゃんなりによくやってるなあって気はしますよ。ありゃ、普通の奴でも荷が重いでしょうよ。ほら、生徒会と評議委員会との権力交代をスムーズに進めるために、今、生徒会長と話し合いの真っ最中」

「あいつそれに命賭けてるもんなあ」

かなりご不満らしい。それはそうだろう。「評議委員会至上主義」を打ち立てて、わが身でもって表現したのが本条さん、この人なんだからな。それを愛弟子たる立村に否定されるようなものだもん、頭にほんとはきてるんだろう。それを言わないのが、本条さんの男前なところなんだが。

「ただ、やっぱり生徒会としては、すぐに権力ほしいっしょ。男としたらそりゃ当然」

「まあなあ」

「りっちゃんとしては、次期評議委員長の新井林にもいい目見せてやりたいってことで、できるだけいい形でまとめたんだけど、生徒会側が譲歩譲歩ってうるさいらしいんですね。生徒会ったら、今までは先生たちの御用機関でなんでも言うなりだったのもあって、ストレスたまってるんでしょう。本条さん、やっぱ溜まるってありますよねえ」

「お前も相当溜まってるを見たが、どうだ？」

いきなり別方向に話を飛ばすのが、本条さんの悪い癖だった。俺は思わず手を股間にやってみた。

「人には迷惑かけやしませんよ。んなことでもって」

まだ、病院にいけずじまいなのは、内緒にしておいた。本条さんもそれ以上何も言わなかった。

俺が本条さんにさらっと説明したことは、ほんのさわりだ。

一応は規律委員長である俺だし、立村もたまに「なんなんだろうな」と愚痴をこぼしたりする。俺なりに話を聞くこともある。半分は性格的繊細さによる「自分で自分の荷物を増やしているだけ」に思えるんだけど、立村にとってはベルリンの壁に匹敵するようなもんだろう。とにかく聞いてほしいだけなんだってことはわかるんで、俺なりにふんふんと耳には入れておく。

「せめて最後まで任期は納めたいよな。けどさ、やっぱり俺じゃ無理かなって時もあるんだ。どうせだったら後期は新井林に委員長譲った方がいいのかなって思ったりもする」

「そりゃあ少し気が弱すぎるよ。りっちゃん、それ責任逃れって奴と違いますか」

「だってさ」

頭を抱えて、目をそらしたまま、うつむくように、

「俺には、上に立つことなんて向いてないって、みんなわかってるのにな。本当だったら天羽がやるべきことだったのに、俺みたいななんもできない奴が評議委員長になってしまったのが、間違いだったんじゃないかってさ」

よしよし、そう頭をなでなでしてやると思いきりその手を払われた。ごめんごめん。立村は

スキンシップを嫌がる性格だったってこと、忘れてた。見えないところで俺は、百パーセント否定できない立村の言葉にどう答えようか、迷っていた。結局答えずに、

「りっちゃん、今日ひまなら卓球やりにいこっか」

奴が唯一、俺に勝利できるゲームに誘った。ストレス発散したいだろ、やっぱり勝ちたいだろ。それが男だろ、気持ちとしちゃあ。

「本条さん、俺、前から一度、きっちり聞きたいと思ってたんですがよろしいっすか」

「なんだ？ お前もずいぶんかしこまった言い方するじゃねえか」

「実はですね、りっちゃんを評議委員長に指名した理由ってどのあたりなのかなって前から思ってたんですよ。ほら、俺も今、次期規律委員長を選ばねばいけねえ立場にありますし、人をじっくり見ねばならないわけだし、管理職の苦渋っていうんですか、それをただいま感じている真っ最中でさ」

「規律ならあっさり決まるだろ。今の二年でいっちゃん目立っている奴を選べばいいんだ」

「それはそうですよ。俺もその辺はちゃんと準備してますがな。けど、やっぱり基準ってもんがありますよねえ」

「基準かよ」

俺はもう一度、うつむいた立村の横顔を思い浮かべた。

「俺がもし、選ぶとしたらまず、リーダーとしてどんどんやっていける奴を選ぶと思うんですよ。信頼されることはもちろん大切ですけどね。本条さんみたいに、どんなに周りからブーイングの嵐でも俺はやるんだって感じでぶっちぎっていけるようなタイプで、あと、ある程度万人受けしそうな奴」

「万人受け？」

俺は力をこめて頷いた。

「これねえ、俺もすげえ迷うところもあるんですよ。頭のよさとか、企画力のすごさとか、そういう奴はたくさんいますしねえ、誰がいいとは一言では言えませんがな。けど、長になる以上は、規律特有の『教師の顔色伺い』が仕事なんだから、うまくコミュニケーションの取れる奴でねえとまずいかなと思うわけです。バトルやらかしたらどうすんですかって感じでしょうな」

「お前、違反カードの枚数はぎりぎりか？」

かろうじて。頷いた。

「またですねえ、規律の場合、鬱陶しいことを朝礼やら集会やら週番やらで言わねばならないわけなんです。これも定めといっちゃあそれまでですが、すげえむかつく三角めがねのお姉さんが言うのと、受けのいい可愛い子が言うのと、どちらがすうっと受け入れられますか？ 俺はやっぱり、顔のいい子が」

「お前性格美人派じゃねえのか」

「いろいろあって、考え変わりました」

このあたりもさらっと流しておく。

「とにかく、生徒にも受けのいいタイプを上を置いていたほうが、あとあと楽ですな。評議とは

違う要素かもしれませんが、俺なりの基準はそこなんです」

「ずいぶん南雲、お前性格悪くなったよなあ」

「成長したと言ってやってくださいよ」

「で、立村とどう関係あるんだ？」

「とぼけないでくださいよ、本条さん」

最後の一本を向いて一口かじった後で、俺は尋ねた。

「りっちゃんが女子受けしないこと、計算に入ってなかったなんてことはねえでしょうねえ。俺がもし、りっちゃんの先輩だったとしたら即、長の対象からはずしますよ」

あの頭脳明晰野郎本条里希・元評議委員長たる者がなぜ、そんな読み間違いをしたのか。

現・規律委員長たる南雲秋世は、そこんところをしっかりと問いただしたい。

俺の見る限り、立村は人の上に立ってどうたらこうたらするタイプでは、決してない。

本人がため息ついているのを無理やりつつこむのは哀れなので何も言わないけど、本当だったらすぐに一般生徒に下ろしてやって、自由にしてやるのが友情なんではないかとさえ思う。

あいつのいいところはもちろん知っている。人一倍、感情の多岐に敏感なこととか、そっとして欲しい時には全く触れないでくれるとことか、いやなことでも無言ですぐやってくれるとことか、ほんと、友だちとしたら最高のマブダチだ。こんな性格のいい奴、そうそういない。けど、それは「友だち」としてであって、組織の「長」としてではない。

立村のやさしさは、下から見上げれば「優柔不断」でしかないし、他人への思いやりも見方を変えれば「勝手に人を決めつける性格」とも取れる。人のいいところを見つけやすいところは単純に「自分に自信のないところの裏返し」かもしれないし、とにかく上に立つならそれは欠点でしかない。

なによりも、今俺が言った通り、女子受けの悪さ、これはどうしようもない。

一応、あいつにも彼女がいるのは重々承知の上で、発言していると受け止めてほしい。

水菜さんも彰子さんも口をそろえて話していたけど、はっきり言って立村は女子にもてるタイプでは決してない。ルックスだって決して悪くないし、若干背は低いかもしれないけれどもクラスメートに対して丁寧な対応をするところとかは「少女漫画の相手役」ならまだしも生身の中学生には求められないとこばかりだ。俺がこんな風におちゃらけたことしているのも、まじめで丁寧なことが必ずしも女子には受けない現実を知っているからだ。本条さんだってそのくらいよく理解しているだろうに。

「女子だって、学年の半分は男子だろうが」

全く説得力のない言葉を本条さんは吐き出した。バナナの皮を脇に置いて、わざわざつぶすように丸めた。あとで掃除、大変だったのに。

「女子殺しの本条さんともあろうお方が、ずいぶん言い方じゃあございませんか」

俺は大至急バナナを食い終わった後、ごみ箱へ捨てた。

「今の生徒会で実権握ってるのは、今の二年女子だし、評議委員会だって実のところ新井林を操

ってるのは例の彼女だってこと、ご存知でしょうが」

「例の彼女ったら、あの中国娘くるくる巻きの子か？」

よくご存知だ。

「そうですよ。繰り返すのも失礼かなあってとこで言いませんでしたがね。りっちゃんのお気に入りの子がE組まわしにされて、新井林の彼女が評議に入ってきましたよねえ。その後ですよ、二年男子が張り切りだしたんは。新井林をはじめみな、あの佐賀さんって子がうまくおだてあげて、この前の水鳥中学交流会では気持ちよく議事進めのお手伝いをして、しっかりホステス役も勤め上げたって話ですよ。学校祭の時も、他の三年女子がわしがわしがって風に自分を売り込もうとしていたのに、佐賀さんひとりしっかり新井林たち二年男子を応援する方に回って、いつのまにかパワー剤に化けていたってことも聞いとります」

「まさか公衆便所か」

「んなわけねえでしょう。あのラブラブ新井林が許すわけありません。まあ裏ではいろいろあると聞いてますが、それは人それぞれなんも言うことありません。けどとにかくですよ。今の評議委員内で一番力があるのはご存知三A・天羽の旦那と、佐賀さんと言っても過言じゃないと俺は思います。対外的には一応立村委員長だとしても、一般生徒、特に他の女子たちはみなね。りっちゃんには可哀想だけど、これが今の現実なんですよ」

「天羽か、まああいつは順当に行けば、委員長やって当然の奴だしな」

三Aのおちゃらけ天羽は、表向きへらへらしてお笑い担当タイプなんだけど、実は結構したたかで手回しが早い。立村の気付かないとこでさっさと準備を進めておいて、その後で手柄だけ「評議委員長へ」とまわす。本条さんの同期たちおよび先輩たちが、「絶対に天羽を次期委員長にしろ」と命令を下したにもかかわらず、「俺は立村を育てます。文句ありますか」と突っばねたのは伝説になっているけれども、それは本条さんひとりの突っ走り、ワンマンプレイに過ぎなかったと俺は断言したい。

「とにかく、俺はずっと不思議だったんですよ。私情をはさまないことで有名な本条さんが、どうしてりっちゃんにだけは甘かったのかなって。もちろんりっちゃんはいいい奴ですよ。だけど、本来だったら今の天羽と同じポジションにいるか、それとも」

ここまで言ったらやばいだろう。俺は言葉を飲み込んだ。

——委員会から外れて、静かに杉本さんの側で語り合っている方が、たぶんりっちゃんは楽しかったんじゃないかな。

「つまり、俺が読み方間違えたと言いたいのかよ、お前の返事によっては殴るぞ」

「いっすよ。殴られても。けど本条さんがそんなこと気付かないわけねえと俺は思ってますけどね」

今の立村はもう、ベルトの穴が三つくらい縮まっているんじゃないかと思うくらいげっそりしている。理科準備室の骸骨模型と並んでも区別つかないんじゃない……は大げさだけど。影で天羽や難波や更科たちが飛び回っているからまだ、粗を見せないですんでいるだけだ。もちろん立村の性格的やさしいところとか、人への思いやりとか、そういういいところは決してきれいじゃない

けども、それを敵方にまでまわしていいもんかと俺は思う。いざとなったらとことん叩きのめさないとまずいんじゃないかとも思う。その点、どうしようもない連中を処理するのが天羽たち影の軍団たちの仕事だ。もしかして立村はそのことに気付いていないのか、それとも気付かない振りをしているのか、その辺はわからない。ただ、立村なら情けをかけてしまってなあなあになってしまいそうなところを、天羽たちがあつという間に片付けているからこそ、今の評議委員会が成り立ってるんじゃないかと思わなくもない。

「りっちゃん、今、かなりしんどそうですよ。女子からは呼び捨てにされてばかにされてるし、清坂さんにはがんがん怒鳴られてるし、なんか唯一心の安らぎはE組に出かけて杉本さんからかっている時くらいですねえ。俺の見た感じだと」

「あいつ、杉本にまだからまってるのか」

あきれた風に本条先輩は舌打ちした。

「そんながん細胞みたいに言わないでくだせえよ、本条さん。俺も、正直、りっちゃんの女子趣味ってどんなもんかなって思いますけどね。でも、ほんと、杉本さん捕まえて話し掛ける時のりっちゃんって、安心しきってるって顔でにこにこしてますよ。不細工だとか無能だとかいろいろ罵られても、ちっともかっとなったりしないですしね。いつだったか『もう二度と先輩の顔なんて見たくありません、この世から消えてください』みたいなこと言われても、りっちゃんちっとも動ぜず、『じゃ、また明日くるからさ』これで終わりですよ。次の日この世から消えないでまたE組詣でしていたとこみると、ありゃあ相当ですね」

「ったく、あの馬鹿、自分で自分の首しめてどうするんだ！」

本条さんの手から、バナナの皮がぐんにやりとつぶされた。あーあ、どうする、掃除、知らないぞ。俺は見えないふりをした。

「南雲、いいか、頼んだぞ」

「なにをっすか」

「あの馬鹿に、いいかげん目を覚ませって言ってやってくれ」

「無理でしょう、今の状況じゃあ」

何慌ててるのかかなり目が釣り上がっている。身体をもぞもぞ掻き始めた。まだ夏の陰りが残っていて暑苦しいってか臭いってのに。

次に本条さんが口にしたのは、俺も信じ難い言葉だった。

「今あいつが杉本にのめり込んだら、もう普通の扱いしてもらえねえぞってな。なぐっちゃん、頼むよ、立村にいいかげん、普通の女子、教えてやってくれ」

「普通の女子？」

「誰でもいい、杉本以外の女子で、ロストチェリーボーイさせる以外、方法ねえかもしれん。いざとなったらそんな時は、お前の得意技で、頼む」

「俺そっちの趣味ないっすよ」

食うか？ と本条さんは、手付かずのカップラーメンをベッドの下から引っ張り出してきた。賞味期限、切れてないか？ ありがたく受け取るしかなかった。

本条さんが気が付いていないわけではないと思っていた。

——りっちゃんが本当に好きなのは、杉本さんだけなんだ。

同年代の男子連中はみな、目が節穴なのかあまり気が付いていないみたいだけど、俺からしたらもうばれれば良かった。修学旅行中にたったひとり、土産を買った相手が杉本さんだったこと。すでに全校生徒からほぼ嫌われていて、卒業後は公立高校へ進学すること確定していて、E組送りにされていて、たぶんこれ以上杉本さんにかかわったら一緒に嫌われるのが目に見えていて。

それでも、立村の態度は変わらなかった。

あいつの性格のよさ、そう言えば簡単だろう。

でも、それならどうして「彼女」の清坂さんに対しては、そうしてやれない。

もっともしなくちゃと思ってできることでもないってさ、俺はわかってるけどね。

だからだろうか。

早い段階で本条さんは杉本さんを、青大附中評議委員会から出すように命令した。

あれは評議委員会を守るため、大迷惑な下級生を追っ払うため、そう俺は解釈していた。

でも違ったのか。やはり、あれは。

——りっちゃんを守るためか。

立村がもし、何も委員会にかかわることなく、一般生徒のままでいたとしたら、ためらうことなく杉本さんの元へ走っただろう。委員会で知り合わなくても、きっとE組行きが下された段階で……恐らく立村も、数学の学習障がい問題でまわされている可能性が高いだろうし……杉本さんと出会っていたはずだ。どんな形であっても、立村と杉本さんは出会っていたはずだ。そして、同じように隣り合って、彼女の罵詈雑言を笑顔で受け止めていたはずだ。清坂さんの隣で懸命に「彼女に対する彼氏」の像を真似してげっそりするりっちゃんではなかったはずだ。

たぶん、そうしたら俺も立村と友だちになる機会もなかっただろう。

俺が立村に近づくことができたのは、「評議委員」「次期評議委員長」と「規律委員」「次期規律委員長」の肩書が重なり合ったからだと思う。そうでなければ、きっと立村は俺に対して、不必要な劣等感とかんぐりでもって、遠ざかっていただろう。単なる鬱陶しい奴と俺も見切っていただろうし、卒業するまで口を利く機会もなかったかもしれない。その点を考えれば、俺は立村を評議委員長として指名してくれた本条さんに感謝しなくてはならないだろう。

だけど、今の立村はあまりにも、惨めな姿をさらしている。

陰で「本当の評議委員長は、天羽先輩よね」とささやかれている現実。

「清坂さんどうして、あんな頭の悪い馬鹿男を彼氏にしたんだろう」と聞こえよがしに言われている事実。

杉本さんと一緒に歩いているたびに「やっぱり馬鹿は馬鹿同士、仲良くしてればいいのにな。いいかげん九九覚えなさいよっていいたいよね」……言っとくけど、りっちゃん、九九は覚えるよ、暗記力はクリアしているみたいだぞ……一年女子から言われているこの事実を、どう受け止めているんだろう。さすがにそこまで聞く気にはなれない。

もし立村が、普通の一般生徒だったら、「お互い役立たず同士、仲いいわね」と、同じクラ

スマート同士に噂されるだけですんだらう。目だたないで、そっと中庭で話をしたりして、気付かぬように姿を消すこともできただらう。

立村が評議委員長という、全校生徒誰にも顔を覚えられる立場にさえ、立たなければ。どこに隠れても「評議委員長」という肩書で馬鹿にされる扱いを受ける屈辱。

「わかりやした。弟分の面倒は俺が見るってことっすね」

俺は内心のざわめきを隠したままにぱっと答えた。

「いざとなったら、その当たりのレクチャーは任せてくださいな。ま、俺なりに、経験はつんできますしね。りっちゃんの教師としては最適なんではないかと。あ、ところで本条さん、最近ごぶさたなんですか？ ねえねえどうなんですかあ？」

互い気付かずに、エロ話に持ち込めれば、あとはそれでいい。

俺が気が付いただけ、それ以上は波立たせる気など、今はない。

到着して一番最後に降りた。しわだらけのスカートを指で伸ばしながら彰子ちゃんの背中に隠れてホテルまで歩いた。彰子ちゃんの片手には、おまる代わりに使ってしまったビニールバックがぶら下がっていた。隠そうとしない。彰子ちゃんがバックを持ったまま、

「加奈子ちゃん、誰にも気付かれないようにするからね、大丈夫だからね」

励ますように声をかけてくれた。だったら、そのバックを隠してほしかった。ホテルの窓辺から手を振るふたりの男子に手を振り返そうとするとする彰子ちゃんの側から離れたかった。

——見ないで。

きっと私がバスの中でしてしまったことを気付かれはしないだろう。証拠は彰子ちゃんのビニールバックにしか残っていなかった。せめてすぐ隠してほしかった。

「ごめんなさい、彰子ちゃん」

「ううん、大丈夫。けどね、みんなトイレが間に合ってよかったね！これからクラスミーティングあるけど、加奈子ちゃんのは部屋で少し休んでいた方がいいよ。車に寄って気分悪いんだって先生にもそう言っとくからね。それに男子たちも気付かなかったみたいだし」

ちゃぽちゃぽと水音のするビニールバックごと彰子ちゃんがトイレへ持っていった。

男子たちが見てなかったわけがない。

バスの中で男子と女子が移動した時、私のほうにちらちらと視線向けていたのを覚えている。身体をくねらせて、悲鳴をあげそうだった私は、きっと男子たちからみたらみっともなく、汚くて、馬鹿に見えただろう。

一年前、清坂さんに嫌われてしまった事件がきっかけで、私は男子たちからも軽蔑されるようになったらしい。きっとみんな、いい気味だと笑うに違いない。

ただ救いなのはそのきっかけとなった男子がバスに乗り込んでいなかったことだった。

確か、風邪を引いて熱を出し、ずっとホテルで寝ていると先生が話していた。

女子としての誇りを奪われてしまうようなあの出来事を見られずにすんだ。

弱みを握られないですんだから。

私はずっと部屋に籠ることにした。彰子ちゃんのお墨付きも得たし、男子たちの顔を見る勇気もなかった。無事だった女子たちは平気な顔して、

「杉浦さん、よかったね。間に合って！」

そう喜んでくれるだろう。でも、実質あのバスの中で、女子として絶対にしたくないことをしてしまったのは本当のことだった。してない子たちに、何も言ってほしくなかった。四つん這いになって、スカートを持ち上げて、その後の瞬間を経験していない子たちには、私の敗北感なんてきっとわからない。

服を脱いでシャワーを浴び、私はベッドの中にもぐりこんだ。

ノックの音が、二回して目が覚めた。時計はもう一時間近く経っていた。とっくの昔にクラスミーティングは終わっているはずだった。同室の彰子ちゃんはまだ戻ってきていない。

「加奈子ちゃん、古川だけど入っていい？」

古川こずえちゃんだった。

こずえちゃんはいつもエッチな話ばかりして男子たちを驚かせているけど、本当はまっすぐですごくいい子だった。私が清坂さんに嫌われてしまった後も、いまだに友だちでいてくれる。はっきり言うけど、それでいてやさしい。

私は戸を開けた。「ばあ」と両手を広げて手を振りながら入ってきたこずえちゃんに、私はこっくり頷いた。

「辛かったよねえ、もうあれね、美里にきっちりとお灸据えておいたからあんしんしてよね」

「お灸？」

清坂さんの言葉にお灸なんて据える必要なんてないのに。

こずえちゃんはベッドの上に座り込み、私の隣にぺたっとくっついた。耳元で小さく、「あーあ、私もね、生まれて初めてよねえ、あやうく水害注意報発令になっちゃいそうだったんだよね。かろうじて美里のバックで救われたわよねえ」

「私も、彰子ちゃんの」

「彰子ちゃんっていい子だよねえ。だってあのバックってさ、言っちゃあなんだけど南雲から貰ったものでしょうが」

「そうなの？」

南雲くんは彰子ちゃんの彼氏だった。

「すごく勇気がいったと思うよ。彰子ちゃん落ち着いてたけどねえ」

彰子ちゃんに酷いこと言ったかもしれない。私はしばらくうつむいた。あんなに一生懸命「大丈夫、大丈夫」って励ましてくれた彰子ちゃんに対して、私って、八つ当たりみたいなことばかりしていた。ごめんなさいって言いたい。

こずえちゃんは私の耳元でささやいた。

「私もねえ、ちょっと調子こきすぎて、パフェ食べたのがまずかったのかなあ。でもまあいいよね」

声に凄みを持たせて「大！」と続け、

「の、方でなくてよかったよねえ。とにかくみんなうちの男子たちは紳士だしね。彰子ちゃんじゃないけど、まあいっかってことにしようかな。でもさ、私も正直言って、やっぱり恥ずかしいよねえ。してない人にはわからないよほんっと」

「うん」

「他の女子たちもね、なんかみんな必死にがまんしてたらしいって彰子ちゃんが言ってたよ。だから、お互い様ってことよねえ、でもさー」

こずえちゃんは照れ隠しっぽく髪の毛をつまみながら、

「加奈子ちゃん、今の彼氏とはどこまで行ってる？」

どきっとした。

こずえちゃんの大好きな人は、クラスの羽飛くんのはずだった。まだ付き合っていないみたい。清坂さんの幼馴染だし、私からすると羽飛くんはきっと清坂さんのことが好きなんだと思う。ただ、清坂さんが立村くと付き合っているからしかたなくってところなんだろう。私もそれは本当にそう思う。

「まだよ」

「そっか、もしかしたらそろそろ、経験かなあって。だってさ、加奈子ちゃん最近すっごくぼいんになってきてるよね。もしかして開発されたのかなって思ってね」

私は慌てて胸を押さえた。思い当たる節がある。

小さな声で答えた。

「すごく痛いんでしょう、怖いから、いや」

初めての時を思い出して付け加えた。足の付け根がやけどしたってくらいに、裂けそうなほどだった。

「愛してたら耐えられるてみんな言ってるよ」

中学一年の冬にはじめてして、それ以来月に一回ずつだけど、ちょっといいなって思うようになったのは夏休み前だった。

「やっぱり、愛よね、それがあれば捧げちゃうって気になっちゃうらしいよ。私もああ、早く経験してみたいなあ。すっごく気持ちいいって話だし。でもやっぱり好きな奴とだよねえ、テクニックはともかく、最初は好きな人に捧げたいって気、するよね」

——そんなにもいいものじゃないのに。

こずえちゃんが自分の部屋に帰ってから私は、もう一度ベッドの中にもぐりこんだ。

夕食までどうしても顔を出したくない。本当だったら早引きしたい。

2

——けど、どうして。

なぜ清坂さんは私をかばってくれようとしたのだろう。

こずえちゃんも言葉に出さなかったけれども、私と清坂さんがある時期をきっかけに、疎遠になったことを知っているはずだ。

一年前、私と清坂さんとは仲良しだった。一緒の班にいて、古川こずえちゃんと三人でよく集まっておしゃべりしていた。ふたりが元気いっぱい語る姿に合わせているのが私は一番好きだった。いつか、親友になれたらいいなって思っていた。

中学一年冬、私が心に決めたひとつの出来事がきっかけで、清坂さんは私と絶交した。

本当は清坂さんのためだと思っていた。私にとって大切な人のためにそうしかっただけ。でも、わかってもらえなかった。

あれから二年の夏休みにいたるまで、私は仲直りをあきらめざるを得なかった。もうあきらめていたのに。クラス評議委員の清坂さんが、もう一度友だちになりたかったのに。

その清坂さんが、私のために、手を差し伸べようとしてくれた。

バスの中、清坂さんの顔を見上げた時のことを、忘れはしない。

先頭で、表情は読み取れない。まじめな声、まじめな目、すべてで訴えているのが伝わってきた。私のこと本当は嫌いだと思っているはずなのに、ざまあみろって思ってもちっともおかしくないのに、評議委員として精一杯に。



「今、話を聞いて分かると思うんですけど、ホテルまでは橋を降りてからあと三十分以上かかるそうです。いつ橋から降りられるかすらわからない状況です。途中休憩が入ったとしたらまだかかります。でも、女子の中には今、もうトイレが間に合わないって人が何人かいて困っているんです。降りて橋を降りることも考えたけど、それも駄目みたい。だから、はっきり言っちゃうけど。バスの中で、じゃあっと、しちゃう人が絶対いると思うんです」

清坂さんの声が響いた。男子たちに、一生懸命メッセージを送っている。

必死に身体をくねらせながら、私は清坂さんの言葉を聞いていた。

「私、五年の時に、間に合わなかったことがあって、教室でしちゃったことがあるの。嘘じゃないよ、貴史にきけばほんとだってわかるから。私は思いっきり、分かってるつもり。それで、みんな、きいてほしいんだけど。男子のみんなにお願いした通り、今女子の方を誰も振り向かないって約束してくれてます。これから降りて、かえるまでずっと。絶対約束って。言ってくれます。だから、もう、もうだめって思ったら、その場でしいとしちゃって、いいから。そして隣の子がそうなったら、その場で、気付かない振りをしてあげてください。お願いします」

——そんな、言いたくなかったこと、清坂さん、私たちの前で。男子がいるのに。



そういう人だ、清坂さんはまっすぐな人。嘘は許さない。いんちきも陰口も大嫌い。

だから、私のこと、嫌いになったのだろう。

どんな理由があっても、陰でこそこそとしようとする私を、憎んでしまったのだろう。

その理由をお願いだから理解してほしかったというのは、私のわがままだろうか。

清坂さんが立村くん的一生懸命アプローチしていて、先月付き合い始めたと聞いた。

一言も口を利かない関係となってしまった私と清坂さんとは、本当に縁が切れてしまったんだなって、寂しさが募った。

私は清坂さんのために思って、本当のことを話したのに、と。

3

立村くんには、被害者ぶる資格なんてない。

浜野くんがが精一杯、仲間に入れてあげようとしたのに、逃げるくせに。自分が可哀想だ、いじめられたと勝手に思い込むいじけた性格なんて、最低だ。

ひとりの部活生命を奪う寸前のことをした過去を隠し、いまだに罰せられない理由が私にはわからない。彼は、とっくの昔に立村くんを許しているという。お互い一対一の決闘だっただけだし、すっきりしているって言っている。でも、そのせいで彼はいまだにサッカー一部で希望のポジションにつけず、このままだとずっとベンチ入りできないかもしれない。時々足が痛み、ミスしてしまう、悔しいって話していた。

——それに、あれする時だって、痛がってたし。

する時も、足を絡めるのが痛い、そう言っていた。

あの日の後遺症だと浜野くんは決して認めないから、私はしかたなく黙っている。

浜野くんは、卒業式の決闘ををきっかけにすべてを失ってしまった。

「余計なこと言うな！」と浜野くんは怒るけど、私は黙っていられない。彼がなんと言おうとも、私は青大附中で、自分の正しいと思うことをやり遂げたい。

次期評議委員長として扱われ、クラスの男子たちからも信頼をもたれている立村くん。青大附中に来てからの立村くんは、あっという間に自分の地位を築き上げ、高い評価を得ている。それを責めはしないけどただ筋を通して、浜野くん「申し訳ない」そう頭を下げてほしい。私の求めていることは、ただそれだけだ。ほんのひとことだけなのに立村くんにとってはそんなに難しいことなのだろうか。

勝手にいじめられたと思い込み、周囲のやさしい気持ちをはねつけて、ひとりで逆恨みして、結果周囲の人たちを傷つけた立村くんなんか、決して清坂さんには似合わない。

友だちに戻ってほしいなんて言わない。嫌われたままでもいい。

私は清坂さんを嫌いになんてなれない。だけど。

——私のことを、バスの中で守ろうとしてくれた清坂さん。

——清坂さん自身の過去まで打ち明けて、私をかばおうとしてくれたんだもの。

——あんなにりりしい清坂さんには、立村くんのような最低の男子なんて絶対に合わない。

早く気付かせたい。あと一年半同じクラスで過ごす間に、どうか、わかってください、そう伝えたい。

台風一過、土曜日の放課後、私は三年評議三人と近所の神社で待ち合わせすることにした。女子たちに怪しまれず、男子たちもめったに足を踏み入れない場所で、かつ個室でないところ。となると少し離れた場所の神社がベスト。そう私は踏んだ。天羽くんも、難波くんも、更科くんも無条件で賛成してくれた。

空は青く、ほんの少しだけ雲が綿をやぶいたみたいに張り付いていた。

まずは天羽くんが買い込んでくれたコロッケを一個ずつ口に放り込んだ。女子同士でこういうことすると「下品！」と鼻をひくつかせて馬鹿にされるのだけど、この面子だと何にも考えないですむ。アイスクリームなんてお上品なものを食べるよりも、腹持ちのいいものの方が正直なところ私は嬉しい。さくさくしておいしい。

一通り食べ終わり、

「天羽くん、どうもね」

五十円ずつコロッケ代を天羽くんに渡した。

「ところで、今日のお題は、言うまでもなくわかってるよな」

口を手の甲でこすりながら難波くんが、松の大木にもたれて両腕を組んだ。にこりもしない。側で更科くんがまだ残りのコロッケを握り締めながら、

「立村、とうとうやっちゃったよなあ」

「あいつに釘をさしておいたのが、かえって裏目に出たってやつだなあ」

天羽くんは燈籠に肩を組むような格好で抱きつき、大きなため息をついた。

「もうすんでしまったことはしょうがないわよ。とにかく、これからどうするかが問題ってとこね。天羽くん、どう思う？」

「どうってなあ」

みんなが頭を抱えているのは、つい昨日、評議委員長の立村くんが生徒会室前で引き起こしたとんだトラブルの一件だった。私はたまたま生徒会長の藤沖くんを通じて事実関係だけを聞いたただけだけど、他の男子たちはもっと前後の状況を知っている様子だった。

「自分の立場を考えて、もう少し自制しろってあれだけ言ったのになあ」

「しょうがないよ、愛は無敵だし」

「選べよもう少し」

苦々しげに難波くんが舌打ちしていた。そうなのだ、相手がもし、今の彼女である美里だったとか、もっと男子受けのする子だとしたらそれほど問題も起こらなかつたらう。

——あの、杉本さんでなければ。

「とにかくだ、これから最優先で考えるべき問題は、後期に立村くんが評議委員長として再任されるかどうかのことだけど、正直どう思う？」

私としてはまず、そのあたりから確認したかった。正直、これから先立村くんと美里がどうい

う関係になるかとかそんなのはどうでもいい。立村くんにとって美里との関係は「お付き合い」は義理以外の何者でもない、私は重々承知している。むしろそういうお付き合いよりも、評議委員会という場所での繋がりの方がずっと濃い関係だと思う。

「まず順調に行けば、問題ないはずだな」

「でも新井林が変なこと言い出したってことだろ？」

「そうね、藤沖くんが言ってたけど、あの現場で新井林くんは出馬表明したらしいわよ。熱いわね。けどどうするんだろう。後期はバスケット部一本でやるとか言ってなかった？」

「立村の前ではそう言ってたらしいが、事情が変わったからな」

難波くんはクールに呟いた。

「まさか佐賀が会長になっちゃうとは、あいつも思ってなかっただろうしな」

「ああ、そこまでは読めなかったぜ」

天羽くんも含めて頷きあう。

「二年男子連中のチェックは欠かさずやっていたつもりだったんだが、女子まではなあ」

——想像できなかったわけじゃないけど。

言いたいけど黙っていた。知っていたとしてもそれを抑えられなかったのは私の力が足りなかったから。私の読みが甘かったから。立村くんのことを美里よりも理解できていると信じた、傲慢さを悔いるだけ。

秋風がすうっと胸に突き刺さる。さっき食べたコロッケが胃にもたれたみたいだ。あまりいい油使っていないのかな。

私は天羽くん、難波くん、更科くんの前で、一晩考えた案を披露することにした。

「後期最初の評議委員会でまず決が採られるわけだけど、新井林くんの立候補した場合は無条件でまず、二年の票が流れるわよね」

「そうかあ？」

天羽くんが首をひねったまま異議を唱えている。最後まで聞いてもらわないと私も困る。難波くん、更科くんは妙な顔してあごに指を当てて考え込んでいる。

「あとは一年生の票なんだけど、今年の流れでいくと同じ評議委員が再選されてくるかどうかののが私の読めないところなの。三年はどうせあと半年だし、面倒なことは今までやってる奴に押し付けられればいいって感じだろうけど、ほら、評議委員会が生徒会に『大政奉還』している真っ最中じゃないの。もしかしたら全く評議委員事情に疎い生徒が選出されてくる恐れもあるのよ。そういう人がね、立村くんに入れるかどうか疑問ってところなのよ」

「全くだ。しかもあんなへまやらかしやがって！」

難波くんは私に親指をついと向け、うんうん頷いた。

「三年全員がまず立村くんに入票入れたとして……どうかな。いや、違うな。立村くん自身はたぶん対立候補が出たらそっちに入れる性格だから、たぶん七票確保。あとは一年生の票が立村くんか新井林くんか、によってだよな」

「五分五分ってところか」

「それも、危ないかもしれない」

私は一呼吸おいた後、

「天羽くん、ちょっと起立」

「なんだあ？」

とぼけた声出して、天羽くんが敬礼しながら立ち上がる。

「評議委員長に立候補してもらえないかな」

露骨にぶっと吹かなくたっていいじゃない。いかにも笑いを取るためのこけ方までして。天羽くんは相当驚いたと思うけど、でもあんなに背中をべたっと床につけて、

「う、撃たれた……！」

と大の字になることはないじゃないの。あそこまでやると、受けるどころか、みんな引くのに。

「トドさん、その心をまずは一献」

正座して、落語家の真似でもするように、片手で「どうぞ」と指す天羽くん。

しょうがないので私は自分なりの説明をさせてもらうことにした。

「まず三人立候補と言う形になると、票が三分割されるわけ。今まで私も忘れていたんだけど、三人以上立候補者が出た場合、まず予備投票を行うことになるわよね」

「はるかかなたの記憶、んなのあったか」

とぼけた顔して三人そっぽ向く。単に忘れているだけ。

「結城先輩が選出された時がそうだったらしいって聞いてるけどね。そうだったよね、難波くん」

二年上の結城先輩と付き合いがあるのは、天羽くんよりも難波くんの方だ。

「日本少女宮」の大ファン同士、先輩後輩というよりも「アイドルマニア」としてのお付き合いが続いているはずだ。この前もこっそりと最新写真集をかばんに持ってきていたような気がする。先生に見つかったら校則違反で即、取り上げられるだろうから、私はもちろん言わないでおいた。

「ああ、そういう記憶がかすかにあるなあ」

それ以上は突っ込まない。私はさらに続けた。

「最終決戦でまず三年生ふたりの対決に持っていくわけよ。まずは新井林くんを落とす。その段階で、あとは天羽くんと立村くんになる。そこまで行けばあとは問題ないわよ。天羽くんは今まで殆ど顔を出したことの無いダークホース、立村くんは前期評議委員長。この対決だったら、やはり軍配は立村くんじゃないかなと私は思うんだけどね」

「異議あり」

鼻の先をこすりながら異議を唱えるのは難波くんだった。

「新井林を落とすのは納得だ。いくらなんでもな。だが、立村と天羽の対決は危険だ。トドさんは立村びいきだから甘く見ているかもしれんが」

「どういうこと？」

この三人はみな、私が立村くんを三年近く片思いしていることを知っている。

すでにその心を伝えたことも。

「立村のへまを尻拭いしているのは天羽だぞ」

「高いご評価、どうもありがとごんす」

おどける天羽くんをぎろっとにらみ、難波くんはめがねを掛け直した。松の木から離れて、天羽くんの周りをぐるっと一回りし、今度は燈籠に片手をかけた。

「もしもだ、立村と天羽との対決となった場合、票がどう割れるかを計算してみるとだ」

難波くんはポケットから手帳を取り出し、一枚破いて目の前に差し出した。

「仮に三年全員が立村に入れたとしてだ。六票。天羽は自分に入れるだろうから、一票、立村も天羽に入れるから、またそっちに一票。三年の票は六対二となる」

「そうね、そうなるわよね」

「次にだ」

難波くん、さすがにホームズの面目を保つ。

「二年を考えるとだ。新井林が落とされた後は浮動票だな。立村も二年連中に英語のリーダー訳を片付けたりして恩を売っているし、男子票を確保できる可能性はないわけではない。だがな、問題は女子だ。女子は最初からあいつのこと、気持ち悪がってるのが目に見えてるだろ」

「となると、男子立村くんを四票、女子天羽くんを四票ってことね。現在のところ十対六」

「そうだ、あとは一年だが、もし立村を直接知っている前期の持ち上がりだったらまだしも、全く知らん奴らばっかだとしたらどうなる？ まだあの騒ぎが記憶に新しい時期にだ、投票する時どうい奴に入れるかってことを考えると難しいぞ」

「でも、立村くんが一応、前期評議委員長として司会するでしょ。一年生たってもう半年経ってるし、やはり面倒だってことで目立ってる人に投票するもんじゃないの」

「トドさんあんた、立村の現実を見てくれよ」

B組にて三年間相棒を勤めさせていただいた難波くん。ビジネスパートナーとしては完璧なんだけどな。ゆいちゃんにも私に対するのと同じようなビジネスライクなお付き合いすればトラブル起こさないですむのに。

「立村は生徒会室前で飛んだ三枚目を演じたというわけだ。そうなったらどうなる？ 噂はもう下級生の間にも広まっている。もしも立村のことを直接知っている奴だったら、納得投票するかもしれん。だが、みな噂でしか知らない大ぼけ評議委員長を再選したいと、ふつうは思わないだろう」

「となると、一年の票が半分ずつと考えて、十対十四」

難波くんの言い分は正しい。私は素直に帽子を脱いだ。

「そうね、接戦になる可能性はあるわよね」

「あのな、天羽、お前はどうかん？」

とぼけた声で更科くんが前かがみになりながら尋ねた。

「お前、出る気、あるの」

「やらねばならない時にはやらないとまずいだろ」

話は受け入れてもらえたようだった。ただ難波くんの投票シュミレーション。さすがホームズ。鋭いところを突いている。

「それならまずは、どうするかってところだけど。事前工作が必要ね」

「選挙運動はごめんだぞ」

「そんな見え見えのことしたら、立村くんが傷つくに決まってるじゃない」

「いや、すねるだな」

思わず笑った。納得、うんうん。

「一年生評議がどう出るかにもよるんだけど、こればかりはぎりぎりにならないとわからないわね。そうだ、難波くん、君の非常に優れた筆跡鑑定能力を信頼して、開票係に回ってもらおうというのはどうかな」

その場で思いついた案を、私は投げかけた。褒められて嬉しくない奴なんていない。難波くんがきょとっとしたまま、私の顔を見た。

「ホームズなんだもの、そのくらいは慣れてるわよね」

「まあ、俺なりにな」

難波くんの強みは分析力だ。今までいろんな出来事が起きたけれども、ひとつの事柄を分析して次につなげるだけならば、難波くんに評議委員長やらせてもいいと思う。さすがにそこまで勧められないのは、難波くんの言い方が一步間違えると女子を敵に回してしまいがちだからだ。ゆいちゃんに対しての熱いアプローチ もしかり、それが逆回転してしまう。

更科くんはどちらかというと、可愛いと思われやすい。実はこの人もずいぶん切れるんだけど、それを出不さないようにしたいらしいのであまり私は強く押し出す気がない。

となると、やはりベストは天羽くんだろう。

リーダーシップと男子女子受け、すべて○。

唯一気がかりなのは、例の小春ちゃんの事件がらみで、女子から総すかん買っていることだけだ。もっとももう半年以上経ったことだし、近江さんも女子たちから異様な人気を博している。小春ちゃんの株ががたと落ちてしまった分、天羽くんの行動もやむにやまれぬものと解釈されている。ということで、本来ならば、確かに天羽くんがベスト。

「難波くんが開票作業を進めることによって、誰が誰派か見抜かれてしまうんだってことを下級生たちに印象付けさせるのが目的よ。立村くん派か天羽くん派か。それとも新井林くん派か。そうね。でもここであまり票差が開いてしまうと怪しまれるから、難波くんと更科くんの票を浮動票にするのはどう？ 白紙で出して、その上でまずいと判断した場合に、どちらかに入れる、そうすればさほど票差も広がらないじゃない。自分の書いた用紙はわかるだろうし、もしあれだったらふたり、白紙で投票しちゃえばいいのよ。難波くんがチェックして、現段階でまずいと思われるところに押し込むっていうのは？」

「トドさん、よくもまあどうやって思いついた」

「スパイ小説よ。今度勉強用に貸してあげようか」

「ぜひ」

難波くんとのやり取りを、天羽くんは黙って聞いていた。両腕を組んだまま、ずいぶんシリアスな顔して悩んでいるようすだった。

しばらく話し合いをした結果、以下の結論に達した。

- ・後期評議委員会の際、立候補者が立村くんと新井林くんとなった場合、すぐに天羽くんが挙手して第三の男となる。
- ・その際、「立候補者は開票作業ができない」というのを逆手に取り、難波くんと更科くんが開票作業を行う。その際、票の状況を見ながら、立村くんと天羽くんの票が開きすぎないように票操作を行うこと。つまりふたりの票は白紙にしておき、もし票が開きそうになったら、不利な立場の者（おそらく立村くんの可能性あり）にまわす。
- ・決戦投票は運に任せる。

なんだか安易な内容だけど、私なりになかなかいい案だと思うのだけど、どうだろう。

「まあなあ、これもひとつの方法だとは思うがな、俺としては立村を評議委員長のままにしたいって気持ちが強いな、これが」

「それはなんで」

更科くんが尋ねた。やっとコロッケを食べ終えたらしく、ポケットに包み紙を押し込んでいる

。「だってなあ、考えてみろよ。この三年間、途中で評議委員長が変わったなんて例、ねえだろ。評議だけじゃねえぞ、規律も、体育も、音楽もだ」

「まあね、それはあるね。特に立村は本条先輩が命賭けて育てたからなあ」

私は思わず受けて笑った。そうなんだ、立村くんを推しつづけた一年上の先輩、本条先輩。

この人はたぶん、青大附中の評議委員長として史上最高の指揮官だったと思う。

「あの人が推したから、ってのはあるよね」

「そういうところ」

へらへら頭を搔く天羽くんと更科くんを眺めながら、私は隣で苦虫噛み潰した顔している難波くんを見やった。なんだか気になるのはそのシビアな視線だ。何か、隠しているような気がする。私は伊達にB組で三年間相棒役を務めてきたわけではない。

「しかし、この出来事にプラス面はねえのか？」

「あるよ」

私は天羽くんの顔を見ながら、片耳で難波くんの様子を伺いつつ受けた。

「おかげで美里がゆいちゃんにべたべたしなくなったでしょ。これは大きいよ」

「なんと」

もちろんこの言葉、すべて難波くんに向けて言っているものだった。

「私ね、一番心配していたのがそこだったのよ」

このあたりは女子しかわからない感情だし、少しはでしゃばってもいいだろう。

「ゆいちゃんが青大附中から出て行くことに決まって、私も心配だったわけよ。美里がいきなりゆいちゃんを青大附中に残しておいてくださいって運動起こすんじゃないかってね」

「ああ、それはな、すでに俺が別ルートで抑えてある」

知っている。確か修学旅行の時、天羽くんと更科くんが羽飛くんにその旨頼み込み、いざという時は美里を抑えるようにとお願いしたらしいことを。

「でもね、今回立村くんの事件が起こったことで、美里の意識はそっちに行っちゃってるわけよ。さらに言うなら菱本先生のおめでた結婚もそうでしょ」

「トドさん、それは誤解を招く表現だと思う。菱本先生の腹がでかくなってるってところなんぞ、俺は想像したくないぞ」

ようやく難波くんが、にこりともせずにはいた。

「ごめんごめん。出来ちゃった結婚ね。とにかく美里は彼氏と担任のことで頭が一杯、ゆいちゃんのことなんてどうでもよくなっちゃったってわけよ。その点がいいのか悪いのかなんとも言えないけど、ゆいちゃんは今のところ静かにしてるわよね」

「もっともだ。その点は問題ないな」

難波くんの答えはない。私はさっきまで難波くんが寄りかかっていた松の木にもたれた。

「だから、立村くんサイドからするととんでもないことだけど、ゆいちゃんのことを考えると特に問題がないってことになるんじゃないかな。まあ、なんとも言えないけどね」

しばらく評議委員会の今後について語り合った後、私たちは解散した。

あまり集団で語っていると青大附中の生徒たちに見咎められる恐れがある。

特に私は、あまり男子と喋っているのを見られたくはない。

私の顔のおかげで不必要なジェラシーを受けずにすむけれども、なにせ男子三年評議は結構下級生から人気があるのも事実。「あのブスが、たまたま評議委員なだけで」と陰口叩かれるのはできれば避けたい。

あの場であえてゆいちゃんのことを出したのは、事件のプラス面を見出すためだけではなく、

立村くんのことについては、私も運に任せるしかないと思っっている。

決選投票に持ち込めばたぶん、現職の立村くんが勝つだろうと読んだ甘さを難波くんに突かれたのは痛かった。言われた通り、私は立村くんの評価を高くしすぎているのだろう。どうしても女子の甘さが抜けないのが悔しいけれど、しかたない。だって私は、立村くん以上にあの感情を感じる男子が誰もいないのだから。

できれば前期の持ち上がりで一、二年の評議が決まってくれば一番いいのだけでも。

そうすれば少しは可能性として立村くんへの票も増えるだろう。

——でも、難波くんはどう出るか。

天羽くんは立村くんを評議委員長に推したがっている。口ではそう言っている。だけど、過去において本条先輩以外の先輩たちが、なんとしても天羽くんを委員長にしようとしていた事実は認めなくてはならない。立村くんが委員長になれたのは、絶対的権力を誇った本条先輩の圧力だったことも、私には見えている。

そしておそらく、現三年生たちも、どこかで感じている。

——本当に、評議委員長にふさわしいのは、天羽くんなんだ。

口に出してはいけないと、心の中で封印していた言葉が、今あふれようとしている。

——あふれさせてはいけない。

なんとかして難波くん、立村くんが評議委員長であることのメリットを伝えなくてはならない。立村くんの彼女である美里が、余計なことをしないでくれればゆいちゃんはこれ以上不必要に傷つかないですむ、この事実を伝えたい。

——これで難波くんもできれば動かないでくれるといいんだけどな。

暇があるとゆいちゃんのいる教室へ向かい、

「いいかげんなんとか言えよ、逃げやがって」

とか罵りながら、以前のアマゾネス・ゆいちゃんを引っ張り出そうとする難波くんへのメッセージだ。

——伝わっただろうか。賭けだ。

「あれ？ 新井林くん、今日は練習ないの？」

——いつもの彼女とも一緒にないの？

新井林くんがネクタイを少したるんとさせ、ジャージの前を開けたまま体育館から出てきた。なんだか変。何時か確認してみたけど、まだ四時になってない。いつもだったら新井林くんは、バスケット部キャプテンとしてメンバーとシュート練習かなにかしているはずだ。ついでに、誰かの視線もしっかり受け止めて。

私を見つけると、なぜか走って近づいてきた。びっくり。

「今日は人数があつまらねえから、です。それよか清坂先輩、これからどこいくんですか」

誰と、とは聞かれなかった。

誰かさんよりずっとかしこい。

「うちに帰ろうかなとか、それかどっかによっていこうかなとか、どうせ今日、ひとりだしね」

こずえにはさっき「一緒に帰る？ それとも図書館寄ってく？」って誘われたけど、なんかそんな気持ちになれなかった。もう評議委員長選挙も終わり、本当だったら立村くんの手伝いをもっとしなちゃって心積もりしていたのに、全部予定が狂ってしまったなんて、まかりまちがっても新井林くんには言えない。青大 附属では、どの委員長の彼女になっても、こき使われるのが宿命だって先輩たちにも言われていた。だから、ちゃんと覚悟していたのに。うちの親たちにも、「三年後期は、委員会、すごく忙しいんだから、帰り遅くなるんだからね！」ってちゃんと説明しておいたのに。なんでこんなことになっちゃうんだろう。ため息出てきてしまう。

「なんか、いきなり、ひまになっちゃったから、することなくて」

評議委員長の彼女ではなくなり、単なる評議委員。もちろん手伝えることがないわけじゃない。けど、いつのまにか琴音ちゃんが片付けてしまっている。もっとも新・評議委員長の天羽くんはちっとも近江さんに命令しようとはしていない。近江さんも「まあね、勝手にすればって感じ。清坂さん、さっさとどっかいきましょ」ってクールなまんま。偉いなって思う。

新井林くんは少し反り返った風に私を見つめていた。にこっともしない。そっか、一応先輩だもんね。私のことを「先輩」って呼んでくれてるって、それもすごいことかもしれない。いきなり顎で玄関を指すようなそぶりをした。

「これからどっか行きませんか」

「どこって？」

「あの、その辺」

あれ？ 新井林くん妙に歯切れ悪い言い方するんだけど。なんか感じが変。

「いいけど、彼女は？ 今日はひとりなの？」

「あいつは生徒会室にこもりきりだし、しゃあねえし」

ああそうか。佐賀さんは生徒会長なんだもんね。私とは反対の立場か。

「次期評議委員長」というのは、まだただの「評議委員」と変わらないけど、彼女が生徒会長

になっちゃった以上「生徒会長の彼氏」って言われるのは、新井林くんの性格を考えるとちょっと、いやよね。

立場、立場、立場。なんか、わかんない。

「じゃあ、どっかに」

私は無理やりにつこりして、勢い良く生徒玄関へ向かった。自転車で待ち合わせ、黙って新井林くんの後ろについていった。すれ違った三年の女子たちがかなりいたので、もしかしたら立村くんについてくる人いるかもしれない。いいんだ。言いつければ。どうせ立村くんは私とつきあいやめたがってるんだもんね。勝手にするもんね。

新井林くんが連れて行ってくれたのは、市民体育館隣の公園だった。新井林くんらしいな、って思った。

「しょっちゅう、来てるんでしょ」

「今の時期だと、練習試合がしょっちゅうなんです」

レモンサイダーの缶を一本持ってきてくれた。指先がだいぶかさついているんだなって、受けとった時に気がついた。ばりばり指の皮がむけてきそう。缶を握り締めたまま、「ありがと」とまずはお礼を伝えておいた。

きっとあの彼女にも、同じようにしているんだろうな。新井林くん。

そっと新井林くんの様子を伺った。いかにも男子っぽい感じの濃い匂いがする。むかむかくるほどではない。隣り合ったことなんてあまりなかったからかな、ぐんと私よりも頭ひとつくらい背が伸びているんじゃないだろうか。貴史くらいだろうか。運動部に入っているとやっぱり違うのかな。さっき教室で「じゃあ、また後で作戦会議だな」て言い残して帰っていった貴史のことを思い出した。新井林くんだったことをつい忘れてしまったのはそのせいだ。

「これから、どうするかってことよね、どうしようか」

身体から発する熱気が、貴史とは全然違うって気が付いたのは言った後だった。

後輩に、しかも男子に、思いっきり普段っぽいこと呟いてしまった。

新井林くんは全然気が付かないようすで、あっさりと返してきた。

「評議委員会のことっすか」

それしかないじゃない。私と新井林くんの会話。私はすぐに合わせた。もう面倒なので、先輩っぽく振舞うのはやめた。そのほうが、新井林くんと喋る時は楽かもしれない。

「もう、男子たちに全部お任せって感じよね」

「けど、天羽先輩だったら」

現評議委員長为天羽くんには抵抗なく「先輩」をつけるくせに、立村くんには「さん」付けするのが新井林くん流だ。このあたりからして違う。

「そうね、あの昼行灯に比べたら、ずっとましよね」

「俺はやりづらいです」

「あっそっか」

思わず吹き出しそうになる。そうなのだ。天羽くんは見た目おちゃらけ野郎に見えるけど、言

う時は遠慮なく言う。男子たちの実質的リーダーは天羽くんだと、私も思っていたし、この前の評議委員長選挙で他の人たちもそう信じていたってことが証明されてしまっている。ただ、次期評議委員長として立村くん指名されていた新井林くんにとっては、やりづらいだろう。もともと迫力がぜんぜん違うもの。この調子だと喧嘩、たくさんしそう。

「立村さんは、今どうしてるんですか」

いきなり聞かれたくないことを聞かれてしまった。

「さあ。英語科進学するにあたって、前もって出されている難しい英語の授業受けてるみたいよ。あの人の英語能力ならね、黙ってても推薦で英語科に進学するでしょ。ついでに大学の講義も受けちゃってるでしょ。別の世界にいるみたい。あ、でもね、ちゃんとやることはやってるし」

「やることですか」

いきなり新井林くんの目が光ったような気がした。

「そ、クラスをまとめたり、いろいろと書類作ったりとかね。でも、今は実質的にどうなのかなあ。私がやっちゃってるかなあ、あと貴史と」

新井林くんはすねた風私を見つめた。

なんだかこういう瞬間、貴史にそっくりだなんて思う。

評議委員長選挙が終わり、立村くんが平に戻ってからのというもの、向こうからの会話はまったくといっていいほどなくなった。あえていえば私が無理やり捕まえて、貴史を側に置く形でもって「ちょっと立村くん、話あるんだけど、ちょっと聞いて」と一方的に喋ることしかできない。立村くんも露骨に逃げたりはしないのだけど、口癖みたいに、

「いいよ、これは清坂氏がやれば。あと羽飛と相談してさ」

の一言で終わらせてしまう。あまり突っ込むと「だから俺は別れようっていったらろ！」って怒りかねないし、私も貴史と組むのだったら楽だしということでなあなあにしている。どうせ卒業までの間、まだ時間あるし、その間になんとかチャンスをつかめばいいって思っている。どうせ立村くん、いくらE組で二年の杉本さん参りを続けてたって、相手にしてもらえないのは見え見えなんだもの。生徒会選挙前にしでかしたとんでもない騒ぎがきっかけで、とうとう嫌われたまんま。一切、口を利いてもらえていないらしい。杉本さんも私に言ったもの、

「清坂先輩、いろいろとご迷惑をおかけしますが、誤解を招くようなことはございません。ご安心ください。私が命を賭けてお守りする方はひとりだけです」

って。いつものようにしゃちほこばった口調で伝えられたら、いいこいいこしてあげるしかない。

だから、立村くんの要求する、

「つきあいを解消したい」

はまだ、宙に浮いたままだった。杉本さん本人が、やだって私に言ってきてるんだもの。無理に決まってるじゃない。杉本さんの一途な性格がいいんだったら、いいかげん応援してあげるとかなんとかして、もっと彼女が喜んでくれそうなこと、しなさいって言いたい。

「清坂先輩、聞いていいですか」

「なあに」

手持ちぶたさで、私がレモンサイダーを口にした時、いきなり新井林くんが私の顔を見降ろした。

「なんで、立村さんと付き合おうなんて思ったんですか」

ああ、みんなおなじことを聞くのね。そう、誰もが。

「なんとなく、なりゆき」

「なんで羽飛先輩じゃあ」

怒ったような口調。ちょっとびっくり。でも、そうか。新井林くんって、貴史をバスケット部に入れたくてならなかったんだよね。だからなんとしても引っ張り出したかったんだよね。そっかそっか。

「貴史はね、親友であって彼氏じゃないよね」

あっさりと答えると、腑に落ちない顔をした新井林くんは首をひねった。

「親友、彼氏、ってなんっすか」

「たとえば、ねえ、こんな風にジュースとか飲んでてしゃべってるってところ、もし貴史に観られても困らないよね。立村くんだとやっぱり面倒だけど」

わかりづらいたとえかな。さらに混沌としちゃったみたい。新井林くんは黙った。

「立村くんとだと、いろいろと気遣うよ。変なこと言って傷ついちゃったんじゃないかとか。評議委員長から落とされて、まだ立ち直ってないんじゃないかとかね。でも貴史にだったらそんなこと考えないよ。まあ、そんなもんかってね」

「それ、わるいけど、立場反対なんじゃないっすか」

「なんで？」

浅黒い頬を軽くつねりながら新井林くんは缶を脇に置いた。

「俺からしたら絶対変です。気を遣わねえですむのが、本来の付き合いじゃあねえっすか」

「そうかもね」

わかってる、そうなのだ。本当だったら、そうなのだ。

「それ、わかっててなんで、いまだにつきあたりなんてしてるんですか。俺にはまったく何がなんだか、わからねえって感じで」

「そうよね、わからないよね」

私だってわかんない。

他の人たちには言っていないけど、私がとっくの昔に三行半突きつけられたことがすべての答えだ。

立村くんは本当だったら、さっさと私と付き合いやめて杉本さんに走りたいんだろう。

たまたま杉本さんは最初から立村くんのことアウトオブ眼中だから進展がないだけ。

ふられた彼女として、私も潔くしなさいって感じなんだよね。

だけどそんなの、無理。

今の立村くんからもし、私が離れたらどういうことになるか、誰も想像していないんだもの。

「あのね、新井林くん、よっく考えてみてよ」

一応、先輩らしく言ってみた。足元からひやっとした風が吹いてきた。

「もしよ、私が今の立村くんから離れたとしたら、一種のいじめになっちゃうわよ。三年D組で孤立させちゃいけないわけよ」

「孤立、って」

「知ってるでしょ。立村くんのいろんな事情のこと」

知らないわけがない。新井林くんは目をそらし頷いた。

「隠していたあいつがほんとはとことんばっかみたい、なんだけど、もうこういうことになっちゃった以上、友だちとしてこれ以上状況を悪化させたくないの。これ、貴史も私も同じ考え。それに高校、私たちみな持ち上がりになるんだもん。しょうがないよね。だから私としては三年D組の評議委員として、気持ちよく進学させるための努力をする必要があるってわけ」

「けど、それと付き合うってこととは違うんじゃないっすか」

食い下がる新井林くん。わかってもらえないかな。

「好きでもない奴とずっと付き合っ、それで清坂さんは時間無駄にしてるとか思わないんですか」

「思わないよ。だって嫌いじゃないもん」

——嫌いじゃない。

立村くんが私に向かって、いつも言ってくれた言葉。

「惚れてねえってことですか」

「ないよ、きっと。だって立村くんが本当に好きなのは、ね」

それ以上口に出せず、私は唇をかんだ。後輩の前で、しかも男子の前で、泣いたらまずい。

「今、私が立村くんと別れるわけにはいかないの。つきあいていうよりも、評議委員として」

舌打ちした新井林くんは、ふと空を見上げたまま、青空につぶやいた。

「もし、俺と清坂先輩がおなじ学年だったら、そんなこともたぶんなかった、そう思います」

男子ってわけのわからないことをいつも言う。私もつられてしまった。

「それか、立村くんだけ一学年下だったら、きつとうまく行ってたよね」

新井林くんは口をぽかんと開けていたけど、すぐに頷いた。

「清坂先輩の言いてえこと、俺、すごく、わかります」

——わかんないのは、立村くんだけよ。

私は新井林くんの握り締めている缶に、自分の持っている缶を軽く打ち付けて、もう一度こくつのみ込んだ。立村くんといっしょに、こうやって、ごくっ飲み込んでしまえたらいいのに。みんな、その通りだって風に、流してしまえたらいいのに。

本当だったら貴史が最初に手を出したのだから、あいつが怒られるはずだった。

どう考えたって私から見たら喧嘩両成敗だったし、親を呼ぶほどの騒ぎでもなんでもなくて気がした。

要は、立村くんが殴られた拍子に後頭部を打って倒れてしまい、意識を軽く失ってしまったのが大事になってしまっただけってこと。

保健室の都築先生によれば、

「大丈夫、ちょっと腰抜かしただけみたい。だからぼおっとしているだけよ」

脳天気なこと言ってたし、私はそれほど心配なんてしてなかった。

「やべえよ、立村、ほんと、まじで」

「そんなあんたがあせることないわよ。もっとしゃきっとしなさいよ、しゃきっと」

「美里、お前なあ」

私は貴史と隣り合い、生徒相談室の前でぼんやりとソファに腰をおろしていた。一通り、菱本先生から事情聴取され、そのあとで都築先生から立村くんの状況について説明をうけ、要するにたいしたことはないのだ、と認識するところまではきていた。こういう時って変だ。男子の方が真っ青になってあせってしまうなんて、おかしい。

「親、呼び出しになっちゃうとはなあ」

「小学校の頃なんていつもだったじゃないの。大丈夫よどうせ、うちの母さんも一緒にくっついてくるわよ」

「そっか、そうだよなあ」

貴史はいったいどんなこと心配してるんだろう？ 永年の付き合いある私が読んだところによると、決して自分の身のことを案じてるわけじゃないと思う。

——立村くんのこと、それしか考えてないに決まってる。

きっと貴史のお父さんはすごく怒るだろう。一発二発どころじゃないかもしれない。けど、そんなの慣れっこに決まってる。

——こんなすごいことになっちゃったんだもの、立村くんがこれからどうなっちゃうか、だよね、きっと。

「お前さあ、一応あいつの彼女だろ」

貴史は片手をまだ頭にのつけたまま、私を見た。

「もう少しな、俺に文句言うとか、けんかをやめてとか、普通言うだろうよ」

「私はそんな甘くないの。おかしいことはおかしいってはっきり言うの。彼氏であってもなくてよ」

「けどなあ」

なによいって、なんで説教しようなんてするの。貴史、私に対してだけ、妙に偉そうだ。むかつく。

「いくらなんでも『急所だけははずせて言ったでしょう』はねえだろ？」

「事実じゃない。あんた、ちゃんとそれは守ったみたいだけどさ」

その点も実は、まったく心配してなかった。たぶん貴史と立村くん、いつかはぶつかり合うだろうと思っていた。場所がちょっとまずかったけど、貴史がぶつちぎれて殴りかかる展開は私なりに覚悟はしていた。その時を迎えた時にどう振舞うかも、無意識だけど考えていたみたいだ。他の女子だったらかわいく「けんかなんてやめて！　お願い！」くらい言うかもしれない。すがりつくかもしれない。けど、あの展開、明らかに立村くんのわがまま全開な言い分聞いて「お願いやめて」って貴史にすがりつくようだったら、私は清坂美里じゃないと思う。つきあったくらいで性格変わるような女子じゃ、私はない。

「かわいくねえなあ」

「鈴蘭優とは違うからね」

再び貴史はちらっと私の方を見やると、だんまりを決め込んだ。言いたいことあっても、めんどろなんだね、男子ってなんも言わない。

立村くんが貴史と彰子ちゃんに言い放った言葉を、私はそのまま受け止めるしかないと思っていた。

実際、もう私や貴史と友だちづきあいはしたくないって態度を取りつづけていたし、もしそうならしつこく追いかけるのも無駄だろうと、頭の中では考えていた。

もちろん、わかってる。そうしなくちゃって。でも。

——そうできればね、どんなに楽かわかんないよ。

立村くんが評議委員長から降りて書記に回された時、誰もが評議委員会の崩壊序曲だと感じたみたいだった。

だって普通評議委員長が前期後期両方勤められないなんてこと、転校とかそういう要因でもなければ絶対にありえないことだったんだから。

でも、実際評議委員会の後期会長は天羽くんが選ばれた。立村くんがずっとまとめてきていた評議委員会と生徒会がらみの交流活動はみな、天羽くんの背中にずっしりのしかかったようだった。それって大変なことだったんじゃないかってみんな思っていたはずなんだけど、ふたを開けてみたらなんでもなくて、あっさりと予定が決まり、進んでいった。私たち女子三年評議が手伝う場面もほとんどなく……厳密に言うと琴音ちゃんだけが混じっていたようだけど……トラブルもなんもなく、片付いていった。

新井林くんとの対立も三年としては覚悟していた。三年を馬鹿にしているんじゃないか、だったら天羽くんとも喧嘩するんじゃないか、難波くんがかみつくんじゃないか、いろいろ不安材料は混じっていたのだけど、それもびっくり、難なくこなしてしまっていた。噂によると、どこかで天羽くんが新井林くん「礼儀」を教えたとか聞いたけど、それ本当のこととは思えない。天羽くんの彼女とされる近江さんによれば、

「まあ、私はこれで、清坂さんと一緒に語り合う時間が増えたから、天羽くんを応援することに

決めたわ」

なんて、ものすごく天羽くんが忙しいらしいという情報は仕入れている。こずえがやっかむくらい、最近近江さんと私が行動することが多い。

天羽くんが委員長になってから、特に増えた。

「天羽くんと、話す機会減った？」

「最初からあんなものだし、いたらいたでおもしろいけど、いなかったらいなかったらで私には清坂さんがいるし。落語や漫才を見に行くんだったら、やはり天羽くんの方がいいっていうのはあるわよ。でも、毎回毎回じゃないし」

——そんなので比べられないと思うけど。

そう思えたら、楽だろうな、私はいつも近江さんにあこがれた。

とにかく天羽くんが仕切ったことによってすべてがうまく回りだした。これは事実だった。

琴音ちゃんがなぜ、立村くんと一緒に書記を担当するようになったのか、これも他の委員からしたら不思議なことだったけど、男子評議たちが誰も文句言わなかったし、文句を言いそうなゆいちゃんや小春ちゃんがもう評議から外れていることを考えると、これもあっさり決まってしまった。私は直接理由を難波くんと天羽くんに問いただしたけれども、

「まあいいじゃん、清坂ちゃん、それよか、あいつのことを少し、よろしくたのんますわ」

「ったくあいつ、何しでかすかわからねえ状態だしな」

私が立村くんの専用保母さんになるよう言い含められて、それきりになった。

もちろんそうしろって言われなくたって、私もその覚悟はしていた。

立村くんにはっきり、「別れたい」そう言われてから、私だってもちろん。

だけど、今こんな時にそれを受け入れたら何が起こるかわかってるんだろうか。立村くん、何にもわかってない。先のことを考えるのが男子は得意って言うけれど、立村くんに関して言えばそれは外れている。第一絶対に不可能。もし私が「立村くんと別れるわ」なんて言ってごらんないよ、すぐ他の女子たちから、

「だから美里は羽飛と付き合えばよかったのよ」

っていうありがちな誤解を招くはめになる。貴史はもちろん「鈴蘭優」命のまんまだし、そんな面倒なことはないと思うけど、他のまわりついてくる人たちがうっとうしい。

それに、私だって大変なことになる。まがりなりにも二年近くカップル扱いされてきて、それがいきなりってことになったら、みんな理由をいろいろ詮索するに決まってる。

——美里って、けっこうもてるから、誰か好きな人ができたんじゃないの？

——もしかして新井林くんあたり？

——他の中学に彼氏がいるって噂も聞いたことあるよ。

——去年の卒業式に告白されたのに振った人がいるって。

私もそれなりに誤解されたり噂されたりしているのだ。ほんと、ありもしないこと、ぺらぺらといわれるのだ。

立村くん一筋なんだって言うておけば、余計なことかんでられないですむ。だからなんだってこと、いくら言っても誰もわかってくれない。

貴史が好きなものって勝手に決め付けられる。

そうよ、私だって迷惑するのよ。決して立村くんのためなんかじゃない。私だって好きじゃなくなったらさっさと振ってる。

立村くんのためなんかじゃ、ないんだから。

3

私はしばらく貴史とまったく関係のない話をしつづけていた。「砂のマレイ」の作者さんが行方不明になって半年経つため、続編を映画化できなくて頭を悩ませているらしいという、そんなスキャンダル。無難ともいえないけど、まあ、立村くんがらみのことを考えるよりは、まし。

「やべえよなあ」

貴史も「砂のマレイ」の大ファンだし、しっかり話に乗って来た。

「作者がいねえなら、別のアシスタントとかに頼んで続編つくりゃいいのにな」

「できるわけじゃない。だって戻ってきた時に『あれ、こんな話にするつもりじゃなかったのに』って怒られたらどうするのよ」

「しゃあねえだろ、自分でおっぼりだしたんだからな。ある程度いじくられても、自業自得」

「でも、自分の意志じゃないかもしれないじゃない」

このあたりは強く、主張したかった。

「この前のワイドショーでも言ってたよ」

「お、さすがおばはん根性丸出し」

「うるさい！ とにかくね、いつ戻ってきても大丈夫なように、仕事場はしっかり整えてあるんだってアシスタントさんがインタビューに答えてたよ。だって、予告もなんもなかったんでしょ。出て行きますとか、自殺しますとか」

「神隠し、ってたな」

「砂のマレイ」は現在、第三弾の映画が撮影される予定ということで、私たちもむちゃくちゃ楽しみにしていたのだ。

今までの展開はすべて原作をなぞる形だったのだけど、第三弾はまったくのオリジナル脚本になると聞いていたので、楽しみもひとしお。

なのに、いきなり原作者が姿をくらまし、「誘拐か？ 失踪か？ なにか事件に巻き込まれたか？」などとかしましくテレビ・週刊誌を中心に騒ぎが激しくなっていた。最近はずしずつ別のニュースにトップの座を奪われているけれども。

「なんか理由あるのかな」

「さあ、けどいろいろあるみたいだぞ。金の問題だとか、愛の逃避行だとか」

「なによそれ、愛の逃避行って笑える」

「『週刊アントワネット』によればだ」

貴史お得意の芸能ネタ最新情報を、わざわざ両手広げて披露するのはどうかと思う。私は少しクールな振りして聞いていた。

「アシスタントと作家との間で男の奪い合いとなり、結果、作家の方が逃げ出したと」

「どうでもいいけどあんた、ファンでありながら作者の正式名称いえないってのはどうかと思うなあ」

男子ってそういうところ、抜けている。たぶん、覚えていないんだ。どうでもいいことなんて、覚えられないのが男子なんだもの。

どうでもいいこと、くだらないこと、そういう話をしていられれば、あっという間に忘れていられる。

貴史としゃべっている時って、いつもそうだった。

菱本先生と一緒に、私たちそれぞれのお母さんが入ってきた。きっとあせって飛んできたんだろうな。いつもそうだった。私たちがなんかやらかすと必ずどちらかのお母さんがやってきて、先生に頭を下げるのだ。最初のうちは私たちも必ずぼこっと拳骨を食らわされたものなんだけど、高学年になるにつれて事情が変わってくると表面だけを合わせる格好で片付けるようになった。特に、小学校時代あの沢口先生との対決が続いた頃はそうだった。

ただ、青大附中に入学してからはそれほど、いわゆる呼び出しを食らうような悪事は働いていないつもりだった。もちろん私がするわけなくて、やるのは貴史。小学校時代は手に負えないほどの悪ガキ扱いされてきた私たちだけど、青大附中ではむしろ優等生だ。問題を片付ける方だ。いや、立村くんのしでかしたことを後始末する、そんなことの方が圧倒的に多い。

——だって、評議委員だよ、信じられないよね。

貴史をつっついて立ち上がり、まずは菱本先生に頭を下げた。

先手を打っておかなくちゃ。ついでにお母さんたちの顔を覗き見た。

「たあちゃん、どうもね」

最初に声をかけたのはうちの母さんだった。

「みさっちゃん、ついていてくれてありがとうね」

次に私に近づき、いきなり頭を撫でてくれたのは貴史のお母さんだった。なんか子どもっぽいことしないでほしい。先生いるんだから。

「それにしても、貴史、ほら、こっち向きなさい」

その手で貴史のお母さんは、貴史のお尻を思いっきりぶった。頭じゃないところがみそ。

「いってえ」

「人様に手を出すなっていつも言ってるでしょうが！」

「ごめん」

素直に謝り、貴史はズボンの上からお尻をかいた。隣り合っている私たちを少しにらむように見つめている菱本先生が、

「とにかく、ふたりともそれぞれのお母さんの隣に行きなさい」

指で分かれるよう指示をした。そりゃそうよ、素直に私も母さんにくっついて向かい合い座

った。すると母さんはさっそく、

「美里、それにしても女の子なんだから、あんた止めようとしなかったわけ？」

「女の子であってもなくてもするべきことはいっしょでしょ」

ああ、やだよ。なんで「女の子」ってことで責められるんだろう。母さんの言ってること、よくわかんない。

「事情はさっき職員室で聞いたけどね、あんた、なんて言ったのよ。ねえ、たあちゃん」

だからなんで貴史に話を振るんだろう。なんかこのところも、変だ。貴史は答えた。

「あの、急所狙うのはやめろって」

いきなり誰かが吹き出した。貴史の母さんと、あと菱本先生だった。

「清坂、よく、知ってるなあ。急所、狙ったことあるのか」

私のお母さんが頭をかかえている。なによ、女の子でも言うべきことはきっちり言うべきなのよ。

「女子は体力的に劣ってるのはしょうがないし、身を守るためにはしょうがないです。もっとも、青大附中でそんな心配ないですけどね。紳士であれって言ってるし」

「うそつけ」

ぼそっとつぶやいた貴史の一言、しっかり耳で拾った。あとで本気で一発けりいれてやろう。

「つまり、今回は、子ども同士のけんかで勇み足、というところなんですよ。ですから本来でしたらおふたりにいらしていただく必要はないと、相手方のお母さんもおっしゃっているのですが」

かなりかいつまんだ形で菱本先生は、貴史と立村くんとの一件をお母さんたちに説明した。

「要するにあれでしょうか？」

うちの母さんが身を乗り出すようにして、菱本先生に確認した。

「たあちゃんとその、立村さんのお子さんとか口げんかして、その拍子で一発お見舞い」

私に「女の子なんだから」なんていう権利、ないと思う。その言い方。「黙っててよ」そうささやいた。

「いや、実際は小突いた程度でしょうね。ただ、その際打ち所がわるいんでないかという倒れ方をしたので、僕もつい、先走ってしまった次第で」

「で、その立村くんというお子さんは」

私の顔をちらっと見て、また母さんが尋ねた。

「大丈夫です。さっき保健室で確認したところ、まったく問題がないようです」

「でもやはり、私どもの息子がしでかしたことですからきちんと謝らないと」

今度は貴史のお母さんが泣きそうな顔をしながら訴えた。貴史も大きく頷き、

「俺も、立村にきっちり謝ります。あいつ、大丈夫なんですかほんとに」

「ああ大丈夫だ。たまたま腰を抜かしたただけだと言ってたぞ」

「腰を、抜かす？」

思わず私がつぶやくと、菱本先生はにやっと笑った。

「要はバランスを崩してしりもちついて、ぱたっと転がっただけだってことだ。打撲もなければ特に何かあったわけでもない。すぐに羽飛が保健室に運んだし、特に問題はないぞ。安心したか」

「別にそんなわけじゃないですけど」

また菱本先生はくすっと笑った。

「ですので、子どもたちがちょっとだけやんちゃしすぎただけというのは、立村の親御さんもよく理解してくださってるようです。ただ、念のためこれからこちらにいらっしゃるそうですので、もしすっきりしないようでしたら、その時にでも」

——立村くんのお母さん、来るんだ……。

私は立村くんのお母さんに会ったことがない。二年の秋、確か詩子ちゃんの日本舞踊発表会の時に、貴史だけ楽屋で顔を合わせたことがあると聞いたことがある。貴史が言うには、

「すっげえべっぴん。唇真っ赤でさ、たぶん立村の姉さんって言ってもおかしくないくらいだな」

ものすごい美人らしい。

「立村くんに似てた？」

「似てた、目のところ、まじ、そっくり」

前にちらと、人となりについて教えてもらったことがあるけれど、とにかくヒステリックな人だとか、おっかない人だとか、あまりいい話を聞かされていない。

だって、まだ十二歳の男の子を捨てて離婚してしまうなんて、私には信じられない。

うちのお母さんも、貴史のお母さんも、たぶん立村くんのごことは話だけ聞いて知っているはずだけど、あまりお母さんに関してはいい印象を持っていないはずだった。

どちらも専業主婦だからかもしれない。仕事を取って息子を捨てるなんて、絶対ありえない、そう思ってるのかな。

「ではその時に、お詫びをさせていただきますが、やはり何か、その、ねえ」

貴史の母さんはまるっこい顔をくぼませるようにして、先生と私の母さんと交互に顔を見合った。

「そうですよねえ、やはり、程度がどうにせようちの馬鹿息子が手を出したことは事実、きちんと謝りたいものですしね」

神妙につぶやいたのをさえぎるように、今度はうちの母さんが口を出した。何言い出すんだろうといったい。

「あのう、失礼ですけど、その立村さんの奥さんは、お若い方なんでしょうか」

「母さん！」

私は思いっきりお母さんの足を蹴飛ばした。ぱしっと膝を叩き返された。

「黙ってなさい！ とにかくあの、お若い方という話をうちの娘から聞いていたものですから、かえって私どもの話し方だと不愉快になられるかしら、なんて心配になりまして」

「失礼よ、お母さん黙ってよ！」

「うるさいのはあんたの方、とにかく黙って！」

声音が本気で怖い。母さんが私を押しのけるようにしてさらに言い募る。

「こういったら失礼ですけど、お仕事されてらっしゃってかなり先進的な方と伺っております」

「そんなこと言ってないじゃない！」

いやだ、何変なこと言うんだろう、うちの母さん。私、立村くんに対してそんな失礼な言い方なんてしてない！ 立村くんのこと、うちの家族には絶対話さないようにしてきたんだもの。付き合ってからずっと、余計なこと言わないようにしておかなくちゃって思っていた。うちの親たちが私の彼氏に興味津々なのは承知していたけど、絶対に立村くんの話をしてはいけないように決めていた。だって、立村くんのことをきくと、うちの家族は嫌っちゃうに決まっている。一緒に暮らしている私がそんなこと、気付かないわけない。

貴史があわてて母さんに話し掛けた。

「あの、立村の母さん俺会ったことあるけど、そんな怖い感じじゃ」

ここでさらっと言ってくれればいいのに、貴史ときたらいきなり、

「いや、ちょっと、怖い感じかも」

なんて口走るもんだから、母さんふたりいきなり顔を見合わせたじゃない。

「そうなの、たあちゃん、その立村くんて子は、厳しいしつけされてらっしゃるってことだものねえ」

「うん、まあそうらしいし」

また貴史は言葉を濁した。男子ってほんつとに頭悪すぎる！　なんでこんなくだらないうこと口走っちゃうんだらう。

「いいところのお子さんだから、うちのがさつな息子と話が合うわけないとは思うのですけれどもねえ」

くぐもった声でまたつぶやきため息をつく貴史の母さん。私に顔を向けて、

「みさっちゃんもねえ、うちの貴史じゃあ、やっぱり、困るわよねえ」

——別に何困るっていうのよ！

「母ちゃん、余計なこと言うんじゃない」

いきなり貴史は顔をしかめ、ぷいっと横を向いた。

いくら母さんたちが、

「たあちゃん、ちゃんとあんたも頭を下げるべきところは下げたほうがいいのよ」

「手を出したらだめだってあんた、何度言ったらわかるの！」

いろいろと口を出しても、何かしゃべるのがいやそうな顔をしてうつむいていた。

こういう時、貴史には何言ったって無駄だってこと、私だって知ってるのに。

見かねたのだから。

「あの、僕が思うにですわねえ」

さらに男子力でもって、話を混乱させようとしていた菱本先生の言葉が途中で止まった。

ノックの音が響いた。いきなりぴしっと菱本先生が身を正して、

「はい、どうぞ」

呼びかけが終わる前に戸が開いた。

「立村くんのお母さまです」

「どうぞ、お入りください」

慌てて立ち上がり、菱本先生がドアノブを引いた時、私ははじめて立村くんのお母さんの顔を見た。

——似てる……。

貴史の言う通りだった。

すらっと背の高い、モデルさんのような体型。

後ろに束ねた腰までたれるストレートヘア。

真っ赤な口紅と、ちょっと濃い目に頬骨を高くみせているチーク。かっこいい。

ちっとも立村くんの持つ、おとなしめな雰囲気には重ならないのに、なぜか似ている。どこか見覚えある雰囲気がした。

貴史が私に視線で、「立て」と合図した。母も同じくお尻をつついた。もっと別のところにしなさいよって言いたい。

大きな瞳と、じいっと深く見つめるようなまなざしが、確かに立村くんとおんなじものだって、気がついた。

「あなたが、美里ちゃん？」

一言だけ耳元にささやき、その人はふかぶかと頭を下げた。片手に紙袋をぶら下げ、小さく黒いかばんの柄をつまむように持ち、次に先生に向かい、

「この度はうちの上総がみなさまにご迷惑をおかけしたそうで、誠に申し訳ございません」

「いえ、あの、うちの息子の方が、ほら、貴史頭下げなさい」

貴史の母さんが無理やり頭を押さえつけようとするのをさえぎり、その人はまた紙袋を差し出した。

「いいえ、私のしつけがいたらなかったせいです。申し訳ございません。どうか、みなさまでお召し上がりくださいませ」

「立村さん、あの、それはそういうわけでは」

慌てる菱本先生に、ぴしりとくぎを刺した。

「先生、どうかこの場は、私に免じて、お詫びさせていただければと存じます」

三度目の、深い礼をし、またぴんと背を伸ばし、立村くんのお母さんは最奥の席についた。ちょうど私と母さん、貴史とその母さん、菱本先生に囲まれる形だった。いわゆる、「お誕生席」と言われる場所だった。

何度か貴史のお母さんが頭を下げようとし、菓子折りを差し出そうとしたが、立村くんのお母さんは丁寧に断った。

「私の方こそ、うちの馬鹿息子が貴史くんによくしていただいているのに失礼なことばかりしているようで申し訳ございません。今からみなさまに、お願いがございしますが、よろしいでしょうか？」

——なんでこの人、立村くんのことを悪いって決め付けるんだろう？

「立村さん、息子さんの方ですが特に打ち所がわるいわけではなくて、少し子どものけんかが」

「ええ、よく存じております。この件はすべて、うちの上総の問題です」

またぴしゃっと跳ね返した。ちらと私に視線を向ける時に微笑んでくれるのが、ちょっと不気味だった。だって「美里ちゃん」って呼んだんだもの。もしかして立村くん、私のことをお母さんに話してくれてるんだろうか？ まさか「美里ちゃん」なんて呼んでくれたんだろうか。ううん、そんなことない。立村くんは私のことを下の名前で呼んだことなんてないんだもの。変なことばかり考えていて、ずっと立村くんのお母さんの顔ばかり見ている、うちの母さんの態度のことをすっかり忘れていた。興味津々でじっと見入っている様子に、頭のなかがかあとした。何よ、じろじろ人のこと見てないでよ！

「うちの娘がお世話になっているようで、恐れ入ります」

使い慣れない丁寧語を使い、じろっと母さんは立村くんのお母さんを一瞥した。もちろん丁寧なんだけど、何かを探ろうとしている目、なんかいやらしい。

「いえ、美里ちゃんのおかげでどれだけあの馬鹿息子が人間らしく成長したか、そう考えると涙が出てくるほどです。本当に、ありがとうございます」

「こんなおてんば娘が、お宅の礼儀正しいお坊ちゃんに何か失礼でも」

「いいえ、あの馬鹿息子をきちんと一対一で話のできるような人間に育ててくださったのは、美里ちゃん、貴史くんをはじめとする青大附中のみなさまのおかげ。本当にありがたく思っております。それで、先生、お願いがございしますが」

ぴりりぴりり、先生に対してのみ、はじくような言い方をする人だった。私は立村くんのお母さんが誉めてくれた言葉を素直に受け取っていいのかどうか迷い、しばらくだんまりを通した。

「うちの息子のことですが、菱本先生もご存知の通り、内向的と申しますか人嫌いと申しますか、いろいろとコミュニケーション能力が欠けているようです」

立村くんのお母さんは席につき、背を伸ばしたまま膝に手を重ねゆっくりと語り始めた。誰にも口出しなんてできない。

「この点については私も反省すべきところがございますし、何よりもあの子の側から離れざるを得なかったという事情がございますので何も言い訳できないところなのですけれども。ただ、青大附中のみなさまのおかげで少しずつですがあの馬鹿息子も大人になってきているようです。今までは一切、何を言われても泣いていじけることしかできなかった息子が、まがりなりにせよ自己主張できるようになり、一対一で友だちと喧嘩できるようになり、恋もできるようになり、本当にここまで育てていただいた先生には感謝の気持ちしかございません。ですので、今回の件

に關しましては、感謝の気持ちこそあれ、誰ひとり責めるつもりなど一切ございません。その点だけ、ご承知のほどを」

「いえ、ですからその件とはまた別として」

貴史のお母さんがまた口を出そうとし、撥ね付けられた。

「今回あえてこのような席を設けていただいたのは、ひとえに私の、教育的事情に過ぎません」
——なによ、その「教育的事情」って。

貴史と視線を絡ませた。

「うちの息子には、残念ながらまだ、身勝手と申しますか、いじけた根性が染み付いているようです。先生もご存知でしょうが、自分が変われば世界が一気に変わっていく、その現実を受け入れられず他人が変わるのを指くわえて待っていると申しますか、そういった甘えがまだあります。本来でしたらそういう意識を矯正するのが親ですし、私が全身全霊で正すべきなのですが、ご存知の状況ゆえにそれもままなりません。もちろんあの子の父親にあたる人とも連携を取っておりますけれども、こういう目に見える形できっちりと学ばせるのは至難の業でもあります。ですから、今回、申し訳ないのですけれども」

次に立村くんのお母さんは菱本先生に向き直った。菱本先生が家来のように控えた。

「今からあの子に、親として伝えるべきメッセージを全力で伝えます。おそらく親と子、母と子、ふたりきりのところでは甘えもでるでしょうし、私も感情的になる恐れがございます。ここでしたらあの子の信頼しているお友達がいて、上総のことを本当の意味で心配してくださる大人たちがそろっております。あの馬鹿息子も逃げ場がないまま、もしかしたらわがままな本性をさらけ出すかもしれません、それでも決して嫌われることなんてないのだという事実を受け入れることができるかもしれません。簡単なことではありませんし、この一度きりですべてが変わるのも思っておりません。ですが、まったく何もしないよりはましだと認識しております。どうか、今、この場で、親としての言葉を伝えることをお許しいただけますか？」

まっすぐ、凜とした態度で立村くんのお母さんは、以上の言葉を口にした。

貴史と目が合った。何か言いたそうだったけど、がまんした。

どう考えたって貴史の方が悪いのに。大人ってわからない。立村くんのお母さん、なぜそんなこと言うんだらう。

——うちのお母さんも、貴史のお母さんも、ほんとは立村くんのこと、嫌いかもしれないのに、そんなこと、大変だよ。

言いたい、文句を言いたい。やめなさいって言いたい。でも口にできない。どうしてか、わからない。

私はうつむいたまま、椅子にへばりついてた。言いたいことが言えない自分が、みっともなくっていや。

いきなり今度は、更科くんの声が戸の向こうから聞こえてきた。

「先生、立村くん連れてきました」

扉の向こうには、立村くんがうつむいたまま立っていた。そっと顔を上げ、息を呑んだ風に立ち止まり、片手をぶらつかせた。入ってくるのをためらっているようだった。

「上総、早くこっちに回ってきなさい」

私の方もちらっと見た後、ソファーに近づき、また立ち止まり礼をした。

たぶん、立村くんをここまで近くで見たのは、うちのお母さんも初めてだったと思う。もちろん電話の取次ぎはしてくれるし、私も何気なく男子の評議が立村くんであることを伝えてあるので、それなりのことは知っているはずだ。あまり隠し立てしたくないけど、陰でこそこそ「あの、母子家庭の子よねえ」みたいな悪口を言い合うとこなんて、子どもとしては見たくない。だからあえて、それ以上の話はしないでおいた。

母が食い入るように立村くんの顔を見つめている。

——そんなみっともない顔で見ないでよ！ 動物園じゃないんだから！

本当だったら思いっきりけり入れたかった。こんなとこでできるわけないじゃない。

貴史のお母さんもそおっと覗き込むように立村くんを見上げ、

「ほら、貴史」

小さな声でささやいている。貴史は男子だから、それなりに立村くんのおおっぴらに紹介しているはず。ということは、私の母さんにも貴史的視点でもって立村くん情報が流れているんだろうか？ なんかいやな予感がした。

——絶対、立村くん、変だって思ってる。

目の前でしばらく立ちすくんだ立村くんは、一度真正面に座っている自分のお母さんをにらみつけ、その後で私と貴史の母さんをそれぞれ静かに見回した。その時の視線の違いがあからさますぎて、ぞっとした。なんか、いかにも、うまくいってないって感じだった。ううん、違う、なんか私たちが言う「お母さん」に対する態度じゃなくって、菱本先生を見る時と同じっぽかった。それぞれ方向を変えて丁寧に礼をした。うちの母さんたちはみな、視線を立村くんからはずさずに、そのまんま頭を上下させただけだった。もう、みっともない！

——立村くん、どうして私を見てくれないんだろう。

いきなり貴史が直立不動、ぴっと立ち上がった。真正面に向かい、直角になるくらい頭を下げた。

「たあちゃん」

母さんが何か止めようとする。やめなさいよ。貴史が謝りたいんだから邪魔するんじゃないの。軽く手をひっぱたいた。

「立村、さっきはごめん！」

頭を動かさなかった。するといきなり貴史のお母さんも立ち上がった。しっかり片手を貴史の頭をぎゅっと押さえようとしている。

「うちの貴史が、もう、ごめんなさいね」

いきなり貴史の母さんの本名を口走るうちの母さん。

「なんで由布子まで」

すすっと腰をかがめたままテーブルを横切り、手をぎゅうっと握り締めた。

「由布子、ほら、落ち着いて、そんなあんた」

いったいどういう関係なんだろう？ 私には母さんたちの関係がいまだによくわからない。こういう場でなければ貴史も「なあにべたべたしてやんの、け、気持ちわりいな」みたいなこと言いかねないのに。貴史は母さんたちの会話なんて無視したまま、そのまま九十度を保ったまま突っ立っていた。

ってことは、私がうちの母さんをひっぱり戻すしかないってことかな。

しかたない。こういうわけのわからない親を持った私がすべて面倒見るしかないのね。

今度は私も母さんの側に近寄り、思いっきり腕をひっぱった。いいかげんにしなさいよ。

「黙っててよ！ 貴史が真剣に謝ってるのになんで母さんたちがじゃまするのよ。こっちにもどってよ！」

「あんたの方がうるさいのよ！」

「あ、僕は大丈夫です」

立村くんが口を開いた。わやわややっていた女三人、思わず立村くんの方を向いた。そっと自分の席に戻り、おずおず様子を伺った。立村くんはもう一度椅子の面子を見渡した後、誰の顔も見ず、ソファの後ろを通り「お誕生席」に向かった。そこがちょうど、空いていた。けど、座らないだろうと思っていた。だって菱本先生と並ぶんだもの。硬い表情を崩さず、自分のお母さんの顔は一切見ず、いつものように腰掛けた。足を軽く開くような格好で、でもだらしなくおっぴろげるわけでもなく。私の方を一切無視しているのがありありとわかる。ついでに言うなら貴史の方も、だった。あんなに謝ってるんだから、私らの母さんたちよりも、まず貴史に「いいよ、もう大丈夫だ」みたいなこと、言うのが筋でしょうに。

いっとくけど、私は清坂美里。立村くんの彼女であろうがなかろうが、納得しないことは受け入れない。あとで絶対、話しよう。そう決めた。

うちの母さんが落ち着いて席に戻り、でも貴史母子は立ちっぱなしのまま。

しばらくだんまりが続いた。菱本先生も、きっと自分から立村くんが席についたのに満足してたのかもしれない。うっすらと笑みを浮かべて、

「立村、大丈夫か」

なんて声をかけていた。立村くんは相変わらず無視をしつづけている。もう、どっちが礼儀知らずなのかわかんない。すると、「お誕生席」に動きが見えた。

「羽飛くん、もう頭を挙げてちょうだいな」

——え？ 貴史？

なんか変。絶対変。

だって、その人の息子は、立村くんなのに。

なんで貴史に声かけるわけ？ 手を差し出すわけ？ 座るように促すような合図。でもふたりはそのまんまだった。とにかく座ればいいのに。私も貴史にそう言いたかった。けど言えない。立村くんのお母さん、何か、少し、怖い。

「本日私が参りましたのは、うちの馬鹿息子に謝っていただきたいということではないのですから、先ほど申しあげましたように」

さっき話したことを、声音を和らげるような口調で続けた後、

「羽飛くん、利き腕どちら？」

やわらかく尋ねた。

「右です」

ぶっきらぼうに貴史も答え、立村くんをじいっと見つめた。貴史の方はちゃんと見返すこと、できるみたいだった。

「ありがとう」

やさしい口調だけど、脈略のない言葉。わからない。私も立村くんのお母さんから目を離すことができなかった。身体の向きを変え、立村くんに向かった。名前を呼んだ。

「それと上総」

それだけだった。

こっち向きなさいとも、反省しなさいとも、謝りなさいとも言わなかった。

いきなり、立村くんの右頬を張り飛ばした。真っ赤なマニキュアがライトに当たって白く光った。

「立村、おい大丈夫か！」

菱本先生が間に入ったから二発目はなかった。貴史が硬直したまま、動けないでいる。うちの母さんたちが目と目を合わせて「どうしよう、どうしよう」とテーブル越しに相談している様子が見える。けど私は。

——どうして？

みんなの前で、しかも、菱本先生と、貴史と、そして私と、みんないるのに。

——立村くんが一番、見られたくないとこなのに。誰にも見られたくないとこなのに。

「立村くん！」

呟くことしかできなかった。あの時の私は、本当の清坂美里じゃ、なかった。

立村くんは一度ソファーにもたれるように倒れ、すぐに身を起こした。いかにも慣れっこって感じで、同じきつい眼差しを自分のお母さんに向けた。見比べてわかった。やっぱりこの二人、親子だ。そっくりだ。いつも菱本先生をにらみつける時の顔と同じだ。

「あんた、うちにセールス電話がかかってきた時、くどい話をそのまま聞いて、受け入れてあげる？ それともさっさと切る？ 普通は切るわよね。時間がもったいないし、迷惑だし、話を聞いてあげる義務なんてないものね。もしそのセールスマンが、電話切られたからといって傷ついた、悲しい、お前のせいだとか言ってあんたを訴えたらどうする？ 自業自得って言うわよね、普通。上総、あんたがしてほしがってるのはね、そのセールスマンと同じことよ。断られて当然なのに、断った相手が悪いって逆恨みして、無理やり自分の売り物を押し売りしようとしているだけの、勘違い野郎よ。いいかげん気付きなさい」

立村くんのお母さんがヒステリーを起こすのかと思っていた。

だってひっぱたくなんて、頭に火がつかないと絶対にできない。

けど冷静だった。真正面に立村くんを迎え、再接近し、とうとうとまくし立てた。話していることは、いたってわかりやすいことばかり。うちのお母さんとは大違い。思わず私は聞き入っていた。菱本先生が途中立村くんの肩を抱くようにして、

「あの、お母さん、今ここでは」

「少し黙っていただけますか。見苦しいところをお見せするようですけれども、これも母親の義務ですから」

仲裁に入ろうとするのだけど、勝てるわけがない。ぴしゃっと跳ね除けられた。立村くんも露骨に手を払いのけている。どうしてそこで「結構です」って一言が言えないんだろう。ほんと、立村くん、子ども過ぎる。そう言いたい。

うちの母さんたちも、最初の段階で完全に立村お母さんの観客と化している。本当の意味での「崩壊序曲」ってこれなのかもしれない。立村くんは唇をかみ締め、頬を真っ赤にしたまま、ずっと自分のお母さんをにらみ据えている。なんでこんなにほっぺたが赤いんだろう。今気が付いた。すうっと私も、頭の芯が締まったような気がした。

——さっきなんで貴史の利き腕聞いたか、わかった。

——おんなじとこ、重ねて叩かないように、したかったんだ。

「今、こちらで全部聞かせていただいたけれども、ここで間違っている人間はあんただけだってことがよくわかったわよ」

すごい。そこまで普通、誰も言えない。言いたくたって、言えない。

「もちろんそれはあんたを育てた私と和也くんの責任でもあるし、あんた自身にもどうしようもなかったところがあるのは理解しているつもりよ」

——和也くんって、誰？

頭を必死に働かせて、「和也くん」なる人が立村くんのお父さんだということをやっと理解した。三年間立村くんと一緒に過ごして来て、気付かなかったなんて。お母さんがお父さんのことを「くん」付けで呼ぶ家庭。そんなのがあるなんて、信じられない。私、立村くんのことを全然、本当に教えてもらっていないんだ。

——そういえば立村くんのお母さん、二十歳の時に産んだって、言ってたよね。

——それも、「順番間違えた結婚」だったって。

頭の中はこんがらがっておでんができそうだった。

「でもね。上総、あんたはいつも、周りが何もしてくれない、理解してくれない、だから当然こういうことをしているんだってことばかり言ってるでしょう。菱本先生に対してもそう、羽飛くんや美里ちゃんに対してもそう、すべて出会う人に」

いきなり私の名前が出てきてびくっとした。貴史と目が合った。いきなりあいつが、「黙ってる」のサインを送ってきた。見分けるのは簡単、片目をしわしわにするところ。了解した。

「あんたがいわゆる普通の同年代の子とは違って、神経質だってところは重々承知しているし、有る意味それは仕方ないことだわ。でも、それを他の全く関係ない人に押し付けたり要求したりする権利は、上総、あんたには一切ないのよ。他の人たちにとっては、あんたの繊細な感受性っ

てのはね、どうだっていいわけよ。いい？ 上総、あんたは自分をもっと尊重してほしい、こんな傷つきやすいぼくちゃんを真綿で包むように扱ってほしい、高級品なんだとばかりに威張りくさっているように見えるわけよ。親である私にもそれはびんびんと伝わるわ。その証明をするために、『いじめられっこ』だとか『運の悪い評議委員長』だとかいろいろな肩書を集めて、『こんなに努力しているのにどうして周りはわかってくれないんだ』って一生懸命アピールしようとしているのが丸見えなわけ。わかる？ だけど周りの人たちからしたら、そんなのちゃんちゃらおかしくて相手にする暇なんてないのよ。いい？ 他の人たちはあんたに普通以上の関心を払う義務なんてないわけだし、迷惑を掛けられる筋合いもない。あんたの一方的にやらかす迷惑行為から身を守る権利だってあるわけよ。そうでしょう、羽飛くん」

今度は貴史に話を振ってきた。どう出るか。出方によっては私も考える。貴史は横に首を振った。「迷惑なんて、かけられてない」という意味と受け取った。私は身動きできなかった。

——どうしてだろう。私、一応、つきあってるんだよね。

なんでかわかんないけど、くうっと泣けてきそうだった。

——こんなに努力しているのにどうして周りはわかってくれないんだ。

それは私が言いたいことなのに。

私がどんなにわかろうとしたって、立村くんはちっとも受け入れようとしてくれなかった。

けど、それって向こうも同じだったってこと？

私、受け入れようとしてないように、見えたわけ？

涙をこらえた。うちの母さんたちの前では、死んでも泣けないから。

「『どうして自分を受け入れてくれないんだ、それは親が、社会が、学校が』とかなんとか一方的に叫んでいるようだけど、あんた以外の誰もあんた以上に大切にしたいなんて思っていないわよ。いいえ、そうね、少なくともここにいる人たちは精一杯上総のことを、尊重しよう、理解しよう、なんとか受け入れようと努力しているわけよ。わがままいっぱいのお坊ちゃまを、なんとかして仲間に入れよう、受け入れようよね。あんたはそれを、白々しいお仕着せだと思い込んでるでしょうね。そう感じる自分が正しいとか思い込んでいるでしょうね。そうやって上総、あんたはたくさんの人を傷つけてきたわけよ。羽飛くんの立場にもし私が立っていたとしたら、たぶんあんたを半殺しにしていたでしょうね。友だちとして精一杯の善意を仇で返されたようなものなものね」

思わず貴史と目が合った。さっきの「黙ってる」サインはなかった。ただ、じいっと私を訴えるように見つめてきた。なんでだか、こらえきれなくなりそうであつむいた。すぐに視線を戻し、立村くんのお母さんの言葉に聞き入った。

——そうだよ、立村くん。私、いつだって仲間に入ってきてほしかったのに。

——それじゃ、どうしてだめだったの？

——どうすればよかったの？ どうすれば、理解できたの？

「上総、でもそれをあんたは絶対に認めようとしなない」

びしっと、言葉が響いた。呼吸する音、せきすらも今は騒音になってしまいそう。心臓の音だけを聞きながら、私は唇をかみ締めた。立村くんの肩が震えていた。泣いてしまいそうだった。

見ちゃいけないってわかっているけど、見つめてしまう。

「あんたがね精一杯自分が自分だと訴えていけば、ずっと被害者でいられるからね。傷つけた羽飛くんが悪い、理解しようとしなくて菱本先生が悪い、ずかずかと心の中に入り込んでこようとす他の人間たちがすべて悪い。繊細で傷つきやすいぼくちゃんをきちんと取り扱ってくれない社会が悪いってね。上総、あんたがずっと前、なんで『きらわれて』いたのかわかる？」

——「きらわれて」いたって、そんな違う！

思い切って「違うんです！」そう叫びたかった。

けど、その出所が違うとすぐに気が付いた。

立村くんの形相が明らかに変わっていた。

触れるのも、怖い。あのふたりには近づけないなにかが漂っていた。

「そうよ、あんたは『いじめられて』いたんじゃないの。『きらわれて』いたのよ。まずそこから考え直ささい。あんたはねずっと、周りから迷惑がられてきたわけよ。自分を誰も面倒みてくれない、わかってくれないってすねて、他の子たちが一生懸命なじめせようとしても殻から出てこなかった。ずっと殻に籠っているもんだから、他の子たちもどう接していいかわからなくてばたばたしている間にあんたは『いじめられた』と思い込んで恨みがましい目で見つづけたってわけ。あんたはひとりで被害者ぶっていたようだけど、他の子たちがどのくらい傷ついたか一度でも考えたことがある？」

——私のこと、一瞬でも考えてくれたこと、あるの？

——立村くん、ずっと、ずっと待ってたの、気付かなかったの？

さっきまで立村くんのお母さんの言葉をどう受け止めていいかわからなかった。

なんで自分の子をそこまでけなすのか、その理由が全く理解できなかった。

でも、続く言葉に、自分が水になり流れてしまいそうな気がしてならない。

だって、すべて。

みんな、すべて。

——私の言いたいこと、みんな、言ってくれてる。

——絶対言っちゃいけないこと、だけど。

私の本質が変わってなければ、好きだからといって目を瞑ってごまかせる性格が変わってなければ。

——どうしてこんな形でしか、伝えられないんだろう。もっと、もっと別の言い方、あったはずなのに。

「どうすればいいんだろう、どうすれば上総を仲間に入れて仲良くやっていけるんだろうって考えていた子たちの気持ちを、あんたは真剣に考えたことがある？ 自分のことばかり考えて、一瞬でも他の子たちの気持ちを受け入れようと努力したことがないから、何もうまくいかないわけよ。あんたが普通の子よりも何倍もハンデがあるのはわかっているしそれは私と和也くんがで

きる限りのことをするわ。それが親の勤めだから。でもね、ここにいる菱本先生も羽飛くんも美里ちゃんもその他の子たちも、あんたにそれ以上のことをしなくてはならない義務なんて全くないの。そうよ、理解する義務なんてさらさらないのよ。理解しなくたっていいし、本当だったら無視したっていい。それを上総、あんたは『理解することがあんたらの義務だ』とばかりに要求を吊り上げていったのね。ここだったら自分がしてほしいこと全部してくれるものだと思込んでね。だから菱本先生に嫌がらせして、他の子たちの気持ちをずたずたに傷つけて、『もっと自分を丁重に扱ってくれ!』とか言ってるわけよ。そんなことずっとされつづけて、怒らないですむとしたらそれは神さまよね。上総、あんたは何様のつもり? 『理解してほしい』ってのはね、最大のわがままなのよ。あんたのすべきことはね、その人たちと同じくらいのレベルで理解をするよう努力することなのよ」

「これ以上なにしろって言うんだよ!」

初めて立村くんが反撃の烽火を上げた。

お母さんは全く動揺せず、今度は自分の息子の言葉を封じた。

「さっき言ったでしょ。あんたのしていることは、失礼千番なセールスマンが、断られた人たちを逆恨みしているのと一緒だって。あんたには、水掛けられたって電話をがちりと切られたって相手を恨む権利なんてないのよ。でもね、そういうセールスマンにだってちゃんと逃げ場はあるのよ。理解してくれる場所はあるの。たとえば電話セールスだったらコールセンターという場所があってその上司や同僚たちが『なぜ断られたのか』とか『今度はいいお客さんに会えるといいね』とか言い合って、支えあうものなのよ。彼ら彼女らは断られた痛みを知っているし、さらにセールスの方法をレベルアップしていこうと応援することもできるのよ。それは彼ら彼女らが互いを受け入れあっているからなの。決して、断ったお客さんをうらむのではなくて、『どうして嫌われたのか』その理由を自分の中から見つけ出すためなのよ」

「正当な恨みも許されないってわけか」

「正当? 勘違いするのもいいかげんになさい。上総、あんたはね、いつも自分のことしか見ていないし、自分自身を変えようなんて一度も思ってないわけ。どうしてあんたは自分自身に目を向けようとしなないわけ? 理解できないって言うのなら、どうして彼ら彼女らがそういうことを訴えようとするか、考えようとしなないわけ?」

「考えてるさ、だからって」

「あんたの都合のいいように考えてるってことよね。あんたの考えていることはだいたい手に取るようにわかるわ。『人のことを深く考えようとしなない勘違いした人たちが、僕たちみたいな繊細で傷つきやすくてけなげな奴を勝手に決め付けようとしているんだから、当然相手が悪い』ってことでしょう。あんたは一度も、『自分ひとりを被害者に仕立て上げて、相手の精一杯の好意をつっぱねて、相手を傷つけてもそれから目をそらしっぱなし』って思ったことないのよね。そりゃあ、みんなあんたが百パーセント満足できることをしてあげられるとは限らないわ。親である私だってあんたがしてほしいがっていることを理解できるわけじゃないし、してやることだってできないわよ。でもそれはお互い様。理解できないからこそ、いい方法を考えようとするわけよ。さっきのセールスマンと同じ。大クレームの後どうやってこれから自分のセールストークをレベ

ルアップしていけばいいのか、どういう風にアプローチしていけばいいのかを、自分自身の中で考えていくだけのことよ」

なんとなくだけど、立村くんのお母さんが何を訴えたいのか、うすうすと伝わってきた。

目の前で身動きせず聞き入っている菱本先生も、後ろの方で口を真一文字にしている貴史も、そしてさっきまで好奇心丸出しで見入っていた母さんふたりも。

——聞いている。

本当のことを感じ取ろうとしている。うまく言えない。けどわかる。

この人の言葉には、嘘がないんだって。

ちらっと私と視線がからまった。なぜか、怖くなかった。

「上総、あんたは人が受け入れてくれることを当然のように要求しているわけだけど、要求する権利なんてもともとないの。あんたを受け入れられるのは、上総、あんたひとりだけだってこと、いいかげん元服の歳を過ぎてるんだから気付きなさい！」

——元服の歳。

そういえば私も、立村くんも、貴史も。

「十五歳だともう、そうなのよね」

えらくまともなことを、後ろの母さんたちが呟いていた。

私たち、本当は大人にならなくちゃいけないのに。

目の前で震え上がっている立村くんを私は、まどろっこしい気持ちで射た。

——どうして、私たち、大人になれないんだろう。どうして、わかりあえないんだろ。

——どうして、お互い、分かり合おうって、できないんだろう。

今の私にも、できないこと。だから立村くんにもできるわけないって、頭ではわかっている。けど、どうしても、わかってほしい。今、こんなに一緒にいたいってみんな思ってるのに、立村くんだけが逃げようとする。

貴史が片手で「立て、立て」とばかりにあおるしぐさをする。

——わかってる、けど。

いつもの私だったら、絶対そうしているはずだ。

小学校の頃の私なら、ううん、中学一年の、二年の、今よりずっと子どもだった私なら。

——立村くんをこれ以上責めるのはやめてください！

そう叫んでいるはずだった。でも、できない。

「上総、理解されないからいじけるくせをいいかげん直せってことよ」

立村くんのお母さんは足を深く組みなおし、ため息をついた。マニキュアと靴のつま先に小さな星がちらついているように見えた。しぐさひとつひとつが、大人の女って感じで、かっこいい。それでいて上品。確か日本伝統芸能の何かイベントを仕切る仕事をしているってこと、立村くんから聞いたことがある。少しだけ声が和らいでいた。

「人間、親子であっても夫婦であっても理解できないのが当然なの。百パーセント受け入れられ

るなんてそれはわがまま。七十パーセントでも五十パーセントでも、受け入れられるところを探して自分でその器をこしらえていくそれが大切な。あんたは自分が傷つきやすいからといって百パーセント受け入れろって叫んでいるけど、そんなのとんだ迷惑なの。一割でも二割でも受け入れてもらえたことを感謝する以外、あんたは他人に何も要求できないということを知りなさい」

最後に、一呼吸置き、同じにらみ方をしたまま、告げた。

「自分の面倒は自分でみなさい。あんたに言いたいのはそれだけよ、上総」

——私も、そう。

自分で決断するしかない。

それにしても思うのは、ふたり並ぶとほとんど姉と弟という感じ。親子のような年齢差を殆ど感じさせない。計算してみると、二十歳プラス立村くんの年齢十五歳とすると、三十五歳！　そうか、そんなに若いんだ！　うちの母さんたちのむっくりずんぐりした格好とは大違いだった。そんなお母さんに育てられた立村くんが、どうしてあんなに大人っぽく見えるのだろう。中身は全然だけど、それを打ち消すようなしぐさや口調、なんでだろう。

無理やり腕を引っ張り上げ、立村くんのお母さんは背筋をぴんと伸ばした。

「本日はご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした」

さっき立村くんを叱った時とは違う顔を見せ、お母さんはやさしく笑った。

また貴史に一声かけた。そうとうお気に入りの様子。貴史もまた直立不動状態。笑っちゃいけないけど、笑いたくなる。あんた、好みは鈴蘭優じゃなかったの？

「羽飛くん、さっき言ったように、君が罪悪感を感じる必要は全くないの。この馬鹿息子はね、実際そこまでされないと理解できないの。辛い思いさせて、ごめんなさいね」

貴史はまた頭を横に振ろうとしている。「そんなことない」の意味なんだろうけど、きっとあのお母さんには伝わっていない。次に貴史のお母さんに向かい、また暖かい口調で、

「子ども同士のいさかいに親が口を出す格好になってしまいました。本来は私が加害者の母として謝るべきところです。申し訳ございません」

ついでに私のお母さんにも一礼してくれた。なんか啞然としていた様子だったうちの母さん、余計なこと言わずに頭を下げた。また変な目で見ようとしてたら今度こそなんか言おうと思ったけど、大丈夫だった。安心。そしたら今度は、

「美里ちゃん」

私に、そっと向かいあってくれた。どうしよう、なんか、緊張してしまう。貴史に救援を頼みたいとこだけど、あいつも自分のことで精一杯みたい、動こうとしない。

「あ、はい、私」

どもってしまう。ほんとに、皺なんてひとつもない、きれいな女の人だった。

本当に、立村くんを二十歳で産んだ人なんだろう？　信じられない。

「あれの親としてではなく、女性として一言伝えておくわ」

「じよ、せい？」

言葉がうまく出てこない。

——「女性」って、今、言ったよね。

立村くんのぼつの悪そうな顔が視界に入った。あんなに気になっていた立村くんの表情なのに、真正面から見られない。私のことを「美里ちゃん」と呼ぶってことは、きっと、私が立村くんのつきあい相手だってことも知ってるはず。うちの母さんも変なことと思ってないだろうか。息が苦しい。立村くん以上に真っ赤になりそうだ。

「上総みたいな優柔不断な男に惚れたら、美里ちゃん、あなたの本当のよさが見えなくなるわよ」

かきん、そう脳天で音がしたような気がした。

「親としてではないの、女の先輩として」

どうしよう、足が震えている。こんなみっともないところ、見られたくないのに。

誰がどう見てるかなんて、考えている余裕なかった。目の前の女の人……まさしく「女性」…
…は、そんな私にまた笑顔を見せた。

「早い段階で見切りをつけたほうがいいわ」

言われた意味が、わからなかった。わかりたくなかった。

——どうということ？ 立村くんと、私が。

「いいかげんにしろよ！」

「お黙り」

立村くんが怒鳴り無理やり扉を開けようとした。菱本先生が立ち上がって見送ろうと近づいてきた、それを勘付いたのだろうか。ううん、違うと信じたい。今、立村くんのお母さんは私に向かってはっきりと、「親として」の言葉をぶつけたはずだから。あれは「女性」としてじゃなくて、「お母さん」として、としか思えない。

だって私はまだ、「女性」と言われるほど、大人じゃない。

母子の会話はまだ続いていた。隣で私の母さんがそっと背中をさすってくれていた。涙が出そうで出ない。去り際の言葉だけが耳に響いていた。

「女の目から見てあんたがタイプじゃないとしてもね、上総、いやおうなしに一番愛しい男になるのが、自分の息子というもののなのよ」

——女の目。

あんな幼稚なことばかりやっている立村くんと私が付き合っていること、それが母さんたちにばれたから慌ててるわけじゃない。彼氏のお母さんに付き合いをやめるようやんわり言われたから、動揺してるんじゃない。そんなことで立村くんと付き合いやめるようだったら、とっくの昔に崩壊序曲が流れてる。

けど、違う。あの人が出たことは、もっと重たいこと。

「しっかりした方だったわね、あの、立村くんのお母さんは」

穏やかな声で私にささやきかけるお母さん。私はわけわからぬまま首を振りつづけた。

——女が目、なんていない。

元服の歳なんて関係ない。「女が目」なんてほしくないのにどうして、私はあの人の言葉に頷いてしまったのだろう。

私は必死に冷静を保ちながら、はやく一人になってぎゃあぎゃあ泣き喚く場所を探していた。あおむけになっておもちゃ欲しがるちっちゃん子みたいに騒ぎたい。貴史ととっくみあいのけんかのできたあの頃に戻りたい。立村くんに見切りをつけられないのが子どもなら、私はまだ幼いままでいさせてほしいのに。

「おーい、どうしたんだ、立村、手術成功したんだってな」

相変わらず脳天気な声がある。麻酔から覚めてしばらく地獄の苦しみに耐えていた僕に対して、よくもまあ、言えるもんだ。ただの盲腸だったみたいだから、たいしたことないと周りには言われているけど、当人にとってはたまったものじゃないのだ。

春休み中だったのは運がよかった。ほとんど誰にも気づかれずにすんだ。

手術して間もないし、たぶん父さんも他の人には連絡していないだろう。母さんにはさすがに電話をかけたらしいけど、「別に死にそうなわけじゃないんでしょ！」ということで一度顔を出したっきりだ。まあ僕としたらそれの方が精神的に落ち着くけれどもだ。今のところ、父の居ない間頼みごとはみな看護婦さんにまかせっきりだった。経過は順調なので、二、三日で退院できるはずだ。できれば誰も見舞いにこないでほしかった。こんなパジャマ姿でひっくり返っている様を見たい奴なんて、ふつういないだろう。

なのに、なぜか本条先輩だけはかぎつけてきた。誰が教えたんだろう。

起き上がって本当だったら話をしたいところだが、タイミングよく緊急を要することを頼みたい。これは男子だからこそ、頼める利点である。もう先輩後輩気兼ねしてられない。

「本条先輩、いいですか」

僕はそっと呼びかけた。いきなり紙袋からグラビア写真集の束を取り出し、

「ん？ どうした立村。お前、たまってるだろ、写真集持ってきてやったぞ。早く抜けや、動けるだろ」

別の意味で溜まっているというべきなんだろう。僕は首を振った。

「すみません、下の、あれを取ってもらえますか」

僕は少し横にずれた格好でベッドの下を指差した。

「あれって、尿瓶か？」

「そうです。できれば今すぐに」

「おいおい、お前、がまんしてたのかよ」

「今朝から……理由は、想像してください」

もちろんナースコールを押せばすぐに看護婦さんが来てくれるのは分かっている。手術の時には素っ裸になってしまったんだから、いまさら恥ずかしがることもないだろうとは思う。だが、やはり僕にはまだ抵抗がある。尿瓶を取ってもらうくらいならいいけれど、大抵の看護婦さんはみな、親切に全部やってくれようとする。僕が自分ひとりでやると言い張っても、向こうの方で何も言わずにしてくれる。仕事だから当然なんだろうけど、やはり緊張するものは緊張する。父がいれば代わりに取ってもらえることもあるのだが、その辺も巧くいかない。限界に達する寸前だった僕にとって、やはり本条先輩は救いの神だ。

ひょいと、透明な瓶を持ち上げて、僕の目の前にすとんと見せた。

「へえ、これでやってるのか。手が届かないのか」

「丁度、ぎりぎりのとこなんですけれど、あまりうごくとう傷が痛むんです」

僕はベッドの中で騙し騙し、何度か寄ろうとした。

「まあな、ここの看護婦さん美人が多かったもんなあ」

「そんなんじゃないです！とにかく、早くください、あとそれと」

もうひとつ、一呼吸置いて僕は伝えた。

「二分くらい、カーテンの奥で待っていてくれるともっと助かります」

こんなところで男の放尿シーンなんて見たって本条先輩は嬉しくもないにきまっている。僕の知る限り、この人は完全なノーマルだと思うし、ふつうのあれやこれやは得意だろうが、嗜好などにあまり極端なずれはないような気がする。というか、そんなもん、見たってむかつくだけだろう。

「いいじゃねえか、早くやっちまえよ」

「本条先輩、そういう趣味だったんですか」

これがもし女子だったら……清坂氏あたりだったら……理由をつけて最後までがまんすると思う。でも、もう僕は限界に近づいていた。一刻を争うってこういうことをいうのだろう。身体の一部が痺れている。生理的行動が一切できないって実に、地獄だと入院期間中思い知らされた。

「とにかく早く、貸してください。本条先輩、この歳でもう布団をびしょぬれになんかしたくないですよ、俺だって」

「まあな、おねしょはしたくないよなあ、立村」

いきなり本条先輩はベッドの端に腰を下ろした。

「看護婦さんに全部始末されるんだもんなあ。十四にもなってなあ、もらしはやりたかねえよなあ」

「何言ってるんですか、とにかく、下さい、早く」

「いって、俺が代わりに面倒をみてやるよ。ほら、出せ」

「出せてなにをですか！」

にやにやししながら本条先輩は僕の掛け布団をめくり、いきなり片手を押さえた。どこかっていうとまあ、その、こらえているところといたらいいんだろうか。ふつう切羽詰っても、中学に入るとよほどのことがない限り手を使って押さえたりしないだろう。僕だって学校ではしないだろう。そうせざるを得ないのがどういうことか、本条先輩はわからないわけないだろう。

「ほら、相当しんどそうだなあ、顔、真っ赤だぞ」

「あたりまえでしょう！ 十二時間こらえてるんだから。本条先輩は経験ないんですか！」

「ないとはいわねえよ。俺、六年の時、もらしたもん」

さらっと答える本条先輩。絶対それって、嘘だ。

「大きい方だけどな、だから、それほど目立たなかったけどなあ。バスの中で、やっちまった。腹を下してたからなおさらまずかったんだらうなあ。帰り道、みんなが寝てる時にな、おもいっきり」

——ああ、男の場合はそちらだとどうしようもないよな。

いつぞやの宿泊研修時、僕が偉く神経質に「ペットボトルを用意しろ」とわめいたことについて疑問視していらしたようだが、今考えるとそれも納得だ。本条先輩は、もっと大きな問題（文字通り大きな）を見据えていたってわけだ。

「本条先輩、で、周りには気づかれなかったんですか。なかったでしょうね。そんなことをしてかしてたら、堂々としてられませんから」

「お前とは違うよ。とにかく、今、お前の気持ちがいかに大変かはよくわかる。だから、ほら、意地張るなよ。まじで膀胱炎になっちゃったらどうするんだよ」

心配してくれるんだかなんだか。本当に心配してくれるんだったら、頼むから尿瓶だけ置いてカーテンの外に出てほしい。ひとりで用を足して、見苦しいものを隠してしまうから。

「本条先輩、ふざけないでください。今そこまで見抜いているんだったら、俺が今の一瞬にでもどうなりそうなのかわかるでしょう」

「だから、おとなしくしろよ」

本条先輩が空いている手で無理やり僕の片手を取り去る。手早すぎる。抑えがなくなったとたん、強烈になだれうつものがある。精一杯こらえるのだが、非常に痛い。

「もうやめてください、本条先輩、お願いですから、はやく、もう」

「黙ってろ。ほら、俺に任せろ」

あっという間に本条先輩の手は、尿瓶を必要とする場所に押し当てている。チャックもボタンもないパジャマを着せられているから、その辺はあっという間だ。誰もいなかったらさぞ極楽、と思えるのだろう。しかし、本条先輩の膝の上に置かれている尿瓶に、一気に放出なんてできるものか。それよりもすべてを見られている、それが情けない。恥ずかしくはないが、見せびらかしたいものでもない。断じて言うが僕は露出狂ではない。

「ほらほら、どうしたんだよ。はやく、しろって」

「できるわけないでしょう、先輩、貸してください」

「お前もずいぶん小さいなあ。しかも全部、毛そってやんの。まあ手術前だもんなあ。大きさが仕事と影響するわけじゃねえもんな。ほらほら、はやくじゃあつとやっちゃまえ」

「見つめられたら出るもんだって、出ませんよ」

もう、出たくてならないのに、がまんの限界を超えて痛くてならないのに、それなのに、出ない。本条先輩がじっと、尿瓶の透けた中身を見つめているからだ。動いているのが分かる。こんなところでなぜ、元気なんだか。情けない。

「第一、汚いものを」

「俺が汚くないって言ってるんだから、大丈夫だってあれだけ言ってるだろ」

大きくため息をつくとき、本条先輩はゆっくりと身体を近づけた。もちろん片手の尿瓶はずらさないまま。もちろんここで僕があきらめて、思いっきり出してしまったら勢い良く黄色い水分がたまる場所を見られるはめになる。まあそれはかまわないが、本条先輩の前で一部始終を見られるのはやはり抵抗がある。夏の評議委員宿泊研修時で、お互いの竿をしごきあった時だって僕はかなり、神経をすり減らしたのだ。それよりましといえはましだけど、でも、見られなくな

いものではある。

「ほらほらほら、いいか、立村。お前、感覚がなくなっちゃってるだろ」

次の瞬間、唇に硬い痛みが走った。

ほおとあご、それと、唇の粘膜。

唇の間を押し上げようとする、何かの物体。

「や、やめてください、本条先輩」

言葉に出ない、覆われた。

身体の中から力が抜けた。もう僕に抵抗する力は残っていない。押し返そうとしたとたん、濃い色の液体がしゅるしゅるとたまっていくのが見えた。本条先輩はしっかりと、片手を抑えたままだった。

「ほおら、すっきりしただろ」

「——先輩、こういうの」

生理的強烈な欲求から解放されたとたん、力がみなぎり僕は本条先輩を突き飛ばした。左腹がちくちく痛い。がまんしすぎたせいか、肝心要のあの部分もまだひりひりしている。

「変態、って言うんですよ」

「可愛い後輩が出すもの出せないで苦しんでいる時に、身をもって助けてやった先輩の恩も忘れてか。全くお前、ガキだなあ」

高らかに笑い、最後にゆっくりと、

「まあ、次の水分および精力をこしらえるためにな、まずは果物を食べ。お前林檎が好きだったよな。手を洗ってきてから向いてやるよ。待ってろ」

信じがたいくらいたまっている黄金色の輝きを持ち上げてじっくり眺めた後、本条先輩はベットの下に置いた後、僕の頭を軽くかまして出て行った。

沙名子に連絡して彼女の部屋に向かったのは朝の八時過ぎだった。僕の仕事がたまたま昼出勤でよいとのことだったので、できれば早い段階で話をしておきたかった。もっとも沙名子にしては別の目的もあったに違いない。元夫婦とはいえ、彼女なりに礼儀を求めてくるのだから。

「ね、忘れてない？」

「何を」

「今日はなんの日よ」

つとんげんな口調が、なぜか沙名子から出るとまったくいやみにならない。

そう思うのは元旦那である僕だけなのだろうか。

「クリスマスイブは昨日だったし、用意してないよ」

「あらそう、じゃあこれから用意してくれるのね」

かくして、僕は沙名子のリクエスト通り、駅前のホテルで朝食バイキングをしたためることとなった。もちろん、僕の「クリスマスプレゼント」としてである。

沙名子は真っ赤なコートをさくっと脱ぎ、クローク係のホテルマンに渡した。クリスマスイブの夜を楽しみ、その後そそくさとチェックアウトせねばならない若いカップルたちがレストランにかなりたむろっていた。だいぶ眠そうな目をした女の子と、荷物をかかえつつもあたふたしながら荷物を抱えている男の子と。おそらく年齢は十代後半だろう。アルバイトしてしっかり彼女を楽しませる資金を蓄えてきたのか、それとも親のすねかじりなのかは定かではない。

「それにしてもここのフレンチトースト、おいしいわよね」

たっぷり、フレンチトーストを山盛りにして、その上にメイプルシロップをたらりとかけた。この人は以前からそうなのだが健啖家で、とにかく美味しいものが好き。舌は確実。僕からしたら沙名子はパティシエとか料理人とかそのあたりを目指した方がよかったのではないかと思うくらいだ。実際彼女のいた頃は、食事を外で取ることに喜びを一切感じなかったからだ。今は、というとなんとも言えないが。

「なんでもまる一日、シロップに食パンをつけておいて、それから焼くらしいね」

「そのくらい手間をかけなくてはだめなのよ。何事にしてもね」

あっという間に沙名子は山盛りのフレンチトーストを平らげ、周回しているウエートレスに、

「珈琲二人分ね、マイルドブレンドで、黒砂糖で」

一声かけた。もっと別の料理を取りにいけばいいのと思うのだが、沙名子曰く、

「あそこのレストランはね、フレンチトーストが絶品だけどそれ以外の料理は中の上クラスなのよ。まあでも、フレンチトーストで十分元は取れているわよ」

とのことだ。それでもフルーツサラダとスモークサーモンはテーブルの上に載っている。

「ところで、和也くん」

「なんでしょうか、沙名子さん」

沙名子は珈琲が来るまでの間、メロンとオレンジをそれぞれ口に運びながら、今朝の最優先話

題をさっそく振ってきた。もちろん、僕も異存はない。

「立村くん家のお坊ちゃまは相変わらずなのかしら」

「おそらく今ごろ、朝帰りだな」

「ったく、あの馬鹿！」

「いや、厳密にいうと、僕がご機嫌を損ねてしまっただけのことであって」

僕は微笑しつつ、おとといの出来事について語ることにした。たいしたことではない。ただ、「立村くん家のおぼっちゃま」がお年頃だという報告に過ぎない。沙名子も黙って頷き、届いた珈琲の香りを楽しんだ後、

「ご報告、よろしく」

口に運んだ。

「上総に彼女がいるのは聞いているだろう。この前菱本先生と話をした時も、ちらっと出ていたけれどね、ほら、清坂さんとかいった」

「承知承知。奇特なお嬢さんがいるものねえ」

沙名子も頷きつつ、口元やわらかく「それで」と促してきた。

「おとといのことなんだが、たまたま仕事の手が空いて早めに戻ってきたところ、あいつがその彼女を我が家に招待して、なぜか居間のシャンデリアの下、懸命におもてなしをしていたんだ」

「連れ込んで？」

沙名子は眉をひそめた。違う、違うと僕は指先を震わせて伝えた。

「中学生とはいえ、やはり男子たるもの、どうやって恋人を喜ばせるかというのを真剣に考えていたんだろうな。あいつもその点、意識はしていたようだな。いやほんと、料理も全部手作りでき、おそらく前の日から仕込みとかしていたんだろうな。珈琲・紅茶、全部用意していたし、部屋も思いっきり掃除してたな。さすが沙名子さんよく仕込んだな、といわんばかりのセッティングだ。いやほんとあれには笑ったよ」

「出張ホストって感じ？」

「言িয়েて妙」

僕は沙名子の指先にまだ透明のネイルが施されているのに気がついた。

夫婦でいた頃にはただ何気なく見えたものが、一度離れたとたんに新鮮に映るのが不思議だった。

僕は沙名子を、十年以上もの間、どこまで見つめてこれただろうか。

「でも本当に、それだけだったわけ？」

「ああ、それは大丈夫だった。ほんと、おままごとだな。上総が一生懸命彼女のご機嫌を取っている姿を陰で観察するのも面白いと思ったんだが、やはりこれは親の仕事だろうし」

「当たり前よ。年頃の子もたちだもの、親なりの仕事はあるわよ」

そうなのだ。僕はこぶりのステーキを皿に山盛りにしたまま、食いついていた。沙名子の好むフレンチトーストよりも、今の僕には肉の方が腹持ちよい。

「それで、上総の可愛い恋人さんは、ちゃんとお家に帰ったわけ？」

「ああ、あいつがしっかりバス停まで送っていった。プレゼントも渡していたみたいだけど、あれはなあ、どうだろうな。沙名子さんどう思う？」

「どんなもの？」

「ちりめんの袱紗。たぶん『おちうど』のおかみさんがうまく融通してくれたんだろうと思うんだがな」

沙名子、思いっきり吹き出し笑いこけた。上総には悪いが、それも当然だろう。

「全く、あいつ何にも女の子のことわかってないってわけね。せっかくふたりきりのクリスマスをたくらんだにもかかわらず、クリスマスプレゼントが、袱紗？ 喜ぶわけじゃないの。いい、女の子にはね、花束が一番なのよ。和也くんもそのくらい、わかるでしょう？」

ということは、これから僕は花束を用意して沙名子に渡さなくてはならないということか。

「鉢物だったら、だめかな」

おそろおそろお伺いを立ててみた。

「女の子には向いてないけれど、女性にはOKよ」

ああ、やはり僕たちは夫婦だったのだ。直感、しっかり伝わる。

「彼女のいる間は僕もある程度遠慮して様子を伺っていたんだけどな」

僕は少し呼吸を整えた。やはり僕なりに「父親」の義務がある。

「やはり、この機会に男女交際に関して注意を促しておいたほうがいいと思ってさ」

「それは当然ね。男親が男の子にすべき教育よね」

「早い話、上総に少し説教したというわけなんだ。誰もいない部屋に、女の子を呼び入れるのは決して褒められたことではないとか、まあそのあたりだ」

「当然、性教育もね」

沙名子は全く笑っていなかった。あれだけうまそうに飲んでいた珈琲もカップに半分以上残っている。

「男の子のことは男親が教えること、というのが沙名子さんの考えだったものな」

「そういうことよ。でも、上総にそれ通じたのかは疑問ね」

「おっしゃる通りだ。あいつ照れたのか恥ずかしいのかよくわからないが、すぐ部屋に籠城してしまった。しかたないんでこちら朝、改めて話をしようとしたらすごい勢いでわめきちらし、友だちの家に逃げ込んでしまったと、そういうわけだ」

「友だち？ あとでお礼の電話入れておかないとまずいわね」

「そこのところは沙名子さんの判断に任せる。ちゃんとそこの家からは連絡があったので心配はしていない。変に街をふらついているわけでもなさそうだし、一安心なんだが、しかしだな」

息子ゆえに、名誉は守ってやろうと思う。

男同士の、一種の盟約だ。

「まったくね、思い立ったら何しでかすかわからないのが、上総なのよほんっとに」

沙名子は珈琲を飲み干し、おかわりを注文した。

「そこのところが、ほんと、私にそっくりよね。顔は目のパーツしか似てないけど、本質はほんっとに私の血引いてるわよ。詰め甘いところが和也くん似ただけだね」

余計なお世話である。

よく取材でここのレストランを使うのだが、確かに黒砂糖のみでいただくエスプレッソは極上のうまみがあり、なぜかよい記事を書き上げることができる。その験担ぎというわけでもないのだが、沙名子と会う時はいつもホテル内のレストランを利用することが多い。

「それにしてもねえ、やはり、一度、その清坂さんというお嬢さんのお宅にご挨拶しておいた方がいいかしらねえ」

沙名子はため息を吐いた。

「子ども同士の付き合いだし、それはそれでいいんじゃないのか。むしろ上総の場合、男同士の友だちの方に声をかけたほうがいいとは思う」

「でもねえ、何かがあってからでは、遅いのよ。特に上総の場合はね」

言いたいことははっきり言葉にしなくてもわかる。沙名子の心配もごもつともである。僕にも同じ年頃を通り抜けてきたゆえの経験が残っているし、今の上総がどういう精神状態で思春期を迎えているかは想像できなくもない。ただし、僕の経験をそのまま今の上総にスライドできるかという、そうとは言い切れない。上総は僕と沙名子の共同制作で生まれたわけであり、沙名子要素の強い子どもでもある。僕がつかみ取れるのは上総が男として生まれたから、その性の共通点だけだろう。

「菱本先生ともこの前お会いして、いろいろ話をしたけれども。上総の性格はやはり、いろいろ軋轢を生んでいる様子」

「家庭訪問以外でか？ 沙名子さん、確かその時は僕と一緒にじゃ」

「いろいろコンタクトする方法はあるのよ。偶然、喫茶店でお茶を飲むとかね」

何かひりひりするものを感じるのは気のせいだろう。僕は無視を決め込んだ。

「とにかく、上総って子は計画を細かく立ててそれを綿密に実行しようとするのよ。いろいろと準備して、自分のやりたいことを絶対にやり遂げるといふ強い意志はあるわけよ。それは認めるわ。確かにあいつ、青大附属に入学しようとした時の集中力は相当なものだったもの」

沙名子が家庭教師張りに張り付いてしごいた成果と僕は思うのだが。

小学校時代の上総の能力で、青大附属に入学できるとはまず思えなかった。

自分の息子だけに、そのあたりの出来はあまりよくないのはしかたない。

「それがお勉強だけに出ればいいんだけど、どうも上総の場合、いろいろな問題行動にそれが顔を出してしまうよね。ほら、この前夏休み中、いきなりバスから飛び降りて一人で行動したとかいう話、あったでしょう。宿泊研修の時よ。あの時も菱本先生はかなり驚いていたし、みな上総が衝動的にやらかしたことだと思っているようだけど違うのよね。わかってもらうのは大変だけど、それもしかたないわ。だって親である私たちだってあいつのことは百パーセント理解できていないんだもの」

どう答えればいいのかだろう。沙名子はさらに続けた。

「ほら、覚えてる？ 上総が修学旅行に行かなかった理由」

「ああ、あれは神経性の夜尿症だったんじゃないのか。もうすっかり直っているようだが」

と、僕は沙名子から聞かされている。もっとも上総がそのことを知っているかどうかはわからない。六年生にもなっていきなり、布団に地図を描いてしまった状況ではあいつの性格上、まず無理だろうと判断したとのことだったが。当時十二歳とはいえ、やはりプライドはあるだろうからそのことはあえて何も言わないで置いた。

「違うのよ、まあ今だから言えることだけど、これからのこと考えると和也くんにも話しておいた方がよいわね。あれ、上総が自演自作の芝居よ、芝居」

「芝居？」

「そ、よくもまあそこまでねえと思ったわよ。ちょうど修学旅行二日前だったかしら。いきなり上総が真夜中、泣きながら私に打ち明けるわけよ。おねしょしちゃったから修学旅行行くのが怖いとかいって。みたらまさにそういう感じに大道具小道具全部セットアップされてるわけ。布団は水浸しだし。でもね、すぐに気付いたわよ。あれ全部、お茶よ。それも私がお客様用に用意してある玉露を使ったわけよ！ ほんといい香りしてたわよ。部屋の中が新茶の香りっていったい何？ もったいないったらありゃしない」

「ちょっと待て。上総が何をしたっていうんだ？」

初めて聞いた話に、僕は少しとまどった。沙名子がまだ妻だった頃の話で、事後承諾のような形ではあった。当時、学校でいろいろストレスを溜めていたらしい上総が、修学旅行に行きたがっていないのは知っていた。でも授業の一環でもあるし無理にでも行ったほうがいいのかという結論で準備をさせていたはずだった。それがかなり上総には堪えたらしく、体の方に拒否反応……つまり夜尿症……がいきなり起こってしまったという。もちろん一過性のものであり、尾を引くことはなかったけれども、やはり万が一旅館の布団でやらかしてしまったら最後だし、これはしかたないと沙名子が判断し、休ませたはずだ。

それが、狂言だったというのか？

「つまりね、上総は何を考えてたかっていうと、私たち親が納得する、修学旅行の休み方を計画してたってことよ。よくおねしょの有無を確認するけれども、それはそうよね、直ってない子、かなり多いと聞くもの。でも上総はそのあたりのしくじりはほとんどなかったし、妙だとは思ってたわ。大量にお茶をシーツにかけて、ご丁寧にも下半身と上半身一部をぬらす演出して、最後には泣き真似までしてるんだものね。怒鳴るのが私の流儀だけど」

「本当に、よく押さえたな」

沙名子は口よりも先に手が出るタイプの母親だ。上総はほとんど沙名子からスパルタ教育を受けたようなものだ。少しいじけたところがあるのも、それに影響されているのかもしれない。もっとも沙名子からすれば、僕の無関心さに問題があるのではないかとのことだが。無関心も何も無い、男の子を教育する場合は、干渉し過ぎないことが大事なのだ。

「あいつが家で真面目に勉強している間に、学校に行って直接話をしたのが、結果としてよかったとは思うけども、私は。品山の子どもたちと上総が合わないのは承知していたけど、ここまでとは思わなかったし、これはやはり、青大附属にあいつを押し込むしかない判断するきっかけ

になったもの」

周りからは僕たちの離婚についていろいろと取りざたされている。本当のことを言えば僕も、沙名子がなぜ、籍を抜くことをあれだけ執拗に求めたのかつかみかねている。本人曰く、身軽に仕事一本に打ち込みたいとか、年頃の息子に張り付きすぎる母親にはなりたくないとか、全く説得力のない言葉を口にしてはいたけれども、おそらく半分は当たっていて半分は胸の中に納められているだろう。沙名子には沙名子なりの、教育方針があるのだ。

そのひとつが、「思春期の男の子は母親よりも父親の手によって育てられるべし」。

決して、そんなことはないと思うのだが。特に上総のように、やたらと手のかかる子どもならなおさらのこと。でも沙名子はそれを曲げようとしなかった。一ヶ月に数回は顔を出し、さらに一週間くらい泊まっていったりもするのだから、決して僕や上総のことを見捨てたわけではないだろう。あえていうなら、他の男と出会ったわけでもないだろう。なぜ、こういう方法を取りたがったのか。それが僕にはわからない。

もちろん、十四才の息子ともなれば、それなりに男として目覚める部分もあるだろう。

おとといの例の彼女とのひと時もそうだし、部屋の中にやはり隠されている……使う目的はわかりきっている……ものとかもある。ただ、上総は思っているよりもそのあたりの目覚めが遅いようなので、最低限のことだけ話しておけばよいかと思っていた。簡単に、「妊娠だけはさせるなよ」程度のことはあいつが中学一年の段階できちんと話をしておいたはずだ。しかし、どうだろう、今回のことを考えると、もっとつつこんだ話をしておいたほうがいいのかという気がしてならない。

「和也くん、上総にいわゆる性教育みたいなのはしているわけ？」

いろいろ考えていると沙名子につっこまれた。珈琲が相当美味しいらしい。三杯目追加だ。料金に含まれているからあまり気にしないでよい。

「男だからね、そのあたりはそれなりに。たとえば避妊具の使い方とか、女性に対しての意識の仕方とか。レディーファーストの意識だね。あいつはやはりまだまだ子どもだから、あまり心配はいらないと思うんだが」

「いいえ、それはまずいと思うのよね。和也くん、やっぱり男子の場合、どうしても性欲がほとばしってしまう時期でしょう。上総も例外とは言えないわよ。いくら頭にそれなりの知識が入っていても、やりたいと思ったらやってしまうのが、上総なんだから、少し気を付けてもらわないととんでもないことになるわよ。たとえば妊娠させちゃうとか」

「それも僕なりに考えてるよ」

だから……。

僕は、沙名子の顔をじっと見つめ、ゆっくりと問うた。

「思春期の一番難しい時期を迎える息子のために、もう一度、戻ってくるという選択肢は、ないのかな」

「三年後には考えておくわ」

きっぱりと断られるかと思ったが、そんなことはなかった。沙名子は僕に微笑んだ。妻の頃は見えなかった伶俐な微笑みがきらめいた。

「上総が青大附属を卒業して、きちんと大人としての意識を持つことができるようになり、独立するようになってからね。それまでは母親が少し、あの子から距離を置いておいたほうがいいと私、思うのよ。もちろん要はしっかり押さえるけれども。やはりあの子は父親の手で育てられるべき子だと思うから、私はやはり離れていたいなのよ。でないと、とんでもないマザコンになるか、卑屈なだけで女子を見下すような嫌な男になるか」

「そうならないように、力を合わせていくというのよ、いい選択肢だと思うんだが」

「そうね、考えておくけど、まだまだ先よ。和也くん、配偶者関連の税金を考えると、少なくとも六年間は間を空けておいたほうがいいと思うし、それに和也くんだって、別の人を好きにならないとも限らないじゃない？ 上総の新しい母親になる人とか見つけるかも」

「それはないよ、絶対に」

沙名子にはっきり、伝える言葉。まだ時間がかかりそうだが、長期戦で行くしかない。

「悪いけど、あの頑固で融通きかない上総のような息子を、喜んで受け入れる新しい母親なんているわけないよな。沙名子さんもそう思うだろ。何をしでかすかわからない息子なんだから、きっと火傷するよ。それならやはり、沙名子さん、君だけしか」

「ご馳走様！ じゃあ、あとで花束よろしくね」

僕が言いかけている言葉を振り切り、沙名子はそそくさと赤いコートを羽織った。

「じゃあ、遅くなったけどメリークリスマス！ 詳しくはまた今度、珈琲でもよろしくね」

最後にどうしても言えなかった。

僕が欲しているのはもちろん、上総の母親としての沙名子であるけれども、それ以上に二十歳の頃から一緒に暮らしてきたかけがえのない女性だということ。

「メリークリスマス！」

——三年も待つのはごめんだ。

悪いが僕も、上総の父親なのだ。おそらく優柔不断だとかぼんやりしているとか、困ったところばかり僕の遺伝子から分け与えてしまっているようだ。だが、沙名子の言う通り、「やりたいと思ったら綿密に計画を立ててやり遂げてしまう」性格は僕の中にも若干あるはずだ。そして、何年か多く生きている僕の方が、おそらく上総よりもその術を上手に操ることができるはずだ。

——時辻沙名子をふたたび、立村沙名子に戻す計画。

僕は残りの珈琲を黒砂糖で飲み干し、ゆっくりと手帳を開いた。

計画を立てよう。まずはそれからだ。

夏だから暑い。暑いからのどがかわく。

当たり前、だから、ジュースを飲む。

「それだけのことなのにさあ、なんか寒いよね、美里」

隣でリップを塗りなおしている美里に私は話し掛けた。宿泊研修二日目、二年D組一同マイナス二人を乗せたバスの中。クーラーがやたら効き過ぎ。もう冷凍しそう。

「どこがよどこが！ どこかの誰かみたいに、体温感覚勘違いしたこと言わないでよね！ こずえってば」

「あんた、暑いと言いたいわけ？ ああ、いたよね、夏の暑いさかりでも真っ白いジャケットが手放せない哀れな奴が約一名」

美里のダーリンがバスに乗り込んでいないからって、私に八つ当たりするのはやめてほしい。でもほんと、寒すぎる。薄いキュロットとTシャツだけなんて、ちょっと私、エアコンを甘く見すぎていた。ほんと、しゃれでなく冷える。

「美里、ほんつとに悪いんだけどさ、窓際に替わってもらえる？」

「え？ もしかして酔った？」

美里はきょとんとした顔で私の顔をうかがった。まずいまずい。明るくしなくっちゃ。

「ううん、なんかね、ちょっと疲れちゃったみたい。おなかもぽんぽんだし、ほら、さっきのパフェとジュースがすごいでしょ美味しくて、どうもおなかの調子がね」

何言ってるんだろう、私。まったく意味不明。美里もわけのわからない顔をしていたけれども、こくつと頷き、

「じゃあそうだね、窓辺がいいよね。もし、具合悪かったら、言ってよね」

「エチケット袋用意してるからそっちは安心、まかせといて」

酔っているわけではないんだけど、やはり、できれば今の私、目立たないところにいたい。ちょっとばかり、元気印で売っている私としても、力を抜きたいこともあるわけだ。

昼ご飯を黄葉散策の後、たっぷり食べて、さてホテルに戻るぞと早めに出発したのが一時間くらい前。ところが、やたらと熱血およびやりたいこと一杯の菱本先生が、

「せっかくだからもう一山越えて、行ってみようか！」

とよくわからない自然公園の名前を出したことから、予定と時間が思いっきり狂ってしまった。もっとも私だって面白いこと、新しいことは大好き。羽飛も美里ものりのりだ。それならどんどん行きたいに決まってる。だから

「わあい、どんなとこどんなとこ？」

と、騒いでしまった。一部の不安げな分子を無視してしまったというわけ。

責任は私にある。そうなのよ、責任取らなくちゃいけないわけ。

食事の時に生イチゴジュースをたっぷり飲んで、プラスチョコレートパフェをしっかりと平らげた後なんだから、しかたない。そう思うしか、ない。

私はキュロットスカートの縫い目を軽くひっぱるようにして、奥まで手を入れた。ぼこっと膨らむのをポシエットで隠した。ちょっとお腹が痛いだけに見える。おなかさすっているだけ。せいぜい「生理中でおなかいたいの」程度でごまかしが効く。

そう思わせておかなくちゃ。私だって恋する乙女。恥じらいはそれなりにある。こんな格好、男子に見せられるわけがないじゃないの。特に羽飛なんかには！

先頭、通路ど真ん中に菱本先生がしっかり腰を下ろしている。男子列隣には羽飛が、窓際向こうには本来美里の「ダーリン」たる立村が座っているはずだった。

菱本先生から聞いた情報によると、恋人清坂美里のもとへ夜這いしようとして、熱を出しぶったおれたというから大笑いだ。悪いけど私はそんな情報、ちっとも信じてはいない。当たり前、あんな弟分の立村に、そんな度胸あるわけがないじゃない。ガセもいいところ。でも笑える。隣の美里のことを考えるととてもそんなこと言えないけどね。

さて、ほんとは私のダーリンであってほしい第一候補、羽飛はひたすら菱本先生と語り明かしている。もしかしたらクラス男子同士よりも熱いかもしれない。菱本先生の情熱的な熱さと、羽飛の元気で明るい太陽ののりとはちょっと違うような気がするけど、そんなのどうでもいい。だって私の座っている席からは全く声も聞こえないし、時折男子の周囲が盛り上がるのが空気で伝わるだけ。

美里には聞こえているらしい。女子同士で話すのも退屈そうな顔していた。

「あんた混じりたいんだったら席替わってもらえば。羽飛もいっていうんじゃないの」

「こずえもいっしょにいればいいじゃない。貴史と一緒にだよ。あれ、どうしたのよこずえ。なんか具合悪そう」

まずいまずい、ほんとに美里に見破られそう。でも酔ったわけじゃないし、空元気を出す。

「ってわけでもないよ、ただ、なんとなくおとなしーくなりたい、気分なのよ。お嬢さまの気分」

「もしかして、あれ？」

小さい声で、美里が耳打ちする。私は首を振った。

「違う違う。それは先週終わっちゃったよ。美里はまだ？」

大慌てで美里は首を振った。

「知ってるくせに、言わないでよ」

「ごめんごめん、まだなんだよね」

思いっきりぱしっと肩を叩かれた。きゃあ、まずい。慌てて膝をくいと締めた。

「それじゃ、気分良くなったら混じりにきなよ。私、貴史たちと話してくる」

——いつ気分良くなるかなんてわかんないよ。とにかく、ホテルにたどり着かない限り無理無理！

ほんとは私だって、ダーリン羽飛のところでエッチ話もちかけたいよ。

当たり前じゃない。ここで顔出さないでどうするの。

でも、こんなところ、どうして見せられるっていうの。隣には羽飛がいるってのに、こんな格好見せられるわけないよ、ほんつとに。

——羽飛ってば、一体なに考えてるんだらうな。私のことも美里のことも。

ごくふつうの友達としてならば、羽飛はめっちゃくちゃ楽しい奴だ。私も最初、ストレートに「私はあんたのことが好きよ」と言わなければよかったと後悔している。どうも羽飛の性格上、恋愛対象にならないのに告白されたら、相手のために遠ざけなくてはならないと思いついでいるようだった。これは幼なじみたる美里からのご意見だ。悔しいけれど、あいつの性格のよさがわかってしまうのもまた確か。私は簡単にあきらめる性格じゃない。羽飛も災難だなあ、とは思っているけれど、あいつの性格が良すぎるせいなのだから、しょうがないよね。

今日は立村がいないから羽飛・清坂体制でのバス仕切りが行われている。私も手伝いたいところ。とにかく盛り上がることこの上なし。行きはカラオケ大会だったし、さっきまでは「古今東西」をやったり、伝言ゲームしたり。私だって、変なところの力が抜けてればもっと楽なのに。

——早く、私を「自然」から解放してよお。

そう、私はただ今「自然」との激しい戦闘中なのだ。

自然が私をさっきから、両手一杯に広げて、あの世へ連れて行こうとしている。まじで引き込まれたらどうしよう。ほんつと、バスの中で、まさかその場でジャーなんてことになったらどうするの。高速バスのように、トイレ付きならまだいいけれど、こんなところでなんて、考えることもできない。美里、菱本先生、羽飛にもろ見えだ。お金を取ってってことなら、「まあ少しは考えなくちゃ」とも思えるけど。いやいや、それでも絶対にいや！

イチゴジュースだって、たったの一杯。チョコパフェだって、水分なんてほとんどなくて、ケーキとクリームとアイスクリームだけのはず。なんでこんなに水分がおなかに溜まっちゃうわけ？ やばい、足が痺れてきた！

「おーい」

外に声をかけてみた。

「なに叫んでるのよ」

「呼んでみただけだって。なんとなくそういう気分なのよ、ああ」

誰が自然を呼ぶかって。自然との戦いは、今のところ思いっきり、私が不利っぽい。

左手で縫い目をさすりながら言い聞かせた。

——ちっ、騒ぐな！ ホテルまでがまんしなさいってば！

しばらく美里は羽飛と菱本先生を相手に馬鹿話をしてきたのだけど、別のところでうわうわうなる男子が現れ、しかたなく席に戻った。バス酔い犠牲者、一名なり。すぐに美里は彰子ちゃんからエチケット袋を受け取り、前の方に回した。そこだけ窓を開けたので匂いは籠らなかった。

「あれ、彰子ちゃんから、メモもらったの」

美里は私の隣に戻り、紙を開いてささっと読んだ。すぐに振り向いて彰子ちゃんへ片手を振

った。「読んだよ」の合図らしい。

後ろの長い列に座っているのが奈良岡彰子ちゃんだ。ちょっとぼっちゃりしているけれども、笑顔がめちゃくちゃ可愛いのだ。女子から見ると彰子ちゃんの笑顔は百点満点、体重二十キロくらいどうでもよくなってしまふ。そういう彰子ちゃんの価値を、最近気付いたのが現在規律委員やっている南雲秋世。ちなみにこいつは、一步間違ふと「青大附中の女ったらし二世」になるところだった。軽いシャギー髪、アイドル系顔している。一度芸能事務所に写真を送りつけてやるのもいいかもしれない。そいつは本日、立村の面倒を見るために残っている。本当だったら彰子ちゃんと一緒にデート二日目楽しみたかったらなあ。哀れなり腹下し。

美里はもう一度メモを開き、首を傾げた。窓に差す夏日で、髪の毛がきらきら光っていた
「何、なんかあったの」

「菱本先生にトイレ休憩入れてほしいって頼んでほしいって」

小さい声でささやいた。

そうか、彰子ちゃんもそろそろやばい状態なのかな。お仲間かもしれない。別に連れション仲間が増えても楽になんてならないんだけど、このしんどさわかっていただけるのは嬉しい。

「彰子ちゃん、やばいみたい？」

「それでもなかったけど詳しい話、聞いてくるね」

すぐに彰子ちゃんと話がついたらしい。ずいぶん手っ取り早く戻ってきた。今度は少し真面目な顔をしている。

「どうだった？」

「時間かかりすぎだよ。渋滞に巻き込まれちゃったわけでもないのに」

ひとりごとを言った後、美里は首を傾げた。

「やはり、一回止まれるようだったら止めてもらったほうがいいよね」

「トイレに？」

神さまありがとう！ 思わず拍手しかけたけど、次の言葉でがくっときた。

「でも、間に合わないかもしれないなあ」

「彰子ちゃん、そんなに限界状態なの？」

いや、さっき振り返った時は笑顔だったし、そんな一刻を争う風には見えなかった。

「違うよ、別の人。ほんとにまずいかも」

美里はさらりと答え、その場で菱本先生に大声で叫んだ。

「先生！ 早く休憩入れてください！ この辺で止まってもらえないんですか？」

「おいおいどうした」

全然状況を把握していない先頭席の菱本先生と羽飛、それと男子集団がぎょろっとこっちを見た。美里もなんでそんなとこで叫んだんだろ。トイレ休憩なんだから、耳元にちょこっとささやくとかすればいいのに。

「美里、どうしたんだよ、さてはお前小便我慢できなくなったのか？」

デリカシーのないお言葉。でも羽飛なら許す。たぶん羽飛も美里だからそう返せるんだらうなあ。ちょっとうらやましい。美里はそんなこと無視して言い返した。

「私じゃないわよ！」

——じゃないってことは、別の子ってことばらしてるようなもんじゃない。

なんか、美里もずいぶん女子にデリカシーのないことやらかしてる。もともと最近の美里は、クラスの女子たち一部から少し「調子こいてるんじゃないの」っ ぽいこと言われているし私も「あんた少し気、つけなよ」って言ってやってる。でも全然気にしてないんだもの、しょうがない。ああ、あとでしっぺがえし食ったらどうするのって思うんだけどね。

さすがに詳しいことは大声で話すのも気が引けたんだろう。美里は前の席まで行って、菱本先生たちと相談していた。どんな話かはわからないけれど、どうやら近いうちに渋滞しやすい道路とぶつかるらしく、止まるのもかなりきわどい状況らしい。運転手さんがそんなことを説明していた。

私は指先のみで戦い続けた。

——やだよ、そんなの。渋滞に入る前に、けりつけようよ。それにしても、暴れすぎだよ、このおしっこ、黙れってばあ！

「あのね、こずえ」

話し合いも埒があかず、戻ってきた美里は私にささやいた。

「後ろの方でやばい人ってね、誰だと思う？」

「彰子ちゃんじゃないんでしょう、じゃあ」

「杉浦さん、あと、ふたり、そのグループ」

言葉を切った。因縁ある名前だった。

「加奈子ちゃん？」

「バス止めても、立てそうにないかも」

どことなく美里の口調にはせりふ言っているような緊張が残っていた。

「まさか、もらしちゃったの！」

「ううん、まだ。でも」

口を尖らせるように美里はつぶめた。

杉浦加奈子ちゃんとは、一年の時同じ班だったこともあって、「加奈子ちゃん加奈子ちゃん」と仲良くおしゃべりした仲だった。ふわふわソパージュかけていて、最近はやっぴり赤いリップを塗っている。この前の身体検査で見てびっくりしたのだけど、くっきりとくびれがあるのだ。なんでだろう。制服からだど、ずんどうすつとおん、って感じなのに。妙に色気がでてきている。私は嫌いな子じゃない。美里も去年の十二月くらいまではおしゃべりしていたのだけど、ひょんなきっかけがもとで一切口を利かない仲になってしまった。

原因は、一時期立村が加奈子ちゃんを追い掛け回してつきあいをかけていたという噂が流れていたからだった。単純に恋敵と思い込んだ美里が叩きのめしただけのように、私には見える。ちなみに加奈子ちゃんは即刻、立村を振ったという。それも何度も。それでも追いかけてつづけたらしい立村に問題があると私も思う。だけど美里からしたら、そのあたりにも複雑なものがあるら

しい。今度ゆっくり、聞いてみよう。

ああ、それにしても。

加奈子ちゃんか。同じ連れション仲間は。

「美里、加奈子ちゃんそんなにやばそうって、なんでわかるわけ？」

無言で美里は、両手をおなかの辺りで重ね合わせて、身をかがめてみせた。

「ダンスダンスダンスって感じ」

「別名、貧乏ゆすりね」

笑わなかった。失礼だと思ってるんだらう。美里はその辺、言葉が少なかった。

加奈子ちゃんの気持ちは今現在非常によくわかる。私はもう一度おなかをさすった。夜店で買ったヨーヨーをいじるみたいにそおっとさわった。加奈子ちゃん、私も今の気持ち、よくよくわかるよ。水風船、割らないようにがんばろうね。私はこっそりエールを送った。

けど、加奈子ちゃんほどダンスダンスダンスしているとは、自分でも思っていなかった。

美里は何度か様子を見に彰子ちゃんの席へ向かい、その足ですぐ菱本先生の方に話し掛けていた。羽飛と菱本先生もちらちらとこちらを眺めていた。かなりでかい声で男子同士も話し出している。羽飛がちらっと声をかけた。

「おい、水口、お前は大丈夫かあ？」

後ろ席の水口に声をかけた。賢い医者志望のお坊ちゃまなんだけど、見た目が小学校二年生。ちょっとしたことで泣きわめく困ったちゃんだ。通称、すい君。仲良しの少年画家・金沢と一緒に頷いていた。

「立村に言われたんだ、旅行の前」

「立村に？」

「バスにはペットボトル持っていけて。あとタオルも」

男子連中がやたら大きい袋もってきたとは思った。にこにこしながら、空のペットボトルを取り出した。そういえばしおりにも「男子はペットボトルを持参」という意味不明な言葉があったっけ。そのことだろうか

「あいつ、しつこいくらい命令してたな」

菱本先生がぼそっと合いの手を入れた。

「これをひろげて、チャック開けて、それから」

おいおい、「ちゃっく」って、ズボンのチャックのことだろうか？

思わず耳をそばだてた。

「こうやって、こうすると、こうなるって」

あああ、ちょっとまずいよすい君。

こんなところで公開放尿なんてやっちゃあ。

いわゆるこれって、ショータイムじゃないんだから。

女子には目の毒って奴よ。

見てはいけないものを見せる気か！

もっとも女子たちは加奈子ちゃんたちの様子が最優先で心配なので、すい君の怪しいショーを見る気はあまりなさそうだった。私だけがたまたま見えるから、覗き込んでいるだけだ。

もちろんもろではない。ちゃんとすい君はひざにタオルを広げていた。モノは見えない。「ちょっとやめなよ、ここ公衆の門前ってやつよ。一応女子だっているんだよ」
「だから隠せって立村が言ったんだ」

男子集団のみを観客に仕立て、すい君はタオルの下で何か手を動かした後、ほおっと大きなため息をついた。振動で音は聞こえない。

羽飛が、

「おいおいおい、お前、まじでしちゃってるのかよ」

あっけにとられている。菱本先生も止める間もなかったらしい。

「水口、おい、がまんできなかつたのか？」

すい君は、けろっとして答えた。

「ううん、こうするようになって言われたんだ。まずい時にはこうやってしのげって。立村って頭いいよね」

持ち上げないで見せびらかさないで欲しい。検尿の入れ物じゃないんだから。六月くらいに毎年、試験管を渡される。持っていくと一週間くらいで結果が出る。女子はやたらと血尿が多くて、男子は淡白が多いのはなぜ？ 再検査にひっかかった男子をからかうのもまた楽しい。立村に何度か「なんであんたはひっかからないの？」と尋ねたら、「裏技があるんだよ」と流された。本条先輩に教え込まれてるんだらう。最近私にずいぶん口答えするようになったのは、教育成果 および、本条先輩のレクチャーにあるのだらう。

「俺思うけどなあ、羽飛」

「なんだよ先生」

「立村も、相当修羅場を乗り越えているようだなあ。普通こんなこと考えないぞ。ペットボトルに小便しろだなんてなあ。第一どうするんだ。うまく入るのか」

「俺も試したことねえし、こんなとこでやる度胸ねえなあ」

「車を運転している時はいいかもな」

のどかな会話があまりにも間抜けだ。たぶん男子たち、加奈子ちゃんたちのピンチに関して、現実逃避したい気分なんじゃないだらうか。

ああ、そんなことはどうでもいい。

きらきら光るペットボトルを降ろすよう、羽飛が黙らせた。

菱本先生はあきれたように笑っていた。もうこれはギャグ。

でもね、先生。

私にとってはとつてもだけど、笑えないことだったりもするのだよ。

男子は最悪の場合こうやって、乗り切ることもできるだらうけれど、ただでさえキュロットはいている私がそんな器用なことできるわけじゃないの。私だって、ペットボトルで一発〇

Kだったらすぐにやっちゃってるって。女子たちに全部提供してよって言いたい。

なんか男子って、アホなのかもしれない。情けなくなってきた。

いきなり美里が立ち上がり、先頭の運転手さん席まで走りだした。いったんふらっとしたけどすぐバランスを保った。アホ男子たちのショーにあきれ果てたのか、それとも加奈子ちゃんたちの状況がさらに悪化したのか、たぶんどちらもそうだろう。

バスガイドさん用のマイクを握り締めスイッチを入れた。

側のエンジンがががあが騒いでいるのが響いた。きーんと耳がつぶれる音もした。

「みんな、聞いてほしいの。いいかな」

美里は後ろの席に立ったまま、声を掛けた。

「この中で、トイレに行きたい、って人どのくらいいますか？」

男子は起きている連中が全員手を挙げた。

女子は誰も手を挙げなかった。私も一緒だ。

だって加奈子ちゃんだって上げなかったんだから。

私の戦いなんてまだ甘いつてことだ。

「なら、みんな、協力してもらえますか？」

急いで前に立った。羽飛が美里の顔を覗き込んだ。

「どうした美里」

「貴史、悪いけれど男子に協力してほしいんだ」

「協力って、外に出ることか？」

「もう無理」

美里も即答、首を振った。

「男子と女子の席を急いで入れ替えてほしいんだ」

「どういうことだよ？」

「時間ないよ。とにかく男子の後ろの人たち、申しわけないんだけど前四列の左側女子、みんな後ろに移動してもらえないですか。男子はその前に移ってもらえないかなあ」

「どういうことだ？ 清坂？」

菱本先生も、奇妙な顔をして問い詰める。

「一刻を争うんです。先生はそのまんま動かないでいいです。みんな、すぐに移動してください」

その後、改めて話をしていた。さすがに菱本先生も大人で、うんと頷いている。

「清坂、さすがだな、よし、じゃあみんな、清坂の指示に従え！ 急げよ」

左側の女子たちはみな、荷物を持つと、後ろに移動しようとした。が狭い中でなかなか移動ができない。そりゃそうだ。一人ずつしか通れないバスの通路なんだから。男子が前に移動してきた間に私は荷物を後ろに移した。美里にも「早くして」とせかされた。私の荷物はポシェットとお土産袋だけだから、軽い。美里はちょっと大きめのトートバックだ。バケツ型の可愛い形の真

っ赤な皮、おしゃれた。

まず、美里は最初に荷物を運んだ。それぞれの席に荷物を置いて、場所を確保した。

「私はどこに座るの？」

尋ねると、美里は後ろから二番目の男子席を指差した。

「この辺がいいよ。できるだけ後ろの方がいいって」

。一番後ろには彰子ちゃんと女子が四人座っていた。私たちと対称になる形で加奈子ちゃんだけがひとり席を与えられていた。しっかりと膝をくっつけ、バックを膝に置く格好でいた。一目で美里の言う、加奈子ちゃんの「やばい」状態が見て取れた。

どうも席の選び方が怪しい。彰子ちゃんを除いて、みな顔がうつむき加減。膝をいじいじと触っている。たぶん美里の話した「加奈子ちゃんとあとふたり」じゃないだろうか。たぶんだけど、この子たちと美里とは、あまり雰囲気としてそりが合わないみたいだった。

さっきまで座っていた男子の温もりが気持ち悪くぬくい。

「加奈子ちゃん、大丈夫？」

横に向かって声をかけた。

返事がない。

一点だけ見つめ、なんどもブレイクダンスを踊るようにしているのは、私と同じ相手と戦ってることだから。動くのだからかなりこわごわだったんだから。ポシェットをずらさないようにして窓際に動いた。後ろを振り向くと、彰子ちゃんがにこにこしながら私の顔を見ていた。

「こずえちゃん、大丈夫？」

顔に何か書いていたんだろか。

美里も羽飛も全く、気付いてないっていうのに。

私は思わず手を離した。無理に笑顔をこしらえた。

「うん、たぶん」

前の席に向かった美里が、今度はいきなりマイクを握り締めた。電源は入っていない。生声で羽飛に話し掛けているのが聞こえた。

「おいおい、早く説明しろよ美里。状況がわからねえと、野郎連中だって納得できねえだろ。酔っ払ってる奴だっているんだぞ」

「羽飛、清坂の気持ちも汲んでやれ」

菱本先生が間を取り持とうとする。無駄だって！ あのふたりに割り込もうってのは！私だってできないんだからね。でも美里もあっさり羽飛の要求を受け入れた。

「隠してもしょうがないもんね。簡単に言っちゃうとトイレに行きたいけど間に合わないって人が何人かいるってだけよ」

いきなりマイクの音がハウリングしながらぴぴっと入った。誰がONにしちゃったんだろう。慌てて羽飛が引ったくった。

「このばか！ んなことかいかい音で聞かせるなっの」

どっちもどっち。はっきり、バスの中いっぱい響き渡った。おなかのちゃっぽんちゃっぽん

した水にも、響いて揺れた。

——トイレに行きたいけど間に合わないって人が何人かいるってだけよ。

間に合わない。間に合わない。間に合わない。ってどういうこと？

——間に合わなかったらどうなるってのよ！ 美里！

全身がひくっとした。片手に力を入れた。でないと、押さえきれない。揺れを止められない。そっと横の加奈子ちゃんの方を見たら、やはり同じく膝を押さえ、スカートを押さえるようなしぐさをし続けていた。やはり、ダンスダンスダンス、はっきり腰を振っているのが見えた。ソパージュが揺れている。横顔は難しい問題を解いている時のように真面目だった。そう、真面目にならざるをえないんだ。私は男子の目がなくなったのを幸い、思いっきりひだに手を突っ込んだ。外でやったら、変態だと思われそうだ。

菱本先生は運転手さんに、立ち上がっていろいろと話をしている様子だった。その間にも美里と羽飛は漫才めいたやりとりを続けていた。

「ちょっと、間に合わない、って断言するか、そこで」

「トイレに行けないもの、しょうがないじゃないの、そういうしか」

すでに男子たちも「間に合わない人」が女子であることを察知した様子だった。きよろきよろ、露骨に後ろの席を覗き込もうとする奴がひとり、また気味悪げにひそひそ話す奴もいる。からかうように、

「おい、羽飛、俺たちもしょんべん行きたいんだけどなあ、止めてくれんの？」

でかい声を張り上げる奴もいる。すぐに一喝された。羽飛にだ。

「じゃかっしい。もう少しだから黙ってろ」

後ろの方では女子たちの声がみな、ぴたっと止まった。

男子たちのざわめきとは別に、みなお通夜みたいに静まり返っている。

唯一、彰子ちゃんが他の子たちに、

「大丈夫よ、美里ちゃんががんばってくれてるからね」

励ましている。笑顔を絶やさずに、加奈子ちゃんにも、

「もう少しだからね、がんばれ」

気を紛らわそうと何かを喋ろうとしていた。でもその言葉は耳に入っていないらしい。みな相変わらず、前かがみでかかとを鳴らしている。加奈子ちゃんはフレアスカートだけど、うしろのふたりはジーンズだ。どちらにしても、ピンチには違いない。

突然、マイクがまたぴぴっと悲鳴をあげた。美里がバスガイドさんよろしく運転手席の脇に立ち、「あちらに見えますは富士山で」と言いたそうな格好で、片手を上げた。

「みんな、ちょっとだけ黙って！ みんな聞いて！」

美里ひとりでは黙らせることができず、羽飛が両手をぼんぼん打った。

「てめえら黙りやがれってんだ！ おい、すい、そこで女子覗き込むんじゃねえ！」

かっこいいけど、そう思ってもらえない自分が悲しい。

菱本先生も美里に何か、二言三言話し掛けたけれど、美里は首を振った。ふうっと息を吸い込む音がマイクから響いてきた。

「今、話を聞いて分かると思うんですけど、ホテルまでは橋を降りてからあと三十分以上かかるそうです。いつ橋から降りられるかすらわからない状況です。途中休憩が入ったとしたらまだかかります。でも、女子の中には今、もうトイレが間に合わないって人が何人かいて困っているんです。降りて橋を降りることも考えたけど、それも駄目みたい。だから、はっきり言っちゃうけど。バスの中で、じゃあっと、しちゃう人が絶対いると思うんです」

大きく息を吸いこみ、背を伸ばし、美里は唇を一文字にかみ締めた。

——言い切っちゃったよ、美里。そんなまずいよ！

バスの中で、じゃあっと、しちゃう人が絶対いる。

「絶対」その言葉が、またおなかをちゃぽちゃぽ言わせそう。誰も見ていないのを幸い、私も必死に椅子にお尻を擦り付けた。ダンスダンスダンスに、近い格好かもしれない。

美里の演説はまだ続いた。

「私、五年の時に、間に合わなかったことがあって、教室でしちゃったことがあるの」
一瞬、バスの中の空気が、ぴしっと締まった。

「うそお」

「清坂、おもしろしたことあるのかよ！」

「うわーきったねえ」

「美里が、まさかよねえ」

初めて聞いた。私も、驚いた。

だってあの美里が！

あの、やりたいことはきっちりやって、いいたいことはなんでもはっきり言う。そういう美里が、まさか、おもしろしたことあるなんて、絶対に信じられない。恥ずかしがりやで、授業中立ち上がる勇気がなくて、とうとう間に合わない、そういう子じゃないだろう。私の知っている美里は、そんな子じゃない。それも、五年生の時になんて、よっぽどのことがないと考えられない。

周囲の女子たちも、ひそひそと話をしている。

「五年の時に？ うそお」

びっくりしている間にも、美里の告白は続いた。

「嘘じゃないよ、貴史にきけばほんとだってわかるから」

思わず羽飛の顔を覗き込んだ。否定も肯定もしてやしない。わからないんだきっと。

後ろで菱本先生が美里に、首を振って何か言ったけれども、美里はあっさり無視した。男子たちの、「お前、まじで、やったことあんの？」冷やかしの声も跳ね返した。

「だから、私、今、トイレにいけなくて苦しい気持ち、すごくわかるの。男子のみんなにさっ

きお願いした通り、これからホテルに到着するまでの間、後ろを誰も振り向かないことを約束してくれてるんです。帰るまでずっと。絶対約束って。言ってくれてます」

そんなの何時決めたんだろう。私が気付かない間だろうか？

現にすい君がちろちろ奈良岡彰子ちゃんに向かって「ピース」を繰り返しているあれはなに？でもそれ以外はみな、こちらを向こうとしていなかった。

そうか、だからか。

だから美里は前に男子たちを固めたんだ。

女子だけにしたら、あとは万が一……。

美里の考えたことがだんだん読めてきた。太ももを何度かさすりながら、私は美里の次の言葉を待った。

「だから、もう、もうだめって思ったら、その場でしいっとしちゃって、いいから！」

男子たちの声が「まじかよ」「おいおい」あきれはてた風に聞こえてくる。

美里は無視した。

「そして隣の子がそうになったら気付かない振りをしてあげてください。お願いします」

前の方で、男子たちのざわめきが止まない。中にはまたちらっと振り向こうとした奴もいた。私も加奈子ちゃんとうしろの二人の様子を伺った。ショックを受けていないだろうか。美里の言葉には、もう、どうしようもないというあきらめが混じっている。すぐそこで止めてもらって、用をたすという可能性が全部カットされてしまっている。

その場でしいっとしちゃうしか、もう私たちに残された方法はない。

そんなの、絶対にいやだ。

こんなところで、しいっとしちゃうなんて、いやに決まってる。

「だって、あとでいわれちゃうのがなによりも辛いつてわかってる。今はもう、緊急事態。二年D組の緊急事態はこういう形でしか、納められないのが悔しいけど、みんな、お願い、そうしてください」

美里の顔は、クーラーがかかっているのに真っ赤だった。

マイクを握る手が震えていた。

肩を叩く菱本先生が、

「清坂、よくがんばった、えらいぞ」

小さな声でささやいていた。マイクが音を拾っていた。それでも美里はまだマイクを離さずにいた。硬直しているのか、それとも震えているのかわからない。今にも泣きそうな風に見えた。男子だけがざわめいている中で、女子たちが「美里、美里」と声をかけた。

当たり前。美里は今、絶対に隠しておきたい秘密を口にしたんだから。

小学校五年の時の、それも教室で、授業中のおもらし。どんな騒ぎになったのだろう。

羽飛もそれを見ている。

そんな、思い出したくもないこと、美里は二年D組全員マイナス二人の前で、告白した。

——美里も、きっと、今の私や加奈子ちゃんと同じ思いしたことあるんだ。

静まり返った車内。女子の声で「みさと、みさと」と呼ぶ声がする。

そのまま立ち尽くしている美里の手、そこからマイクを取り上げたのは羽飛だった。美里にしか向けられてない、ささやき声を拾った。

「お前も席に戻れ。あとは任せろ。絶対、見ないから安心しろ」

菱本先生は腕を組んでなにやら頷いていた。

「と、いうことでわかったか。今、立村がいない状況だから俺たちD組男子はこれ以上酔わないように、後ろなんか見ないでも済むように、みんなで歌を歌うことにしようか。しおり、出せよ。歌謡曲を一気に行くぜ」

「こずえちゃん、もうちょっとだよ」

彰子ちゃんに気付かれている理由がわかった。

——私って、やだあ。

ポシェットをはずしたまま私は、もろ露骨に、左手でキュロットの真中をにぎりしめてたんだから！ もう、スカートだったらよかったのに。最悪。もう、「そうしないと破裂しますよ」ってのがばればれだった。

こんなところで、どんなことあってももらすわけにはいかない。

最後の時が来て間に合わなかった時でもスカートなら持ち上げられる。最悪、スカートをぬらさないですむはず。でも、キュロットやジーンズだと隠しようがない。それは私だけではなく後ろのふたりも同じはずだ。だから、美里の「しいと」発言にみな、体がこわばったはずだ。

できるわけ、ないじゃない。

死んでも、ホテルまで、持たせなくちゃ。

何度かお尻をシートにこすりつけてみた。猫がトイレ後するように。こまかく、円を書いてみた。息をすいなおし、腰を突き出してみた。少し、休戦したのかもしれない。ほっとするのもつかぬま、今度は足の裏がじんわりしびれてきた。両膝から虫が張ってくるようだ。一度握り締めた左手が離せない。

男子がいきなり鈴蘭優のデビューシングル「風の鼓動」を合唱し始めた。羽飛の趣味だ。あいつは一年の頃から鈴蘭優の熱狂的なファンで、写真集は全部揃えているって言っていた。私の路線じゃないのが残念だ。

ポシェットをほおりだした。左手の力がだんだん入らなくなり、お腹が痛い。変なところがじんじん痛くなる。しびれは止まらない。暴れているお相撲さんがどすこいどすこいと押し寄せているようだ。

——こんなところで、誰がするって！ 頼むから黙って！

——しいとだなんて、じゃあつとだなんて、言わないでよ！

——絶対我慢できないなんて、言わないでよ！

美里の断言口調が耳からこびりついて離れない。一瞬のうちに私は限界すれすれまで運び出されていた。もう、加奈子ちゃんとダンスダンスダンスのデュエット状態だ。

もどってきた美里が、息を呑んだ。

私を呆然と、見つめていた。

「こずえ、あんたまさか」

かすかな声で、呟いた。

「あんたも、がまんしてたの？」

ばれた以上はしかたない。私はほっぺたの一部に力をこめて、片えくぼをこしらえてみた
「ごめーん、実はね、さっきから、かなりぎりぎりだったんだ、やだよねえ私って。やっぱしさ
っきの、イチゴジュースとチョコパフェがかなりおなかに来ちゃったみたいでさ。あ、大丈夫
だよ。大じゃないから。けど、やっぱりちっちゃいい方も、かなりきてるよね。うわあ、まじで
ほんっと、ごめんなさいかも！ いやあんって感じ。私、もう、本当に駄目かもしれないわあ、
ねえ」

半分やけっぱちで笑いながら答える私に、

「こずえちゃん、がまん、できる？」

後ろの彰子ちゃんが心配そうに声をかけてくれた。

彰子ちゃんは大変だ。隣の二人にも、加奈子ちゃんにも、そして私にも。

美里が戻ってきてささやく。

「こずえ、私」

「そう、ごめん。この辺のみなさまに水害及ぼしてしまうかもしれないけど、その辺、許して。
あ、そうそう、危険物は網棚に避難させたほういいよ。ほら、美里のバック、ぬらしちゃまずい
しさ。ね、ほら、早く」

意味がわかってるかどうかわかんない。声がぐらぐら揺れている。おなかの水も思いっきり波
が荒れている。もう、津波で一気に押し流されるのも時間の問題。私は半ば涙目でも言うしか
なかった。

もう、たぶん、私は。

「美里の言う通り、絶対、しってやっちゃうかも、しれないんだわ。その時はごめん」

——だから、もう、もうだめって思ったら、その場でしってしちゃって、いいから！

もうだめだ。本当にだめだ。私はもう、そうするしかなくなっている。

だって、それ以外どうすればいいんだろう。もし、ここでしちゃったら私はどうやってバスを
降りればいいんだろう。キュロットはぐっちょぐちょ、足元は水溜り、匂いはアンモニア。

いや、それだけじゃない。

もしここで私が水害を引き起こしてしまったら最後、二学期以降、クラスの連中はどんな目で
私を見るだろう？

もちろんいい奴ばかりだとは思っている。けど、十四才にもなって、トイレの訓練もできてな
いのかって思われて、おむつが必要なじゃないかって言われるんじゃないだろうか。

女子はまだいい、男子たちの視線は？

羽飛はなんと思うだろう？

美里がおもらししてしまった時、羽飛はどんな風にかばったんだろう？

あいつが男子同士で美里をいじめるとは考えにくい。でも、美里ががまんできなくなってその場でしてしまった時、あいつはどう思ったんだろう？ 美里だから、かまわないって思ったんだろうか。美里だから、気にならなかったんだろうか。でも、他の女子にも同じように思ってくれるだろうか？ 羽飛は、美里以外の女子にも、トイレを我慢できなかった情けない女子としてのイメージを貼り付けないでくれるだろうか。私を馬鹿にしないで今まで通り接してくれるだろうか？

——わからないよ、そんな保証、あるわけないじゃん。羽飛は美里だから、おもらししても許せたんだよ。けど、私だったら？ どうなる？ 軽蔑されたら終わりじゃん！

頭の中にうごめくのは考えたくもない妄想ばかり。涙が出そうだった。

美里が間違っただけを言ったわけじゃないのに、でも責めたい。

何事にもまっすぐ。間違っていることは間違っているとはっきり言う、その性格は大好きだ。でも、分かっていない。美里が口にした「じゃあっと、しちゃう人が絶対いる」という言葉で、最後の希望も全部、奪われちゃったってことを。じゃあっとなんて、絶対したくないのに！

もう加奈子ちゃんは恥も外聞もないくらい、スカートの中心を両手で握り締めていた。

声は聞こえない。鈴蘭優の曲に消されている。

美里の目が加奈子ちゃんをちらりと見た。一瞥だった。その後すぐ私の耳元にささやいた。

「こずえ、私ね、もしそうなっても」

ゆっくりとつなげた。

「あんたのこと、絶対に軽蔑なんてしない」

「わかってるよ、けど」

美里は首を振り、両手を握り締めたままバスの手すりにしがみついた。

「本当。私、五年の時、教室で、したことあるって言ったでしょ。本当だよ。あんとき、朝から五時間目までずっとがまんして、しちゃったの。すごい音して、もうみんな友だちいなくなっちゃうって思ったの」

「五時間も……なんで？」

理由を尋ねる余裕が私にはなかった。美里ひとりでしゃべってくれた。

「あんときは隣の席に貴史がいたからばれなかったの。水、こぼして隠してくれたんだ」

「美里、けど」

もうこぼしようがない。何しても、もう無駄なのだ。美里の「じゃあっと」という声はまだ耳から離れない。私は首を振り、両手をキュロットに挟み込み、椅子を揺らした。

「私、もしあんたがやっちゃっても絶対友達でいるってことしか、今言えない、ごめんね」

泣きそうな顔で美里は私をじいっと見上げた。もう一度、

「ごめんね、こずえ、ごめんね」

何度もあやまり、目をこすった。

——美里、ごめん。

——頭の中にすっかり加奈子ちゃんのブレイクダンスが映ってるよ。

相変わらず合唱で、野郎連中は後ろを振り向かないでくれた。たまになぜか忘れてるすい君が手を振るが、彰子ちゃんになだめられてすぐ回れ右してしまった。見られてたとしてもどうしようもなかっただろう。加奈子ちゃんはどうとう腰を浮かせて頭を隠し、何度も跳ねるようなしぐさをしたし、うしろの二人も手がジーンズの前にぴったり重ねて、泣き顔を見せている。

私も足の感覚がすっかり麻痺していた。もうだめもうだめとお腹の中の相撲部屋が稽古をはじめているのだから。痺れは体中に回っていた。腰を何度もシートに打ち付けている自分。手を離せず、「じゃあっ」と頭によぎった。もう、時間の問題だった。気が遠くなりそうだった。側で「こずえちゃん、もうちょっとだよ、がんばれ」彰子ちゃんの声が響いているのがむなしかった。

いきなり美里がバックをひっくり返して中のものを振り出した。

おさいふ、ハンカチ、ティッシュ、生徒手帳、お土産、いくつかが入っていた。

自分の席に放り出し、口を広げ、私に差し出した。

「こずえ、これ使って！」

使うって、意味がわからなかった。

「使う、って？」

両手を太ももに挟み込んだまま私は首だけそれに向けた。

「しゃがんでこれの中にして！」

「美里それできないよ！」

何を言われたか理解した瞬間、私は激しく首を振った。

そんなこと、できるわけじゃないのよ！ だってそのバック、美里のお気に入りなのに。バケツ型のバックだし、皮製だし、簡易トイレになるかもしれない。でも、そんなこと、できるわけがない！ 使い物にならなくなるに決まってる。全身で拒絶した。

美里は引き下がらなかった。何度も私の足元に置くようなしぐさをした。

「このままだと、こずえ絶対、ちびっちゃうよ！ しちゃったらおしまいだよ。バスから降りられなくなっちゃうよ！ 男子に見られたらもうばれちゃうよ！ 中学生のくせに洩らすなんてって馬鹿にされたらどうするの？ 私だって言われたんだよ、あの後！ 五年のくせにおもらしするなんて、赤ちゃんみたいだって言われたんだよ！」

美里の方が泣きそうだった。

「でも、私キュロットだし……」

「今男子こっち向いてないし、席も離れてるから大丈夫だよ。貴史も見てない。だから早く。私が隠してあげる！」

——羽飛に軽蔑だけはされたくない！

頭の一部が麻痺した瞬間、ぐわあっとおなかの中で大津波が押し寄せた。

——やばい！ もう、だめ！

あふれる寸前とうとう、バックに手を伸ばしてしまった。美里も何も言わずすぐに足元にバックの口を広げ、手渡してくれた。私はすぐにキュロットを下ろし、椅子の陰にしゃがみこんだ。がたごとと揺れているバスの中でバックを当てるのに手間取ったけれど、その後はあっという間に事が進んだ。鈴蘭優の新譜を ネバーエンディングで合唱する男子たちののがなり声で、音は全く洩れなかった。聞こえていたのは私の耳元だけだった。

終わるまでの間美里は膝を曲げて、オレンジのジャンパースカートをふんわりと広げ、隠してくれた。すべてが終わるまで、ずっと、美里は後ろで立っていてくれた。

美里のバックに、あやまりたかった。

ポケットから美里はティッシュを取り出し、そのまま後ろ向きで差し出してくれた。男子の合唱が続く中、私は素早くキュロットをはきなおした。中腰で着替えるのはやりづらかったけれど仕方ない。キュートなお尻丸出しにはしたくない。素早く身を整えた。足元には、水浸しのトートバックがそのままにしてあった。振動で中のおしっこががちゃぽちゃぽ揺れている。イチゴジュースとパフェだけでこんなに溜まるもんだろうか。信じられないくらいの量だった。

——ごめんね。私が。

「こずえ、どうしたん？」

「美里。私もうとんでもないことしちゃった。ごめん」

なんか、無理に笑いながら泣けてきた。トートバックを足元に置いて、そのままにした。椅子に座りなおし、おなかだけはすつきししたままうつむいた。さっきまでのずんどこ節がなくなった代わり、真っ赤なバックだけが知らん顔している。美里だってお気に入りだっただろう。まさかトイレ代わりにされるなんて、バックだって本望ではなかったろうに。

美里はきょとんとした顔で、「ああよかった」と笑顔を見せた。

「こずえ。ほら後ろ見なよ」

美里はにっこり笑っていた。彰子ちゃんたちの方を指差した。

「彰子ちゃんね、後ろの二人に自分のピーチバックを使わせてたよ」

明らかに「しいっと」しざるを得ない二人組がそれぞれ、中腰になってジーンズのボタンをかけていた。ちょうど終わったところらしかった。ふたりともさっきまでの苦しそうな表情はしていない代わり、やはり唇をかみ締めていた。小声で彰子ちゃんに「許して」とささやいていた。彰子ちゃんの方はというと、そのピーチバックを抱えてすぐ加奈子ちゃんに渡そうとしていた。さっき美里がしたように通路側に立ちスカートを広げ、

「加奈子ちゃん、ほら、すぐ使ったほうがいいよ」

そう勧めていた。本当だったら一番最初に使うべき人なのに。彰子ちゃんの身体はカーテン代わりだった。口のつぼまったピーチバックを渡しているが、中にはすでに黄色い液体が溜まりまくっていた。たぶん、二人分なのだろう。加奈子ちゃんは最初首を振っていたがとうとう、スカートをめくりあげ彰子ちゃんの影に隠れた。

美里と私は顔を見合わせた。

きっと私と同じことしている。

ふと男子たちの合唱が途切れた。同時に、静かな細い音が、ちろちろと聞こえてきた。すぐに曲が始まった。水は流れてこなかった。

「あのバックね、彰子ちゃん、南雲くんからプレゼントされたんだって。昨日聞いたんだ」
初めて聞いた。あのふたりが付き合いはじめていたことは知っていたけれど、プレゼントを交換するだけの仲だとは。

「彰子ちゃん、本当は大切にとっておきたかったはずだよ」

あたりまえ。私は頷いた

「でもね、さっき彰子ちゃんなんのためらいもなく、取り出してうしろの二人に使うように、言っていたんだよ。笑顔のまんま」

恋人からもらったプレゼントを簡単に、よりによってトイレ代わりに使えだなんて、ふつうはいえないはずだ。

「美里、だから？」

「私は自分のものだから、別にどうでもいいんだけど」

もし立村からもらったバックだったら、どうしてただらう。

「ね、来年の誕生日に、弁償してもらおうから、いいでしょ！」

いたずらっぽく美里はほっぺたにえくぼをこしらえた。

「もちろんそうする！ ありがとうね、美里」

私はふと、気になったことを尋ねた。

「あんたも同じくらい水分取ったのに、なんで平気でいられるわけ、おしっこ近くないの？」

「平気、うん、まあね」

美里は言葉を濁した。ちらりと加奈子ちゃんたちの方を眺め、

「ばれなくてよかったわ、とりあえず」

また能面のように呟いた。

うしろの方で私がキュロットを脱いでお尻丸出しでもものすごい音を立てていたことも、もしかしたら気付かれているのかもしれない。ストリップしているわけではない。

「でもね、彰子ちゃんがいくらしてもふたり、嫌がってたんだよ。こずえが、してるのに気付いてやっと覚悟を決めたみたいなの。あのままだったらもっと大変なことになってたかもしれないのに。こずえ、あんた、偉いよ」

「私限界だったものねえ。あと一分遅かったら青濁水害警報発令ぴぴぴって奴？」

「杉浦さんだって、すごくいやがってたくせにとうとう」

美里はちっと音を立ててつばを飲み込んだ。

「よかった。何もなくて」

美里好みのバックを選ぶたけしばらく真剣に考えよう、そう思った

その後、美里は言葉少なく、ぼんやりと隣の席に座っていた。たぶん、疲れてしまったんだろうと思っていた。

「着いたら、立村くんにお土産渡すんだ」

膝にまとめた紙包みを、ちらっと見せた。バスに乗り込む前におそろいで買ったタータンチェックのキーホルダーのはずだった。

「ペア？」

「うん。初めてのおそろい」

美里はため息を大きく吐いたあと、袋を握り締めそれ以上何も言わなかった。

男子たちの合唱が続く中、女子たちはみな、しんと黙りこくっていた。目を閉じる女子もいた。私も、一緒に目を閉じた。

加奈子ちゃんが一段落してからというのはどんどんすんなり進んでいった。二年D組の男子たちは「紳士であれ」の校訓を守ってくれる稀有な連中だ。みな、何も言わなかった。気付いていてもいないふりをしてくれた。

三十分後、ようやくホテルに到着した。そこで初めて気付いたのだけど、他の女子たちも多かれ少なかれ、トイレに行きたいのを我慢していたようだった。到着して初めてそのことに気がついた。というのも、みな一目散にホテルに駆け込んでいき、みなホテルのロビートイレに列をなしていたからだった。

急を要しなければ、無理に一階の共同トイレを使わなくていいのだ。

だって部屋にみんな、トイレが備え付けられてるんだからそれを使えばいいのだ。

そうするのもしんどかったということは、みな似たりよつたりの状態だったとと考えるとよい。ほんと、しんどいバス旅行だった。来年の修学旅行ではこのことをしっかり教訓にして、それこそこっそりペットボトルでも持ち込むしかないんじゃないか。そんな気がしてきた。

私はまず、バックをなんとかしたかった。美里の真っ赤なバックを抱え、声をかけてみた。

「どうする、美里」

「私、立村くんに会ってくる」

「なんで」

「渡したいもの。やっぱり」

ああ、例のタータンチェックのキーホルダーか。

「じゃあ、もっていこうか？ 荷物一式」

「うん、お願い」

私の無事な方のバックに全部美里の荷物を放り込み、先に部屋へ戻ることにした。

ホテルに戻って、私はバックごと部屋に持ち込み、トイレに流した。一応洗った。私が責任を持って使わなくては。ビニール袋にしまいこんだ。忘れちゃいけない。

——けど、美里、なんかあれまずいよね。

タオルで拭き取りながら、私はぼんやりと美里の様子を思い浮かべた。

——なんか変だよ。なんで男子たちにもろ、トイレ行きたいことがばれるようなこと、言っちゃうんだろう？ まあ結果がオーライだったからよかったけど、あれ、女子からしたら死ぬ

ほど恥ずかしいことじゃないのかなあ。

どうも、私にはひっかかるものが残っている。

というか、いつもの美里だったら絶対に言わないようなことを、バス内で繰り返している。

私の知っている限り、美里は決して、人の秘密を暴露したり、いやがるようなことを意識してやるような子じゃない。言いたいことは言うしそれで傷つけてしまうことはないわけじゃない。もちろんそれで傷ついて、女子たちから反感買っているところもある。

でも、私は今までそんな美里にいやあな気持ちを感じたことはなかった。

こんな気持ち、初めてだ。

いつもの美里だったらきっと、菱本先生あたりにだけこっそり打ち明けて、バスを止める場所探しに専念していたんじゃないだろうか。もちろんあの二人および加奈子ちゃんが破裂寸前だったのはわかっているけど、他の男子たちに気付かれないようにこっそり処理できるように相談したんじゃないだろうか。いや、同じことをもしかしたら、彰子ちゃんと相談して男子たちにはばれないように処理したかもしれない。どちらにしても、美里のあの大演説を行う必要があったのか、私にはわからない。

ただ、美里のおかげで無事、女子は恥をかかずにすんだ。これも事実だ。

目を瞑ってていいんだろうきっと。

なんでこんなに、変にからまってくるんだろう。私もやっぱり、変だ。

いや、までよ。

私にぴんと、何かくるものがあつた。

——加奈子ちゃんだ。

美里が加奈子ちゃんのことであららしていた時期があつたのは知っている。

立村がらみの一件だ。

そのことで加奈子ちゃんに対していろいろと言ひ合いをしていたこともちらっと聞いている。詳しいことは教えてもらえなかったけれどもだ。

ただ、その時以来加奈子ちゃんと絶交していた美里。

その関係はまだ、復旧していない。

そんな加奈子ちゃんがもし、大ピンチだったとしたら、クラスの評議委員として美里はどう振舞っただろう。私に対して泣き顔で、「絶対友だちでいるから！」と訴えたりしなかったに違いない。ごく普通の態度で処理しようとしたに違いない。

——いや、でも違う。

もしおもらし寸前だったのが私だったと最初から気付いていたら、あんな露骨な訴え方、はたしてしたでしょうか？ 絶対それはない。だって、私が嫌がることだから。女子なら絶対に、トイレに行きたいところを見られたくないだろうし、ましてやもれそうだななんてこと、死んだって気付かれたくないに決まっている。

でも、もしそれが、対して気にならない子だったとしたら？

気になる。どうしても、はっきり聞いておかないと気がすまない。

でないと私は、美里と友だちでいられないかもしれない。

私と美里が友だちでいるのは、はっきり互いの考え方を指摘できる点だと思っている。間違っていたら間違っていると、強く言えるところだろう。けんかになることもしょっちゅうだけど、でも、美里ならばわかってくれるっていう安心感もある。

もし美里が本当に、加奈子ちゃんに対してのいやがらせをしていたとしたら、私は目を瞑るわけには絶対にいかない。だって加奈子ちゃんも私の友だちだし、個人いじめをするのはどんな形だって許されないことだ。立村と加奈子ちゃんのことでは何があったかはわからないけれども、少なくとも美里がそのことを理由に、加奈子ちゃんを雪隠攻めにする正当性なんてないわけだもの。

私はもう一度頭を振り手を洗い、タオルかけに鞆をひっくり返して干した。その時だった。

「こずえ、こずえ、早く開けて！」

いきなり響いた声に、驚いてドアを開けると美里が身体で押し開け靴のままユニットバスに飛び込んだ。その格好、もろにジャンパースカートの真中を押さえつけていた。そう、バスの中で私がしていたポーズとそっくりだった。

「美里、どうしたのよ、いったいなんつうかっこうしてるのよ！」

答えず美里はいちもくさんにユニットバスへ飛び込んだ。ドアは開けっ放し、そのまますごい「自然の音」を響かせた。この部屋は防音があまり聞いてない。水音がびんびんに聞こえた。

「美里、おしっこ、丸聞こえだよ。そんなにがまんしてたの」

「さっき降りるまで。ずっと動いてたからわかんなかったの！」

「先にトイレに行ってくればよかったのにねえ」

「たった今がまんできなくなっただけ！」

美里はそれ以上答えなかった。代わりに、

「ほんつとに、馬鹿よ。あいつ！ 熱出したまま一日中うなされてるといいんだわ。だいきらい！」

トイレの中で絶叫した。これは戸を閉めているのでくぐもって聞こえる。

そうか、最初に立村の部屋に行ったんだよね。そうかそうか。さては痴話げんかしちゃったかな。

開けっ放しの戸の前に私は立った。なんで戸を閉めようとしないのかわからないけど、美里はそのままスカートをふわっとあけたままトイレに腰掛けていた。全力を使い果たしたって感じのおまぬけな表情だった。

「あいつって、立村のところに行ってたわけ？ 奴に襲われたりなんかしたの？」

「変なこと言い出すからおっぼいてドアを閉めたの。そしたら」

美里は言わず、私を手でおっぼらった。改めて開いたままの戸を閉めた。一泣きしたいんだろう。悔しかったんだろう。いったい、あの昼あんどんは美里に何をしでかしたんだろう。美里がさっきまで忘れていた、自然の呼び声を一気に思い出させるくらいの衝撃って。

「どうでもいいけどさ、美里。すごい音だったよ。あんなの立村に聞かせられないよね」

「そんなのどうでもいいじゃない！」

私はドア越しに話しかけた。

「それにもうひとつ聞きたいんだけど、美里さっき、『絶対、じゃあつとしてしまう女子が出てしまう』って言ってたよね。それ、どうしてそんなこと言ったのかなあ。気になるなあ。私あれで、がまんできそうなものが、できなくなっちゃったんだからね。責任とってよ」

美里は答えなかった。急にしゃくりあげる声だけが響いた。全くこのホテルのバスルーム、防音が効いていない。

杉浦加奈子ちゃんとの戦いが終わっていないのは知っている。最初、彰子ちゃんに呼び出されてバスの後方座席に行った時、美里は加奈子ちゃんが危機一髪状態だったことに気付いたのだろう。

もちろん青大附中2年D組の女子評議としての義務を果たそうとは思っていただろう。美里は責任感ある子だし、立村がいない以上自分で指揮をとらなくちゃと、焦っていたはずだ。

でも、それ以上に何かがあったのでは。

私から見ても、あと五分でも遅かったら加奈子ちゃんはスカートをずぶぬれにしていただろうと思う。少なくとも、ホテルまでは持たなかっただろう。「じゃあつとしちゃう人が絶対、いるんです」という美里の言葉は有る意味正しかっただろう。でも、それだったらふつう、「がまんしてね」とか「もう少しだから」と励まさないだろうか。

美里はあえて、「その場でしちゃっていい」と言った。

そのことで頭が一杯な時、私なら必死に別のことを考えるだろう。少しでも自然のことを忘れるために。

私なら絶対、言わない。

私はトイレの前に立って、もう一度声をかけた。

「杉浦さんに、じゃあつとさせたたんじゃないの、美里。あんたが気付いてないってこと、ないよね。もしそうだとしたら、人間として、最低だよ」

美里はトイレから出てきた。少し落ち着いたようだった。手を洗い、私の方を真っ正面から見つめて、いきなり抱きついた。涙で顔が汚れていた。

「こずえ、ごめん、本当にごめんね。私、私、私」

私の想像は当たっていただろう。

「まさか、こずえが、したかったなんて思ってなかったの。だから、だから」

もう声はくぐもって聞き取れなかった。私は何度か美里の方を抱いて座らせた。美里とは二年間の付き合いだけど、想像以上に泣き虫だった。一年の時、立村と加奈子ちゃんが付き合っているらしいという噂を聞いた時も、激しく大泣きしたのを見たことがある

「いいよ。私は美里のバックを犠牲にしちゃった奴だもんねえ。内緒にしとくよ」

けどね、と付け加えた。

「あんたが今飛び込んできた時の顔、さっきおしっこ出そうになって腰振ってた加奈子ちゃんと同じだったんだからね。どんな理由があったってさ、あんなあてつけがましいことしたら、あとで絶対に、罰当たるよ。あんたもいつ、似たようなことになるかわからないんだからさ。反省しなよ」

「罰、当たってる、わかってる」

涙ぐみながら美里は呟いた。まだしゃくりあげている。

「まあいいよ、どうせ他の子、気付いてないんだし。もし同じことまたやったら、その時は私も友だちやめるからね。それだけ言っとくよ」

これ以上は何も言わないでおいた。私の友だちでいる美里なら、きっとこれ以上のこと言わなくても、わかってくれると思う。

じゃあっと来る寸前に、どういう言葉をぶつけられると辛いかは、美里も五年生のおもしろし経験もあって想像ついたんじゃないだろうか。たまたま加奈子ちゃんが同じ状況で四面楚歌だった以上、美里は親切な評議委員の振りをして、加奈子ちゃんに残酷な言葉をぶつけつづけた。がまん限界に達している人にとっては一切耳をふさぎたい言葉を。

そこまで言いたくなかった理由というのが私には想像つかない。たぶん立村がらみなのだろうとは思う。加奈子ちゃんに致命的な恥をかかせてやりたい、それだけだったのかもしれない。実際、美里が発した「じゃあっと」という言葉で、私を含めてみな、パニック状態に陥ったはずだ。加奈子ちゃんもがまんの猶予時間を半分に削られてしまったはず。言葉で親切な振りをして、じわっと締め付けるやり方。絶対に知られたくないトイレ我慢を男子の前で暴露され、最後に「してしまう」予告までされたら、加奈子ちゃんはもう、袋のねずみだ。女子にとっては最悪の恥をかかせられ、三年間「宿泊研修のバスの中で、中学二年にもなっておもしろした杉浦さん」とささやかれるはめとなる。

これこそ、美里の狙っていたことではないだろうか。

けどどんな理由があっても、それは許されない。いじめだと思う。

ただ美里にとって誤算だったのは、私も同じくトイレパニック寸前だったことだろう。

美里は何度も、私に「ごめんね、ごめんね」を繰り返していた。

あの時泣きそうになりながら、私にバックを差し出そうとした気持ちは本物だったと私も思う。あの時懸命に、「私、絶対友だちでいるから」と伝えようとした眼差しに嘘はなかったはずだ。そんな美里だったら、きっと加奈子ちゃんにってしまったことの重大さに気付く。私はこれ以上何も言わなくたって、わかってくれるはず。

「美里、もういいよ」

泣きじゃくりつづける美里をベットに転がして、私は、鳴りだした電話を取った。

立村の声だった。美里を出すよう哀願していた。なさけない男だ。全く。

「美里、どうする？ 立村からだけど」

美里は首を振っていた。涙がまだ納まらないらしかった。

「じゃあ、私が相手しとくから、涙ふいてさ」

私は受話器を持ったまま、美里にティッシュを渡して軽く、頭に手を当てた。

母から預かった「修学旅行健康調査」の用紙を広げた。真夜中で誰もいない。静かな部屋の中で私はプリントの設問四を探した。

「お子様の夜尿症有無について正確に記載願います。なお、秘密厳守いたします。 有・無」

……母の手ではっきりと「有」の部分に印がついていた。

さらに母から渡すよう厳命された白い封筒が並んでいる。糊で封印されている。「いつになればこんなこと書かなくてもよくなるのかしら、名美子さん？」

半分嫌味混じりで。一年の新歓研修旅行、二年の宿泊研修、そして三年の修学旅行。毎回渡されていた。

たぶん文面は同じことだろう。読まなくてもわかる。

「娘はいまだに夜尿症が治らず、週に三回～五回程度失敗します。病院でも治療を受けてますがあまり芳しくなく、修学旅行三週間前になっても治癒の予測がつきません。申し訳ございませんが、つきましては娘を真夜中二時頃に起こしてやっていただけませんかでしょうか。この時間帯に排尿することが検査の結果判明しております。おお恥ずかしいお願いではございますが、なにとぞよろしく願いいたします」

だいたいこんな感じだろう。母は私がいまだにおねしょが治らずふとんを濡らしていることに腹を立てているはずだ。小学生ならまだしも、もう生理も来ている娘がいまだに世界地図を書いている現実を認めたくないと思っている。家族の恥、なんど一同からののしられたか数知れない。両親も、また兄弟も、そんな娘がいることを隠しておきたいとはっきり言う。

遺伝性のものではないらしい。なぜなら、私以外の兄弟は一度もおねしょを経験したことがないからだ。なのになぜ、よりによって女の私が。

病院でもかかりつけのお医者さんに申し訳なさそうな顔をしつつ宣告された。

「名美子ちゃんのおねしょは修学旅行までには直してあげたいけど、万が一のことを考えておむつの用意をしておいたほうが安心できるんじゃないかしら」

つまり、事実上の治癒見込みなし宣告だ。

覚悟がないわけではない。また、三年連続の完全徹夜で乗り切るしかない。

私は母の手紙を破いて捨てた。部屋のゴミ箱に捨てるとおそらく母に見付かるだろう。公園のゴミ箱あたりだとばれないだろうか。

ついでにプリントの「有」部分をボールペン専用の消ゴムでこすった。

思ったよりも黒さが濃い。消えない。でも「有」から「無」への変更は三年連続していることだから、あせりはない。

私は繰り返し丸を擦り続け「無」に丸をつけなおした。

青大附属在学の友だちで私の秘密を知ってる人は、一人だけだった。

先生も同級生も、誰も私がおねしょ常習犯だとは気付いていないらしい。

居眠りできないのは、油断すると無意識のうちにたらしてしまうかもしれないから。

怖い。今まで学校で失敗したことはないけれども、うたたねひとつで足をすくわれる恐怖をいつもかかえている。

なんで私はこんな体にうまれついてしまったんだろう。

普通に夜寝て朝目が覚める。そんな生活に馴染みたい。

母の罵倒と兄弟の汚いものをみるような眼差し。

毎月の検査でつめたいゼリーを背中に塗られて、エコーを受け、

「膀胱の機能が働きすぎるみたいだね」

などとささやかれる惨めさ、わかってくれるわけがない。

——風見さん、きっと、私が治ったと思ってるはずよね。

完璧すぎる風鈴頭の風見さんが、首をかしげている姿が目には浮かぶ。

もう四年以上前のことだしまさか今でも私が、あの夜と同じ大きさの世界地図を描いているなんて思っていないだろう。

五年の夏休みだったろうか。いきなり彼女が押しかけてきて、自然と泊まる手はずとなり会話が弾み、思っていたよりもまともな子だと知り、ほっとしていた直後だった。

きっと、気がゆるんだのだ。いつもならつけているおねしょシートを敷き忘れて忘れて横になってしまった。

気が付くと、床まで染み透るくらいの量をまかしてしまっていた。決してめずらしくはないことだけど、家族以外にそれを見せたのは風見さんが初めてだった。 地図というより湖。

死にたくなった。

なんで私はいつもこうタイミングが悪いのだろう。せっかく風見さんが下手に出てきて、私なりに対等にうまく繋がれるかと思っていたのに。

私はその日から、風見さんにすべてを委ねざるを得なかった。

水浸しになっていたのに気付かなかった私を、いち早く目覚めた風見さんは揺さぶり、

「ナミー、大変だよ、おしっこ、床にもっちゃってるよ！早く目をさまして！」

そう起こしてくれた。目覚めて事の重大さに気づき、さらに恥の上塗りをしてしまった。

いくら十一歳とはいえ、みっともない言い訳だ。

「風見さん、今ふとんの中にジュースを溢しただけよ。私いつも、ふとんのなかに持って行って飲みながら寝るくせがあるの」

そんなことできるわけがない。みえすいた嘘。

でも十一歳の私は必死だった。信じて、信じて、そう叫んでいた。

もしここで私が認めてしまったら最後。

風見さんはしばらく私の顔を見つめていた。こくっとうなづいて、

「ナミー、おふとん、交換しよ」

あの風鈴頭を揺らして、私のふとんをめくりあげ、

「私がしたことにするよ。大丈夫」

今と変わらぬ笑顔で、私のふとんに潜り込み、

「早く着替えたら。風邪引いちゃうよ」

あっけらかんと言い放った。

当然私の失敗は三十分も経たないうちにばれた。

「名美子さん、ただでさえみっともないのに、よりによって友だちに押し付けるなんて人間として最低よ！」

「トイレトレーニングやり直してこいよ。こんなきたねえ女、最低だな。俺たちの家族だなんて認めたくねえよ」

「ちょっとこちらに来なさい！ 四つんばいになって、お尻を出しなさい！」

風見さんの目の前で私はふとんたたきでおしりを十発くらいぶたれた。いつも布団をぬらした後は、母から厳しく罰せられるのが常だけど、いくらなんでも家族以外の人の前で叱られるのはつらすぎた。見かねたのか、泣きつづけている私を、風見さんはいきなり背中から抱きしめ、

「あの、私が、名美子さんのおねしょに気付かなかったからいけないんです！ ごめんなさい！

これからは私、ちゃんと名美子さんのこと気遣います！」

土下座する始末だった。もちろん風見さんを責めることはなかったけれども、彼女が口を利けば利くほど、私の価値はどんどん下がっていく。きゃあきゃあうるさい転校生の彼女よりも、ずっとみっともないおねしょ娘の私。

なぜ、彼女にかばわれなければならないのだろうか。

なぜ、私は彼女に守られなくてはならないのだろうか。

私に残されていた名誉回復の道はひとつだった。

青大付属に合格するすることにより渋谷家の娘としての面目を守ること。

両親にとって私はできの悪い二番目の子どもだ。

賢い兄弟とは違う。結果を出して、認められ、初めて私はこの場所にいることを認められる。そのためには誰もが納得する肩書きを手に入れること、それが手っ取りはやい手段だった。青潟のエリート中学・青大付属の生徒である証は、私のプライドを守り抜く最後の砦だった。

風見さんは私の秘密を今のところ誰にもはなしていないらしい。佐賀さんにもまだらしい。もう忘れていないに違いない。そうであってほしい。でないと私は彼女に見下されたままだ。あの日

から四年間、風見さんは口癖のように言う。

「ナミーには楽しい学園生活してほしいんだ。だから私頑張るよ！」

あの佐賀さんをはやい段階で目をつけて、

「彼女、絶対ナミーの親友になれると思うんだ」と紹介してくれたし、

「霧島くんはきっと生徒会に入りたがってるよ」と誘うよう藤冲会長に助言してくれたのも彼女だ。

生徒会選挙で会長になれなかったかわりに、私は親友と片思い対象の男子の側にいられる。

もちろんうれしいけど、もし風見さんが陰で動いていなければ。私ひとりの手で手に入れたものであったなら。

私がほしいものはみな風見さんが用意してくれた。頼んだわけではない。生徒会役員の座もみな。おかげで私は今のところ手痛いミスをしていない。このまま順調にいけば私はしっかりものの生徒会役員として卒業できるはずだ。佐賀さんともこれからずっと友達でいられるだろうし、もしかしたら霧島くんも少しは私を意識してくれるかもしれない。今の私を保てれば。だけど、影武者のように立ち回る風見さんの存在に感謝できない私がいる。ナミーと呼ぶその隙間に、

「私はナミーの秘密を知ってるのよ、だから親友になりなさい」

そう私を脅しているように聞こえる。

おねしょふとんを見付けられてしまった夜、私は彼女に「親友」という名前の口止料を払ったようなもの。

——私は絶対、しないから大丈夫。修学旅行では、絶対。だから、先生たちに言わなくても、大丈夫。

開いたままのプリントには、「無」のところに強い筆圧の丸が浮かび上がっていた。

絶対に大丈夫、私は青大付属のなかではおねしょなんてしてない。

やってしまうとしたら、我が家の布団の中でだけ。家族以外、誰も知らない。学校に知らせる必要もない。

——風見さんに思い出させる必要もない。

私は寝る前に病院から処方された薬を飲み、目覚ましを二時にセットし、お手洗いにむかった。銀色のおねしょシートを布団の上に重ねてある。今夜、おむつをつけるのは修学旅行で使うためじゃない。だって、私は家でしか絶対におねしょをしないと知っている。だから、誰にも教える必要なんてない。手紙なんて、渡す必要なんてない。

1

——調子に乗りすぎたって言われるだろうな。

清坂氏をバス停まで送り届け、乗り込むのを見届けた。かるく手を振ってくれるので、振り返した。発車した拍子ににごった雪のしぶきが靴にかかり、一步下がった。

——なんで帰ってくるんだよ、父さん。

こういうシュチュエーションを想像しないわけではなかった。清坂氏に、「うちに誰もいないって言ってたけど、大丈夫なの？」

と真剣に尋ねられた時も、

「大丈夫だよ。食べるものあるし、かえって気が楽だろ？」

そうこたえたのだから。

話が決まったのが一週間くらい前。友だちをもてなすためには美味しいものが必要だってことは、母からいやというほど叩き込まれている。掃除をしとかなくちゃいけないし、料理の材料も用意しなくちゃいけない。うちにあるテーブルクロスとかも選ばなくちゃいけない。まあ、そんな気取る必要はないだろうけれど、清坂氏はもともとおしゃれな人だ。こだわりはあるだろう。帰り道一緒に歩いては、どういうものが好みで、食べるものは何が好物か、ケーキ類はショートケーキがいいのかチーズケーキがいいのか、みんな会話の中で取り込んだ。僕なりに努力はしたつもりだ。

十二月二十四日という日付も考えて、ちゃんとクリスマスツリーだって用意したし、赤いテーブルクロスと緑のコースター、ランチョンマットだって引っ張り出した。黒い漆塗りのコースターがあったから、ワイングラスの下に敷いてやろうと思ってちゃんと磨いた。

子ども用のシャンパンが安く売ってたから当然それも買い込んだ。

母がしていたことを真似しただけのことだからたいしたことじゃない。

お客様が来る以上、ホストたる僕としては当然のことをしてだけじゃないか？

父さんに文句を言われる筋合いはない。ないはず、絶対にはないはずだ。

しかし言い返せないのが僕の弱弱しいところでもある。情けない。

「上総、今日はいったいどうしたんだ」

玄関に入り、靴から雪を払っていると父がドアに持たれて待ち構えていた。

わかっている。なんで親のいない時に友だちを連れ込んだのかってことを説教したいんだろう。ああ、わかっている。しかも相手は友だちとはいえ女子だ。ふたりっきりだ。

「わかっている、ごめんなさい」

口先だけであやまっておけば、父はあまりうるさく言わないだろう。この人はもともと僕を怒鳴ったりしない。殴られたことなんてほとんどない。けれど、冷静沈着な言葉が、結構僕の中に深く入り込んできて落ち込むこともしばしばだ。母がいなくてよかった。あの人がいたら今こ

ろ修羅場だ。大変なことになっているはずだ。明日の太陽拝めない。

「あの、皿とかは」

「余ったものはみんな冷蔵庫だ。今夜の食事だな」

コートを脱ぎながら恐る恐る父の顔を覗き込む。たいていの場合、ペろんとして無表情だったら大丈夫。笑みを浮かべていたら要注意。わざとらしい笑顔だったらすぐに部屋へ退散すべし。これが原則だ。幸い、何も読み取れないので背中を丸めて居間へ向かった。

「上総、ちょっと待て」

「今、片付けるから」

「いいだろう。今日はクリスマスイブだ。そのまま夕食を食べるのもいいだろう」

——もう見たくないって。

たぶん父さんのことだ。ちろちろ部屋の中の様子を覗き込んでいたに違いない。気付かなかった僕の馬鹿さ加減に腹が立つ。真ん中のソファに清坂氏を座らせて、僕は隣りでいろいろ話をしたり、食べ物を用意したり、それなりのことをしていた。ちょうどふたりで、プレゼント交換をしようか、と箱を取り出していたところだった。かろうじて渡したけれども、父さんにもろ見られたのは失敗だった。僕の手元に残っている電卓だけが間抜けだ。

「まずはそこに座れ」

父は有無を言わず僕に、ソファを指差した。

——まずい、父さん本気だ。

僕の経験でいうと、父さんを怒らせてしまう可能性が高い点は、母さんのことをののしった時だろう。

一度ひどいめに合ったことがある。

「なんであんな人と結婚したんだよ！」と怒鳴ったとき、三日間口を利いてくれなかった。

でも今日は、母さんの話をしなくてすむはずだ。僕は黙ってソファに座り直した。電卓をしまいこんだ。と同時に一緒に零れ落ちた小さなカードをポケットに押し込んだ。

2

父さんはまず、ローストビーフをつまんで口に放りこんだ。

「母さんと同じ味だな」

そんなの誉められたってうれしくもない。次にケーキのクリームを指でつまんでなめた。

「これも母さんの好みだな」

——いやみかよ。

悪いが全部、僕の好みだ。母さんなんて関係ない。

「食べるなら勝手に食べれば」

「お前はどうかんだ？」

「食べたけど」

僕もむっとしながら答えた。

「こういう時は、夜ならワインがほしいところだが」

「そんなのない。話があるならさっさと終わらせろよ」

父さんはつまみ食いを一通りした後、

「お前がどれだけ力をいれていたかはよくわかる。彼女は喜んでいたな」

「そんなの関係ない」

いろいろ事情があって、ここに連れてこざるを得ないなんてこと、話す必要ない。

「それよりも上総、ひとつ聞きたいのだが、いいか」

父さんの声音が、仕事口調となった。

「異性とふたりきりになるということは、どういうことか、少し考えたか？」

——やっぱりそこか。

もう僕は黙るしかない。頭下げるしかない。正論である。

「ごめんなさい」

一言だけつぶやいて目をそらした。

「上総、顔を上げろ」

「だから、俺が悪かったから」

「会話になってないぞ」

怒ってはいないけれど、顔を上げなかったら確実に怒る。しかたない。僕は斜向かいに父さんを見上げた。無表情ながらも、父さんはいつのまにかローストビーフをほとんど食べ終えていた

。

「もちろん昼間だし、お前もそれなりに考えるところもあっただろう。もしここがどこかのレストランであり、学校の教室であり、大人のいる家だとしたら、まったく問題はない。それはわかっているな」

「わかっている」

「もてなしの努力も認める。ただ、今日、父さんがここに居ないということは、最初からわかっていたはずだな」

「友だちを連れてくるだけだって」

清坂氏が女子だということをまずさておいて、仲のよい友だちとして呼んだということならば、別に問題はないはずだ。

本当にそれだけなんだ。

ただ、たまたま女子だっただけであって。

「そうだな、友だち。それは間違っていないがな」

口元にわずかな隙間を開け、父さんは顔を斜めにしてつぶやいた。もちろん、僕の顔を覗き込み

「二人っきりになった場合、お前はきちんと自分を律する自信を持っていたか、を聞きたいんだ」

——何考えてるんだこの人。

もって回った言い方をされるのもむかつく。要するに「むらむらしないのか？」とでも言いた

いのだろう。

「失礼なこと言われたくない」

「上総、失礼なことではないよ。お前も気付いているはずだが」

また一口、今度はサラダを指で拾い上げ、押し込みながら。

「妊娠させることができるということを、自覚しているかということなんだ」

頭の中が真っ白くなった。日本語だと認めたくない。父さんの言葉なんか。

「ものすごく、失礼だよ」

父さんはまったく動揺せずに、僕の顔を覗き込んだ。

「やはり、これうまいな。母さんと同じ味付けだ」

なんて訳のわからないことを繰り返しながら、

「毎晩儀式をすませる前に、そのことはきちんと頭に入れておくように」

また、にやりと笑った。

3

「うるさいな、何ふざけたこと考えてるんだよ！」

名誉毀損で訴えてやりたい。いくら親とはいえ、言っているいいことと悪いことがあるはずだ。

「たかがうちに友だち連れてきただけだろ！　なんでそんな大げさなことになるんだよ！」

「いや、大げさじゃないだろう。お前、否定できるか」

「そんなの関係ないだろ！」

立ち上がって思いっきりテーブルの脚を蹴りつけた。ついでに父さんの食べ終えた皿を思いっきりひっくり返してやった。空っぽになっていたから食べ物は無駄にしてない。父さんの大好きな母さんの教えはきちり守っているから、僕に文句を言われる筋合いはない。

「片付けるのはお前なんだから、あまり散らかさないように」

何様のつもりなんだろう、本当にこの人は。全身が燃えたぎるくらい熱い。テーブルに両手を突いてやった。ここまで馬鹿にされるんだったらこちらだって言いたいことがある。

「人のこと言えるかよ！　順番間違えた結婚しやがったくせに！」

親戚回りをする時いつも僕は、「上総くんのご両親は本当にお若いわよねえ」とか「お若いからやはり、いろいろとわからないことも合って当然よね」とか「親になるにはある程度の年齢を重ねないとねえ」とか、いやみっただしことを大量に言われつづけてきたのだ。ふざけるなといえなかったのが子どもの悲しさだ。父さんの言う通り、そうさ、僕は妊娠させることができるだろう。それは認める。だけど、父さんや母さんのように、本能だけで子どもを作ったりするもんか。自分自身のことを棚に置いて、息子を物笑いの種にする資格があるものか。ふざけるな。まだまだあるさ、言いたいこと。殴りたいなら殴れ！

「自分の子どもを変態扱いするなよな！　自分たちがそうだったからって言って俺がそうだと決め付けるなよ！」

「おいおい、今度は八つ当たりか」

ちっとも動じない。これが例の熱血担任だとしたら思いっきりぶん殴ってやりたい。かっとなめればこちらも噛みつきがいがある。だが父さんって人は、よっぽどのことがない限り怒らない。僕も殴られたことはまったくない。とことんののしってやろうか。

「息子の成長を喜んでいのだと気付いてほしいがな。大人の身体にめでたく成長しても、男子の場合だとなかなか誉める機会ないからな」

「誉められたくもないさ！」

「女の子なら、お赤飯でも炊いてやるところなんだが」

徹底してからかいつくそうとしている。どこが「誉める機会」なんだか。そんなこと死んだってされたくない。女子ならお赤飯、の意味もわからないわけではないけれど、そんなの本当にうれしいものなのだろうか。どっちもどっち、そんなの無視してくれたほうがいいに決まっている。

。「まあ怒るな、母さんには言わないから安心しろ」

清坂氏が使っていたフォークで思いっきり顔を突き刺してやろうか。僕はこの人の遺伝でのんびり受け止めるだけの器を受け継いでいない。

「だが、本の選び方は感心しないな」

「本？」

言われている意味がつかめない。父さんの目をまじまじと見詰めてしまった。

「男なんだからそういうことはうるさく言いたくないが」 初めて大きくため息を吐いた父さん、ゆっくりと両手を組み、テーブルにつけた。身をかがめてきた。

「女性の尊厳を傷つけるような写真ばかり見るのはよくないよ。言いたいことはわかるな、上総」

——俺の親って根本的になんかおかしいよな！

もう何も考えられなかった。今まで真っ正面からこんな、いわゆる「保健体育」のような言葉をぶつけられたことはない。父さんにも確か去年の半ばくらいに「妊娠だけはさせるなよ」とか言われた程度だ。その時は僕もさらりと流していた。こんなにしつこくつかまれることもなかった。知らないわけじゃないけれども、そんなこと親になんて説教されたくない。僕以外の男子もみな、同じだろう？ 僕に関して言えば、その手の知識は本条先輩から全部教わっている。いまさら、ねちこく性教育なんてされたくない。

——殴らないだけ母さんよりましだと思ってたけど、結局は夫婦かよ！

血がすうっと昇っていく。頬が燃える。全身が震える。

「なんだよその尊厳傷つけるって！ 意味不明なこと、なぜ！」

レディーファーストをきっちり仕込まれた僕に対してよくもまたそんな無礼なことが言えるものだ。自慢じゃないけど、僕は女性に対しての礼儀を卑屈なくらい守っているつもりだ。今だってそうだ。ちゃんとバス停まで迎えにいったし、できるだけ料理もおいしそうなもの用意したし、向こうが疲れてきたなと思ったからお菓子用意したりしたし。とにかくいろいろやったはずなのだ！。

なのに、なんで僕が、「女性の尊厳を傷つける写真」だなんて見たというんだろうか。「そんなのどこにあるんだよ！ 子どもに濡れ衣着せるのって根本的になんかおかしいだろうが！」

父さんは僕がひっくりかえした皿を元に戻し、まずは「ごちそうさま」と手を合わせた。「具体的にどんなものが言ってみろよな。俺がそんなこと、いつしたってさ！」
「ああ、そうか。悪かったごめんごめん」

鼻で笑いながらも、父さんはまったく動じずに、
「お前、縛ったりたたいたりするような趣味、もっているわけじゃないんだな。安心した」

「叩く？ 縛る？ なんだよそれ！」 言ってしまった後で後悔した。代わりに出てきた言葉にも。

「父さんもしかして俺の部屋勝手にかき回したんじゃないだろうな！」
「お前が出しっぱなしにしてたのを見かけただけだよ、上総。この前たまたま枕もとで見つけただけだが」

「父さん……！」

理由がわかってしまった以上、僕は何も言い返すことができない。ああそうさ、この前、例の評議委員会関係のいざこざで僕が壊れてしまった時、本をあちらこちらに投げ出して、あとで片付けたはずだった。かっとなってしまった時は自分でも押さえきれなくて何をやらかしたかわからなかった。その後できちんと本棚に戻したはずだったが、たぶんその際、タイミング悪く父さんに見られてしまったのかもしれない。それしか考えられない。なぜならあの本はいつも、「グレート・ギャツビー」の函に隠してあるか、もしくは鍵つきの引き出しのどちらかにしまったはずなのだから。

「人の部屋をかき回すのはやめろよ！ それに、表紙だけ見て、なぜ勝手に変態扱いするんだよ！勝手に決め付けるなよ！」

絶叫するしかない。

「ごめんごめん、そうだな。お前が、大切な人の気持ちを無視して欲求ばかり押し付けるような子でないことは、よくわかっているつもりだよ。そう怒るな。そうだ、せっかくだ、この機会にこっちにおいで」

あっという間に父さんは僕の腕を取り、自分の部屋へと無理やり引きずっていかうとした。抵抗したいが、かなり力が入っていて抜けられない。子どもみたいに暴れるのはプライドが許さない。頭が混乱した中、僕はしかたなくついていくしかない。

父さんの書斎にはめったに入ることがない。仕事部屋で、本棚もうずたかく床に、本棚に、積み上げられている。でも基本としてはきちんと片付いている印象のあるモノトーンの部屋だった。黒い本棚と机、カーテンだけなぜか緑色。センスがいいのかわるいのか、僕には理解できない。はっきりしているのはこの部屋のセンス、母さんが手を出したものではないという点だけだ。
「お前もこういうとこだけ、大人になったよな」

独り言をつぶやくのはやめてくれ。僕の顔を覗き込みながらしみじみ言うのもやめてくれ。「まだまだ早いとは思うんだが、身体がそうになってきている以上、上総にも教えておく」
なにが「身体がそうになってきている」だ。赤飯なんて炊いてもらいたくもない。きっぱりお断りだ。

父さんはまず、母さんの寝室……厳密に言うと父さんと母さんの寝室で、母さんが泊まりにくる時専用の部屋……へ入っていき、
「ここで待ってなさい」

言い捨て、何かの紙箱を持ってきた。白い箱で、だいたいB4程度の大きさだ。特に何も表書きがない

。次にふたたび父さんの書斎に戻り、一度きちんとそれを開けた。中には四箱ほど、紫色の小箱が納まっていた。こちらはまったく手付かずのままだった。ちらと、何かこれはと、感じるものがある。初めて見たものではない。そう、確か、保健体育の時に渡されたもの。

洋服ダンスを開き、父さんは中に入っているものと同じ大きさの箱を二箱、取り出した。やはり紫色のものだが、だいぶ手がついている。「上総、これが何かは、わかっているな」

無言、それしかない。そんなもの見たくもない。僕は父さんの本棚だけじっと眺めていた。「広辞苑」を一冊用意して家庭内暴力やらかしたい気分である。

「使ったことあるか」

「知るかよそんなこと！」

ない、とあっさり言ってやるのがいいんだろうが、それも情けない。どうせ「やっぱりお前、ガキだからなあ」とにやにやされる顔が目につく。冗談じゃない。父さんはその箱から、薄いビニール小袋を取り出した。やはり、僕の想像していたものと一緒だった。

「しばらく父さんも、使う機会が減るだろうし、お前も少しこれで、練習したほうがいい。実践はもちろん、まだ早いことはよくわかっているだろうが、ただこれから先、出会う人のためにもきちんと、手早くつけられるよう、練習しておきなさい」

「練習って」

声が出なくなってきた。何か頭の中に炎が燃え盛っている。大火事だ。

ずっとまえ南雲から聞いた話では、

「うちの父さんに、中学入学した時、コンドームを一箱渡された」

とか言っていたけれども、まさか僕が、その立場に立つとは思わなかった。僕だってその、人生でこれから先、避妊具を使うことは必要だと理解している。本条先輩にも口すっぱく言われている。でも、それはまだまだ、本当に、まだ先の話だろう。まかり間違っても清坂氏を前提に考えたことなんて、まったくない。あるわけない。

「上手につけられないと、面倒になってつい忘れてしまうこともないわけではないからな。練習用ということなら、いくらでも使っていていい。必要な時に取りに来なさい。だがな、上総」

暴発寸前、こぶしが震える。片手にぽんと、母さんの部屋から持ってきた分を一箱、渡された。受け取るしかない。

「それは決して、実戦を勧めているわけではないことも、わかっているな」

——実戦、ってどういうことだよ！

紙箱を指でつぶしてやりたい。

「お前が男として、生命を与える能力をもっていることを自覚し、かつ女性の身体をいたわるだけの余裕ができて、さらに面倒くさがらずに装着できるようになるまでは、実戦で試すべきではないと、父さんは考えている。もちろん上総もそのあたりはきちんと理解しているはずだと思うが」

もう限界だった。僕は手元にあった手付かずのコンドーム一箱を思いっきり床に叩きつけた。

「うるさい！ 俺がそんなに、非常識な人間かと思ってたのか！ ふざけるな！」

父さんがどんな顔をしていたかなんて、知ったことではない。

後片付けなんて、誰がやるか！

僕は自分の部屋に飛び込み、しっかり戸を閉められるような箱を用意してつかい棒代わりにした。

4

部屋に戻り、まず確認したのは「グレート・ギャツビー」の函に入っているはずのものだった。

——先入観もいいとこすぎ。

今年の秋、南雲がこっそり古本屋で手にいれてくれたという写真集が収まっていた。

大荒れに荒れた夜、このあたりの本も思いっきり投げつけた記憶がある。その時に散らばったのだろう。でもすぐに隠したし、つい最近も開いた記憶がある。油断大敵とは、このことだ。

——紐？ 縛る？ そんなとこばかり見てたと思ってたのか！

親だから言い訳ができない。それが悔しい。もしこれが友だちだったらまた別なのだろうが。

単に、この中のモデルさんが僕好みの顔をしていて、雰囲気も気品があって、どう考えてもこういうタイプの写真集には出ないようなタイプの人だったから、ほしいなと思った、それだけだ。別のグラビアで見かけて、えげつない格好をしていないところが、なんとなくいいなと思っただけだ。たまたま今年の夏、その人の写真集が出ていたから、手に入れようかなと思っていたのだけれども、父さんの言うとおりの「女性の尊厳を傷つける」内容に思えて、買うのをあきらめたのだ。あたりまえだ。僕には女子をいじめたりののしったりする趣味なんてない。けど、南雲に打ち明けたらしっかり覚えていてくれて、プレゼントしてくれた。それだけなのだ。もちろんたまに観てはいろいろなことを感じたりするけれども、断じて、紐とか縛るとか、そんなものではない。かえって痛いだろうに、とか思って解いてあげたくなる。

父さんが追いかけてくるかもしれない。急いで本を閉じ、本棚にしまいこんだ。

次に、生徒手帳に収まっている薄い袋を確認した。

——なんだよ、そんなの知ったことかよ。

去年の保健体育で、男子だけ集められて第二次性徴について学んだ。ほとんど本条先輩から教えてもらったことの方が多くてあまり興味もなかったのだけど、終了時に避妊具を一枚渡された。そんなのいつ使うんだ、と思ったけど受け取るしかない。だけどまさか、父さんに、「練習しろ」と言われるとは……思ってもみなかった。

——誰がそんなことするか！ ばかにしやがって！

本条先輩から教えてもらったこともあって、こっそりやってみたことがないわけではない。それでいいじゃないか。そんなに必死に慣れる必要なんてないだろうに。どうせ僕は、そういうチャンス、もしかしたら永遠に回ってこないかもしれない。そんな当てのない日々を楽しみにして、ついたり抜いたりする練習をしろだなんて、何考えてるのだろう、うちの親は。そのくせ、「実戦はするな」ときた。妊娠させる身体に育った、そりゃあたりまえだろう！ 僕がそうなりたくてなったんじゃない、勝手に育ってしまったんだ。そんなことをめでたいと思う気にはまったくなれない。かえって、惨めなことの方が圧倒的に多いのに。赤飯なんてノーサンキューだ。ふざけるな！

ふと、ポケットに、かさこそ言う気配がした。

取り出すと、さっき清坂氏からもらった銀色の電卓が。

——電卓、だよな。

小さな赤いカードを開いてみると、

——立村くんへ 今年も素敵な一年をありがとう。来年も仲良くしてね。メリークリスマス！
金色の丸っこい文字で、美里のメッセージが綴られていた。

少しだけほっとして、頬が緩む。そうだった、清坂氏と話をしていたあの三時間ほどは、なんにも考えないですんで、気が楽だった。

けど、電卓か。

——俺が数学できないから、電卓なんだよな。

余計なことを思い出してしまい、また雲がふうっと浮かんでくるようだ。そうだ、そろそろ清坂氏も青潟駅にたどり着いている頃じゃないだろうか。無事に到着しただろうか。そして、僕の渡した、緑色の袱紗、喜んでもらえただろうか。勘違いしたプレゼントでなかっただろうか。食べ物満足してもらえただろうか。

——父さん、まさか。俺が清坂氏をそういう目で見てたと思ってたのかよ！ 最低だ！ 自分らがそうだったからって勝手に決め付けるなよな！

赤いクリスマスカードが、さらに全身、あおってくる。

まったく父さんは僕の怒りなんて無視して、さらに神経を逆なでしてくる。

息子は親のおちょくりには耐えるのが義務なのか！

「上総、さっきのもの、戸口に置いとくからな」

いらいらするくらい冷静な、父さんの声が響いた。わざわざ追いかけてきてくれたらしい。ご苦労なことだ。誰がありがとうだなんて受け入れるものか。

「うるさいな！ そんなの知るかよ！」

怒鳴り返し布団にもぐりこもうと思った。が、気になって細く戸のところを開けてみた。

さっき投げ返した、紫色の小箱が上のほうだけ少しへこんだまま、置いてあった。しかも二箱

。

無視してごみ箱に投げこんでおこう。箱を部屋に持ち込んだ後、一度開いてみた。本体の封を切ったら負けてしまうような気がしてやめた。つくえにまずは置いてみた。使い方は知っている。本条先輩から聞いている。

今のわけのわからない「保健体育」授業だが、要するに父さんは、僕が清坂氏にそういったいやらしいことをしでかすのではないかと危惧したんだろう。まさか、そんなこと、絶対にありえない。つきあっているとはいえ、中学生の段階でそっちまで進むだけの力があるのは本条先輩くらいしかいない。本条先輩のようにすごい人でなければ、ゴムを使う実践をするなんてこと、ありえない。

けど、僕は……。

いつかは、使う日が来るだろう。来ないと困る。本条先輩と同じようになる日が来たら、かならず。

本条先輩のように堂々と振舞える時が来るまでは、まずありえないとは思っけども。でもそれは僕だけではない。本条先輩以外の人がそういう経験をするなんて、まずありえないことだろう。まだまだ、先のことだ。いるわけない。青大附中の現二年生に、そんな奴がいるわけない。だから、僕も今はまだ、ありえない。ありえないけども。

——本条先輩は、どう言うだろう？

本条先輩は僕に、一年の頃から、

「お前とにかく避妊だけはきっちりしろよ」

としつこく話していた。もちろんそれ以前の問題だったので聞き流していたけれども、ここまでうるさく言うということは先輩なりに何か思うところがあるのだろう。うちの父さんが息子をおちよくるために言うのとは訳が違う。

としたらだ。

すばやくつける練習というの、あながち間違っているわけではないのかもしれない。これから先、現実問題として、さほどのことがない限り。

ならやはり。

——本条先輩に聞いてみよう。

父さんなんて信用できないけど、本条先輩がやったほういいと言うのなら。

僕はいったん、その箱を鍵つきの引き出しにしまいこむことにした。

やはり難波はすごい勢いで教室を飛び出していった。

——どこへ行くんだ。

誰もがわかっているのに、誰も何も言わない。

女子評議の轟がぼそっとつぶやく。

「さて、どれから片付けていこうかな」

出っ歯からしゅうしゅう音をさせつつ、「評議委員会ノート」を開いた。

「悪いけど藤沖くん、手伝ってくれないかな」

「難波の代わりか」

「そういうこと」

あっさり認めて轟は、俺にメモを一枚渡した。

「やはりね、女子一人で片付けるといのはいろいろと面倒なのよ」

「女子同士で片付ければいいことじゃないか」

「そんなこと、できるわけじゃないの」

轟は冷静に交わすと、俺に視線で「早くして」と訴えた。

残念ながら色っぽさはまったくない相手だし、それはそれで仕方ない。

それにこの女子、普通の女子連中よりも仕事ができる。頭も切れる。噂によると法学部進学を志望し、司法試験を夢見ているという話だとか。直接話を聞いたことはないが、かなり賢い女子であることには変わりない。

俺はかばんとリュックを背負い、教室を出た。轟が歩いていくのはどうも、コピー室のようである。この時期下級生がかなり使用しているはずだが、何かコピーを大量にやる必要でもあるのだろうか。

コピー室はガラガラだった。

「ああ、そうね。今日は一年と二年、みんな英語の検定試験受けているはずよ」

「なんだそれは」

俺は受けたことがない。轟もないはずだ。

「今年から青大附属内限定の英語試験があるらしいわよ。私たちは抜き打ちで明日」

「抜き打ちだと？」

俺は聞いたことがない。なぜ轟が知っている。

「たぶん、英語科へ今から進みたい人のために、準備試験をするんじゃないの」

「よくわからんが、そうなのか」

あまりわけのわからないことはつまらないでおくのがよい。

「そうね、それはそうと藤沖くん、今日は二点ほど、頼みがあってね」

「いきなりなんだ」

轟がこういう頼みごとをする場合考えられるのは、まず三年B組の裏事情が絡んでいることだ

ろう。深海魚に近い顔立ちだが、男子たちに受けはよい。だがそのこと自体を轟はしつこいほど隠そうとしている。その辺が女子たちとの問題なのだろう。特に女子連中が目をつけている男子には注意深く近寄ろうとしない。必然、轟が話し掛けるのは女子人気の低い男子であり、また委員会関連でつながりのある難波であり、また元生徒会長である俺だろう。つまり、女子人気の高い野郎に頼みごとがある場合は、つながりのある男子に話を持っていくのが轟流だ。さすがに頭のいい奴の考えることは違う。

「まず一点目、難波くんのことなんだけどさ」

机の上にそのまま座り、足をぶらぶらさせながら轟は俺に小首をかしげた。

「事情はよくわかってるよね。好きなようにさせてやってもらえないかな。放置してやってほしいんだけどね」

「まあしょうがないだろう」

「その代わりといっってはなんだけど、藤沖くんに臨時で手伝ってほしいんだ。あと二週間くらいだしね」

「しょうがないがな」

たいして手伝うようなこともないが。いくら難波がああ調子だとしても、卒業式予行練習および本番に顔を出さないなんてことはない。せいぜい、卒業式後の打ち上げクラス会の準備を行う程度だろう。

「それともうひとつなんだけどね。藤沖くん、ごめん、申し訳なかった。謝る」

「何をだ」

そこまで言って、すぐに合点が行った。

一年の夏に頼み込んだことがある。とっくの昔に時効となっているはずだ。轟が謝る必要などない。「関係ない、あれは言葉の綾だ」

「約束は私、守るつもりでいたんだけど、状況がああなってしまった以上、私もごり押しできない。ごめん」

もう一度轟は、立ち上がって頭を深く下げた。

——藤沖くん、悪いんだけどさ、C組の霧島さんにこの書類届けてくれないかな。

轟が俺にやたらと声をかけるようになったのは気がついていて。当時の俺は生徒会に立候補すべきかどか迷っていた。

きっかけは、一年後半に担任から、

「このままだと二年以降お前が評議委員に推される可能性が高い。もちろんやる気があるならそれはいい。だが、流れを考えると難波にこのままやらせてやりたい気持ちもある。藤沖、ここは男として、生徒会役員に身を投じてもらえないか」

言われたことだった。次の年にはなんとしても応援団を設立させたいあまり、学校祭に力を入れすぎたのがまずかったらしい。B組の後期評議に間髪選ばれてしまうところだったのも、担任には危機感があったのだろう。一度委員に任命された以上、よっぽどの理由がない限り換えてはならないという、暗黙の了解があり、それゆえに俺も認めざるを得なかった。このままだと難

波が落とされるという最大の屈辱を受けるはめとなる。それを避けるための行動ならば、わからなくもない。

轟がその時何を考えていたかはわからない。ただ、俺になりゆきで近づいてきて、

——たぶん、生徒会役員だったらかならず評議委員会とからむことになるから、私としては助かるんだよね。

などと、いかにも生徒会役員を勧めるようなことを耳打ちしてきた。

——難波くんとは関係ない形でだから大丈夫だよ。

もともと俺は、難波とそれほど話す機会がなかった。単純に言ってしまうと、相性が合わなかった。やたらと自分の雑学を自慢したがる難波と、経験で判断を下す俺とでは、テリトリーが違う。それもあってクラス内ではグループも別だった。もっとも生徒会長になってからはそんなことも言ってもらえずいろいろと話をするようはなったが、おそらく轟よりは会話数も少ないだろう。

轟はしばらくどうでもいい話をしつづけていたが、やがて、

——ちょっとC組に連絡入れる時、藤沖くんに頼みたいんだよね。難波くんだとどうも、ちょっとトラブルがおきやすいんだ。

あいまいなことを言い出した。理由はそれほど突っ込む気もなかった。

C組の女子評議とはしょっちゅう顔を合わせることも多くなっていた。

無難なやりとりしかしなかった。

ただ、それだけのはずだった。

轟はしばらく無言で俺に頭を下げつづけた。

「言い訳をするようで申し訳ないけどね。私も、正直、こういう展開は想像してなかった」
ぼそっとつぶやいた。

「誰も想像できないだろう」

「そうだね、できたら私、藤沖くんとゆいちゃんがうまく行ってくれたらなって思ってた」

「別にそれは望んでいない」

「そっか、それならいいか」

あっさりと言われ、俺はどう答えたらいいか困った。もしねちねちと泣かれるような展開だったら、戸を蹴って出て行けばよかったが、轟はきちんと筋を通すために現われたわけだ。それなら俺も当然、受け止める義務がある。

「無責任なこと言ってしまったことについては、本当に申し訳ないなあって思ってる」

「もう気にするな」

「ありがとう」

それ以上轟は口に出さず、すばやく荷物をまとめ始めた。

「お前はどうするんだ」

「ああ、私？」

ため息を吐いた。

「どうするんだろうね」

他人事のようにつぶやき、轟はすばやく背を向けた。

きっと轟は、自分なりにけじめをつけておきたかったのだろう。

——無責任なことやってしまったことについては、本当に申し訳ないなあって思ってる。

女子は軽く口にしたことすらも重たく受け取る傾向がある。話のしやすい女子の轟でも、俺のたいした思いのない言葉を真剣に受け取りすぎたのだろう。俺はただ、轟が勧めてくれるのならば、うまくいこうという意味の言葉を発しただけにすぎない。

——できたら私、藤沖くとゆいちゃんがうまく行ってくれたらなって思ってた。

俺自身も感じていなかったことを、轟は自分なりの判断でとっとと進めてくれた。俺は何一つ自分から行動を起こしていない。

ただ、行動を起こした奴が、ひとりいたというそれだけのことだ。

——ゆいちゃんはね、意地っ張りに見えるけど、本当はやさしくしてほしいんだと思うんだよね。そういう人には、きっと心を開いてくれる子なんだよ。もし藤沖くんがいやじゃなかったら、私は応援するよ。たぶんゆいちゃんは、しっかり守ってくれる男性の方がいいよ。

おそらく轟も、最初のうちは気がついていなかったのだろう。決して軽い気持ちで言ったわけではないだろう。

一年の終わりならば、それも当然だ。

いくら難波の女房役だったとしても、あいつの心を読み取ることは簡単ではない。

難波とはおそらく、これからほとんど会話をする機会が減るだろう。

俺は英語科に進むわけだし、必然的にクラスが変わると縁も切れる。

誰かが情報を運んでこない限り、思い出すこともなくなるだろう。

「おい、轟」

「なあに」

「あの、あれは、どうなんだ」

わけのわからない言葉を俺は口走っていた。

「今、どうしてるんだ」

「ゆいちゃんのこと？」

確認してくれたので俺はこれ以上しゃべる必要がない。轟は振り返り首をかしげた。

「卒業式には来ると思うよ」

「そうか」

「卒業式のあと、もし、呼び出したほうよければするよ。結果はともかく、ゆいちゃんこれで、最後だしさ」

ツーカーで通じているのがわかる。

「いらない」

「わかった。そうだ、それでさ」

ふと思いついた風に轟は付け加えた。

「借りは返すからね。ちゃんと利息つけて返す」

「気にするなよ」

「私さ、あんたのタイプがどんな子だかだいたいわかったから、今度はみまちがうことないと思うんだ」 いやみのない言い方だった。

「その時協力できるようだったら、いつでも声、かけて」

男なら怒鳴るところかもしれないが、そこに邪心がないことを俺は知っている。

「その時は」

今度こそ、轟は教室を出て行った。入れ違いに下級生たちが集団でプリントを抱えて入ってきた。俺も長居はできなかった。

人から勧められない限り行動を起こせなかった俺が、最初からひとりを追いかけようとする難波に勝てなかったのは当然のことだ。

俺は、彼女が傷ついた時、一度とは言わず二度、三度と見て見ぬふりをしつづけた。

轟から情報をもらっておきながら一切行動を起こさなかった俺は、難波の姿を無言で見守ることにより、自らを罰するのみだ。

ましてや。

——卒業式にかこつけて告げるなど、もってのほかだ。

美子先生に相談されて俺も困っていた。

だって、どうすりゃあいいんだ？

だろ、だろ？

——上総くんを六年二組の仲間に入れてあげる方法を、クラスのみinnで考えてほしいんだよね。京（けい）くん。

だから俺だってこの問題、一年の頃から取り組んでるんだぞ。

それで、いまだに、この状態なんだぞ。

六年もだぞ！

——そうね、うん、京くんの言いたいことはわかってるよ。

美子先生はやさしい声で、それでもしつこく頼み込んできた。

——京くんはほんと、一生懸命上総くんの面倒見てきたよね。一生懸命、仲間に入れてあげようとしていたよね。前からいろんな先生たちが、京くんのがんばる姿みて、偉いなあって褒めてたのよ。

そりゃあ褒めるさ。俺だって自分を褒めたい。

歴代の先生たちにみな土下座せんばかりに頼み込まれて、俺はあいつをサッカーやらドッジボールやら野球やら、いろいろな場面で引きずり込んで仲間に入れるようにしていた。もっともさっさと隙みて逃げ出されて大抵は苦労も水の泡だ。こんな奴、ふつうだったらさっさとシカトしてしまえばいい。けど、俺は投げ出さなかったぞ。うん、六年間、全くな。あいつは今じゃあ、俺の顔を見るたび凄い勢いで避けて通るようになっちまったから、声をかけるのも一苦労だがな。

俺は全部、そのことを美子先生に話している。

美子先生も、よっくそのことはわかっていると頷いてくれた。

——あのね、みんな知ってると思うけどね、上総くんね。

お下げ髪をちょっとだけゆらして、美子先生は俺の知らなかったことを言った。

——もしかしたら、品川中学に行かないかもしれないのよ。みんなと違う学校に進学するかもしれないの。

ほんとかよ。

俺が目をはちくりしちまったのを見て、美子先生はぐいと身を乗り出した。

ピンクのジャージと白いTシャツとが真っ黒で、ちょっと汗臭かった。

こういう時だったらつい、「先生、わきの下匂うぜ」とか言って絶句させてやるのがお約束なんだが、それもできなかった。

——京くんはクラスを一番まとめられる子だから言うけど、あのままだと上総くんは、みんなと友だちになれないまま、ひとりぼっちで卒業してしまうかもしれないの。それが先生はね、とっても心配なの。

それは自業自得だろうが。そうっつこみたくなる俺って間違ってるだろうか？

——本当は、修学旅行や遠足とかでできるだけみんなと仲良くなってほしかったんだけど。

できるかそんなの。あいつ修学旅行いきなり休んだだろ。遠足だって俺の知っている限り、禄に出たところ見たことないぞ。話し掛けようたって休み時間必ずどっかに逃げてるし。図書館の貸し出しカウンターの下にこの前隠れてるのみて、追っかけるのも面倒くさくなっちゃってそれから無視だ。

——そうよね。そう、もっと上総くんが積極的になってくれないと、困るのよね。

だろ？ だろ？ 俺の訴えて間違ってるねえだろ？

——でもね、もう、時間がないのよ。

美子先生は首を振った。

——もう、この学校で上総くんを救ってあげられるのは、京くんしかいないのよ。だからお願い。もう一度、上総くんをクラスの輪の中に入れてあげるようにしてほしいの。いい方法、あるよね、京くんなら。

信頼してくれるのはありがたい。そりゃ、俺はずっと品山小学で知らぬものないサッカー部のエースストライカーだし、弱い者いじめなんぞ大嫌い。強きをくじき弱きをたすく、これぞ男の生きる路ってところ。だから、そうしてきたはずなんだ。

はずなんだが、けどどしかし。

俺は美子先生のすがるような目に、しかたなく頷いた。

じゃあ俺、どうすりゃいいんだよ。

「じゃ、俺、今から塾行くから、さいなら」

そう言い残し、俺は教室を出た。

ほんと、美子先生はなんもわかっちゃいないんだ。

俺だってほんと、三年くらいの頃までは、毎日あいつの面倒見ようとしてきた。いつもひっこんで、黙って隅っこでいじけている奴を見たら、そりゃ、なんとかしなくちゃって思うだろう。俺のそんな姿勢が通じたのか、他の奴らも必死にあいつに声を掛けてたってわけだ。

「おい、立村お前、どうしてこんなところで足がたがた震わせてるんだよ。気取ったシャツなんか着やがって、そんなの脱いで、さっさと来いよ」

ボタンがどっさりくっついた襟付きのシャツなんか着て、膝丈のズボンなんかはいて、黙って仲間いれて欲しそうな顔して眺めていたら、何か言いたくなるのが人間ってもんよ。

なのにだ、あいつ全然動こうとせず、かえって後ずさりする。しょうがないから俺たちがあいつの両腕とって、無理にでも混ぜようとする。よくあるのはドッチボールかたかたか鬼かのどっちかだ。とにかく必死こいてひっぱってきて、それから挨拶代わりにボールを何度かまわしてみる。逃げるんじゃないくて、受けと りゃいいんだ。なのにあいつ、必死に走りつづけるだけなもんだから、結局ケツとか腰とかに当たってしまい、ぺたっとへなへなしてしまい、最後に大声で

泣き出すときだ。結局、ボールをぶつけた奴が悪人になっちゃう。何度か俺も弁護士になったけど、わあわあ泣き喚くあいつには結局勝てず、みなひっこんじまう、そういうわけだ。

こんなめんどくさい奴、誰が面倒みたいと思う？

俺だって、歴代の担任から「お願いだからなんとかして！」って頼まれてもしなければ、あいつなんて一切無視した。いじめるなんて男らしくないし、それ以上にみっともない。だから俺だってこまめに、

「なあ、立村またあそこでいじいじしてるから、なんか言ってこい」

って、仲間に指示を出してたわけなんだ。変な言い方したら、また泣かれるから、うまくやらねばなんないとは思ってた。けど、その場に立ったら、そんなに賢く立ち回ることなんて、できるわけ、ねえだろ？

そうだ、こんなこともあった。

確か、五年の頃だったか。

男子と女子が教室を別々にして、「おとなになる旅」とかいうビデオを見させられたことがあった。いわゆる、「精通」だとか「生理」だとか、そういうエッチ話のビデオだ。ちんちんがでっかくなるしくみなんで、とっくの昔に知ってたけど意外にもクラスの中には知らない男子が結構いた。ひゃー、それは驚いた。ってことで、俺はクラス内の性教育講座をしねばなんねえなど、判断した。だってそうだろ？ 修学旅行の時にその話できなかつたら、俺、死ぬほどつまらぬと思うぞ。

で、暇があるとまずは適当に、

「お前、あいつのスカートめくってこい」

指示を出す。女子がきゃーきゃーわめくのをなんとかまいて帰ってきたら、そいつに、

「ほら、女子パンツみたら、お前もこうなただろ？」

とズボンのチャックを下げさせて、お互いのものを見せ合う。大抵の場合、それはでっかくなっていることが多いんで、俺も他のギャラリーもみな、互いに見せあい、どれだけの差があるかを確認しあう。風呂場でやるのと同じだ。なんか俺たち仲間は、それやっててなんとなく、そういうエロ話がしやすくなり、共通の話が出来ると他の場面でもなんかいいな、って感じに付き合いが膨らんでいった。

そういうもんだと思ってたんで、このチャンスに、と計画したのが間違いだった。

「立村、ちょっと来い」

放課後、俺は他の連中に話をきっちりまわしておいて、あいつをしっかりと囲った。あいつはいつも、すごい勢いで教室を飛び出していき、図書室かでなければ生徒玄関まで全速力で駆け抜けていくので、捕まえるのに骨が折れるのだ。だからチャイムが鳴ると同時に、あいつが座っている席に一番近い奴が、しっかりと腕を取って押さえつけていた。女子たちもあいつには一切近づかないようにしていたので、それほど問題は起きない。

ふたりに両脇からしっかり腕を押さえられ、あいつが俺の席に連れてこられた。

女子たちがみな、いなくなろうとしたところで、俺はすばやく指示を出した。

他の連中と一緒に、内容だ。

「女子のスカート、一発、めくってこい」

みな、俺の命令は承知している。いやだと言う奴もいるがその場合は実行しなくても女子に近づけ、とだけ指示するのがコツだ。たいてい、それを想像するだけで、でかくなるべきとこがでかくなるので、まずはそれで完了。それからあとは、トイレに連れ込んでちらっと触るべきところを触れば終わり。あいつは小柄なんで、きっと毛は生えてないと思うが。

あいつは首を振った。肩を露骨に震わせた。ブレザーなんておぼっちゃまっぽい格好してて、膝下までくるズボンでまた中はシャツで、悪いがどこか勘違いしてるんでないかって気がする。俺もそれを感じずにはいられないが、そんなことはどうだっていい。

「おい、立村、他の奴らもみんなやってるんだぞ」

「そうだぞ、俺だって浜野にやれって言われて」

犠牲者その一が、俺の名前を出してさらにすごんだ。悪いな、実は意外と実行率低いんだ。あまり無理すると、今度はこれが「いじめ」扱いになっちゃって、かえって誤解を招くから、お互い軽い気持ちで、やりたかったらやってこい、って程度ののり。それをなんであいつは気づかないんだろう。一言でも、

「俺、いやだから」

くらい言えば。それも泣かずに言えば。俺だって次の手が考えられるってわけだ。

「じゃあ、お前さ、女子のスカートめくるってここで想像してみろよ、あすこ、でっかくならねえか？ 見せてみる」

そのくらい、軽く、言い放てるってわけだ。

首を無言で振りながら、それでも逃げ出そうとするあいつに、腕抑えメンバーふたりはがっちり押さえていた。

「逃げるなよ、口利けよ」

利こうとしない。いつのまにか最後の女子は教室からいなくなっていた。めくる相手がいなくてわけだ。

「しゃあねえなあ、じゃあ、ほら、やっか」

じたばたして、いつのまにかまたパターン通り、大きな目からぼろぼろ涙を流し出したあいつ。でも声を出そうとはしない。もし誰かがきたら、また面倒なことになるとでも思ってるんだろうか。別に俺たちはおまえのことをなぶろうとかいじめようとか、そんなつもりじゃないのにな。ただ一言、「そんなのやだよ」くらい言えば、「おや、そりゃどうしてだ？ 女子のパンツに興味ねえのか？ そんなんでお前いいのか？ もしかしてお前女子より男子が好きか？」くらいアホネタかませるってのに。隙がなさすぎる。

こうなったらさっさとすませてさっさと解放するしかない。大声で泣き叫ばれたら、また俺たちが悪者にされてしまう。どんなに仲間に入れてやりたくても、先生たちが溜息ついて、あいつ

つはただ、隅っこ族のまんまだ。

「立村、お前、ちんちん出してみろよ」

俺はさっさと結論を持っていった。

「お前、まだ、毛、生えてねえんだろ」

しゃくりあげながら、それでも足をばたつかせているあいつに、俺はひよいと、その場所を触ってやったわけだった。まだ、ガキだったようで、そっちの反応はなかったようだった。

ひとつ「なんだよ、くすぐって一、やめろよ一、お前のもやるぞ」くらい言い返せば、お互い笑って盛り上がるってのに、結局あいつは声を挙げて泣き出し、先生たちが駆け寄って来て、またまた俺たちはたっぷり先生たちにお説教を食らわされた。いったいどうすりゃいいんだろう？ この結末いかに？

さすがに六年になるとそんな面倒なことをするのも面白くないし、俺もいろいろあって塾に通うことになったので、あいつのことなんてどうでもよくなった。ただ、美子先生みたいに泣きつかれると、俺もひとつ、男として、クラスのために一肌脱がねばって気にもなる。修学旅行や遠足、体育祭であいつが仲間に入れてもらえず浮いている状況ってのは、やっぱり落ち着かないし、本音言っちゃまうと俺もなんかいやだ。どうせだったら最後は、クラス全員、最高のクラスでしたっ！とでも叫んで卒業したい。けどあいつがあのままだと……まあ最近では泣き虫でなくなったみたいだし、そろそろ俺の話も聞いてくれそうな気がしなくもないが……、最後まで俺たち六年二組はあいつに嫌われたままで終わってしまう。中学でもっかい声を掛け直すこともできるかもしれないが、クラスが違っちゃったらそれもうまくいかんし、へたしたら俺たち小学校組が知らないところで、あいつとことんいじめられてしまうかもしれない。ああいう泣き虫をいじめたがる奴って世の中に結構いるからなあ。そういう時に、もし小学校の友だちがバリバリ現役いい奴だったら、相談にだって乗ってやれるだろ？

いいさいいさ、また明日考えりゃいい。俺はそれよか一世一代の大勝負が待っている。

俺は肩掛け鞆を背負い直し、ダッシュで青潟駅まで向かった。

同じ塾に通っている女子に、あさっての日曜、俺が出る予定のサッカーの試合に来いとつたえねばならない。俺の小学校最後の晴れ姿を見せ付けて試合中にしっかりゴールを決め、ホイッスルが鳴った後にあらためて。

——加奈子に好きだと一発、決めるんだ！

あの子にOKしてもらえたら、あの泣き虫立村のことも美子先生の六年二組仲良しクラス計画も、みんなうまく行きさ！ 絶対に！

佐賀さんから見限られ、私はもう、何も残っていなかった。

「渋谷さん、お願い。書記の仕事を全うすることで、耐えて」

生徒会長になりたくて、すべてをなげうってきた私だった。青大附中に合格したことにより、やっと私のほしいものをすべて手に入れたはずなのに、すべてを失ってしまった。それも、人のせいではなく、自分の過ちによって。

悔しいと泣きたくとも、どこも助けてくれる場所なんてない。

私はひとり、ぼんやりと青大附中から抜け出した。外にも救いの場所はない。せいぜい、大学図書館くらいだ。そこならみんなでおしゃべりの語り合いをしている最中、中学生でも出入りOK。それならば大丈夫。

「渋谷か」

顔をゆがめて歩いている私に声をかけてきたのは、藤沖先輩だった。

すでに高校に進学し、それきり一切連絡をとっていなかった。この人に私はとことん嫌われていたし、私も男尊女卑主義のこの人とは不必要にかかわりたくなかった。ぶつかり合うほどの喧嘩をしたことはなかったけれども、それは向こうが私を避けていたからだ。女子は無能で頭が悪い、そう決め付けていたくせに、佐賀さんや風見さんとはうまくやっている。私のように懸命に努力している人間を評価しようと思えないのだという。

悔しい想いをしてきたけれども、引退してから私のがのっとればそれでいいと思っていた。

でも、だめだった。

あんなことになってしまわなければ。

そうだ、せめて私が霧島くんよりも上の地位にいれば。

——お言葉ですが、自分の過ちをきちんと認められずしかも人に押し付けようとするような人と、僕は仕事をしたくありません。僕は、渋谷先輩と一緒に生徒会室にいることに耐えられません。もしこれから先、共同作業を一緒に行いたいならば、自分の立場を反省して、その上でこれからのことを考えてください。先輩であることと、能力の差とは、関係ありません。

耳に響く。すべてこらえてきたものが、あの時わっとあふれ出た。あれ以来私は生徒会室に近づいていない。生徒会書記である以上は逃げられないとわかっているにも、霧島くんに露骨に物笑いにされた言葉が痛すぎる。心配顔で教室に追いかけてきた風見さんを追い払い、私はずっとひとりでした。クラスでは浮いたわけではないけれど、やはり修学旅行以来みなあたらず触らずの気持ち悪い静けさが漂っている。私の行動すべてが全校生徒に知られ興味の的となっている現実を、私はどうしても受け入れられない。

そして今日も。また、藤沖先輩にざまみろとののしられるわけか。

今の私にはお似合いだ。とことんののしられるがいい。隙間ひとつもなく、すべてを埋め尽くせ。

私は一礼すると、藤沖先輩を見返した。

「授業はサボりか」

「はい。何か御用ですか」

「それなら、ひまだな」

むっつりした顔で、冷たい声。身構えた。

「つきあえ。俺もひまだ」

——何考えているんだろう？

ちらっと最初考えたが、やはりすぐに気がついた。

きっと佐賀さんや風見さんあたりに頼み込まれているのかもしれない。私を説得してくれとか。いくら男尊女卑の藤沖先輩でも、お気に入りの佐賀さんや風見さんの頼みでは断れなかったのだろう。風見さんはともかく、佐賀さんにこれ以上嫌われるのはいやだ。それとも、霧島くんから情報を仕入れて、この機会に私の鼻をへし折ろうとたくらんでいるのかもしれない。私にもう、これ以上戦うすべはなかった。物笑いにされても、軽蔑されても、受け入れるしかない。

「どちらに付き合うんですか」

「誰も居ない方がいいだろう。外だ」

私は意思を完全に捨てた。勝手にすればいい。藤沖先輩は私にちらと視線を走らせると背を向けて校門を出て行った。追いかけるしかなかった。

すでに雨もやんでいた。だいぶ夏の暑さも厳しくなりつつあり、肌には汗がにじんでいる。汗の匂いが気になる。いつもならばこまめに汗をふき取るのだけれども、今の私はどうでもよかった。

藤沖先輩はまったく口も利かず、そのままいきなりカラオケボックスに向かった。

——本気かしら。

信じられなかった。あの堅物藤沖先輩が、なぜ、そんなところに向かおうとするのだろう。

英語科に進んでから、何か心境の変化でもあったのだろうか。

「来い」

「はい」

素直にうなだれるしかないのだ。私はもう誰にも勝てない。

「とにかく座れ」

案内された暗い一室で、私はソファーに腰をおろした。真上にはミラーボールがぐるぐる回っている。周囲はまだそれほどうるさくない。時間帯が早いからだろう。

「飲み物は」

「オレンジジュースで」

「そうか」

拍子抜けしたといった顔で藤沖先輩はじっと見た。すぐに注文を入れ、

「コーラとオレンジジュースを」

しばらくうつむいていたが、藤沖先輩は特段何か歌おうとは思っていないようすだった。私も歌いたいなんて思っていない。

すぐに飲み物が届いて、またふたりきりになった。

——どうして私はいつもこうなんだろう。

暗い中、私はうつむいていた。

「渋谷、そろそろいいか」

なにがそろそろ、なのか。私は返事をしなかった。

「なぜ呼んだかは、わかっているな」

「はい」

「一週間も、生徒会室に来ないというのはどういうことだ」

「申し訳ありません」

また、藤沖先輩は言葉を留めた。

「そうか」

口に飲み物を運びしばらく沈黙が続いた。

「霧島には俺からきちんと話をしてある。もう戻れ」

思わず顔を上げた。横顔だけがはっきりくっきりしている。

「霧島側の条件を飲むだけであとは問題ない」

「霧島くんの」

「書記としての仕事をまっとうしろ。それだけだ。霧島は副会長の仕事をまっとうする。それだけだ」

——書記としての仕事をやり遂げることって、つまり私はもう仕事をするなってこと？

ひがみたくなる。泣きたくなる。

「お前は青大附中生徒会の書記だから、書記としての仕事を完璧にやり遂げろ。それ以外のことに口出しをしなければ、霧島も文句言わずに協力するだろう。同じことは霧島にも言える。あいつは副会長としての百パーセントを求めればいい。あとは佐賀がまとめるだろう」

「私は、ただ、筆記しているだけでいいということですか」

言葉がつかえそうになる。暗くてよかった。涙があふれそうになる。こんなところで泣いてはいけない。藤沖先輩の前なんかで。

「そうだ。お前にはそれが一番合っている」

藤沖先輩はまた飲み物を口にした。

「悔しいだろうが、それが現実だ」

こらえきれなかった。これが現実。そうだ。私は何もない。

完璧になりたかった。

誰にも好かれたかった。

願わくば、私の力で手に入れたかった。

でも、結局集めてきたのは風見さんだった。

私が本当にほしいと望んだものは、とうとう手に入らなかった。

——生徒会長への夢も。学年トップを取ることも。そして、霧島くんからの尊敬も。

泣いていることを気付かれなくなかった。息を殺してしゃくりあげるのを防いだ。

「去年のことを覚えているか」

いきなり藤沖先輩が声音を和らげた。

「生徒会役員選挙の立候補受付最終日のことだ」

「はい」

こらえて返事した。

「あの時、当時評議委員長だった立村が風見に罵倒されたことがあっただろう」

「はい」

「今思えば、お前はあいつにそっくりだ」

「風見さんですか」

「立村とだ」

「どうしてですか」

屈辱を浴びせて、私を痛めつけようとしているのだろう。思い出したくもなかった。あの日、私が計画していたことすべて、崩されてしまったのだから。ひそかに心積もりしていた夢、生徒会長への路が断たれ、悪意がないにせよ佐賀さんが立候補してしまったこと、さらに霧島くんとやり取りがもとで私は書記に格下げされてしまった。仕事は別のものなのだから、と回りからは慰められたけれども格下の仕事だと思っていたことをやらねばならないのは惨めだった。せめて、一年上としての自分を認めてほしかったのに、霧島くんからは見下された。どんなにベストを尽くしても、認めてもらえなかった。

藤沖先輩はさらに、私を惨めにしようと思っているのだろうか。

「俺は現在、英語科の評議をやっているわけだが」

「はい」

「あれ以来、立村の凋落振りは目を覆うほどだ。いまだにその状況は変わっていない」

「変わっていない、のですか」

「そうだ。立村にとってあの日が人生のターニングポイントだったろう」

評議委員会が生徒会に吸収された事実上の戦犯であり、青大附属評議委員会始まって以来の最低レベル評議委員長と呼ばれた立村先輩のことだろう。過去に傷害事件を起こしておきながら隠し切って入学し、嘘に嘘を塗り固め、最後は救いようのないくらいの恥をかかせて卒業していったという人だ。決して問題児のようには見えないのだが、杉本さんを追い掛け回し、いきなり誘拐未遂みたいなことをやらかしたり、わけのわからないことを叫んだり、とにかく非常識きわまる行動を繰り返していた。非常識という点でいけば、その前の評議委員長・本条先輩の方が上だとは思う。でも、生徒たちの信頼を得ていたかどうかという点で、すべてはひっくり返る。

風見さんがたまたま、小学校時代の立村先輩を知っていたことから、とことん叩きのめし再起不能の傷を負わせることができた。

それに関しては間違っているとは思えない。

思えないけれども。

「あいつをなんとかしなくてはならないと、評議としては思っているところだ」

「なんとかってどういう風にですか」

「最低、クラスの連中と普通に会話が成り立つ状態にすることだろう。とにかく女子たちに総すかん買っている。やったことはやったことだが、過去のことは過去のことだろう。」

「過去のことって言っても、許せないことがあるというのは先輩のお言葉ではないですか」

確か、藤沖先輩は立村先輩の過去を知った段階で、絶交したはずだ。

「俺は青かった」

きっぱりと答えた。

「隠すにしても、それぞれ口に出せない事情があることを、俺は気がついていなかった」

気の抜けたコーラを先輩は飲み干した。

——あの馬鹿の代名詞、立村先輩と私が、似ている？

これ以上の屈辱があるだろうか。

「私、そこまで嫌われてましたか！ 立村先輩なんかに比べられるくらい！」

もうこれ以上何もいえなかった。私は顔を覆った。押さえていた涙が溢れ出した。

「似てるから、嫌うんだろう」

「そんなに私が落ちぶれたのみで、楽しいですか！ ざまみろと思ってますか！」

「いい葉だとは思っている」

気持ちを逆撫でするような言葉を浴び続けていると、もう涙が押さえられない。頭を押さえて、私の家族たちと同じように軽蔑の視線を向けさせるそれだけなんだろう。

「でないと、気付かないだろう。どれだけ霧島がお前のやり方を嫌っていたかもわからなかっただろう。でしゃばりすぎることが男のプライドをずたずたにしていることも気付かなかっただろう。それに、いつまでたっても風見の力を借りてものを片付けるのでは前に進めないだろう」

「私、風見さんの力なんて借りてません。借りてません！」

「現実を見つめろ」

いきなり怒鳴られた。身体がびくと動いた。

「ひとつずつ考えてみる。なぜ渋谷、お前は修学旅行の時、風見に連絡を入れたんだ？ 風見ならなんとかしてくれるという甘えがあったからだろう？」

「そんなんじゃ、そんなんじゃ」

「風見にも問題があるが、それは別の話だ」

一度言葉を切った後、

「霧島は、お前の失敗を嫌ったのではない。前からお前がしつこく絡んでくるのが不愉快だっただけだ」

「私が不愉快？」

「そうだ。あいつもまだ子どもだから何もわかっていないが、結局はそういうことだ。これから先、渋谷が霧島にあまり干渉せず、自分の仕事だけをしっかりしていけば、あいつはこれ以上何も言う気はない。男とは、そういうものだ」

「結局私は能無しだからということですね」

藤沖先輩は言葉を発しなかった。イエス、の答えに聞こえた。

——役立たずな私、何にもできない私。

「泣くな」

しかりつけるような声が耳元に響いた。泣きたくない。でも涙だけがあふれ出る。誰も認めてもらえなかった惨めさ。

「さっきも言っただろう。お前は書記としてなら評価されると」

「そんな格下だなんて」

「立村とそのあたりまったく同じだな」

また、傷に塩を盛り込むようなことを言う。

「あいつも、結局評議委員長としてではなく、天羽の補佐に回ってから真価を発揮した。人にはそれぞれ役割がある。上にたつのが向いている奴も居れば、陰で支えていく方がいいタイプもいる。渋谷、お前は影で支える方が向いている。本来ならば、生徒会よりも評議か規律か、そのあたりに居るべき人間だったのじゃないか」

私は首を振った。生徒会役員としての器がないということのをのしられてもどうしようもない。

「生徒会役員になってしまった以上は任務を果たすにしても、高校以降は少し自分に向けたものを選んだ方がいい。むしろ風見のようにちょこまか動く奴こそ、生徒会にふさわしい」

「そうですね、わかっています」

「だから泣くな」

藤沖先輩はさらに叱りつけた。

「運がよいことに、お前にはこのままだとどうなるかのモデルケースを見る機会がある。すなわち、立村の現在過去未来を追いかけることによって、お前も決して同じ轍を踏まないように心がけることができるわけだ」

「そんなの、そんなの」

「いいか、観るんだ。俺はこれから、立村をなんとかしてクラスの一員としてもう一度立ち直らせるために、俺のできることをする。それを横からお前は見ているがいい。必ず、そこに答えがあるはずだ。いいか」

ひどすぎる。私には能力がないということなのか。

生徒会役員としての名誉も、すべて幻というわけか。

しかも、風見さんよりも、下。

何もできない馬鹿。

「とにかく、今は自分のできることだけしろ。ここだけの話だが、おそらく霧島は、佐賀に惚れている」

「霧島くんがそうだったのですか」

しゃくりあげながら私が尋ねると、藤沖先輩は頷いた。顔が動いていたからたぶんそうだ。「口にはださんだろう。だが、最初から霧島は佐賀以外、女子を受け入れる気はさらさらない」「佐賀さんは、でも、新井林と」

相思相愛の恋人がいるはずだ。勝ち目はない。動揺している自分がみっともない。藤沖先輩は頷きながらつぶやいた。

「それは佐賀と霧島の問題だ。今言った通り、渋谷はひたすら書記として任務を全うしろ。佐賀と霧島が恋愛沙汰をやらかしたとしても、それはその時、あいつらに任せておけばいい。同時に、関心をもたれていないという現実を見つめろ。言いたいことはわかるな」

もう立ち直れなかった。私はとうとう、声をあげて泣きじゃくりつづけた。

——なんで、こんな醜くなってしまおうだろう。

——なんで私はこんなに、馬鹿だったんだろう。

「霧島は、姉にそっくりな女子を嫌っている。おそらく、お前の態度は霧島の姉を思い起こさせるのだろうか」

「どういうことですか」

「霧島は、頭の回転が速いタイプが好みだと話していたが、おそらくお前はタイプではないだろう」

——だから勉強したのに、一生懸命努力したのに。

「努力の方向がまったく違うところも、霧島の姉と同じだ。だがな、彼女は」

その後しばらく、無言になった後、

「命がけで惚れてくれている男がいる。霧島本人は、姉の価値をまったく見出していないようだが、別の奴にはたまらなくいとおしいものなんだ。果たしてそれがいいか悪いかはわからないが、お前は霧島の姉と同じである以上、ちょっかい出すのをいいかげんやめたほうがいい。あいつにこれ以上嫌われたくないのなら、そうすべきだ」

——そんなに私は価値がないのでしょうか。

おねしょがいまだに治らない私。仕事もろくすっぽできない私。生徒会長になれなかった私。霧島くんに尊敬してもらえなかった私。

「とにかく、今の自分にできることだけやれ。がんばれ」

藤沖先輩はぶっきらぼうに、私の方を見ずにつぶやいた。

「あとは佐賀と風見に任せて、今は、青大附属の議事録をこしらえることに専念しろ。霧島にまた何か言われたら、その時は高校の英語科に来い。口は出さないが、言いたいことだけは聞いてやる。いいか」

もう一度、私が顔を上げるのも待って、

「逃げるな、今が、正念場だぞ」

繰り返した。首を振りながら私はひたすら泣きじゃくった。

「杉本、あのさ」

何度か声をかけてみる。「おちうど」のあんみつを機嫌よく口に運んでいるポニーテール姿の杉本は相変わらずで、ちっとも変わるところがない。

「少しだけ、いいか」

「何がですか」

全く動揺を見せない杉本の姿に、僕は言葉を選びあぐねていた。

——あんな噂が流されてるってのに。

——妙に落ち着いてるぞ。

——杉本さんが修学旅行中におねしょしてしまい、そのふとんを放置したまま帰ってきてしまい、弁償させられた。

その噂が高校にまで流れたのは、だいたい修学旅行後一週間経ってからだったと思う。

実際は中学内で大騒ぎになっていたらしいが、学校側でもうまくごまかしていたか何かで、あまり詳しい話題にならずにすんだらしい。しかし、噂の怖さというのはほんとすごいもので、特に杉本に関しての情報は素早かった。今までのいろいろな問題が影響しているからだとは思うのだが、それにしてもすごいものだ。

その後、別ルートから、いやいや杉本以外にも疑わしき女子がいるらしいと耳にしたのだが、正直そんなのはどうでもいい。人の失敗に興味なんてない。僕が関心あるのはひとつだけ、杉本がその当人であるかどうか、だけだ。

——全く可能性がないわけではない。

もし、はっきりと断言できるのならば、僕もこんなに迷うことはない。杉本の態度を見る限り、全くのがせねたではとも思うのだがしかし、性格を鑑みるといや違うと感じたりもする。

まず、杉本という子がいかに、恥ずかしがりやなのかを考えると、なおさらだ。

つい何かのハプニングでパニックを起こしてしまった場合、思わず何か、隠してしまったりしてごまかそうとしどつぼにはまる可能性がないとも限らない。それに、こういったらなんだが、僕も二年の宿泊研修でクラスのおねしょが直らない男子のため、夜こっそり起こしにいかうとした。もっともその際は天敵たる担任に邪魔されたが。

年齢で可能性がゼロ、とは言いがたい。また僕も杉本が果たしてそういうことを経験しているかどうか、百パーセントわかっているとは言いがたい。

いや、だが、しかし。

杉本がここまで堂々としている以上、ありえないことと判断していいのだろうとは、思う。

なによりも杉本は嘘をつかない子だ。

もしも、仮に、おねしょでパニックになったとしたら、誰かかしらが気付いているだろう。ど

んなに杉本が隠そうとしても、無駄なように思える。クラス内にはあの、生徒会長・佐賀もいるのだし、男子連中だって黙っていないだろう。

この落ち着き、冷静さでまず大丈夫だろうと思いたいところだが、万が一のことも考えねばならないような気がしていた。

もし杉本が、必死に失敗のショックを隠そうとして、慣れない嘘をついてごまかそうとしていたとしたら。新井林の前でそんなこと知られたくないとか思って。そういう可能性だってゼロではない。

汚した布団を隠すのは決して許されるべきことではない。

しかし、そうしてしまうまでの心境を、理解したいとも思う。

仮にそうだったとしても、僕は、杉本を軽蔑したりはしない。

イエスカノーか判断しがたいところだが、僕としてはどちらの形であっても杉本の味方であることを伝えたい。さてどうすれば。

「なんか凄い噂流れてるよな」

さりげなく振ってみた。すぐに杉本も答えた。

「なんでも、私が修学旅行中粗相をしたとかいう噂がありますね」

「どうなの、それ」

僕は冷たい羊羹をほおばりながら、できるだけさりげない雰囲気ですぐ尋ねてみた。

「まさか」

「でもお前、全然言い返してないんだろう」

「ばかばかしくて、話す気にもなれません」

——ほとんど問題なさそうか。

僕の判断はかなりのもで杉本が無罪と出ている。

しかし、その証拠がない。

あたり前だ。僕は杉本と一緒に修学旅行に行った訳でもないし、当然一緒に部屋に寝泊りしたわけでもないのだ。ふとんが濡れたかどうか確認するような変態でもない。実際見ていない以上「絶対無罪」とはいいい切れない。これは杉本を信じる信じない以前の問題だ。

「どうして言い返さないんだ？」

僕はそっと尋ね返した。恥じらいもなにもなく、ただ事実を説明しているだけの杉本だし、おそらく僕の疑念はすぐに晴れるだろう。

杉本は小首を傾げて僕を見た。

「私が真実を知ってますから、他の狂った連中に何を思われても、全く気になりません」

「そうか、真実か」

「あたり前のことです。第一、証拠があるのでしょうか。すでに時間が経ってますので物質的証拠を挙げることはむずかしく、しかも事件現場は船でいかざるをえない場所です。本当でしたら私が直接、旅館の方に事情聴取して、真相を明らかにしたいのですが」

杉本にかかる、テレビ番組のサスペンスドラマの雰囲気をかもし出してくる。

思わず笑いがこみ上げてくる。ほんとうに、いつもの、杉本梨南を見ている。

——だが、俺はどう接すればいいんだ？

今日、杉本を「おちうど」に呼び出したのは、僕なりに頭を悩ませた結果だった。

もちろん僕は杉本が噂の張本人でないと信じたいし、直感でも全く問題なしと認識している。しかししつこいようだが、証拠がない。それ以上に、僕の想像しえない事情がからんで、本当はそういうことになってしまった可能性も否めない。

たとえば、

- ・ 誰かの失敗をかばって、あえて知らん振りを決め込んでいる。
- ・ 女子特有の体調の変化で、緊急事態が起きてしまいショックのあまり。
- ・ 単純に……ジュースやお茶の飲みすぎで翌朝失敗してしまった。
- ・ 他の生徒にいやがらせされて、つまらぬ意地を張ってしまった。

僕の考えられる理由とはこのあたりだが、まだ想像できない部分がないとも限らない。

しつこいようだが、僕は九十九パーセント、杉本は無実だと信じているが、最後の一パーセントの失敗を考えると、この場ですぐに「酷い目にあったよな」と慰めることはできない。むしろ、僕としてはその一パーセントの失敗を織り込んでみて、その上で、

「イエスであれノーであれ、俺は杉本の味方である」

それだけを伝える方法はないものだろうか。

仮に、杉本が一パーセントの確率で、修学旅行の大失敗を隠していたとしたら、僕もそれなりに何かする必要があるだろう。たとえば、これ以上話が大きくならないうちに謝罪させるとか、渋谷さんに向けられた濡れ衣を杉本の傷が大きくなる範囲ではらすとか、だ。杉本ひとりでは手も足もでない状況ならば、プライドを守る形でなんとかするのも、僕としての務めだと思う。

「あのさ、杉本、聞いてくれるか」

あんみつがまずくならないよう、すべて食べ終わるまで待った。「おちうど」のおばさんが冷たい番茶をグラスで運んできてくれた。

「俺も杉本の話は聞いているんだ、だからさ」

「確認したいわけですか、私がそんな無責任なことをしたのかと」

——無責任、か。

みっともない、ではない。少しほっとする。でも伝える。

「いや、確認したって本当のことはわからないだろ」

「立村先輩は私のことを疑っているのですか！」

あぶない、怒らせそうだ。しかしおびえてはならない。僕は腹を据えて語りかけた。

「疑うものにも、俺は杉本がそうしてないという証拠を見せてもらってないから」

「先輩、そういう下品な趣味をお持ちだったのですか！」

甲高い声に首を振って否定するが、なかなかそれも難しい。言わねばならないから。

「そういうわけじゃない。俺が言いたいのは、杉本を信じることと、無実だと判断を下すのとは全く別だってことなんだ。イエスかノーか、それは俺にとってどうでもいいんだって」

「失礼すぎます。私が仮に、そのような失敗をしたとして、先生たちにも伝えず、旅館の方々へクリーニング代を払わずに犯罪者のような言動をするとお思いですか！」

——やはりそうだよ、杉本の奴、布団に地図描いたってことよか、それを隠すという責任回避ってところに憤っているというわけだ。やはり、九十九パーセント、無実だろ。

とはいえ、一パーセントの可能性は否めない。やはり、語るしかない。

僕は用意していた、ひとつの話を語ることにした。

死ぬほど恥ずかしい出来事だか。

「今、俺が話すこと、絶対他の奴には言うなよ」

前置きして続けた。ばらされたらたぶん、僕の残りの学生生活が闇に変わる。

「約束はします」

あっさり答えられて一安心だ。僕は声を潜めた。「おちうど」のおかみさんも母を通じて知っている可能性が高いので、聞かれたくない。

「俺は、小学校の修学旅行、行ってないんだ」

「そうですか」

「何でだと思う？」

「いじめられたからですか」

全くもってその通りなのだが、この場では別の理由を伝えなくてはならない。さらに声を小さくし、やはり落ち着かなくて耳を持ってくるよう身振りで指示した。素直に杉本は窓際を向き、小さな耳をしっかりと向けた。

深呼吸して、息を止め、僕はかすれた声で囁いた。

「修学旅行前日の夜に、あれ、やらかしたんだ、その、つまりさ」

「おふとんに、まさか」

「そう、いわゆる、その、地図というか」

うちの両親も、その事実を知っている。

証拠および現場はしっかりと、押さえられている。

杉本の顔を見られず、僕は俯き加減で話を進めた。

もう四年も経ったのに、まだ僕の中ではこの一件、時効になっていない。

杉本がどういう反応をしているかはわからない。とてもだが顔なんか見られない。僕だってこんなことがなければ決して口にしたい出来事ではない。しかし、あの噂が流れている以上白々しく「俺は杉本のことを信じているから」で片付けることはできない。無条件で信じると答えられないのなら、せめてきちりと僕なりの理由を伝えたい。

残り一パーセントの可能性のために。

前後で知らない年配の女性客が話しこんでいるのが聞こえる。たぶん、こちらの話には関心持たれていないはずだ。

「杉本も知っている通り、俺は小学校六年の頃、かなりいろいろあって、今思えば精神的にやられてたんだと思う。でも、修学旅行は義務でいかななくてはならないし、かなりしんどかったんだ。それまでは、というよりも、そういう失敗は、本当に全くなかったんだ。これは本当なんだ。だけど、よりによって修学旅行前の日に、なんか変だと思って目が覚めて、青ざめた。今でもあの時のことははっきり覚えてる」

「そうでしたか」

低い声で杉本が答える。頼むから軽蔑の眼差しを投げないで欲しい。それだけを祈る。そっと下から顔色をうかがうと、杉本は冷たい視線でにらみつけてきた。それはそうだろう。

「言っとくけど、本当にこれが、最初で最後だったんだ」

「強調しなくてもわかります」

「ただ、やっぱりあの時は、人生終わったと思ってさ。しかたないから親を起こして、かくかくしかじかと説明して、その後で後始末してもらって」

「六年生だというのに、自分で出来なかったわけですか、後始末くらい！ 事そのものよりも私は、立村先輩のその幼さに呆れます」

——やっぱり、呆れられたかよ。

人生、目の前、真っ暗とはこのことだ。もう顔を覗き込む度胸などない。しかたない、話しつづけるしかない。俯いたまま。

「まったくだよな。とにかく、その時に、親に泣きついた」

「泣きついたのですか？」

「そう。一度あることは二度やらかさないと限らないと思ったんで、頼むから修学旅行休ませてくれって」

「……よくそんな情けない言い訳、聞いてくださいましたね」

——全くだ。あれだけは奇跡だと俺も思った。

僕は頷きながら、残りの羊羹を平らげた。味がしない。皿を見つめていたら、すぐに持っていかれてしまい、目のやりどころがなくなってしまった。

「杉本、俺が言いたいのはさ」

「立村先輩ならありえないこともないでしょう」

——何もそこまで言うことは。

自業自得なので何も言い返せない。

「何度も言うようだけど、俺がしくじったのは、十五年生きて来て、本当に最初で最後だったんだってこと」

「しつこいくらい繰り返されてますが、そんなに強調されるのはなぜですか」

「だから、その夜目が覚めるまで、まさかその場でやっちまうなんて思ってなかったんだよ！」

もうやっけっぱちで不良っぽい言葉を遣ってやる。

「絶対大丈夫だと思っけていても、ある時全く予告もなしにしでかすって可能性は、全くないわけじゃないってこと、俺は言いたいたって」

「確かに、『絶対』という言葉はありえません」

なぜかそのあたりだけ、納得顔で頷いた。

「俺が杉本を信じたい気持ちはあるけど、絶対にそういうことありえないってのは、そのあたりが理由なんだ。杉本だって熱を出した日に、『杉本さんなら絶対に風邪を引かない』とか言われて決めつけられるのはいやだろ？ それと同じだよ」

覚悟を決めて、顔を挙げてみる。

なんと杉本は、僕を真正面から見つめて、真剣な顔で頷いている。

——話は、伝わっている……。

まだ、僕の人間性まで否定することはなさそうだ。

「例えがわかりにくいのはあやまる。とにかく俺は、杉本に対しての噂が事実であろうがなかろうがどうだっていい。どっちであっても、すべきことをまずしようか、って考えるだけだ。わかるか、その意味」

驚くことに杉本、恐ろしいほど素直に頷いた。

——繋がったよ……。

気付いていないわけではない。僕たちの卒業式後、杉本の置かれる状況は変わり、B組に戻されて息苦しい生活を送っているようだ。なのに、あの当時に比べて僕に対しての接し方が少しずつやわらかいものへと移行している。

たぶん、新しい友だち……もっとも不良と呼ばれている集団らしいが、本人は相変わらず優等生のままだ……ができたこととか、関崎が同じ青湊大学附属高校の英語科にいるとか、そういう変化も影響しているのだろう。

かつての杉本だったらきっと僕を罵倒しつづけ、最後には、

「立村先輩はきちんとおむつのトレーニングをされてこられたのですか！ 情けない！」くらい言われそうだが、今回はそれも殆どやんわりと返ってくるのみだ。

かつてないくらい杉本は、穏やかに時を過ごしている。

よい流れに、乗っている。その変化を与えたのが僕でないということだけが、残念だ。

「立村先輩、私はおねしょをしてしまった人を責めているのではありません」

しばらく手をテーブルの下に置き、身体を一切動かさずに考えこむそぶりをしていたが、ふっと顔を挙げた。

「先輩のおっしゃる通り、『絶対にしない』ことはありえませんが、私も絶対に今後、同じ失敗をしないとは限りません。先輩の過去については今後、一切、責めたりしませんのでご安心ください。ただこれからはきちんと水分を寝る前二時間は控えることと、みみずくに何かをされたり、火遊びなどは謹んでください」

——杉本、いったい何考えてるんだ。

言い返せるわけもなく、僕は拝聴するしかない。

「ですが、私が許せないのは、隠すという行為です」

相変わらずしゃちほこばった口調で、ポニーテールをまっすぐたらしただまま杉本は続ける。

「弁償をする、先生に対処を相談する、などその場合にすべきことはたくさんあります。さらに、事前準備として学校側へ提出する書類などもあるはずですよ」

「書類？」

「はい。先輩たちの頃はなかったのですか？ 修学旅行および宿泊研修前の提出書類で必ず、夜尿症の有無といった欄に丸をつけるところがあったはずですよ。仮に私が一度でもおねしょをしてることを自覚していたら、ためらうことなく『有』の欄につけたはずですよ。少しでも思い当たる節があれば、私は決して隠しません」

もうこれは百パーセント、杉本を信じていい。僕の直感だ。

——証拠なんて知ったことか！

「わかった、ごめん。俺が悪かった」

「いえ、立村先輩のおっしゃるのはごもっともです。私は自分がそういうことをしておりませんので、学校側が私に罪をなすりつけても、堂々と申し開きいたします。なんなら私は、その当事者とされている渋谷さんと話をつけます。ただし、渋谷さんも何かのトラブルに巻き込まれている恐れがあるので、もちろん注意いたします」

——たった三ヶ月なのに、こんなに。

僕以上に杉本は、大人になっている。追いつかれるかもしれない。いや、越されるかもしれない。中学時代の、やみくもに戦いつづけて来ていた杉本ではない。勝ちを信じて、負けない戦いを余裕もってかます、そういった強さが身についていた。

今の杉本なら、仮にこの前の新歓合宿で僕が関崎に厳しくつっこまれたり、麻生先生にまた嫌がらせをされたとしても、佐賀はるみほどではないにしても冷静に交わすことができるような気がする。堂々と、恐れることなく、自分の真実を武器に。

——俺は、杉本を心配する必要なんて、本当はなかったのかもしれない。

杉本をバス停まで送り、僕は自転車で家まで向かった。

さっき、杉本に語ったことは有る意味真実だ。

両親も僕が小学の修学旅行前に布団をびしょぬれにしてしまい、泣きながら訴えたのをしっかり見ているわけだし、「ある意味」事実である。

——だが。

僕しか知らない真実が隠れていることを、誰も知らない。

杉本にも言えない、本当のこと。

あれは、僕が修学旅行に行きたくないがために演じた、芝居だったということ。

何よりも嘘を嫌う杉本に、僕は嘘を伝えてしまった。

修学旅行に行けば、かならず夜が来る。夜がくれば即、男子部屋で行われるのは

「お前、誰が好きなんだ？」

「お前、もうそろそろ毛、生えてるのか。むけてるのか。立つのか」

「女子風呂覗きに行こうぜ」

だいたいこのあたりの話題だ。学校なら必死に教室から逃げればいいが、密室ならば僕は逃げ場所がない。リーダーの浜野は、どんなことがあっても僕を肉体解剖の材料にしたくてならないようで、前もって、

「立村、修学旅行ではちゃんと、見せるところ見せろよ。わかったな」

とそれなりの宣戦布告をされていた。

どうやって逃げればよかったのだろう。

今思えば、もっと恥ずかしくないやりかただってあったのに。

小学生の浅知恵と言われればそれまでだ。

仮病をつかっても、あの母親が許してくれるわけもない。一発でばれる。いじめられていると訴えても「やりかえしなさいよ！」と怒鳴られるのがおち。

僕が一ヶ月悩み続けて結局選んだのが、それだった。

緑茶を選んで真夜中やかんでお湯を沸かし、何杯か出がらしになるまで急須で煮出し、布団と寝間着に注意深くかけた。どうせベットは自分で使うものだから、決して汚したくなかった。お茶なら汚くないし、自分だけわかっていればそれ以降使っても気持ち悪くはない。ただ、お茶の香りだけがやたらと漂い、ばれるんじゃないかと冷や汗ものではあった。

あっさり母は、修学旅行への欠席を認めてくれた。

その間、ひたすら自宅学習をさせられたが、浜野たちにすっぱだかにされる恐怖に比べたらたいしたことではない。もっともその後、

「上総、もしまたおねしょなんてやらかしたら、あんたにお灸据えるからね！ どこに据えるかは、わかってるでしょうね！」

しっかり脅されてはいた。もちろん、そのようなことはない。冗談じゃない。

どこかでわかっていた。

僕が知られたくなかったのは、六年にもなっていきなり布団に大きな世界地図を描いてしまい泣きじゃくる過去の自分でなく、「いやなことを回避するためなら、どんな汚い手でも使い、立ち向かうことなく逃げ続ける自分」なのだということ。

杉本に物語った小学校六年の僕は、臆病者のまま、今だ変わっちゃいない。

布団を隠して旅館を後にした誰かと、同じ事をしている僕が、四年後の今もそこにいる。

——杉本には決して、知られたくない。

どうしたのだろう。毎日のように夢で怪しいものが出てくる。

去年まではそんなことほとんどなかったのに。

さんざん羽飛や本条先輩に「お前やらしい夢見たりしねえのか？」とからかわれても、あっさり「いいや、全然」と答えられたのに、この数日、嘘がつけなくなってしまうている。「やらしい夢」の意味がわかるようになってしまっている。見るだけだったらただだしあまり感じもしないのだけれども、ただ、跡が残ってしまうのだけは避けたい。

そうだ、跡が、残ってしまうのはどうしようもない。

「どうしたんだよ、お前、死んだ魚のような目、してるよなあ」

羽飛に覗き込まれる。

「そんなことないよ、少し本読みすぎて、寝坊しただけだって」

「ふうん、どんな本だよ、やらしい写真か？」

「羽飛、なわけないだろ」

写真ではない。本だ。何でこんなことしてるんだろうと思う。百科事典でいきなり「妊娠」だとか「性器」だとか「第二次性徴」だとか調べているうちに夜が明けたなんて死んでも答えたくない。

うちに並んでいる文学全集の中からはなぜか「チャタレイ夫人の恋人」なんぞを引っ張り出して読みふけていたなんて、それも夫人ときこりの兄さんとが、たがいのいわゆるそういうものを見せ合っているところを、めくっていたなんて口が裂けたって言うものか。

本条先輩と待ち合わせ、図書館で評議関係の話をしている時も、なぜか感情がふつうに流れない。つい、顔を見るなり思うのは、

「本条先輩、今日はどうするんですか」

「ああ、俺はこれから相手に会うんだ」

——すでに一線超えている、彼女にな。会うんだな。

一線、というのはただの言葉だと思っていればよかった。今まではそう思っているだけだった。なのに、あの日を境にすべての言葉に意味が詰まってしまった。

「いいだろ、お前うらやましがってるだろ？」

「そんなわけないじゃないですか。何するっていうんですか」

「もちろん、あれをするんだよ」

言葉が出なくなり、僕は頭を下げて図書館を出た。

よりに寄ってそういう時に限り、清坂氏に会う。

「立村くん、顔色悪いよ、どうしたの」

「あ、清坂氏、いやなんでもない。風邪引いたかもしれないって、それだけさ」

「インフルエンザで学級閉鎖なんていやよ。早く治してよね」

さらっと返すだけで済む。ほっとする。目が合いそうになり思わず逸らし、また覗き込まれる。

「どうしたのよ、落ち着かないね」「いや、本当になんでもない」

——いったいあれから俺は何をした？

うちに戻り一人になると、いてもたってもいられず雑誌をめくる。

どうしてこんな女の人の何もきていない写真見て喜ぶのか、去年までは、今年の二月までは全く見当がつかなかった。

どうしてだろう。

廃品回収のコーナーに人がいないと、思わず手に取りたくなってしまう写真の数々。でも近所でそんなところ見られたら「立村さんちの息子さんも色気づいたのね」みたいなことを言われるか、もしくは変態扱いされるだろう。絶対に嫌だ。

仕方ないので家でテレビをつけっぱなしにする。ドラマもワイドショーもつまらない。普段見せてもらったことがないので母が出て行った頃はかなり狂ったように見まくったが、一週間で飽きた。それ以来音楽番組をえあチェックする時くらいしか見ない。

なのに、どうしてだろう。

十一時以降になるとどうしようもなくそわそわする自分がいて、もてあましてしまう。その間風呂に入ってはまた、やってはいけないことを考え、後悔しては風呂に入りなおす。思わず、してしまい、また反省する、の繰り返しだ。

こんな奴じゃなかった。

——こんないやらしいことばかり考えてる自分じゃなかったのになんでだよ。まったく、なんだよ。いったい。

風呂から上がり、部屋にこもり、勉強をするうちに身体の方で何かがんがんと求め始める。今のところ、ふつうの雑誌しかないのであやしげなポーズのものなんて見つからない。それでも見ないよりはましだ。めくり、することはいっしょ。今日こそはやめようと朝、心に誓うのに、あっさりとめげてしまう。風呂場で大抵は果てる。自堕落な性格だと思うのは、その後ものたりなくなって、勉強中に一度、ベットの中でまたもう一回。とやらかしてしまう時だ。意志の力なし。終わった後でこっそりとティッシュをまとめてトイレに流す時のみじめさったらない。父がいない時を狙うのだが、それまでの自分が放出したものの匂いで吐きそうになる。

一度だけ、たまたま本条先輩と話をしている時に、

「クラスの女子の写真でやるのもまた、ない時はしょうがねえかなあ。けどリアルだから気持ちいいぞ」

と言い出したのが頭の片隅に残っていたのだ。一年の時は「ま、そういう方法もあるんだね」と流せた。けれど、冬休み終わった前後から一気にこらえられなくなってしまった。本条先輩の言葉なら信じられると思い込んで一年D組の顔写真を一つ持ち出してみた。僕はどうしようもな

い馬鹿だと本当に思う。

——なんでよりによって。

たまたま一ページにいた清坂氏を最初にしてしまったのが、今の後悔となっている。

次の日顔を見られなかった。

あれ以来、知っている人を使うことだけは死んでもしないと誓った。慣れれば平気なのかもしれないが、今でも思い出すと目を合わせることができなくなる。

「おおい、立村、ちょっとこい」

卒業式前日、三年の結城先輩……前評議委員長……から呼び出しを受けたのは次の日だった。どうせ結城先輩は青大附高に進学するのだから、そんなに離れるという印象はない。本条先輩も一緒だった。

「先輩、おめでとうございます」

「まあ、ほら、本条お前も形見分けだ」

この人は某アイドルグループのおっかけに余念がない反面、現在の評議委員会の土台をこしらえた偉大なお方である。委員会活動イコール部活と一緒にというのりを作り出したのは、結城委員長の残したものだ。

「ういっす。ありがとうございます。ほら、立村もほしいの選べ」

なにやら紙ツツミに入っている。

「いや、この辺は経験深い本条、お前が選んでやれよ。お前の可愛い後輩だろ」

「こいつは結構純情そうに見えて過激なのがいいかも」

二人楽しそうに袋を覗き会っている。通称、「本条委員長にのっとられた結城先輩の立場」と言われているけれども、そうではないらしい。単に結城先輩は本条先輩の能力を見て取って、動きやすいように道を作ってあげた。そのことイコールが、繋がっているってことだろう。

「まあ、待ってろ。俺が心をこめて選んでやるよ」

戸口で結局待たされた。後ろを古川さんが通っていった。

「なに待たされてんのよ。立村、あんたやっぱりホモ説本当なの。評議委員会委員長三つ巴の怪しい噂、立ってるよ。あんたが受けだって」

——なんだ、その受けって。

わからないのでその辺は流しておいた。

「何を受け取るんだ？ たぶん、あれは俺へのプレゼントらしいけどさ」

首をひねって古川さんは出て行った。

「ほら、入れよ、立村。ほらほら」

ようやくプレゼントらしきものがまとまったらしく、本条先輩は僕の手を無理やり取り、ぎゅと渡した。

「お前最近、顔色悪いしさあ。何か物思いにふけてるんでないかって、結城先輩と話してたんだ。まあ、お互い様、そういう時に効果的なものを、肩身分けにってことにな」

「そうそう。無名の子ばかりだけど」

——別にアイドルじゃなくたっていいけどさ。

ちらと覗き、すぐに締めた。

「ありがとうございました。あの、これ、本当にいいんですか」

「ああ、思う存分、使ってくれ」

——使う？

言われている意味がわからず、僕は頭を下げて教室を出て行った。どうせ青大附中評議委員会の追い出しパーティも控えているのだ。お礼は後でよし。

うちに戻って急いで袋を開いた。だいたいどういうものかは見当がついていた。派手なお姉さんたちの写真集だろう。

——小さな本が三冊だった。

感謝の念よりも、身体の方が早く早くと叫んでいる。

こんなところ見られたくない。カーテンを締め切り、灯りをひとつだけにして、ベットにもぐりこんだ。

「どうした、上総、もう寝てるのか」

父だ。普段はほとんどすれ違うはずなのに、この時間に限ってなぜ。

しかも、たまたまこういう時に限って。

僕は至急ベットにもぐりこみうつぶした。

「なんでもない」

「風邪でも引いたのか。身体具合悪いのか」

「悪くない」

早くあっちいけ、それしか願ってない。

「どうした」

戸があいた。鍵を閉められないのが悔しくてならない。すべてを隠したつもりで答える。

「なんでもない。寝てるだけ」

しばらく、間があった。後。

「そうか、わかった」

戸が閉まる。安心して布団を広げようとしたとたん、全身から血が退いた。

ベットの裾から、写真集がまるのまま落ちていた。

1

なぜあの日、彼女は口紅をつけてきていたのだろう。

もしかしたら、あれがすべてのきっかけだったのかもしれない。

初めて梨南と出会ったのは、小学校の入学式だった。あの頃から変わらない長い髪を束ね、馬の尻尾のように、頭てっぺんにのっけていた。さらに猫の耳風の大きなリボンを垂らし、紺色のふわふわしたドレスを纏っていた。足までくるようなずるずるのスカートに、白い羽織みたいなものを巻きつけていた。今の時代ははやらないようなフランス人形のような格好だった。

両親らしき人に連れられて自分の席を探していた。彼女は全く動かないままじっと教室の一点を見つめていた。たまたま僕が教室に入って行った時、梨南のお母さんが、

「梨南ちゃん、ここよ、いらっしやい」

と、一番後ろの席を指差していた。そしてお父さんらしき人が手を取って連れて行っていった。

なんでだろう、僕もその時は両親と一緒にいたはずなのに、当時の記憶が薄れている。特に僕なんてぼおっとしている性格だったから、人に連れて行ってもらわなければどういけばいいかなんてわからなかったはずなのに。たぶん突っ立ったままだったのだろう。僕はただ、彼女の顔に赤チンみたいなものがついているのに気が付いて、じっと見つめていただけだった。

——可愛いなあ。

心に感じたことが、僕の場合すぐに言葉として飛び出す。

誰かに聞かれたのかもしれない。

「可愛いなあ」

思わず僕は、側にいた誰か……たぶん母さんだろう……を振り払ってフランス人形風の子のもとへ走っていった。僕はいつもそうだけど、いいと思ったことをがまんすることができない。悪いことはがまんするものだと思っているけれども、喜んでくれると思ったら、即座にやるのがくせだった。

「瞬、どうしたの」

たぶん母さんが止めたんだと思う。

でもいやいやをして、たぶん梨南に近づいたんだと思う。

「僕、秋葉瞬（あきば しゅん）っていいます。名前なんて言うの」

小学校に入ったら、初めて会った人にはきちんと自己紹介しようね、と幼稚園の先生に言われていた。

「私？」

声はゆっくりとして、でこぼこのないはっきりしたものだった。

今まで聞いたことのない大人な言い方だった。

「うん、なんて読むの」

ぴかぴかに磨かれた机の左手がわには、ひらがなで名前が書かれていた。けど、僕には読めなかった。赤で囲われたシールの名前を彼女は指差した。

「ごめん、僕読めないんだ。読み方教えて」

「すぎもと、りなん」

まっすぐなまなざしで、彼女……杉本梨南……は名乗ってくれた。

僕と幼稚園で一緒だった女の子にはない名前だった。

「りなん？」

「うん、あきば、しゅんって読むの？」

梨南は僕の左胸にぶら下がっていた名札をすぐにすらすら読んだ。

「うん、そうだよ」

いつのまにか母さんが僕をひっぱりに来たらしい。頭の上で、梨南のお母さんらしい人にぺこぺこ謝っている声が聞こえていた。僕は目をそらさず、ずっと梨南のことを見つめていた。何か話したいことがあるんだけど、わからなかった。もういちど、

「りなんは、可愛いな」

と繰り返した。

梨南は黙って僕のことを見つめ返しただけだった。

あの頃から梨南は笑わない子だった。

2

たぶん母さんに怒られたかなにかしたのだろう。僕はひたすら泣いていた。入学式そうそう大泣きしてしまうなんて、情けないありさまだった。

ちゃんと並んでね、おなまえの順番にね、ほら、秋葉くんは一番前に来てね。

これから担任になるはずの先生が僕を廊下の一番まん前に連れ出した。

べそをかいたまま天井を見上げ、僕は涙目のままフランス人形のような梨南を探した。口に赤チンをつけたまま、女子の並ぶ後ろの方にいた。

今思えばしかたないことだった。

梨南は「すぎもと」だったのだから、あいうえお順でいけば僕の隣りにくるわけがなかったのだから。でも、僕にはわからなかった。

——りなんといっしょに並びたい。

「僕、りなんと一緒に並びたいよ」

うちの母さんよりも年取った先生は僕を眺めて、

「はあ？」

とつぶやいた。

「りなん？」

「うしろにいる口に赤チンをつけた女の子と並びたい」

隣りにいた「あ行」の女の子がいやだったわけではない。

ただ、僕は梨南と一緒にいたかっただけだ。

「赤チン？」

目を丸くして先生は僕と、そして梨南の方を眺めた。その顔がやがてきりきりと引き絞られてきたようだった。

「いけません。秋葉くん。前にいてね」

言葉は優しいけども、なんとなくちくちくする響きが残っていた。早く気付けばよかった。どうして僕は聞いてしまったのだろう。

「どうしてだめなの？ 僕、りなんが可愛いから側にいたいのに」

本当のことを口にただけだ。

「いけません。みんなの前でそういうことを言ってはいけません」

隣の女の子は何も言わなかった。後ろの方も何も言わなかった。

ただ、向こうの方から一声聞こえたのを拾っただけだった。

「きもちわりいなあ、ちかよんなよ」

——気持ち悪い？

そんなわけない。梨南みたいな可愛い子が、気持ち悪いわけなんてない。

そう感じたのが、実は僕だけだったことに気付いたのはずっとずっと後のことだった。

3

僕が涙目のまま、ずっと入学式中ぐずぐずしていたけれど、梨南は何も言わなかった。きっと僕がどこにいるのかわからなかったのだろう。でも僕の目には、いっぱい渦みみたいなものが白い曇り色の中でうごめいていた。

——りなんみたいな可愛い子はいない。本当にいない。

ずっとそればかり考えていた。

それまで決して僕はませていたわけではなかったと思う。女の子もいた幼稚園だったし、みんなと仲良く遊んでいたつもりだった。ただ、僕と遊ぶのはみなあきてしまうみたいで、いつのまにかひとりになっていた。どうしてかわからなかった。

「りなん、かわいいなあ」

隣の女の子が黙って僕の方を見た。

「可愛いと思わない？」

僕の悪い癖が出てしまったと気付くのは、ずっとずっと先だった。

「わかんない」

それだけしか言わなかった隣の女の子。

——あんな可愛い子がいるのに、どうしてみんな何も言わないのかな。

「ね、可愛いよね」

そればかり繰り返してみた。でも返事してくれなかった。最後には先生に

「秋葉くん、静かにしなさいね」

と声をかけられた。どうしてだろう。可愛い子を可愛いと言って、どこが悪いんだろう。

4

式が終わって僕は、梨南の姿を探していた。

そしてすぐに見つけた。口もとに赤チンをたくさんつけた女の子はひとりだけだったからだった。

「りなん、こんどは一緒に並ぼうね」

「どうして」

「だって、りなんは可愛いから。僕は一緒にいたいんだ」

僕の心にそのままつりあう言葉を並べた。

「可愛いってなあに」

赤チンを塗った唇が動いた。真っ白い顔にはっきり濃く出ていた。ドレスが歩きづらそうだったので、僕はテレビに出ていたみたく、脇のスカートをそっと持ち上げた。花嫁さんのようにした。

「ありがとう」

笑わないけれど、梨南はそう言ってくれた。僕の目をしっかりと見て。いっしょに教室に入っていた。

「あ、へんなの、あいつらくつついてるぜ」

僕と梨南が入って行った瞬間、窓際近くの席から大きな声が響いた。

背が高く、目が大きい男の子だった。

「きもちわりーの」

誰も真似しなかったけれども、その男の子は僕を頭のとっぺんから足先まで眺め、

「なんだよ、口、すげえ汚ねえの」

梨南の口元を指差した。

「きもちわりい顔にきもちわりい色ぬってるぜ」

梨南は動かなかった。ただ、きょとんとした顔で立ちすくんだだけだった。

「くつついてるお前もきもちわりいの」

僕は思わずうつむいて足と頭と手を眺めた。今日は汚くしていない。

「きもちわるくないよ、りなんは気持ち悪くないよ」

隣りで立ちすくんでいた梨南は、口を尖らせている男の子をじっと見つめ返していた。

何も言わず動かないでいた。

5

ランドセルに物を入れるのにこんな時間かかるなんて思わなかった。

僕がもたもたしている間に、梨南はお父さんお母さんと一緒に外へ行ってしまった。

帰る前にみんなで写真を撮ることになっていた。

記念撮影ってことだった。僕が一番最後に教室を出た時、先生に言われた。

「秋葉くん、今度はもっと早くできるようにしようね」

——うん、でないとりなんに追いつけないから。

——これからずっと、りなんのそばにいるから。

お母さんがずっと怒っていたけれど、僕はずっと泣いていたけれど。

梨南はもう女の子たちに混じって、後ろから二番目のところに立っていた。

今度こそ、梨南の側に居たかった。

「今度は僕、りなんの側に行くからね」

手をひっぱられて真ん中に連れて行かれた。でも先生にまた怒られた。

「いけません。秋葉くん。秋葉くんは前に行きなさい」

また涙がめのしっぽの方に溜まってきた。

「ううん、梨南の側に行く」

僕が手を振り切って、赤チンをつけた子の側に近づこうとしたとたん、さっきの男の子がじろっと見た。

「お前、気持ち悪い奴好きなんだなあ」

その子は、ずっと後ろの方にいた。

「あの顔、げぼってくるよなあ」

梨南は何も言わないで、その男の子を見つめていた。

「そんなことない。僕はりなんの側に行く」

先生が怒るのを無視して、僕が行こうとしたとき。

「あんなブスよりも、俺ははるみがいい。俺もはるみのそばがいい」

はるみ、と呼ばれた女の子が振り返った。

髪を二つに分けてしばった女の子だったことしか覚えていない。

「こいつがブスの側に行ってもいいなら、俺ははるみの側がいい」

先生はすっかり頭を押えこんでしまい、何度も叫んでいた。

「みんな、おとなしくしなさい！ みんなが好き勝手なことしたら、困るでしょ」

「ううん、困らないよ。みんな幸せになるよ」

僕は先生をなだめるようにしてそう言った。

みんながわいわいと騒ぎ始めると同時に、梨南と目が合った。

「待っててね、りなん。僕と一緒にいようね、可愛いんだから」

梨南は首を振って、突然泣きじゃくり始めた。顔を覆って突然お母さんのいるところへ走っていった。

あの時、悪口を言った男の子とはるみという名の女の子が、小さい頃からの仲良しだったこと

。

あの男の子が梨南のことを大っ嫌いだったこと。

先生が梨南の口もとについていた赤チンのことをものすごく怒っていたこと。

そしてなによりも。

梨南が本当はあの男の子のことを好きだったことを。

どうして僕はあの時気付かなかったのだろう。

僕は六年間知らないまま、ずっと叫びつづけていた。

「りなんが大好きだよ。りなんが女子の仲で一番可愛いんだよ」

あれから六年の間、梨南はあの男の子と激しくにらみ合いを続けるようになった。

はるみという名の女の子と仲良しになって、その男の子から引き離そうとしていた。

ずっとけんかばかり続けていたけれども。

そして、僕は梨南にあれから一度も口を利いてもらえなかった。

ずっと梨南が大好きだったのに。

今でも、大好きなのに。

言えば言うほど、梨南は遠くへ逃げてしまう。

——あの男の子より、どうして僕だったらダメなの。梨南は可愛いのに。

評議委員会が終り、結城委員長の命により一年男子を残していた。
これから奴らをひつつれて結城委員長宅に向かうためだった。
もちろん顧問抜き。内密の集会だ。

席をばらばらにして座る時、かならず俺の後ろ、もしくは隣りにくっついてくる奴がいる。気になってはいた。顔を見てにこにこするわけでもなければ、荷物持ちするでもない。入学して一ヶ月経つか経たないかの一年坊主だった。まだ小学生そのものって感じで、人の顔が怖いというそうタイプだ。そいつが女子だったらまだ、いろいろ考えるところもあったろうが、なにせ相手は一年坊主評議委員だ。

俺にはまだ、そっちの趣味はない。

「どうした、立村、なんか用か」

「いいえ、ありません」

小さい声で答え、やはり俺の隣りに黙って座っている。

俺がこいつと同じくらいの頃は同じ学年の男子とベーゴマで賭けごとやったりしていたもんだ。だいたい入学して二ヶ月くらい経ってからだろうな。結城委員長と女子情報を交換するようになったのは。向こうの方から声を掛けられたのであって、俺からアクションは起こしていない。

俺が結城先輩をおびき寄せるようなフェロモンを撒き散らしていたんだらうな。

フェロモンはまだ漂っているらしく、俺の側にはまた一匹くっついてきている。

立村上総、一年D組の評議委員だ。

一年同期に話し掛けられては、軽く交わしている様子だった。しゃべりたくないというわけではないのだろう。いつのまにか俺の隣りに陣取っている。同じクラスには清坂美里というなかなか男受けしそうなタイプの女子がいるのだが、全く眼中にないらしい。やはり話し掛けられると小さな声で「ありがとう」とか「悪かった」とか言うだけだ。

——ありゃあ、友だちいねえぞ。

俺は、そのままにして本日夜の「結城委員長企画・一年男子評議固めの盃」についての予定を組み始めた。こいつらは明日の評議委員会を担って立つ存在、いやその前に、俺のパシリとしてしっかりと働いてもらわねばなんない。それゆえ「あにおとうと」の契りを交わす儀式だ。

——結城先輩、あんた、悪党だよなあ。

——単なるアイドルおっかけ野郎じゃないって。

黒ぶちめがねをかけているのは生身の女子を遠ざけるためとしか思えない。あれじゃあ女寄っ

てこないだろ。結城先輩が愛を持って見つめるのは、アイドルグループ「日本少女宮」のポスターと写真集、あとは年に一回のコンサート舞台くらいじゃないだろうか。断言する。

「立村、これから来るだろう？」

「はい、行きます」

やはり声は小さい。男の持ち物ちゃんといついてるのか、お前、と言いたくなる。

唇をかみ締め、嘘をつかない、主張するまなざし。野郎としては俺も嫌いじゃない。いきなりへらへらと楽しげに媚びを売る女子たちよりは、ずっといい。

「じゃあ、一年連中とまとまってろ」

「はい」

俺に命令されたのが効いたのか、立村は少し椅子をずらして、一年連中の方にずれた。来い来いと手招きする同期連中。仲間に入れてやらなきゃなあ、て感じの気遣いだろう。

今年の一年はみな、お人よしというか、気迫のこもった奴がないというか。こじんまりした連中ばかりに見える。

誰とでも仲良くできる反面、勝負を賭けたいとぶつかってきそうな奴が、いない。

——俺が戦いすぎたんだらうなあ。やはり。

青潟大学附属中学は田舎ながらも一応は「エリート中学」として名が知られている。うちの親も俺がいかに小学校時代馬鹿やってたか知っているから、ここに押し込んでおけば真人間になるであろうと、勝手に想像したに違いない。実際、面白い奴は多いし、女子も可愛い。周りが一番心配していた成績の点もなんとかクリアしている。

ここだけの話、カンニングの方法もいろいろ考えていたんだが、なくたってなんとかなるもんだ。世の中、甘い。

担任が、現在評議委員会の顧問をしている駒方先生だったっていうのも、俺の場合プラスに働いたんだらう。いわゆる放任主義だ。よけいなことはな一んも言わない。こいつ何も考えてないんじゃないかといわんばかりの無関心ぶり。なんだが結構見ているところは見ていて、

「里希、お前も毎日、身体だけは大事にしろよ」

三日間とある事情で寝不足にて学校に来た時のことだ。去年の十月くらいだったらうか。俺も遊びまくっていた頃だったし、いつ公立中学に送り返されても文句は言えなかつたらう。

やることはやってるが「他人様に迷惑はかけていない」ことをわかってくれたらしい我が師に感謝だ。

部活なんてうっとおしいもんなんか最初からやる気はなかった。学校よりもおんもでたむろいたかった。評議委員に選ばれたのも俺の顔が目立っただけだ。情熱かけらもなし。

その俺がなぜか次期評議委員長の内定をいただき、青大附中の未来を担ってしまった。

予期せぬ展開。笑えるもんだ。

「ほんさと、ちょっと来い」

「へえへえ、結城の旦那」

俺のことを唯一、「ほんさと」と呼ぶのはこのお方、結城穂積（ゆうきほずみ）先輩もとい委員長さまだ。この一、鼻の先でうごめいている女子たちには関心皆無、ブラウン管の中であはんうふんしているお嬢様たちにのみ男の反応を示すという。男の楽しみを感じないとか。もったいない。

「今夜の『かための盃』用の酒なんだが、やっぱりビールを用意するか？」

「まだあいつら一年坊主ですし、アルコールの強いのはあとあとまずいんじゃないですかい」

「ごもっともだ」

ふ、ふ、ふ。隠微な笑いを漏らす結城先輩。「坊ちゃん道楽」とクラスの連中からは軽蔑されていると噂は聞いている。まあ俺は、この人の性格が嫌いじゃない。

「俺の部屋には誰も来るなど家の奴には命令している。かための儀式は無事、終わるだろうな」

「たぶん結城先輩の部屋に入ったとたん、みな卒倒寸前になるでしょうなあ。想像すると楽しすぎますぜ」

「まだまだ、免疫がないだろうしな」

四人、一年男子連中がひっそりとおしゃべりしている様子をそっとのぞいてみた。俺にひっついてた立村も、無事なじんでいる様子だ。他の三名も目立つところはないにせよ、あくのないしゃべりをしている。俺にとっては非常に使い勝手よさそうな手駒だ。

「さてほんさとよ」

「なんですかい、旦那」

「お前にしてはめずらしいなあ。女子の方には全く関心持たないとは」

「俺は基本としてですねえ、学内の女子には手を出さない主義なんですぜ。ふたりいたらもう、十分って奴ですか」

「生身の相手がふたり、確かにな」

また、ふたりでひ、ひ、ひと齒の間から笑いを漏らした。ひとりとはある事業家の息子、もう一人は仕事の関係で両親が海外でうろうろしていると来た。たぶん、端から見たらふつうじゃないだろう。俺と結城先輩はふつうじゃないところで繋がれたんだろう。人間の関係ってそんなもんだ。

今回「かための盃」を交わすのは、一年男子四人のみだ。女子たち相手には誤解を招くのを避けたい。レディーファーストだ。

俺も外見は中学二年になったばかりのガキだ。先生たちの前ではその辺も演じるように心がけていた。

「この世の中は演技だな、ほんさと」

「まさに、その通り」

仮面を使い分けてひたすら世の中をかいくぐっていくのが俺たちのつとめ。可愛がってくれる駒方先生には悪いが、俺たちは所詮、そういう奴なんだ。

俺は結城委員長と打ち合わせて、教室を変えることにした。俺の本拠地ま二年A組に一年評議四人を引き連れていった。後ろから悠々と結城先輩がついてきた。

この二年A組は一年からの持ち上がりだ。まとまりはよくもなければ悪くもない。一年時代はいざこざがないわけでもなかったが、すでに俺様の力で制圧済みだ。さすがに俺に逆らおうとする奴は男女ともにいない。ただ、

「本条に近づくと自動的に妊娠するかもしれないぞ」と、クラスの女子たちに言い含めている奴がいる。

——俺にも選ぶ権利があるってんだ。

四月の段階で、青大附中では委員会活動のいかなるかについて、一年生にレクチャーする慣わしとなっていた。青大附中の場合、「委員会」＝「部活」というニュアンスが非常に強い。運動部文化部ともに活気がない、コンクールや中体連で試合に出ても一回戦で負けてお帰りだ。な

あに、大抵やりたいことは委員会でそれぞれ賄ってしまうものだ。運動部関係はさすがに難しいが、文化部だったらもうお手の物。演劇関係だったら評議委員会にまかせとけ、美術関係だったら規律委員会、将来医者になりたいとか看護婦をめざすんだったらためらうことなく保健委員会へ。また音楽委員会、図書委員会などはもう言うに及ばず。文化部活力なしとため息つくよりも、もっと委員会の派手な活躍を見てほしいと俺は思う。

そうだ、ここは隠れ演劇部、評議委員会なのさ。

今のところ一年坊主たちは、青大附中の評議委員会を「学級委員の集まり」としか認識していないだろう。もしくは「生徒会長よりも権力をもち、先生たちからも一目置かれていて、ある意味治外法権」という場所だとも聞いているかもしれない。実際それは当たっている。結城委員長の隠れた技とコネにもよる。

だが、あれは演技だ。

評議委員は、演技ができないと、生きていけないのだ。知ってるか？

一年連中四人は肩を寄せ合ってひそひそ話を続けている。本当だったら三年、二年の野郎全員が揃うところだったのだが、わびしい、奴らはみな塾があるということで姿を消してしまった。なにも黙ってりゃ附属高校に進学できるんだからほおっておきゃあいいのと思うんだが、なかなかそうもいかないらしい。塾に行っていないのが俺と結城委員長くらいだっていうのも笑える。

そんなうざいところこもってるんだったら、もっと社会勉強しに出かけた方がいいと俺は思う。結城委員長と意気投合した一点だ。

「お前ら、塾に行っていないのかよ」

俺が一声かけると、四人とも頷いた。

「無理に行くことないって言われてますし」

「学校で十分です」

「お金ないんですよ、うちんところ」

それぞれ子どもなことを言っておる。最後に、

「家が遠いから……」

ぼそっとつぶやいたのは立村だった。知っている。こいつのうちは品山だ。毎日朝七時出発という話も聞いたことがある。どこぞの国では朝六時にうちを出るのも珍しくないらしいが、青潟では同情に値する。

「ふうん、じゃあ毎日、うちと学校の往復か」

大真面目にこくっと頷いた。目だけが俺の方を向いて、にこりもしない。

「まあ今日は大丈夫だ、立村。結城委員長のうちは、品山からそう遠くない、ですね」

「本日のところはな」

意味ありげな笑いを、口元の筋肉で表現する結城先輩。この人の家庭は俺の理解範囲を大きく超えている。別にそれはいい。親の別宅を借り切ってこっそりパーティーやろうが全くかまわならしい。いったいこの人の親は何考えてるんだろうか。そのおこぼれをもらえる俺としては、そんなぶっこわれたお父上に大共感するのだが。

「てなわけで本日はいつもの『宮殿』だ。覚悟しとけよ」

四人とも不安そうに顔を見合わせている。そりゃそうだ。俺の調べた範囲内だと、結城委員長以上の財政豊かな家庭はない。みな、こつこつと月謝袋を持って通っている。そんな奴だ。

「ま、緊張すんなよ。青大附中の評議委員会はな、絶対に」

さすがに一年たちのびびり方を心配したのか、結城委員長はひとりひとりに話し掛けながら、続けた。

「しごきはしないし、いじめもしない。ただ、やりたいことをやる方法をとことん叩き込むだけだっとな」

——やりたいことをやる方法、か。

——結城さん、まさにあんた、身体でそれやってますよな。

青潟一のエリート中学と人は言うが、大嘘だ。

とにかく裏を知ること、利用すること、演じること。

自分のやりたいことはとことんやってみる。

一年一学期まで、俺は要領が悪すぎた。そんな俺を拾ってくれたのが結城委員長だった。青大附中の利用方法をとことん叩き込んでくれたのが、この人だ。

——そうだよ、一年ども。

——学校はな、いやいや通うもんじゃない。とことん裏まで利用するもんなんだ。知ってたか

。

2

ねずみが一匹、二匹、三匹。もう一匹がまた俺の隣りでちょこなんと座り込んでいた。

自転車で二駅先の結城委員長宅まで一挙に移動した。俺が先頭を走り、後を着いて他の連中がきんぎょのふん状態で追いかけるかつことなる。結城先輩だけは、ちゃんとご自宅から車でお迎えがくるので先に行ってもらった。軽トラックだった。

「ようし、お前ら、よく来たな」

すでに下ろしてもらい、車を追い返した結城先輩が、石ころだらけのさら地にかばんを投げ捨てた。なんかわからんがこの人はいきなり持っているものを高く投げるくせがある。たぶんアイドルのコンサート関係パフォーマンスだろう。くせを覚えておけば、まかり間違っても自分の貴重な写真集やら見られたらまずい秘密の書類とか、飲み物を渡さないで済むわけだ。この辺も一年坊主たちには把握してもらいたいもんだ。

「さあて、連れてきましたぜ、ほら、一匹、二匹、三匹、四匹」

「貴重なはつかねずみどもか」

「そうっすよ。結城のだんな。これから俺の……」

言いかけたところでぎゅっと俺の口を封じた。手を回すな、息苦しい。

「いいかほんさと。あまり、おどすなよ」

「まるで俺が手箆めにするようないいかたですなあ」

「当たり前だ。今年の目標は、一年評議を四人ともお前の配下につけることだろ。最初が肝心だぞ。お前の代のように」

「どぶねずみ一匹捕獲してあとは逃げられたってことにならないようにですか。簡単ですってだんな。俺がそんなへま、しますかい」

「その言葉、信用するぞ、じゃあ入れ！」

俺は四人がくっついて様子をうかがっているところに活を入れた。

「そこで猫ににらまれたねずみみたいな顔してるんじゃねえ！ さあ、来い！」

かなり大きめのプレハブ住宅が二棟、並んでいた。結城先輩の個人部屋だが、もちろん本宅なわけがない。奥に見える白く四角い建物が実際の居住地だ。中学入学してからは勉強に集中したいという結城先輩のわがままにより、現在手付かずの土地に臨時事務所用のプレハブを立てたと

いうだけのことだ。勉強してるか どうかは知らない。はっきりしているのは、めったに人が来ないってことだ。解放区。

「あの、本当に入って」

おずおずと顔を見合わせ、誰かに口をきらせようとし、結局例の立村が尋ねてきた。あたりまえだろうに。俺は軽く頭を撫でてやった。甘えた目をしていたからぶんぐるのは勘弁してやる。

「あたりまえだろ。俺に二言はない。まず来い。おい、立村、お前どこに座る？」

いきなり聞かれて戸惑っている。また四人で顔を合わせている。もじもじするなと言いたい。

「どうせ俺の後ろか隣りに来たいんだろう。わかってる。早く席を取ってしまえ」

無言で視線を絡めた後、立村はすぐにドアを開けた。靴をきちんとそろえていた。真似して一年坊主たちも同じことをした。どうやら

「立村にあわせておけばなんとかなる」

と思っただけらしい。

俺が注目していたのは、部屋に入った瞬間の一年たちが、まずどこを見るかだった。

ひとりは一瞬立ちすくみ、もうひとは天井と床を交互に見上げては口をあげ、あとひとは手で何度も壁を触ってはため息をつく。おいおいそれは、水着だぜ、と突っ込みたい。足もとには「日本少女宮」の過去グラビア写真がビニールシートの下にびたっとはりめぐらされているし、天井も同じ。壁側には巨大全員 勢ぞろいポスターがやはり数十枚。数えたことはわからないが、画鋏ではなく両面テープでしっかりと、切れ目なく並んでいる。色あせたらすぐに張り替えた。もちろん、おつきの人がやるのではない。結城委員長の手自らである。

「どうした、立村」

こればかり聞いているような気がする。黙って靴を脱いだはいいが、ずうっと俺の顔ばかり見ている。すぐに俺の隣りにはりついてくる。見えない両面テープでも俺持っているのかい、と思うくらいだ。部屋を見て驚きもしなかったところみると、こいつも相当の兵だ。

「どこに座ればいいですか」

「どうせ俺とツーショットしたいんだろ」

なんか、「男だろ、自分で考えろ！」とどなっちまいたいとこだ。こいつが立村でなければ。ガキんちょは嫌いだ。立村の場合だとどこにいても「自分の座る 場所は本条里希の隣り」といわんばかりの顔をしているので、俺も受け入れなくてはならないかと、思ったりする。完全に俺の手の中に納まっている心地よ さってものをあいつは持っている。飼い猫と一緒にだ。

「それでは、失礼します」

俺が勝手に結城先輩の座布団.....もちろん「日本少女宮」のオリジナル写真がプリントされているもの.....を引っ張り出し、一年連中に投げてよこしたのを、立村はひとりひとりに分けて与えていた。一個、足りないことにしようかといたずらな気持ちで尋ねた。

「お前人にやっちゃったら、座る場所ないぞ」

「いいです。慣れてます」

可哀想なんで、ちゃんともう一つやった。「日本少女宮」のメンバーは二十人。余裕なのだ。ちなみに結城先輩は、抱きまくらタイプの等身大クッションにまたがり、ほおっとため息をついている。この人も、これだけ金があるんだったら、生身の子の上にまたがった方がいいのに。いつも同情する。

「良く来てくれた、青大附中評議委員を担う若人よ」

サービスがいいのが結城委員長。さっとひとりに一本ずつサイダーの缶を一年連中と俺に配っていった。めがねの汗をふき取り、タオルを首に巻いて、

「本日、君たちに遠路はるばる来ていただいたのにはわけがある。君たちは、青大附中評議委員会についてどのくらいのことを、知っているかな」

神様のお言葉をつかさどるのが、司会の俺だ。隣の立村に尋ねる。正座した足をびったり俺に押し付けている。でかい声して聞かなくてもいい。

「お前、どうして評議になった？」

うつむいて、少し震えんばかりに唇をゆっくり開いた。目が俺の手元をじっと見詰めている。何見てるんだらう。何か飲みたいのか。

「クラスで、推薦されたから」

「そんだけ？」

「それだけです」

よくあるパターンだが、俺からしたら意外でもある。

立村は見た感じ目立ちたがりやという風ではない。一年連中のクラスをそれぞれ眺めてみたのだが、D組にはすでに二人、目立っている男子がいる。

ひとり俺の小学校時代の後輩で南雲って奴がいるんだが、こいつは見た目アイドル顔してるもんで女子関係の噂が実に絶えない。服装だって相当派手に気崩しているんだがなぜかこいつ、規律委員会に流れやがった。これはあとで奴を捕まえて聞いてみるしかないだろう。あと、もうひとり羽飛って奴がいるんだが、こいつはめっぽう元気野郎ときた。まだ部活を選んでいないらしく、今のところは帰宅部状態らしい。バスケット部で懸命にスカウトしているが反応なしともきいた。当然、女子の人気も南雲と羽飛のふたりが担っているらしい。流れでいけば、バスケット部を取られるかどうかわからん羽飛の方が推薦されるんじゃないかと、俺は見ていた。

「そっか。どうしてかわからないよなあ」

軽く肩を叩いてやり、第二、第三のインタビューに移った。他の連中はまだ納得がいく理由だった。青大附中の評議委員はエリート一直線だからと勧められ、なんとなく立候補してみたら入ってしまい、あせっている奴。たまたま出席番号一番最初だからそう決まってしまった奴。じゃんけん。

まあ、やる気の必要な評議委員会においてこの理由付けはまずいんでないかい、とは思う。俺もきっかけは似たようなもんだ。入学当時やたらつかかってくる奴がいて俺を目の仇にしたので、

「お前、童貞なのにこんなことしてたらいつ卒業できるかわからんよ」

と一言返してやったら、いきなり推薦されてしまったって奴だ。

「ほら、緊張しているみたいだから、結城委員長、飲ませましょうよ、まずは」

「そうだな、ほんさと」

四人とも手が震えている。部屋の激しい色使いとポーズ、およびみなさま南国で焼いた肌などを、さらけだしているこの部屋で。

——そりゃあ、落ち着かないわなあ。

顔を見合わせあっている一年坊主たちの中で、ことあるごとに俺だけ見つめている立村。言われた通りにサイダーを口に運んでいた。正座したまま、そっと俺の方へすりよろうとしている。

「緊張してるのか」

首を振った。結城委員長も妙な顔で立村の様子を伺っている。それでもいいかと思うのだが、誤解を生まないとも限らんぞ。

——俺はまだ、男には興味ないぞ。

「どうするほんさと、すっかり懐かれちまってるなあ」

にやけながら俺に「日本少女宮・クッションボール」……全員のサインがプリントされている球形のクッション。サッカーボール……を投げつけてくる。あわてて立村が一步、膝で後ずさりし一年連中に張り付いた。同期四人で顔を見合わせ、防御の視線を流した。

「よしよし、怖がるな、お前たち別にいいんだ。俺たちは決して、しごいたりいじめたりする気はない。その点は安心しろ。今回の集いはなあ、すなわち」

結城先輩も予定より早く話を進めた方がいいと解釈したのだろう。

「本日は『かための盃』を交わすべく集まってもらったってわけだ。残念ながら今日は俺と本条だけだが、まあ他の連中とは合宿の時にまた話、すればいいだろう。お前たちは四人で、三年間、青大附中の評議委員として学校の中を泳ぎまわっていくわけだが、先輩後輩としての絆を深めて、同期の桜を咲かせるってことで」

まどろっこしい。奴らは頷きながら目を真ん丸くして聞いている。意外なのは立村があいかわらず俺だけ見据えてることだけだ。

話しているのは結城委員長なんだからそっちを見ろ。

俺は軽く目を閉じてあごで結城先輩の等身大クッションにまたがった姿を指した。

素直に次の瞬間から視線を逸らした様子だった。

「じゃあ、本条、頼んだ。これから『かための盃』だ」

「かしこまりやした」

俺は結城先輩の部屋に常備されている冷蔵庫から、ビールを一缶取り出した。お猪口も人数分。ほんの一口だ。「青大附中評議委員会の不祥事」と新聞ざたにはしたくない。

「かための盃」なる青大附中評議委員会の儀式は今年から始まった。

一年一学期の五月に、結城先輩が俺をここに連れ込んで、まず一献、とばかりにビールを振る舞い、ぶかっこうにも酔いつぶれたくらいだ。未成年のくせにへべれけになっちゃったなんて。

学校に知れたら一発で退学だ。

ちなみに一度や二度ではない。もちろん空き缶はこっそり夜中に捨てている。

アイドルポスターに囲まれた部屋で「同期かための一献」を行った。当時は同期評議の連中とあれやこれやドンパチやらかしている頃だったし、結城先輩なりの気遣いだったのであろうと、俺も解釈はしている。まあちなみに奴らとは現在、「友情」なんてものも感じてしまっている。俺の得意分野である「女子との付き合い方」などのレクチャーもさせてもらっている。それもまあ、悪くない。ビール一杯で今まで口にできなかったこともぶちまけられる。つぶれた奴を介抱してげんなりしても、その後でいろいろ融通を図ってもらえたりする。なかなかいいじゃないか。

今回もその延長上で行われる「かための盃」儀式。本当だったら塾に逃げやがった連中も交えて、結婚式の三々九度ばりにやりたかったところだ。奴らもその辺は了解済みで別の機会にと考えてくれている。すでに結城先輩と、第二次「かための盃」を予定している。

でも、ここで小さくなっているねずみ四匹は、ブランデーボンボンか甘酒くらいしか飲んだことないんじゃないだろうか。「酒」という言葉を聞いただけで、二人が震え上がって缶を落としそうになった。立村ともう一人も、顔を見合わせてひそひそ話している。

「委員長、俺が思うにですな」

簡単な台所がついているっていうのもすごい部屋だ。もちろんトイレ完備。四人には聞こえないよう、盃に少しずつビールを入れながら。

「いきなりビールっていうのもまずいんじゃないかと、俺は思いますな」

「お前、いっちゃん最初のに一本飲み干しただろう」

「もともと兄貴たちのおこぼれ頂戴してましたもんね。でも、こいつらの顔を見てると、俺のやってることって拷問みたいな気がしてなんないんですよ」

結城委員長はふうん、とつぶやいて振り返った。

「まあ下級生に飲酒させて補導されちまうのはいやだなあ。でもな、一滴も飲ませないって言うのもなんか違うぞ」

「一滴だけにしときますか」

俺は四人の顔ぶれを眺めた後、おちょこに少しだけ黄色い液体をたらした。底に紺のぐるぐる巻きが見える。ビールが淡く揺れた。このまま一気飲みしたいんだが、やはりそれはまずいだろう。俺と結城委員長の分だけたっぷりビール原液を注ぎ込んだ。

「おいほんさと、こりゃあいくらなんでも少ないだろ」

「ごもつとも」

まずいかもしいないが、量だけは必要だ。

これはということで、ボトルに入った水をおちょこ中間くらいの位置まで注いだ。

水で薄めたビールなんて飲めたもんじゃない。俺からしたらそっちの方が、拷問だ。

全員をもう一度、結城委員長の前に座らせなおした。クッションをそれぞれ持って、水色のピ

キニで足をおっぴらいている「日本少女宮」のリーダーさんの立ち位置だった。立村が俺の側にくっついて離れないのは予測済みだったので、向かって左側に座らせた。D組評議なのだから順番としては問題ない。他の三人が同期連中と膝を抱えたのに対し、立村だけは俺の真似をして、ちょこなんと正座した。それに気づいてすぐ、全員座り直すところがやっぱり、一年坊主だ。

「では、これから、『かための盃』を取らす」

ゆっくり、ひとりひとりにお猪口を手渡した。この辺は古式（なんてもんはないが）にのっとり、代表の俺が一年連中に渡していく。サイダーの空き缶を後ろに置いて、みな両手で受け取る。指先が震えている。立村も例外ではなかった。何度も底のぐるぐる巻きを覗きこんでいる。

「これから青大附中評議委員会で義兄弟の契りを結ぶ。今後どんな苦難が待ち受けていようとも、たとえどんなあくどい教師とぶつかり合おうとも、たとえどんな馬鹿後輩と当たろうとも」

——そこんところで俺を見るのはやめましょうや、結城さん。

時代劇の見すぎか、それともやくざ映画にはまりすぎたのか。

「お互い助け合い、戦い、心を許していこうぞ。乾杯！」

また顔を合わせてやがる。立村にだけ言った。

「乾杯って言えよ」

「はい、かん」

立村もちらっと「義兄弟」の仲間三人に小さくささやいた。頷く連中。どうやら立村が他の一年坊主にとってお手本になっているらしい。不思議なものだ。たいしたことしてないくせに。俺の顔ばかりうかがってるくせに。足下がつるつるすべるなか、

「一気に、飲もうか」

「うん」

「号令、頼む」

四人はすばやく正座しなおし、

「かんぱい」

うつむいたまま、お猪口の端にかぶりついて飲み干した。勢い良すぎる。やっぱり水を混ぜておいて正解だった。あとのことを考えたら、当然だ。

口にしたとたん、A、B組のふたりが思いっきり顔をしかめた。ビールを水で薄めた飲料水なんだ。たぶんこいつらは、いける口かもしれない。

「お前ら、飲んだことあるんだろ？」

単刀直入に尋ねると、またまたA Bふたりで顔を見合わせる。はつかねずみだったらひげがぶつかり合う距離できょときょとしている。いきなり、C、D組の評議に視線を送り、「どう答える？」と相談する始末。俺の側に三人の目が固まった。一秒ずれて立村がこくと頷くと、やっとA、Bもセットで首を下げた。要は「イエス」のサインだろう。

「まずかったら？ 原酒でほしかったか？」

結城先輩が太ももにはさみっぱなしのクッションを抱きかかえ、木馬の首にかじりつくように

「ほしけりゃ、今度はビールでやるか？」

返事を待たずにA、Bへ缶ビールを注いだ。

ありがたく受け取る様子だが口をつけるのを迷っている。

「大丈夫だってな。俺たちもこれ以上今回は飲ませる気、ねえよ。酔いを覚ましてから家に帰るんだろ。自転車こげる程度にしとくって」

俺だったらとことん飲み比べ、やるんだろうがそこまで相手に押し付ける気にはなれない。評議委員会が部活の要素を備えているのは確かだが、運動部に多く見られるような「先輩が後輩を威圧する」ことはしたくなかった。そんなことされてたら今頃俺は結城委員長をぶん殴って青大附中を退学だ。自分がされたことを相手にしてやるのが、青大附中評議委員会の伝統だ。

「立村、どうした？」

C組の奴も一緒に盃と出したようすで、結城委員長は次いでやった。だが立村の方には俺がやれ、とばかりに無視して立った。気づいてない。ずっと俺の方ばかり見ているから。

「味しなかっただろ。少しだけ、やるか」

俺の分のビールを、お猪口のぐるぐる巻きがにごらない程度に注いでやった。小さな声で、
「ありがとうございます」

もう一度両手ですくうようになめ始めた。猫がミルクをなめなめしているみたいだった。大きな種を飲み下している横顔がしている。かなりしんどそうだ。苦いんだろう。中途半端な量だけに、味が染みてきついんだろう。たぶんこいつは、それほど酒がいけるほうではなさそうだ。

——あとはサイダーでもすすってろ。

全員が二杯目の盃を交わしたあたりから、一年坊主たちも若干は打ち解けてきた様子だった。

結城先輩のまたがっている「等身大クッション」に興味津々らしいA組評議が手を伸ばそうとしたり、B組評議が床のビニール下ポスターを覗き込んだり、C組評議がもう一杯ビールとサイダーを間違えて飲み干したり。まさに酒は魔法だ。結城委員長も、こよなく愛する「日本少女宮」について語り出したらもう、止まらない。ひたすら結成当時の苦労やら、コンサートツアーの追っかけした思い出やら、LPを引っ張り出してきていろいろイントロクイズさせたり。やりたい放題やっている。

「やらせてもらえない相手にここまで燃えるのもめずらしいよなあ」

ぼんやりと座り込んでいた立村に話し掛けた。

ぽつんと取り残された、というよりも輪の中へ入っていきたくて思っていないんだろか。

俺も結城委員長の側に行きがてら、

「D組の奴は俺が面倒みますよ」

とささやいておいた。結城委員長もその辺はすべてお見通しだったらしい。同じく小さな声で、曲に打ち消されそうな声で。

「俺の勘だと、あいつはお前の弟分になるぞ」

さすが、匂いが違う。

この人はよく見ているもんだ。俺をいきなりスカウトした時だってそうだ。評議委員会で一年同士……俺が一年の時だから去年だ……で、ささいなことからもみ合いになった時、

「本条はじゃあ俺がかばん持ちにするから、まずは一年連中三人で盛り上がれよ」

「日本少女宮」ハンカチで汗を拭きながらお許しを頂いた。

もちろん俺はその場で結城先輩の「コンサートパンフ」入りバックを持参の上、この部屋にきたというわけだ。貴重品満載のバックを他の奴らには、めったに触らせることがなかったと聞かされるのは後日のこと。

たぶん今の俺と同じように、結城先輩は俺に対して繋がる「匂い」を嗅ぎ取ったのだろう。

でなかったらバリバリの童貞君で、しかも生身の女子に関心のない結城先輩が、「小学校六年夏に初体験、現在はもう一人高校生の彼女持ち」の俺と好んで話をするとは思えない。

もっとも立村も、俺のその辺に関する情報をどこまで持っているのだろうか。すけべ方面に好奇心むらむらなのか、俺の顔が気に入ったのか、もしかしたら同性にしか心惹かれられないのか。わからん。

もう一杯、手酌でビールを飲み干した後、俺は顔を覗き込んだ。

「こういうところ、初めてか？」

うつむきつつも、こっくり、頷いた。

「酒飲んだもの、初めてか？」

酔いが赤く出ていない、白い。唇を噛んだまま、俺に訴えかけるようなまなざしで、目を伏せた。

——こりゃあ、かなりまじでまずいぞ。こいつ。

「少し横になるか？」

「外に出ていいですか」

「トイレは向こう側だぞ」

口をぬぐうような格好で立村は立ち上がった。幸い足にはきていない。しっかりと歩いていた。一年坊主たちが三人心配そうに見上げるものの、結城委員長の「元祖・日本少女宮のメンバー達」論を聞かなくてはならないとあってすぐに戻った。こいつらの顔はほの赤い。奴らのお猪口にはビールが絶え間なく注がれていた。

俺は外に出て闇の中に目を凝らした。

苦悶のうめき声がかすかに聞こえた。吐いているんだろう。トイレでは戻している声がまる聞こえだと思ったのか、自転車を置いてある場所の叢でうつぶしていた。

「立村、いるか？」

そっと近づいてみると、涙のたまった眼がこっちを見た。口を草でぬぐって、無理やり立とうとしたがすぐ、突き上げるものでぶったおされしゃがみこんだ。

——本当に大丈夫かよ。こいつ。

悪酔いだってここまでひどくはないだろう。もう吐くものもなくなった状態の立村が、うめいている。背中をさすってやった。

「もう、帰るか？ 結城さんに頼んで、車呼んでもらうか？」

そのくらいのことはあの人なら茶の子歳々だろう。

「大丈夫です。自転車あります」

「でもこのままげぼげぼやってたらたどり着くものも辿りつかねえぞ」

「品山、は、すぐ近くです」

闇の落ちが早い。そりゃそうだ。ここは僻地だ。

「それに、今日はずの親泊りでいないから、少しぐらい、酔ってても平気です」

「じゃあ、待ってろ、荷物持ってきてやるから」

少し落ち着いて話ができる状態になってから、俺はもう一度怪しの館・結城委員長室に戻った。かばんだってまだ使って一ヶ月も経っていない。つややかな皮のものを探せばいい。

既に、四人は合唱し始めている。なんのことはない、こいつらは大小問わず「日本少女宮」に関心ありありだってことだ。女子の前ではあまり誰々が好きだとか言えないだろうし、かといって内緒にするのもしんどい。新曲「巫女ちゃんになりたい！」をレコードにあわせてがなりたてるのは校内じゃあ、絶対できないだろう。

——立村はこれじゃあ、無理だな。

結城委員長にまた、耳もとで事情を説明した。めがねの奥がちょっとだけ真面目に光った。

「酒弱そうだったもんなあ、あいつ」

「だから俺、送ってきますよ。下手に警察とかに補導されたらもっとまずい」

「そうだな。ほんさと。ここの連中はどうせあとで、車で送らせるつもりだったから心配するな。しかし、お前さあ」

さびの部分合唱している一年坊主を眺めつつ。

「今年の一年、まんざら捨てたもんじゃねえな。青大附中かくれ演劇部も安泰だ」

「御意」

「D組だけはほんさと、お前の管轄だ。悪いこと言わない、お前の弟にしてこいよ」

「じゃあ、あとはお任せしますぜ！」

結城委員長はラックから、「ライブ・初コンサートツアー・日本少女宮」を引き抜き袋から黒いジャケットのレコードを取り出した。しばらくはそれをかけて盛り上がるだろう。自分と立村のかばんがどこにあるか探し、引っ張り出し、自転車置き場へ走った。

確かあいつは銀色細身の自転車でここまで来たはずだ。他の連中のように有名ブランドの名前がかかっていたり、色を塗っていたりはしないタイプのものだ。自転車の鍵もがっちりしたものを使っている。

結構いいとこのぼっちゃんじゃねえか。

十分くらい前まであいつが叢でぜいぜい言っていたのに、すでに吐いたものの匂いがかすかにするだけだった。制服だと夜はだいぶ寒くなる。ビールを飲んでいるので体が火照っているけれども、ブレザーは脱げない。そんな四月の夜だった。

「おーい、立村、どこいるんだ？」

声をかけてみる。俺だってかばんが重たい。表面がつるつるした学生かばんは、まだ手に馴染んでいない。

「かばん、俺預かってるぞ」

一声、石ころの転がる場所に掛けてみた。反応がない。

たぶん、先に行きやがったな。

しょうがない奴だ。立ち上がったとたんへど戻しそうになっていたくせに。

お前はいいかもしれんが、飲ませた奴は誰なんだ、ってことになったらしゃれにならないぜよ。探しにいったやるか。

踏み込みのいい雑草をよけながら、俺は自分の自転車を探し出し、鍵を外した。自信もって仕込んだ究極の仕上げ。ちょっとやそっとのスピードではかなうまい。

品山はバスで一時間近くかかるという。自転車でもそのくらいらしい。結城先輩の命で、品山近辺をうろついていたので俺のこの辺地理関係は完璧だ。すでに一年坊主たちの住所も一通りチェックしておいたので、先回りして立村の家まで行くこともできなくはない。

足下おぼつかない青大附中の制服姿を見つけ出すのは、意外と簡単だった。サイクリングロードに沿って自転車を漕いでいくうちに、タイヤ跡が微妙にずれてころげ落ちた奴を発見した。

土手だが、雑草がクッション代わりに、ごろんとねっころがるも自由、スノーボードで滑り降りるのもまた乙なもの。ちゃんと川の近くには柵が張り巡らされている。ただ、斜面は急なので、打ち所悪かったら死ぬかもしれない。

暗さに目を凝らしながら、車のライトの点滅を頼りに俺は声をかけた。

「立村、いるなら返事しろ。俺だ、本条だ」

同時に自転車が横に転がっているのを発見。乗っていた本人もその辺に転がっているはずだ。

「おい、返事しろ、立村、おい」

返事はなかった。かわりに、かすかな息遣いと、「ひ」の音に近い声。続いて、押し殺すように嗚咽が聞こえた。

——打ち所悪かったか。やっぱりな。

——やばいなあ、酒入りで病院かよ。とにかく掘り出すか。

手で冷たい空気をよけ、腰から滑り降りた。まだズボンから冷たい湿気は上がってこない。声の響く方向と自転車のころがったところまで、巧くバランスを取りつつ足を運んだ。つま先に柔らかいものがぶつかった。

「おい、立村、お前か」

背中を軽く蹴ってしまったらしい。激しく咳き込んだが、吐くほどではなかったようだ。背中をまるめ、完全に膝を抱えている。俺の顔を横からおそるおそる見上げた。お月様が昇るのと一緒だ。

「本条先輩、ですか」

かすれた声だ。俺はしゃがみこみ、尻を地面すれすれまでつけた。つま先でバランスを取るのはいんどくて、べたっと座り込んだ。

「ほら、かばん持ってきてやったぞ。あせって帰るなよ」

「すみません」

おなかのところをちょうどおさまるよう、かばんを差し込んだ。膝と腹の間だろうか。きらっと車のライトで金具が光った。気のせいか、立村の目からぬめったものを読み取った。

「どうしたんだ、こけたのか」

最初は小さく、そしてだんだん大きく首を振った。

「突き落とされたのか？ ぶつかって」

それほど意味はない。細いサイクリングロードだし、ぶつかって落ちるなんてざらじゃないか、って気もする。俺がそんなへますることはないだろうが。

立村は同じ位置に並んでいる俺の目をじっと見詰めた。今度は余裕で表情を読み取れた。なんかわからんが限界に来ていることは想像がついた。小学校時代さんざん遊び呆けた町だ、やばいことはいろいろあるだろう。

次の瞬間。

女でもこういうことされたことはない。

猫か犬だったらあるかもしれないが。

ブレザーの中にすごい勢いで堅いものがぶつかってきた。ラグビーボールを受け止めた瞬間ってたぶんこういうもんだろう。くる衝撃。しかも投げられない。受け止めっぱなし。

——全身からだをぶつけてくるなよ、おい。

俺はむしゃぶりつくように顔をうずめる立村の背中をそのままさすってやった。全身震えが止まらなかった。ダムをせき止める場所が決壊したようだった。えんえんでもなく、わんわんでもない、声は胸板でしか捕らえられないけれど、ラグビーボールが押し付けられたように俺は支えることしかできなかった。なんとなくシャツが暖かくなる。手の甲の皮だけがびりびりと痛む中、俺はなすすべもなく立村をさすってやっていた。

真っ暗闇で、上を通る自転車の音だけが響いていた。こうやって座っていると、川の向こう側すぐそばにも家の灯りが見えたりして、人間どこでも生きていけるもんだと、見当違いなことを考えたりした。巨大な猫を一匹抱きかかえたような気分だった。

「立村、もう大丈夫か」

ずいぶん女っぽい言い方だ。

本当だったら、

「ばあか、早く起きれつつうのがわからねえのか！ 変態が」

とでもぶん殴ってやるところだろう。他の奴だったらためらうことなくそうしてやるところだ。その一方でだんだん冷えてくる身体に、妙な暖かさを与えてくれる物体を手放したくなかったのも、また俺の本音だった。

「すみません」

俺が軽く肩をずらしてやると、すうっと目を上げた。

何度か目をこすって、ほおを手の甲でさすり、慌てたように一步、俺から離れた。

「今のことはなかったことにしてやるよ。しかし、何があった」

「すみません、ただ」

「自転車でこけて滑り落ちたくらいで、泣き喚くような玉じゃねえだろ。お前も」

立村は黙り込んだ。かばんを叩き、草をむしるような真似をした。首を振っているのは、俺の想像がまんざら外れているわけでもないのだろう。

「見えたから」

「何がだよ」

「向こうから、自転車でぶつかってくる相手が、見えたんです」

か細い女子めいた声だ。まだ声変わりしてない。

「で、ぶつけられたのか？」

「いいえ、自分で、たぶん、ふらついて落ちたはずですよ」

えらくこの辺は冷静に分析している。

「すれ違いざまにか」

「ぶつかる寸前に、それが消えたから」

激しく咳き込み、口を覆った。ネクタイの襟を緩めるようにして、息をつぎながら。

「今日に限って、まさか、見えるなんて思わなかったからだから」

意味がわからんが、酒の幻覚を見てしまったんじゃないか、と俺は解釈した。飲みすぎると人間の輪郭が二重になったりするもんなあ。初体験のアルコールは相当きつかったんだろう。

「よっしゃ、じゃあな、俺がお前のうちまで送ってってやるよ。酔っ払いが一人で歩いてて、補導されたらしゃれにならねえもんな。立村、立てるか？」

脇から立たせてやると、数回ふら付いた後、俺と同じ目線に立った。

「ありがとうございます。でもひとりで」

「帰れるわけねえだろ！」

一喝した。

「俺が目を離して、また土手から落っこちたらどうするんだよ。たまたま相手が俺だからよかったけどな、この時間帯は、夜の怖いおにいさんがうろつくんだぞ。お前は小学校出たてだからわからんだろうが、世間はなあ、怖いんだぞ」

返事を待たずに、奴の自転車を引き上げた。俺の分は盗まれずに路上のまま。自転車をひっぱって歩くだけの気力はあるだろう。四つんばいになりながら、立村は坂を腰曲げて上がってきた。車の通り過ぎる灯に照らされた顔はかなり汚れていた。

途中なぜか遠回りの道を選んだりもしたが、なんとか無事に送り届けることができた。

話に聞くとおり、品山までの距離は結構長い。遠い。

こいつ、無事に明日の朝起きられるか？

土日だったらまだしも今日は金曜日だぞ。

「ありがとうございました。ご迷惑をおかけしました」

言葉だけは妙に礼儀正しい。

立村の家を覗き込んでみた。

二階がない分狭くみえるがよくみると地下車庫付きの豪勢な館だ。庭らしき場所も広がっている。真っ白くペンキで塗られている。

「今夜、誰もいないって言ったよな」

「はい」

わけのわからぬ顔で立村は答えた。

「そっか。じゃあここまで俺が送ってきた見返りに、ちょっとだけ、上がっていいか？」

これも立村でなければ……たとえ結城先輩であっても……「せっかく人が送ってやったんだからな、食べ物くらい食わせろよ」と脅すところだ。だが、やはりこいつのかもしれないオーラが、俺にも「丁寧語使用しろ」と命令しているようだった。

戸惑った風に足を数回もじもじさせたが納得はしていたのだろう。かすかな笑みとともに、奴は答えた。

「わかりました、入ってください」

——なんだ、こいつも入ってほしがってたんじゃないか。

自転車を門の奥につけ、立村に案内されつつ玄関に上がった。煉瓦と大理石を交互に敷き詰められた、いかにも注文してこしらえた家って感じだった。ドアを開けると、やたら線香くさい匂いが漂うのが感じられる。灯りが着くと廊下ともにつやつやしている。立村が靴をそろえて脇に並べ、ふらつきながら左側部屋の電気をつけた。

背中が堅そうな黒い椅子、後ろには同じ色合いのソファ、みな着物の布みたいなもので覆われている。天井からなぜか小さめのシャンデリアがぶら下がっているが、ど派手、というイメージがないのは、灯の一部が紙でふんわり覆われているからだだろう。光がやわらかい。

「どうぞ、お座りください」

「いや、俺も座るだけで」

「飲み物と食べ物、たぶんあります」

光で眺めると、かなり立村の顔は体調崩してぶっ倒れる寸前、そのものだ。こいつは食べる気ないだろう。胃が持つまい。

「先輩、シチューだったらすぐ出せます」

「出せるって？ そんな豪勢なもんじゃなくても」

「昨日作って冷蔵庫に入れたのがあります」

台所で手を洗う音。水しぶきがやかましい。。

「いや、ほんとうに俺、そこまでされなくたっていいって。それよか立村、お前、大丈夫なのか？」

「大丈夫です」

——んなわけないだろ。

想像以上に豪勢なシチュー皿と、フランスパンを切った奴。さいごに冷たい紅茶のポットまで持ってきた。手だけ洗っているが、制服はずたずただ。

「立村、ここまでサービスしてくれるのは非常に嬉しい。だがな」

全部、俺の分だけ運んできてくれた後、ささやいた。

「俺はお前と少ししゃべりたかっただけだ。さ、顔だけ洗って来い」

固まったように立村が俺を見つめた。

「あの、まだあの」

「だから、今俺も食うから。お前の格好みてると、いつぶっ倒れるか気が気じゃねえんだ」

俺に命令されるやいなやすぐ顔を洗いに駆け出した。白いシャツとカーキ色の下に着替えて、立村はまた俺の隣りにちょこんと座った。ちゃんと椅子があるっていうのに、なぜか俺の腰掛けしているソファの足下に、正座している。

——お前、犬か、猫か。

「ほら、隣りに来いよ。なにもそんな、ひざまづいたりせんでも、俺は何も」

言われている意味がわからないらしく、またくいと見上げる。酒の酔いが……たったお猪口一杯だっていうのに……残っているらしい。無表情で、ただ俺の目を見て、指先を眺め、最後に減っていないシチュー皿に着目し、

「残るともったいないので、もっと食べてください」

猫の目だ。まさに。暗闇で黄色く光る、あの瞳。やたらとらんらんとしているのが怖い。

まったく。どうやって帰るか、だよなあ。

パンをちぎって口に押し込み、すみからすみまですすり満腹になった後、俺は立村に確認した。。

「今夜、お前の親帰ってこないのか？」

「はい」

「明日、お前、この状態で朝起きる自信あるか？」

「たぶん」

「ねえだろどうせ。入学早々遅刻で違反切符切られたくねえだろ。俺が起こしてやるよ」

口がぽっかり開いていった。無言で見返して、立村は答えた。

「俺の部屋でいいですか」

女ならともかく、なんで。

まあ立村に興味を持っていたのは確かだ。

最初の評議委員会で、

「一年D組、立村上総です」

と名乗った時から、なんとなく浮いた感じを覚えていた。他の連中と比べると……なにせ他の一年坊主ときたら「巫女ちゃんになりたい！」を合唱する連中だ……際立っていた。

見かけがはっきり男だとわからない顔立ちっていうのもあっただろうし、制服がだぼついていて、今にもすっ転びそうにあぶなっかしいところがあったからかもしれない。

結城先輩にも即座に

「一Dの評議の奴なんですけど、なんか変わってませんかねえ」

と意見を求め、

「今までいないタイプだな」

と同意も得た。

続けて、

「ほんさと、ああいうタイプを「弟」にしたかっただろ？」

と言われた瞬間、俺の中で何かが繋がった。

そう。弟だよ。

結城さん、やっぱりあんた、ただのアイドルミーハーじゃねえよな。俺を拾い上げただけならともかく、よくもまあ。あんた絶対将来、いい実業家になれますぜ。

結城先輩のおとっつあんが芸能関係の仕事をしていて、やたら羽振りがいいのは知っている。どういう芸能関係かは教えてもらえない。俗にいう「めかけの子ども」ということで……結城先輩の言葉を引用……、「本家には頭が上がらないが、その代わり子どもひとりなので、思う存分やりたいことをやらせてもらえるんだ」とも。はたして「日本少女宮」の追っかけをすることが本当にやりたいことだったのかは俺もわからない。ただ、青大附属に入学した際、そのおとっつあんから言われた言葉が強烈だったという。

「中学から大学まで、とことんお前の好きなことをやれ。その代わり、卒業したら徹底して俺の下働きだ！」

などと豪語したと言う。

おとっつあんで、芸能プロダクションやってるのかよ。もしかして、結城さん、未来の大社長？ そりゃあな、やることが違うぜ。

立村は俺が食い散らかした後を片付けた後、風呂場を指差した。

「シャワーあびますか」

——お前、これって、はっきり言って。

「父用の、着替えがあります」

——女のうちに泊っても、こんなことされたことねえよ。

尋ねる間もなく、俺は風呂場に案内され、封を切っていない黒い無地のトランクスを渡された。お前ほんとに俺と一年年下か？いや、お前、本当に男かよ？ つっこみたいのを耐えながら、俺は制服を脱いだ。

シャワーを風呂場で浴びて……こりゃあ「バスルーム」だな……制服に着替えて戻ると、やっぱり正座したまま立村が居間にいた。テレビをつけるでもなく、一通り着替えらしきものを持って、ぼんやりとしている様子だ。

「なんか悪いな」

「いいえ」

小さな声で、また俺の顔を見つめるようにして答えた。改めて見下ろす。まだまだ小学生体型だ。他の一年連中と並べてみるとそれほどとも思わなかったのだが、背中にゴムの木ややつでの植木を置いた中、座り込んだ。野郎版「親指姫」を見せられているような気がしてならない。

「よかったら、部屋に入ってください」

脇の着替えとタオルを抱え直し、立ち上がった。俺としては別にソファで寝させてもらうだけで十分だったのだが、いろいろまずいのだろう。言われた通りに従った。

天井のライトがどっかのラブホテルみたいに淡くかすんでいた。廊下は長く、左に曲がり、最奥のドアを開けた。廊下の幅もまさにホテルなみ。人の家というよりも、一発目的のためのご休憩コースって感じだった。

灯りがついたとたん、足がふらついた。眩暈がした。

広い、広すぎる。

これじゃあ下手したら俺の部屋の五倍はあるんでないか？

十畳くらいだろうか。天井からはやはり古びたシャンデリア、端にはベットと白い洋服ダンスの作りつけられた奴が並んでいる。本能的にたんすの中を開けてみたい衝動に駆られた。なんか秘密の通路でもあるんでなかろうか、と昔読んだ児童文学の内容を思い出した。

「うちの父ので、やはり手付かずのものがあるからよかったら、使ってください。ベット、使ってもらっていいです」

「いいですって、じゃあお前どこで寝るんだよ？」

「俺はどこでも寝られるから」

「ちょっと待った、あのな立村」

こいつは正真正銘、自分を俺のペットにしたくてならないようなことを言い出す。

「俺が今夜、なぜお前のうちに泊ろうと思ったか、何度も言うがな。お前と話をしたいからな

んだ。でも今の段階じゃあ、全然だろ。食いは食わせてもらったしシャワーも浴びたし、いた
競りつくせりなのはすげえと思う。でも、俺はまだ」

一呼吸置いて、

「立村、お前がどういう奴なのかがわからねえよ。お前だって俺のことがわからないだろ？ ど
うせ学校に行っちゃったらもう、こういう感じでしゃべることも難しいだろうし、だからだ」

わかってるのかわかってないのかわからない顔をしている。たぶん、わかってないのだろう。

「じゃあ、電話だけ、借りていいか？ 俺のうちとあと、結城委員長のところにかけるからな」

「はい。市外局番いらなです」

「んなことわかってるって」

一礼して、立村は部屋を出て行った。俺の言いたいことがちゃんと伝わってればいいんだが
。ベットにまずごろんと横たわり、一気に身を起こした。

真っ正面に並ぶステレオデッキと、対になったどでかい本棚。

どんな本読んでるんだか、漫画ないのか、と棚を眺めた。

こいつ、こんなのしかないのかよ。

ふつう野郎連中の部屋だと、昔お世話になった超合金のロボット残骸とか、サッカーボール
とか、バットとか、とにかく身体を動かして遊んだものが転がっているはずだ。異常なほどきれ
いな部屋だというのも異様だったが、親が掃除していると思えばそうでもない。しかし、なん
でだ。一切おもちゃらしきものが残っていないのは。俺が野郎四人兄弟だったから特別ってわけ
でもないだろう。

けどこいつ、漫画持ってねえのかよ。

「世界文学全集」「日本文学全集」その他、お高そうなクラシックレコードや美術書、歌舞伎
や舞踊、茶道、などなど嫁さん育成講座のような本、そういうのは大量に並んでいる。百科事
典だって底にずらりだ。しかしだ。児童書といえるものもなければ、当然コミックもない。もち
ろん色っぽい写真集などで混じっているわけがない。

やはり泊りこんで正解だった。

今夜、じっくり聞き出そう。

うちに電話するのは後回しでかまわない。兄貴どもには怒鳴られるだろうがそんなの慣れだ。
評議委員会の関係でと言い訳しとけばいい。モットーとして俺はまるまる一泊女の所に泊るよう
なまねはしない。男連中とだべる時ぐらいのもんだ。

「結城先輩っすか」

自宅にかけて、呼び出してもらった。まだ部屋に直接電話は備え付けられていない。だからト
ランシーバーを使用してるのだ。すぐに代わってもらえた。

「おお、ほんさと、お前どこいる？」

「立村のうちに、なんか流れで泊りこむことになっちゃったんですよ」

かいつまんでここまでの事情を説明した。さすがに部屋の中が一種の高級ラブホテルっぽいとかシャンデリアとか、やたらとかいがいしく接待してくれる奴とか、そういう話はしなかった。

「ほお、じゃあ立村の具合は悪くないのか」

「吐くだけ吐いてたみたいだし、今風呂に入ってるるとこみると、大丈夫じゃないっすか」

まさにぶっ倒れる寸前の状態だった立村が、家に入ったとたん、こまごまとしたことを片付けるわ俺に食事を用意するわなんてこと、まず想像してないだろう。本当に酔っ払っていたらできることじゃない。てっきり居間で雑魚寝する程度だと心積もりしていたんだが、あいつには「先輩を家に泊めるイコール徹底した接待」こそ本当のものらしい。

「詳しくは学校で話しますよ。ネタになりそうなことはあるんで」

「しかしなあ、ほんさとも、すぐに願いが叶うとは思わなかったよなあ」

話によると他の一年たちがまだ部屋に泊りこんでいるんだそうだ。

相当嬉しかったらしい。ちなみに奴らの親にはどう言い訳するんだ？

「俺はそっちの趣味はないっすよ」

結城先輩、この人は怖い。

「お前、ずっと言ってただろ、弟がほしかったって。ガキのころから弟がほしくてならなくてってな」

「俺の性格で、四人兄弟の末っ子っていうのはかなりしんどいですからねえ」

「まあな。でもこれで念願がかないそうだろう？」

軽く交わして、俺は受話器を置いた。

家には、やはりかけないことにした。

上に兄が三人いるという環境は俺にとってむかつくことこの上ない。もともと俺は頭を押さえられるのが嫌いだ。この性格で小学校時代からさんざんえれえ目に遭ってきた。成績・スポーツ万能で、いかにも男っぽい顔だというのが受けたらしく幸い、いじめられることはなかった。大人からすると「リーダーシップの取れる優等生」だったんだろう。日本から離れる予定の親を説得して、青大附中を受験させてもらえたってのも俺の被ってきた仮面にある。

親、兄弟の前では単なる「最低扱いの末っ子」のままなんだが。そんなところを第三者に見せたらどうなる？ 弱みは簡単に見せられない。とにかく俺は必要なものをすべて手に入れてきた。成績、ルックス、運動神経、リーダーシップ、それと、女。

——とにかく、俺の後ろをついてあるく、俺のことを「里希兄ちゃん」ってくっついてくる、俺の言うことを真面目に聞いてくれる、そんな弟がほしかったんですよ。俺は。妹じゃない。女の年下なんていない。俺についてこようとする、そんな弟がガキの頃からほしかったんですよ。

——弟なんてこにくたらしいだけだぞ。

——俺みたいな奴が弟やってたらそうなりますわな。

結城先輩は偉い。一年前の春、俺とさしで飲んだ時にすぐ、「格下扱い」されたとたん逃げられると読んだんだろう。三年連中と同じに評議委員会で持ち上げてくれた。もちろん他の同期連

中も面白くなかっただろうが、その辺も考えてくれて、やはりアイドルポスターの部屋で「手打ち式」なることをやってくれた。今の二年たちが俺を「やっぱり本条お前はすげえよ」と言ってくれるのは、結城先輩が間に入れてくれたからに違いない。

——弟か。

ほしくてならなかったものが、今、手の届きそうなところにある。

俺は立村の部屋に戻り、ベットに寝そべった。世界文学全集の間に、いわゆるエロティックな描写で騒がれたらしい「チャトレイ夫人の恋人」なんぞも並んでいる。

なあんだ、こいつもそれなりに色気づいてるんじゃないか。

4

しばらく居眠りしていた。天井のシャンデリアが目に入り、俺は他人のうちに泊りこんでいることに気が付いた。夢の中で俺は、いつもなら下のベットで寝ている三番目の兄を怒鳴りまくっていた。当然、埃臭い野郎部屋の匂いのはずだった。やたらと石鹼臭い。こいつの布団からは脂臭さが全く感じられない。

——立村、あれ？ いないのか？

首だけ下に落とすように、俺は広い部屋の中を隅々まで見回した。ここにもいない、あそこにもいない、四回首を回して首がひっぱられた感じになった時、脳天あたりで寝息らしいものが聞こえた。ずるずると、掛け布団をずらしながら上がって見下ろす。

まさかとは思ったがまさかだった。膝を抱えて、チューリップの中の親指姫もしくはおわんの中の一寸法師のごとく。膝抱えてこっくりこっくりしているじゃないか。

時計を見上げる。本棚の上、さび色の赤い置時計。

——十一時、かよ。

俺がここに転がり込んだのが、だいたい六時か七時過ぎ。食わせてもらってシャワー浴びたのだった。一時間も経っていないはずだ。結城先輩に電話をかけたのだった。たかがしれている。

——三時間くらい寝てたのかよ、俺ってば。

今度はちゃんとベットの上、枕を尻にしいてあらためてもう一度見落とす。

全く動く気配なしだ。胎児、そのもんだ。口に紐くっつけていれば、それもんだ。

「おい、立村。こんなところで寝てるなよ」

全く動かなかった。大抵どんなに深く寝入っていても、「う、ううん」とか言ったり、ねぼけた風に身体を動かしたりするもんだが。

「俺に気つかわんでもいいのに。どうせ俺はその辺で転がってればいいんだからさ」

足下には、わざわざ紺色の長袖パジャマが用意されている。たぶん持ってきてくれたんだろう。俺の女連中もそこまでしてくれる奴はいない。

着替えるかどうしようか。

迷ったが、トランクスだけ新品であとは臭いっていうのもなんなので、ありがたく頂戴した。カーテンは閉まっている。準備はそれなりにしてくれたんだろう。

しかしそこまで締め切って、何を？

朝帰りばればれにならないように、置いてあったえもんかけにブレザー、ズボン、ワイシャツ、ネクタイをひっかけ、あらためて立村の近くに寄ってみた。

前髪と膝が密接しているので、顔がうかがえない。泣きつかれて眠っているようにも見えるし、寒さにふるえている昔話の孤児風にも見える。髪は完璧に乾いている。女だったらこういうところをそっと抱き上げるか、まあ、その、ちょっと、したりとか、できるんだが、野郎相手ではどうだろう。

いや、結城先輩とだったら話は別だ。

立村以外だったら簡単なんだ。

すぐに蹴飛ばして「おい起きろよ、ほら、こっちに寝てろ！ 俺はその辺でタオルケットもらえればそれでいいぜ」

と言い放せるんだが。

立村にはそうできない。シャンデリアの光りで揺らぐ自分の影。俺は黙ってしゃがみこんだ。そのまま、すぐ立てるように親指に力をこめた。一息置いてから、立村の膝裏と背中を持ち上げるようにして抱えた。男だからもっと重たいと思っていたが、んなことない。女よりも軽かった。

こいつ、大丈夫か。本当に起きねえよ。

時計の音だけが耳に響いた。俺は、ベットの上に立村の全身を横たえた後、足下に座りなおした。あらためて眺めると、水色のパジャマがかなりだぼだぼで、見た目以上に全身針金人間だっということがよくわかった。目は閉じたまま。顔の前で上下左右してみたが、気配はなかった。

こいつが女だったらいくらでもやり方あるんだけどなあ。

胸から腰、膝にかざし手をするように動かしてみた。所々触れてみる。胸も膨らんでない、それなりについている。やっぱりこいつは男だ。

どうすればいいんだか。

周りからは「青大附中開闢以来の女ったらし」と言われている俺だが、ばかっちゃいけない。単に初体験が早くて、もうひとり付き合いたい子がいた、それだけのことじゃないか。体力的にもそれ以上はもたないし、それに。

——ふたり、だけだったの。

そりゃあ、黙っていても俺の方に告白めいたことをしてくる女子はいないわけじゃない。覚悟しているんだろう。すぐに触られるんじゃないとか緊張しまくっている子もいる。女ったらしってというのは、そういう子を食いまくることだろう。悪いが俺はそういう不経済なことをしたいと思わない。

俺は女を選んでる。

ただ誰も信じてくれないのでそのまんまにしているだけだ。

いろいろそっちの方が都合もいい。すっきりする。

なんで二股かけるはめになったのか、よりによって小学六年であーはーという経験をしまったのか。俺だって運命の神様に詳しく説明してもらいたいもんだ。なりゆきといえばなりゆきだ。俺の本能と、背中に背負ったさまざまな事情、あとは相手とのいろいろな問題。人間関係いろいろあるもんだ。

初体験させてもらった子と、もうひとりこれまた運命的出会いで俺の方から付き合いを申し込んだ相手の二股で、相手もお互い分かっている。もちろん顔を合わせたことはない。どっちとも別れるつもりはない。三角関係のいざこざはクラスの連中もかなり抱えているみたいだが、今のところ評議委員会の仕事に支障をきたすようなことは起こしていない。

——なんだ、俺の方がずっとマジじゃないかよ。

まあ、立村が女だとしたら、俺が何をするかは決まっているわけだ。寝てようが何しようが本能のまま、触る触る触る。もむもむもむ。しかし、あったかいまま硬直しているのは立村だ。やっぱりこいつは男なのだ。俺は完全な、ノーマルな、はずなのだ。

そうだ。男なんかを触って嬉しくなる人間ではないはずなんだ。

——里理みたいに。

年子の兄が思い浮かんだ。いつもなら俺の下のベットで寝ているあいつだ。三年前から俺はあいつを「兄貴」と素直に言えなくなった。。

——正真正銘、そうに決まってる。俺が女とやれることが、その証明じゃねえかよ。

俺はシャンデリアの紐を引いて、ライトを三つだけ残した。橙色の光が天井にちょこっと浮かんでいた。ホテルだと相手によっては身体を丸ごと見られるのが嫌だという子もいるんで、こんな風にすることもある。もっとも細かいとこが見えないと俺の方が困るのだが。

こんなことしたって、反応しねえよな。

いったん離れた手をもう一度かがんで差し伸べてみた。ぬいぐるみを抱かせてみたい雰囲気、立村は手をほおの側に重ねるようにして、横に向いて眠っていた。膝は軽く曲げるようにしていた。姿勢はいい。肩に手をやり、温みを感じる。死んでない。背中にも。ベットからおちるか落ちないかの距離で、俺は自分の身を横たえた。反応はない。大丈夫だ。絶対に、女に対してのと同じ反応はしない。

——俺は、里理とは違うんだ。

腰の方まで、髪の毛を撫でつける延長上で手を伸ばしたとたん、びくんと震えが背骨にきた。手を離す。目を覚ましたのかと思う。しかし、目は閉じたまま、唇だけがかすかに動いていた。あごをあげるように軽くえびぞりするようなしぐさをした後、弾みをつけて。

——おい、立村、おまえ。

けど、俺が受け止めているのはこいつの頭であり、両腕の中にあるのは立村の上半身全部だった。

——こいつ、猫だ、犬だ。それだけだ。

別のところから出てくる「ペット」の概念。俺はそれにつかまった。握り締めるように、胸にかじりついてくるものを抱きしめた。目はまだ閉じられたままだった。

本能はやっぱり「俺は正真正銘の男だ！」と主張しているわけであり、俺はただぼんやりと腕の中の「猫か犬」を抱っこするだけだった。

——まさか、こんなところで。

時計の針がそれほど動いているわけでもないのに、汗がにじんできたみたいだ。そりゃそうだ。男同士で抱き合っていて、なんもしないでただ体温を上げあっているだけなんだから。

——しかし、こいつ今何夢見てるんだろ。

俺はできるかぎり息を止めて、立村の髪に手を置いてみた。生きている。暖かい。

——こんなこと、里理、したいのかよ。

吐き捨てたくなる言葉をつぶやく。

三年前、というと小学校六年。か。十二歳になったばかりだから俺もガキだった。まだ親が日本にいたからあまり馬鹿はできなかったけれども、それなりのことはしていた。開いたまんまのマンホールに石を投げ込んだり、隣の小学校の連中と殴り合いやったり、まあいろいろだ。事後は大抵、一番上の兄貴、里司（さとし）に頭をがっとなぐられればこぼこに殴られる。俺も俺で要領悪く反抗していたわけだ。

今なら違う。建前上頭を下げて、裏をかく。教えてくれてありがと、結城の旦那。

頭が働くくせに悪ガキ扱いされてきた俺が、決して女子……今なら「女」って呼び捨てにするなあ……に関心あるそぶりを見せなかったのにはわけがある。頭がいい奴なら、話のわかる奴なら男女関係なく友だちでいたいと素直に俺は思っていたんだが、当時のクラスはとんでもない女ばかりだった。ひとつ上の兄貴、里理を「おかまやろう」などとさんざんなぶりやがった。

六年の夏休み前までは、里理もふつうの「男」だった。

俺からみたら、やたらとなよなよしているところとか、女子とばかりくっついているところとか、オバケ屋敷に一人でいけないところとか（大抵俺が付き合わされる）、言われてみればそういうところもないわけではなかった。

でも、風呂に入るのも一緒、部屋も一緒、当然奴の「男」の証もうっとおしいくらい見ている。どこがおかまだってんだ。

でも、そうだったんだよな。

俺にとってはありゃ裏切りだ。

「里理のことをおかま扱いするんじゃないか！」と怒鳴りまくっていた俺が言葉を失ったのは、里理の部屋から野郎専用のエロ雑誌を見つけた時からだった。

怖気立つ。題名なんて覚えてない。

奴も中学に入って色気づいたとは思っていた。俺も関心あったからたまには貸せよ、ってことで何気なくベットの下を探った。大抵定番としてエロ本は、隠すとしたらそこだろう。まあ俺と里理しか使っていない部屋だし、兄貴たちにはばれても問題ないのだが、人前には見せられないだ

ろう。

一冊二冊だったら、冗談だと思えただろう。もっというならお笑い雑誌だったらよかったのだから。逃げ道が見つかったら。

二十冊くらい隠れていた本は、「男しか愛せない男の苦しみ」「男同士のあれこれそれ」などなど、里理のくそまじめな性格を現すものばかりだった。

もちろんすぐ、知らん顔して通した。俺だって人の秘密を見つけてばらしたくなるような奴じゃない。そうしちまったらもっと楽だっただろう。上の兄貴二人に

「里理さあ、男同士でスケベなことしてる本どっさり隠してるんだぜ。すっげー悪趣味」とか笑い飛ばしてしまえたら。

里理が気づかないわけがない。六年の七月以来、俺があいつにしゃべりかけなくなったことあたりから、そう思っているはずだ。そりゃそうだろう。クラスの女子どもに里理のことを罵られた時、俺は黙って鉄拳を食らわせた。今までは「んなわけないだろ」と怒鳴るだけだったが、手が出た。

あんな奴でも、ホモでも、あいつは兄貴なんだ。

なっさけねえことだが、俺は里理が兄貴三人の中で一番楽な相手だ。双子みたいな扱いだっただこともあるだろう。ベットの本事件で俺も、里理に対してどう接して言いか分からなくなったけれど、やっぱりこいつには頼ってしまいたくなる何かがある。いろいろ、あるんだ。

三年間、兄貴もうすうすは気づいているだろう。里理の隠している嗜好のことを。ついでに俺がすでに、ふたりの彼女もちだっただけのこと。ばれた時にはさすがにまた殴られたが、ちゃんとコンドームの使い方を教えてもらったりもしたので、まあちゃんちゃんってとこだ。

俺がなんでさっさと筆卸ししまったか。一生言う気もない。

——俺は、男だ。里理とは違う。

——だから。

「くる……な」

不意に闇へ生の息が混じった。声だ。

「立村？」

背骨が震える気配あり。俺はあわてて髪から手を外し、「きょうつけ！」の姿勢を寝たまま取った。

「くるなよ……くるなってば」

膝を丸め、「猫か犬」の立村は背中をベットにこすりつけるようにしている。つぶやくのだけ聞こえる。鼻から抜けたような、寝言だ。

——こいつ、起きるのか？

——どうするんだよ、俺。

急いで言い訳を考えた。こいつをなんで俺がだっこしてなくちゃいけなかったのか。まさか、膝抱えているところにふらふらしてとか、いきなり妄想にふけってしまってとか言えるわけがない。俺は断じて女以外でまあ、そのああ、なることはない。それは断言してやる。しかし、誤解を招いてもしかたないだろう。いつか里理の本で見た、野郎どうしでぶちゅーしている姿と、今の俺と立村とが、あんまりにも似ているのが情けねえ。

——俺から好んで、こうしてるわけじゃねえんだ。立村だろ、いきなり俺の腕に顔うずめてきたのは。自転車から落っこちて泣いてたときと、シュチュエーションはほとんどおんなじだったの。ああ、そっか。そうだそうだ。

嘘は方便だ。

まだ「くるな、こないで」と寝言を繰り返す立村がいる。まずはここで開き直ろうか。

俺は軽く奴の方を叩いた。

夢から呼び戻せるくらい強く。

指先なんて使わず、手のひらで。

立村はいったん、身体をこわばらせ顔を上げた。目を閉じたままだった。もう一度俺が、強めにたっぷり叩いたとたん、魚の水揚げ直後の格好で飛び起きた。かけぶとんが飛びそう。俺は覚悟きめて、横たわったままでいた。

「ほんじょう、せん、ばい」

「お前なんの夢見てたんだよ」

俺もベットから起きるいいわけができた。もろに犬猫まるだしで、立村はぺたりと両手を前についた。目を袖口でぬぐっているのは、涙かなにかついてないか慌てたからだろう。首をぶるぶる振るわせた後、俺の方をゆっくりと向いた。

「あ、あの、すみません！」

「何も謝るこたあねえよ。それよかどうした。さっきからひでえ寝言言ってたぜ」

起きなくちゃあまずいだろう。身を起こして、用意した言い訳を並べてやった。

「さっき俺が目を覚ましたらな、立村、お前が地べたでころがっててな。やっぱり客としては気を使うっていうか」

「すみません、本当に、ごめんなさい！」

「別にそんなの気にしてねえよ。だから俺がここまで運んで寝させたんだ。俺はこの辺で横になってな」

大うそつき。床を指差した。青いじゅうたんが敷き詰められているが、結構ふかふかしている。ひっくり返っても寝られない堅さじゃない。

「そしたらさ、いきなりお前寝言言い出すじゃあねえか。『くるな、くるな』って。何にうなされてたかわからねえけどさ、ちょっと気になって様子を見てた。そうしたらいきなり」

俺って詐欺師になれるかも、だ。

「お前の方から俺にしがみついてきたんだよ。何と間違えてたのか分からんけど。ベットからずり落ちそう。それで」

「やっぱり、そうでしたか。すみません」

もう顔を上げようとしな。立村は完全に土下座の態勢で俺を見上げ、深々と頭を下げた。時代劇のお奉行様に悪人どもが「ははあ」とやる、あれそのもんだ。

——嘘だなんて思っていないのか？

——やっぱり、って、こいつ。

罪悪感はある。大有りだ。

俺だって、いい奴でいたいんだ。

「本条先輩、すみません。いつも寝ていると何するかわからないって、言われてるから、すみません。本当に覚えてません」

声が震えている。身体もたぶんがたがたしているだろう。嗚呼こいつが女だったら最高のシチュエーションなのにと思いつつ。

「たいしたことじゃねえよ。それよりなあ。さっきから気になってたんだが、お前、やたらと何か怖がってないか？」

「なにか、って」

まずい時は話を逸らすだけ逸らしまくる。これも俺が結城先輩からマスターした技だ。とことん使ってやる。

「結城委員長のうちでもそうだし、ほら自転車でひっくり返った時も、そして今もそうだ。なんか、お前、かなりがまんしてるんじゃないのかって、思えてさ」

これは嘘じゃない。

「一言で聞くとだ、お前、どうして人の目見ないで話すんだ？」

えさを見せられて顔を上げた犬や猫、こういう格好をするんだろう。きっと。立村はまさにそれだった。ルアーを見つけた魚のような目をしやがった。一応俺は釣りも趣味だ。俺が口走った言葉は、時間稼ぎのつもりだったけれども、あいつは本当のことだと思い込んだみたいだった。

「すみません。ど、どうしても」

「責めてるんじゃないよ。安心しろ」

俺はゆっくりと、言葉のルアーを本物のエビとかミミズとかのえさに変えてみた。

「俺はお前みたいな奴、なかなか好きなタイプなんだ。だから、俺にはびびってほしくねえなあとか、思っただけなんだ」

食いつくか、食いつかないか。

「誤解するなよ。俺はそっちの趣味なんかねえからな。女は十分間に合ってるしな」

泣くんじゃないかと思っていた。

部活の試合で負けたから泣くとかそういう乗りではない。叢の中で俺に抱きついてきたように、涙をこらえている状態なのかもしれないとも思った。俺がもし、本気でこいつを追い詰めようとしたら、こんなきれいな言葉は使っていない。

「隠してやばいことしてるんだな。青大附属に入学したばかりでいきなり退学処分なんか受けたくないわなあ。あとでばれるよりも、ここで俺と取引したらどうだ？おい」

とでも言っているだろう。

「すみません」

いったん顔を上げたものの、目と目を合わせるのがしんどくなったのだろう。立村はもう一度うつむき、からっぽになったペットフードの皿を未練がましく見つめる、犬の顔をした。

待てない性格ではないが、さっさと知りたい。あてずっぽうだが俺の勘は良く当たる。

「お前、自転車になにかトラウマとかあんの？」

答えない。一発目は食いついても来ない。

「何が襲ってきたふうに見えた？ お前の知らない奴か？」

どうせ幻だ。本当のことを答えろよとつっこみたい。奴は首を振るしぐさをした。白い壁にでかい影が揺れた。

「やっぱ、知ってる奴か。近づかれたら、やばい奴だったのか？」

答えない。だんだん俺のペースに近づいてきた。釣りざおに手ごたえあり。一気に引き上げた

。

「お前さ、逃げようとしたんだな。で、ハンドル切り損ねて落っこちたと」

「違います！ 消えたからただ」

歯を食いしばっているのだろう。俺の直感はやっぱり冴えている。十中八苦、当たっているだろう。でなければ立村がうつむいたまま動かないなんてことはないだろう。俺に「違います」と言い換えそうとしながら、ちゃんと本当の答えを返してくれたところなんて、単純明快、そのもんだ。

「消えた、か。消えたならもう大丈夫じゃねえか。何まだうなされてるんだよ。お前が寝ている間、おびえようは尋常なもんじゃなかったぜ。なんせ俺に抱きついてくるくらいなんだからなあ」

「すみません、申しわけありません」

「だからあやまるなつての。そんなびくびくしている原因があるんなら、さっさと解明しちまって、すっきりした方がいいんでないかと、まあ俺なりに思ったわけだ」

肝心要のところにはたどり着けなかった。

立村はうつむいたままずっと「すみません、ごめんなさい」を連発するのみだった。思い当たる節はあるのだろうし、まだ幻の自転車が怖くてならなかったのだろう。俺に抱きついたことまでは覚えていないにせよ、かなり精神的にいっちゃっていたことは確実だ。酒の見せた悪夢と思えばそれでもいいんだろうが、立村にはそれが背後霊のようにくっついてるんじゃないか、そんな気もした。

——もしこいつが俺の弟だとしたら。

——里理だとしたら。

いつもあいつ……里理が俺に対してすることを、試してみようと決めた。少しだけ気を長く持ってみよう。

「わあ。立村、お前まだ酒が抜けてねえな。俺はこの辺で寝るから、お前はちゃんとあつたかくして寝てろ」

「それはいけません。本条先輩こそ、どうぞこちらに」

慌てて今度はベットからすべりおりようとする立村。制して俺はベットの端を叩いた。

「どうしてもっていうんだったら、俺もお前のところにもぐりこませてもらっていいか。なあに、また夢で何かしたら、たっぷり抱きしめてやるって。お前のバージンを奪ったりしねえって」

慌てるかと思ったが、立村は頷いた。

「うちにお客さん用の布団ありますけど、本当にいいですか」

「いいって。もう朝までそんな時間ねえんだから」

返事を待たず、俺は立村のベットにもぐりこんだ。背中を向けた。おずおずと別の温もりが隣りに入ってくる気配がした。ベットの広さは野郎二人が寝るにかなりきつかったが、気を遣ってくれたのか立村が壁にぴったりと張り付いているので、寝相を極端に悪くしなければ……立村にも関連することだが……問題はなさそうだ。

「すみません。目覚ましは朝五時半にかけておきました」

一言だけ残し、隣りではくうっと聞こえる寝息のみになった。俺もしばらく、立村からもらったいくつかのヒントを、頭の中でこねくりまわしていたが、段々面倒くさくなり目を閉じた。無理しても寝なくちゃなんない。なんせ、こいつ朝五時半に起きれっていうんだぜ！ラジオ体操にでも行くのかよ！

カーテン越しの朝日は、いつもうちで見る限りまぶしいもんだ。しかし、早朝五時目を覚ましたとたん鶏が時の声を上げるっていうのは、何か違うんじゃないだろうか。腕をのびのび伸ばしたまま目を覚ましたら、立村の姿はなく、俺ひとりで大股広げていたってわけだ。まだ目覚ましは鳴っていない。時刻的には寝てて全く問題ないだろうが、他人様のうちでひっくりがえっているのも気が引ける。

——まあいいや、目覚まし鳴ってから起きればいいや。客なんだ、客。

俺はもう一度目を閉じた。

気が付いたらまだ、シャンデリアの補助灯がみっつ、まだつきっぱなしだった。

四時間くらい前、立村が口走った言葉と俺の推理を組み合わせると。

相手が瞬時に消えたということなので、酒が見せた幻じゃねえか。また酔っ払ってふらふらの状態なのだからこけてしまうのも考えられないわけではない。しかしだ。

あそこまでおびえるもんだろうか。

心霊現象にめちゃくちゃ弱いならともかく、知り合いの相手が襲ってきたならともかく。

寝言まで言うくらい神経に響くもんだろうか。

後ろめたいことがあるならばまだしもだが。どうも俺の勘だと、立村の奴はひたすら恐ろしい記憶を消したくてならなくて、追いかけている、そんな気がする。問題ないことだったら、素直にしゃべっちゃえばいいんだ。俺にあそこまで懐きまくっているんだから。それとも俺が、人の秘密を簡単にぺらぺらしゃべる奴だと勘違いしているんだろうか。

わからん。わかるようで、わからん。

ドアが静かに開いた。モーニングサービスよろしく籠にクロワッサンを山盛り、オレンジジュースのびん、グラスを対で運んできた。すでに立村は制服に着替えている。だいたい五時半になるかならないかって頃だ。学習机の上に音を立てず載せ、椅子に座り食べ始めた。全部食べるつもりらしい。

目覚ましは鳴った。ちりん、ちりん、と鈴の音がいつのまにか金物をぶったたくうざったい音に、最後はがんと響く頭の痛いものに代わっていく。音色がクレスシェンドするというタイプの時計だろう。立村は止めようとしなない。「起きろ」ってことだろう。

——じゃあねえなあ。

両手を布団の外に突き上げた。海でぷかぷか浮かんでいる時のポーズだ。両足も浮かせ、尻を支点にして。横からみたらV字型だ。

「あ、ああ、良く寝たぜ」

大うそつき。詐欺師になれる。

「おはようございます。本条先輩」

泣きべそかいていたところなんて全く残っていない。ちぎっていたパンを備え付けの皿に置いたまま立ち上がった。

「お前ってこんなに早くいつも起きてたのか？」

「はい。朝七時に出ないと間に合わないから」

「そんなに遠くねえだろ？　ここ」

こいつを送ってきた時に、あのサイクリングロードを通過して思ったのだが、もう少しゆっくりめに出発しても問題なさそうな気がする。確かに遠い。でもサイクリングロードを真っ直ぐこいでいけば、余裕を持って七時十五分。根性入れれば七時四十五分に出発しても八時半ぎりぎりに飛び込めそうだ。

——ちょっと早すぎるよなあ。

第一、早く着きすぎたら学校、開いてないぞ。

「昨日通った道だと、結城先輩の家に寄って珈琲ご馳走になってからでも間に合うぜ」

「別の道通るから」

早口に答え、目をふらつかせると立村は、

「あの、先輩の分の食べるもの、ありますから持ってきます。パンを温めます」

返事したくないのだろう。俺の目を見ずに出て行った。

——やっぱりな。

朝の光は脳を活性化させるとかなんとか聞いたことがある。まさにその通り。本条里希は名探偵にもなれるってわけだ。

たぶん、俺がもっと露骨に「おい、白状しろよ。ほんとはあの道を通りたくないわけがあるんだろ？　言えよ、おい」と迫れば、立村も後輩として口を割るだろう。そのくらいのことなら俺もいつだってすることだ。でも、朝五時の目覚めで得た俺の英知では、やっぱり「まずい」と答えが出ている。

——あのままじゃあ、おびえてしまうだけだろ。

冗談で済ませられる雰囲気ではない。一度間違った突っ込みをしてしまったら逃げられる。あいつの扱い方は、基本として犬と猫のような「ペット」と同じにせねばなるまい。うまくなだめてせめて、懐かせてやること。

——里理のやり方だよな。

——まずは腹ごしらえだな。

やっぱり着替えないとまずいだろうってことで、えもんかけにぶら下げておいたワイシャツ、ズボン、ネクタイを全部身に付けた。しわなし汚れなし、朝帰りはめずらしくない。丁度ズボンをはいているところで立村が戻ってきた。同じくお盆にはスクランブルエッグにトマト、レタスの付け合せ。同じクロワッサンだがちゃんと熱い匂いがしている。腹の虫が鳴いた。

「ひゃあ、うまそうだなあ」

「うちにあるものだから」

俺のうちなんて兄貴たちと食べ物の争いだ。大抵うへの兄貴たちが全部平らげた後、里理があまりものを集めて俺と分け合って料理する。わびしい生活だ。ってことでいつも腹はすいているってわけだ。ひとりぶんゆったり食べられるっていうのは、しかも自分でこしらえなくてもいいっていうのは。

「ありがとよ。まずは食うか」

ベットの足元に座って、俺はフォークを握り締めかきこんだ。おとなしくパンをちぎって山盛りのクロワッサンを食べている立村から、半分奪い取った。いやがらなかった。

「あのさ、立村」

口にほおばったまま、俺の顔を見た。

「朝、七時に出るんだろ？ だったら時間があるから結城先輩のところ寄っていきこうぜ」

「でも、あの道は通らないんですが」

「お前、また化け物に襲われると思ってるのかよ？ 朝七時台にひよろひよろ出てくる奴なんていやしねえよ。それともなにか？」

クロワッサンをふたつわしづかみにして食う前に、一言つりあげた。

「立村、会いたくない奴が、いるのかよ」

まだパンひとつ食べていない。手が震えていた。

無理に白状させることもない。詳しい事情はどうせ中学生生活三年あるんだ、ゆっくり聞きだせるだろう。まずは、釣り上げた魚をすぐに放つことにした。スクランブルエッグもあったかいクロワッサンも、俺の分のジュースも、しこたまいただいた。立村はうつむいたまま、パンの粉をひとつぶひとつぶつまんで口に運んでいた。食欲ないだろう。

「二日酔いか？」

「大丈夫です」

ビールのおちょこで酔っ払うんだから、こいつは相当の下戸だ。固形物を食わない代わりに、ジュースばかり飲んでいる。

「まあ、言いたくなければな、言わねえでもいいけどな。立村。ただ、遠回りするとなるとどのくらいかかるんだ？」

「.....一時間くらいです」

貴重な朝の通学時間を、なんともったいない。

「じゃあ雨の時はどうするんだよ」

「バスで行きます」

そりゃそうだ。もうひとつ、ひっかかりのあるところをつっこんでみた。

「そういえばなあ、あのサイクリングロード真っ直ぐいくとな、本品山中学が見えるだろ。お前、もし青大附属落ちてたら、通ってた学校だろ。結構近いじゃねえか。そっちの方が楽だったんじゃないか」

答えないだろう。思った通りうつむいたところみると、俺の読みも当たっているってことだ

ろう。

「中学の通学路って感じか。あの道は」

「すみません。あの」

「通学路だったら、いやおうなしに幼なじみの過去ある連中と会うわな。けどなあ、時間的に七時くらいは公立の奴あまり出かけてないんじゃないか。俺の友だちも公立行ってるけどさ、八時二十分までに駆け込めばいいから八時過ぎになって奴がほとんどだぜ。別にお前、会いたくない奴に必ず会うってわけじゃねえだろ。時間ずらしたってさあ」

立村は立ち上がった。ジュースを全部飲み干し、俺の食い終わった皿を盆にまとめ、両手を机についた。俺の方をやはり見なかった。

「夜、俺はそんなこと、言ってましたか」

「は？」

まぬけな疑問符を発してしまっただが、すぐにぴんときた。

こいつきっと、自分がねごとで具体的地名人物名を口走ってしまったと思い込んでやがる。寝ぼけたことが相当多いんだな。

「ああ、なんかな、おびえてたぞ。小学校が、どうのこうのって」

どっちとも取れる言葉である。立村の瞳を覗き込み、じっと捕らえた。嘘か誠かは瞳を見つめれば一発だ。結城先輩の教えである。

「すみません、先輩、これ以上、すみません」

しっかとついた腕のカフスが揺れていた。

「謝るなよ。ただな」

口を手の甲でぬぐい、もう一度窓の外を眺めた。完全に玉子の黄身が混じった日の光だ。朝は白身、昼は黄身、夜になったら目玉焼きってよくいうぜ。緑っぽい山が小さく覗いている。

「部活の、朝連に出かける連中の時間帯か？ 野球部、サッカー部あたりならやりそうだな。青大附中は全くといっていいほど体育系の部活に情熱を燃やす奴がいないんだけどな。公立はそうでもないだろ。その辺の奴か？」

しゃべっているうちに俺も気分は、取り調べしている刑事に重なってきた。責めてるんでなく、かつ丼を食べさせてる時のように。

「本条先輩、どうして、そこまでわかるんですか」

かつ丼タイムだ。俺も立ち上がり、立村の両肩に手を当てた。垂直に力をいれて座らせた。素直に下がった。

「わかった。けどな、お前、ずっと遠回りするわけいかないだろ？ 評議委員会は結構、朝早く出るように言われることもあるし、当然、朝七時半にサイクリングロード通らざるを得ない時もあるだろ。たまには別の時間帯に幽霊がうろつくことだってないとはいえないだろ？ いつもいつも逃げたってしゃあねえじゃねえかよ」

首を振っている。言葉が出ないらしい。もう少し両手に、指に力をこめた。

「とにかく、今日は俺のいう通り、あそこの川沿い、通ろうな。もし、何か言われたらそんなとき

は俺も黙っちゃいけないから安心しろ。結城先輩のうちにもどっちにせよ寄らねばならないんだからな」

言葉はひかえめにした。でも語調は命令調。先輩にはさからえない青大附中評議委員会。今の俺はすべて本能に任せてしゃべっていた。天からシャーロック・ホームズかポワロかエラリー・クイーンが乗り移ったみたいだった。こいつのしなくちゃいけないこと、片付けなくてはいけないこと、みな、俺が面倒みてやらなくちゃいけないこと。こうやってすうっと見える瞬間があるもんだ。

俺に対して里理がしてくれることにはかなり似ているだろう。

——だから里理が俺の兄貴じゃなければ丸く収まったんだ。

おかまなのかホモなのかそれとも別のなにかなのかわからんが、俺にとっては相性のめっちゃくち合う里理のことを思い出した。帰ったらたぶん上の兄貴ふたりにどやされるから、なんとか里理にとりなしてもらおう。

身支度したり、全く関係のない話をしたりと、出発までの間それなりにしゃべってはいた。やはり俺の提案、というか命令に従うには抵抗があるらしく、立村の手つきはどことなくのろのろしていた。結城先輩のうちに電話をかけるのに七時過ぎの方がいいだろうということで、わざと時間を引き延ばしてやった。一刻も早くうちを出たいというのが見え見えだ。玄関で靴をやたらと並べなおしたりしている。

「まだ時間あるだろ」

「でも、早くいかないと」

「あせるな。そんなに俺が信頼できないか」

立村は黙った。俺の言うことには逆らいたくないみたいだった。

「悪いが、結城先輩のうちに電話かけるからな」

「どうぞ」

ぐっと息を飲み込みため息交じりに、答えが帰って来た。どうしたのかと見ると、向こうはしばらくしゃがみこんで、空を眺めていた。視線の先にはつぼみが赤らんだ桜の枝が、腕を伸ばしていた。品山の方は天気が違うと聞いていたけれど本当だ。もう学校では散っているのにまだ咲いていない。

「よう、ほんさと、はええなあ」

この人は毎日何時でも連絡オッケーだ。真夜中であろうがかならずつないでもらえる。

「すみません。結城のだんな。そっちのねずみたちはどうしてますか」

「おお、相変わらず部屋でチーズをかじってるぜ。あと三十分くらいで出発だ」

「そうっすか。今俺も、一匹ねずみを連れて行きますんで合流しましょうか」

「わかった。ところでどうだった？ほんさと、どうだった？」

決してこの人の言うのは、ああいう関係こう言う関係になったんでは、ということではない。野郎は野郎、女子は女子。

「まあ、それなりに楽しい一夜でしたね。その辺はまたあとでご報告します」

立村がちらっと俺を見た。にらみつけたいんだが、露骨に出来ず唇を噛んでいる。

受話器を置いた。

「じゃあいくぞ立村、自転車を準備しろ」

外は風が冷たい。ほこりっぽい匂いがしたから漂う。天井のシャンデリアと静かな部屋を眺めやり、

——またここにくるんだろな。

ふと、そんなことを思った。

「本条先輩。自転車の準備ができました」

「おうさ、じゃあお前、先頭立っていけ。いいな、あの道を通るんだぞ」

念を押した。無表情で奴は頷いた。

品山というと、うちの親たちの世代では「神隠し事件の現場」であり、ガキだった俺たちは「ひとりで遊びに行ってはいけないよ」と言い含められる場所でもあった。禁じられると行きたくないのは世の習い、度胸試しで里理を引き連れて出かけたけれども、別になんでもなかった。立派な家も立ち並んでいるし、毛がつやつやした番犬も座っていたりする。気温差が少々激しいかなという気もするので、ジャンパーは必需品だが、毎朝携帯用かさを持参すればすむことだ。親世代の偏見って意味不明だと俺は思う。

「寒くないですか」

「けっ、こんくらいで寒いようじゃあぶったおれるぜ」

俺の愛車を地下の車庫……夜は気づかなかったが、半地下形式の車庫がどーんと設置されていた……から引き出してもらい、俺はかばんをくくりつけた。持ってない教科書や地図帳はまあ、他のクラスの連中から貸してもらえばいいだろう。

立村が心持ちゆっくりとペダルに足をかけた。俺に振り返って、無表情のまま、

「いいですか」

「ああ、行けよ」

観念したんだろう。首をこっくり下げ、襟筋を見せるような格好でサドルにまたがった。俺が予想していたよりもスピードを上げてこいでいる。立ちこぎってやつだろうか。最初様子をみるかのようにきょろきょろして、舗装された道路を突っ切っていった。

「おい、もう少しスピード落としてもいいだろ」

声をかけるが届かない。何をあせってるんだか、エンジン全開で奴はペダルをこいでいる。幸い、この辺は思ったよりも勤め人が少ないらしく、出会い頭にごつつんこってことはなさそうだった。数人、学生服姿の連中が俺と立村をげげんそうに眺めていただけだ。青大附中の制服を着ていたら、一部の地区では尊敬のまなざしで見上げられることがある。その一種だろう。

「そんな焦って走らねえでもいいだろ」

「すみません」

俺も必死に濃いで、五メートル以上は引き離されないようにしようと心がけてきた。となると、いつもの三倍はペダルを踏みまくらねばならない。ギアつき自転車、こいつと遊びに行く時には必需品だな、つくづく思う。

「立村、競輪の選手にでもなるつもりか」

「なんでですか」

「ふつう、あれだけスピード上げたらぶったおれるだろ」

聞かれた意味がよくわからない、そんな顔をして立村はハンドルを見据えた。

「自転車はいつも乗っているから」

「いや、そういう問題じゃねえだろ」

横断歩道の信号が緑に変わった。歩行者用の信号だが自転車でもオッケーだ。立村はふたたび立ちこぎ姿勢に入り、すらすうらと道路沿いを突き進んでいった。さすがに車道と重なる道だと、スピードを落とさざるを得ない。なんとか俺もついていけた。

さて、問題の場所だ。さしかかった。

十字路にぶちあたり、電信柱を横切り、立村がスピードを落としたのがわかる。磁石の対極からひきよせられるように、俺も左隣に進んだ。

「覚悟はいいな」

「どうしてもいかななくてはならないですか」

右に流れるのは空の青をどんと受け止めた川だった。夕暮れではよく見えなかったけれど、川向こうには木造の民家がびっしりと立ち並んでいた。車も通勤時間帯だけあってびっしりと進んでいた。サイクリングロードのところだけが橙色に舗装されていて、見た目クッションっぽい感じだった。まじでこぐと気持ちいいだろう。景色がいまいちなのはノーコメントだが。

「ほら、行けよ」

自転車を止めた。視線の先を追う。立村が肩をこわばらせたまま、真っ正面を見つめている。

「どうしたんだよ」

大体どういうことなのか、俺にもつかめた。

そういうことだ。まだ犬ころくらいにしか見えないけれども、青い服を来た集団がたむろっているのが見える。たぶん、学校指定のジャージだろう。十人くらいが少しずつ、接近している。

腕時計を覗いた。「07:15」と、デジタル文字が浮かび上がっている。

——やっぱり、そうか。

視線がかたまったまま動かない。

「あいつら、だな」

「分かりません」

「ずっと、逃げてきてたのかよお前。そんなに、生身の奴らを見るのが怖かったのかよ」

答えないのはイエスのかわり。

俺はたたみかけた。

「何したかされたか知らねえけどな。相手から逃げまくっている間は、奴らに負いまわされるぞ

。俺がついてる。さっさと悪霊を退散させちまえ」

「先輩、先に行ってください」

かぼそい声でつぶやいた。そんな甘いことを許しちゃいけない。

「けりをつけるのはお前だろう。後ろについているから、さっさと進め！」

すでに青い軍団は顔形が特定できるくらい近づいてきている。俺たちに気づいたのか、「おい、おい」と指を指している。

「わかりました、あの、でも」

「いいか、何があっても、俺はお前の味方だ」

軽く目を閉じた立村の横顔は今にも泣き出しそうだった。とたん、真っ正面を見据え、唇を尖らせ、最後にペダルを強く踏み出した。

——おい、こいつ、まじかよ。

俺が油断したのもまずかった。あっという間に立村の自転車はずっと遠くへ進んでしまった。本気出してつっぱしっている。これは俺もエンジン全開で進まないとは追いつけない。景色が風で吹き飛ばされそうだ。

立村とすれ違った連中が、指を指している。

——立村だろ？ あの泣き虫だろ？

ささやきを耳にしたような気がする。

もう一人、離れたところで歩いているジャージ服の奴が立ち止まっているのも見かけた。サッカーボールを肩からぶら下げていた。ずっと俺たちの方を眺めていた。

ようやく追いついた。結城先輩の別宅前だった。別名「日本少女宮を崇める神殿」とも呼ぶ。だだっぴろい叢と、ちんまり並んでいる事務所風のバラックが見える。昨日はここで、へどあげて酔っ払っていたくせに、その跡はかけらもない。

立村はうつむいてサドルに顔を押し付けていた。俺もかなりしんどかったが、最長三十メートルも引き離されてしまったのだから露骨に疲れた顔はできなかった。

「お前すごいじゃねえか。自転車捌きっていつのか？　すげえスピードだったぞ」

「毎日だから、慣れてます」

息絶え絶えの中答える立村の背中をさすってやった。

小さな声で「すみません、すみません」と答えるのが妙に笑えた。

「どうだ。亡霊は襲ってこなかっただろ？」

自転車を昨日と同じ場所につけ、俺は立村に話し掛けた。まだハンドルを握ったままだ。気になって近づいてみた。指が震えたまま、解けないようだった。

こいつ、まだおびえてやがるよな。

ちょっといじめすぎたか。

俺は手首を握り締めてやり、一本一本指を離してやった。指の形にぴったりくる握り部分にこわばるように張り付いていた。

「あ、ありがとうございます」

「お前、よくやったな」

首を小さく振り、ほどけた片手を覗き込んだ。何度か握っては開きをくりかえした。むすんでひらいての要領だ。

「みんなお前を見てたな」

「青大附中に受かったのはここ三年で俺しかないから、この制服着ていたら一発でわかりますから」

「お前だと分かたらまずいのか」

この辺に、言いたくないであろう答えが隠されているらしい。時間があれば俺はもっと追及しただろう。すでに、すれ違い際のジャージ集団がささやいた言葉を拾い上げていた。

「青大附中でハッピーライフを過ごしているってこと、あいつらに証明できたじゃねえか」

「え？」

手をこわばらせたまま、立村が問い返した。

「俺みたいな友だちもいるってな。十分青大附中の青春を謳歌してるってことだろ？」

ぽかんと口を開けたままの立村。首を少しずつ、クレッシェンドの要領で振り始めた。

「あ、俺の認識は違う。俺はお前のこと、弟だと思ってるからな。いつかその辺も訂正するシチュエーション作らねばな」

ほら、ともう片っ方の手もほぐしてやり、髪を軽くかき混ぜてやった。気持ち悪いくらいきれいに撫でつけていたから、俺としては見た目バランスが取れずいらいらしていたんだ。

「じゃあ、結城先輩を連れ出すか」

ひじのところを引っつかみ、俺は「日本少女宮」のメッカ、結城先輩勉強部屋に向かった。

「ようようお待たせいたしやした。俺の弟分も連れてきました」

「立村、大変だったろう？」

いきなり俺をすっ飛ばして、立村を同情溢れるまなざしで見るとはやめろと言いたい。部屋にはすでに制服をしわくちやのまま纏った一年連中ふたりが正座して待っていた。朝の礼拝というか、「日本少女宮」テーマソングらしきものを歌い心を清めるのが、結城先輩の日課である。

「お前ら、歌わされたか？ 五月五日発売ニューシングル『私と彼とのみことのり』を」

質問してみる。にこやかにうんと頷く二人のねずみども。すっかり結城委員長の魅力にぞっこんらしい。いや、「日本少女宮」を代表とするアイドルマニアの道を突き進む覚悟ができたのか。やたら元気な奴が天羽、側で眼鏡面さらしてやるのが難波とか言ったな。

「ほんさと聞けよ。こいつらおもしろいぞ。関西系ギャグマニアに、シャーロキアン。今までになかった人材だ。あと、ほら、お前の弟分……」

「一言では言えませんな。なにせ、こいつのうちではすんげえ歓迎うけましたから。な、立村」

はにかむようにうつむいている。三人、一年同士で視線の挨拶を交わしている。「おはよう」と言えばいいのに、素直に口から出てこないらしい。

「ほら、一年坊主ども、お前らは早く学校に行っちまえ！ほらほら、ここにはこれからいやって

ほどお世話になるんだ。入り浸っているうちに、生身の女の子では感じなくなるのも時間の問題なんだからな」

素直にこくと頷き、正座したねずみ二匹は互いに顔を見合わせ、

「どうも、お世話になりました！」

と一礼した。立村にしっかり視線を合わせ、

「一緒に行こうな」

笑顔で背中を押していった。どっちが関西ギャグマニアでどっちがシャーロキアンか聞き忘れたが、なかなか得がたい人材であることは間違いなからう。あと一人、お泊りを許されなかった奴もいたらしいが、俺の見た限りトーンが違うとも思えない。

——立村を覗いては。

「ほんさと、お前はちょっと残ってる。珈琲飲め」

一年連中が自転車を置いてある叢に向かったのを、窓から確認して結城先輩は俺を手招きした。

「俺だって朝八時二十分までに到着しないと、違反切符切られまっせ」

「自転車ごと、車で運んでやる。トラックの恩恵を受けろ。なによりもまずだ」

非常にラッキーである。正直俺も、体力的に自転車をこぐのは限界だった。潜在的自転車天才走者とのお付き合いはかなりしんどいぞ。はたして一年連中ふたりは立村についていけるのだろうか。

珈琲といっても高級品ではない。ただのあっためた缶コーヒーだけだ。結城先輩はあぐらをかいて座った俺に、そのまんま缶を渡した。熱い。冷たいのを所望したかったのだが。

「結局立村とはどうだったんだ？」

「はあ、一緒のベットで寝ましたよ。女だったらそれなりの展開があったでしょうが、なにせお互いノーマルですからねえ、期待裏切って失礼しました」

怖気奮うように肩をすくめた。結城先輩にもその気はないらしい。

「でも奴の家は、部屋の中シャンデリアがあるわ、やたらと部屋が広いわで、一種ラブホテル気分になりましたわな。俺もそんなに生のホテルは行ったことないですが。食事もまあ豪勢なものいただいたし、朝も腹いっぱい食べたしで、なかなか充実した一夜ではござんした」

「で、だなあ、ほんさと」

また、「日本少女宮」等身大クッションにまたがり結城先輩は身をかがめた。

「全く、ほんさと。お前だけずるいなあ。欲しいものを全部手に入れてやがるんだ。ああ、世の中にはこういう奴もいるんだなあ」

——スケベなことができる女も、学年トップを取ることでできる頭も、それと、ほしくてならなかった弟も。

たぶんそう言いたいのだろう。結城先輩は。

一番目の「女」についてはほしくてならないものというわけではない。二番目の「頭」だって

、たまたま繋がっていただけのことだ。ただ三番目の「弟」。

「なんかそればっか言ってたからなあ。結城の旦那。とにかく俺について来い！って怒鳴ることのできる相手が、やっと目の前にぶらさがってきたって感じですか。いやあめでたい」

笑ってごまかした。結城先輩も唇を小さくゆがませて笑みをこしらえていた。何か含みのある笑いだった。

——結城さん、あんたはよーくご存知だ。

——俺が頭上がらないのは、親でも先公でも、上ふたりの兄貴でもない。

——俺の本性を見抜いた里理と、あんただけだって。

初めて結城先輩の部屋に連れこまれた時のことはよく覚えている。いつも見下されている自分がむかついてならなかった。だから、ばかにされていると思ったらいつでも受けて立っていた。

そんなことをする気なくなり、人に頭を下げて、とことんやりたいことだけに打ち込む。処世術を教えてくれたのは結城先輩だった。命令もしなければ、わざとらしい共感もしない。ただ、ノウハウをひとつずつ教えてくれた。アイドルマニアの顔の影でどうやって人の心を掴むか、どうやって味方をこさえていくか、みな実践で教えてくれた。

小学校の頃、里理が俺のしでかしたことの後始末をしてくれた時と同じやり方だった。

里理がホモかもしれないという疑惑が頭から離れない。あいつに裏切られた気持ちは消えていない。でも里理が年子の兄貴であることは戸籍上明白だし、肝心要のところでは押さえられているのだ。このふたりにはどうしても、「兄」であることを受け入れざるをえなかった。

本当は里理の兄貴でいたかったのにと、いつもほぞをかむ。

——無理なこと言ってるよなあ。

「結城さん、あのさあ、俺思うんだけど、立村ってなんか、里理に似てるって気するんですよ。ほら、ほんとのオカマかもしれないっていう俺の兄貴。立村がその手かどうかは知らないですが、人の付き合い方とか、なつき方とか、何から何まで。俺、里理を見ていてほんっといらついでたんですよ。ほらお前何とかしろ、って言いたくなるんですよ。でも奴は兄貴だから、肝心要のところでは抑えが入る。となると俺は弟として頭を下げるしかないんです」

「ふんふん」

面白そうにめがねの奥、瞳が動く。調子に乗ったふりをして俺は続けた。珈琲の酔いだろうか

。

「だから、俺としては徹底的に立村をしごいてしごいてしごきまくって、こき使いたいんですよ。里理に言いたくてならなかったこととか、そのくせ里理に押し付けられた借り、とか」

時計の針が八時を過ぎた。ほんとなら行かねばなんない時刻だが、俺は腰を上げなかった。結城先輩が動くまでは、ずっと根を張っていたかった。

——そういうのをぜーんぶ、立村にしてやりたいんですよ。俺の性格は兄貴分だから、こうい

うことでもなければたぶん、発散されないっしょ。だからですよ、俺は……。

——終——

今年は暖冬だって聞いていた。青潟のスケート場もなかなか氷が張らないとかでなかなか開園してくれなかった。やっと「青潟スケートリンク場開園のお知らせ」が学校側からプリントで配られたのは、なんと終業式の日だった。それなりの成績表とそれなりのお小言を駒方先生から頂戴した後、俺は二年A組の教室を飛び出した。

——遊ぶのはいいが、決して遊びすぎないように、節度を持つんだぞ、本条。

この「節度」という言葉にどういう意味がこめられているか、うちのクラス連中は気付いていないだろう。たぶん俺しかわからないだろう。

——節度と本能くらいは俺も十分、押さえられるっての。

口笛吹きながら俺は一年どもがあふれ出てくる一階廊下のロビーへ向かった。俺の時とは違ってもかもしれないが、大抵一年の終業式後のお説教ってのは、だらだらと長引くものなんだ。たぶん二年連中よりは、いやってほど説教されつづけていることだろう。特に担任と折り合いの悪い奴は。

約一名、折り合いの悪すぎる奴を弟分に持っている俺としては、まずじっくりと話を聞いてやる義務がある。

同時に、「矯正」する義務もある。

それが、青大附中の評議委員として、弟分を持った上級生の定めでもある。

思ったとおりだらだと、足取りも軽く一年どもがあふれ出てきた。まずはロビーから一番近い教室のA組生徒が、次にB組、C組。水がホースの隙間から噴出すような感じで飛び出した。結構俺の知り合いも多い。

「本条先輩、お先に失礼しやす！」

間違った日本語を使用して出て行く奴がひとり。一年A組の男子評議・天羽忠文だ。

「ああ、また明日な」

「まだD組ホームルーム終わってねえっすよ。まったく菱本先生熱いなあ」

ずいぶん髪の毛をパーマで膨らませている。昨日はくそまじめな髪型だったくせに、どうしたんだろうか。一瞬首をかしげたがすぐに理由へたどり着くことができた。そうだよ、昨日はどのクラスでもお楽しみ会が開かれていたはずだ。あいつ、関西芸人のギャグをこよなく愛する男だ。舞台用の変装だろう。

「お疲れさまです、本条先輩。明日、よろしくお願いします！」

黒ぶち眼鏡に前髪だけやたらと長い奴は一年B組の男子評議・難波利武だった。珍しく黒の裾長なコートを羽織っている。一礼した後、妙に気取った格好で振り返り、

「あの、来年もやっぱり時代劇なんですか」

付け加えた。言いたいことはだいたいわかるぞ。言ってやる。

「それは今の一年次第だぞ。やりたいんだろ、『シャーロック・ホームズ』を」

「もちろんです！ ちゃんとホームズコートの借り先も決まってるっし」

こくっとうなづきいきなり笑顔を見せるB組評議は、なんのことはない、ガキの頃からホームズを崇拜しきっている奴なのだ。多分来年は評議委員会のビデオ演劇で「緋色の研究」か「バスカビル家の犬」を扱いたくてなんないんだろう。台本づくり、がんばれよ、の一言だ。

「本条せんぱーい、よろしくー！」

なぜか職員玄関の方向へL字に曲がって走っていくのはC組男子評議・更科基だった。こいつが走る目的は、保健室にあり。こんなに元気いっぱい走る奴が、保健室でぶっ倒れるわけがない。掃除当番だって関係ない。となると、走りたくなってしまう情熱は、愛しかないぞ。愛。

「気をつけろよ。一步間違えると犯罪だぞ！」

「大丈夫で一す！ すでに男子評議の中では公認で一す！」

犬っころみたいにくろくろ走っていくC組評議に、俺はどうか「青大附中の養護教師と生徒との禁じられた愛」がスクープされないことを背中に祈った。まじでやばいぞ。未成年との恋愛がばれたらどうするんだ、保健室の先生よ。俺も人のこと言えた義理じゃないが。

D組男子評議・立村上総が肩を落として歩いてきたのは、それから約五分後だった。

一瞬のうちに廊下出入りピークは過ぎるもんだ。

「立村、おい、待て」

「あ、本条先輩」

丁寧に一礼した。あいつの後ろには頬を真っ赤にしながらか手袋をはめているコート姿の女子と黄色のエンブレムを左胸にくっつけたジャンパー姿の男子がいちゃいちゃしていた。目に毒だ。幸い俺には女子に対しての免疫がたっぷりついているので気にはならないが。「ちょっと来い、おお、お前らも一緒かあ」

ふたりは俺を見るなり互いに視線を絡ませた後で、

「先輩、お疲れ様でした！」

一緒に頭を下げた。まさに彼女の関係ってムードである。立村もさぞ、当てられていることだろう。

「清坂も羽飛も相変わらずだなあ」

「先輩違います！ なんかまた変なこと言わないでください！」

相手の男子……羽飛も一緒に大きくなづいた。

「俺の愛は別にささげられてるし、なあ美里」

「そうよね、鈴蘭優にしか向けられてないもんね！」

ちっともやきもちの匂いがしないのは、やはりお付き合いの度が違うんだろう。D組女子評議の清坂と幼馴染の男子羽飛との会話を聞いているとどう考えても、「初恋まっしぐら」状態にしか感じられないのだが。まあ互いに否定しあっているのは、目の前に同級生がいるということと、俺がまがりなりにも二人の先輩だってこととが絡んでいるんだろう。心の真実について説明してやるほど、今の俺には時間がない。目的は一つにしぼれっていうんだ。

すっかり戸惑った顔して、きょときょと俺、清坂、羽飛を三角形こしらえるように眺めてい

る立村の肩を、俺は抱いた。少々危ない趣味に思われるかもしれないが、俺の女好きを知っている奴は誰も誤解しないだろう。目の前のふたりもだ。

「悪いが、今から立村、借りてくぜ」

「え、あの、ビデオ演劇、稽古、明日からじゃ」

清坂がにゃんこ目をくるくるさせて口を尖らせる。

「おい立村、俺たちの方が約束、先だったよな！」

明らかにむかっているのは羽飛の方だ。これは意外。単純に清坂とデートを楽しもうとたくらんでいたんだったら、邪魔者の立村を引き取ってやる俺の行為にお礼を言ってくれたっていいじゃないか。へへん、とばかりに俺は顔をにんまりさせて見せた。

「いやいや、やっぱりな、上級生の言うことは絶対だろ？ 特に、俺からの命令は、そうだろ、な？ 立村？」

おや、幼馴染二人が肩を寄せ合い、四つの眼でもって俺をにらむぞ。肝心の立村を頭抱えたまま見下ろすと、今度は俺と「清坂・羽飛連合軍」を交互に見ている。まあ約束はしていたんだろな、きっと。小声で俺のあごに頭のとっぺんを押し付けるような格好で、

「あの、先輩、実は羽飛たちと一緒に、これから学生食堂で……」

思いっきり小突いてやった。

「おいおい、立村よ、お前も鈍いなあ。今日はなんの日か知ってるだろ？」

「だから終業式……」

頭のとっぺんを片方の手でぐりぐりしてやる。顔をしかめて首を振る立村だが、俺の片腕でしっかり抱きかかえられているから身動き取れない。明らかに俺の方が腕力上だ。俺の方が兄貴分だからなやっぱり。

「ばあか。お前みたいに彼女作ったことのない奴にはわからないだろうが、今宵はクリスマスイブなのだぞ」

「だったら先輩の方が！」

ひそとつぶやくのは清坂だ。いや、いくら三人仲良しトリオだというのはわからなくもないが、カップルからはずされた立村の悲しい立場をどうして考えてやらんのだ？ あ、まだ一年か。そこまでわからんか。じゃあ先輩として教えて進ぜよう。立村が言いかけたのを、今度は手でふさいでやった。まるで誘拐犯人 だぜ俺。

「ほら、お前もわかるだろ？ こういう時は、先輩たる俺の言うことを聞いてだな、きちんと今後のために鍛えることが大切なんだ。立村、お前は俺の弟分なんだぞ、兄貴分の言うことは絶対だぞ、いいな」

あきらめたように立村は、ゆっくりと清坂たちの「早く、手、振り払ってきなさいよ！」といわんばかりの顔に頭を下げた。

「ごめん、羽飛、清坂氏。俺、今は無理だけど、でも、終わったらすぐ合流するから」

「おい、あのなあ立村、先約は俺たちだろ？」

意地を張ってるんだらう、羽飛がしつこく言うのは。肩をぶるんぶるんさせながら、口を尖らせる。

「やはり、あの、評議委員だし、やはり先輩の言うこともそうかなと思って」

「先輩だからって順番は守らないといけないんじゃないですか！」

もちろんそれは当然といやあ当然だ。だがな、清坂よ。俺が横紙破りまでしてどうしてこんなにお前らを応援しているのか、早く気付いてくれよ。「青大附中 開闢以来の女ったらし」本条里希としては、出来上がっているらぶらぶカップルを、余計な奴ひとりでぶつつぶしたくはないのだよ。青大附中入って初めてのクリスマスイブだったら行きたいとこだってたくさんあるだろうに。

「ほら、清坂、あんなしけた食堂なんかでまずいラーメン食うよりな、子辺町まで汽車に乗ってだ。羽飛とふたり、神聖な気持ちで修道院めぐりをするとか、雪を見つめながらいろいろするとか、あるだろ？ お前たちがシングルの哀れな立村の面倒を見てやりたいと思うのはよくわかるがしかしだな。せっかく楽しめるとして時に、邪魔者を入れたままってのはお前らも、あと立村も悲しいぞ」

「先輩なに誤解してるんですか！ 私と貴史、そんなこと、考えてないってのに！」

照れ隠し。やっぱりかわいいねえ。立村にも尋ねてくる。

「立村くん、違うってわかってるよね！ 本条先輩とは明日からでもいいでしょ」

すっかり俺と清坂たちとのサンドイッチ状態に陥った立村を、これ以上いじめるのも趣味がいいとはいえないだろう。俺は自分のめがねを片手ではずし、強引にかけてやった。度が強いのは承知の上だ。ぱっと離すと、立村の奴、歩こうとしてふらふらとした後、ぺたんと尻もちをつきやがった。

「す、すみません。本条先輩、あの」

「だから、お前は俺の言うことを聞きなさいっての。じゃあな、清坂、羽飛、これからゆっくり、楽しめよ！」

「先輩ってば！」

「立村、おい、こんな不条理、許されていいってのかあっ！」

いささか芝居がかった羽飛の叫びは、たぶん「しゃあねえな」の合図だろう。本気で立村を手放したくないんだったら俺につかみかかってきて、一発二発殴りかかってきても不思議はないのだから。

「じゃあな、さ、行くぞ立村」

片腕を引っ張り上げ、俺は立村を立ち上がらせた。まだ度のあわないめがねに慣れず、酔っ払った風に歩く立村を一年用の靴箱前まで連れていった。すのこの上で、申し訳なさそうに両手を合わせるめがね顔の立村。口をあぐり開けたまま見送る羽飛。思いっきり片足を踏み鳴らしなにやら文句たらたら清坂。

どうせ明日のクリスマスで十分謝ることができるんだ。気にするなよ、立村。

しらえることになっていた。別名「演劇部」とも呼ばれる評議委員会なのだが、名前の由来はまさに「ビデオ演劇」の存在から来ている。それほど歴史が古いわけではなく、現在の評議委員長・結城穂積先輩の発案により昨年 から行われているのだ。

ビデオカメラを利用して青大附中の校舎や外部の建物などを背景に、台本どおりの台詞を唱え、一カットずつ撮っていく。もちろん演じるのは評議委員会のメンバーだし、生まれてから演劇なんてやったことないという奴がほとんどだ。クオリティーの高いものなんてできるわけがない。しかしながら、家庭環境の影響 もあって芸術肌丸出しの結城先輩が、ほとんどの機材および映画作りのスキルなどを注ぎ込んでくれたおかげで、去年は結構面白いものが出来上がった。テレビドラマの焼き直しで「スター誕生」。テレビ版は天才少女と意地悪娘との戦いがメインだったが、結城先輩の発案でキャストを全部男子に振り替えた。天才少年 と意地悪男ってどんなもんかと最初は俺も半信半疑で見っていた。けどやはり、才能ってのはすごいもんだ。後日、他の生徒たちに観てもらったところ、大爆笑の嵐で迎えられた。笑っているのか嘲っているのかは紙一重だと思う。けど、反応があるのはやっぱり、うれしいじゃないか。味を占めた次期評議委員長たる俺は、半ば強引に第二回「ビデオ演劇」企画を立てたわけだった。

もっとも「ビデオ演劇」の目的というのは、単純に下手な演技を見てもらって自己満足に浸るだけではない。

結城先輩曰く、

「これから先、評議委員会では教師、生徒、そのたもろもろの人間を相手に『演技』をしなくてはいけない場面に突き当たるってわけだ。うまく立ち回らねばならないところとかいろいろな。そういう時にだ、ひとつの『演技』をマスターしておくことが、これから必要なんだよ、なあほんさと」

ちなみに「ほんさと」とは、結城先輩が俺とふたりきりの時、呼んでくれる名だ。

この人、単なる「アイドル狂い」……特に「日本少女宮」への愛は深すぎるぞ。自室の壁、床、天井すべてポスターで埋め尽くされているあの部屋、俺だったら発狂するぞ……ではないのだと気付いたのは、恥ずかしながらこの数ヶ月だった。

現在の二年生が主体となって台本を決め、キャストを指名し、あとは無理やり台本を渡して一カットずつ撮っていく。去年の実績がなぜか教師たちにも受け入れられたらしくて、今年は衣装関連の費用を学校側から出してもらえるようになった。うちの学校、エリート色強いはずなんだが、こういうお遊び系のネタにも協力してくれるところがうれしい。せっかく大人が金出してくれるんだったら、年末のお約束としてやろうじゃないか、「忠臣蔵」！

というわけで、明日からビデオ演劇「忠臣蔵」の撮影クランクインとなる予定なのだった。

キャストはすでに十一月の段階で指名済みだし、台本もあつという間に他の連中がこしらえてくれた。あとは衣装を手芸得意な女子たちおよび先生たちに協力していただきこしらえてもらうだけ。「忠臣蔵」は時代劇なんで、和服でなくちゃいけないのだが、なぜか大人には和服が受けるらしい。どんどん、無償で貸してくれた。しかも撮影中、着付けまでしてくれるというお申し出。なんというすばらしい学校だ、青大附中万歳！

だがまあ、これは明日から考えればいいことなんだ。

俺としてはその前にいろいろと片付けておかななくてはならないことがあるわけだ。

まずは、今後ろにくっついて、うなだれて歩いている立村のこととか。

「立村、お前さ、スケートやったことあるか？」

首を振った後、すぐに「いいえ、ないです」と言い直した。

俺はことあるごとにこいつへ「言いたいことがあるんだったら、動作だけでなく口ではっきり言え！」と命令している。首ぶるぶるだけだったら一発ぶん殴ってやるどころなんだが、気付いただけよしとしよう。

「小学校の時に行かなかったのか？ 雪山遠足とか」

「遠足、参加したことないです」

小声で答える立村は、スニーカーで雪を踏みしめるようにして歩いている。アイスバーン状態の道路を歩いてすべってすってんころりんするのが怖いんだろうな。ちゃんとスパイクの爪、立ててあるいてるのか？

「そうか、じゃあスキーもねえな」

「スキーはうちで、連れていかれて」

じゃあなんでスケート行かないんだ、と突っ込んでやりたいんだが、大体理由は聞かないでも見当がついたので言わないでおいた。スキーだったら親にどこぞのスキー場へつれてってもらってもできるだろうが、スケートの場合大抵は友だち同士で固まって出かけるパターンが多いだろう。もともと立村は友だちと連れ立って遊んだ経験が少ない奴だし、ほとんどなかったんだろうなきっと。「じゃあ初体験ってことだな」

「はい」

素直にうなづいているところみると、関心がないわけではないのだろう。

いい機会だ。

「じゃあお前さ、今日、市のスケート場がオープンしたのは知ってるな」

「はい」

おとなしい立村は、うなづくだけだった。俺の隣に来た。かばんをぶら下げて、真っ黒いマント式コートを羽織ったまま、俺にくっついてきた。

「これから先、いろいろなとこでスケートやる機会が出てくるだろうから、お前もここいらで練習しとけ。俺がしごいてやる」

ふっと俺の方を見上げる立村を、今度は頭を軽くなでてやった。

「知ってるか？ 世の中の女子はな、スポーツのできる奴にきゃあきゃあ言うもんだ」

「けど、俺本当に一度も、滑ったことがないんです。スケート靴も、何センチかわからないし、それに運動神経あまりいいほうじゃないし、だから」

「女々しいってんだ、黙れこの！」

丸い目で泣きそうになるあいつに、噛んで含めるように、

「お前も俺や羽飛がうらやましいんだったら、ここいらで男らしさをマスターしろよ！」

そうだ、「男らしさ」なのだ。

俺なりに立村の性格を分析してみて、一番欠けている部分がそこなのだ。

今の三年たちが卒業するまでに、俺はきちんとそのあたりを弁護できるようにしなくちゃならない。

——俺の跡継ぎは立村を指名します。文句ありますか。

文句ありありの三年生を説得するために。

3

うつむき加減でスケート靴を履いて、最初よたよたすってんころりん、を繰り返していた立村だが、運動神経は悪くないらしくすぐに立って歩けるようになった。

「おい、早く来いよ！」

俺は過保護主義じゃないので、まずリンクを一周した後、ど真ん中に立って怒鳴った。

来れないなんて、まず言わないだろう。

「先輩、今行きます」

氷の上に手を付き、ゆっくりと立ち上がり、俺の方に大きくなづいた。意を決したって感じだった。歩いているのか、それとも滑っているのか区別がつかなかったが、二メートルくらいのところで要領をつかんだのだろう。二本足一緒にすべるような格好でたどり着いた。

「お前、覚えるの早いな」

「たまたまです」

だから、こういう謙遜する癖、直せよお前。言いたくなる。

「じゃあ、俺の後ろについて来い！」

次に俺は、心持ゆっくりと、片足ずつすべり、リンクの端まで誘導した。あいつも時々腰を低くしながらもなんとか付いて来た。途中ふらついて俺の背中につかまろうとしたがそうは問屋がおろさない。振り切るのも、兄の愛だ。

「一周するからな。ほら、へっぴり腰出さないで付いて来い」

「はい」

小さい声が後ろに聞こえる。もう一度気合の入れなおしだ。

「返事はでかい声で！」

「はい！」

あまりでかくなかったが、聞こえたしまあいいか。

雪が時折細かい粒のように降り注ぐのみ、空は気持ちいいくらい晴れ渡っていた。

だから暖冬っていうんだろうな。俺はわざと口を開けたまま、舌の上に雪を受けて飲み込んだ。

手袋も合皮の黒と白がストライプ模様に張り巡らされている派手目なものだ。立村も同じく合

皮だったが、自転車を漕ぐために指先が少し切れているタイプをしている。スケート中すっころんで後ろから来た奴に指をすぱっと切られたらどうするんだ。余計なお世話だろうが文句言わずにはいられない。

「お前、もう少しウィンタースポーツ楽しむ専用の格好しろよ」

「はい」

こいつのよさは素直さ、だろうか。いや、それは欠点でもある。

もし俺がこいつの立場で、結城先輩に言われたら即、

「いきなり引っ張り出されてそしたら準備ができるわけねえでしょうが。じゃあ買ってくれって俺言いますぜ」

と噛み付いてるだろう。俺も自分で小言ぶつくさ言いながらも矛盾に気付いていないわけではなかった。とにかく俺の言うことはなんでも聞くし、さっき清坂たちにぶうぶう言われた時だって、結局は俺に押し切られた格好になったわけだ。まあ俺の押しが強かったためといえばそれまでだが、もう少ししゃんとしたってよかろうに、しゃんと！

「じゃあ少し休むか」

「はい」

疲れたわけではなくて、途中笛の音が聞こえて、係の人の「リンク整備のため、十分間休憩します」のスピーカー案内で断ち切られた、というのが本当のところだ。だいぶ俺のスパルタ教育の効果もあって、なんとか立村は手を付かずにすべることができるようになっていた。早い。こいつの得意なスポーツは卓球と自転車……スポーツかどうかは別だが……くらいしかないか、と思っていたんだが、それなりに男としての力をつけていたんだな。

野外リンクということもあり、外のベンチに腰掛けても尻が冷たかった。白いジャンバーの俺よりも、コートをつぶりた感じで羽織っている立村の方があったかいだろう。

「おい、俺が金出すから、コーヒー二本買って来い」

「はい」

やっぱり素直だ。立村はすぐ立ち上がった。

自動販売機は貸しスケート靴受け取り場のすぐ側だ。

——本条、どうしてお前、立村をそんなに推すわけだ？

——悪い奴じゃないのはわかっているんだ。でもなあ。

——そうだよ本条くん。立村くんがすっごくくなついているからひいきしたい気持ち、わからないわけじゃないけど。やはり器の問題ってあると思うのよ。

——順当に行けばやはり、天羽が妥当なんじゃないか？ あいつだったら人あたりもいいし上級生受けも悪くない。頭も働くし、なんてったってリーダー向けだ。笑いを取って軽くみせて、そのくせ裏ではしっかりと押さえをきかせている。女子から人気も高いだろ。それに比べて立村は、まあその、いろいろ問題ある だろ？

ああ、まったくむかつくったらねえ！

あいつがもう少ししゃんとしてればな！　しゃんと！

俺だって三年の先輩たちが立村を評価できない理由がわからないわけじゃない。言われることはごもつともだ。

結城先輩にもしょっちゅう呼び出しを食らっている俺としては、このまま素直に言うこと聞いておいたほうが丸く収まるってこともわかっているわけだ。あの事なかれ主義を通してのように見えて自分のやりたいことを押し通す結城先輩が、口すっぱく言いつづける理由に、どうして逆らうのか、俺？

——ほんさと、お前、立村を弟分にしているからなおさら、過剰評価しているところがあるんでないか？

例の「日本少女宮」ポスターでけばい部屋で、俺は何度も説得された経験を持つ。ちょうど水着グラビアがどっさりはられていた時期で、ホルスタイン並の胸が目の前にちらついて俺はもう、全身発情状態・からエアだった。それでいて、説教されることったら、立村がらみのことばかりだ。うちに帰って性欲解消を図りたくなるのも無理ないだろ？

——別に俺は、天羽を評価していないわけではねえし、むしろあのキャラクターは貴重だから守ってやりたいとこですよ。それは俺なりの考えとして、ちゃんともってます。けど、天羽はお家の都合かなんかわからねえけど、あまり出てこないじゃあないですか。でかい行事にはきちんと参加するけど、ちょこまかしたものにはあまり。それはちょっとまずいんじゃ。

——お前だって理由知っているだろ。天羽のうちは宗教がらみでいろいろ面倒な制約があるんだ。

わからないわけじゃない。どうしても天羽を俺の次にあてがいたくないというそれだけの理由だ。

——立村をひいきしたいというのは、そりゃあわかるぞ。気に入っている後輩をひっぱっていきたいってのもな。そうだよなあ、ほんさと、お前立村をとことんめんこがってるからな。巷では「本条・立村ホモ説」まで流れてるぞ。

まだ童貞卒業していない結城先輩にそんなこと言われたくなねえな。

結城先輩は戦略を変えたのか、立村の性質について丁寧に注釈を述べてくださった。ありがたいことで。

——まあ立村は、誰とでもうまくやってるしな。うまく言えねえけど、「男子殺し」の目つきしてるよな。

俺はそういう趣味じゃないっての。里理じゃああるまいし。

——いやホモとかどうとかいうんじゃなくて、なんとかこいつを応援したいって思わせるムードが漂ってるよな。一生懸命さが受けますってタイプ。それはいいよな。男子連中に嫉妬させないで、応援させるってんだったらいい。けど評議委員長ってのはどういう素質が必要かわかるだろ？　ほんさと？

わかってるさ。俺だって立村に何が欠けてるか。

——とにかく自分で物事を決めて、周りを巻き込んでいく、引っ張っていくって言うのか？　それが絶対に必要なんだ。ほんさと、お前そうとう一年の頃ぶつかりまくってきただろ？　俺たち

の代を始め、もう一年上の先輩たちとも、あと同期ともな。このまんまじゃああいつ、つぶされるぞって思われてたことくらい、気付かなかったわけねえだろ。

ああ、ほんと俺も、まさか評議委員会にこんなのにめりこむとは思わなかったっすよ。のめりこむのは女子の穴の中かと。

——それがだ。いつのまにかお前は押しも押されぬリーダーになったってわけだ。お前には他人なんかにつぶされたくないポリシーってものがあってたぞ。納得いかないことは納得いかないし、やりたいことを通すためにはどうすればいいかを考えるだけの力を持っていた。なによりも、周りを巻き込んでいくだけのパワーがある。俺の経験から言って、一番大切なのはそれだと断言できる。ほんさと、よっく考えろ。立村にそれだけの資質、あるか？

無言で俺の隣に座り、持ってきた缶コーヒーを差し出す立村の顔をまじまじと見た。

ない。そんなもの。

立村に、結城先輩の求めるだけの「資質」なんて、ありはしない。

「先輩、これでいいですか。もし間違ってたら、俺、買いなおしてきます」

「いいからお前も飲め。今日はおごりだ」

コーヒーで口を湿らせ、俺は立村の頭をがしがしと撫でた。

4

休憩後スケートリンクを二周する頃には、すっかり立村もすべりに自信がついてきたようだった。スピードスケートの選手のフォームみたいに、後ろ手回して腰を落としてすべるのもずいぶん形が整ってきたように見える。時々振り返って見ると、かすかに笑顔が覗いていることに気付く。あまり機会がなかったのだろう。また冬休み中にでも誘ってやるか、と思う。

「しかし、スケートしなかったこの十二年間、人生無駄にしたと思わないか？」

「え、いえ、あの」

口籠もる立村に、俺は思いっきり耳をぐりぐりしてやった。

「いいかげんお前も、あいまいな言い方するのやめろ。ったくなあ、こうやっておどおどしてるろくなことねえってのは、最近のことからしてもよっくわかってるだろ？ な？」

立村はうなだれると同時に、何か口に出そうとしていた。返事しないと俺に怒鳴られるとでも思っているのだろう。

「あの、すみません」

「謝れって言ってねえだろ。まあよく聞け」

滑っている奴らの邪魔にならないよう、出入り口の側に固まって並んだ。ついでに聞かれないように、俺なりの小さい声でもってささやいた。

「お前、納得いかないことには納得いかない、気に入らないなら気に入らない、はっきり言えよ。相手が俺でもだ」

「いえ、別に」

また小声で返事する奴を、遠慮なく小突いてやる。

「気に入らないことを言われたら俺もこういう風にどつくだろうが、安心しろ、殺しはしないぞ」

言葉に反応して震え上がるのはやめてほしい。言い過ぎたか？ こいつの性格を一年近く見てきて思うのだが、ふつうの男子ならこんなこと気にしねえだろ、ってところに過敏反応するところがあるのだ。

「最近、なんかむかついたことでもあるのかよ？」

直球で尋ねるべきか、それとも裏手回しで聞くべきか、とっさに判断できず俺は、後者の言い方で聞いてみることにした。言われた意味がよくわからないのか、立村はゆっくりと首を振り、「あ、あの、よくわからなくて」

また小声で言いかけた言葉を飲み込んだ。

「だから言ってるだろ！ 男なら男らしく、言いたいことははっきり言えって！」

堂々巡りだとわかっていても、繰り返すしかなかった。

——立村が難しいな、と思う理由は、ほんさと。お前も重々承知なんじゃないのか。結城先輩に尋ね返された時、俺は返事ができなかった。

——もちろん、最近流れている噂は根も葉もない大嘘だってことは、三年の俺たちもわかっているつもりなんだ。アイドルの休養とか恋愛の噂とかは、大抵の場合番組宣伝の流れとか、プロダクションからの意図的な情報とかいろいろあるけれどもな。

それだけよくわかっているならば、いいじゃないかと俺は言いたかった。

——まさかな、あの立村がだ。嫌がる女子を追いかけてさんざん付き合いを要求するなんてな、想像するだけでも笑えるだろ。あれはガセだ。ただ、俺が言いたいのはその噂が正しいか正しくないか、そういうことじゃない。

結城先輩は「日本少女宮」のロング抱き枕にまたがりながら、まじめな顔して言ったっけ。

——その噂に対して、立村がどう対応したか、それを言ってるんだ。

すでに十二月の半ばから一年生女子の間でささやかれていた噂だった。

——一年D組の立村が、同じクラスの女子にしつこく迫って嫌がられている。はっきり振られたら逆恨みして、またその子の後をつけたり、手紙をよこしたりしているらしい。

てっきり清坂に横恋慕しているんだらうか、と最初は考えた。同じ評議委員同士の清坂はしっかりもんで、ぼんやり立村のことを一生懸命サポートしてくれていた。いわば「姉さん女房」みたいな感覚だろうか。姉が弟を面倒みる、といった方が近いだろう。俺が見る限り、清坂は羽飛としゃべっている時の方がずっと生き生きしているし、楽しそうだ。恋愛ってのは楽しくなくちゃあ嘘だと思う。立村相手の場合だと楽しさよりも、「かまってあげなくちゃ！」みたいなところが強くでて、正直女子としてはしんどいのではと思っていた。けど立村はそういう女子のやさしさに慣れていないし、そこでふらふらっと恋に落ちたとしてもそうそう不思議だとは思えない。いくら親友の羽飛の恋人とはいえ、簡単にはあきらめられまい。

しかし、もっと詳しく事情を調べたところ、相手がまったくのノーマーク女子だったことに驚いた。

また、立村自身もその噂に対しまったくのノーコメントを通してている。

まったく根も葉もない噂だったら、もっとぶち切れたっていいだろう。

やはり思い当たる節があるのだろうか。

俺にはまだ、そのことであいつを問い詰めることはできそうになかった。噂だけで相手を攻め立てると大抵の場合、しっぺ返しがかかるだろう。それに……信じてもらえないかもしれないが、立村の様子からしてどうしても、そういうねちっこい恋をひっぱるようには思えなかったのだ。俺の直感としか言いようがないのだが。ぴくぴく、おどおどして俺の背中にひっついていない弟分だが、いざとなったらとことんぶちぎっていく、そういうタイプに思えてならなかった。

初めて立村と親しく話をしたのは、四月の「非公認・一年男子評議委員・固めの盃」儀式だった。

もともと立村は、三年の先輩たちが言う通りおとなしくて引っ込み思案だったが、なぜか俺の側に座りたがった。何かかしら、俺の顔ばかり見ていた。数滴のビールでぶつぶれ俺に介抱される羽目となり、それ以来俺には頭が上がりなくなっただけらしい。脅したわけでもない。あいつの小学校時代が相当悲惨だったこと、いじめの後遺症からまだ抜け出していないこと、また小学時代のいじめっ子から逆襲されるんじゃないかとおびえていること、結局のところ立村が引きずっているのは小学時代の過去なのだろう。

俺があいつに、一番最初に命令したのは、「小学時代のいじめっ子の前を、自転車で走り抜ける！」だった。

通学路で小学時代の連中と顔を合わせたくない一心で、とんでもなく早い時刻に家を出ていることを知った時、こりゃあまずいんでないかい？と思ったのがきっかけだった。ふつうの男だったら、そんなこと気にしないだろうし、けんか吹っかけられたら受けて立つだろう。俺だったらそうする。でも、立村にそれはめちゃくちゃ高いハードルだったらしい。ぐじぐじ嫌がったけれども、ケツを叩いてやったら無我夢中でつぶしちまったことを覚えている。

つまり、やればできる奴なのだ。あいつは。

その後も俺は、立村に対して運動会やら学校祭やら、今回の「ビデオ演劇」やらを通じて、超えるべきハードルを用意するよう心がけていた。もちろん先輩たちには言わない。当然あいつにも。ただ、あいつが俺のことを兄貴分として慕ってくれる以上、男にしてやりたい、そういう気持ちが湧いてくるのはむしろ自然なものではないだろうかと思う。

人は知らん。俺だったらあいつを、ちゃんと誰からも文句を言わせない「さすが本条里希の弟分だ」とうなずかせてしまうような男に育て上げたいと思う。そりゃ最初はびくついてたかもしれない。いじめられて泣いてばかりいたのかもしれない。ありもしねえ噂に反撃できないようなよわっちい奴かもしれない。けど、俺は知っているんだ。

立村は、本気を出したら、めちゃくちゃ強いんだってことが。

本人もまだ気付いていないんだろうな、きっと。

リンクには途中から青大附中の女子たちも顔を出し始めた。俺の知り合いも数人いて、挨拶を交わしたりからかわれたりといろいろした。女子からみの問題をいろいろと背負っている俺としては、あまりその場では遠慮したいネタもあったりした。俺は立村を促し、帰り準備をした。スケート靴をレンタル返却所に返して、ぶらぶらと歩道を歩いていった。

立村だけが少し遅れて出てきた。待っているほど過保護でもない俺は、五メートルくらい先を歩いていた。

「先輩、すみません」

「ありがとうだろ」

ぴしゃっとまずは先手。時計の針はまだまだ三時過ぎだった。

「お前さ、どうして今までスケートやらなかった？」

やっぱり俺は堂々と質問するほうが向いている。立村ははっとした顔で俺を見た後、口を一文字にし、息を吸い込んだ。

「行く機会がありませんでした」

きっぱりした声だった。リンクでぼそぼそびびっていたのとは大違いだった。覚悟が感じられる。それなら俺も答えてやらねば、そう思った。

「小学校の連中と行く機会が、なかったんだな」

「そうです」

よくぞ認めた。ほくそえみたい。顔を引き締めさらに続けて問うた。

「立村、お前今まで、小学校の連中がやっててお前がやる機会なかったものいくつくらいあるか、数えられるか？」

「あの、それは」

指を折ろうとする立村。こいつが数学的感性ゼロなのも俺は知っているからやめさせた。どつぼにはまる。

「まず自転車で小学校の連中の前通れなかったことだろ。女子と対等にしゃべれなかったことだろ。男子とスケベ話できなかつたことだろ。担任とけんかできなかつたことだろ。学芸会で劇に出られなかつたことだろ。清坂や羽飛みたいなマブだちがいなかつたことだろ。まだまだあるよな」

あえて、「嘘ばかり言われて傷つけられても何も言い返せないこと」とは言わなかつた。

立村の頬が妙に赤い。外で冷えただけではこんなに赤くなりはいらない。

「どれだけそれ、今年一年でやることできたか？ 数えるなよ。思い出してみろ」

やめろって言ってるのにしっかり指折っている。こいつなんだ。

「……わかりません」

俺はわざとでかいため息をついてやった。あいつがあせって俺を見るのがよくわかる。

「ばあか。気付いてねえだけじゃねえのか。まだあるぞお前、かわいい彼女と付き合うチャンス

もまだねえだろ。それに、委員長経験も今までほとんどないだろ。確かお前、小学校時代万年保健委員だって聞いたが」

「そうです、俺はあまり、上に立つことないから」

そういう奴を俺は、後継ぎに指名したいって思っているわけなんだ。

もうひとつため息をついたのは、俺に対してだった。

——結城先輩、お言葉を返すようで申し訳ねえんですが。それとそのクッション、すげえ卑猥に見えるんでやめてくれないですか。俺、夜、あそこ立ちっぱなしで寝れなくなったらどうするっすか。

まずは俺の睡眠に影響しないよう協力を要請した。その点結城先輩はわかってくれている。素直に背中へ抱き枕を隠してくれた。

——確かに立村は、結城先輩たちの言う通り俺みたいなタイプの委員長にはなれないじゃねえかって思いますよ。

——ほうほう、よくわかってるじゃないか。

——強引にこっち向かせて歩かせるとか、女子たちをきゃあきゃあ言わせるとか。他の男子連中をぶん殴って、力技で従わせるとか。あいつがそんなことやってるのって、想像つかねえし。

すいません、全部俺がやってきたことだ。

——だから、たぶん天羽だったらそれは簡単にできると思うんです。それは俺も賛成してます。

——じゃあなんで、天羽じゃあだめなんだ？ そこまで立村にこだわるのはなぜなんだ？

問われた時、自然と口からこぼれていた。

——俺のコピーを見るのってつまなくねえですか？ 結城先輩？ それよか、違うバージョンでもって、これから評議委員会がどうなるのか、見たいって言ったら変ですか？

俺はぼおとした頭の中で、結城先輩との会話を思い出していた。結局その時は結城先輩を説得することができなかつたし、いまだに問題は尾を引いていた。今の三年評議は全員青大附高に進むことになっている。これから先俺が、どういう形で立村を教育していくかを興味津津で見つめるだろう。すげえプレッシャーだ。

確かに、順当にいけば「関西ギャグマニア」の一年A組評議・天羽を指名するのが正しいだろう。

俺も天羽のことは嫌いじゃないし、同等の立場としてみたらいい仲間になれたらと思う。ただし、あくまでも同期、としてならだ。

この一年、結城先輩から青大附中評議委員会に関するレクチャーを毎日受けてきて、俺なりに来年の評議委員会をどのように持っていくかのイメージはだいぶ沸いてきている。あえて副委員長を用意しなかったのも俺の考えだ。余計なことを同期に言われていらいらしてぶっ壊してしまいかねない、それが俺の性格だ。むしろ、下で支えてもらう方が俺の気性に合っている。すげえワンマンだと人は言うが、正直そのやり方しか、俺にはできない。だから結城先輩に俺のやり

方を伝え、その意思でもって、受け入れてもらった。悔いはない。ただ。

迷っていたのかもしれない。

ブレーキがほしかったのかもしれない。

甘い顔したブレーキが。

6

「なあ立村、お前さあ」

話が湿っぽくなるのもなんなので、クリスマスイブにふさわしいちゃいちゃネタを振ることにした。この一年、立村には思春期の男として当然の衝動や、当然の行動、および当然知りたいたことを細かく教えてやっていた。どうも話をしてみた印象では、こいつ、まだひとりでの……経験がないらしい。当然エロ本やアダルトビデオ、その他もまったく免疫がないと観た。もちろん自然の衝動なんだし目覚めたら後は早いだろうが、いきなり女子のまん前で身体の方が反応したらもうどうしようもあるまい。ってことで、家でこっそり助平書物の一式をマスターさせた。最初は露骨に顔をしかめていたが、最近は無理やりポーカーフェイスを作るようになった。そろそろ目覚める時も近いのではと俺は思っている。せめて、一人で抜くことくらい覚えろよ、と思うのだが手取り足取り教えてやることじゃないからなあ。その辺についてはまったくのガキンちよだと思う。

「お前、羽飛たちがうらやましいと思うことねえのか？」

「ありません。というか、あるけど、先輩とは違う意味かもしれません」

ずいぶん優等生的なお答えだ。あまり気取ってたら後が怖いぞ。やさしい先輩本条里希はその辺、じっくり教育してやらねばなるまい。「三人で一緒にお食事ができなくてさびしいか？」

もし、立村がひそかに清坂への想いを隠していたとしたらだ。その辺はあるだろう。

でも、すでにらぶらぶなカップルが出来上がってるのに邪魔するのはどうかと思うぞ。

あきらめる時はあきらめろ。無理やり追っかけると返って嫌われるぞ。

「いえ、俺も本当は、あの二人だけのほうがいいと思ってました」

言葉を選びつつ、立村は静かに答えた。

「ほう、それはどうしてだ？」

本日何度目かの頭ぐりぐりをしてやった。髪の毛が中途半端に伸びていて、つかみ心地がいい。されるままになっている立村は、やっぱり素直だった。たまに髪が引っ張られて痛そうな顔をしていた。

「じゃまするのはやっぱりよくないと思っていたし」

「そうだよな、そうだよな」

「けど、俺のことを変な目で見ないのは、あの二人だけだったし」

かちりと、頭の部品がぴたっと納まったような気がした。

俺もいくらあいつが弟分だからといって、あいつの友だちづきあいすべてチェックしている

わけではない。うまくつながりをこしらえているようだし、評議委員仲間とも男子たちとは問題なく付き合っているように見える。しょっちゅう話に出てくる天羽も、立村のことを同期の弟分みたいに面倒みてやっているようだし、シャーロキアン難波も立村が論理的部分で口籠もってしまった時すぐに助け舟を出してやったりしている。あわや未成年淫行につきこみそうな更科も、立村がいろいろとへましでかすたびに場を和ませるような笑顔でもって、女子たちをなだめている。

あいつらは立村をカバーするという一点でもって、意志統一がなされているように見える。

俺たちの学年でそれはまったくありえないものだった。かなりワンマンを通した俺は一年前期の段階でかなりの委員入れ替えを行った。自主的にやめた奴も多かった。今、一緒に評議をやっている連中はその中でも俺の意思にとことんついていくと覚悟を決めてくれた奴ばかりだ。けど、もしかしたら、俺がもう少し別の接し方をしていたら、まったくもって生え抜きメンバーで今日までこれたんじゃあないだろうか？

立村に足りないものは、周りの奴らを信頼していないという、それだけだ。断言する。

自分自身をまだ信頼してないっていう感じだろうか。

自分にはまだそれだけの器がない、そう決め込んでいる。

スケート滑ったこともなくせに、本当はいじめっ子連中の前を自転車で走りぬけることだってできるのにしなかつたくせに、自分に着せられた濡れ衣を言い返せば少しは噂も収まるのに、三年生たちから上げられた不安材料をあいつならいくらでも打ち消すことができるはずなのに。

俺とは違う形でもって、評議委員長をつとめあげることだって、できないことじゃない。

「あのな立村。清坂はめんこいし羽飛もいい奴だ。あいつらしか信頼してねえってことなのか」

俺は空を見上げ、もう一度息を吸い込んだ。

「信頼？」

「お前言ったよな。お前のことを変な目で見ないのは、あの二人だけだって。そんなことはないんじゃないか？」

「けど」

言いかけた立村に、

「俺はどうなんだよ、俺は」

立ち止まった。人差し指を俺の方に向けて、つんつんとさしてやった。

「お前の言い方だとな、俺はどうなんだって思うぞ」

「本条先輩、そんなことはないです。だって本条先輩は」

激しくかぶりを振る立村を見ていると、俺の疑念なんてあっさり消え去るもんだった。そうさ、一度だって疑ったことないもんな。立村が一番信頼しているのは、俺だって嫌ってほど伝わってくるんだ。ただ、なんとなくいじめたくなるんだ。しょうがない。

「いいか、明日からの『ビデオ演劇』だが、お前とことん俺の後ろにくっついて来い。三年の先輩たちがお前にいろいろ言うだろうが、とにかく俺の側から離れるな。ホモと言われようが変態と言われようがな」

「変態だなんて思っていない……」

慌てて打ち消そうとしている。そんなこと言われたら俺だって怒るぞ。

「ばあか。無理して言うんじゃないじゃねえよ、変態なわけじゃないじゃねえか」

混乱しているのかまたきょときょと俺を見るのが面白い。

「お前浅野の殿様だろ、出番は二カットだし撮影はさっさと終わる。あとは御大将・大石の出番ばかりだ。とことん俺の付き人としてくっついてろ。これは命令だからな」

こくっとうなずくとまたすぐに、小さな声で「はい」と返事した。

俺だってクリスマス・イブはそれなりに用事がある。いわゆる彼女もちの定めってところだ。けど、やっぱり放って置けないじゃないか。

たぶん羽飛や清坂が、せっかくのデートタイムにもかかわらず立村を仲間に入れようとしたのも、きっとそこにあるんだろう。一人ぼっちで無視していたらきっと、何も言わず飲み込んだままで突っ立っているかもしれない。見られている方がもっと切ないぞそれは。あいつらだけじゃない、天羽も、難波も、更科も。

「ひとつ聞きたいんだがな、立村」

「はい」

「どうしてお前、他の評議男子連中と俺みたいにしゃべらねえんだ？」

「しゃべらないわけじゃないです」

また口籠もろうとするので、後ろに回って全体重ずしっと両手から肩にかけてやった。重たそうに振り払おうとするんで、適当なところで退いてやった。やっぱり文句は言わない。

「まあいいや、明日からすりゃあいいか。それよか今晚だな、ひとりだよな、さびしいよな」

「さびしいって、別に」

またまた。心にもないようなことを言っちゃあいけない。好きでもなんでもない女子のことを追いかけているなんて思われて、これから七十五日以上の噂になるのが見え見えなあいつに、ストレス解消方法を教えてやらねばならない。これが俺なりの、クリスマス・プレゼントでもあるわけだ。

「こういう時はだ。クラスの集合写真とかあるだろ？　そういうのを開いてだ。自分の好きな子かもしくは気になる子をひとり選んで、いろいろ想像するのが一番なんだ」

「想像、ですか？」

具体的に説明しないとやっぱりわからないか。一からな。

「そう、ちゃんと出すところ出して、しごくところしごいて、すっきりしろよ。いいもんだぞ」

だいたい見当はついたのだろう。言葉を出さずに立村の顔は真っ赤になっていく。こいつもとも生っ白い顔をしているんだが、ぽおっと頬が赤らむのが目立つのは弊害なんだかなんなんだか。

——とにかくだ。来年の三月までに、お前の弟分をどこまで納得させられるかが問題なんだぞ。はっきり言ってこれはしんどいと思うんだがいに、ほんさとよ。

俺は結城先輩の前で、言い訳とも言い逃れとも言えないようなことばかり口走っていた。三年たちの「立村よりも天羽を俺の後釜に」という意見を覆すのは、現段階では難しいだろう。もともと結城先輩はプライベートでも立村より、天羽や難波をめんこがっていた。いや、難波に関しては「日本少女宮」の熱狂的ファンだったってのも共感理由だったのかもしれないがそれはいいや。俺にしかなくない、俺にしかくっついてこない。そういう存在はなつかれる当人にとってこそくすぐったくも気持ちいいもんなんだが。けど、無視されているように感じる他の先輩どもはやっぱり面白くないんだろうな。立村の性格を考えてみても、その一線というのは非常にリアルに感じられるわけだ。

——要は、あれっしょ。俺がもっとびしっとしつけりゃあいいんでしょうが。

——俺がお前を面倒みたのとは違うやり方だがなあ。

面倒見たとは片腹痛い。俺からしたら、のほほんお坊ちゃま委員長を支えた敏腕の後輩と言ってほしいもんだ。

——まあいいや。ほんさとがそこまで言うんだったらじじいはこれ以上何も言わん。

——ありがとうござえやす。

ふつう委員長とは、民主主義の原則の元、選挙で選ばれるのが筋だろう。しかし結城委員長の代から方式が変更となり、現委員長が後輩を一人選んで一子相伝で教育することになっている。顰蹙買いの俺がなぜ来年以降の評議委員長に選ばれたのか、そういう裏事情を知らない限り、理解してもらうことは難しいだろう。

俺もできれば、次の代も同じ形で選びたいと思う。

ただぽんと選ばれるよりも、逐一俺のたどってきた道を追っかけてもらって、その後であいつがどういうやり方を選ぶかを、観客として見せてもらいたい。

もちろん俺と同じやり方を選べというのだったら、天羽なり他の奴を指名してそのまますうっと通してもらえばいいだろうが、なんかそういうのはしたくない気分だった。結城先輩だってそうだ。結城先輩の路線をそのまま歩いてもらいたいんだったら俺以外の奴を選んだほうが楽だったはずだ。いわゆる「傀儡政権」って方法だってあるはずだしな。

先が読めないやり方をあえて選ぶ、それが俺の生きる道だ。

「本条先輩、聞いていいですか」 かすれた声で立村が俺に問う。
。「ああ、何でも聞けよ」

「いえ、いいです」

小声で首を振りながら答える。

「なんだよ、言いかけたことがあるんだったら、はっきり言え」

「あの、だから」

ぎゅっと結んだ唇を震わせている。なんか相談したいのかな？ まあいいか。

「本条先輩、明日からずっと一緒にくっついてるって……けど、きっと他の先輩たちがあまりいい顔しないんじゃないかって思うんです。俺は、頭よくないし、要領も悪いし、それに」

言葉を飲み込んでいる。ははん、それは計算ずみだ。ぼこっと後ろ手でぶん殴ってやった。

「あのな、さっきのは命令なの。わかったか。兄貴の命令は弟分がきちんと聞くもんだ。余計なこと考えるんじゃないわねえ」

「けど本条先輩に、迷惑かけるのはいやだし」

「迷惑かからねえよって言ってるだろうが」

「けど、俺は」

震えている様子だった。なんかこいつ、こういうところばかり見せるから「女々しい」って言われるんだろうな。あんまりなよなよぶるぶるしているようだったら、誰もいないところへひっぱって行って、両頬ひっぱたき気合を入れてやろうか。そんなことを思いながら、俺は黙って見下ろした。言いたいこと、聞いてやろう。

「先輩は俺が、小学校の時とか、あと最近とか、してきたこと知ってるかどうかわからないけど、もしすべて知ったらきっと軽蔑すると思います、だから」

「だから？」

まだ言いたいことあるんだろ？ 余計なこと言わんでおこう。

「だから、他の人たちが言うことの方が正しいんだって、思われていいんです。それが、ふつうのことだから」

「ほお、どういうことだ？ 他の奴がお前のことを女たらし扱いしたとして、お前はそれをその通りだって認めてもいいってことか」

「……その通りです。だから」

俺は最後まで言わずあいつの頭を思いっきりぶった。

「お前それって俺を侮辱しているって認識してねえだろ！ いいか、俺にくっついてくる以上、俺の思っているような人間だと証明してみろよ。他の連中がどういおうが、俺はお前を弟分を選んでんだ。それだけの価値があると勝手に思い込め！」

しばらく痛そうに後頭部を押さえていた立村は、じっと俺の顔を見つめた。感情のない、しんとした目つきだった。

とびかかってきそうな気もしたんだが、様子を見ることにした。

「はい」

こくと、喉のところが動いたのが見えた。目はそらさずに、あごを引いた格好で、

「本条先輩に、迷惑かけません」

なんとなくまぶたのところがふわっと赤く染まっているような気がした。あいつも男だ、俺は気付かないふりをしてやった。

立村以外ならば誰でも評議委員長候補としてOKが出るだろう、それは俺も否定しない。

今までの青大附中評議委員会を守りたいんだったら、俺も三年の先輩たちが訴える方向で考えただろう。いくらめんこがっているとはいえ、立村を無理に推したいとか言い出して、周りを白目にしてしまうようなことはしないだろう。

けど、俺がやりたいのは、守りじゃない、攻めだ。

「ビデオ演劇」やったり生徒会を食ったり、これからすべきことはどっさり用意されている。ひとつひとつ升目をつぶしていくように突っ走っていくのが俺のやり方だ。多少の傷は気にしない。やってられない。

あえて副委員長を置かないという選択肢を選んだのは、同期連中がみな似たり寄ったりの発想の持ち主だったから。決して信頼してないわけじゃあないんだが、クローンがほしいわけじゃあないんだ。むしろ、まったく違う感じ方をして、俺よりもずっと傷つきやすく、どうしようもなく不器用で、それでいて俺のことを慕ってくれる奴にいてほしかった。もし俺を信頼してくれないんだったら、考え方違うだけでむかついておっぼり出したくなるだけだ。とことんずれてていいから、俺の背中にくっついて離れない、そういう奴がほしかった。

「立村、これからどうする？」

「羽飛たちに電話入れて、今日のこと謝ります。やはり先約優先が当然だと思うから」

「まあそうだな、それも一つの手だ」

俺なら決してしないだろうが、立村にとってはごくごく普通のことなんだろう。まだ三時半前後だ。もしかしたらクリスマスデート真っ最中かもしれないぞ。連絡、つけてほしくねえよな普通は。電話ボックスにかけていった立村は、すぐに戻ってきた。たぶん連絡つかなかったんだろうな。その辺はどうでもいいんで聞かないでおく。

「あの、先輩」

コートのポケットに片手を突っ込み、肩を上げて寒そうに身をかがめていた立村は、

「今日はあと、ひまなので、なんでも言われたことやります。何すればいいですか」

じっと俺を見据えた。いかにも、パシリになるって覚悟の顔だった。別に俺は、下級生をこき使いたくてあいつを弟分にしているわけではない。けど今こいつが自分から、俺にくっついていたいって言い出したんなら、使わない手はない。鉄は熱いうちに打ってっていうんだ。

「そうだな、お言葉に甘えてだ」

とりあえずはそっぽ向いたままで、俺は考えるふりをした。

「俺の家でまずは、超ハードコアのエロ本でも見るか」

通行人の耳に入ると大迷惑なんで、さすがの俺もこの辺は声を低くした。立村の顔がひきつった。

「見た後で、お前の素直な感想を聞かせろよ」

「先輩、そんな、あの、できませ」

「男に二言はないだろ！ 『なんでも言われたことやります』って言ったのは、お前のほうだぞ

立村」

黒いマントの襟に顔をうずめるようにして、立村は「はい、わかりました」とささやき声で答えた。

——さーてと、楽しみだ楽しみだ！

演技をする以上、演じている人の感情を読み取ったりするのも勉強なんだしな。

「先輩、あの、今日、先輩の……」

「あ、お前もスケベなこと考えてただろ。デートってのは真夜中、五分もあれば完了だ」

「そんなこと、考えてないです、けど」

「口より身体の方が正直なんだって、わかってるだろが。ま、家についてからゆっくり観察してやるからな」

一瞬立ち止まり、コートを直そうとする立村。まったく、俺だったら絶対にしないよな。

自分の発した言葉を後悔しているんだろう。隣でもうりんご状態と化したあいつのほっぺたを時折つついてやりながら、俺は上機嫌で家に向かった。

素直に本能を発揮して鼻血噴いてもOK、照れのあまり俺に八つ当たりしてもOKさ。あいつに感じたまんまの言葉をどっさりしゃべらせれば、大成功なんだ。めでたいぜ、メリークリスマス！

夏休み。梨南は素早く一年B組の教室を抜け出した。評議委員会の夏合宿はあと三日後だ。立村先輩に頼まれた「一年生評議委員会用デジユメ・一学期を終えて」をもっていかななくてはならない。とっくの昔に完成していたけれども、清書する紙を選ぶのに時間がかかったのだ。階段を駆け上がり、二年D組の教室前で十分間、じっと待った。汗がじんわりにじんできるとは気合で押さえた。だらだら流している連中なんてだらしがない。そう梨南は思う。

「立村先輩！」

一番先に飛び出してきたのが羽飛先輩、清坂先輩、その後別の知らない先輩たちがぞろぞろ続き、最後にひっそりと現れた。さすがに七月末とあってワイシャツにネクタイをしているだけ。半そでのままだ。顔だけが真っ白い。

「先輩、生きてますか」

「杉本か。待っててくれたのか？」

「当たり前です。先輩が忘れてしまうのは目2見えてます。私が覚えていないと大変です」

きちんとまとめた封筒を取り出した。夏用の風鈴印刷和紙便箋だった。立村先輩は和風のなにかが好きだというのを、かなり確信していたからだ。

「先輩、今日はしっかり全部読んでください。家で目を通すなんてことをすると、先輩のことですから絶対に記憶に残りませんよね。『おちうど』までお付き合いします」

「ごめん、けど今日はさ、ちょっと羽飛たちと用事があるんだ。あした、あらためてどうかな」

ひょいと眺めれば、A組前の廊下で羽飛先輩と清坂先輩がうろうろ手持ちぶたさにしている様子。清坂先輩と顔の位置がぴったり合ったので、まずは挨拶した。でも、次期評議委員長の立村先輩が、彼女に現抜かしているいいんだろうか。いや、本当の気持ちを梨南はよくわかっている。本当は梨南といっしょに出かきたいはずであろう。なのに、いろいろお付き合いがあって、ってところだろうか。

——可哀想だわ、その辺は大目に見てあげよう。

——だって立村先輩は、二年同士でお付き合いが大変なんだから。そのくらいわかってあげなくてはいけない。私くらいの頭があればそのくらい、大目に見てあげるべき。

奥歯をかみ締め梨南は、頷き手渡した。

「きちんと読んでください。これは私からの命令です」

「わかったよ。それにしてもきれいな用紙、使ったね」

——やっぱりわかってくれた。

ちょっとだけ満足、かなり納得。

立村先輩はかなりぼんやりしている人だ。本条先輩にはかなり買いかぶられているし、次期評議委員長になるのはお約束。たとえ天敵新井林たちが文句を言ったって、本条先輩の命令には逆らえない。梨南を唯一堂々と認めてくれる先輩だから、この人にはなんとしても、敏腕評議委員長として立っていただきたい。だから徹底して梨南は、立村先輩を守ろうと決意したのだ。九九がいまだに瞬時に言えないとか、テスト中にいまだ指を使って計算しているとか、頭数を数え

る時に五回数えて五回とも数が合わないとか。すべてをひっくるめて、梨南は守ろうと決めている。

——だって、私の能力をきっちりと認めてくれる男子なんて、この世で立村先輩だけ。

——私のことをこよなく好きでいてくれる男子はこの人だけ。

——だったら、徹底して私は、お付き合いしてあげます。いろいろ事情があって清坂先輩を選ばざるをえなかったのだったら、私の方で近づいてあげて、欲求不満を満たしてあげます。

——欲求不満？

夏の風に吹かれて立村先輩は軽く前髪をかきあげた。すぐに落ちる髪の毛。きっとドライヤーを使っていない。今度の合宿の時は、父の使っている整髪料を持って行ってあげよう。すこしくらいはローエン格林様に近い感じになるかもしれない。

「先輩、読んでください。読んでくださったらご褒美あげますから」

「ご、ほうび？」

きょとんと、まん丸な瞳で梨南を見つめる立村先輩。ワイシャツの袖から抜けた腕が細い。もしかしたら梨南よりも骨度が高いかもしれない。人形に大きめの服を着せたようなだぼだぼな感じ。だらしなくも見えるけれど、撫で肩の立村先輩にはちょうどいい。さすが、よくわかっているではないか。やはり清坂先輩の「彼氏」とあるだけあって、見た目には気を遣わざるを得ないのだろう。自分の不細工度をごまかさざるを得ないのだろう。同じ学年だったらいろいろ梨南もごまかしてあげるよう努力するのだが、いかんせん先輩と後輩。頭のレベルが違いすぎるとはいえども、辛いところだ。

——しかたないわ。私が男子の喜びそうなことをして、少し気合を付けてあげましょうか。

梨南は一瞬頭の中を整理整頓した。一年B組の教室で、新井林とはるみが堂々と手を取り合い出て行ったのはいつものこと。しかし、最近になっておぞましいものを発見してしまった。

昨日の放課後だ。授業、掃除が終わった後。

——健吾、ごほうびになにがほしいの。

——言葉じゃねえよ。

なんと、えせローエン格林新井林がいきなり肩を抱くしぐさをしていたではないか。はるみはうつむいて真っ赤になりつつも、されるがままになっていた。誰もいない教室内でだ。梨南がそれを見つけたのは偶然ではない。わざとだろう、梨南が花森さんと「和風バンド」についてのお話をしながら廊下を歩いていた時、ジャストタイミングでやってのけたのだから。

花森さん曰く。

「へたね、あの二人。もっと感じさせるようなやり方あるのにね」

——汚らしい。花森さんは別けど。

花森さんが彼氏とお泊り経験していても、ちっとも汚いとは思わない。でも、どうしてもはるみと新井林とだと、汗がにじんで干した跡のTシャツを着ているような気持ちになる。

——男子ってあんなことをごほうびにするのね。いったい何のごほうびなのかわかんないけど。あんな贅肉部分を触らせて、気持ち悪いなんて思わないのかしら。世の中、やっぱり、狂って

るわ。

でも、ごほうびとして、ああいうことが通じるのだったら、梨南にも用意がある。何も減るものではないし、立村先輩好みのプレゼントを選ぶのに苦労するよりはました。それに、少しでも次期評議委員長としてまともになってもらわないと、ついていく梨南としても許しがたいことだ。

立村先輩が戦う相手は、あの新井林なのだ！

頭脳明晰、外見ローエン格林、こんな完璧な男を、どうやって「不細工・無能」の代名詞たる立村先輩が崩せるのだろう。梨南がいないとだめなのだ。清坂先輩では、役不足なのだ。

——あの人には。

「立村先輩、私は先輩に評議委員長としてきちんとしていただかないと困ります。ですからきちんと今日中に私のレポートを読んでください」

「わかったわかった。そんなに怒るなよ」

分かっていない顔だ。向こうでふらついていて羽飛先輩と清坂先輩が近づいてくる。ちょうど、二人向かい合っている姿が、向こうに見えるはずだ。あっという間に廊下は人気なし。みな急いだんだろう。

「わかってない顔しないでください。いいですか立村先輩。男子はごほうびがないと燃えない馬鹿な生物ですからしかたないとわかっています。ですから、私も少しだけごほうびあげます」

じっと立村先輩の瞳を覗き込み、力いっぱいにらみつけた。ちょっと引いたふうの立村先輩。絶対に梨南のことを嫌わないのはお墨付き。だから、目が壊れるくらいたっぷり見つめられるってわけだ。

「ごほうび？ うれしいな。杉本のセンスは俺も好きだよ」

「手、出してください」

梨南は、立村先輩のあいている手を素早く取った。軽く、右胸の頂点にしっかりと手のひらを押し付けた。

「あ、あのさ、杉本……」

隣りで立ち止まる気配あり。男子はえさでつるのが一番だ。羽飛先輩も、もちろん清坂先輩もご存知だろう。梨南は一年の段階でマスターしているに過ぎない。

「いち、にい、さん、しい、ご。終わりました」

思いっきり立村先輩の触れた手を振り下ろす。ぶらんと下がった。身体が硬直したのか、目は梨南の顔をじっと見つめたままだった。

「立村先輩、一年B組のあの馬鹿男子評議委員は、こういうことをなんかの『ご褒美』だと勘違いしていたようです。でも、もしこういうことが立村先輩もきらいでなかったら、いくらでも差し上げます。なんで贅肉なんて触って楽しいのか意味不明ですが、先輩が評議委員長としてきちんと働くまでは、私がごほうびをさしあげます。きちんと、読んでください。命令です」

口が半開きの羽飛先輩、清坂先輩にきちんと両手合わせてお辞儀をした。

「杉本さん、今、なにか、してたよね」

「清坂先輩、ご苦労さまです。本当に大変だと思いますが、私も清坂先輩が辛い思いをしないように努力します。お疲れ様でした」

軽く羽飛先輩に一礼した後、梨南は背を向けた。夏休み前日。ひとつ、よいことができた。

1

夕食がが終り、評議委員会のミーティングを終わらせた後、それぞれ自分たちの部屋に戻った。ツインルームに分かれているホテル。二人ずつだ。大抵は同じ学年同士で組むのだけれども、僕の一存で本条先輩と特別に一緒にしてもらった。

別に悪いことをするわけではない。一部、青濤大学附属中学評議委員会中で騒がれている「本条里希・立村上総ホモ説」を煽り立てるのはわかっているけれども、この夜は本条先輩とふたりっきりで話をしたかった。評議委員会合宿を企画している時、二年連中も僕の意向を理解してくれて、部屋を本条先輩と組のツインで取ってくれた。

もっとも理解してくれなかったのは女子のみなさまだ。

清坂美里、通称清坂氏にいたっては、

「立村くん、どうしてそんなに本条先輩にひっつきたがるわけ？」

「話が合うからだけど、それ以上の理由、必要か？」

わかってももらえないだろう。しかたない。

僕の一存だが、しかし、起こることはかならずしも予定通りではない。

たまたまオセロ勝負で、負けた方が勝った方の言うことをひとつ聞く、という約束をしていたのがまずかった。最初から蹴っておけばよかった。最後の最後で詰めを間違えて全部黒に染まってしまった時いきなり、

「男としての証拠を見せてみろよ。立村。人前に出せるような状態に保ってるのか？ 『あれ』を」

言われるとは想像だにしていなかった。誰だってそうだろう。、

伏字にするしかない、あれのことだ。

わかってもすっとぼけるしかない。同学年だったら通じる。しかし相手が悪かった。

「なんですか、『あれ』って」

「自分の『息子』の面倒くらい見てるんだらう。写真のお姉ちゃん見せるとか、清坂の顔を教えてやったりとか。嘘つくなよ。今もだいぶ、たまってるんだろ。ほら、見せてみろよ。俺がレクチャーしてやる」

僕の神経を逆なでするようなことを平気で言うのが本条先輩の常である。

背中を向けて一切無視しようとしやれこんだ。

「なに知らないふりをしてるんだよ。ほら、見せないなら俺が脱がせてやるからな」

あやうく押し倒されそうになり逃げる。

本条先輩は女性に関心大の人だから、「本条・立村ホモ説」はありえないと思う。

「ははあ、お前まだ皮がむけてないのかな」

「なに言ってるんですか！」

僕だって本条先輩の言いたいことが全くわからないほど鈍感ではない。あえて言うなら、小学校の頃からそういう知識は、本条先輩並みに本で仕入れている。こんなことで動揺するような自分ではない、はずだ。はずなのに、言い返せない。

本条先輩はめがねをはずして、僕の肩を叩きながら、耳たぶを軽くひっぱり、最後に頭を撫でまわした。

「もう一つの選択肢があるんだが、どうする？」

「なんですかいったい」

「今から俺の見ている前で、清坂のところに行って、『お前が好きだ！』と絶叫して来いよ。できるか？ だったらやってみろ」

清坂氏のいる部屋は、たぶん二年女子が集まって騒いでいるんだろう。僕がこの顔を出して叫ぶなんて、恥ずかしいまねできるだろうか。

あとで清坂氏に「あれは嘘だったごめん」と言えればいいけれど、かえってどつぼにはまるだろう。

浴衣の襟がはだけているのをそのままに、尋ねた。

「本条先輩。トイレの中でもかまいませんか」

「どういうことだよ。トイレの中って。俺が見てないところで手を抜いてしごこうなんて思っていないだろうな」

甘かった。完全に見抜かれている。

「だからお前はガキだっていうんだよ。立村。ほらほら、あきらめろ。手付かずのティッシュも、一箱あるぞ。毎日やってることなんだから。俺は後ろを向いているから、背と背を合わせて励めばすむことじゃねえか。俺だったら余裕で五回は抜けるが、お前、できるか？」

人間じゃない。どうせ僕は家庭手工業だ。機械工業に燃える本条先輩とは違う。

「立村、おいどうした。そうか、お前身体弱いもんな。心臓が辛いのか。なら大負けに負けて、三回にしてやる。それくらい立たないようだったら、お前、ちょっと第二次性徴の真っ只中でまずいよそれは」

「なんで俺がこんなことしなくちゃいけないんですか。たかがオセロに負けただけでしょが」

男同士の掟として、先輩には基本として逆らえない。

上級生にはよほどのことがないと、刃を向けてはならない。

青大附属評議委員会は基本として、上級生下級生みな仲がいいけれど、一度命令されたことはかならず従うこと、が約束だ。

本条先輩に絶対服従の身の上だ。

「わかりました。それでは、てぬぐい貸してください」

薄いタオルを四つ折にして、僕は本条先輩に目隠しをした。

「おいきついぞ、ちょっと痛いぞ」

「いいですか、絶対に振り向かないでください。絶対に終わるまで、何も言わないでください。約束してください」

最後に部屋の鍵を締め、カーテンを掛け、ライトを最小限に絞り、僕は本条先輩の背中合わせに座った。膝を抱えて、息を整え、ティッシュの箱を側に寄せた。

2

「さっさとひっくり返ってるんでねえよ」

髪を引っ張られても起き上がる気力がない。自分で手ぬぐいを外し、本条先輩は僕の顔を見下ろした。ぐいぐいと膝の側までひっぱっていった。浴衣の前が思いっきりはだけている。

「お前、ふつうは三回だろ。毎日そのくらいはしてるだろ？」

「悪かったですね。どうせ俺は本条先輩と違います」

「たった二回でへたばってて、ったく。こんなだったらお前将来清坂に愛想つかされるぞ」

「本条先輩のように毎日鍛えてないですから仕方ないでしょう」

部屋の中は全部締め切っている。ぎっちりとクーラーを掛けたまま。それでも暑いのは汗をかいたせいだと思う。本条先輩のお言葉はさらに続く。

「まあ立村のことだから、五回はしんどいだろうとは思っていたさ。だから三回に値切ってやったのにな。二回で、もう限界か？ ちゃんとタンパク質取ってるのか？ おい、ほら、返事しろよ」

額をぺたぺたやるのもやめてほしい。顔を振り切り、背中を向けた。

背を向けたままでさっきまで、していたことだった。

「本条先輩、もう義務は果たしました。俺はそういうのを見る趣味ありませんから、あとは勝手にしてください」

両手をついて立ち上がり、僕はあらためて襟をかきあわせ、帯を結び直した。裾が乱れるのは、まあしていたことのことを考えると仕方ないけれど、もし誰かに今の状況および室内の匂いをかがれたら大変なことになる。

「いいさ、とにかく、やることは、やってたということはわかった。しばらく補給してろよ。ほら」

本条先輩は冷蔵庫からレモンジュースを一缶取り出し、横たわっている僕の枕もとに置いた。そのまま床に座り、ベットにもたれて大きく伸びをした。

「あのなあ、立村、他の連中とこういう話、しないのか。一、二年の頃なんてな、他の連中や結城先輩たちとまさにこういうネタしか振り合わなかったぜ。こんな感じで」

言いかけるのを遮った。

「先輩も、背中と背中を合わせて、今やってたようなこと、なさったんですか。あの、結城先輩に命令されて」

「勘違いするな。俺は全員で顔を合わせながら、互いの『もの』を見ながら、やったんだ。大きさ、太さ、堅さ、使いやすさ、全部チェックしながらな。お前みたいに、『第三者にじろじろ見られて平気のできる奴なんて、いませんよ。変態なんじゃないですか。本条先輩』なんて言わなかったからな」

本条先輩は少々露出狂の気があるらしい。

僕には理解不能だ。

本条先輩の嗜好というのは、僕と百八十度違っていることくらいわかっている。でも、押し付けないでほしかった。

「男同士で、きれいなものじゃなし、そんなの見てどこが楽しいんですか」

「男の本質がそこに現われるってことだ。まあ原点ってとこだ。立村、お前ももう少しな、堂々と見せつけるなりしろよ」

「嫌ですね。人を見る趣味なんてないんです。俺はそういうのは」

言いかけると反対に遮られた。

「真剣にはあはあ言ってたくせにな。悪いが全部、耳澄ませて聞かせてもらったぜ。お前の息遣いにせよ、身体の動かし方にせよ。見られなかったのはかんじんのものだけだ。大目に見てやっただけでも感謝しろ」

「一言言っていいですか。変態っていうんですよそういうの」

言い終わる前に額を思いっきり弾かれた。

「お前は本当に、ガキだぜ全く」

浴衣の襟をぐいぐいひっぱられ、とうとう膝に押し上げられた。膝枕っていうものなんだろうが、野郎の膝にのっかったって何が嬉しいものか。女子だとしてもそれほど気持ちいいとは思わないような気がするけれど、あぐらをかくのはやめてほしい。へこみに頭を押し込もうとするのもやめてほしい。

「前から思ってたけどな、どうしてお前集団で風呂に入ったりするのをあそこまで嫌がるんだ？

そりゃ、宿泊研修でツインルームにしようとか、大部屋の雑魚寝はやめようとか主張するのはわかる。俺だってあんまりプライバシーを侵害されるのは好きじゃねえよ。だがな」

今度はげんこつでこめかみをぐりぐりもまれる。首根っこを捕まれたままだから身動き取れない。足をばたつかせる。

「痛い、やめてください、先輩」

「黙れ。もしもまだ皮がむけてないんだったら、俺とか結城先輩とかがいろいろレクチャーしてやるさ。小さすぎるから見せられないとか、そういう問題か？ おい、立村、本当のことを言ってみろよ」

「何また勝手な妄想膨らませてるんですか。関係ないです」

身体に手が回ってくるので、全力つくして腕を振り払った。起き上がる表紙に先輩の腕を思いっきり振り払ってしまった。腰をついた格好で本条先輩は僕をねめつけた。僕は正座して、息を整えた。よけいな誤解を解くためだ。

「いいですか。本条先輩。俺は集団行動が嫌いなだけです。風呂くらいゆっくり一人で入りたいし、湯船につかってぼんやりしたいですよ」

「じじいくさいこと、言うなあ」

「本条先輩だってそうじゃないですか？ 評議委員長やっていて、神経張り詰めていて、やっとな一人になれる時がなかったら、やってられませんかよ。俺だってそうでなかったら、うちの担任を

いつ殴りつけたかわからないです。校内暴力を未然に防いだけです。それをなんですか。まるで」

言葉に困った。皮だとか大きさだとか、非常に言いづらい。

「お前、よっく聞け」

本条先輩は自分の頭を軽くかきながら、膝を撫でて、

「今の二年野郎連中にぶちまければいいだろ。そういう問題はな。何もお前ひとりで抱え込んでばかりいるんじゃないや。俺だってそうだ。評議やってから三年になるけどな。なんとかやってこれたのは、暇な時に息子の大きさ比べあってしゃべりあえた連中がいたからだ。まあ、大きさは俺の方が一番上だと思うけどな。だいたい十九センチいってるかいてないか……」

「本条先輩はどう思うかわかりませんが、俺は今の二年生連中とうまくやっていますよ。ものの比べあいなんてしてませんが、でも、困った時はお互い様だし。それにみんないい奴だって、俺の方が十分わかっています。でも風呂場に集団で入ることとそれとは違うでしょう。本条先輩」

いったい本条先輩は何を言いたいんだろう。自分の持ち物自慢をしたいのか、それとも僕にお説教したいのか、二年の誰かから僕についての告げ口みたいなのが届いたのか。もし目の前にいるのが、わが二年D組担任の菱本先生相手だったら即座に蹴り飛ばして部屋を出ているだろう。本条先輩だから、おとなしく正座して聞いている。言いたいこと言わせてもらっている。

「立村、この二年ですっかり俺に口答えするようになっちゃったなあ。一年の頃は俺の後ろばかりくっついてたのにさ」

「今でも先輩のことは心から、尊敬しまくっていますよ。ただ、間違っって変なこと言われたくないだけです」

大げさなため息をつくとき、本条先輩は両足をV字に広げたまま、うつむいた。視線はご自分の帯下にむかっている。

「ああいえばこう言う。ったく、俺もストレスたまった。一発抜くか」

「本条先輩、抜くって何をですか」

話の流れから行くと、「抜く」というのはひとつしか連想できないが、確認の意味で尋ねた。

「一晩五回、の『あれ』に決まってるだろう」

——先輩、正気か。

僕の顔をうざったように眺め、さらに頭の痛くなるようなことを、本条先輩はつぶやいた。

「見たいなら見るか？俺のは最高で二十センチは行くことあるぞ」

「本条先輩の家ではどうかわかりませんが、立村家ではそういうのを見るなんていうのは、変態行為だと認識しています。ええ本当に」

見ていたらそんなことしないだろう。思っていた僕が甘かった。

「しっかりと目を見開いて見ておけ」

本条先輩は浴衣の裾を軽く広げると、すばやく準備を済ませた。

手際によさよ。僕は目を見開かされていた。

確か、小学校の時に同級生だった恋人がいて毎週一回は、泊りこみしていると聞いた。その一方で、現在高校三年の恋人がいるとも。そちらの方には毎週二回。泊りこむってことは、それなりに、そういうこともあるんだろうから、毎週三回の計算になる。

本条先輩の口からも聞かされたし、他の三年評議の先輩からも、「本条は遊び人だからなあ、まだいるかも知れねえぞ。最近では野郎にも手を出してるってもっぱらの噂だぜ」

と脅かされたりしている。もっとも、僕は半分以上嘘だと思っている。もちろん恋人らしい人がいるのは確かだろうし、コンドームを持ち歩くのが日常だということまでは真実だろう。

だれかれ問わず、女子に手を出して、傷つけて、捨てる、そういうことをする人はない。

僕は信じている。

実際、本条先輩を迫りかける女子は青大附属でも多いと聞くけれど。一切、告白関係は断っているという。単なる女っただらしたら、どんどん受けて飽きたらあっさり捨てるだろう。

最初からそういうことをしないで、現在の恋人ふたりと長い付き合いをしていることからして、先輩はポリシーをしっかりと持っている人だと思う。

本条先輩がひとりで息を荒げて励んでいるのを、いつのまにかぼんやり眺めていた。考え事していると、視界に見たくないものが入っても気付かないですむ。

「さってと、ラストだ。おい、立村。何凍り付いてるんだよ」

「いや、やっぱり、すごいなあ」と

気が抜けた声で僕は答えた。本条先輩が豪語していた通り、ご自分の所有物は相当な長さだった。しかも、休みなく四回ぶつつげだ。大丈夫だろうか。心臓苦しくないのだろうか。

「先輩、もう無理しないほうがいいんじゃないですか。嫌ですよ。こんな格好でぶっ倒れて、病院に運ぶなんて」

「まあ、言い訳はできないわな。じゃあもっかい行くぞ」

——さっきだって、本条先輩に目隠しして、部屋の中を締め切って、薄暗くしたから、恥をしのんで出来たけれどさ。

——小さいとか皮かぶってるとか、そういうことじゃなくても、見られたくないものではあると思うんだけどな。

正座したまま僕は、まだ気力に満ちているであろう本条先輩の顔を覗き込んだ。どうしてかわからないけれど、汗をかいているわりに顔は真面目だ。おちゃらけて見せびらかしている、そんな雰囲気ではない。

「よっし、終わった、これでノルマは果たしたぞ」

ティッシュを数枚奪り取り後始末をした後、本条先輩は後ろにばたんと倒れこみ、万歳と手を挙げた。今だったら襲ってしばきあげられるチャンスだ。両手をひつつかんで、僕は本条先輩の腕を起こそうとした。

「なあにボートこぎのまねなんてしてるんだよ」

「先輩、こんなところで寝転がっていると、けりを入れるか腹に座り込むか、それとも首しめるか。襲われても文句言えませんね」

「ばっかじゃねえの。お前の腕力が俺にかなうと思うのかよ」

それでもやれやれという風に起き上がり、本条先輩は裾を直した。

「立村、せっかく正座してるんだから、真面目なことひとつくらい聞いとけ」

あぐらを書き直すと、周りを見渡した。

「さっき部屋を締め切ったから外には漏れないな」

「大丈夫でしょう。お互い何してるかなんてわかりませんよ」

「いや、清坂あたりが聞き耳立ててるかもしれねえぞ。どうする立村。さっきのはあはあを聞か
れていたら、どう言い訳する」

「本条先輩とプロレスやってたと答えますよ」

つらとした調子で僕は答えた。

「まあ、似たようなことだもんな。お互い竿をしごいていたなんて、女子には俺も簡単に言えね
えな。お前、羽飛や南雲とも、こういう話しないのか？」

首をかしげてみる。耳もと、耳たぶを通してあの二人とのしゃべりが蘇ってくるようだ。

「ない、ですね。一方的に聞いているだけで」

また大げさに、「お前嘘こくなよ」とどつかれるかと思っていた。

だから身を堅くしてすぐに動かせる態勢を取っていた。待っていたのに全く気配がない。足の裏を両方つけたまま、本条先輩は器用に立ち上がり、ベットに腰掛けた。両手を膝の上に、ハの字にしておき、軽く握っていた。こう言うときの本条先輩は、僕にきつい指示を出すか、もしくはちょっとしたしくじりで説教されるか、のどちらかだ。あまり嬉しいことじゃない。手招きされて、膝をついたまま僕はにじりよった。ちょうど、犬が飼い主にひつつくかのようだった。

4

部屋の中には、終わった後に漂う独特の匂いが漂っていた。野郎仲間の部屋に入ると、大体どうい
うものなのかがぴんとくる。僕だけではない、他の奴だってきっとそうだろう。ひとりで片
をつけた後はかならず、空気の入替えをする。本当だったらすぐに窓を開けて深呼吸したか
った。

本条先輩は首を振ったまま黙っていた。動くわけにいかない。互い、汗の匂いも残っていて気
持ち悪かった。

「もう分かっていると思うがな、お前、来年から評議委員長だって自覚持ってるのか」

「本条先輩が委員長である以上、考えてはいけないことじゃないですか」

たぶん誰かが壁に耳を押し当てていても聞こえないような声だった。

本条先輩は言葉を切った。僕の顔をじっと見下ろした。返事しろということだろう。

飼い犬の気持ちで答えた。

「俺は本条先輩のやり方に納得いかないことがないとは言いません。本条先輩そのものとは違っているとわかっています。だから、従っています。悪いですか」

「悪くねえけどな。この前の杉本のことといい、一年野郎組とのどたばたといい、お前のしていることはどう見たって、次期委員長の意識を持っているとは言えないだろう」

「すみません。尻拭いしてくださったのは感謝してます」

情けない話だけれども、その通りだ。二年に入ってから僕は、本条先輩の考えと若干のずれがあることを感じていた。正確に本条先輩の意図が読み取れなくて、つい反発してしまう時もあるにしもあらずだった。別にうちの担任だとか、先生たちには申しわけないと思うことなんてない。

本条先輩にはなんとなく、そうしても嫌われないんじゃないかという甘えがあったのも否定できない。

同じクラスの友達、担任、ましてや評議仲間には感じないものだった。

「まあ、いいさ」

まるで犬だ。今度は頭の上にちょこんと手を置かれ、軽く振られた。本条先輩は僕を飼い犬としか思っていないのだろう。おとなしく従う僕も僕なのだが。

「でもな、立村」

天井を見上げる本条先輩に釣られ、僕も視線を追った。ぼんやりした影のかたまりが動かないままでいた。

「俺は来年、公立を受験するつもりだ」

話のつながりがつかめなかった。

また評議委員関係のことで怒鳴られると思っていた。もしくはひっぱたかれると思っていた。髪の毛と一緒に頭の中がぐしゃぐしゃに乱れた。

「本条先輩、来年、公立って」

言いたいことが口からうまく出てこない。

青潟大学附属中学の場合、三年の秋に附属高校へのエスカレーター式進学を希望するか否かを確認される。今はまだ夏休み。三年の秋に最終的な決断をするとは聞いている。音楽大学に進むとか、学業についていけないとか、そういう事情がない限り、大抵の青大附中生は附属高校へ進むものだと信じきっていた。

もちろん、本条先輩もだ。

学業の問題なんてあるわけない。三年間学年トップだと聞いている。

考えられるのは、いくところまで行っている女性関係だけだが、今までその手の問題でつるされたことはないとも聞いている。

変だ。納得いかない。

「なんでですか、本条先輩」

残りは咽に押し込んだ。とんでもないことを口走りそうだった。

「何でもいいたろう。それこそお前の言う『プライバシーの侵害』だ」

きっぱりとそれ以上の追求を拒否された。

今誰かが、僕と本条先輩との状態を生で見えていたらどうしようもなく「本条・立村ホモ説」に真実味がかってしまうだろう。他の連中のように軽く「あ、そっですか。本条先輩公立で新しい女の子をひっかけようとしてるんですか」とか「何かまずいことやらかしたんですか、あらあら」とか切り返せばたぶん他の先輩や同じ学年の友達だったら僕もそのくらいの機転はきいたかもしれない。それができないのが、僕にとっての本条先輩たるゆえんだろう。

「附属高校、どうして行かないんですか」

プライバシーの侵害と罵られようと、これしか聞けなかった。情けない。

本条先輩は天井からゆっくりと視線を正面の壁に移していった。手は僕の頭にのっかったままだった。一人でぼんやりと考えていたかったのかもしれない。言えない理由がきっとあるのかもしれない。聞き出したかった。それこそ、浴衣の襟を締め上げて白状させたかった。

「立村、他にこういうことを話せる奴とかいないのか」

話が飛んで、ついていけない。答えられなかった。

「一日何回やってるとか、皮がどうなってるとか、授業中いきなり元気になっちまって困ったとか、そういうこと、俺以外に話せる奴、いないのか」

「本条先輩にだって好きで話してるわけではないですよ。ばかばかしい」

切り替えがうまくいってない。回路は本条先輩公立進学ショックでヒューズが飛んだまま、僕は答えた。

「羽飛にも、南雲にも、しゃべってないのか」

「あたりまえでしょう」

「じゃあどうやって欲求不満解消してるんだ？ まさか清坂に直接……」

「んなわけないでしょう！」

回路がただでさえ混線状態なのに本条先輩は、僕に変なことばかりふっかけてくる。

話をごまかしたいのかそれとも。

「俺はただ、本条先輩が公立受験するのが信じられないだけです。俺なんかよりもずっと成績いいのに、なんでよりによってですか。いきなり聞かされたら俺じゃなくても驚くに決まっていますよ」

「そうか、話したのは、お前が初めてだ」

つばを飲み込みながら、じゅうたんのけばをむしった。

どのくらい黙っていたのかわからない。時間の感覚は完全に麻痺していた。

本条先輩の手はそのまま僕の頭に乘ったままだった。

なんでここまで僕が、本条先輩を慕うのか、分からないと誰もがいう。

ただ評議委員会で一緒だったから、何となく声を掛けてくれたから。

そのくらいのことだったら、他の三年先輩だって同じことだった。現在三年の先輩たちとの仲良さは、それこそおかしいと思われるくらいだった。二年の連中だって、それぞれ仲のいい先輩

はそれぞれいるだろう。

委員会中怒鳴られたこともある。手こそ出さなかったけれども激しい言い合いをしたこともある。

でも、この人にだけは絶対に認められたい。それだけいつも考えてきた相手だった。

周りから「立村が次期委員長だな」と暗黙の了解で視線を送られて、冷静でいられるのは、自分が本条先輩のようになれるかもしれないという夢があるからだった。いろんな修羅場に立ちながら、顔色変えずに納めていく手腕。ひとくせある今の一年生たちを手に納めているなんて、僕にはまだできない。本条先輩だからこそできることばかりだった。

——どうして泣かないでいられるのだろう。

成績がいい人だからとか、面倒見がいいとか、頭がいいとか、そんなことではない。

本条先輩のように、なりたかった。ただそれだけだ。

5

いきなり頭をはたかれた。と同時に、本条先輩が僕の背中にまたがってきた。正座したかっこうを押し倒し馬乗りになる、いささか誤解を招きそうなポーズだ。僕が馬なら、当然騎乗者を振り落とすだろう。当然だ。身体を横ひねりして、ごろんと落とした。大の字でひっくりかえる本条先輩。裾が乱れっぱなし。すねは丸見え。本条先輩に熱を上げている女子たちには見せたくない。起き上がる拍子に本条先輩は、僕の方を見て、

「行って来い」

命令口調で、つぶやいた。

「どこへですか」

「他の奴らのところで、サイズを測って来い」

話が飛びすぎる。繰り返し尋ね返すしかない。

「なんのサイズですか。また変態じみたことを命令するつもりですか。オセロの罰ゲームは終わらせましたから、俺はもう本条先輩の言うことなんか、聞く耳もちませんよ」

「口答えもいいかげんにしろ。行けってというのがわからんのか」

今度は本気ではたかれた。目を見る。しゃれでやってるのか、それとも本気なのかを探る。冗談かとたかをくくっていたのだけれど、真面目な顔だったのに、かなり退いた。

「本条先輩、それって上級生の下級生いじめって奴ですよ。体育系の部活だったら、試合出場停止ですよ。俺に、聞けって言うんですか。できるわけないじゃないですか」

他人様のそんなのを知ってなにが楽しいっていうんだろう。ただでさえ僕は二年連中とそういう話題をすることが少ない。クラスの友達とだって、めったに自分から振ったりしない。聞いているだけだ。

「だから、行けっていうんだよ。つべこべ言うんだったら俺がじきじき解剖してやるからな。さ、さっさと行け！」

しつこいようだが、本条先輩はひとつ年上だ。

男は先輩に、よっぽどのことがない限り、さからえない。

帯をきっちりと締め直して、僕は無言で部屋を出た。

灯はそのまま、薄暗いままだった。本条先輩の影だけが、身動きせずに固まっていた。

二年連中の部屋ではみんながカードゲームに熱中していた。混ぜてもらいしばらく盛り上がった後、僕は事情を話してそれぞれが何センチくらいになるのかを捏造することにしようと思った。

「本条先輩のご命令とあったら、立村も逃れられねえよなあ」

「ご苦労さん。とりあえずさ、クラス名で適当に何センチってことを書いて出せばいいだろ。本当のことじゃなくていいんだからな」

もちろん、オセロゲームの罰ゲームについては何も言わない。

ただ、本条先輩の命令だというだけで、みな協力してくれる。

僕がそういう下ネタの話題にうまく溶け込めないことを、こいつらはみな理解してくれているのだろう。無理やりはめ込むことはなかった。

「まあ、がんばれよ。いざとなったら俺たちの部屋に逃げ込めよ。守ってやっから」

もっとも、「本条・立村ホモ説」がしっかりと根付いているのを再確認したりもしたけれど。

一時間くらい間があっただろうか。僕は連中がメモしてくれた、でっちあげのサイズ表を持ってふたたび部屋へと向かった。廊下には女子たちの声が響いていた。言葉にはなっていないけれども、何かで騒いでいるのだということはよくわかった。へたしたら、さっき僕や本条先輩が息を荒げていたところもライブで流れていたかもしれない。聞いていないことを祈りたい。いや、聞かれていたら、明日の太陽拝めない。

「ただいま帰りました。本条先輩」

おそろおそろ覗き込む。本条先輩の姿を探すと窓の外をぼんやりと眺めているようすだった。同じ三年同士の先輩のところに行かなかったのだろうか。

「立村か」

「お約束通り、聞いてきました。ちゃんとメモまで取ってきました」

けらけらと、受けを狙う調子で答えたつもりだった。

本条先輩は笑わなかった。

うなづくかうなづかないか微妙な位置に、あごを動かして、ベットに腰掛けた。

「ちょっとこっちに來い」

立ち上がり、椅子に腰掛けた。有無を言わさぬ調子だけど、出掛けよりはおとなしい口調だった。ほっとした。本条先輩が本気で怒ったら、僕は太刀打ちできないだろう。手からさらりとメモ書きを受け取り、にやっと笑った。二年男子評議一同が頭を寄せ合って

「ほら、このくらいの方が現実味あるだろ」

とでっちあげたものだと、ばれなければいいが。

「ちゃんと、しゃべってきたのか」

真面目すぎる。嘘だと気付かれないように、僕は頷いた。よけいな言葉を挟まないようにした。

「奴らも、しかし、結構でかいなあ。見せてもらったのか」

「自己申告に決まっているでしょう」

今度は互いのものを見せ合えと要求するつもりじゃないだろうか。そこまできたら僕もさっさと二年男子の部屋に逃げ込み「守って」もらうつもりだ。

本条先輩はそれ以上追求しなかった。じっと、僕の顔を見つめた。何かを話してくれるのだろうか。

「なら、もう、大丈夫だな」

待っていたのに、言葉はそれだけだった。本条先輩は軽く僕の頭をふかふか浮かすようにして叩き、部屋を出て行った。

「どこに行くんですか」

「俺が三年連中のサイズを測ってくるんだ。はは、俺たちは自己申告じゃない、直接計らせてもらうってわけだ」

——本条先輩、やっぱり変態っていうんじゃないだろうか。

僕の中で打ち出された言葉。ドアが閉まったとたん、空気が煮詰まった。戸を開けて空気を入れ替えた。部屋にこもった身体の匂いがわずかずつ冷えていき、消えていく。汗をかいていたのが気持ち悪くてシャワーをもういちど、浴びたかった。

6

本条先輩が戻ってくる前に、身体のぬめりを落とし水浴びし、ベットに横たわった。いつものこととはいえ、二回も抜いてから、さらに本条先輩の衝撃告白を聞き、二年男子連中と多少なりとも下ネタをかまし、と、苦手分野の実践をむりやりさせられたのだ。身体の方が悲鳴をあげていても当然かもしれない。

本条先輩が公立に進むということは、もう半年しかこの学校でしゃべることができないってことだ。同じ附属高校だったら、なんだかんだ言っても顔を合わせる機会が多いだろうとたかをくくっていた。僕は最初から、青大附属高校の英語科を狙っているから、公立に進むなんて選択肢は持っていない。無事に附属高校推薦をもらえるかどうかの方が心配だ。

僕が本条先輩に頼りっきりだっているのも、周りに言われるまでもなく分かっていた。本条先輩がいろいろ僕の顔を面倒みてくれたから、評議委員会でもふつうに話しをすることができた。ろくすっぽ九九もいえない僕が、評議委員長の内定をもらうことができた。

何もかも、本条先輩がいたから。

青大附中でやってこれた。

今の一年と二年が折り合い悪く、特に僕に対しての信頼が薄いということも、肌を通して伝わってくる。僕の責任だ。本条先輩にいつも怒鳴られている。

でも言い返せたから、評議委員会では壊れないですんだ。

本条先輩には何を言っても許される。

味方でいてくれると、本能でわかっている。

もちろん、他に仲のいい友達はある。同じクラスの羽飛貴史や、南雲秋世、さらにいうなら同じ評議委員の清坂美里、数えていけば溢れている。時々、ずれを感じて戸惑う時もあるけれども、それはそれでみないい奴だとわかっているから、飲み込める。ただし、ふたりっきりで目隠しをしてどうのこうのとか、相手のものを見合うとか、そういうことは決してできないだろう。すぐに立ち上がって部屋を出て、三日くらい話をしないと、そのくらいは僕もやりかねない。

先輩だから逆らえなかったわけじゃない。

同じ歳の連中には口には出せないことが、二年の春から増えてきた。

そうだった。

みんなどんな写真を見て、しているのだろうかとか。

授業中、いきなり反応してしまった時にみなどうやってしのいでいるのかとか。

一晩何回抜いているかなんて、絶対に聞けるわけがない。

大きさがどのくらいあるのかとか、どうしてそれがいいことなのか、とか。

周りには「立村はあまりそういうのに関心ないから」と思われているだろう。わざとクールなふりをしてきたつもりだったから。いまさら聞けるわけもない。口に出せないけど気にかかっていたことを、本条先輩はさりげなく示唆してくれた。それだけだ。

いつしか本条先輩ばかりにべったりしていて、「ホモ説」を打ち出されるようになったのは必然だろうと、僕も思う。そんな感情なんてわからないけれど、たった一人、自分のことを理解してくれる、そういう人に出会えたら、多少のやっかみや噂なんて気にならなくなるもんだとも、よくわかった。

身体はぐったりしているのに、眠れなかった。

本条先輩が戻ってきた時も、まだ目は冴えていた。

「立村、起きてるか」

「もちろんです」

「蚊が入ってくるから、窓閉めるぞ」

「網戸にしているから大丈夫でしょう」

「いいのか、女子に聞こえたらまずいだろ」

先輩に窓を閉めさせる後輩の囁。

僕は横たわったまま、そっと本条先輩の影を追った。背は僕よりもこぶしふたつくらい高い。本条先輩よりも低いのはあきらめがつくが、羽飛に背たけを抜かれたのはショックだった。牛乳を飲んだほうがいいのだろうか。それとも何か問題があるのだろうか。

「先輩、いいですか」

「お、どうした」

横たわったまま、つぶやいた。

「どうすれば、背が伸びると思いますか」

振り返り、本条先輩は驚く顔も見せずに答えた。

「寝てれば勝手に伸びてるだろ。夜、ぎしぎし言うだろ」

——そういうもんなのか。

やたらと関節が痛い程度だ。足を曲げられないだけだ。

実は一番自分にとって、大きな問題のひとつだった。言えるわけがない。

「羽飛に抜かれたのが悔しくて夜も眠れない」

なんて、同じ学年の連中に言えるわけがない。

「あのなあ、立村。もしかして、夜励んでしまうから背が伸びないと勘違いしてたりしないか？

そうだろ」

疲れがどっと出た。身体がだるかった。言い返す気力もなかった。僕は本条先輩に背を向けた。ちかよってくる気配がする。幽霊でなければ、本条先輩の手のはずだ。ゆっくり、肩を叩いてくれた。

「じゃあ俺なんかどうするんだ。週に三回は生を経験している俺の背が、百六十九あるのはどういふことなんだ？」

「週に三回っていったい」

「お前今、何センチあるんだ？」

「百五十九くらいです」

そうだ。羽飛は百六十三だった。四センチ抜かれたってわけだ。

身体検査の結果は結構、衝撃だった。

「まあ、のっぽではないわな。でもな、お前別に、バスケやるわけでもないだろ。清坂よりは明らかに高いだろ。今んところはそれだがまんしとけ。黙ってれば、嫌でも伸びてくるってさ」

それに、と付け加えた。身を硬くして聞いた。

「二年評議野郎連中にそういうのは、これから聞けよ。あいつら、お前に全部、もののサイズを教えてくれたんだろ。それだけ聞けるのだったら立村、大抵のことは奴ら、相談に乗ってくれるだろ」

「委員会のこととは違います。本条先輩、そういうことは」

「ばかだなあ、お前。いいか立村。来年、もう俺は評議の人間じゃねえんだぞ。もう俺は青大附属から出て行くんだ。明らかに今の一年連中のものはでかいと、風呂場で見せてもらって思ったし、たぶんお前はこのままだったら勝ち目ねえよ。ひとりじゃ無理だ。もっと、同期連中を信頼しろよ。まずは手始めに、毎日何回しごいているかを聞き出すとかな」

本条先輩はそばでずっと話しつづけていた。途切れなかった。僕の顔を覗き込み、ずっと繰り返しささやいていた。僕は黙って聞いているしかなかった。頷いて、いつのまにか約束させられた。

「いいか、お前には二年野郎軍団が味方についているんだ。忘れるなよ」

できるだけすみやかに、奴らと派手な猥談をかますよう、命令だされた。

「俺ばっかりに甘ったれてるんじゃないよ。全く、立村、ずっと俺の後ろばかり付いて来てな。少しは自分で、エロ本仕入れろよ。もうお前とお前の息子の面倒を見る奴いないんだからな。おい、聞いているのか、なんか精魂疲れ果てたって顔してるな。立村、わかったか」

頷いて答えるしかなかった。本当に聞きたいことは、口に出来なかった。

——本条先輩、どうしても、公立高校受験するんですか。

毎日生まれてくる、口に出せない言葉の数々。僕はこれから、誰にぶつけたらいいのだろう。

1

——もう二度とやらないさ、ああ絶対やらないさ。腱鞘炎になるようなことなんて、もう死んだってやらないさ。書道くらい自分で練習しろよ。まったくあの人ときたら……。

手に墨汁は一滴もついていない。上手な字を書く人は、手を汚さないと書道の授業で習った。きれいかどうかは人の好みだけど「あの人」よりはずっとましだと上総は思う。

「上総、終わった？ 宛名、まだあるんだけど」

——だったらせめてプログラムを折って封筒にしまおうとかしろよ！

口に出さないのはわが身が危険だから。上総も十四年間お付き合いしてきただけあって、相手の行動を先読みできるようになった。苦労したのだこれでも。風鈴の絵柄がプリントされた封筒に筆を滑らせ終った。百通分だった。思いっきり両手を伸ばした。もちろん細筆はずずりの側に置いて、汚さぬように。

——せめてさ、筆ペンを使わせろよ。自分でやらないくせしてさ、何が本物の毛筆で間に合わせろ、よだと？

窓とカーテンは開けっ放し。母がいなくなっただけからはずっとこうだ。

「終わらせたんでしょね、上総、ほらまだあるのよ」

お礼の一言も言いやしない。さっそく五十通分の追加封筒をはずりの隣りに置いたもんである。墨汁の側に並べるのだけはやめて欲しい。

「母さん、あのさ」

「何か文句あるの」

「ないけど、別に」

——とにかく早く退散させよう。まずは全て終わらせることが先決だ。

墨のしぶきがドットにならないよう封筒を退避させ、上総は再度筆を滑らせることに専念した。隣りでじっと見下ろしているのは、自分によく似た目をしている女性一人。一応、母ということにはなっている。

「それでね、終わったらプログラムを三つ折にして詰めてちょうだい。百五十人分ね。今回は若いお弟子さんのお友だちがたくさん来るらしいから、師匠も大変そうなのよ。あんたくらいの子がたくさんいるのよ。全く上総も女の子だったらねえ」

——じゃなくて本当によかった。

同じ苗字の人が大量に並んでいる。名前をうっかり間違えないようにしなくては。日本舞踊の世界では、ある程度の経験を積むと「名取」といって踊る時に芸名らしきもの使うという。苗字を流派名、名前は人それぞれ好み、もしくは師匠の命名によって決めるという。

——女に生まれなくて、本当によかった。

明るい紺のスーツに黄金色のブランドスカーフを巻き、上総の下敷きで風を仰いでいる母がひとり。

「上総あんた、まだ『九九』の載っているものなんて使ってるわけ？」

——悪かったな。

この人が母親でよかったと思う時はそうそうないが成績についてはうるさくいられない。数学で一年間ほとんど赤点しか取らなくても、結局は何にも言わなかった。一ヶ月に一回しか顔を合わせない親子だからそれも当然なんだろう。

ただ、月ごとの部屋しつらえおよび、雛人形やら五月人形やら、さらには繭玉、しめ縄飾りを手抜きするのはご法度だ。父と雁首そろえて怒鳴られる。よく父は母と結婚生活を送ってきたものだ。感心する。

結局一年前に「離婚」という形式を取ったけれども、夫婦関係が崩壊したのではなく、単に「友人付き合い」に戻ただけなのだそうだ。いたって父と母の友情関係は良好。毎月一回は泊りに来て父といろいろ、話をしていく。ある意味、恐怖の一泊二日ともいう。

——この人が俺の母親だってことが、今だに信じられない。

たぶん美人なんだろうなあとは思う。いわゆる「キャリア・ウーマン」タイプなのだろう。さすがに「姉」と間違われたことはないが、羽飛や清坂美里の母よりは若いだろう。唇の赤さがキーポイントだ。

「それでね、上総。来月の日曜なんだけど」

「あ、俺その日、宿泊研修の用事があるから」

嘘ではない。八月一杯はクラス宿泊研修の準備で清坂美里、羽飛貴史と一緒に美術館に出かける予定だった。

「一日ずらせるわよね。当然」

「当然ずらせない」

きっぱり答えてすずりをティッシュでぬぐう。

「ずらしてもらおうわ。お友達と彼女？ あんたの電話番号全部控えているんだからこちらから連絡するけれども、いい？」

「母さん、そんなの知らないくせに」

「清坂さん？ 知ってるわよ。お父さんからみんな聞いているから」

——父さん？ あの、まさか。

確かに清坂美里の電話を何度か取りついでもらったことはある。羽飛も家に遊びにきてくれたことがある。でもまさか、月一日しか来ない母に、電話番号までばれているとは思えない。それ以前に上総は、清坂美里とお付き合いしているなんてことを、一言だって口にしちゃいない。

「ばかね、あんた、菱本先生から全部聞いているわよ。私のいないところで羽根伸ばそうたって無理よ。可愛い子なんでしょう。あんたには過ぎた彼女だって、もっぱらの噂だそうね」

——いったい何考えてるんだ、あの野郎は！

怒りが担任菱本教諭に向かったのを見抜かれたらしい。母はゆっくりと上総の肩を叩いて、両手を置いて、ぐっと重みをかけてきた。

「いいわね、それが嫌なら上総、自分で時間変更の電話を入れなさいね」

「どこに行行って言うんだよ」

「見てなかったの？」

鼻で笑いながら、母は水色のプログラムを広げて上総の鼻先にぶら下げた。
ひったくる。プログラムの日程だった。

——志遠流日本舞踊 ゆかたざらい——

午前十一時～午後四時

2

「だから、本当にごめん。埋め合わせ絶対にするから、本当に」

本当はこの日に青潟市立美術館で清坂美里、羽飛貴史と集まり、宿泊研修の準備の詰めを行うつもりだった。次の日にずらすことについては頷いてくれたが、

「でもどうして？ なにか理由あるの？」

と問われた時には答えられなかった。

別に恥ずかしいことではないだろう。

以前からふたりとも、上総の母が日本伝統文化関係の仕事をしているのは聞いているはずだ。九月に行われる和楽器&現代音楽を組み合わせたライブにも呼ぶ約束をしている。もちろん、母の企画ゆえ、命令で、だが。

しかし、上総がここでうっかり「日本舞踊のゆかたざらいの手伝いなんだ」と言おうもんなら、好奇心旺盛なふたりのことだ。覗きたがるに違いない。日本舞踊に使われる邦楽は初めて聴く人にとってなじみいいものとは思えない。思いっきり眠たくなってもしかたない。広いホールで行うならまだいいのだが、今回の「ゆかたざらい」は、こじんまりした小ホールを借りる。椅子席なのでまあ本格的といえないこともないのだが、本衣装もつけない、もちろん白塗りもしない、音楽はテープ。実に静かで、客席も人がいない。家族とお弟子さんくらいのものであろう。

——そんなところに羽飛や清坂氏が来ようもんなら。

目立つ。ただでさえ若い年代の人が少ない日本舞踊の世界だ。着物なんてお祭りの浴衣かはっぴしか着たことのないようなふたりがうろつかれるとまず、他の人にいろいろ「どうして来たの？」と聞かれるだろう。本人たちもしゃべるだろう。上総との関係までばれてしまうだろう。それだけは避けたい。

「とにかく、今度詳しく話すよ。ごめん」

平謝りに謝って受話器を置くと、後ろには父が立っていた。母が「宛名書き」済みの封筒を抱えて帰った後、様子をうかがっていたらしい。

——なんとか言ってくれればいいんだ。どうして影に隠れているんだか。

「上総、やっぱり言われたか」

「いつものことだから」

父には頼るのも面倒だ。父はいい。仕事がある、忙しい、取材がある、などなど言い訳がいくらでもきく。大抵そのやり方で逃げてきたはずだ。しかし、学生たる上総にそれは通用しないっ

てことも知っているはずだ。父のいけにえだ。

「お前も嫌いでないんだろう。ああいうのは」

「母さんがいなければ」

吐き捨てるようにつぶやき、上総は部屋に戻った。机の上にはちゃんと当日の予定表とプログラムがばらばらにほおりだされていた。きちんと並べるということをあの人はしない。

演目を一通り眺めた。夏日が少しだけ薄れ、かすれている。せみが鳴き始めた。

——しかし、この暑い盛りに「鷺娘」とか「幻お七」とかやるもんか？

季節感のない演目である。どしろろとの上総ですらも、天井から雪を降らせる演出の二作はよく覚えている。当日、紙で雪作って、降らせるんだろうか。たぶんやるんだろう。母がいるんだから。

「ゆかたざらい」とは、毎年その流派でこしらえるおそろいの浴衣をまとめて、簡単にお稽古の成果を披露するというものである。いわゆる華やかな衣装を身に着けて、鬘もかぶってという形のおさらい会とは異なり、非常に簡素だ。お正月には同じ形で自前の着物を着る形での「初ざらい」というがそれほど費用を かけない形で行われる。チケット代なんてかかるわけもない。観客はほとんどが身内のみだ。

今回、志遠流の先生は、終了後の食事会……通称「なおらい」を行わない代わりに舞台を「幕の降りる本格的なところ」に設定して、安いけれども踊りがいのある会にしようとしようと計画したらしい。上総もそれは正しい選択だと思う。息苦しい中での会食をするよりは目的を重視すべきだ。ただ、そうなるとバックの大道具やいろいろな準備を男手借りてやらなくてはならない。となると、どうしても自前で安上がりな「男手」がある程度必要となる。「おちうど」のただ 食い程度で納まる相手を探すとなると、上総くらいしかいないのだそうだ。もちろん他にも声をかけるとのことなので、手伝いがひとりきりということはないだろう。小さい頃からこの業界の流れが見えていて、雪を降らせる場面では天井に上がって籠を揺らしたりとか、舞台をこしらえたりとか、命令されてすぐにピン とくる相手はなかなかいないのだそうだ。上総に白羽の矢が立ったのはそのためだ。

「中秋のうさぎ」もくじへ

1 2 3 4 5

HOME

前もって準備することはとりたててなかった。いつも、当日の朝に「おはようございます」と挨拶をし、志遠流のお師匠様に頭を下げる。小さい座敷だったら母にこきつかわれつつお菓子を入れたりお茶の準備をしたり、机を並べたり、壊れた小道具などを直したり。舞台が始まれば脇で曲のテープを止めたり入れたりするくらいのことだ。

だが今回は、ゆかたざらいとはいえ、少しばかり大掛かりらしい。約束の朝八時に上総が到着した時には、見慣れた顔のご婦人、および母がゆったりと缶コーヒーを飲んでいた。

「上総、あんた遅いわよ。なに寝坊してたの」

「だって、八時だって言ってただろ」

「ばかね、一時間前だって早すぎることはないのよ。この世界はね」

——嘘つけ。この前の初ざらいの時は、言われた通り二時間前について、三時間雪の中で待たされたじゃないか。

この人に文句を言ってもしかたがないので、まずは白地に紺の模様を染め抜いているけれどもゆかたではない、一番奥に座ってらっしゃる方に頭を下げた。志遠流の一番偉い先生である。小さい頃から、「かずさくん、かずさくん」と可愛がってくれていたことは覚えている。でもあまり話らしいことをしたことはない。めったに食べられないどらやきや大福をもらって幸せな気持ちになったくらいだ。

「上総くん、ほんとうに大きくなったわねえ。沙名子さん、私たちも歳を取るわよねえ」

——それは本当にそう思う。

正座して、両手をついて決り文句を唱えた。

「本日はおめでとうございます。どうか宜しく申し上げます」

なにがおめでたいのか、今ひとつわからないのだけれども、この世界では挨拶のパターンである。

「図体ばかり大きくなってもまだまだ、あの泣き虫のまんまですからね。遠慮なく、こき使ってくださいね。先生、本当にこの子馬鹿なのか天才なのかわからないところがありますから」

——だからこういう場は嫌いなんだよ。

男性陣はいなかった。結局、上総ひとりで十分だという判断となっただけで、会場の担当の人も手伝ってくれるということだという。上総が手を出さねばならないのは、まず「所作台」と呼ばれる板を舞台に敷くことだ。日舞の場合、すり足で歩いたり同じ場所で一二度足を交互に滑らせたりするので、動きやすいようにワックスのかかった床に敷きかえる。

もともとの舞台に乗せていただけなので、手間ではない。でも女手では苦勞する。

母にせつつかれてすぐに舞台の袖に向かった。黒いジャージ姿の男性がふたり、ジュースを飲みながらだべっていた。上総に気づくとすぐ、

「あ、本日はどうも」

と頭を下げた。男性の場合自分がかなり年下であっても礼儀正しく接してくれることが多い。手伝いの時に男性からガキ扱いされたことはない。どうして女性は上総の顔を見るなり、ああも「泣き虫だったのに」とか「お母さんがいなくて淋しがってたでしょ」とか、プライド傷つけることを平気で言うのだろう。

「どれからやればいいですか」

「じゃあ、板の間からやりましょうか！」

ぐっとのびをして、男性ふたりは上総に、天井近くまで重ねられている板を指差した。

「踊る場所だけでいいでしょう。じゃあやりましょう」

上から板を下ろしてくれるので、もう一人の人とふたりして並べていく。言われた通りにしていけばいいので、楽だ。指をうっかり挟まないように息を整える必要はあるけれども、いつものことだ。慣れている。評議委員会での活動でもよくきたえられている。照明がてかてかかっているけれども客席の方は薄暗い。確か三百人くらい入るホールだと聞いている。椅子は黒っぽい赤。真っ正面には照明用のガラス張りコーナーが位置している。ちょうど上総たちが仕事をしている姿が、ビデオカメラのようにくっきり、映っている。

——踊っている人は面白いだろうなあ。

——鏡みたいに見られるんだな。

額の汗をぬぐって、一通り男としての仕事を終わらせた。またしまう時に手伝うことを約束し、ロビーに出た。まだまだ序の口だ。

「上総、ちょっとお願い」

その通り。母の声で呼ばれた。ベージュのスーツ姿で、手帳を開いている。

「その辺のコンビニで、ジュースとお菓子を買ってきてくれない？ お金がないんであんた立て替えておいて」

「俺だってそんな持ってないよ」

「嘘おっしやい。お父さんから聞いたわよ。昨日少し多めにこづかいやっておいたって」

——いったい何考えているんだ。

「じゃあ、あとで返してもらえるんだ」

「それだけのことをしてればね」

まだロビーにはふたりだけしかいない。椅子を蹴り飛ばしたいところだが耐えた。

「わかった。メモする」

「みんな好みが違うのよねえ。まず、うちの先生はこのメーカーの抹茶ね。絶対メーカー間違えちゃ駄目よ。あとそれから、そうそう今日いらしてくださるこの先生は糖尿だからあまり甘いものがだめなのよ。ウーロンを二本、ペットボトルで買ってきてよ。あとね、若い子たちはやはり炭酸かしら。五本くらい。お菓子はそうねえ、ポテトチップスとか」

——父さん、もしかしてそれを見越して。

寝る前、父に多めに握らされたのには驚いた。

「上総にしばらく、こづかいやってなかったな。少し遊んできなさい」

それほど無駄遣いするほうでもないから、夏休み終りの宿泊研修用にとって置こうと思っていたやさきだった。母の性格を良く理解している父。あなたは偉い。

「わかった、あと紙コップは」

「ありがと、それもお願いね。多めにね」

「でも余ったらどうするんだよ」

当然のように答えた。

「あたりまえでしょう、私が持ってかえるの。その時は手伝ってよ、上総」

まだ、お弟子さんたちが揃うまでには三十分くらい間がある。女性の方が揃い始めたら着替えとかなんとかで楽屋には出入りしづらくなる。早めに片付けよう。泣く泣く外に出た。すれ違いで同い年の女子や、家族、また小道具用の藤の枝、羽子板を運ぶ人に頭を下げ、まずは近隣のコンビニを探した。空気が熱くめまいがする。どうか、自分が倒れないように。できればある程度こづかいを補填してもらえるように。祈るのみだ。

4

すぐにコンビニは見つかった。メモ書きどおり買い込み、ついでに自分の飲む分の珈琲缶も加えた。もちろんレシートはしっかりもらった。あとで母に請求だ。

背中まで汗びっしょりになっているのが分かる。天気が良いすぎる。浴衣姿で歩いたらさぞや気持ちいいだろうが、制服姿でネクタイまで締めてきた上総には拷問だった。袋を両手にぶらさげて会場に戻り、まずは楽屋に向かった。

すでに楽屋入りしているのは、五歳前後の女の子とそこご両親だった。子どもははしゃぎっぱなし。畳の上を下着姿で走り回っている。お菓子がほしいとねだっては母親から口に入れてもらい、捕まえられては汗を拭いてもらっている。遠めから見ると厚紙を広げているように見えるおろしたての浴衣。ばりばり言うのが聞こえそう。

「ほら、あんまり走ると汗かくよ」

叱りつけつつ、取り押さえて羽織らせていた。

反対側には、十歳くらいの姉妹が足袋をはくのに格闘していた。サンダルで楽屋入りしたから、足がべとついているんだろう。すべりが悪いに違いない。この二人も親が出てきて、「よいっしょ、よいっしょ」と片方ずつはかせてあげていた。

夏とはいえ、舞台では足袋を履くのがお約束だ。暑いからいやなんだろう。

明らかに女性主体の場所だけに、お父さんは居場所がなくなり困っている。そういうものだ。上総も密かに同情し、母のいる湯沸場に向かった。一通り置いて指示を待つ方がいいだろう。

廊下に出てふりむくと、親子連れがうろうろしていた。

「早く入りなさいよ。なにまたわけのわからないこと言ってるの」

「私踊りたくない」

「そんなわがまま、いいかげんになさい」

見ると、上総と同じくらいの年頃の少女が、母親らしき人に口を尖らせつつ、軽く足をくねらせていた。短めの白いひだスカートに、肩をほんの少し覆うようなTシャツ。雰囲気は、
——チアガール、ってどこか。

ポニーテールにした長髪。結び目が高い。

上総よりほんの少し、背が高い印象あり。

——俺のほうが負けてるな。

最近、背丈で自分との距離感を計るくせがついてしまった。情けない。

母親らしき人が手に大きな紙袋を持っている。抱えるほどではないけれど、ぐしゃぐしゃになったら大変そうなものだった。その子は手ぶらだ。いかにも、いやいやというしぐさだった。下に置いてからあげようとしていたので、上総はすばやく小指で開いてやった。苦労してる、なれている。こういうのは。

「ありがとうございます、本日も宜しくお願いします」

口癖なのだろう。お約束なのだろう。笑顔をこしらえて母親らしき人とチアガールの彼女は入って行った。ぺこりと、頭を下げて、チアガール風の少女も上総の顔を見た。ふと、上総の襟元をちらっとみて、はっとした風に目をそらした。

——なんか、俺も妙な顔、してたかな。

誤解されるのはいつものことだ。深く考えない。なにはともあれ母を捕まえて、

「どこに荷物を置けばいいんだ。一体何をすればいいんだ」

と問い詰めなくてはならない。持ち手が伸びきったビニール袋をぶら下げ直し、上総は湯沸場へ向かった。

「ありがとね。そろそろ若い子たちが着替える頃だし、私もうちの先生のところで少し話したいし、上総、あんたも来なさい」

浴衣姿の女性がふたり、茶碗を洗っていた。茶渋をこするのに必死という感じだ。すでにお茶の準備は整っているらしい。年齢序列の世界だ。母は完全に古株である。指示するだけだ。

「じゃ、私は先生のところにいるわ。よろしくね」

と言い残した。上総が頭を下げると、笑みを残さずに困った顔で返礼した。たぶん、上総のことを知らない大学生くらいの人たちだろう。

楽屋の奥はまずいということで、一番偉い先生の好むメーカーの茶を持ち、母に連れられて部屋に入った。すでに、着替えを終えたお弟子さんたちが入れ替わり立ち代り、ふくさに封筒を包んで

「ありがとうございます。どうかこれからも宜しくお願いします」

と、頭を下げて去っていった。

「それはそれはご丁寧に」

と挨拶し受け取る先生。その封筒を、母が受け取りすぐに、箱にしまう。上総も隣りで黙って正座しているしかない。クーラーが一応入っているはずなのだが、お弟子さんの出入りが激しいので熱い空気がもわっとくる。

「沙名子さん、いつもありがとうねえ」

「私も本当は、踊りたいんですけどね、なかなか」

「細く、長くでもいいから、続けていけば」

ちらっと上総の方を見る母。

「ちゃんと計画は立ててますよ。先生。この子が大学を順調に卒業したとして、九年くらいかかりますよね。せっかく青大附属なんかに入れてるんだからそれなりの仕事についてもらわなくちゃ困りますし、うまく就職してもらえたらその時は」

背筋が寒くなる一言だ。

「上総に全部費用だしてもらって、私名披露目やるつもりなんですよ。これが、今の私の夢」

——この人、本当に親かよ。

無表情をつくろうのがやっとだった。

「そうねえ、九年ってあつと言う間だもんねえ」

「そうそう。私もやりたいことは全部やらないと気がすまないたちですからね」

——じゃあ自分で金出して好きなようにやれよ。

母が子どもの頃から「志遠流」で腕を磨いてきたらしいことは聞いている。父と結婚することにより、日舞を始め全ての習いものをやめざるを得なかったとも。父との離婚理由は上総もよく理解していないが、たぶん「日本伝統芸能をわがまま一杯に極めたいからよけいなことは忘れない」というところが大きいのでは、と思っている。別に、上総も母に干渉されるのは小学校時代だけで十分、こりごりだと考えていたところあるし、月一回の家族団欒も多すぎると思う。

——やりたいことやるならそれでいいけどさ、自分で勝手にやってろよ。

母が踊っている姿は見たことがない。自分で「私はすごいのよ」と平気で言っていれば世話ないもんだ。たぶん志遠流の先生が母をひいきにしているのは押しの強さに負けたからではないだろうか。

——女に生まれなくてよかった。

上総はもう一度つぶやいた。

5

「では、先生、あと上総もちゃんと見ててね。今いただいたのを全部数えますから」

全員が着替えに没頭しているのを確認してきてから、母は箱をそっと開いた。他にも流派の先生が数人いらしているようすが、いつものこととそれほど驚いてもいない様子。上総がペットボトルからお茶を注ぐと、美味しそうに飲み干した。おかわりはいらぬようだ。

「二十人、ね。先生、確かに確認しましたからね。では、こちら全部預かっておきますからね」
「いつもありがとう、沙名子さん」

「御礼」と書いて、下に自分の名前を筆で記入する。ふつうのお祝い袋とは違う。横に鞭のようなマークのついた封筒だ。本物の和紙で、中には「志遠」と苗字が続く人もいる。名取になると、踊る時に志遠なにがしと名乗ることができるのだそうだ。

「じゃあ、上総、あんた、大道具の手伝いするでしょ。上手の袖にいつて待ってなさい。あ、そうそう、先生雑巾その辺にあります？」

「ないわあ」

「しょうがないわねえ。じゃあ上総、私のかばんから手ぬぐいを出してちょうだい。それをぬらして、四つ折にして踊り間の下にしいておいて。もう、床が滑りやすいから転んだら大変よ」

言われた通り、かなり黄ばんだ日本手ぬぐいをひっぱりだし、男性用トイレに向かった。すぐにぬらして言われた通り袖に置いておいた。もちろん堅く絞って、四つ折にして。舞台上上がる直前に足袋の裏をぬらしておく、すべり過ぎず、転ばないのだそうだ。

「上総くん、今何年生？」

顔見知りのお弟子さんが笑顔で話し掛けてきた。見たところ四十歳前後、母とは姉妹弟子にあたる人だ。曲の入ったカセットテープをそれぞれのお弟子さんから預かって、巻き戻しをしているところだった。

「はい、中学二年です」

「本当に、お兄さんになったわねえ」

——やりづらいなあ。

曖昧に答える。全く上総のことを知らない女性たちに頭を下げるのもきまづいが、それ以上に「泣き虫でなにかあるとお母さんから離れなかった上総くん」を知っている人たちの前では何も言い返せない。あの頃の自分を一気に重ね撮りで消去してしまいたいと思う。恥ずかしい過去だ。

「青大附属でしょう。あそこ勉強大変でしょう？」

「ええ、少し」

母が上総を青大附属に叩き込むに当たってどれだけ苦労したか、みな聞かされているんだろう。あのぼーとした上総をどうやって仕込んだのか、ずいぶん後で聞かれたという。母曰く。

「けっこう知り合いで受けた子多かったんだけどねえ、なかなか入らないって。上総くんは成績もいいらしいしねえ」

——絶対、見栄張ってるよ、あの人。

知り合いに青大附中の関係者がいたら、一発で上総の成績が青息吐息かばれるのに。母はたぶん、上総がそれなりの成績を収めていることにしているんだろう。

「まあ、沙名子さんも本当に、自慢の息子さんだっておっしゃってたわよ。上総くん、お母さんに心配かけるようなこと、しちゃだめよ」

——どこまでいってるんだか、あの人。

月一回家の中を見て廻り、

「上総、あんたどうしてお雛様を反対側に飾ってるの！　こんな所に壇をこしらえたら、毛氈が焼けてしまって使い物にならなくなるでしょ！　全くあんたって馬鹿なんだから！　それから和也くん！　あんたもあんたよ。どうしてこうもセンスのない飾り方ができるわけ？　全く立村家の男は、軟弱なんだから！」

とヒステリックに騒ぎ立てる母。

父も慣れたもので、

「悪かった。俺の教育が悪かった。ほら、上総も謝れ」

と機嫌を取り結ぶ。納得いかないのは上総の方なので、決して頭を下げたりしない。言い返す。中学に入ってから母と離れたこともあり、徹底して母と言いつつに徹している。となると「上総、あんたは泣き虫でどうしようもない怖がりだったくせに、よくもまあそんなこといえるわねえ。いい？　あんたみたいな軟弱な子に……」

——じゃあそんな軟弱な子をひっぱりだして、あれやこれやさせることないだろ。

いつも言いたいことをがまんする。でも母の顔を見ると思いっきり怒鳴りたくなる。がまんしすぎるのは身体によくないので、最近は顔を合わせるなり、きちんと自己主張することにして

いる。

心配なんて、することきつとないだろう。あの人は。

お弟子さんたちが浴衣に着替え、幕の閉じた中でそれぞれ思い思いのポーズを取っていた。主に場所をチェックするのだそうだ。稽古場が狭いので、広い舞台だと感覚が掴みづらいのだそうだ。上総の敷いた手ぬぐいの上で二回ほど足踏みし、所作台に上がる。袖を掴んでぶつふりをしたり、同じ場所で、いち、にと足をすべらせたり。中には後ろ足蹴って走る人もいる。ほとんどが年配の方ががさきすっぱだかになっていた小さい子が、お母さんと一緒に、

「ほら、おうちで上手にできたでしょ、やってみなさい」

と言いつつ聞かせられ、素直に袖をぱたぱたふるわせたりしている。

眺めていると結構面白い。

白地に紺の染め抜き、カッターで傷をつけたような線の入り方、間に紋らしきものが入っている。みなおそろいだ。浴衣とはそういうものだと思っていた。青大附中に入ってたまたま、女子だけ浴衣を着て集まる盆踊りの会が開かれた時は驚いたものだった。みな、地の色からして華やかなものばかり。美里も黄色に赤の花柄模様を着てきたことを、良く覚えている。

——こうやってみると、やっぱり、地味だよな。

見るともなしに観察していた。後ろの机に小道具を並べはじめている人もいる。

扇子、うちわ、手で振る鈴、ちょうちん、杵と臼、いろいろだ。

「ほら、早く立ち位置だけチェックしときなさい！」

叱り付ける声が聞こえた。後ろの通路から、言い合いしている様子だ。

「そんなのいいの」

「よくないわよ。あんたこれが大きい舞台はじめてなんだから」

お母さんだろうか。上総はテープをまとめてある机に身を寄せた。そっとすわり、身体を隠した。声は聞き覚えある。確か、戸を開けてあげたチアガールの親子だ。上総には気づかないのだろう。大股でさっさと通り過ぎた。ポニーテールが襟足にぶつかるくらい長く揺れている。お母さんらしい人が必死に帯の下、はみ出た部分をひっぱっている。

「うるさいからやめてよ！」

「だってみっともないじゃないの」

「いいの、もういや」

背が高く、ほっそり型。浴衣に金色の帯をちょうちょ結びにしている。若竹のような少女、という表現がふさわしい。

「もう、あんたって子は！」

文句をいいつつも娘の襟足やら裾を触っては振り払われる。そりゃそうだろう。うるさいだろう。

「ごめんなさい、ちょっとだけお稽古させてくださいね」

お母さんが必死に頭を下げて、場所をつくってもらっているが、チアガールの彼女はずっとそっぽを向いている。お弟子さんたちには無表情ながら頭を下げているけれども、母親の顔をうっとおしげににらみつけ、

「じゃあ、さっさと居なくなってよ！」

とささやいている。本人は聞こえないと思っているのだろうが、ちょうど幕の陰に上総が立っていたので丸聞こえだった。

「ほら、杵と臼も」

「そんなのいらんってば！」

こういう女性に最初、上総は疑いをかける。

——生理日なんだろうか。

もちろん美里を始めとする女子一同には一言も言えはしない。

ただ、精神的にナーバスで、ご機嫌わるくて、八つ当たりするなんてことになったら、大抵ひとつに絞られるだろう。永年母と付き合ってきた父から教えられた唯一の性教育。

「女性に振り回されないようにうまく立ち回ること、そのためには」

女性の「生理」とは、ご機嫌を取り結ばねばならない日。だから正確に覚えて置くように。上総の認識は、たぶん父も知らないだろうが、そうだった。

「そろそろ開演ですから、みなさん、客席にみんなついてくださいな。先生の踊りをみんなで見ましょうね」

年かさのお弟子さんが声をかけている。母がいつのまにか袖に来ている。む、と口をひん曲げて怒鳴った。

「ほら、さっさと行きなさい！ 時間どおりに始めるわよ。あ、上総、あんたはここに居なさい。屏風出してもらおうから」

最初の「松の緑」は飾りのない屏風をふたりがかりで広げるだけですんだ。評議委員会で鍛えられた腕力で、なんとか持たせた。

「次も段物だから、屏風のままでいいわ。次がね、『関の小万』と『花くらべ』ね。さっきのちびちゃん、五歳なのに早いわねえ。で、次が『かつを売り』、あとは……」

要は言われた通りに背景用の板をひっぱりだせばいいってことだ。

「わかった。だいたい見当つく」

「お願いよ。まあ、他の人もいるから大丈夫だと思うけど」

少なくとも「元禄花見踊」の時に「幻お七」用の雪背景を出さない程度に常識は持っているつもりだ。

背中ごしにトランシーバーで、照明係の人たちへ指示を出している母は、とってもだが「生理日」でヒステリーを起こしている同一人物とは思えなかった。女は、化け物だ。

幕が開いては締まり締まっては開く。係の人が全部、舞台正面照明フロアでやってくれているらしい。袖から覗くと三百人の席はがら空きで、入れ替わり立ち代り、同じ柄の浴衣女性が入ってくる程度だった。ビデオが真っ正面で廻っているのは、正面奥で光っている赤いランプで確認取れた。上総のすることは、幕が閉まるや否や演目に合った背景の板を引っ張り出したりすることと、姉妹弟子の方に曲のテープを探して渡したりするくらいだった。腕力があれば問題なし。となりでテープを出し入れしている姉妹弟子の人に母は話しかけ、噂話に花を咲かせていた。踊り手が見える場所に立ち、先生はスリッパのまま「ここはこうで、ほら手は右で、足は左、首はこっちょ」とパントマイムで教えている。度忘れした人も多いだろう。いわゆる日舞版プロンプタというところだろうか。そういうのを観察のも面白かった。

「まあね、今回は十月の会に向けての下ざらいみたいなところがあるわよねえ」

先生には聞こえないように、小さな声でささやく母。上総にははっきり聞こえる。知らん振り。

「そうね、うちの先生も大きな会はひさしぶりだしね、初舞台の子が五人くらいいるし、ふたり名披露目もあるし。ものすごく忙しいってぼやいてたわ」

「あと二ヶ月でしょう？ 言ったらなんだけど、間に合いそうなの？ 他の人たち」

肩をすくめる。きびしいよ、ってことだろう。

「次が『幻お七』その次が、『玉兎』ね。テープ、どこいっちゃったのかしら」

清元「玉兎」、これはわかりやすい演目だ。側に小ぶりの杵と臼が用意されている。発泡スチロールでこしらえた上に茶色い紙を貼り付けて、いかにも木製です、という顔をしている。月から飛び出た兎さんがかちかち山のエピソードを交え笑いを取りつつ踊るものだ。背景は薄、山のもの。本式の舞台では使わないそうだが、まあ下ざらいだし、

「スポットライトで月を照らせばいいわよね」

と母も納得ずみだ。

「ないわよ、上総、あんたも探してくれる？」

「俺はテープなんて知らないけど」

文句は言っても探してみる。机の下にもぐりむが見当たらない。

「あら、藤野さんのお母さんから預からなかったの？」

「そうなのよ、どうしちゃったのかしら」

「詩子ちゃんが持っているんじゃないの？」

「いつもはお母さんが持ってきてくれてるんだけどねえ」

日舞の場合、大抵レコードの中身をテープに吹き込んで、それで稽古する。少しずつCDに切り替わったとはいえ、古い音はレコードものがほとんどだ。現在先生の使っているものもそうら

しい。

「上総くん、いいわよ。たぶんまだ預かってなかったのよ」

ため息交じりに姉妹弟子の人は、プログラムにしるしをつけた。

「あと二番間に入るし。早いうちに気づいてよかったわ」

プログラムには、「一、玉兎 藤野詩子」と綴られていた。

間の二番は結構長かった。「あやめ浴衣」と「幻お七」。この季節感の差っていったいなんなんだ。夏かと思ったらいきなり冬。雪がふる演出ときた。しかも本当に上から紙の雪を降らせている。

「上総、あんた掃除お願いね。細かいごみで転んでしまったら大変だから」

仕方なくほうきを持参して待つ。

「変ね、詩子ちゃんも持ってないっていうのよ。ここにさっき置いたって」

「ええ？ だったら私見ているはずよ。知らないわよ」

机を指差し、強く首を振る姉妹弟子さん。

「そうよね、変よね」

上総を見る。もう一度探せとの命令だ。しかたないので形だけ下にもぐって、ついでにほうきでわたぼこりをはく。

「ある？ 落ちてない？」

「ないよ。全然」

真剣にふたりの女性、顔色が青ざめてきているようすだった。じっと見ているとさらに母が、もっと探せとばかりに手をぱたぱた振る。なにかしてないと文句を言われるだろう。しかたなくさらにもぐりこんだ。

——俺も、見てないけどなあ。変だ。

大抵カセットテープには演目が書かれていて、音担当の人は、プログラム通りにテープを並べている。落とすかなにかしなければ、なくするなんてことはまずないはずだ。上総が席についてから一時間近くたつが、「玉兎」と書かれたテープを見た記憶はない。

「どうしようか、困ったわねえ」

「『幻お七』は長いからまだ時間持たせられるけれども、上総、もう一回探して」

水面に浮かび上がることを許されない。上総はずっと四つんばいになり手のひらで床を撫でつづけた。「あやめ浴衣」が終わったらしい。かんざしとうちわを持って、「おつかれさまでした」「ありがとうございました」と挨拶する声がある。さっきの女子大生風の人だった。這いつくばっている上総を見下ろして、くすつと笑う声が聞こえた。

——俺だって好きでやってるわけじゃないってのに。

突如、下から臼と杵を持ち出す人の姿が見えた。顔をのぞかせてみた。

「詩子ちゃん、やっぱりないわ、本当にここに置いたの？」

背中では臼と杵が隠れている。こくつとうなづいてぶっきらぼうに立っているのは、さっきのチ

アガール少女だった。唇をきゅっとかみ締め、そっぽを向いていた。

7

——何か、嫌なことあったのかな。

しばらくしゃがみこんで探すふりをしながら、様子をうかがった。

出入りの時からそうだったけれど、かなり機嫌が悪かったのが印象に残っている。一度ではない、二回とも上総の目の前で母親と口論していた。気持ちはわかる。親にしつこくあだこうだ言われたらたまったものじゃないだろう。上総もその辺はわからないわけではない。経験的に。

たぶん、自分と同じくらいの年頃だろう。ちょっと濃い目に口紅を塗っている以外は汗でちょっとてかっている顔。くっきりしていて、たぶん大人っぽい部類には入るだろう。おすまししているが芯はありそう。気は強そう。上総の母と性格的にはほとんど変わらないのではないだろうか。自分から近寄りたくないタイプではある。

「だって、さっき、置きました」

ぼそっとつぶやき、手を後ろに回す。

「困ったわねえ。ないのよ。詩子ちゃん、本当にここに」

ばしんと、テーブルを叩く音。下に響く。

「置きました！」

藤野詩子という少女は口を尖らせたまま、言い張る。口紅が赤すぎるとキツネに見えるのかも、とぼんやり上総は眺めていた。

「詩子ちゃん、次の『幻お七』が終わるまで二十分くらいあるけど、それまでに見つからなかったらどうするの？」

母の声だ。何となく、険しい響きを感じる。嘘をついているのではと疑っているのではないかな。なんとなく、直感だ。上総も似たことを感じていたから、親子の勘だ。

——母さん、やっぱりな。

「ないなら、踊りません」

「ふうん、それでいいの？」

落ち着いている。きっと聞いている側には冷静に感じられるのだろう。誰もおびえたように見えない。藤野詩子という子も受け答えは大人だった。

「だってないんですから、仕方ないです」

「せっかくあんなにお稽古してきたのに、もったいないでしょ」

姉妹弟子の方が間に入る。が、母の口調は険しいままだ。

「別にいいのよ、あなたが踊りたくないなら踊らなければ。でも、あとで公開するのは詩子ちゃん、あなたなのよ」

——そういうことか。

身体を小さくしてもう一度、上総はもぐりこんだ。目の前には今度、姉妹弟子の方のぞうりと、つま先だけ黒くなった足袋が見えた。

どういう理由かわからないが、あの藤野詩子という子は舞台にどうしても立ちたくないらしい。気分が悪くてどうしてもというわけではないらしいし、当日ここにきたのだから、踊る気は最初の段階であったのだろう。

しかし、テープがない。

確実に見当たらないということは、踊れない。流行歌と違い日舞の演目曲は代わりがなかなか見つからないものだ。本人の持参するテープがなければ、話にならないのだ。

テープを「なくされた」ということにすれば、踊る本人の責任にはならないし、むしろ担当者が悪いということになる。すなわち、姉妹弟子さんと上総の母親、もしかしたら側にいたということで上総にも責任がおおいかぶさってくるかもしれない。知ったことじゃないが、ただ、可能性としてはあるだろう。

母の声は落ち着いていた。

「それに、詩子ちゃん、十月の舞台はここよりもっと広いのよ。本衣装もつけて踊るのよ。初舞台なのに、いきなりそういう大きいところで踊って失敗したら、どうするの？」

責めだ。攻め立ててる。ようやく藤野詩子にも動揺の色が見え始めた。手を後ろでくねらせながら、背をぴったりと小道具を置いているテーブルにくっつけている。

「私がなくしたって言うんですか！」

強気の言い返し。

「そうは言っていないけれど、でも、それ以外考えられないわよ。今のところは」

——素直に認めたほうがいいのにな。この人には、生半可なやり方じゃかなわないよ。かわいそうに。

気持ちがわかりすぎるほど、わかる。上総は嵐が収まるのを待つことにした。そっと抜け出し、雪の背景を出すのを手伝った。先生が割り込まないと思って不思議だったのだが、どうやら別の先生がいらしたらしく、下手側でやたらと頭を下げつづけていた。母の気が立っているのも頷けた。

下手で待っていようかと思ったが、考え直して上手に戻った。

初めて藤野詩子が上総に気づいたようで、きっと見つめ、すぐに目をそらせた。

きっとほこりっぽい格好をしていたから見苦しかったのだろう。

「上総、悪いんだけど、ちょっと小道具の方見てもらえる？」

いきなり、母に命令された。小道具はちょうど、藤野詩子がもたれている机の上に並べられている。

「『お七』の羽子板、あるでしょ。それと草履」

黄色い藁草履と、男役者の押し絵がされている羽子板だ。

「あの人が見たら、そこで、渡してちょうだい」

「え？　そこで？」

問い返した。藤野詩子も戸惑った様子。はっと上総を見つめ、最後に母に視線を向けた。

「いいの、上総、あんたそこにいなさい。テーブルの向こうから、渡しなさい」

「渡しなさい」のところだけを力こめていた。母には逆らえない。言われた通り藤野詩子の真後ろに、テーブルを挟む格好で立った。箱に入った羽子板と、和紙に包まれた藁草履を取り出した。ちょうど「幻お七」を踊る人が現われたので手渡した。やはり、女子大生風の人だった。

背中の金色の帯が手の届くところに位置している。背中がぴんと張っている。ポニーテールの長い髪が揺れている。が、良く見ると震えている。

——やはりそうか。

そっと、左脇の帯が四角く浮き上がっているところを見つけた。

袖と脇のあいだところに、カセットテープの大きさに線が出ていた。膨らんでいる。背中に近いところから、つまめるくらい顔を出しているのは、「玉」と書かれた文字だった。

——ここに隠してたのか。

ぴたっと脇を締め、後ろ手をもぞもぞさせながら、それでも顔をきつと見据えたままだった。母も微動だにせず視線を受け止めている。わがままは聞かないわよ、言いたげだった。彼女はわからないかもしれないが、上総にはよくお見通しだった。

——とぼけたって無理だって。あの人には勝ち目ないよ。

もし友だちだったら教えてやりたかった。

——たぶん、見抜いてるんだ。うちの母さん。絶対に、この人がテープを隠しているって。

改めて思う。あの人は怖い。

自分の位置関係を改めて見直し息が止まった。

——母さん、まさか。

客席方向が暗くなり、照明が薄暗い。「幻お七」の出、羽子板を抱えたお七が戸を開けるしぐさをしながら、ちょぼちょぼと雪の中を歩く場面だった。母の目だけが猫目のように光っている。見据えられてる藤野詩子の表情はわからない。ただ、震えているのがはっきりと映る。紙の雪が、少しだけ幕の外に漏れた。

8

——あと十五分か。

動くな、と言われた以上、上総はテーブルの後ろで黙って立っているしかない。

母のことだ。上総がいることにより、目の前の藤野詩子を圧迫し、白状させようとしているのだろう。その辺の心理は大体想像がつく。なにせ十四年間もお付き合いしてきた相手だ。そのくらいのことはするだろう。

しかし、相手の彼女の方はどうだろう。

上総と彼女との間は約三十センチくらい。ちょうど細長い机を挟んだ分だ。暑いし汗の匂いも

する。震えていると察するのは、髪の毛の揺れと手のひらだ。

——これは、逃げようたって、簡単に逃げられない。

もう一度母に視線を送る。光るまなざしから読み取れるのは、
「あんた嘘つくんじゃないわよ」

そのものだ。

もし自分がこの子の立場だとしたら、と上総はいつものように考えた。

——どういう理由があるにせよ、あの視線でにらみつけられたら逃れられないことは覚悟してるだろう。どうやって逃げ延びるか、もしくはごめんなさいと頭を下げるか。でもどちらもこの人はできないだろうな。

ぱっと舞台が明るく開けた。舞台が進んだ証拠だ。

——早くしないとまずいぞ、本当に。

幸いなのは、ここにいるのが上総と母、藤野詩子とテープ系の姉妹弟子の方だけだ。

台詞のある踊りなので、止めたり押したりしている。姉妹弟子の方はかまっている暇がないだろう。

この三人でかたをつけないとまずい。

四角いカセットテープが脇に挟まっている。取ろうと思ったら、上総が抜き取ることは可能だ。そして、「いま、小道具の中に落ちてるのが見つかりました」と言い訳して持っていけばいい。一番丸く収まりそうなのはそれだろう。

しかし、微妙な位置でもある。

夏休み直前、杉本梨南に「ごほうびをさしあげます」と言われていきなり胸を五秒間触らされたことがあるが、あれが生まれて初めて女子の身体を触った経験。向こうとしては握手のつもりで無邪気にしたことなのだろうが、上総にとっては三日間くらい寝られないくらいショックな経験だった。杉本の場合は特殊にしても、もし、同じくらいの女子の身体をへたして触ってしまおうもんなら、殴られるか怒鳴られるか痴漢行為ということで退学になるか、とにかく自分に火の粉がかかるのは避けられまい。

うまくひっぱり出せればいいのだが。

わきの下なんか触ってしまったら大変だ。

——でも、これしか方法ないよな。

段々照明が暗くなってきた。時間はない。お七を演じている人が、いきなり舞台に横たわった。別に暑くて倒れたのではない。雪の中で行き倒れたお七がしばらくこの格好で寝ているそれだけだ。確かこの後は「狂い」と呼ばれる振りとなる。よくわからないがクライマックスのはずだ。

「手を、前に、ひじ張って、組んで」

上総はささやいた。両腕をつき、藤野詩子の襟足に向かって声をかけた。びくっと肩が震える気配あり。聞いている。

「それから、脇を浮かせるようにして」

素直にやってくれるかどうか不安だったが、上総の指示どおり、藤野詩子はそっと肩を高く上げ、両手を組み合わせた。袖がちょうどだらんとさがり、カーテン代わりになる。

「抜くから、少しだけ、がまんしてください」

それだけつぶやき、即座に「玉」と書かれた部分を指でつまんだ。体温だけが伝わってくるが帯以外には触れずにすんだ。かなり身体が凍りついた気配あり。ひっこぬいた時、テープケースはかなり汗でしめっていた。

「そのまま手を後ろに下げて、組んだままにしてください」

早口で最後に指示した後、上総は右手でテープをズボンのポケットに入れた。一度しゃがみこみ床を撫でる振りをした後、急ぎ足母のもとに走った。

「あの、これ、今下の方見たら」

ここまで言いかけた。ポケットから素早く取り出す。

「見つかったから、これ」

「玉兎」と書かれたケースを渡そうとした。

とたん。

「上総、あんたってどうしようもないばかね！ 最低だわ！ 何考えてるのよ！」

いきなりほおをはたかれた。準備してなかったからしりもちをつくところだった。かろうじてこらえた。男の意地だ。

「何だよ、殴ることないだろ」

まだ舞台は続いている。狂いの最中だ。雪がまた降り始めている中、上総は響かぬ声で言い返した。

「あんたが落としたんでしょ。わかってるのよ。あんた、さっきからこの席に座ってたでしょ。たぶん、背景を引っ張り出す時に、間違っってポケットに入れるか何かして、落としたのに気づかなかったのよ。ほんっと、あんたみたいな馬鹿息子、むかつくとしかいいようないわ！ ほら、そろそろ終りだから早くほうきではきに行つてらっしゃい！ 詩子ちゃん、ごめんねえ、私の勘違いだったみたいだわ」

もう一度母に、頭をはたかれた。人前だけに手加減していることはわかる。しかし、殴られるほど悪いことをしたとは思えない。

「さ、じゃあ、早く臼と杵の準備して。巻き戻して、ないわね。すぐにやるから大丈夫よ」

打つて変わつてこの態度はなんなのだ。言い返したい。怒鳴りたい。許されるなら殴り返したい。

でも、出来なかった。

——しかたない。こういう世界なんだから。

ほうきをひったくり、幕が下がるや否や上総は舞台へ駆け上がり、ばさばさと四角い紙の雪をはきあつめた。半紙を碁盤の目に細かく切りこぼしたものだ。十月の本番ではちゃんと本物の大道具さんを頼むけれど、今回は手作りだったという。あちらこちらに四角い紙の雪がからま

っていた。ほうきで上をはたきながら上手の袖を覗くと、むすっとした顔のまま藤野詩子が、足袋の裏をぬらすべく手ぬぐいの上で足踏みしていた。

9

大騒ぎの事情はほとんどの人に気づかれることなく、無事に舞台は終了した。

上総の見た感じ、みなまだまだ完成してないどころか、振りもあやうい人が多い印象を受けた。もちろん素人ゆえに勝手なものだが。ただ、やる気のある人とない人が露骨に分かれているのも確かだった。

例の藤野詩子の「玉兔」も、あれだけ騒いだ後だけあって、ほとんどやる気なしモードだった。

——ただ、気持ちはわからなくもない。

舞台端で母から離れて観ていて思った。

——日本舞踊というよりも、一種の演劇っぽい踊りだからな。たぬきになったり兎になったり、観るほうは楽しいと思うけど、踊る方としては、ちょっと抵抗あるかもな。

いわゆる「男踊り」だけれども、きりっとした男衆めいたところがない。動物、兎、いささか道化じみたところが強調された踊りに見えた。

一切上総、母の方を振り返らず、最後の一番が終わった後にすぐ母と帰ってしまったらしい。

もちろん本人の母親からはそれなりにわびが入ったらしいがそんなことはどうでもよかった。

——なんで俺がこんなに人前で怒鳴られなくちゃいけないんだよ！

別に藤野詩子に遺恨はない。ひとこと、「気持ちが変わりすぎる」。

文句を言いたいのは母ひとりだ。上総が気を遣ったことをあっさりとはひっぺがえし、「馬鹿息子！」と怒鳴るのだけはやめてほしかった。いくら血の繋がった親子とはいえ、言っていることと悪いことがある。

——もう二度とやらないさ。ああ、もう絶対やらないさ。こんなプライド傷つけられることされて、俺だって馬鹿にされるのはごめんさ。

他の出演者が着替えながら、軽くお茶で乾杯している間、上総はずっと板の取り外しにかかりきりだった。朝は平気だったのに、終りはかなりしんどくなっていた。

「腰、悪くするんじゃないよ。大人になったら、困るぞー」

からかう声が聞こえる。頭を下げて、何度か往復してしまいこんだ。帰り際に楽屋へ向かうと、浴衣を風呂敷に包み込んだお弟子さんたちが、

「本日はありがとうございました」

と頭を下げて出口に向かっていくのが見えた。もちろん、藤野詩子の姿はなかった。

「上総、ちょっといい？」

さっきの罵りまくり女の姿はかけらもない。すっかり片付いた和室にて、残りのペットボトルのお茶を勧められ、上総は正座して頭を下げた。もちろん母にではない。先生にだ。もう一人の

姉妹弟子の方もいらした。

「本当に上総くん、おつかれさまでした。よくやってくれたわ」

いきなり頭を撫でられて硬直する。きっと上総が泣き虫だった頃の記憶をたどっているのだろう。

「ほんっと、今日は上総くんのおかげよね。ほっとしたわ。また十月もお願いね」

母の顔をそっと見上げた。あの事件で少々、口を利きたくない気分だった。

「あんた、なによその顔。せっかく誉めてやろうとおもったのに」

やっぱり母である。一切無視することに決めた。

「沙名子さん、でもさっきのことはあなたが悪いわよ。上総くんが一生懸命に」

姉妹弟子の方が間を取り持とうとする。

「これでも親子なんだから、大体私の考えてることはわかるでしょ。それを何よ、そんな反抗期そのものの顔でにらみつけられたら、私だってたまったもんじゃないわ」

——こっちの台詞だ。親子だからって簡単に考えてることが分かるほど甘くない。

先生からはお弁当と一緒に、ぽち袋に入った御礼を一枚いただいた。どのくらい入っているかはわからない。三千円くらいだろう。補填はできるだろう。少し、ありがたく思った。

しばらくつきあってから、母に促され上総は一礼し立ち上がった。

「上総くんみたいな頭のいい子はそうそういないわよ。沙名子さん、本当にいい息子さんを持ったわねえ」

「だからこの子は天才と何とかのすれすれなんですってば」

——なんとでも言えよ。

やたらと先生たちが上総を絶賛するのが気持ち悪い。早々に立ち去りたかった。

「あのね、上総。悪いんだけど荷物を持って家まできてもらえない？」

「車あるんだろ。自分で荷物持って帰れば」

「あんた、私から立替分のお金、返してほしくないの？」

——痛いところだ。

「だったら、車まで持っていきなさい。命令よ」

なくな上総は藤の枝、ちょうちん、臼と杵、羽子板などを取りまとめてトランクに積まなくてはならなかった。先生のご自宅に小道具類を送り届けなくてはならないのだ。男手は最後の最後まで必要だったことである。

10

もちろん残ったジュース類、紙コップは自分の足下に積み込んで助手席に座った。腰が落ちついたとたん、一気に疲れがうわっときた。目を閉じて少しだけ寝たかったが、

「ほら、シートベルト締めなさいよ」

と、また頭を叩かれる。

「うるさいな。やればいいだろ」

仕方ない。損失補てんのためだ。

「親に人前で口ごたえするのやめなさいよ。全くあんたはガキなんだから」

「人前で自分の息子をさんざん罵るのもやめろよな」

もうふたりきりで走っているから、遠慮はいらない。これでもかなりお互い、罵りあいを耐えていたのだろう。上総もかなりこらえていたものがある。一気にぶちかました。

「だいたいさっきのはなんだよ。見つかったから渡したただけであって、なんで俺が落としたことになるんだよ。小道具のところで見つかったから」

「何言ってるの。あんた、もっと早く気づかなかったのが悪いのよ。全く、あんたも少しはまともになったかと思ったけど、全然だめね」

「言ってる意味がわからない」

あの、藤野詩子のことだ。

母はかなりの確立で彼女がテープを隠していたことに気づいていたはずだ。直接奪い取ることも可能だったはずだ。それをなぜ、にらみ合うだけにとどめていたのか。結局上総が動かなければ、あのままだったかもしれない。上総からしたら、割増金として千円くらいはアップしてほしいところだが、母のことだ、期待はできないだろう。でも、請求だけはしておく。

「上総、あんた彼女と何ヶ月付き合ってるの」

いきなり別方向から攻められ、息を呑む。

もちろん無視だ。

「そんなの今の話と関係ないだろ」

「女の子のことなんだから、今から勉強しときなさい。和也くんのまねしたら大変なんだから」

——自分のもとだんなを「くん」付けで呼ぶってのも、すごいよな。

父の名前の「和也」と母の「沙名子」から音だけ取って付けられたのが自分の名だ。だから嫌いだ。上総という自分の名前、その響きがいやだった。

しばらく母との言い合いを続けたがあきらめざるを得なかった。上総が「玉兎事件」の理由を問い詰めると、母は上総の恋人についてしつこいくらい責めてくる。どちらも答えたくないということで、結局は黙りこくった。

師匠のお宅に到着して、上総は大急ぎ、トランクの中から小道具を運んだ。家の人はずぐに出てきて受け取ってくれたので玄関先で用は足りた。一礼してまた助手席に戻った。

「じゃあ当然、家に送ってくれるよな」

まさか母のアパートからまっすぐ歩いて帰れ、なんていわれないだろうか。言わないとも限らない。そういう人だ。

「当然、とは何よ。まあ、そのくらいはしてあげるけどね」

「人をこき使ったんだから、当然って言ってどこが悪いんだよ」

師匠や他のお弟子さんの前では穏やかに振舞っているが、車の中ではいつもこうだ。上総がこの二年間で母と戦うすべを身に付けてきたから同等の立場でしゃべることができるようになった

けれどもだ。

少し、頭の中を整理してみたかった。目を閉じた。窓辺の繁華街、月の光る田んぼらしきところ、しだれ柳に囲まれた道、すうっと気持ちよく車は走っていった。

「十月の大きい舞台って、市民会館でやるの、母さん」

「そうよ。なかなか取れなかったんだけど、日曜の部が運良くね」

冷静に答える母の声。上総も荒れないように気をつけながらつなげていった。

「あの、藤野さんという人も、出るんだ」

「そうよ、『玉兔』でね」

「初舞台で？」

「そうよ」

意外だった。もうひとつ続けた。

「他の人、まだ初舞台やる人いるんだろ。五人くらいって聞いたけど」

「ほら、あの五歳のおちびちゃんでしょ、もうひとりが『手習子』、あとふたりが結構長く稽古してる子同士で『お染久松』やるのよ。この子は小学校四年生の仲良し同士」

母にひっぱられていやというほどおさらい会の演目を見ている上総には、だいたい見当がついた。

「あの藤野さんという人、長いの」

「中学に入ってから始めた子よ。まだ一年ちょっとじゃないかしら」

——だからか。

青潟市民会館の大きな舞台で、本衣装をつけて踊るというのは、なかなか簡単にできることではない。お金もかかるし、ある程度の踊りもできないとまずいだろう。白く顔を塗り鬘を被り、裾をずるずるに引きずって踊るのだ。体力だって相当いるだろう。少なくとも上総は御免こうむりたい。

「他に、中学生のお弟子さんっていないの」

「いるんだけどねえ、なかなか大きい舞台に出るだけの、あれがね、ないのよ」

——お金か。

「だから今回、藤野さんのお母さんに頼み込んでやっと出してもらえたんだけど、あんたも知ってるでしょう。女踊りの場合はやはり、ふつうのよりもかなりかかるのよ」

——ごもつとも。

「衣装もできるだけ簡素にして、鬘だけはやはりつけて、誰にでもわかるような演目にしようということでいろいろ考えて、あの子の技量に合ったものを選んだ、と先生はおっしゃってたんだけどねえ。大人がこう思っても、子どもはねえ」

——子どもだからわかるんだよ。そういうのは。

藤野詩子のほっそりした姿とえりあしと、きりりとした表情が目には浮かんだ。

「『玉兔』っていい踊りだと思うでしょう。上総も。上の先生たちもね、よく素踊りで組んで出

したりしているのよ。ほら、うちの先生も、大きい会で……」

母は調子に乗ってべらべらとしゃべっている。この機会に、上総へ日舞のレクチャーをしようとたくらんでいるのだろう。もっというなら十月の会に手伝わせようと計算しているのかもしれない。

「わかった、もういい」

上総にはひととおり、図が見えた。

11

いわゆる「初舞台」。純粹に「ゆかたざらい」や「初ざらい」の小さな会場で踊るのもそれだが、大抵の場合は「初めて本衣装を着けて舞台に立つ」経験が初めてのことをいう。上総もそのくらいは知っていた。母も「あの子は初舞台だから、きれいなもの踊りたいよねえ」とか「小さいから『子守』みたいな可愛い感じの方が、何しても可愛いものねえ」とか言っていた。初めて衣装を着けて華やかに踊るのだから、気持ちとしては見栄えのいいもの、イメージに合ったものをやりたいだろう。想像はつく。

小学生ふたりが「お染久松」を踊る。確かにかわいらしいだろう。恋人同士で心中の道行だ。だらりの帯にかんざしをたくさん挿した鬘、見るからにお人形のようにだし、久松役も男役ということで、いかにも美少年風の若衆だ。華やかだろう。

「手習子」も、春ちょうちの飛ぶ中、絵日傘を担いで長い袖と裾を引きずりながらお出かける少女の姿を描いたものと聞く。何度か観たことがあるがこれも、ちょっとしたしぐさがめんこいと上総も思う。

——そりゃそうだよな。女子ならかわいらしいのがいいって思うよな。

瞬間、清坂美里の姿が思い浮かんだ。納得だ。

——衣装だって、華やかできれいな方がいいと、思うよな。

しかし、「玉兔」。

舞台の袖から振りだけ追った感じだと、あまりにも地味だ。

男踊りの場合は足を蟹股にしてしこを踏んだり……母にそういうと殴られるので言わないが…おおっぴらに広げたり、たまにはごろんとひっくりがえったりする振りが非常に多い。当然、裾もはだける。踊り方によっては生足が丸見えだ。舞踊だとわかりきっているから目をそらさないでいられるが、日常生活であれをやられたら、そりゃ退くだろう。

——初舞台で、あれは確かにきついよ。かわいそうだ。

——先生たちにはいろいろ考えがあるとは思うけど、俺があの子の立場だとしたら、そりゃあ、逃げたくなるよ。

さらに途中で「これはいさのよい」という掛け声めいた台詞まである。

もちろん台詞のある舞踊はたくさん存在するのはわかっている。「幻お七」だって

「おお、お前は吉さま」

とか横たわりながら叫んでいるし、「お染久松」だって、

「ヤアお染様、やっぱりあなたは山家屋へお帰りにされて下さりませ」

「わしや山家屋へ帰るのはいやじゃわいな」

と掛け合いやっていたりする。

でもきちんと物語の台詞をしゃべっているように見えるし、棒読みであろうがなんであろうが、とりたてて違和感を感じたりはしない。衣装を着た人がふつうに話す台詞の類だ。

——足を蟹股にして、臼を担いで、ポーズつくって、掛け声か。

——絶対、これって辛いと思う。

そんなに詳しく見たわけではないにしても、大体同じくらいの年頃の少女が抵抗を感じないとは思えない。いつものくせで自分に置き換えてみて考える。いやだと思う。

たぶん先生たちは、「演目が合っている」とか「費用の問題」とかをかんがみて藤野詩子に「玉兎」をと、決めたのだろう。舞踊関係の理由なんて上総には一切見当がつかないことだ。でも、同じ初舞台の子たちが袖の長いだらりの帯を着せてもらえるのに、おそらく地味な衣装、しかも恥ずかしい格好をしなくてはならないこと。きっと、言葉には出せないものがあつたに違いない。大人からするとたいしたことではないと見過された部分だろうが、藤野詩子にとっては唯一の抵抗だったのかもしれない。

——とすると、俺のしたことって、かえってまずかったのかもしれない。

——無理やり舞台上げてしまったようなもんだもんな。

いつものことだ。上総は自分を責めてしまう、くせがある。

「上総、しかしあんたも、女心わかるようになったねえ」

——は？

目が覚めたが覚めない振りをした。窓から見えるのは少し光を跳ね返している川の流れ。品山が近づいてきた。

「そうとう、清坂さんってできる子みたいよねえ」

——関係ないだろ、そういうのは！

「その件についてはノーコメント」

「どうせ菱本先生にあとからたっぷり電話して聞くからいいわ」

寒気が走るが単なる疲れだと思いたい。

「ああいう時はね、女の子は面子を保ちたいものなのよ。同い年の男がいる前で恥はかきたくないものよ。全く詩子ちゃんもねえ、お年頃なんだから」

「よく言っている意味がわかんないんだけど」

いったんスピードを落とした。ゆるゆると川が瞬いた。家の灯りだ。

「ほら、さっきうちの先生からもらった袋、開けてみて」

父からもらった小さいバックに突っ込んでおいた。そうだ、中身を見ていなかったのだ。指先

で取り出して、そっと口をめくった。一枚、か。引っ張り出してみる。

——五千円？

「どのくらい入ってた？」

「こんなに、もらっていいの？」

大抵二千円くらいもらえれば万々歳だと思っていた。想像以上だ。

「そういうことよ」

母はもう一度アクセルを踏み直し、ぶうんとスピードを上げた。警察に捕まったら絶対スピード違反だってことがばれるだろう。貴重な新札の五千円札を、きちんとしまいこんだ。母に取り上げられぬように。

12

誰も轢かないですんだ。毎回母の車に乗る時はシートベルトを欠かさないようにしている。家の前に車をつけ、ようやく下ろしてもらえた。忘れてはならない、損失補てんだ。

「母さん、あのさ、昼間の分のお金だけど」

「ああ、さっきあんた五千円もらったでしょ。あれでちゃらね」

「それはちょっと違うって！」

母はあっさりと上総をかわし、さっさと玄関に向かった。

「悪いけど、今日泊っていくから。車、車庫に入れていい？」

——そんなの聞いてないよ、父さん、断れよ。

冷や汗ものの理由はひとえに、

——今日、うちの掃除なんてしてないって。

玄関に灯がついた。父は戻ってきていたらしい。日曜でも出かけることが多い父なのに、緊急事態発生ということで息子の帰りを待っていたらしい。

「ああ、沙名子さん、連れてきてくれたか」

「今日は特別の大サービスよ。いつもだったらその場でほったらかしてくるところだけどね」

「なおらいもなかったのか」

「仕方ないでしょ、やることやってくれた以上は、タクシー代くらい持たないと」

——本当に親かよ。

後ろで立ち尽くす上総の、いつも思うことだった。

「上総、ほら、入りなさい。お前も疲れただろ」

「シャワー浴びて寝る」

すでに靴をそろえて上がっている母の脇に、靴を脱ぎ捨て、部屋に戻った。一刻も早く、眠りたい。父がすばやく側に近づいてきた。耳もとにささやいた。

「さっき、清坂さんから電話が入った。かけなくていいのか」

「あしたでいい！」

この神経の状態、この煮詰まった状態、誰が誰が分かるものか。

——だから要は父さんが手が空いてたらすべて丸く収まったんだよ。

——俺なんかが出て行かなくて！

もらった弁当を部屋で一気に食べ終えた。散らし寿司風の小ぶりな入れ物だった。量は少ないが、おいしい。いくら、さけ、玉子。桜の花をかたちどったご飯に振り掛けられている。さっきまでいらいらしていたのは、きっと腹ごしらえができてなかったからだろう。丁寧なつくりの割り箸だけを保存しておくことにして、台所に立った。

「と、いうわけよ。上総もねえ」

また悪口言いふらしてるのか。たまったもんじゃない。こういう時は現場で見据えるのが大切だ。上総はためらうことなく居間に入った。風呂場に向かうつもりだったが、さんざん文句言われているようだったら抗議しなくてはならない。

「そうか、大変だな」

「だから十月の舞台も上総を借りたいってうちの先生が言うのよね。でも、学校があるでしょう。日曜なんだけどね」

「あいつも学校では、それなりの仕事しているようだしな」

この両親でよかった点。とにかく成績のことについては全く文句を言わないこと。赤点を取っても「しかたない」で済ませてくれるし、理数系で下から数える方が早い順位であっても、「いいじゃないの、文系できるんだから」で流してくれる。委員会活動についてはそりゃあもう、鷹揚だ。

「どう？ 上総、あんた十月空いてる？」

「たぶん学校祭の準備があるから絶対無理」

「そこをなんとか、してもらえないかしら」

いきなり丁寧に迫るのはやめてほしい。ぷいっと横を向いた。

「冗談じゃない。もうやってもいないことでさんざん責められるのは嫌だよ」

「だからあれは」

言い訳しようとする母をぴしゃりと封じた。

「もちろん、母さんが何考えてたかは想像つくさ。けど、あの場でさんざん殴られたり罵られたり、人前でやられたらたまったもんじゃないよな」

「あれはあんたでないと出来ないことだって、私も思っていたから」

「じゃあもし、俺が全然気づかないで無視していたらどうしてたんだよ。たまたま見つけたから」

「上総、あんたがやってくれるって思ったから、私は小道具のテーブルに行くようにって言ったのよ。あんたしかいなかったのよ」

——この言い方で、母さん、あんたは父さんも口説いていたんだな。

冷静沈着、青大附中の次期評議委員長の顔に切り替え、上総は冷たく見返した。見抜いたか、母も泣き落とし作戦に出てきた。

「あの子が帯にテープを隠しているってことは、十分私も気づいてたわよ。でもね、あそこでもし私が、無理やり奪い取ったりしたらどうなると思うのよ。しこりが残るわよ。自分から白状してくれれば丸く収まったけれども、まあ難しいところだわね。あの子だって」

言葉を切った。

「あんたが同じくらいの年頃だってこと、気づいていただろうしね」

——やはり、気づいてたのかよ。

確かに、母は藤野詩子がテープを隠していたことに気づいていた。

「上総、あんたも彼女がいるならわかるでしょう。なかなか言い出せなくてって時には、男の方からリードしてあげることが大切だって」

隣りで父が目で合図している。黙って聞いとけてことだ。

「あの時に、詩子ちゃんがプライドを傷つけないで、落ち着いて踊ってくれて、テープも見つかる、そういうシナリオを作ってくれるのは上総しかいなかったのよ。だから、でしょう。抜いてくれたでしょう」

言葉が返せない。唇を思いっきり噛んだ。母の目が潤みがちだ。まずいこれは、落とされる。

「だから和也くん、上総は私にとって、かなり使える駒なのよ。うちの先生も詩子ちゃんがずっと『玉兔』のことですねてたのは気づいてたらしくて、困っていたようだけど。上総の働いてくれたおかげで丸く収まって、本当に助かったって言ってたわ。この世界は白黒はっきり形を出すことが、必ずしもいいことではないのよ。私の場合は割り切れないことが嫌いだからなかなか巧く行かないけど、上総が脇にいると本当に助かるのよ。あんたはそういう細かいところが女の子みたいに気が付く子だから、本当に」

——母さんそれって誉め言葉じゃないよ。女性蔑視もいいとこだぞ。

手にもっていた、先の丸い割り箸をもてあそび、気持ちを落ち着けた。

——日にちだけ、聞いてやるか。

「十月の会って、いつだよ」

「十月の五日、ちょうどお月見なんだけど」

しおらしく答える母。それにひっかかる自分に腹が立つ。でも吸引力は強烈だ。

「悪いけど、次の日たぶん、中間試験があると思う」

「試験だけ？」

完全にしくじった。判断ミスだ。上総が気づいた時は遅かった。

「それだったらいいのよ。学校祭とかだったら仕方ないと思うんだけど、試験だったらやり直しきくからいいわよね。上総、よかった。あんたが居てくれるとほんっと助かるのよ。ね、お願い。あんたは私の自慢の」

「うそつけ！」

聞いているとだんだん気がおさまらなくなってくる。なんでこうも神経逆なですることが得意なんだろう、この人は。タオルを棚からひったくり、上総はさっさと風呂場に向かった。頭を冷やしたい。

シャワーを浴びている間にまた電話がかかってきたらしく、父が取ってくれていた。やはりここは立村家なのであり、母のうちではなくなっただろうと思った。着替えて洗濯機を回した後、すぐに以前母が使っていた部屋にタオルケットを運んだ。まだふたりは居間で談笑している。こんな仲がいいのになぜ離婚したのか、両家では最大の謎とされている。上総も正確には理解できない。

「上総、ちょっとちょっと、電話あったわよ」

にやにやしなながら母が手招きする。いやいや顔を出す。父がまた困った顔でこちらを見ている。あきらかに尻に敷かれている。

「誰から」

「さっきの、清坂さんからだ」

髪の毛のしずくがたらっと落ちるのが分かる。冷たい。

「あんたの彼女でしょ」

「そんなの関係ないだろ」

「用件聞かなくていいの？」

「どうせこっちからかける」

いつもだったらすぐに電話するのが礼儀だと思う。でもまさか、このふたりの目の前で、丁寧語使いまくっている自分を見られるのは最大の恥。

「上総、無理するな。一時間くらい前にもかかってきたんだ。かけてあげなさい」

父までが母に加担する。もちろん両親が席を離れる気配はない。最後まで聞いてやろうという魂胆だろう。みえみえだ。こういう時、自分専用の電話がほしいと強く思う。

「わかった、今かけるから」

吐き捨てるように答え、上総は背を向けた。別に聞かれて困るようなことはしていない。たぶん明日にずらした青潟市立美術館への待ち合わせだろう。

受話器を取った。ダイヤルを回した。

——あ、立村くん？

受話器を取るなり「清坂です」と答えたのは美里だった。心から安心して名乗り、まずは謝った。

「今日、電話くれたんだって？」

——うん、夜遅くごめんね。あのね、貴史とも話したんだけど。

美里の声は少しだけはねていた。待ってくれていたんだろう。ほのかに心、ふるえるものがある。

——いつも、立村くんが来てくれるのはまずいなあって思ったから、午前中は品山に行こうかって言ってたの。貴史は立村くんのうち、知ってるでしょ。私も自転車で行こうかなあって。

それはまずい。慌てて上総は遮った。

「いや、いいよ。俺の方が美術館に行く。大丈夫だよ。第一、品山は遠いからさ、この暑さだと日射病になるよ」

——でも、いつも立村くんひとりに負担かけてるみたいで、悪いもん。

清坂美里、青大附中二年D組の女子評議委員。はっきりしていて、いやみじゃない。上総には過ぎた彼女だと言う人も多い。自分が一番それを自覚している。上総の親友たる羽飛貴史とは幼なじみということで、いつもふたりして上総のことを気遣ってくれる。このふたりが上総にとって最強の守り神と言って差し支えない。今だって、きっと貧血でぶったおれることの多い上総を思いやってくれたゆえの、申し出だろう。ありがたい。ふつうだったら絶対にそうしてもらっている。しかし。

背中の中でびんびんと感じる。映る。四つの眼。

「ごめん。あの、俺もできれば品山から出て都会で遊びたいんだ。だから、あの、こっちから行くよ。いつものように美術館の前で待ち合わせで、朝十一時でいいかな」

——本当にいいの？

「いい、絶対それでいい！ だから、羽飛にもそう伝えておいて、くれるか」

もうこれ以上、背中の好奇心溢れるまなざしには耐えられない。早く切りたい。

——それならいいんだけど。ね、立村くん今日、どうしてたの？

答えられるかこういうとこで。しどろもどろになっていく自分の舌がなさけない。

「いや、あした話すよ。ちょっと忙しかったんだ。いろいろと。だから、今日はもう遅いから、明日の十一時半に」

——違うよ、十一時よ。間違えちゃあよ。

「そ、そうだったよな、俺が悪かった。十一時に、じゃあ」

受話器を置いたとたん、ふたりが笑いをかみ殺している姿が目に入った。たぶん呼吸ひとつせずに耳を傾けていたに違いない。息子がデートの約束……微妙に違うのだが……をしているところを聞いて、さぞやいろいろ想像しているに違いない。父も前から清坂美里の名前を記憶していたようだし、さぞや、さぞや。

「何がおかしいんだよ！」

一声が合図となり、母がけたたましく笑い転げた。父の肩を軽く叩きながら、のけぞり甲高く。

「上総あんたって、思いっきり尻に敷かれてるわねえ。ほんっと和也くんそっくりよ。血は争えないってこのことよねえ」

——言いかえせよ早く。

父に視線を向けるが、自分の方に火が飛んでくるのを恐れているのだろう。何も言わない。黙ってアイスティーをすすっている。

だから尻に敷かれているって言われるのだ。

これ以上両親の顔を眺めていてもむかつく一方なので部屋に駆け込んだ。いやみと思われようがガキと思われようが、思いっきり音を立ててドアを閉めた。なんとなく部屋を片付けておいたのは正解だった。机の上に重ねたプログラムを破り捨てようとして、ふとやめた。

——この演目で、十月か。

机に両手をついて、見下ろす感じで読みなおした。プログラムには、すべて「一、幻お七」「一、藤娘」「一、鷺娘」と連なっている。どうして続き番号にしないのか不思議だが、そういうしきたりなのだろう。

夏の月が藍色の空に浮かんでいる。まだ白っぽい。かすかに銀色の揺れが見える。月に兎が住んでいる、お月見の日には月で兎が餅をつく。お月見団子をこしらえて、薄と一緒に窓辺に置く。たぶん母はこの日、また泊りにきて上総と父を怒鳴りまくるだろう。

「一、玉兎」の文字をじっと見つめた。くるものが確かに、ある。

——十月五日か。

——お月見か

——そういうことか。

藤野詩子にあえて「玉兎」という演目を与えた理由。

もちろん母の言う通り技量の問題や費用のこともあったのだろう。しかし、「初舞台」というのは初めての舞台で、一生に一度。思い出に残るものにしたいだろう。長い袖やきらきらした鬘ではないもので。

先生たちはきっと頭をひねって考えたにちがいない。

舞台の当日が中秋の名月とすると、見えてくるものがたしかにある。当然日程は一年くらい前から決まっていただろうし、その頃には演目も決めなくてはならなかっただろう中秋の名月に初舞台を踏むのだったら、兎となって思いっきり兎のように跳ねればいい。

そう、先生たちが思い入れても不思議ではない。

父からももらった手帳を広げ、上総は十月五日に「予定あり」のしるしをつけた。夜の蝉が鳴きつづけている。秋に近づくのを耳で感じる。

——けど、これをあの子に気づけ、って言ったって、わからないと思うな。誰か教えてやれよ。

まだ気づいていないであろう藤野詩子という名の少女に届けばいい。上総は軽くうつむいて目を閉じた。月に祈った。

——終——

クラスの男子たちがエッチなことばかり考えていることは、彰子も大体想像がつく。それを責める気もない。女子同士だって、誰だれが先週生理始まったらしいとか、三年の先輩が初体験したらしいとか、情報を交換しあうのはいつものことなから。だから別に、南雲くんが水着のお姉さん写真を見て喜んでいるらしいと聞かされても平気だ。頼むから自分に、ああいう系統のビキニとか、かなり際どいものを着るように要求されなければそれでいい。

今日も母のコーディネートで完全に決まった、ペチコート付きのワンピース姿で彰子は南雲くんと待ち合わせることになった。色は生成りのやわらかい感じ。もちろん夏だから半そでだ。あまり二の腕を出すと、南雲くんをこき使っている意地悪令嬢と思われる。気をつけなくてはとも思う。

——頼むから一度くらい、ふつうの格好で出かけたらいんだけどなあ。お母さん、あきよくんと会う時に限って、休診だもんなあ。

毎日会うのは彰子もしんどいので、週二回程度にしてもらっている。南雲くんの方は毎日でもという感じだろうが、こちらとしてもいろいろ予定があるのだからしかたない。

いつものように青潟駅で待ち合わせ、近くの公園でファーストフードのセットをごちそうしてもらう。これも彰子としては抵抗があるのだが、とある事件がきっかけで南雲くんは意地でも「おごる」という行為にこだわっている。理由は頷けないこともないのだが、同じ中学二年なのだからおこずかいの額だってそんなたいしたもんじゃないだろう。

「あきよくん、いいよ。たまには私がごちそうするから」

「いいよ。その代わりクッキー作ってきてほしいんだ。俺としては！」

同じく諸般の事情により、南雲くんはクッキーにこだわるのである。この暑いさなかにオープンにへばりつくって言うのもたまったものじゃないが、毎回ご馳走してもらっている立場上言い返すこともできない。

ふたりでベンチに座り、コーラを飲みながら夏休みの予定やテレビ番組のこと、クラスメイトの噂話などに花を咲かせていた。「つきあい」を申し込まれる前から同じことしていたんだから、別に「彼氏彼女」にならなくても同じじゃないかと彰子は思うが、南雲くんにとっては雲低の差らしい。

同じく諸般の事情によりこの状況は変わらないだろう。いつもの口癖、「ま、いっか」ですべてを終わらせる。

クッキーにはほとんど手をつけず、南雲くんは自分のバックにしまいこんだ。なんでも夜中に食べるのだそうだ。カロリー高いのに。

「あの、彰子さん、思い切ったこと聞いていいですか」

満足げにハンバーガーを平らげた後、いきなり、姿勢を正した。南雲くんがこいこいと、手で自分の隣りを指した。もっと密着しろってことだろうか。暑いのに。遠慮して、彰子は足一本程

度の幅だけ縮めた。

「もっと、そばに寄ってほしいんだけど。聞きづらいことなんで。やっぱ、外では大きい声で言えねーし」

「知られたらまずいこと？」

いろいろあるのだろう。昔の彼女からまたいやがらせされたんでないかとか、クラスの女子たちからはやっかまれてないかとか。南雲くんは非常にその点、気を遣ってくれる。

「ってか、あの、なんていうか、こういうこと聞いたらいけないかなあって思ったりもして」
もじもじしている。めずらしい。

「いいよ。何言っても……うーん、そうだね。お前が嫌いだとか、死んでしまえとか、そういう人を傷つけることでなければ、何言ってもへいきだよ。どうしたの」

取っておきの笑顔で答えた。男子はたいしたことないのに、妙にもったいぶったり真剣に考えたりすることが多い。南雲くんも同じだろう。そういう時は、興味もってあげて、「私が味方よ、大丈夫！」とにっこり答えてあげれば大抵終了だ。母が父にいつもしていることだ。

「彰子さん、すなわち、いわゆる、あの、その」

「言っちゃって、いいよ」

「あの、毎月の生理日って、いつ？」

南雲くんはかなり真面目な顔である。

彰子も笑顔が思いっきりひきつりそうになった。かろうじてこらえつつ、一呼吸置いた。大丈夫、息を止めれば大丈夫。

「いきなり、どっきりものの質問ね、あきよくん、どうして？」

将来、お医者さんになることが夢の彰子にとって、「生理日」は決して、「きゃーやらしー」と言う言葉で片付けたくないことだった。

まあ、答えようと思えば答えられる。

——まさか、来週の水曜あたりなんて、言えないよ。やだな、なんか私の方が言葉詰まってる。

あまり気にしてないつもりだったけれど、真っ正面から聞かれると、どう答えていいものやら。これが水口くんあたりに「ねーさん、生理って痛いの？」と無邪気に聞かれるのだったら、軽くいなせるけれども、妙に南雲くんは真剣だ。生理日を知ることによって何がわかるのか、保健体育の教科書を広げて必死に勉強すべき何かがあるのだろうか。

「やっぱ、怒った？ 怒ったよね。ごめん」

今度は南雲くんの方が不安そうに彰子の顔を覗き込んだ。そんなことないよと、すぐに打ち消さなくちゃ、と彰子は首をふった。もちろん今度は天然の笑顔で答えられた。

「ううん、平気だよ。私、保健委員としての義務だから、そういうのはいいんだけど、ただ、いきなりだったから、ちょっとびっくりしただけ。なかなか言えないよそういうのって。他の女子にそういうこと、いきなり聞いたらだめだよあきよくん。私だって、やはり答えづらいもんね」

しょんぼり、ジュースのストローをかみながら、南雲くんは水色のパーカーの裾紐をひっぱっていた。まずい、完全に、落ち込んでしまっている。生理日が何日周期かなんて答える気はまだないけれど、理由を聞かなくちゃって気持ちだけはたくさんある。

「何か、聞かなくちゃいけないことがあるの？ あ、そっか。プールや海に行くこととかかな？
あまりそういうのは気にしないで大丈夫だよ。そういうのは、それぞれこちらが考えるからね」

元気つけてあげたかった。彰子はじっと様子を見守ることにした。背中からだらだら汗が流れてきたのは、たくさんジュースを飲んだからかもしれない。足下のペチコートがびしょりだ。少しは足が細くなっていればいいな、と、サウナ感覚なことを考えた。

「この前、りっちゃんに言われたんだ」

南雲くんがジュースを全て飲み終えて、紙コップをつぶした後、ようやく口を切った。

「立村くん？」

南雲くんとクラスで最近一番仲良しの同級生だ。クラスの評議委員で、彰子の母曰く「古きよき時代の美少年俳優」に似ているのだそうだ。セピア色の古い映画に出てくるような王子さまなのだそうだ。彰子と母の男性好みは異なるということを再認識したにとどまる。クラスでは目立たないが、男子からの支持は100パーセントで、いろいろ二年D組で起こった事件を解決しているらしい。らしいというのは、彰子がすべて把握しているわけではなく、立村くんの彼女である清坂美里ちゃんが教えてくれるからである。嫌いではないが、恋人になりたいタイプの男子ではない。ちなみに南雲くんに対しても最初は立村くん程度の認識しかなかったのだが、今のところ彰子はそのことを隠さなくてはならないと決めている。傷つくだろう。きっと。

「彰子さんのこと、すっごく誉めてたんだ。あいつ、清坂さんと付き合ってるだろ。やはり夏休み会ったりするのかなあ、とか思ってさ、聞いてみたんだ。ダブルデートいかがっすかって」

——美里ちゃんとだったらいいけど、立村くん？ うーん、会話が続かなさそう。

「そしたらさ、『奈良岡さんって、いつも誰にでも親切で、笑顔で、いい人だよな。きっと生理日がないんだろうなあ』と言い出してさ、俺も思わずびびったんだ」

——立村くん、が、あの顔で、あの口で？

「ねえねえ、立村くん、真顔でそんなこと言ってたの？」

これは突っ込まざるをえない。南雲くんもふたたび、真面目な顔して頷いた。

「うん。その後続けたよ。『もしあるようだったら、確認しておいた方がいいかもな。いろいろ問題があるみたいだからさ。俺はいつも相手の様子を観察して読み取るようにしているけれどさ』って。たぶん清坂さんには聞けないんだろうなあ、あいつもさ」

——そりゃそうよ。美里ちゃんに聞いたら、たぶん張り倒されるよ立村くん。もう、男子ってほんと顔では判断つかないなあ。

想像すると思わず腹を抱えて転がりたくなる。南雲くんは彰子の笑い声を安心したように受け取ったらしく、ほっとしてさらに続けた。

「りっちゃんの母さんって、どうも猛烈に怖い人だったらしいんだ。らしいって、俺も会ったこと無いし、今一緒に住んでないからあくまでも推定でってこと。で、子どもの頃からあいつも、母さんの機嫌が周期的に悪くなることを察知していて、巧く立ち回らなくちゃいけないって思ってたらしいんだ」

——立村くんのお母さん、そんな恐ろしい人だったわけ？ そりゃ、あの日はそれなりにいろいろおなか痛かったりするけどね。

クラスの子でも、多少生理日だからという理由で体育を休んだりする子はある。あまり詳しいことは聞いたことないけれど、体調がよくないのは確かだと思う。

「ある日、りっちゃんのお母さんが大爆発をおこして、父さんの影に隠れてたことがあったんだって。十歳くらいの時だったって。そしたら、父さんが『女性には生理日ってものがあるって、非常におっかない時があるんだ。そういう時はできるだけ逆らうんじゃない』という教ををいただいたんだって」

——立村くんのお父さん、そうとう、おびえてたのね。

さらに爆笑の渦に陥りそうなのを生真面目にこらえた。

「それ以来、りっちゃんにとって『生理日』とは、女性の機嫌が悪い日なんだっていう認識になっちゃったみたいなんだ。あいつの名誉のためにいうけど、りっちゃん、野郎同士で集まってもあまりエッチなこととか俺みたいに言わないよ。清坂さんのことも、ひかえめに誉めてるしさ。女子に対してもレディーファーストを徹底してるしさ。だから、決してやらしい意味で言ったわけじゃないみたいで、俺もふうんって思ったんだ」

そと、南雲くんは声を低めて、もう一度真面目な顔をして尋ねてきた。

「彰子さん、もし、生理日ですごく辛かったり、爆発したくなったりしたら、俺、いつでも力になるから。その点、覚えていてほしいんだ。俺は男だからそう言うの全然わかんないけど、でも、あれってすごくつらいんだろうなって思うから。りっちゃんが話してくれた時のおびえた様子、今でも俺、忘れられねえもん」

——立村くん、そうとう、恐ろしい思いをしつづけてきたのね。月に一回。そりゃあ、美里ちゃんにもそういうのがあるんでないかって想像する気持ちはわかるなあ。とにかく、怖かったのね。とにかく、機嫌とらなくちゃいけない日だという認識しかなかったのね。

——でもね、ああいうのは、女の子が自分である程度コントロールしないとまずいと思うんだけどなあ。うん、なんか特殊な例をすべてのことだって思うのは、私、よくないと思うよ。

南雲くんの顔を穴のあくほど見つめた後、彰子はもう一度、笑顔で答えることにした。

「私はね、あきよくん。その日でもその日でなくっても、変わんないようにするね。そうすれば気にしないですむでしょ。でも、もしあきよくんが、もしかしてって思ったらその時は言ってくれるといいよ」

「言うって？」

「『ちょっと、あの日なんじゃないか』とか。そうしたら私も、ちょっと性格悪くなっちゃってるなあって分かるから。やっぱり立村くんのお母さんみたく八つ当たりしまくるのは、私やだな。だから」

これ以上言うと照れてしまいそうだった。言葉がこもってしまった。やはり、男子相手に生理の話をするのは、恥ずかしい。慣れてない。

「彰子さん、じゃあ、もうひとつだけ」

南雲くんはいつものぱかとした明るい表情を向け、付け加えた。

「じゃあ今度、俺が彰子さんの生理日聞く時は、将来のこと考えている時だって思っほしいなあ。ってことで。それが合図で、あの、その……」

——将来のこと？

意味がわからず、彰子はふたたび南雲くんをまじまじと見つめた。なぜ南雲くんが耳まで赤くなっごみを捨てに走ったのかわからなかった。ペチコートを整え、彰子はいつもの呪文を唱えた。

——ま、いっか。あきよくん。

1

さっき覗いた時に立村が戻ってきているのは確認していた。

いつものことだ。あいつは集団でわあわあしゃべるのがきらいな奴だから、今のところは無理に引っ張り出さなくてもいいだろうと思っていた。どうせ今夜は徹底してオールナイトするつもりだろうし。昨日はひどい熱を出してぶったおれ、何を考えたんだか美里のところに夜這いしようとしたりと、意味不明なことばかりやらかしていたっけ。どうせなら、詳しい事情を今夜聞きだそうと思っていたところだった。

なのにだ。

——しっかり寝ついているじゃねえか。

俺は寝ている奴に気を遣って、そっと入るなんて女子みたいなことはしない。堂々と、「立村起きてるか？ おい、起きろよ」

と一声かけて入るのが礼儀だと思っている。部屋も開ける前から明るい光りでいっぱいなんだから、そりゃあ起きていると思うだろう。

「おい、立村……寝てんの？ まじで」

返事なしだ。窓のカーテンを締め切ったまま、クーラーだけはしっかり湿気取りモードにして、夏とは思えない格好で伸びている。タオルケットを肩まで覆うようにして寝るっていうのは、八月末の気候じゃあふつうしないだろう。俺なら大の字でひっくり返りたい。

背中がぴくりともしない。もともと寝付きのいい奴ではある。何度か立村と同じ部屋に止まったことがあるけれども、一切寝返りを打たず、布団も乱さないできれいに寝ている。いびきもかかなければ、寝言も言わない。目を閉じてしまえば空気と一緒にだ。

——こいつ、起きねえな、絶対。

拍子抜け。いろいろこいつには聞きたいことがあったのだ。話さなくちゃなんないこともてんこもり。だから途中で隣の部屋から抜け出してきた。今の時間は菱本先生が熱く、過去の恋愛について語っている時間帯だ。非常に気になるのだけれども、俺は立村の方を取ったのだ。なのに、こいつときたら、あっという間に空気と化してやがる。

——裏切り者、って奴だよなあ。

さすがにシーツをひっぺがえしてたたき起こすことはしなかった。後が怖い。外見は昼行灯のお坊ちゃん風で、極めておとなしい奴だが、一度怒らせたなら何をしでかすかわからない。奴が小学校時代何をしでかしてきたか、一年時になにをやらかしたか俺は知っている。向こうに言ったことはない。ばらしたら俺は明日の太陽拝めないだろう。

隣の部屋に戻るのも面倒で、コーラを一缶ぐいっと飲んだ。炭酸の気持ちいい熱気が残っていた。菱本先生が男子軍団を前に、人生における恋愛とは、友情とは、について語りつづけているらしい。

——友情とは、か。

ちりちりと舌が熱い。

2

立村の枕もとに置いてあるのは小さな包みだった。

宿泊研修二日目のこと、立村はひどい熱を出してホテルで午後ずっと寝ていた。当然置きっぱなしだった。俺が残ろうかと手を上げたけれど、菱本先生によってあっさり却下。結局腹痛で残りたいと言い出した南雲を相手役に残して出発したというわけだ。

いろいろばたばたしたけれども、楽しかったことには違いない。楽しみそこねた立村を哀れんで土産を買って来てやった奴がふたりいたというわけだ。ひとりが俺で、空のコップの下に敷かれている星空コースターなる代物。星座盤がプリントされている優れものだ。

もうひとつが、美里の持ってきたものだった。

ご丁寧に袋に包んだままらしい。タータンチェックのキーホルダーだった。土産屋できゃあきゃあわめきながら何か選んでいるのを聞いてはいた。おそろいを狙っているとは思わなかった。女子の考えることはまじでわからない。

こういう時、美里と立村は、「彼氏」と「彼女」なんだと思う。

俺にとってはどっちも「親友」だと思っている。

その親友同士が付き合っているということだ。

これってかなり、俺にとってはお得パックだ。

たとえば、「親友」として話したい出来事がなにかあったとする。たまたま職員室経由の情報で、試験問題の内容を耳にしたりする。そう言う時、まず俺だったらどうするか。立村か美里、先に顔を合わせた奴を捕まえて、「なあなあ、このねたガセだと思うか？」と意見をもらう。この二人でないと、もしとんでもない食わせもの情報だった場合、人間関係そのものが崩壊してしまうだろうし、俺の立場もずたぼろだ。

立村だったら

「羽飛もしょうがないなあ」

と笑って終りになるだろうし、美里だったら

「あとでなんか食べ物おごってよ」

の一言で懐が痛むにすぎない。

まあ、なあんもないってことだ。

巷ではありとあらゆる噂が飛び交っているが、この場で俺が宣言してしまおう。残念ながら、「幼なじみの恋」なんてもんは幻想だ。第一、惚れる惚れないやっている同士と一緒に、保健体育の教科書について語ったりできるか？ 少なくとも俺は、鈴蘭優ちゃんの前ではできないと思う。ポスターの前だけはきちんと整理整頓しているもんだ。

ただ、いわゆる恋愛っぽい視線が回りから飛ぶようになると面倒なことが多くなる。

俺のうちと美里のうちとが合同家族旅行しただけなのに、「縁談？」というあほねたを振って

くる奴とかがいる。なんもやましいことないから堂々としていればいい。幸いなことに、俺には立村という親友がいて、親友の彼女としての美里がいる。勘違いして「三角関係？」と言い出す奴がいるが、この辺は立村がうまくフォローすればいい。今までは俺と美里ふたりで噂の対処に追われていたけれども、六月半ばからは幸い立村も一緒に加わってくれた。二分の一と三分の一だったら、断然三分の一がらくだろう。そんなもんだ。

3

みやげ物。

買うのを忘れていた。

うちの親父さまと母上さまのおふたり、および姉ちゃん、および……。

すなわち、買っていかなきゃなんない連中がたくさんいるってことだ。

別にうちの親たちには、「黄葉山饅頭」でもいいし、姉ちゃんだって食べ物だったら文句は言わないだろう。でも、もうひとりはどうすればいいんだろうか。もし相手が美里だったら、ためらうことなく受けそうなハンカチ一枚投げてやるのがお約束だけど、他の女子だとわかんない。

残念ながらこういう時に立村がいても、役には立たないだろう。こいつは美里が「初めての女」のはずだし、昼間の騒ぎ方を見ても全く何がなんだかわからなかったはずだ。キーホルダーなんてもらったくらいで真っ赤になるなよお前、と突っ込みたくなる。ポーカーフェイスのくせに妙なところで、純情な奴だ。

美里にならって、キーホルダーにでもしようか。それともテレカにでもしようか。迷うところだ。俺がなんで女子へのプレゼントに悩まねばならないんだかわからない。

——一年の女子って、なんでああも変な奴ばかりなんだ？

きっかけは六月、たまたま教室でバカ話していたら、いきなり知らない女子がやってきて、「羽飛先輩、付き合ってください。好きです」

もろに、告白ってやつをかまされてしまった。いや、男たるもの全く経験がないとは言わない。一年の頃からやたらと付きまとう女子、いろいろいた。ぴんとこなかったというより、恋愛なんて面倒なことしたかねえよって感じでやめてしまった。立村ともその辺は共通するところで「付き合うっていったいなんだ？ 友だちでいいじゃねえか」

的観念だ。立村については美里とのからみもあったので、あまり賛成しない振りをしていたけれども。最後にはうまくくっついてくれたんだから、まあいいじゃねえかと俺は思う。

しかしだ。この俺がだ。

いつものように

「俺はあまりそういう恋愛ってこと得意じゃねえよ」

とお断りしようとしたところ、

「付き合ってみないと分からないと思います。先輩、一度私とふたりで会ってください」ときた。

可愛い子だとは思う。

鈴蘭優ちゃん以上ではないにしても、元気で明るい、いわゆるいい子だとは思う。立村がやたらとひいきしている、某一年B組の胸のでかい女子とは違って、いつもニコニコしているところはかなりお奨めだ。

4

妙に静かな隣りの部屋。菱本先生、怪談でもやってるんだらうか。ここで立村の寝顔を見てもおもしろくないし、俺も仲間に入りたい。そんな気がした。コーラを片手に部屋の扉を開けてみた。もちろん電気はつけっぱなしだ。どうせこいつもある程度時間たったら起きだしてくるだろう。影法師が天井にでかくうつった。扉を引いた。

とたん、人間の気配だ。もちろん。ドアの陰になんかがはさまったみたいだ。一度締め直してもう一度開けてみた。見えるところに人はいないけれど、やっぱり裏側に隠れている。こほんと咳をする声。聞き覚えある。

「だあれだ？」

返事はない。

「ほらほら、隠れてねえで、出て来いよ」

俺は締めた後にその相手の手首を掴んだ。細かった。やっぱりそうだ。オレンジの派手な服を着たままの美里が、そこにいた。

美里は観念したように、肩をすくめて手を振り払った。別に「触らないでよ！」って感じではない。ただじゃまだから離してよ。そんな感じだった。髪の毛は昼間と同じ、くま耳つけたようなもんだった。何を考えてるんだか、鈴蘭優ちゃんばりの髪型だ。俺はあまり女子の髪型に関心があるほうではないけれども、鈴蘭優ちゃんに似ているかどうかというのだけはチェックしている。その点からいけば、美里の格好は、まあ、許せるってところだ。

「小さい声でしゃべってよ」

「は？ どうしたんだ？ 美里なんか用か？」

美里は答えずに扉をつんつんつんつんついた。

「いるの？」

ははあ、こいつのダーリンに会いに来てきたってことか。もしや、ずっと部屋の前で張っていたなんてことはないだろう。いくら俺と美里が幼なじみで、恋愛なんか超えてる親友だってことを、みんな知っていても、やはりまずいだろう。さすがに俺だってそのくらいのモラルは持っている。

「今、寝てる。死んでるみたいだ」

「もう寝てるの？」

あきれ果てたように美里は目を大げさに見開いて見せた。

「文句言いたいならあいつに言えよ。それともたたき起こすか？」

「そうしたいとこだけど、でも」

しばらく黙って、髪の毛の先をもてあそび始めた。こういう時の美里は、なにかを頼みたくて
ならなくて、でもいえなくて俺に頼ろうとする、そういうパターンがほとんどだ。

「ははん、あいつとふたりっきりを狙ってたんだろ」

「そういうんじゃないってば！ ただ」

「そうだよなあ。美里、さっきあいつと痴話げんか、してたもんなあ」

言い終わる前に口を叩かれた。まじで痛い。美里は基本的に手加減しない。他の男子たちは美里のこういった暴力的行為を知らないだろうから、まあ、「二年D組の清坂は可愛い」と、寝言
みたいなことを言うのだろうが。俺からしたらちゃんちゃらおかしい。

「それなら、部屋に来るか？ もしかしたら起きるかもしれねえよ」

髪でこしらえた団子耳。くるんでいるのはやはり、タータンチェックの髪飾りだ。ドアの取っ
てを包む布みたいな使い方をしている。

「いいの？」

「ふたりっきりでいるよりはまずくねえだろ。どうせ俺と美里と立村はいつものパターンだって
わかってるだろ。な美里」

しばらく美里は黙っていたが、俺の後ろ手を振り払うようにして、自分でさっさと扉を押した。
鍵はついていない。あっさり開いた。

——なんだよ、あいつ、立村といちゃつきたいんだっちはっきり言えばよかったのになあ。
親友の親友で恋人だ。こりゃあ、俺だって一肌脱いでやらないわけにはいくまいって。

5

小さく丸くなって眠っている立村を見て、まず美里は立ち止まり、

「やっぱり」

つぶやいた。

「なんか、宿泊研修に来てから全然しゃべってないって感じ」

「さっき叫んでたくせに」

もう一発。今度は足にけりを入れられたが、手加減されている。立村を起こすのが怖かったら
しい。うまくすかして俺は、自分のベットに乗かった。美里はさっさと机から四角い椅子をひ
っぱりだし、座った。スカートを広げ直しているのは奴を意識しているんだろう。

「なんか、飲むもの、なあい？」

「俺の飲みかけだけど、飲むか」

「ちょうだい」

コーラをそのまま一気に飲み干した。まあ、俺も全部飲むのはきつかったしかまわない。そば
で「やーい間接キスだあ！」と騒ぐ奴もいない。

「あーあ、すっきり」

美里から缶を受け取り、立村の足下に近いところへ俺は移動した。缶をつぶし、へろへろに
した。やわらかい。

「ほんっと、立村くんって寝てることしかないよね。バスの中でもそうだし、昨日今日と」

「あいつからだ弱いからなあ」

「弱すぎるよちょっと」

「じゃあ持久力つけてやれよ」

ちょっと下ねたっぽいことを飛ばしてやる。でも気づかなかっただらしい。美里はうつむいたまま、くま耳に手を当てた。タータンチェックの布だった。立村の枕もとにあることを教えてやった方がよかったろうか。

「お前、奴が気づいてないと思ったか？」

「なにがよ」

「キーホルダーと、ほら、それと」

ぎろっと美里は俺をにらみつけた。

「な、なによ！」

「あいつさ、さっき美里のタータンチェックと、自分のキーホルダー、同じだってこと気付いて首まで真っ赤になってやがったぜ。ほら、ミーティングの時だよ」

「そんなの、どうしてわかるのよ」

本当は俺が立村に教えてやったことだ。自分の彼女だっていうのに立村はそういうところ、妙に無頓着だ。まあ気づいた暁には言葉もなかったようで深く反省していたようだが。

本当のことを言うべきじゃないだろう。

「じゃあ、立村くん、怒ってない、かなあ」

「さっき電話で叫んでるの聞いたもんな、俺が悪かったって必死に古川にわめいてたぜ」

ほおっと、吐息が聞こえる。今度赤くなるのは美里の方だった。あまりつつこみしないでおこう。

6

「ねえ貴史、この前さあ、詩子ちゃんがどこに転校したのか、木村に聞いてくれた？」

小学校時代の同級生だった藤野詩子のことだ。どうも俺はあの子に敵外視されているようであまり付き合いはないのだが、熱を上げまくっていた木村とはたまにゲーセンでつるんだりする。

美里も藤野とは学校が変わってから連絡を取っていなかったようだ。

まあ、理由はわからんでもない。

青大附中に落ちたらなあ、しゃあないか。

「なんとかちゃんと一緒に行きたいから」という理由で受験して、受かるほど、甘いもんじゃなかったってことだろう。それっきり美里からは藤野の話聞いていない。

木村ルートから最近、藤野が転校したらしいという話を聞きつけた。ずっと手を変え品を変えアタックしつづけていた木村の言うことには、最後の最後までつれないままだったんだそうだ。

——日本舞踊に藤野を取られたようなもんだぜ。ちっ。

中学に入ってから日本舞踊なんていう金のかかりそうな習い事を始めたとかで、ほとんど放課

後の交流はなしだったそうだ。

どこまで美里が知っているかどうかはわからない。

「さあな、木村の方が知りたがってるぜ。その辺は」

「そうだよね。いまさらね」

美里としてはきっと、青大附中に俺と自分以外が落ちたことに、ひっかかるものを感じてるんだろう。藤野が合格発表の後で一切口を利いてくれなくなったことがそれほどショックでもなかったらしい。そんな自分が意外で、ちょっと罪悪感ばりばりだったようだ。俺と一緒に合格発表名前が載っていたときには、涙流して喜んだくせにだ。女子同士、俺には計り知れないものがある。

——まあな、こいつには今古川がいるもんな。それに立村も。もう、過去なんて振り返ってらんねえぜってな。

「いやね、ちょっと噂に聞いたんだけどね」

声を潜めて美里が俺の前にかがんだ。首だけちょいとあげて。

「こずえの家で取っている新聞に、日本舞踊教室のチラシが入ってきたんだって。その中に詩子ちゃんの写真が映っていたんだって。先生にポーズかなにかつけてもらっているところ」

「なんで古川が藤野のこと知ってるんだよ」

「立村くんのお母さんが日本伝統芸能関係の仕事しているって聞いたでしょ。それでたまたまこずえが『朝の漫才』やったのよ。こずえったらね前もってチラシ用意してたのよ。『お染久松』って演目があるらしいんだけど……」

「んなのどうでもいい、でどうしてだ？」

「とにかくいつものねたで盛り上がっていたら、こずえが日舞教室案内のチラシ見せて、『こういうのやってるの？ 十三、十四でエッチなこと』とか……」

だいたい分かった。古川は立村をからかうべく、日本舞踊教室のチラシを用意してた。それでたまたま見せたところ、美里が藤野の写真を見つけて騒いだと、なんだそれだけだ。

「美里まどろっこしいぜ。とにかくはっきりしてるのは、藤野も相変わらず元気だってことだな。機会があれば立村のかあちゃんつながりで会えるかもしれないと、いいことじゃねえか」

「そんなのわかんない、けど」

やっぱり、懐かしんでるんだろう。

7

「貴史、窓開けたらまずいかなあ」

「まずくねえけど、クーラーきかねえぞ」

「うーんどうしよう。窓開けてから考えようよ」

促されて俺は、美里に窓を指差した。言い出しっぺに開けさせるのが当然。てっきり俺がやってくれるもんだと思っていたんだろう。ほっぺた膨らませて、しかたなく立ち上がっている。甘

いぞ。俺が美里を「淑女」として扱うにはまだ十年早い。ひざまづいてほしいなら、今から十年計画で立村を教育しろ。

立村が横向きで寝ているベッドのそばを通りカーテンを細く開けた。すぐに閉めた。

「いいや、このままで」

「なんだよ」

「だって、隣りの声丸聞こえだもん」

やはり美里も、俺と立村と自分とちんまりこもっているのを知られるのには抵抗あるらしい。首をかしげて立村の枕もとに目をやる。キーホルダーに気づいたのかと思った。

「貴史、ほら」

しゃがみこみ、一瞬だけ体をかがませてすぐに立ち上がった。片手には黒い本のようなものを持っている。

「落ちてたのかよ」

「立村くんの、手帳だと思う。ほら、金色の名前入れてあるもの。確か去年のをお父さんからもらったって言ってたよ。『週刊アントワネット』の」

ためらうことなく俺のところに持ってくるのが美里の性格だ。立村の手帳なんて俺も見たことがない。

「じゃあ枕もとに置いとけよ。あいつなくしたと思ってパニくるぞ」

「中なんて見てないよ、失礼な」

いや、どうも、うそくさい。俺はもう一度じっと目を見て、美里を追求してやった。

「さっきちょっとしゃがんだだろ、その時、なんかなあ、気になったんだけどなあ」

「私が盗み見したっていうの？」

「いや、なにかの拍子であいつの秘密を見つけたとか、なんかなかったのかなあ」

「ないわよそんなの。だって見たって、意味不明だよ、立村くんの手帳って」

美里はぱらぱらっと一気にページを扇状に走らせた。閉じた。

「ゼーんぶ、どっかの国の言葉だもん」

「は？」

どっかの国の言葉？

俺には意味不明だ。美里をせつつく。

「どっかってどこだよ」

「英語じゃないんだもん。立村くん書いている文章って。今だって、ふつう『The』とか『a』とか『I』とか『He』とかあるじゃない？ ないんだもん全然！」

——語るに落ちたな、美里。

「おい、お前どうしてそんなこと知ってるんだよ。やっぱり見ただろ、中」

「ちがうってば！ 偶然一ページ見えただけだってば！！」

力いっぱい俺の膝に手帳を叩きつける。

「ちらっと見えただけだってば！ どっかの知らない言葉がいっぱい並んでるから、盗み見したくたってできないよ！」

気になるが、見ちゃあいけない。

俺は立村の横顔、鼻先に手帳を置いておいた。全然気づいていないようすだ。たぶん、落ちていたことも、美里に見られたことも気づかないだろう。こいつの睡眠力は天才的だ。

「きっとスケベなことばかり、書いてたんだぜきっと。美里とチューしたいとか、なんとかかんとか」

「貴史、あんた変態。どうせあんたは鈴蘭優ちゃんのポスターに」

言いかけたところをあっさり遮ってやった。

「ああ、毎日な」

ほんとのことだ。もっと言ってやる。

「まったく、あんたに告白した女子って、みんなあんたの変態チックなところ知らないんだ。ねえ、この前のさ」

ぴんときた。

美里の目が光った。

「いいか、それ以上言ったら殺す。俺とお前の友情を保ちたいなら、これ以上言うな」

友情を選んだのだろう。美里は黙った。

「……別に、いいけどさ」

8

美里が言い出そうとしたのがなんなのかは直ぐに見当ついた。昨日の午前中、立村にも聞かれたことだ。

——だから、俺は断ったって言っただろ。

——一度会っただけだってさ。

会ったって、近くのソフトクリーム屋でだべって、公園に連れて行ってって程度だ。記憶に残っているのは、死ぬほど暑かったってことくらいだ。女子っていうのはああいうのを楽しんでいるんだらうか。俺だったらあっさりと、どこかバッチングセンターかどこかに出かけて走り回っている方が楽なんだが。まあ、向こうは喜んでいたようだったし、それはいいのかなあとも思う。でも、これ以上どうする気もない。二学期が始まる前に、けりをつけようとは思っている。

「貴史、この前うちの父さんが撮ってくれた写真、出来たって。あとで他の人に送るの手伝ってよね」

「あ、そっか。うちも現像してねえや」

二週間前、俺と美里と、あともう二家族で旅行した時の写真だ。うちの母さんと美里の母さんとは小学校の頃からの大親友で、毎年夏にはこんな感じでの旅行をやっている。姉ちゃんたちはいまいち盛り上がり欠けるけれど、俺と美里とが空元気だして騒ぐので、毎年それなりに盛り上がりしている。

「けどさ、よく私たちも行けるよなあって思わない？」

「なんでさ」

スカートをもむような感じでつまみながら、美里はつぶやいた。

「ふつうだったら、同じクラスの男子と同じ旅行なんて行かないよねって。どうしてみんな、そんなこと気にするのかなあ」

「そんなのいつものことだろ。だってお前、立村も誘ったんだろ。結果は見え見えだけど」

一応立村にも声をかけてみたのだ。奴のことだから集団行動は露骨に嫌がるだろうと思っていたけれども案の定、夏は熱を出しっぱなしらしいということで断られた。

「まあね、きてもらっても困ったかもしれないけど」

最後の言葉は、途切れ途切れに聞こえないように気を遣っているらしい。美里を変える恋の魔術。怖いもんだ。俺を変えた鈴蘭優ちゃんの笑顔と似たようなもんだ。

「ほら、立村くんってあんまりうちの家族とか、貴史の家とかに行きたがらないじゃない。なんでかわかんないけど」

「俺はしょっちゅう行ってるぜ」

「それはいいんだけどさ、なんか、うちの親、立村くんのが眼中にないって感じなのよ」

「だってお前、奴と付き合ってること言ってないんだろ？」

凶星だった。美里としてはえらく気を遣っているのだが、ばればれだ。

「気づいてると思うよ。私に言うもん。『品山の方は危険だからあまり近づくんじゃないよ』って。暗に、行くなってことだよな」

——気づいてるじゃねえか。

9

うちにしろ美里の方にしろ、親はどっちも恋愛結婚してるから、その辺のつつこみはあまりうるさく言われぬ。というより、母親同士の夢かなんかで

「将来お互いの娘と息子を結婚させたい」

というあほらしい話があったらしい。両方の家で男は俺だけ。清坂三姉妹のうちどちらかを選べというのが暗黙の了解だが、いかんせん鈴蘭優ちゃんのプリティーな魅力にぞっこんな俺には、意味のないことだ。

美里だって同じもんだろう。あえて俺の親友にあたる相手を彼氏にして見せ付けてるんだから。

ただ、美里の両親が立村に対してちょっとなあって感じを持っているのは知っている。何度か顔を合わせたことはあるだろうし、立村も礼儀に関しては神経質な奴だからぬかりはないはずだ。俺よりははるかに、お坊ちゃんだからなおさらだ。

うちの親曰く、

「立村くんって、あの品山の子でしょ。きれいな子だけど、ちょっと話し掛けるのに考えてしま

いそうな雰囲気ねえ」

きれいな、という形容詞が笑える。

野郎に使うもんじゃねえよと突っ込みたいところだ。

美里の母さんも言ってたらしい。

「妙に礼儀正しすぎて、うちとはレベルが違う感じねえ。本当にいいところのお坊ちゃんって感じだし」

さすがにお互いの親友（少なくとも美里は親にそういい含めているらしい）である立村上総を、目の前でこき下ろそうとは思っていないようだ。

「まあいいじゃねえか。どうせ奴のうちにふたりっきりでなんて、行ったことねえだろ？」

「あるわけないじゃない。あんなへき地。だって自転車で行くと天気が違うのよ。うちでは傘がいらなかったのに、学校につくとじゃあじゃあだったって立村くんよく嘆いてるもん」

——品山って、そんなに、へき地かよ。

ねむくてふらっと親たちの部屋前を通った時、聞いた言葉。

突然頭の中にかがんと響いた。

ずっと忘れてたのにだ。

眠くて冷凍みかんを食べたくなくて、親の部屋にたかりに行った時だった。

。

——聞いたら、まずい。

とっさの判断できびす返して戻ってきた。冷凍みかんを食い損ねたのが惜しかったから忘れていた。美里の知らないところの、話だった。

——ほら、たあちゃんとうちの美里と仲のいい男の子いるじゃない？

——ああ、あの品山の男の子？

「美里、お前品山って、行ったことあったっけか」

「ないわよ。だって十年前に神隠しっていうか、小さい子がどんどん誘拐される事件があったじゃない。うちの親、あれが頭にこびりついていて、品山って言葉を出すのに拒否反応起こすみたいなのよ」

かなり昔の話だ。俺も品山っていうと、やたら立派な家が立ち並んでいる金持ちの住宅地という印象しかない。昔は雨で川が氾濫して大騒ぎになり、住んでいる人もいろいろな理由で差別されているというのは聞いたことがある。立村もちらっと、そんなことを話したことがあった。もっとも、立村の部屋は俺の部屋の三倍近くはあって、ステレオやら本棚、洋服ダンスなどがずらっと並んでいる。豪勢な館だった。

——先生にも言われたんだけど、ちょっと変わった子らしいのよね。評議委員しているくらい

だから、悪い子ではないらしいんだけど。

——本当はたあちゃんを評議委員にしたかったって、女子の間では噂だったみたい。女の子って正直よね。たあちゃん、かっこいいもん。

——子どもの友だちに注文つけるのもなんかと思うんだけど、やはりなにか違うわね。住む世界がねえ。

——美里がいうには家庭環境もあんまり、恵まれてないみたい。お父さんとふたりですって。

——別に関係あるわけじゃないだろうとは思うんだけどねえ。もしあの品山の子が、目立つ不良とかだったら、はっきりと付き合うのやめろって言えちゃうんだけどね。

——性格は、本当にいい子らしいからその辺が私もジレンマなのよ。ちょっとおませさんだからうちの美里も。たあちゃんみたいな王子さまがいるのにねえ。

品山という地名、頭にこびりついた。

美里はどこまで知っているんだろう。

10

美里は相変わらず脳天気だ。実は自分が「ロミオとジュリエット」だってことに気付いてないわけだ。学校では公認カップルなんだし、菱本さんにも一応了解を取っているんだから、ばれるのもみえみえだろう。

「でもさあ、貴史も思わない？　なんで立村くんって顔色やたら見たがるんだろうね」

「性格だろ、いまさら言ったってしゃーねえだろ」

「この前だってさ、貴史と私と三人で美術館行ったでしょ。立村くん、絵が好きじゃないんだったらそう言ってくれれば誘わないのにさ」

「おっと待った。美術館に行きたがるのはなにが目的か、確認しねえとな」

「んなことはっきりしてるでしょ。どうせ貴史が抽象画とかいうの？　怪しい絵ばかり見て騒いでいたから合わせてただけだよ。私もあんたの美的センス、付いていけない時あるもんね。鈴蘭優は可愛いと思うけど、やっぱりあんたロリコンだし」

「黙れったら黙れ！　けっ、三歳年下、どこが悪いってんだ」

「べー、だ」

まぶたの赤い粘膜を見せつけるように、美里はあかんべーをしゃがった。まったく、立村もこういうところをきちんと見て美里の扱いを考えるべきだと俺は思う。奴のことだから、美里を女神様扱いしてるにちがいない。生まれ持ったのレディーファースト主義者だ。

「それでね、たまたま知り合いの子に会って話したんだけど、どうもその子も立村くんの顔、覚えてたらしいのね。一緒にいたんだから挨拶すればいいのに、いつのまにか消えてるの。気を利かせたつもりなんだろうけどね、むこうは。でも、こっちだって……」

「あたしのダーリンよ、って見せびらかし損ねて悔しがってるくせに」

「もう、そんなんじゃないってば！」

美里の叩き方はまじで痛かった。

「ほら、立村起きるだろ」

「起きるなら起きちゃえばいいのよ。言いたいことみんな言えばいいのよ。私に言いたいことてんこもりなくせに、ずっと『俺が悪かった』の一点張りだもんね。もう、いいかげんにしてって言いたいよ、ほんとに！」

俺だったら絶対起きたらろう。隣の部屋にも聞こえたかもしれない。美里のわめき声でちょっと耳が痛い。

なのに、気配なし。

「こいつ、聞いてねえよ。寝てる」

「ほんと」

起こしてしまいたかったのか。わからない。立村は微動だにせず、すうすうと寝息を立てていた。こいつはいびきをかかない奴だからいるのをつい忘れてしまう。

「寝てる振りしてるんだったら起きちゃってよ、もう」

立村が美術関係を苦手としているのは知っている。もともと俺はガキの頃から美術館をテーマパーク代わりにしていたし、美里も似たようなもんだ。少なくとも立村が暇あるごとに挿絵なしの文庫本ばかりめくっているのと同じように、俺はいろんな絵を見てしゃべるのが好きだ。

一年最初の美術の時間だったと思う。

かばんを写生するという授業で、みな、自分のかばんを机に置いてスケッチに燃えていた。俺はそんなの退屈だったんですぐに片付けて、超人気SFアニメ「砂のマレイ」の一場面を書き入れたりしていた。まあ、もちろん怒られた。

立村はその時、真面目すぎるくらい真面目に写生していたんだが、いきなり定規を取り出して、かばんの柄やら、校章やら、金具やら、いろいろと線を引き始めた。俺の知る限り、写生の時に定規を使う奴ってというのは立村が初めてだ。ふうん、と思いながら眺めていた。

たまたまむかつくことがあったのか、美術の先生が立村の絵をじろっとにらみ、いきなり定規を取り上げた。

「自分の思ったように写せばいいんだ！なんで定規なんてもんを使ってるんだ！ばかもの！」

後日、この先生は青大附中をやめた。なんかわからんけれどももともと評判がよくなかったらしい。芸術的なセンスはぴか一だったけれども、やっぱり芸術家は変人が多いってことの証だったらしい。別の授業の時に、椅子を投げつけて怒鳴るかなんかして、騒ぎになったらしい。一回で縁が切れてほんとよかった。

立村はその時のトラウマが残っているみたいだった。以来、定規は使わなくなったし、それなりにまともな絵を書いている。工作も器用にこしらえている。けど、美術の授業は基本として手抜きしているのが見え見えだ。

——いいじゃねえか、定規使ったって。

俺だったらそういうんだけどなあ。

言えないところが、美里と同じく、
「言いたいこと言えばいいのよ！ もう、頭に来る！」
ってことだろうか。

11

相当美里もストレスがたまっているんだろう。

立村の性格を考えると、美里には思いっきり気を遣っている反面「彼女」らしい扱いは一切していないようすだ。なんてったって、一学期終業式後、何を考えたか一年B組女子の巨乳を触って放心状態でいた。

厳密に言うと、「触らされた」という方が正しいかもしれない。あの直後、立村の記憶は半ば消えていたらしく、俺や美里に、

「こんなところでBなんか経験しちまっていいのか？ お前ほんっと、女子に迫られること多いよなあ。よりによって美里の前で」

「違うって。ね、杉本さんはあまりああいうこと、気にしないタイプの人だもんね。たぶん、握手のつもりだったんだと思うんだ、そうだよな」

「……ごめん、覚えてない」

——覚えてねえわけねえじゃねえか。アイドル歌手でもそういねえぞ。あの巨乳。

神経に響くようなショックを受けたようで、立村は街に出た後も記憶喪失者状態でぼーっとアイスティーをすすっていた。正直、うらやましいと思わなくもない。ただし、できれば一般大衆のいるまん前ではなく、ふたりっきりの部屋とかなんとかで。相手はもちろん……。

「貴史、何すけべったらしいこと考えてるの。あんたがひとりでにやついているときったら、鈴蘭優のポスター見ている時くらいだもんね」

さすがよくわかっていらっしゃる。幼なじみ十四年やっているわけじゃあない。

「お前だって、覚えてねえってことねえだろ。どうせ立村とふたりっきりで、ああしたいとかこうしたいとか」

「ばかね。男子と違うのよ。その辺は。立村くんはふたりっきりになったって、私に変なことするようなことしないもん」

「お、断言しまくってるなあ」

「そういう度胸がないっていうの！」

寝ている相手にここまで言っているのか美里。付き合う前まではずーっと、「立村くんは一年の杉本さんが好きなんだよ。絶対そうなんだよ。どうしよう」とぐちぐちぐちぐち言いつづけてたっていうのにな。相手にOKさせたたん、態度を豹変させるってこのことだな。

「釣った魚にえさはやらない」状態だ。

ま、立村が仮にふたりっきりで、美里に言い寄ってチューのひとつでも求めたとしても、あっさりとぶん殴られて終りだろう。断言するが、そういうことに奴が関心ないとは絶対はない。かなり際どい写真集を渡されていたところも見たことがある。ただ表面に出さないから美里は「そ

んな度胸なんてないのよ」と言い張っているが、もし俺がこの部屋にいなかったら。。

「立村だって男なんだからな、ふたりっきりで押し倒されたって」

「だからそういうのは絶対ないってば！」

「男は本気になったら、怖いぞー！」

「本気になってなんかないんだって。立村くん、一度だってそんなこと考えたことないに決まってるよ。どうせ」

——どうせ？

美里の言いたいことと俺の考えていることがずれたような気がした。声を潜め、立村に聞き取れないようにささやいた。

「美里、なんかあったのか？ こいつと」

「ないよ。なさすぎるよ」

口を尖らせた。

「付き合ってるなんて周りがそう決めてるだけであって、ずーっと一年の頃と同じだよ。なのにさ、他の子からは公認カップルだとか、ダーリンだとかわけわかんないと言われてるんだよ。ちゃんちゃらおかしいよね。彰子ちゃんなんて、南雲くんがいつもべったりくっついてきて、人前でも恥ずかしくなるようなことずうっと言われまくっているんだよ。あのカップルは隠してないからって言われればしょうがないけど。でも、さ」

「もう少し、なんかあったっていいじゃねえか、ってことかよ」

確認するかのように、俺は続けた。

「言いたいこと、みんな言ってくれるだけでいいんだよ。貴史みたいに！」

12

美里がなんで切れているのか、だいたい読めた。他の奴らだったら単に、立村ともっといちゃつきたいとか、俺を追っ払ってどっかでデートしたいとか、そういうことを想像するんだろう。俺ももし美里でなくて鈴蘭優ちゃんだったら話は別だったろう。

——美里と俺は、おんなじこと考えてるってわけかよ、ったく。

俺は冷蔵庫から、もう一本オレンジジュースを取り出した。霜が付くくらい凍っている。実は冷凍庫の奥に押し込んでいたので立村には気づかれてない。

「ま、飲めよ。シャーベットだけだな」

茶碗に注いでやった。最初はなかなか溶けなかったけれども、なんだか叩いているうちに流氷っぽいざくざく加減にこぼれてきた。

「貴史も言いたくなることなあい？」

「まあなあ」

やはり女子にはいけない部分があるものだ。昨日の夜だって立村がいきなり、水口の部屋へ起こしに出かけた時、最初に思ったもんだった。どうして俺に何もいわねえでなんでもやっちゃうのか。ただでさえ熱でぶっ倒れそうな時にだ。どうして、俺に一言、「羽飛、悪いけどノックす

るだけしてやってくれないかな」と相談してくれれば、俺のことだ。余裕でやりに入ったろう。水口だってねしょんべんが直っていないのは隠したかったようだけど、結局最後は素直に白状しちゃっている。俺も大きい声ではいえないが、小学校四年まで直らなかったんだからおあいこだ。あればっかりは、「意志の力」だけじゃどうしようもないってことをよーく、経験済みだ。

——だからなんで俺にいわねえんだよ。

「あとさ、もうひとつ。立村くんが昨日の夜、私たちの部屋に入ろうとしていたってほんとのほんと？」

「現場見てねえよ。でもお前も言っただろ。こいつにそんな度胸ねえって」

「そうよね。一緒にこずえもいるんだもんね」

立村には申しわけないが美里と乾杯してしまった。猛烈に受けた。

「かえてそれの方がネタとしては面白かったよなあ。古川がいったい何言い出すか見ものだぜ」

「こずえは立村くんのこと、完全に弟としか見てないよ。同級生をああも子供扱いするのはどうかって思うけどね」

もっともだ。俺は腹をかかえつつ、でも立村には聞かれないようにひいひい声を上げた。立村が毎朝、

「古川さんにさ、どう言い返すか、が問題なんだよな。わかるか、羽飛」

とぼやいているのをよおく、俺は知っている。そりゃいきなり、

「あんた童貞？」

と聞かれたら絶句するだろう。俺ならば、

「優ちゃんに操をささげてまーす」

の一言で切るだろうが。

13

しばらく美里とは「砂のマレイ2」の今後について語り合っていた。時間が途切れないのはこういう時なんだろう。結構でかい声でしゃべりまくっていたのに、全く微動だにしない立村は、やっぱり天才だ。

「貴史、今何時？」

「十二時ちょいすぎ」

「そっかあ、そろそろ戻らないとまずいかあ」

名残惜しげに美里はため息をついた。同室の古川も怪しんでいるだろう。別にやばいことをひとつもしたわけではないけれど、でも、見つかったらまた別の騒ぎになるだろう。

「誰か通ってるかなあ？」

「ほら、見てやるよ」

自分に火の粉がかかることに関しては、心ならずもレディー・ファーストを心がける俺である

。

人通り、一切なし。

「じゃあ、あしたね。あの、また」

「言い残す言葉はねえのか？」

じろっと、窓際の眠れる生命体を見つめる美里。

「もう、知らない」

立村が聞いたら泣くだろう。えさをやることもないってこのことだ。美里はすたこらさっさと、背を向けて自販機近くの部屋にもぐりこんだ。盛り上がっているのかどうかわからんが、廊下は静かだった。隣の菱本先生部屋も特に、目立った動きはなかった。俺は美里が使った茶碗を軽くゆすいでもとの場所に戻した。きれい好きだからじゃない。物的証拠が残ったらやばいだろう。「不純異性交遊」って後ろ指指されたら笑えないし、何よりも立村のジェラシーが怖い。幼なじみ同士とはいえ、俺と美里は一応男子と女子だ。彼氏たるもの、やっぱり自分でない男子と変な噂が立つのはむかつくだろう。

美里が愚痴るのもわからなくはないし、俺もなんとかしてやりたいとは思う。思い切って俺と美里が組んで、立村に「自分の彼女」的意識を刺激するのもひとつの手だろう。お互い、呼吸は合っているんだから。でも、どうなんだろう。一応美里は立村にこなかけて付き合い始めたわけだ。立村も奴なりの考えでクラスに交際発表した。ただ、美里の言うとおりに何もなしにするならば。

——てっきり手ぐらいは握ったりなんかしたんじゃないか、って思ってたんだけどなあ。

——奴がぼんくらなのか、美里が迫ってないのか、どっちかだな。

決して立村が本能のままに襲い掛かるということは考えられない、ってところが、みそだ。

襲うなら美里だろう。将来チューやらばこんぼこんやらなんかするんだったら、絶対美里がリードしなけりゃ終わらないと俺は思う。半端に押し倒したら百発殴られるに決まってる。

——でも、立村は本当に、美里に惚れてるんだろなあ。

——だったら写真見て毎朝チューしててもおかしくないよなあ。

俺はそっと窓から見下ろした。思わずすぐにカーテンを引いた。

まずいものを見ちまったって感じだ。ちょうど斜め向こうあたりに、人影がふたっつ、うろついている。顔はわからない。野郎同士でいちゃつくってことはまずないだろう。うちのクラスで立村と美里以外にカップルったら、南雲と奈良岡くらいなもんだろう。

——知らねえぞ。菱本先生にばれちまっても。

『美少女アイドル鈴蘭優と超美形男子中学生と、深夜の密会か?!』なんてことだったら、俺はためらうことなく優ちゃんを守るだろうが、知らん奴らにはいたって無関心だ。立村が起きていたらふたりで観察するって手もあったけど、残念、生命体は動かない。

ふと、立村の寝顔を覗き込んだ。やらしい夢を見ているのか見てないのかわからんが、見事なほど静かだ。表情が動かない。

「な、立村、聞いてたら返事しろよ」

声をかけた。

「お前、夜中に美里とふたりで歩きたいとか、思わなかったのかよ」

当然、返事はない。俺はさらに続けた。

「お前さあ、チューしたいとか、二人っきりになりたいとか、思わないのかよ。俺抜きで」

寢息だけだ。おきても絶対こいつなら寝た振りするだろう。

「じゃあもし、俺が美里のことを取っちゃったりしたら、どうするんだ？ 九十九%ないとは思うけどな。もし美里が鈴蘭優ちゃんと同じ顔に整形してきて、性格も優ちゃんっぽく洗脳されてたら、俺も何するかわからねえぞ」

一切変化なし。

「俺に言ってくればなあ、いくらでもデートの計画立ててやるのにな。これでも夏休み、俺なりにプラン組んで、いろいろ女子を連れまわしたりしたんだぞ。天才的プランナーの羽飛貴史さまに相談かましてくれれば、いくらでも協力してやるのにな。全く貴重な人材資源を活用してねえぞ、立村」

言っても無駄だとわかった。呼吸が乱れていない。全くもって、素通り。優ちゃんのポスターに語りかけるならまだしも、野郎相手にぬいぐるみしゃべりしてもあほと思われるだけだ。あきらめて、自分のベットにねっころがった。

——やっぱし、しばらくは、様子見ってとこか。まったく美里も立村も手がかかるぜ。しゃあねえなあ。俺もしばらくは、面倒見てやるしかないなあ。

俺はカレンダーを探した。二学期始業式はあさってだ。

——けどあのふたりを強力瞬間接着剤的にくっつけるには、生半可な方法じゃ無理ってか。俺のパワーを存分に発揮してってことになる、とってまだけど別の方に力分散できねえよ。まずは立村のジェラシーを刺激するようなことを、計画してっと、それから美里に惚れている野郎の存在を噂させてっと。うわあ、想像してると楽しすぎるぜ。美里が別の奴を好きだってことで立村をじらして……結構受けるぜ。お互い、愛も深まってよろしいんじゃないっすか。

あさっての始業式朝一番、することを決めた。

——あの子は鈴蘭優ちゃん以上に、真夜中ふたりっきりでうろうろしたい相手じゃない。明日の朝一番で、断ろう。

まずは立村と美里、ふたりをいちゃつかせてからだ。

——待ってろよ、ふたりとも。

ほんと、おなかの中から湿気が抜けていくような気がした。ばんざーいと両腕のばして、俺はX文字のまま目を閉じた。

——俺はしばらく、優ちゃん一筋で生きるのだ！

1

三角定規型の陽射し、落ちた真ん中に立っていたのは、うちの会計だった。生徒会室の引き戸を閉めたとたんいきなり笑い出した。俺はしばらくにらみつけるしかなかった。

「教授、らしくないことしてるんじゃないの。笑っちゃうよね」

「うるせえ」

俺が水鳥中学で「教授」の異名をもらうようになったのも、この女の発言、

「やっぱし、総田教授って感じじゃないの」

全校生徒のまん前でため口叩きやがったからだろう。場所が場所でなかったらぶんなくってやるところだったが、俺は水鳥中学生徒会副会長だ。暴力沙汰は避けたいとこだ。

——まったく、神経逆なでする女だぜ。

水鳥中学生徒会会計、川上寿々（かわかみ・すず）としゃべっているとどうも、俺の「男」を反対から横やりいられるそんな感じがする。たまたま一年時、生徒会副会長に出馬するよう説得……いや、命令だなあれは……された時、なぜかこの女も一緒にいた。まだここまでバトルになるとは思わなかった関崎もいたし、その他の連中も揃っていたが、まさか、こういうことになると思ってなかったのは、やはりこの女だろう。

「どうする？ みんなと一緒に展示物観に行く？ みんなにきゃあきゃあ騒がれるよ。座談会後だし、もてもてになりたいなら、そうだね」

ねめっちい瞳で俺を射すくめる。

嫌だ、本当にこの顔が。

「じゃかあしい」

吐き捨てた。

「それとも」

意に介さず、と言った風に川上は、自分の唇をかるく人差し指で撫でた。

「いつもの、とこ？」

——勝手に、しろ。

ほとんど使われていない図書準備室は三階にある。この時間帯、大地震が起こらなければいい。俺が願っているのはそれだった。

2

会計として、表立った行動をこの女はしていない。俺がさせてない、と言ったほうが正しいだろう。本来、俺の立場としては水鳥中学生徒会副会長として、同じ副をやっている関崎と組むの

が筋だ。しかしながら、ご存知、ウマが合わないとはこのことで、俺は結局他の参謀を探さなくてはならなくなる。

こういう時、関崎がうらやましいと思うのは、生徒会外とはいえ佐川を押さえていることだろう。見た目はガキだが、ありゃあ天才だ。たった三日で、がちがちの規則マシーンだった関崎を、単なる純情野郎みえみえにさせてしまったりする。今回の学校祭三日目に関しては非常に助かった。もっとも、俺がよりによってぶっこわしてしまったのはご愛嬌すぎるが。

ということで、現在俺の参謀は、ひとりしかいない。

「ほら、ドーナツあるよ。教授、食べさせてあげようか」

「ふざけるのもいいかげんにしろ」

「はあい」

半分に割ったかけらを、俺に差し出していた川上だが、あっさり自分の口に持っていきやがった。手付かずのものを俺は袋から取り出し、本のうずたかく積もった椅子と机の間にあぐらをかいた。図書準備室はいわゆる、置ききれない蔵書を一時的に保管しておくところだそうなので、本棚、机、椅子、すべてに本が平積みされている。読まれない本だから、俺には理解できない哲学書だとか、歴史書だとか、そんなものばかりだ。

この部屋を発見してから、一年が経つ。

合鍵はすでに自腹でこしらえ済み。

わたぼこりが握りこぶしぐらい飛び交っているところと、匂いが臭いのを覗けば秘密基地としては最適の場所なのだ。もしだれかが覗き込んだとしても、俺は生徒会副会長だとばかり、

「今、調べ物してたんだけどさあ」

と答えればオッケーだ。もちろん今まで見つけれられたことなんてない。俺もその点は抜け目ないつもりだ。

なのになんでだろう。川上のような女が当然のごとくジュースを飲んでいるっていうのは下せない。

「したいなら、無理しないでいいけどね、教授は表を必死に繕っているところ、よーくわかるわ」

「もう一度言ってみろ、追い出すぞ」

「いいの？ ここの秘密言っちゃおうよ」

川上は本気にしてない様子で、俺の顔真っ正面にしゃがみこんだ。片手にはジュースの缶。

「この前、鼻血出したことも、言っちゃおうよ。ねえ」

——俺としたことが、全く、ああ。

総田幸信、最大の汚点だと、つくづく思う。

川上のしてやったりなまなざしに逆らえない理由がそこにある。

——俺だって、学校祭やら関崎とのばたばたで神経切れそうだったんだ。ああなったってしゃあねえだろう？

物言いたいのがまんしている俺に、川上はもう一度、悠然と笑みを浮かべた。

「さて、どうするの？ フォークダンスの準備も整ったってことだし、まだ悩んでるってわけなの？ なわけないよねえ。だって、教授は私の認めた、唯一の男だもんね」

——てめえに認められたかねえよ。

隣りにぺたんと体育すわりをしたまま、ゆっくりつぶやく川上の声。ちくしょう、と自分の口からは出てくるけれども、身体が違う反応をしてるのに気づく。ワイシャツに血なんてつけたらしゃれになんない。俺は天井を見上げた。幸い、鼻血が出そうな気配はない。

3

——自己嫌悪。

いやおうなしに思い出させるこの言葉。

俺には全く無縁のはずだったんだが。

どこかのだれかがボケをやらかしたんだったら、一人で怒鳴り散らすか対策を考えりゃあいい。自慢じゃないが、俺はその辺の頭の回転がかなり速いつもりだ。

だが、昨日のことといい、今日の座談会の時といい。

俺は完全に、水をあげられた。

「副会長がひとりで突っ走って、でも無事に座談会は終わったってことだし、まあ、盛り上がったってことで私はいいと思うけどね」

——だから女って奴は。

別に男尊女卑主義者じゃない。でも言ってしまいたくなる。川上に対しては「女」と言ってしまいたい。脚を崩してセーラーのリボンを軽く振っている。生徒会役員だからといって、決して優等生風の結び方をしないのが川上流だ。最低十センチ、残さなくてはならないはずなのだが、先っぽくらいを残して、あとは背中に風呂敷を広げている。

「フォークダンスは、完璧だ」

つぶやくことができるのはこれだけだった。

「あたりまえじゃないの。教授、あんたが、まさかあのチェリー君に負けるなんてだあれが思っているって言うのよ。そりゃあね、今日の座談会で叫び出したのは驚いたよ。でも、あれって後で絶対後悔すると思うなあ。む、し、ろ」

——寄るな、近づくな。

「教授が副会長を止めようと駆け上がったでしょ、あれが完璧に、決まったわよ」

——あぶなかった……。

おとといの二の舞になるとこだった。

鼻の中はぬるくない。

佐川にも思い切り勘違いされるようなことを言われていたけれども、俺はこの女と付き合っているわけではない。関崎が俺をさんざん「女ったらしの軟派野郎」と思いこんでいるのを訂正する気はない。ただ、みなが思っているほど非道な奴ではないと俺は訴えたい。

それ以前に、川上は何が目的で生徒会に入ったんだろう。要は受験の時に箔がつくから、という理由らしい。よく周りも騙されているもんだ。いつか俺の前で本当の目的を白状させてやるべく、こうやって機会を狙っている。だが今のところは俺の方がすかされている状況だ。

「あ、そうだ。わかった」

川上がいきなり、俺の隣りに寄り添ってきた。うっとおしい、けりを入れようかと思う。感情ではそうなんだが。

「負けたと思ってるんでしょ」

「何を！」

「副会長に、成績も、学校祭も」

「黙れ！」

「ほらほら、静かに。見つかったらどうもよ」

逆らえない脅し。俺はドーナツを食い終わると、三十年前の「六法全書」をひっぱりだし、枕にして横たわった。埃だらけだが、いねむりするには丁度いい厚みだ。だいたい親指と人差し指を思いっきりひらいたくらいの厚みがある。

「精をつけてあげようか」

「殺すぞ、黙れ」

「ほら、動かないで」

天井を見上げ、俺は川上の足がひょいと腹のところをまたぐのを眺めていた。意識的にやっтерることだから全然、色っぽくもなんともない。当然鼻血なんて出やしない。第一今日は制服だ。この前みたく……。

「そうかあ、着替えなくちゃ、だめか」

「てめえ！」

俺が立ち上がろうとするのを、ちょこんと膝の上に座り込み押しとどめる川上。膝のところに、あやしい感覚が走る。

「なあに、このくらい慣れてるでしょ」

意味ありげにスカートの下を膝で押して、

「だって、教授は副会長と違って」

一呼吸置いた後。

「チェリーじゃないでしょ？」

——自己嫌悪。

一度は、昨日、関崎の片思いしている子についてどたばたあった時、この女がよけいなこと

を言った時。

二度は、今日、座談会あいさつの時。言うまでもない。

そして三度目が。

——自分で自分の首をしめるって本当だよな。

俺は、歯噛みしながら足の指に力をこめて、もう一度横になった。

4

まだわいのわいのやっている廊下の連中。ガキだ。実にガキっぽい声している。引き戸をあければここは別世界だってことが見え見えだっていうのに、俺はまだ中学二年生という名札を押し付けられている。

——まったく、チェリーかよ。

川上が膝から下りてから、俺は六法全書の上に手を組んでゆっくりと眺めた。決してべっぴんじゃあないし、やたら細いカマキリ女。ただ髪の毛が微妙にパーマかかっているのはなぜなんだ。俺と同じか、とにらんでいるのだが、あえて追求しない。たぶん「天パに決まってるわよ」と、かわされるに決まっている。

「おい」

「はいな」

「お前、関崎に一言でも『チェリー』だなんて言ったことあるのかよ」

ふふり、と唇を震わせて、目は笑わずに答える女がひとり。

「言ったってわかんないわよ。彼、正真正銘の童貞君だから。だってさ、生活委員の水野さん見てあそこまで動揺しちゃうんだもんねえ。隠せないんだもんねえ。他の子からみたらどうかわかんないけど、私は面倒見切れないわ。やっぱし」

——じゃあお前はどうかだよ。

たぶん川上と俺が付き合っていたらためらうことなく聞いただけだろう。もしくは向こうが断然不利な状況であって……たとえば俺が両手で押し倒しているとしたら。そんな汚い事をするほど俺は腐った奴じゃない。言いたいことを飲み込むのはなれている。

「むしろ、私だったら佐川くんの方が女たらしになる可能性大だと思うな。要領いいもん。ちゃんとかまめに走り回ってくれて、頭の回転も速いっていうの」

「ほお、川上、お前は佐川みたいなガキンチョが好きか」

天才・佐川雅弘。頭脳はほしい。しかし。

「かけてもいいよ。教授。あの親友同士、どちらが先に初体験するか。絶対、佐川くんの方だと私は思う。教授は？」

——知るかよ。

答えず、聞こえないふりをした。

「ねえ、教授。あ、そっか。言ったらやばいって思ってるんだ。大丈夫だってば。私は口がか

たい……」

「わけねえだろ！」

昨日この女が、俺と関崎の前で、「ほら、あそこに水野さんがいるわよ」なんてたわけたことを言わなければすべては丸く収まったんだ。佐川の策略に見事にのっかって、「水野さんに思われているかもしれない」と信じ込んだ関崎は、俺たち敵に対しても実にいい奴になってしまった。仕事を肩代わりしてくれるわ、手伝いを申し入れるわ、先生との折衷までやってくれるわ。今までのバトルはいったいなんなんだと思ったくらいだ。これから巧くやっていけるかもしれないと、一瞬まじで思ったくらいだ。

そうだ、川上よ。

てめえがいなければ。

目つきに出たらしく、にじりよってきた。

「ごめんなさい、あれは私が悪かった。でもね、私だって言い分あるのよ」

「座談会をぶっ壊せたからか」

「まさか、いくら私がチェリー君にうんざりしてるからってそんなこと言わないわよ」

「平家物語 二」とかかかれている白い表紙の本をひろい、俺の枕……当然六法全書……と並べた。俺の隣りに横たわった。

「教授、あんたがかっこよくなかったからよ。子どもとレベル同じ顔して、にこやかにやってるところって、らしくないもんね。だってあいてはまだチェリー君よ」

チェリーチェリーとうるさすぎる。

——じゃあなにか。お前はどうか。

川上は俺の耳もとに息を吹きかけるまねをした。

中学二年でまだ童貞だってことは、別に俺もコンプレックス感じてやいない。もちろんキスくらいは経験済みだ。もちろん相手は川上じゃない。関崎のように、顔を見ただけでしどろもどろになるようなことはまずない。まあもちろんチャンスがあれば、経験したいと思わないわけじゃあない。無理にあせることもないし、今んところは写真で十分だ。情けない話だが、俺はこの歳にしてまだ、アダルトビデオと言われるものを見たことがない。仲間にもこればかりは口にしてない、秘密だ。

だが、だ。

川上の前に出ると、「チェリー」であることが実はものすごく惨めなことなんでないかと、いつもふらふらさせられる。

「チェリーじゃない」から、この女は俺にまわり付いて来るんだ。そう思えてならない。

まったく、ほれてるわけでもないのにだ。

自分で自分がわからん。

黙ってれば、これほど楽なひと時もない。川上は隣りで何を考えているのか、寝息を立て始めたし俺は俺で、次のことを考え始めている。頭蓋骨がががんとして、眠れやしない。「六法全書」より「平家物語 二」の方が枕には最適だってことらしい。

——もし俺が惚れてる相手とこうしてるんだったら、絶対、ただでは終わらねえな。

この辺は自信ある。ふあふあっと耳もとにちゅっくらいやりかねない。俺も女子へは「可愛い」と思う気持ちがないわけじゃない。実際いないこともない。

だがだ。

川上に対しては、そういう誘惑めいたところではなく、もっと別のところでいかされてしまうところがある。どういうところかといわれても困るのだが、今のところは鼻血を出さないですむ。といえいいんだらうかなあ。

——じゃあなんであの時。

後悔したってしかたない。おととい、たまたまつかの間の休息を取るべく、逃げ出してきたわけだが気づいた川上もしっかりとくっついてきた。関崎が生活委員の水野さんと話しこんでいてすっかり俺たちのことを忘れていたので、ちょっとばかり推理を整理したかった。ああ、確かにあの時は参謀たる川上と意見を交換したかったさ。ああ、悪いか。

——あのふたり、絶対、そうだな。

——水野さんはどうかわかんないけど、悪女っぽい感じよね。女としては、かなり用心したいタイプ。

悪いが俺のタイプではない。

やっぱりその時も、俺は「世界こども大辞典」なる、旧仮名遣いばりばりの辞書を枕に寝ていたわけだ。今と違って、かなり眠かったからうとうととしてしまったはずだ。夢なんて見てやしない。話すだけ話し、「関崎副会長をたぶらかすくの一水野さん、裏で糸を引く悪代官佐川雅弘」の図をこしらえたところだった。

俺は強く聞きたい。

目覚めた瞬間、自分の腹のあたりをまたいでいる女の足二本を見上げてみたところを想像してほしい。しかも相手は体育用のショートパンツをはいている。体育が終わった後ということでもまだ着替えてなかったそうだと感じていたがそんなの俺の知ったことじゃない。

たまたま偶然か、そんなのもしらん。

斜め下から見上げたら何が見える？

男だったらどう反応する？

どうだ、俺を責められるか！

といたいところだが、向こうに反応を思いっきり気づかれてしまったのは大誤算だった。いや、抱きついたとか押し倒したとかそんなことしていたら別の騒ぎになっていただろうし、そこまで俺も恥知らずではない。

そうだ、たかが鼻血だただけじゃないか。

それも噴水みたいに湧き出したわけじゃない。ほんのわずか。ただ唇に垂れただけだ。

——教授、鼻血出した？

いぶかしげに尋ねてきた川上に、俺もどうしてあんな返事をしてしまったのかわからない。

——俺はチェリーじゃねえからな、んなもの見慣れてるぜ。なあにが。

さらりと流したはずだが、どうもそこらへんを川上は非常にお気に召したらしい。

——ほんとうに？

念を押すような声。覚えている。

——あったりめえだろう。たかが女子のまたぐらのぞいたくらいで襲うようなほど、俺は女飢えちゃいねえよ。

学校祭終わったら、どっかのルート辿って、チラシのビデオ屋に電話いれて見ようか。まじで考えた。たかが、またがれたくらいで鼻血ふいて悶絶してるなんて関崎、もとい他の連中にばれたら何言われるかわからない。やっぱり俺も単なるチェリーボーイだったのね、と思われるのだけは死んだってやだね。

その場しのぎで言った言葉を、しつこく繰り返すのは、やはり川上も疑ってるのだろうか。本気で突っ込んでいるのだろうか。それとも、お互いお相手をととか。

俺の見た限り、川上と付き合っている野郎はいないようだ。この学校に限っては、だが。図書館準備室から出ればこいつも素直に中学二年の顔して机に座っている。こいつがやらしい言葉やらチェリーやら言いまくるのは、ここだけだ。

——ちくしょう。せめて、本番ビデオとか観たことあればなあ。

6

人間には二面性があるもんだと思う。

俺もそうだし、たぶん川上も、関崎も、佐川もそうに違いない。人前では水鳥中学生徒会副会長として自信満々の態度を取っているし、生徒達からの圧倒的な支持率を誇っている。関崎がぶちぎれて俺に食って掛かるのも、たぶんガキのやっかみに過ぎないと笑ってすませていた。成績いい奴がかならずしも大人じゃねえってことだ。

だが、一皮向けば俺もこうやってもぞもぞと、チェリーがどうだかこいつは本気かと考えているわけで、全く俺の本意ではない。

そういうもんを人には絶対に見せたくないだろうし、まあ俺だってそういうのを隠すくらいの技術は持っている。大人の顔って、奴か。

佐川から関崎の本心「生徒会を離脱する」を聞き出し、思いっきり慌ててしまった。佐川には見抜かれても仕方ないだろう。奴も顔だけは小学生並みマスコット人形だがとんでもない悪党だ。同類には心を許したいとこだ。表面上は俺がトップで通せればベストだとみな思っているだろう。でも本当のところは二番手レベルでしか活動できない、裏の人間だってこともよくわかっている。よわっちい顔した影の俺がよく理解している。

だからなんとしても、関崎を残して生徒会長を押し付けるつもりだった。俺が完璧な表の顔を作り上げて活動するには、「最強の副会長」であるがためには、それしか思いつかなかった。

天才佐川雅弘の才知により、俺は九十九パーセント関崎温存計画を進めていたのだ。言っちゃなんだが、実は関崎も結構使える奴だと確認できたし、その点は成功だった。死ぬほど純情でもちろん童貞野郎であることは間違いないけれども、かなりの器を持っているとも思えた。

だが。

なぜだ。

川上よ、なぜその計画をぶつつぶすようなことを言ったんだ。

単に俺が「カッコよくなかった」からと、わざとらしい言い訳をしてのけるのはなぜなんだ。むかつく部分もあるが、この女のやり方もなかなか冴えたものがある。関崎がさんざん俺にくっついてかかっているときに、

「副会長、これ以上言っていると、ガキだっていわれるわよ」

と、一言で肩をつけたこともある。

「あったまいんだからそのくらい考えてよ」

と、学年トップのプライドをくすぐるやり方もわきまえている。

なにげなく俺に向かい風が吹くように声かけしているのはよおくわかる。しかし。

なぜ、あんな失言をしてのけたんだ？

俺にはそのあたりが分かるようにわからない。決定打がない。たぶん、俺に気があるからだろうと推理してはいる。しかし、さんざんおげれつな言葉を投げつけるくせに、触れようとするときと逃げると逃げる。ちょっとくらい、冗談でもごほうびやろか、と差し伸べた手をぴしゃんと叩く。今だって俺が隣りで肩を抱いて何かしようとしたら、たぶんけりを入れられるか、わざとらしく悲鳴をあげられるだろう。

——読めねえよ。この女。

——ちくしょう、一度でも、やってればなあ。

俺は背中を向けて、戸口の方を眺めながら目を閉じた。まだ時間はある。三十分くらいは寝ていられるわけだ。ちゃんと内側から鍵をかけておいたので、まずよっぽどの物好きでもない限りこないだろう。火事か地震でもない限り、ばれることはないだろう。

——しかし、くさいよなあ。

女子と近づいて漂ってくる匂い。うっとりする石鹸の匂い、もあるけれど、基本として臭い。しょんべん臭いとか汗臭いとむかむかするものではない。が、臭い。今も汗の匂いと一緒に、あ

の時かいだ微妙な薫りが漂ってくる。

7

「ねえ、教授起きてる？」

「寝てるわけねえだろ」

声がひっかかる。のどぼとけに響く。川上がどうやら俺にちょっかいかけにきたらしい。来るなら来い、いくらでも受けて立つ。

「今、何考えてたの」

「明日のこと」

俺はあっさりとした。たぶんフォークダンスは俺の計算がぴたりと合えばなんとかなるだろう。関崎もその辺は男だ。きちんとやってくれるだろう。他の生徒会関係者についても心配はしていない。川上も、たぶん。むしろその後だ。

「学校祭の後始末？」

「いや、もっと先だ」

学校祭が片付いたら次にやることは、次期生徒会役員改選の準備だ。川上もたぶん、流れにしたがって再選の道を選ぶだろうし、俺も生徒会副会長の方に出るだろう。佐川が今後どのような手を使うかにもよるが。

「ははあわかった。教授、まだ迷ってるんでしょう。副会長が果たして、会長に出てくれるかどうかってこと。教授は出るつもりないからって」

「てめえ！」

どこまでこの女は俺の神経を逆なですればすむんだ。本音を俺は佐川にしか伝えていないはずだ。びびりまくった。全然背後では動く気配なしだ。俺が寝返りを打つと、思わぬところに顔をくっつけてしまう恐れありだ。動かないままで吐き捨てた。

「言っとくけど、私、あのチェリーボーイが会長になるようだったら、やめるから。選ぶ権利私にだってあるでしょ」

「お前が、次期改選を蹴るだけの度胸があればな。たぶんクラス担任あたりに説得されて、脅されて終りさ」

「ふうん、でもね。教授もどうせ出るつもりないでしょ。会長なんていう、先生のリモコンっぽいところにはね」

——よくわかってるじゃねえか。こいつも。

自分をリモコンカーにして、こっそり裏をかくという高度な技も使えなくはないが、二番手に比べるとやはり面倒だ。

「でも教授は分かってるでしょ。副会長も同じこと考えてるってね。だから、手の打ちようがないって思ってるでしょ」

一気に弾みをつけて俺は寝返りを打った。もし後ろにいたら激突するように。確かに背中がぶつかった。頭の位置は黒く硬い骨にぶつかった。方向感覚がずれたようだ。よくよくみると、ぺたんと座っている川上のひざこぞうだった。

「ひざまくら、する？」

「けっ」

誰が。俺は上半身を起こして、のびをした。

「じゃあ、教授に私のお言葉をあげちゃおうかしら」

背中の中の硬い「六法全書」を膝の上に載せ、さらに上には「平家物語 二」を重ねた。

「あげちゃうって気持ち悪言い方するな」

「いいじゃないの。バージンあげるなんて言ってないんだから。あげるのは、教授が他の子に会長職をってこと。私がかまできる範囲内の相手で、できればこっちがりモコンで操縦できるような相手。そうね、あの子なんてどうかしら。まだ桜が咲ききってないって感じの、ほらチェリーくんの、後輩くん。めがねでぼけーっとした感じの一年生、いたじゃない」

——あ、いた。

俺の中に鉄骨ががびんと通った、そんな気がした。

「関崎の陸上部時代の後輩だな」

「めちゃくちゃ足遅いくせに、なぜか陸上部なんだって。副会長がしゃべってたわよ。機嫌いい時に。あの一年だったら、教授も副会長より扱い楽なんじゃないかしら」

川上は「六法全書」を重ね直し、指先をふるわせるように撫でまわした。俺の視線を捕らえながら卑猥なやり方をしているのは、何を言いたいのか。もういちど、

「けっ」

つぶやきつつ、川上の提案を頭の中で整理した。

一年生生徒会長を立てる。要は水鳥中学生徒会における「象徴」として関崎の後輩を置くことにする。これから生徒会室に戻って来た時にもし関崎が考えを撤回していなかったら、それを持ち出してみるのも手だ。奴が抵抗しているのは、俺のリモコン内閣という形での「生徒会長職」だ。もし、自分がリモコンの持ち手だとするならば、支配欲は人並みにある奴だ。喜んで乗ってくるに違いない。もっというならあいつの可愛がっている後輩……懐いてくる奴にはとことん面倒見がいいのも関崎の性格だ……とすれば、まず反対はすまい。

問題はその後輩がどういう反応をしめすかだが、関崎のことを慕っている様子だしあいつの説得が成功すればまず大丈夫だろう。

同じ生徒会の部屋にぶちこめば、後は二番手キープの副会長である俺が……まさか俺が副会長に落選するってことはないだろう……近づいていくのも簡単だ。関崎ではカバーしきれない裏技あの手この手もしくは男と女のテクニクなどをたっぷり伝授してやろう。なによりも、俺はあの一年坊主が嫌いじゃない。佐川よりはまだまだガキだが、川上よりは第二の参謀としていけるんでないだろうか。これからの教育にもよるが。

俺はゆっくりと川上の視線を下から捕らえた。わざと笑みを浮かべるようにして、
「そうだな。それは一理あるな」
——墓穴を掘ったな、川上よ。
俺が今何考えてるかなんて、想像もしてないんだろう。満足げに悠然と。

8

そろそろ約束の休憩時間も終りだ。空はまだまだ天気よく機嫌よく、てかてかと光っていた。果たして生徒会室はどうなっているだろうか。うまく佐川は関崎をなだめてくれただろうか。そして、俺の計画は。

——いいかげん、白状しろよ。

残りのドーナツを奪い取り、ほおりこむ。腹がくちくなくなったところで、飲み物を飲む。

隣りで川上は色のついていないリップクリームを塗って、手鏡を覗いていた。見るともなしに眺めていたが、よくよく観察するとこいつは口紅を落としているらしい。塗り直しているのではなく、色のつかないものに変えているだけらしい。ってことは、今の今までこいつは、この時のためにだけ、口紅を使っていたということか。まあ教室から出て、化粧しているところを見られたらすぐに呼び出し食らうだろうが。俺の知る限り、この女が口紅を塗っていなかった時は数少ない。

「なあに、見てるの。ぬってもらいたい？ 薄荷の匂いがして気持ちいいよ。教授、ほら唇差し出して」

「冗談言うのもたいがいにしる」

「別にキスするわけじゃないんだからいいじゃないの」

それ以上のつつこみはしなかった。

「ま、川上、お前はさすが見事な参謀だぜ。さっきの提案はいただきだ」

「ほんと？ やっぱり私は使えるでしょ」

「今はな」

意味を筆にたっぷり含ませて、舌先でしゃぶってみる。

「現段階において、川上、お前は俺の最強の片腕だってことだ。だがな」

この鈍感な女に伝わるかどうかはわからない。

「改選後、どうなるかは未知数だがな」

川上は唇で指先を加えて上目遣いで見た。

「そうね。これから、何が起こるかわからないものね。教授も私もね」

——わかってねえな、こいつも。

仮に、一年生生徒会長が無事成り立って、俺と関崎が副会長として居座った場合。俺は川上よりも……関崎はまず論外だ……一年坊主会長をひっぱりまわすことだろう。生徒会ってもんはい

っちゃあなんだが、基本として同じことの繰り返しだから俺が多少味をつけてやればそれなりの結論も出るだろう。更に言うなら俺は佐川という天才的参謀も味方につけている。

はっきり言おう。川上、お前の出番はここまでだ。

俺が「参謀」として必要な要素を持つ男が、二人もいるとなったら、女としての出番はない。

なぜ川上が俺にやたらと接近してくるようになったのか？

八十パーセントの可能性で、単に俺に興味があったからだろう。そんな女子はたくさんいるし、俺にもそれなりに経験がないわけではない。みな額に札が貼り付けられている。「総田教授命」とかかかっている。

だが、川上だけは違っていた。ひたいの札が見えない。たぶん、だろう、と思わせながらも本音を見せようとしなのはなぜなんだ。

付き合いたいなら付き合いたいと口に出せばいいんだ。俺もそうすれば考えてやらなくもない。

お互い経験してみたいならばそんな膝にのっかたりしないで、手続きすればいい。

川上はいわゆる「手続き」を一切行わないで、いきなり裏口から忍び込んでくるようなまねばかりする。

食べたことのない果物をたっぷり抱えては部屋の中のテーブルに置いて、さっさと帰るようなことをする。俺が食っている間に、奴は知らん顔して帰る。前置きなのか本番なのか、俺には区別がつかないうちにだ。理由を聞かないうちにいつも姿を消す。

——最高の参謀か。

——川上よ、もし俺がお前を「最高の参謀」という地位から外したら、どう出るつもりだ？

「まあ、これからだ。少しは川上にも楽しませてやるさ。無理にこんなところで真面目に相談しあわなくてもな、いいように」

ゆっくり匂わせてやりたかった。

「それで、教授が満足できればね」

——満足できるのか？ それは俺の言い分だ。

川上は顔色変えず、俺の膝を軽く叩いた。さっき、感覚でびりっときた部分だ。

「いいわよ。教授ががまんできるところまで待ってあげるから。私も馬鹿な男と遊ぶひまないしね」

——要は俺に惚れてるってことじゃねえか。

「けど、佐川くん、あの子は結構、切れるわよね」

——なんでそんなこと言う？

口笛をちっとだけ吹き俺は立ち上がった。跡形もないように、本を片付けた。「六法全書」も「平家物語 二」も、一緒に重ねて床に投げておいた。

まずは、決定打を探そう。

この秋、改選後、俺は川上の口から、それを言わせてみせる。

奴から「最高の参謀」という名目を取り上げて、果たして何をあいつが求めているのかを白状させてみせる。そして、ものによっては。

——俺も、考えてやらないわけじゃない。

——終——

中学生でしかも受験生、そんな本条先輩から呼び出しを受けた。夜十時過ぎに出歩くことを許してくれるような家庭ではない。でも呼ばれたからにはいかねばならぬ、それが青大附中のおきてなり。

祖母が穏やかな寝息を立て始めた。完全に寝入っているかを、顔の上で手のひらひらつかせて確認した。OKだ。さあ行くぞ。

秋世は玄関のかぎをポケットに忍び込ませ、白いジャンパーを羽織って裏口から飛び出した。

本条先輩の家は結構近い。自転車で約五分くらいだろうか。出身小学校は異なるけれど、諸般の事情で学区外通学していた本条先輩のうわさは耳にしていた。どうしようもないワルで、すでに童貞喪失済みで、彼女はふたりいるとかいないとか。本条先輩を心底尊敬している立村上総によれば「そんなのはうわさに過ぎない」とのことだが、違うルートでぜんぶ裏付け済みなのだ。秋世は何度か、本条先輩と彼女……それぞれの……がいちゃついている現場を見たことがある。手抜きしないで真面目に行っておられるのだけは保証済みだった。

「本条先輩、どうも。りっちゃんと会ってたとか」

待ち合わせ場所の児童公園、ブランコに腰掛けている姿がアンバランスだ。足が長すぎて、蟹股だ。

「まあな、南雲、こっちへ来い。しかしお前、何食ってた」

「かぼちゃっすよ。今日は冬至でしょ。ばあちゃんに体のため、しっかり食わないとだめだって言われちまって。先輩もどうっすか？ 精力増強のために」

「まじで精がつくのか？」

真剣に乗ってくるところみると、「精」が必要なのだろう。この人、ただもんじゃない。

霜でつま先がしゃきっと音を立てる。秋世は思いっきりぶらんこを後ろに下げて、はずみをつけた。立ち漕ぎしてもいいけれど、体重で壊れたらしゃれにならない。付き合ってくれたのは本条先輩で、負けじとばかりに弧を描いた。目を開けたまま空を見上げた。星が白く、張り付いていた。

「ひええ、ひざがつきそうだよな」

「足が長すぎるんですよ、本条さん」

いつのまにか秋世は「先輩」を飛ばし話していた。なんとなくふたりっきりで会う時は、さしで話ができるような口調に戻っていた。

青大附中は先輩後輩の序列がかなりはっきりしている。厳しくはないけれども、敬意を失ってはいけないというルールがあった。

一応、三月までは現役の評議委員長である本条先輩。次期規律委員長を任じられた秋世にとっても、敬うべき先輩である。

見事ひざをつけることなく着地して、本条先輩は立ち漕ぎスタイルに変えた。しかし漕がない

。ぶらぶらゆれている板の上で、されるがままになっていた。吊り下げられた鎖をひねってやろうかと思いつつも、秋世は本条先輩の言葉を待った。

「とりあえず、一段落したんでな。何かほしいものがあったら言ってくれ」

「ほしいものですか、はあ」

——りっちゃんとは仲直りしたってことだよな。

同じクラスのりっちゃん……立村上総のことである……と本条先輩とが、委員会関係のトラブルから疎遠になっていたことを聞いていた。立村本人はそのことについて特段何も言わなかった。ふつうの先輩後輩ということだったら自然なことなのかもしれない。でも、本条先輩と立村の間は一年の時から先輩後輩意識を抜けた友情が出来上がっていた。特に立村は、過剰はほど本条先輩を慕いつづけていた。同級生よりも信頼しまくっていた。下手したらホモかもしれないと思われるほどに。それがいきなりの仲たがい。そばにいた秋世も気にはなっていた。でも、男子同士の友情はあまりべったりしないのが基本だった。様子を見つつ、本条先輩に何気なく探りを入れてみたりする程度のことだった。

「明日、クリスマスイブだろ。お前、マイハニーにどうするんだ？」

「だから言ったでしょが！ 先手取られて明日はフリーもいいとこですってさ」

「わりいわりい、そうだなあ。まあ人生後攻も味が在るって言うしな。高校野球でも後攻の方がサヨナラのチャンス在るって言うしな」

「本条さんあんまり、慰めになってないって知ってますか」

最愛の奈良岡彰子とのクリスマスイブは本年、お預けになってしまった。すでに青大附中では公認のあついカップルになったものの、外ではまだ同盟が有効。

自宅関連の催し物にはまだ、参加することができないというわけである。

「けど正月は初詣、押さえてますからご心配なくって奴ですね」

「姫はじめって奴か」

——すげえこと、言うよな、本条さん。

本条先輩がたまらなくうらやましいと思うのは、こんな下ねたをかまされた時だった。ぽよんとしたあったかいお姫様。十四年間生きてきて、二年間片思いしてきて、やっと手に入れた花散里の君。周りからは「あんなデブのどこが」とか「南雲くんならもっと可愛い子が」といわれるけれども、人それぞれ好みがある。なによりもそばに座らせてもらって、全身が猫になったみたたくたくたとする相手、それは彼女しかいない。思い切ってふたりっきりでもっとくたくたくたつとしたい。でも、それはまだ許されない。頭と下半身との差に、秋世はたまらなく自己嫌悪を感じる時がある。必然、自分で夢見の処理をすることになる。そんな事考えていると、おそらく彰子は知らないでいるだろう。好きだ好きだと叫ぶことはまったく違和感ないけれど、たまに全身をくたくたくたつとさせたい欲望にかられるのは、みっともない。

「本条さんは、どうなんですかい」

「そりゃあな」

元気がなかった。そりゃあそうだろう。この人は受験生だ。「姫はじめ」なんて勘違いした

こと、やっているひまなんて本当はないはずなのだ。

「あの、リクエストしていいですかね」

「ああ、いいぞ」

「すげえおいしいせんべいなんてどうでしょうか」

「せんべい？」

彰子が最近、ダイエットに目覚めたことを知ったからだった。多少ぽっちゃりしておかめさんの雰囲気ありげだが、秋世としては別にやせる必要なんてさらさらないと思っている。テレビで見る拒食症とかそういうことになってしまったら、彰子さん大変なことになる。秋世としては止めさせたい。しかし、

「最近、本で読むのよ。心臓の病気を防ぐにはまず運動とダイエットだって。まあこんなにぽちゃぽちゃ菌がついている以上、簡単にやせられるなんて思ってないんだけどね。しばらく洋菓子とかクリームをついたものは食べないことにしようって決めたんだ。だからあきよくん、しばらくあぶらっぽいもののあるお店には付き合えないの。ごめんね！」

にっこりと「週刊メディカル・イン」なる医療情報誌を開いて微笑まれたら、うなづくしかないではないか。

「おまえなあ、ほんと、奈良岡にべたぼれだなあ」

「悪いっすか。本条さんだってそうなくせに」

答えない。本条先輩はいきなり踏み板に座り、ぐるぐる鎖をねじり始めた。二本の鎖を上の方からねじり始め、頭の上あたりまできたら一気に反転する。ぐるぐると回転いすみみたいな感じとなり、目も回る。

「やあ、酔っちゃまった」

よくわからない人だ。

「わかった。じゃあその辺の草加せんべいを見繕っておくぜ。いっしょに食え」

「ありがとうございます」

本題に入らない。用がないのに呼び出すことはないと思うが、まさか意味不明のままブランコを漕ぎあうわけでもなからう。

それに、次期規律委員長がめいっぱい「夜間徘徊禁止」の校則を破っているというのも怪しい。

しびれを切らせて秋世は本条先輩の真似をし、派手にブランコを高速反転させ、ひとひねり残した。

「本条先輩、ぶっちゃけた話、りっちゃんとはうまくいったんでしょ。その辺の話も聞かせてくださいや」

まさか本当にホモ説本当だったなんていわないだろうか。妙に無言なのが気にかかった。

本条先輩はめがねをはずしていた。ポケットからはんこの入れ物みたいなものを取り出した。ぱかっと開いた。中途半端な三角形。頂点のところを目に当てた。

「あいつ、なあにが、三月まで待ってくださいだよ。ったく、だからあいつはガキだっていうん

だよ」

——やっぱりなんかあったってことっすね。

「南雲、お前、立村とはよくしゃべるんだろ」

「そりゃあそうっすよ。隣の席だし、音楽の趣味いっしょだし。しかもお互い次期委員長ってきたら、つるまないほうがおかしいでしょう」

「お前から見てな、あいつ、どう思う？」

——困ったなあ。

あらたまって聞かれるとうまく言えない。もちろん立村とは二年になってからかなり仲がいいし、お互いにあまり話したことの無いことも打ち明けたりしている。見た目には合わず年上好みらしいとか……実際の行動とは別に……、家庭環境だけでさんざん同情されることが多いけれど実は結構仲のいい家族だとか……お母さんがかなりのパワフル猛女らしい、本当のことを言う恋愛感情にはまだ疎くて女子の扱いに苦戦しているとか。なによりも菱本先生とは犬猿の仲、菱本先生が心配すればするほど立村の性格には合わず荒れてしまう悪循環らしいとか。なによりも、立村が一番好きなのは彼女の清坂美里ではなく本条先輩なんじゃないかとか。

まとめるのは難しい。

「いい奴だと思えますよ。これ、前も言ったと思うけど」

片手を出して、はんこいれらしきものを受け取った。同じく三角形の角を目に当ててみた。なあんだ、めがねだ。近所の家、たまたまカーテンが空いているところを覗いてしまった。軽犯罪違反になりそうだ。

「りっちゃんって、俺には見えないところをいっぱい覗き込んでいて、俺にはわかんないところをすくいあげていて、すげえなって思いますしね」

「すくいあげるものがごみだってことも気づいてねえのかって言いたくならねえか」

——あのことか。

だいたい、本条先輩の言いたいことを把握した。確かに秋世にとっても、ごみにしか見えないものがある。

立村が評議委員の女子後輩を過剰なほど可愛がっているのは秋世も気になっていた。

規律委員会、いわゆる校則関連を取り扱う委員会で、教師にはむかう生徒の情報はかなり流れてくる。

ごたぶんに漏れず、一年規律委員の間でも、問題を起こしてばかりいる杉本さんという女子の話はリアルに聞こえてくるし、おまけとして立村の行動などもセットでくつついてくる。必然、詳しい事情を把握することになる。一応規律委員らしい仕事もするのだ。年がら年中「青大附中ファッションブック」にうつつを抜かしているわけじゃあない。

次期規律委員長たる南雲秋世としては、問題児の杉本梨南という女子が、次期規律委員として回ってこないことを祈るのみだった。差別をしてはいけない、いじめなんてもってのほか、それはわかるけれどもかかわりたくないというのも人間の本性としてあると思う。

ただ、なんで立村が、次期評議委員長という立場以上の関心を持って、杉本を可愛がるのだから

うか。

秋世はあまり他人の恋愛沙汰に口出しをする方ではない。女子たちと違って男子の場合、個人主義を好んでいるところがある。いつもべったりしなくとも、顔を合わせれば親友らしい会話ができる。でも触れてほしくないところはそのままにしておく。話したくなったら聞くけれどそれ以上のことは望まない。それゆえに理由を問うことはなかった。ただ、自分だったらこうしてほしいと思ったことをするだけだった。

——きっとりっちゃんには、見えるものがあるんだろうなあ。霊視みたいな感じでな。

ちょうど秋世が彰子に対して見出した、光るものを。

本条先輩や秋世にとっては「ごみ」でしかない石ころに価値を見出すことのできる立村上総のことが、秋世は結構好きだった。

「なあ、南雲」

「なんですかあ」

いいかげん寒いので話を切り上げてほしい。

「お前、彼女とやったのか」

ぐふっと噴出したくなる。この点について問い掛けられたのは初めてではない。

「準備だけはしてますよ、人間の本能として」

本当だ。定期入れの中にはいつも、新品のゴムを入れてある。幸い、立村以外の奴にはばれていない。宿泊研修の時、たまたま落とした定期入れを覗いたのだろう。ふたりっきりの部屋の中で立村がかなり動揺して問い詰めてきたのを秋世は覚えている。たぶん、立村も好奇心だけは人並みなのだろう。なぜか安心した。

「いいかげん襲っちまえよ」

「一生会えなくなる可能性の方が高いとちがいますか」

本音を言えば、せめてキスくらいはと思う。闇の中でチャンスがなかったわけではない。でもできなかったのは、彰子がまったく秋世のことを警戒していないのが丸見えだったからだろう。せっかく抜いた刀がへなへなになるってこういうことだ。

「一生な、会えなくなるってな」

本条先輩は繰り返した。ということは、何か一生会えなくなる可能性があるってことだろう。

例の、ふたりの彼女関連で何か問題が起こったのかもしれない。

男子のおきて、口に出したがることは不要につっこまない。

「まあいいや。南雲、もしあいつがあれのつけ方とかやり方とかで鼻血出すほど悩んでいたら、教えてやってくれ。あいつ、頭のとっぺんまでスケベなことでいっぱい悩んでいるくせに、プライド高すぎてそういうことぜんぜん相談できない奴だからな」

「その辺はわかってますって」

少なくとも立村よりは初体験、早いだらうと思う。

「けど、いいっすか。人のうわさするってなんか汚いと思うけど、ここだけの話ってことで」

秋世はもう一度、ぐるぐるにブランコの鎖を立ち上がってねじり、回転いす状態にしてみた。

目が回りめまいがした。

「りっちゃん、ほんとは杉本さんって子のことが好きなんじゃないのかなって思うんですが、どうでしょう」

「まじかよ！」

本気で驚くのはやめろと言いたかった。気づいているのは自分だけだったらしい。二年D組では清坂美里と仲良し評議委員カップルを構成しているけれども、前々から違和感を感じていた。気の強い子を相手にしているだけなのかもしれないが、立村の方がずっと気を遣いつづけているように思えてならなかった。女子たちが

「清坂さん、どうして羽飛を選ばないんだろうね。立村のどこがよくって」

とささやいているのを何度も耳にしていたし、何よりも彰子が同じことを感じているらしかった。

。「あきよくんはどう思っているかわかんないけど、美里ちゃん、どうして立村くんを選んだのかなって思う時はあるよ」

と。

「本条さん、気づいてなかったっすか」

「いや、想像してなかったわけじゃあない。あいつの女好みはかなり変わっているからな。でもまさかなあ」

「でなかったら、あんなに必死に、評議委員長長の座を捨ててまで杉本さんを守ろうとはしないでしょうよ」

本条先輩は両手をブランコのふみ板に当てて天を仰いだ。

「ジェラシー感じてたなんて、まさかなあ。ホモ説がほんとだなんてことになっちまいますわなあ」

ギャグである。さすがにありえないだろうなあと思う。男として二人の女子とやることやっている人がまさか。

「安心してください。本条さん。俺、りっちゃんのこと、ホモ説とは別の意味でいい奴だって思ってますよ。本条さんの代わりにちゃーんとめんどろ見てやるから、安心して下さいって」

かなり誤解を招く表現だが、なんとなく今だけはそう言いたかった。

返事は帰ってこない。またポケットからさっきのめがね入れみたいなのを取り出し開いたり綴じたりしていた。

「それより、本条さん、今夜こんなところで男とデートなんかしてていいんですか。俺も彼女持ち、そっちの噂を出されたら、彰子さんにどう思われるかわからないんですよ。ちくしょう、明日は俺、フリーだってのに、野郎とデートですかってね」

軽くかまをかけてみた。まだ答えが返らない。しかたないので秋世は後ろから助走をつけて、思いっきり漕いだ。風が冷たく、かえって体が凍りそうだった。空に一番近い位置から本条先輩を見下ろすと、ポケットから四角い箱を取り出し、上を破っていた。地に近いところで盗み見ると、細長い棒を取り出していた。どうやら煙草らしい。火をつけてはいない。くわえるだけだった。それならまだいい。言い訳できる。

本条先輩がなぜ、立村をいきなり評議委員長から降ろそうとしたのだろうか。

決して詳しい事情を聞いてはいない。クラスの立村と、本条先輩との極秘会談、情報源はそれくらいだ。

露骨には言わないけれども、なにげに「俺の弟分は相変わらずがきっぽいことしてるのかよ」と探りを入れてきたり、「二年D組の恋愛事情について少し教えてよ」とかいかにも女子漁り目的の顔をして突っ込んだり。

適当に秋世も答えていたけれども、なんとなく直感で感じるものはあった。

——まさかなあ、ジェラシーだったなんて言わないよなあ。

まずありえないだろう。本条先輩といえば、学外にふたりのステディな彼女がいるのだ。

いくら立村が杉本梨南のことを気にかけすぎるくらい気にかけていても、心配する必要なんてないのだ。

ただ、仮に「本条先輩が立村の本心を見抜いていて、それゆえに杉本梨南から引き離そうとした」と考えるならば話はすんなり通じるのもまた確かだった。本命彼女とされる清坂美里よりも、深い想いで杉本梨南のことを守ろうとしていたら。恋していたら心穏やかではいられなかっただろう。独占欲に駆られて邪魔しないとも限らない。特に本条先輩のような力を持っているならば、立村を直接動かして別れさせるように仕向けることもたやすいに違いない。

——いやあ、それって気持ち悪すぎ。ありえないって。

ははっと笑って終わりにした。横目で見下ろすとなんと本条先輩、今度はポケットからライターらしきものを取り出した。いや、ライターだ。小さな灯が点り、すぐに消えた。これは言い訳できない。次期規律委員長たるもの、さっさと退散しよう。

家の中はやはり静かだった。忍び足で自分の部屋にもぐりこみジャンパーを脱ぎ、念のために祖母の部屋の前に立った。小さいびきが聞こえる。よかった、寝ている。ばれてない。

立村は一年の杉本さんを好きなのかもしれない。清坂さんは同じクラスの羽飛を思っているのかもしれない。本条先輩は友情以上の何かをもって、立村への独占欲を感じているのかもしれない。でも今は、口に出すつもりもない。尋ねるつもりもない。

本条先輩の吸った煙草の煙も、今帰ったばかりの足音も。

みんな、夜空に吸い込まれて消えた。

1

「……だから、やっぱり俺の感じ方は変なんだろうな」

りっちゃん……本名は立村上総という……と話をすると、いつもこのフレーズが出てくる。そうだよなあ、と思う時もあれば、いやいやりっちゃん考えすぎだよ、と言ってやる時もある。実際俺が返事をするのは後者のことが多い。もしりっちゃんの感じることをおかしいんだったら、俺は毎日変人扱いされてなくてはならないと思う。

「いや、そうは思わないけどよ。りっちゃん、たださ」

俺はいつも「たださ」「けどさ」とつなげる。

「感じることはおなじだけど、きとりっちゃんはそれを深く考えすぎるだけなんだって思うんだ。俺がふうんって思えることを、りっちゃんはそのことについてずっと考えつづけて、それで、いつもの口癖になるんじゃないかってさ」

「いつもの口癖ってなんだよ」

布団の中で口を尖らせた風につぶやくりっちゃん。ちょっとむかついているに違いない。

「感じ方が変だってこと。大丈夫だよ。たぶん、俺もりっちゃんとおなじだと思うから」

俺は自分のベットに足を突っ込んだまま、テレビのリモコンを探した。枕の側にある。

「じゃあ、これからゆっくり観ようよ。りっちゃん」

答えないりっちゃんは、俺の顔を見上げて笑わず、こくっと頷いた。

ビデオはすでに投入口にセット済み。『組紐のごとく』

いったいなんつうビデオなんだか。

俺が手に入れたのはたまたま、小学校時代の友だちが、

「間違っって中古ビデオ屋で買ったんだ。けど、こんなのうちに置けねえよ」

ということで、隠しやすい俺の家に引き取られたというわけだ。題名だけ黒くぬったくらわれていて、箱もなにも着いていない。どういう内容だか友だちに聞いたのだが、

「見ればわかるって。俺が手放した理由」

としか答えが返ってこなかった。そうとう、際どい内容なんだろう。

「りっちゃん、こういうビデオって見たことある？」

「本条先輩と一回だけ」

「そっか。おもしろかったか？」

「本条先輩のレクチャーはよかったけど、画面は見る余裕なかった」

本条先輩とは、りっちゃんが一番慕っている三年の先輩だ。評議委員長・学年トップ。これだけ観れば優等生そのものなんだが、本性は女ふたりを股にかけて遊び呆けている「青大附中開闢以来の女ったらし」。俺にとっても先輩としては大尊敬してしまうのだが、女性関係については少々疑問を感じたりもする。俺は一筋主義だから。

「御託並べてないでまずは集中集中」

ふたりで腹ばいになり、電気を消した。

「いざとなったら、ティッシュあるから言ってくれよ」

「こんなところでそんなの使うかよ」

ため息交じりのりっちゃんが、頬杖つくようなポーズで画面を見つめていた。俺も嫌いなものじゃなし、ゆっくりと動けるよう、うつぶせになり布団にもぐりこんだ。暗い中浮かんできたのは赤っぽい画面だった。思ったよりも画像がきれいだった。テレビドラマみたいだった。

「本当に裏なのかなあ」

「第一、これって、いわゆる、そういうビデオじゃないのかもしれないし」

「期待裏切ったらごめんな」

言葉はこれで途切れた。やっぱり、そういうビデオだった。

ただ、そういうビデオにはいろいろあることもよくわかった。三十分間。

灯りをつけるにも、やはり枕もとだけでいいだろう。俺はビデオを巻き戻しリモコンを枕もとに置いた。今回に関しては一切ティッシュの必要性を感じない。全く身体はなだらかそのもの。いわゆるそういうビデオを見た後の「なんとかしてくれ」的叫びは全く感じない。

「りっちゃん、一言感想を」

「あいつら人間じゃないよ。許せないってこのことだよな」

ぐいっと俺の方をにらみつけるようにして見つめかえしてきた。りっちゃんの目は近くで見ると大きい。いつも泣いた後のうるんだ瞳で、ちょっと子どもっぽくみえる。もともと身体つきも他の顔パーツも、小ぶりの印象が強いのだけれども、瞳のらんらんとしたところだけが妙に印象深い顔だった。俺はビデオの処分についてしばし考えた。

——あれは実用ビデオにならないしなあ。

「りっちゃん、あれ、やるって言ってもいらないだろ」

「あんなの燃やすべきだよ。それ以前に警察に送りつけてなんとかしろって訴える方が先じゃないかって思うんだ。大人ならまあ、その、それでいいと思うよ。そういうこと仕事だってわかってるからさ、けど、あの中にいた人、みな俺とかと同じくらいの人だろ。それもみな、盗み撮りされているようなもんだろ？　かわいそうだよ」

どうやらりっちゃんも、実用性を感じなかったらしい。

「そうだよな。俺も、そう思うな。明日の夜に、写真集ですっきりさせないとこの怒りは収まらないよな」

たぶん演出もされているんだろうとは思う。でもあれはいくらなんでもひどい。りっちゃんが憤るのも無理はない。

「組紐のごとく」

演じている人もいるんだろうが、なぜかみな中学生だった。中学生も実はこういうアダルトビデオの撮影だということを聞かされていなかったらしい。アダルトビデオの場合、最初にお姉さ

んたちのごあいさつがあるのだが、「組紐のごとく」はまず、中学生たちに監督らしき男性が「学園ドラマの撮影をする。エキストラとして出てほしい」という説明をしている。四人の中学二年という女の子が話を聞いて頷いている。ただ四人だけでそういう状態というのもおかしいとは思うのだが。演出だろう。

いきなり監督が他の男性に目配せして、彼女たちの両手を後ろに組ませて縛り上げる。時代劇で「お縄にする」という感じだ。お仕置きの場合だと説明しているが、なぜかその子たちは反応をしない。たぶん何も疑っていないに違いない。そのままひとりずつ抱っこして教壇の上に並べられ……。

りっちゃんが目をまんまるくしたまま見入っているので俺も付き合った。

「どういうことだよ、これ」

「まさか、そういうものか」

その後のシーンは見るに耐えなかった。俺も決して女子のそういうスケベな部分を見るのは嫌いじゃない。むしろ好きだ。大好きだ。水着ぼろりとか、スカートがめくれたりとか、裸とか、そういうのを見せてもらえるならもうそりゃあ舞い上がる。しかしこの子たちは違う。あきらかに騙されて、連れて来られているというのが見え見えだ。りっちゃんも途中から目をそらしているのが伺えた。それでもストップボタンを押さないのが俺のスケベな本性ってところかもしれない。もし、俺の知り合いか誰かがこういうところに連れてこられてたら、と、めったに考えないことまで考えてしまう。なにやら独り言言っているりっちゃんに向い尋ねてみた。

「これ、観て興奮する奴っているのかよ」

「いるんだろう。だから売れているんだよ」

りっちゃんが冷たい声でつぶやいた。

こういうビデオを見た後は、友だちと申し合わせてトイレに駆け込み五分くらいひとりになるのが常だった。でもりっちゃんも俺もそういう気分にはなれなかった。りっちゃんはショックで動けないくらいだったらしい。小さな声で、

「最低だよ、あんなの許せないよ」

つぶやいていた。

「同じことするなら、ちゃんと大人の人で仕事だって人を使えばいいんだ。騙すことなんてないだろう？ 本人たちはみな、ふつうのテレビドラマだと思ってきたのに、こんな恥ずかしいことになってしまうなんて思っていないんだろうな」

俺は台所に下りて飲み物をもたらしてきた。冷蔵庫に入ったままのジンジャエールを一本。ふたりに分け合って飲もう。ついでにコップも持っていった。

「少し毒気を抜こうか」

「うん、そうだね」

ちょこんと布団の真ん中に座り、りっちゃんは俺の注ぐままカップを見つめていた。

——いい奴だよな。りっちゃんは。

二年に上がってからふたつの目標をクリアした俺。

ひとつは好きな女の子を口説くこと。

ひとつは友だちになりたかった男の子を口説くこと。

口説く、たって俺は別にホモとかそういうわけではない。

ただ一年の頃から気になっていたものを、全部二年の一学期で処理しただけのことだ。

俺は自分の分、手酌で注いだ後、りっちゃんの向かいに座った。

2

りっちゃんをまだ「立村、あのさあ」と声かけていた頃。

青大附属に入学してから間もなく、一年の新歓合宿というのがあって、たまたま同じ部屋に泊まることとなった。

俺は人見知りする方でなかったし、すでに仲間内で気の合う奴も見つけていたから退屈することはなかった。まだ、野郎同士の派閥みたいなのもなかった。ただ、雰囲気的にちょっと違うな、という連中にはいないこともなく、りっちゃんも最初はその類だった。

いや、見た印象は悪くなかった。おとなしそうな奴だという程度。

目立たないように振舞っているというのがよくわかった。すでに別の仲間グループと仲良くしゃべっていたので個人的にどうのってのはなかった。たまたま同じ部屋だったから俺もふつうに声をかけたつもりだった。

りっちゃんはそうでないようだった。

なんとなく、避けられているんじゃないか、そんな感じを持っていた。

俺がなにげなく、

「小学校の時、運動部とかに入ってたのか？」

「修学旅行どこ行った？」

「やっぱり山登り遠足って疲れるよなあ」

と、いささかアウトドアな話題を振ると、

「あまり、遠足とか旅行に参加できなかったんだ。身体が弱かったから」

と小さな声で答える程度だった。たぶん、ふれられたくない話題だったんだろう。俺もその辺はすぐに察して別の話に差し替えた。無理に聞き出すなんて最低だし、誰にだって知られたくないことがある。俺にもアキレス腱がある。

そうだった。りっちゃんはその時、ほとんどしゃべらなかつた。

俺は小学校時代の修学旅行と同じ感覚で別の奴と、「どういう女子が可愛いと思うか」「スケベな本とかをどこで手に入れるか」「初めてつきあったのはいつなのか」「どういう音楽が好きなのか」を怒涛のごとしゃべっていた。みな、青大附属に入学する前からそれなりにお盛んだったようだった。今思えばりっちゃんくらいだったろう。そういう話題から浮いていたのは。でも、おとなしく俺たちの顔を見ながら輪に入っていたところを見ると、嫌いでもなかつたんだとは思ふ。

すでに俺も、小学校五年の時から「おつきあい」する機会があったし、その子とは卒業前にはじめてのいわゆる、その、キスとかなんともした。もっと言うなら、ちょっとだけさわらせてもらったりもした。その子とは自然消滅してしまったようなもんだけど、それはそれでいい思い出だ。

要はみんなに自慢して、自分がこれだけすごいんだぞ、ってことをひけらかしたかっただけなんだと思う。

俺もあの頃はずいぶん無理していたっけ。父さんから卒業式後、部屋に呼び出されてコンドームを一パック渡されたときはさすがに照れたけど。

「男として自然な感情なんだからそれはそれでいい。だが、相手を傷つけるようなことはするなよ」

意味がよくわからなかった。

宿泊研修の夜のことだった。

旅館の風呂場は大浴場になっていて、みんなすっぱだか飛び込んだり泳いだりできる広さだった。俺も当然出かけたわけなんだが、りっちゃんだけはなにか理由をつけて一番最後に入りこいたらしい。なんのことはない。りっちゃん以外にもそういう奴はいたらしい。あまり他人と風呂に入ったことのない奴ってのが。だから珍しいこともなかった。

先に上がった俺とあと数人が部屋の中、こっそり煙草を吸ってみようとたくらんだのがまずかった。たまたま同じ部屋で実験対象になった国枝という奴が、一気に五本煙草をくわえてみたのだが、胃にもものがたんまり入っていたのがまずかった。むせると同時に一気に吐き出してしまったじゃないか。

——どうするんだよ、これ。

当然、煙草なんて持ち込み禁止だなんて野暮なことは言わないでほしい。

部屋の中はただでさえ煙草くさくて死にそうなのに、だ。

——入学後すぐに退学かよ。

俺の頭にまず浮かんだのはこの辺だった。そりゃそうだろう。まだ入学して一週間くらいしか経っていないのに、停学・退学だなんてどう言い訳すりゃいいんだろうか。一応青大附中は青潟市のエリート中学らしい。「らしい」ってところが「うそだろ」の反語なんだけど。吐いたものの匂いで俺の方がおかしくなりそうだった。

本当に悔しいんだけど、俺はその時なんにもできなかった。

国枝の口を拭いてやろうとタオルを持ってきてなんとかせねば、と思ったのが関の山。

動くことができなかった。たぶん一緒にいた連中も同じだった。

「南雲、お前どうする？」

「どうするたって、先生のところに行くしかないだろ」

行ったらどれだけの大目玉が待っているかわからないわけじゃなかった。

ちょうどその時、りっちゃんが髪をぬらした格好で帰って来た。戸を開けたとたん、すさまじき惨状に凍りついたのは当然だった。小さい声で、

「国枝、大丈夫か？」

「大丈夫なわけないだろ」

誰かが怒鳴っていた。俺は何を言ったのか覚えていないのだけど、

「やばいよ、どうする」

と何度も繰り返していたらしい。りっちゃんが一年後に話してくれた。

「たばこ、か？」

「俺んじゃねえよ」

お互い責任をなすりつけていたことを、俺は白状する。断じて俺が持ってきたもんじゃないんだけど、でも、国枝にくわえさせていたのを煽り立てていたのは確かだから。

次の瞬間。りっちゃんは国枝を抱え込み、素早くトイレに連れ込んだ。当時から細いマッチ棒状の身体つきだとは思っていたけれど、実に手早かった。まだ口からだらだら流してあえいでいる国枝をまずトイレに押し込み、戸を閉めた。そして、

「ここにいたらまずいから、お前ら別の部屋に行ってる。あとは俺が何とかするから。それと南雲、戸だけを開けたままにしてもらえないか」

驚くほどしっかりした口調だった。か細い声でおどおど話していた時とは違う。

——こいつ、何考えてるんだろう。

けど俺は逃げ出したかった。とにかくこの臭い、煙草と吐いたもののすっぱい匂いで一杯の部屋から飛び出したかった。

「先生には言わなくていいのか」

「まだ言わなくていい。とにかく早く行け」

トイレの戸を少しだけ開けていた。国枝がまだあえいでいる声と一緒に、りっちゃんがきつい声で俺たちに命令しているのが聞こえた。

俺はその後、別の連中とふたりで隣の部屋に避難した。りっちゃんが「絶対言うな」、と命令したことを隠れ蓑に、トランプに混ぜてもらったりもしていた。

だが、当時かりっちゃんと行動をともにすることの多かった羽飛貴史がぴんときたらしく、あの部屋に向かってしまった。この時、俺は停学・退学を覚悟して、公立に行った友達へどうやって言い訳するかを考えていたわけだ。

「お前ら、最低だな」

部屋の中でうなだれていた俺たちを、やがてもどってきた羽飛は吐き捨てるように罵った。

「今、国枝を病院に連れてったみたいだ。菱本先生が」

だいたい三十分くらい経った頃だったと思う。

「お前らみんな立村に押し付けてたのかよ」

「連れてったって、けど、あの部屋」

別の奴がおどおどと羽飛に質問を投げかけていた。あの部屋には煙草がまだ数本残っていたはずだ。発見されたら一貫の終りだ。羽飛は浴衣の袖を黄色く染みつけたまま、俺たちをにらみつけた。

「煙草とかやばいものは全部、立村がトイレに流した。あと、へどあげた布団とかも立村と俺が全部洗ったりなんかしてごまかした」

「じゃあ、ばれてないんだ」

「ばかやろう！」

何様のつもりなんだか、羽飛は俺たち四人を見据え、足踏みをしやがった。もともと羽飛にはあまり、いい感情を当時から持っていなかったのだから、俺は当然見返した。目が合い思わず俺と羽飛のけずりあいになった。

「理由も言わんで俺たちを罵るってなんか違うんでないか？」

「黙れ、おい南雲。なんでお前ら部屋を出てきたんだよ。なんで国枝がひとりでげえげえ苦しんでるところを見捨ててきたんだよ。今、立村がひとりで菱本先生に呼び出されて、すげえ怒鳴られてるって知らねえだろ！」

「立村が？」

羽飛の説明によると、りっちゃんは一生涯懸命国枝の世話をしていたらしい。だいぶ落ち着いた頃に羽飛が到着し、新しい浴衣を女子の部屋から調達したり、洗濯を手伝ったりいろいろしてごまかしたらしい。ある程度の処理が終わった段階で菱本先生に知らせたはいいが、相当苦しんでいた状態だったので病院に運び、

「なんでもっと早く教えなかったんだ」

と菱本先生に吊るし上げられたという。

俺VS羽飛、りっちゃんVS菱本先生、初めての対決だった。

まだかすかに匂いの残る自分らの部屋に戻り、俺たちは絞られて帰って来たりっちゃんを迎えた。すでに羽飛に対する不快感は俺の腹の中で満杯だった。他の奴らも相当だったようだ。国枝に煙草をすわせたのは俺たちだから言い返せない。けど、あんな高飛車に言われる筋合いもないと思った。俺だって退学は覚悟していたんだから。

いわば「羽飛グループ」だたりっちゃんにどう接していいかわからず、あやまることもできなかった。相当菱本先生に叱られて落ち込んでいる様子で、唇を噛んでいたけれども、なぜか俺たちの顔を見るやほっとした風に笑みを浮かべた。

「立村、あのさ」

とにかく、俺なりにけじめをつけようと思った。

「あ、大丈夫だよ。今の話だとたぶん、国枝が言わなければ、煙草のこととかはわからないと思うんだ。悪いんだけど全部煙草っぽいものはトイレに流した。それと、菱本先生が入ってきた時にはだいぶ煙草の匂いも消えてたと思うんだ。だから、原因はわかんないよ。食べ物に当たった

とかなんとか言ってごまかしておいたけど、たぶんばれないと思うんだ」

「ばれないって、おい」

真新しい浴衣を抱えてきたりっちゃんは、戸惑うような目でちらちら俺たちを見つめていた。視線を合わせられないらしく、いづらそうに、

「じゃあ、もういちど、風呂に入ってくるから。あと、布団、新しいのを入れてくれてるって」

やはり目を合わせるのがしんどそうだった。俺も、他の奴も「あ、ああ」とだけ答え、りっちゃんがいなくなるのを見守った。たぶんその時は話す言葉が見つからなかったのだと思うし、俺がガキだったからだろう。

結局国枝は夜中、自宅から迎えが来て、連れて行かれたらしい。これまたりっちゃんが全部荷物をまとめて、菱本先生に渡していた。そういうことはお手の物らしい。同じ部屋で本当だったら、俺も手伝うべきだっただろう。けど、そこが情けないくらい俺のガキっぽいところで、寝たふりしかできなかった。

なんというか羽飛に言われた言葉がまだ、心の中に響いていたからかもしれない。

次の日、バスの中でりっちゃんは羽飛の隣席で目を閉じていた。

あれだけ駆けずり回ったのだから疲れて当然だろうし、さらに乗り際にも、

「だから立村、お前いったいどうして先生に報告しなかったんだ！」

と怒鳴られる始末。しょんぼりうなだれていたけれども、羽飛に肩を叩かれてとぼとぼ乗り込んでいった姿。俺は後ろの席で眺めていた。

結局何もその時、りっちゃんに話し掛けられなかった。羽飛とはこれから先長いにらみ合いになるだろうと予想できていたし、俺は俺で別の連中と音楽ネタで盛り上がっていた。しばらくは国境線を越えられないような付き合いが続くのを予感していた。

ただ何かの拍子で仲間のひとりがちらっと、

「けどさ、立村ってすげえ奴だよな」

「本当だ、俺もそう思う」

話題を出したように思う。

俺はその時、ためらうことなく大きく頷いた。本人はたぶん聞こえていなかっただろう。静かなバスの中で、すかすか寝息を立てていたみたいだったから。

3

たぶんその頃から、俺はりっちゃんに興味を持っていたのだと思う。

野郎グループが新歓合宿以降見事に三分割されてしまったこともあり、何かの拍子で無駄話をする程度にしかりっちゃんと接することはできなかった。その一方でクラス内における羽飛VS俺との対立も激しくなっていた。つかかってくる羽飛をいなすのも簡単ではなかった。俺の本能に火がつくんでないか、と思う時もしょっちゅうだった。

「なんだよ、女ったらしのくせにお前」

「女ったらしとは失礼だな」

「関心もねえくせに、さんざんもてあそんでやがるんだもんな。相手のことも考えねえで」

「そんなのは俺の勝手だろ。羽飛、お前に文句言われる筋合いはない」

「けっ。規律委員のくせに女子傷つけて悪いと思ってねえのかよ」

「俺は傷つけてなんていないけどな」

今は、一年時のこと。危うく殴りあい発展する寸前の会話だ。

たまたま俺が一年上の先輩に告白されて、なんとなく付き合うことになった時のことだった。

付き合うたってそんなすごいことをするわけではなかった。キスをしようと誘われるのがせいぜいだった。小学校の時に済ませていたから、抵抗はなかった。

ただ、その現場を羽飛に見られたのがまずかったらしい。

うらやんでいるのかそれとも、相当むかつ腹立っていたのか。

もてあそんでいるなんてことは言われなくなかった。俺はそれなりに、相手の人が喜んでくれることをするのが一番だと思っていた。小学校の頃付き合っていた子とは自然消滅したけれども、会ったら会ったでそれなりに付き合いができると思う。キスくらいはできるかもしれない。でも、傷つけるような付き合いは一切してないつもりだ。また外で会って、「やあ、元気？」と挨拶できるような、そんなお付き合いだ。

さて一発やるか、と身構えた時。

「羽飛、やめろよ。南雲だって悪いことしているわけじゃないんだからさ。それよりあのさ」

羽飛の側で肩を軽く叩く奴がいた。まだ同じくらいの背丈だったりっちゃんだった。俺の方に軽く目を合わせて、

「俺は南雲のこと、うらやましいと思うよ。そういう風に普通に人と話ができるっていいなって思うんだ」

やはりすぐに逸らせて、うつむいた。

だいたいりっちゃんが俺と羽飛の間を取り持つのはこんなパターンがほとんどだった。俺もそうだが羽飛も、りっちゃんの前ではなあなあに終わらせるのが普通だった。無理に殴り合いやって菱本先生に怒鳴られるのもいやだし、相手の腕力がまだ把握できない状態で一戦かますのもなんだかなって感じだった。

それに、俺にも羽飛へ言い返せないところがあったりもしたわけであり。

——女ったらしかもな。

言われる通り、相手の子が喜んでくれればそれでいいという気持ちで、いろいろと付き合ってきたけれども、どうも自分の中でしっくりこなくなると俺の方から終るようにしていた。相手だってそうした方が本当の恋人を探しやすいだろう。別れを切り出すのはいつも俺の方だったから、大抵は泣かれてしまったけれども、話せばなんとかわかってもらえた。中には、二年上の先

輩で、「じゃあ、あれを上げる」という言葉で、いわゆる、その、なにを誘われたりもしたけれども、すぐに断った。

責任取る自信、なかったからな。

すべてが反対側に動きはじめたのは二年に入ってからだ。

クラスの班構成を今までは、委員会の男女を代表としてまとめていた。評議委員同士、規律委員同士、保健委員同士、学習委員同士、放送委員同士。

でも、そのやり方だと毎回同じ顔を合わせる奴が決まってしまう。誰とは言わないがたまたま仲が最悪の男女委員がいたらしく、菱本先生のもとへ直訴したらしい。二年に上がってからは純粹なるくじ引きで席を決めることになった。今までのパターンだったら評議のりっちゃんと規律委員の俺がくっつくなんてこと、まずないはずだった。運のいいことに、その班には羽飛もいなかった。まあ俺としてはもうひとつ期待していたパターンがあったのだけど、それはこれからの努力あるのみだと思っていたからしかたない。

「立村って結構洋楽詳しいよな」

「うん、うちの親がインストロメンタル系とか、歌詞のないレコードとかたくさん持ってるから、それ聞いて知ってるんだ」

もともと英語がべらぼうに出来て、二年からは大学の語学授業を取るというりっちゃん。うちの学校は、希望すれば高校、大学の授業に出席させてもらえるシステムがあった。もちろんついていけない奴が行ってもしょうがないので前もって試験があるけど。りっちゃんは一年の春休みに、英語の認定試験を受けて見事合格。放課後を使って英語とドイツ語の特別授業を受けてもいいというお許しを得た。学年で英語関係の合格者はりっちゃんだけのはずだ。

やっぱり英語がらみでネタを探そう、と俺は思った。もともと「全米ヒットチャートトップ100」とか、英語圏のマイナーな歌詞を訳してほしいと思っていた俺としては、いいきっかけだった。

たまたまかばんにつっこんでいた輸入盤のライナーノートをまとめて渡し、「悪いんだけどさ、立村。来週までにこれ訳してもらえないかなあ。今度小学校時代の野郎連中と、ライブごっこやるんだ」

本当のことだった。急ぎではなかったけれど、なんとなくためしてやりたかった。首をちょこなんとかしげて眺めていたりっちゃんだが、受け取りぱらりとめくった後、

「ちょっとだけ待ってもらっていいかな」

かなりの量だった。自信ないのかなと思っていた。

立ち上がって一回教室を出て行った。五分後に戻ってきた時は大きな英英辞書を抱えていた。図書館に寄って注文してきたらしい。早い。

「どしたの、これ」

「うん、ちょっとだけ確かめたいところあったんだ」

ちょっとだけというのが、りっちゃんにとってはどのくらいのことなのか、俺は初めて思い知らされた。約五分後。

「これでいいかな。間違ってたらごめん」

すべてのライナーノートに、りっちゃんは数回英英辞書をめくり、さらさらと訳をノートに書き込んでいった。。今思えばその歌詞にはスラングもたくさん入っていた。俺の持っている英和辞書では見当のつかない訳になっていたと思う。とにかく、普通の日本語として意味の通じる訳。唄。そのまま口づさんでオツケーという代物だった。

「りっちゃん、これ本当に」

「間違ってた、かなあ」

不安そうに見上げるりっちゃん。とんでもない、と感謝の意で手を合わせた。

こいつの頭は本物だ。

たとえ数学の授業中真剣に指を使って計算していても。足し算引き算する時にいつも数直線を引いていたとしても。

それ以来俺とりっちゃんとは、音楽関係のネタで毎日話をするようになった。隣の席っていうのは非常に楽だ。最初りっちゃんも俺にどういう話をしているかわからなかったみたいで、びくついていたみたいだけど。俺の方から古い洋楽のダビングテープを押し付けたり、ライナーの訳を子とあるごとにお願ひしたりしていくうちに慣れてくれたようだった。どうして俺と目が合うたび、びくっと肩を振るわせるのか、理由はわからなかったけれども。

でも、その時は音楽の話題オンリーだった。一番俺の興味津々たる、あのことは一言も出なかった。

俺が何気なく、

「立村ってさ、女子に関心ないのかよ」

とつつこむと、きょとんとした顔で俺を見つめて、

「やっぱり、それっておかしいかな。ないんだ」

とつぶやく。あわてて真っ赤になるとか、戸惑ったりするとかだったら俺もつつこみようがあるけれども、不安げにうなだれるのを見ると、それ以上何も言えない。

「いや、だったらどうしてここまですごい歌詞、訳せるのかなあって思ったんだ。洋楽の歌詞って真っ正面から読むと結構、これ発禁って言いたくなることあるだろ。立村の訳には全部、そういうやらしいところも書いてあるから、そういう本とか読んで勉強してるのかなとか思ったんだ」

「そんなこと、してないよ。ただなんとなく勘でわかるから。やっぱり、俺は変だよな」

ごまかしつづけていたのが、だいたい五月くらいのことだった。

「りっちゃん、どうした」

しばらく膝の頂点にジュースを乗つけたまま、りっちゃんがほうけていた。

悪夢のビデオ鑑賞会、あの衝撃がまだ抜けていないんだろうか。

「いや、たいしたことないんだけど。お前、こういうのって、友だちと観ること多いのか」

「そりゃあまあ。お笑いネタにもなるしさ。でも今回は初めてだな」

「なにをさ」

やはりきよとなんとした顔でもって、俺の方を見るりっちゃん。つくづく、本条先輩じゃないけれど、

「立村は俺の弟分だからなあ」

というのがわかる。

「アダルトビデオ観て、いきなり怒り出したのって、りっちゃんが初めてだ」

「だってそう思うだろ？」

まだ向きになっているりっちゃんがいる。俺はまあまあと黙らせて、もう一杯ジンジャエールを注いだ。

「するならふつうのことすればいいんだ」

「ふつうのことって、何」

やっぱり思ったとおりだ。りっちゃんは黙り込みじっとグラスの中の泡を見つめつづけて、話をごまかそうとしている。大抵他の奴だと、

「おいおいごまかすなよ」

とか

「お前の方で振っておいてなあに真っ赤になってるんだよ」

とか言うんだろうが、りっちゃんにそれは通じない。一緒にビデオを観ようと誘って、頷かれた段階で、りっちゃんは何かを言いたかったはずだと、俺は思ってる。そういう方面のことについて、俺と話をしたかったはずだと、かなりの確率で信じている。ただ、他の奴と違うのは、切り出すのにかなり勇気があるらしいということ。バカ話でごまかせそうなことを、りっちゃんに限りかなり、真面目な顔で受け取らないとまずらしいということ。

「やっぱり、こういう感じがたって変だよな。やはり」

いつもの口癖を二回繰り返し、猫が皿をなめるような感じでグラスの中をすすっている。

最後に、グラスを下ろし、ぎゅっと胸で膝を二山抱え込んだ。

「なぐちゃん、奈良岡さん見てて、ああいうことしたいとか思ったこと、あるか？」

——あたりまえだよなあ。

言葉で返す野暮なことはしない。俺は正面から笑顔で答えることにした。幸い、りっちゃんは言葉以外のボディランゲージをすぐに読み取ってくれる。嫌われるんでないかどうか、ときよときよとしていた視線が俺の顔で落ち着いた。ほんのわずか、唇が開いた。

いつか話すこともあると思うけれども、五月、俺はどうしようもなくひとりの女子を追いかけ

つづけていた。過去形じゃない。今でも同じく走りつづけているって感じだ。

奈良岡彰子。

俺の中で追いかけてたい。そう思えた女子は初めてだった。

周りからは、

「お前、もう少し選びようあるだろ」

とか、

「そりゃあねーさんはいい奴だと思うけどなあ、でも、ルックス考えたことあるのかよ」

とか突っ込まれた。言いたいことはわかる。要するに俺の今まで付き合ってきた女子とは違っていて言いたいんだろう。気まぐれじゃねえかって言いたいんだろう。

でも、俺が彰子さんに惚れたのはそんなもんじゃない。

入学式にすれ違った時からの一目ぼれだ。

なんで一年の段階で告白しなかったのか、なんで別の女子と付き合ってしまったのか。いろいろ彰子さんがらみの出来事が起こった後、仲間に突っ込まれた。

「だってさ、彰子さんにはすでに小学校時代から彼氏がいたって聞いたもんでさ」

本当のことである。たまたま、彰子さんと同じ小学校出身の先輩と話をすることがあって、

「あの奈良岡さんって子な、外見に似合わず、めちゃくちゃもててるんだぜ」

と笑い話のように教えてもらったからだった。本気だった俺はすぐに確かめるべく、直接町まで行って確認した。たいしたことじゃない。彰子さんが通ったであろう中学の通学路に立ってみて、小学校時代の友だちを誘い女子をナンパしてみたただけだ。いろいろ聞いてみただけ。幸い、そのナンパ相手と俺の友だちは巧くいったみたいで罪悪感はかかえないですんだ。そのカップルから情報をいろいろ仕入れていくうちに、俺には望み薄だということが判明した。

かなり一年時は落ち込んだ。ガキだったから、奪えばいいという発想まで行かなかった。

羽飛の言うとおおり、俺は一年のとき、女ったらしだった。

好きな子をあきらめて、忘れるために付き合っていたのだといわれても言い返せない。

俺の憶測が全くのでたらめであり、彰子さんがフリーだということが判明したのが五月の中頃だった。

なんのことはない。彰子さん本人が堂々とクラス中に言い切ってくれたのだ。

それなりに彼女という存在を持っていた俺としては、かなり悩んだ。今までのように、「やはり本気になれない。ごめん」という振り方じゃないのだから。本気で付き合いたい子が出来てしまった。だから別れる。それってかなり尾を引きそうだった。しかも俺はその後間をおかず彰子さんに打ち明けるつもりでいた。当たり前じゃないか。いつ取られるかわからない。あのもてもて伝説を一年間、いろいろ聞かされてきた俺としては。青大附属ではそんな事実がないような扱いをされてきていたけれども、俺にとっては好都合だった。だって、そういう噂が流れたら、「じゃあ俺も」って手を挙げる奴が出ないとも限らない。

今だから言えるが、俺の架空ライバルは、水口要坊やだった。

——なあにが、「鯖の解剖」をするっていうんだ！

——俺だって料理のひとつや二つぐらいできるってのに！

真面目に、寝られない日々が続いていた。

その後いろいろあって、なんとか彰子さんとは「お付きあい」というところまで進んだ。なにせ小学校時代のファンから熱烈に愛されている彰子さんのことだ。いつ誰が手を出すとも限らない。俺としては精一杯の誠意をぶつけたつもりだったけれども、やはりかつての「南雲秋世女ったらし伝説」が轟いていて、彰子さんはかなり傷ついたと思う。それでも、俺のことを

「あきよくん、っていい人だね」

と笑顔で誉めてくれると、全て許されたような気になる。なんというか、甘えるということをしていないのだ。女子って付き合いはじめると、あれしてほしい、これしてほしいというのが普通だと思っていたんだけど、彰子さんは違う。いつも俺が迎えに行くたびに、

「あきよくん、ありがと。いつもごめんね」

と微笑んでくれる。毎回だ。この人はいつも「ありがとう」「うれしい」その言葉をどのくらい繰り返しているんだろう。俺だけじゃない、他の奴にもそう言っているとわかっているけれども、それだけで俺は完全にくらくらしてしまう。

りっちゃんが言う通り、いつかは、「そういうこと」をしてみたいという気持ちはある。そりゃあある。まだキスすらしていない。今までの付き合い相手と違って彰子さんとは、俺のばあちゃん、父さん母さんすべてに紹介済みだし、すでに家族でのお食事会なんかもやっちゃっている。ひとりっ子……厳密には違うのだが……同士で、たまにはこういうのもいいだろうということで、中華料理屋でパクパク食いまくった。食べ物は食べるが、肝心要の彼女は食べない。不条理だが、しょうがない。俺が決めたんだから。

りっちゃんはまた同じ言葉を繰り返した。

「やっぱり、付き合っていると、そう思うよな」

何かを言いたくてならないのに、口に出せないで迷っている。要は俺にきっかけを作してほしいみたいだ。なんか俺はりっちゃんの考えていることが手に取るようによくわかる。

「清坂さんとそうしたい、って思わないのか？ りっちゃんは」

あごをちょこんと膝に乗せ、グラスを弾いた。鈍い音が小さく聞こえた。

「この前、うちに来てもらったんだ」

いきなり話が飛んだ。りっちゃんのくせ、その二だ。俺は相槌代わりに頷いて呼吸を合わせてみた。

「いつ？」

「終業式が終わってから、その、いろいろあって、約束してたから」

十二月二十四日が青大附属の終業式だった。まごうことなきクリスマスイブだ。俺もこの日は彰子さんを誘って俺なりのデートコースを用意したかったのだが、残念ながら向こう側の奴に先手を取られてしまった。いろいろあるのだ。とりあえずお正月の初詣については予定をいれてお

いたのだが。くやしいぞ。

一応りっちゃんが、六月から同じD組の清坂美里さんと付き合っているのは知っていた。なんとなくだけどりっちゃんを後押ししたのが、二年D組の男子連中 だってこともある。俺としては当時、当然だと思ってしたことだったけれども、最近はどうも首をひねる時がある。ほんとうによかったんだろうか、りっちゃん、 と呼びかけたくなることがある。人の色恋沙汰に手を突っ込むのはどうかと思うけれど。

男としての建前上、りっちゃんがずっと好きだった清坂さんにつきあいかけた、というのが定説になっている。けど、二学期に入ってからちょっと気になる ことがあって俺はりっちゃんに確かめた。はっきり答えなかったけれども、やっぱり清坂さんに押し切られたというのが本当のところだったらしい。結構女子って強いし怖い。

それはそれでいいと思う。それでふたりともうまく行っているんだったら。

りっちゃんなりに一生懸命清坂さんに話をしたり、一緒に帰ったりしているみたいだし。

ただ、なんとなく気に入らなかったのは、挟まる羽飛の立場だった。俺が考えすぎなのかもしれないけれども、ふたりの間を取り持とうとする振りして実は清坂さんとべったりしようとするところだと、なんとなく気持ち悪かった。

俺がりっちゃんの立場だったら、まず一言二言文句言うだろうな。

二学期に入ってから、たまたまりっちゃんと、羽飛、清坂さんとの間が険悪になった時期があり、俺も規律委員の立場としてちょこちょこ様子を見ていた。評議委員がクラスの統括を担当するとしたら、規律委員はファッション流行チェック……じゃなくて、細かい人間関係とかいやがらせとか、そういうので問題がないかどうかを確認する。表向きはスカートの裾だとかネクタイがゆるんでないとか、その程度のチェックにすぎないけれども、結構裏ではいろいろやることが多いのだ。

実際、りっちゃんが夏休みの宿泊研修中にやらかした事件が、おふたりさんとの間でなにやら尾を引きずっているのは確かだった。俺も詳しいことはあえて聞 かなかった。後で本条先輩から全部教えてもらった程度の情報しかない。でも、もし彰子さんが清坂さんの立場だったら、きっとぽこんと頭を叩いて「もう、いざとなったら相談してね」とにっこり笑って終りだろう。そういうお方だ。我が花散里の君。

残念ながら清坂さんは花散里ではなくて、巴御前だったらしい。

羽飛と連合して、教室の片隅でりっちゃんを追い詰め、罵りつづける姿を見たら、たぶん俺以外の男みな恐怖すると思う。おそろおそろ、「あの三人には一切、口を出さない方がお互いの身の為だ」とおふれを出したのも当然だ。規律委員としてではなく、人間関係を保つ上での、保身だ。

りっちゃんがその後何日か学校を休み、羽飛と清坂さんがなにやら相談し、次の週でまたもとのさやに収まったのはまずめでたいことだと思う。少なくともりっちゃんにとっては、すっぱり

と縁を切られるよりはよかったんだろう。俺もよけいなこととは思ったけれども、羽飛にちらっとかまをかけてみたりもした。

——りっちゃんじゃなくておとなりさんってことだよな。

瞬間沸騰しそうになっていたところを見ると、凶星だろう。

この辺は、俺の個人的むかつきなので、あまりりっちゃんには話したくない。

いろんなことを考えながら、俺はりっちゃんに話を促した。

「クリスマスイブじゃん。どこかデートに連れてったんか」

「うん、うちに連れてった」

「うちって、りっちゃんの？」

「うん、家に誰もいなかったから」

そこまでりっちゃんのはにかみもせず、素直に答えていた。「誰もいなかったから」とあっさり流してしまえるところがなにか、ひっかかる。それでそれと、さらに糸をひっぱってみた。

「で、何した？」

ジンジャエールを舌先でちょこちょこなめながら、りっちゃんは片方の手でひとつひとつ数え始めた。

「前の日から来てくれるってわかってたから、ケーキとか用意したし。でもケーキだけだったら体によくないから、ちゃんと食事も用意したし。サラダとスープとパンプティングと、あとロースとビーフと、ジュースっぽいシャンペンと」

——俺も行きたかったなあ。

よだれが出そう。今のは全部手作りのはずだ。りっちゃんは料理がうまい。美味しいものを作ることができる。それは男女合同の家庭科の授業で前から知っている。

でも、なにかりっちゃんの口調には、クリスマスらしくない冷めた感じが残っている。

「ただ食ってただけか？」

「食べてから、テレビみたり、プレゼント交換したり」

「おお、クリスマスパーティーの定番だ」

あえて。何をもらったか、何をプレゼントしたかは突っ込まずにおいた。

「それから？」

「それだけだよ！」

突然、りっちゃんはグラスを両手で握り締め、唇をかみ締めた。何か気持ちが高ぶりそうになると、いつもこんな顔でこらえるのがりっちゃんのくせだ。普通に見せようとするんだろうけれども、うまくいってない。隠しているつもりなんだろうとは思う。必死にポーカーフェイスを通そうとしているんだろうとは思う。ただ、周りの奴には丸見えなんだ。気付かないふりをしてくれていることを、りっちゃんは知らないのかもしれない。

「ごめん、いやな。俺がもし彰子さんとふたりで、りっちゃんと同じシチュエーションだったとしたら、どうしたかなあって思っただけなんだ。俺、ご存知の通りスケベだから、押さえてられたかなあとか、思ったりしてさ」

笑い話でごまかしたかった。そしてついでにため息もついた。全く、小学時代からのマドンナを恋人に持つと、独り占めできないのが悔しいのだ。

「じゃあ、何すればよかったんだよ。なぐちゃん。俺は何もしてないのにさ、なんであんなこと言われなくちゃいけないんだよ。ちゃんと、向こうが喜んでくれるようにって、ずっと今までひどいことしてたからせめてなんかしようって、思ってただけなのにさ」

「誰に言われたんか」

目が大きく潤んでいる。泣きたいのをかなり無理にこらえているみたいだ。顔を見ずに、俺は例の裏ビデオを拾って本棚にしまおうと立ち上がった。

「うちの、親にさ」

短く言葉を区切り、茶色くともった灯りの中、りっちゃんは膝を抱えてうずくまった。

今は十二月二十五日の夜。あと五分でクリスマスは終わる。

たまたま昼、くさった気分で小学校時代の連中とゲーセンをうろついていたら、ひとりぼっちでうろついているりっちゃんを見かけた。焦げ茶のピーコートに共布のハンチング帽を被っていた。ゲーセンで遊ぶ格好ではなかった。目がうつろですぐに出て行こうとしていたのを、俺がひとりで追いかけたというだけのことだ。

うちに泊りに来る？ と誘ったら頷いた。うちにはばあちゃんしかいないし、いつも友だちを連れ帰っては泊めてたりするので、なんの気遣いもいらぬ。りっちゃんもその後、自分の家に留守番電話へメッセージを入れていたようだから、たぶん家出したわけではなさそうだった。

5

きりのいいことで、隣りの門前でぴかぴか光っていた豆電球のぐるぐる巻きが一瞬で消えた。裸の幹にぐるっとまきつけて、クリスマス期間中ツリーに見立てて飾るってことをいつもしているお隣さんだ。ちゃんと消す時刻も毎年こだわっている。クリスマスイブ、クリスマスが終わったらすぐに消す。おかげでこっちも、日付が変わったことに気付いたってわけだ。

りっちゃんは窓に目を向けて、まばたきを数回した。猫みたいだった。もう一度グラスの中を眺めてから、一気に飲み干し、むせていた。

「気管に入った？」

「だ、だいじょうぶ」

ちっとも大丈夫じゃない顔でずっと咳き込みつづけているので、俺としてもほっとくわけにはいかない。背中をさすってやった。よくうちのばあちゃんが喘息の軽い発作を起こした時には、こうやって一晩中撫でてあげたり背中を叩いたりするのが常だった。

「けど、大変だったよなあ。りっちゃん、疲れたろ」

「なんかな」

俺が黙って背骨を指でなぞってやると背をよじられて逃げられた。

「なぐちゃん変なさわり方するよな」

向かい合っていたのが今度は隣同士。はっきりしないのも落ち着かないので、俺はりっちゃんの座っている布団にそのまま座らせてもらった。誰にも聞かれてないってわかっていても小声でしゃべりたいだろう。りっちゃんは。

「俺も今考えれば非常識だったと思う。別の誰か、もうひとりかふたり、呼べばよかったと思うさ。女子をひとりだけ呼ぶってというのがやはりいろいろ、まずいってのは、後で気付いたさ。けど、なんであんな言い方するんだよ。関係ないだろ」

独り言と文句のあいこのみみたいなしゃべり方で、りっちゃんが説明したことによるとだ。

ふたりっきりで清坂さんと楽しいクリスマスイブのひと時を過ごしていたのを、たまたま帰って来た父上に見られてしまったという。本人は「何もしてない」と強く言うのだから、たぶん「何も」してなかったんだろう。その辺は信じよう。お父上もさすがに清坂さんの前では何も言わずにもてなしてくれたいらしい。息子の顔を立ててやったってことだろう。男としての義務でちゃんと清坂さんを近くのバス停まで送り届け、戻ってきたところから修羅場が始まったとか。

とてもだが、俺もその辺は人のこと言えない。

「親、うるさいもんなあ」

「別にいいさ。それはそれで。けど、あんなこと言うことないだろ」

どうやらりっちゃんにとってのアキレス腱を露骨に切られてしまったらしい。

「あんなことって」

言っても言わなくてもどっちでもいいよ、という風につぶやいてみた。

こうするとりっちゃんは、安心して続きを話してくれるのだ。

「なぐちゃんずっと前、お父さんから、あれを一ダース渡されたって、言ってたよな」

「持ってるよ。まだほとんど手付かずで」

すみません。枕もとに隠してます。

「使う時にはそりゃ買うよ。俺だってそのくらいのことには分かる。けど」

いや、いつ使うかわかりませんよ。りっちゃん。男には本能ってもんがありますから。緊急事態ってものもありますから。経験者じゃないから説得力ないけれど。

返す言葉を飲み込んで、頷きつづける俺。りっちゃんは軽く目やにを取るように、手の甲で目尻をこすった。

「いきなり父さん、仕事部屋に俺をひっぱってってさ、『ここにあるからな』って、あれを見せるんだよ。そんなのがあることなんて知らなかったし、知らなくたっていいことじゃないか。なのに、あれ、ふたが開いてて、だいぶ減ってて、つまり、そういうものが二パック置いてたのをさ、いきなり見せてさ。『いざという時は覚えておけよ』ってさ。なんだよ。まるで俺が女子を連れ込んで、いわゆる、そういうこと、しようとしてみたいに決め付ける言い方することないよな。そして最後にさ」

がまんでできなかったのだろ。思いっきりうつむいて軽く体を震わせて、

「なんで『お前もそういうところは、大人になったな』って笑うんだよ。薄笑いっていうんか、とにかくにやにやしたまま俺を見るんだよ。何が言いたいんだよ。なんで俺のことを勝手にそん

な目で見るとだよ。なんもしてないし、ただ招待しただけじゃないか。なんでそんなこと」

以下、繰り返した。俺が何度かジンジャエールを注ぎ、別の話を引っ張り出すのにかなり時間がかかった。危うく泣くんじゃないかと思った。

——うちと同じじゃん。

悪いけど俺の本音。

話の内容を把握して思ったことだった。

うちの親はたぶんりっちゃんの両親……お父さんだけらしいけど……よりも年寄りだろう。けど、そういう男女交際とか、エッチなこととか、それこそ避妊についてとか、気軽に話をするが多かった。俺が小学校の頃から遊びまわってたっていうのもあったろうけど。だから小学校卒業の時にコンドームダース渡されても、今のりっちゃんみたくパニックになったりはしなかった。今でも彰子さんのこととかは気軽に報告している。どうせ父さん母さんだって、彰子さんのご両親と友だちになれたことで喜んでるみたいだし。見張られてる分はめは外せないけれども、それはそれなりにってことだ。俺だってその辺はしっかり計算している。

たぶん俺がりっちゃんの立場だったら、まずはおちゃらけるしかないと思う。

下心がないならなおのこと。

すいません、こういうところだけ大人になりました、とへらへらしてるだろう。だってそうだもん。それしか言いようないもん。

「それで、ゲームセンターにいたんだ」

一応学校の校則で出入り禁止になっているゲームセンターに、なぜりっちゃんが油売っていたんだろう。気になっていたけれど聞いてなかった。原因が判明した。

りっちゃんは唇を、歯の跡つきそうなほどかみ締めて、頷いた。

「今日、っていうか、昨日の朝か？ 目が覚めたら父さんが枕もとに立ってて、『どうだ、可愛い彼女の夢見てたのか』とか言うんだ。そんなわけないよな。なんでそんなあとをひっぱることばかり言うんだよ。もう、俺も寝ぼけてたのかもしれないけど、なんかかっとなっちゃってさ」

「もういいよ」

つまるところ、りっちゃんが本当の修羅場を繰り広げたのは二十五日の朝。本来ならばサンタクロースがプレゼントを置いてくれる時間帯に、目が覚めたらお父上からの暖かいお言葉を賜ったとのことだ。その言葉があまりにもりっちゃんの気持ちを逆なでするものだったので、しっぽを踏まれた猫のごとくわめきちらしたと。

目の前で膝を抱えているりっちゃんを見ていると想像つかないけれども、言う時はかなりきついことでも平気でぶちかます性格だと思う。

たぶんお父上はあっさりと言さげるか薄笑いで対処し、りっちゃんをさらに激昂させたのだろう。

勢い余って家を飛び出し、ふらついているところを、俺に拾われたと。

なんか、ゲームの爆音に包まれているなかひとりふら付いているりっちゃんを見ていてほっとけなくなったというのが、正直なところだった。びくびくしたまま、食われるんじゃないかと恐れをなしているような、そんな感じ。一年生の頃、新歓合宿の部屋で話し掛けていた時と同じ目をしてたっけ。

俺は灯りを消そうと思って立ち上がった。これ以上の話は、窓から差し込む月明かりすら邪魔だろう。雪が半分窓に張り付き、氷の膜が窓から浮き上がっている。しっかりと閉ざした。

「けどいいなあ。俺うらやましいよ。だって俺、彰子さんとクリスマスデートできなかったんだぜ。理由知ってるだろ？ ほら、小学校時代のファンクラブ会長が指揮してパーティーの真っ最中だって。りっちゃん、偉いよ。ちゃんと自分で企画して、清坂さんをおもてなししたんだろ？」

「一年間、いろいろあったから」

短く答えた。ほんと、りっちゃん、いろいろあったな。

「やっぱり付き合っている以上、クリスマスとかには何かしなくちゃいけないのかなって思ったから聞いてみたんだ。そうしたら『品山のうちに行きたい』って言われたから」

清坂さん、あなたは勇気ある人だ。もし俺がりっちゃんの立場だったら、清坂さん、どうなってたか保証できないぞ。俺だったらそう思う。彰子さんと、まあその、ちゅっとひとつくらいはしてみたい。

「もともとあれだろ、りっちゃん、おととい家に誰もいないってこと、話してたんだろ」

「もちろんだよ。それでもいいか、って聞いたら、いいって言われたから」

大丈夫。りっちゃん、あんたに罪はない。

俺は軽く頭を撫でてやった。闇の中だけど、ちゃんと髪の毛の生えている頭の場所は体温だけで分かる。軽く振られた。触られたくないらしい。

「けど、本当にそれだけだったんだ。なぐちゃん、あのさ」

呼吸する拍子に、しゅうしゅうと息の洩れる音が聞こえる。空気が乾燥しているらしい。

「なぐちゃんは、一日何回くらい、写真集とか見たりする？」

——やっぱり、聞いたかったんだな。

回りくどい言い方だけど、りっちゃんはそういうところがうまく言えない奴だ。

「三回、くらいかな。まあ体力が持つ時はもっとかな」

本条先輩の五回連続には負けるけど。ちょっとオーバーに言ってやる。

「そういう時って、やっぱり、あの、人のこととか、考えるんか」

よくわかるよりっちゃん。そりゃあ、写真集の時は別だけど、いつもはいわゆる彰子さんのことを考えたりして、ってこともある。内緒だそれは。たぶんりっちゃん以外の野郎連中と話す時とは別の言葉を使って答えた。

「たまに。な」

「そうか。なぐちゃんもそうなんだ」

また黙り込んだ。口癖みたく、同じこと言うだろう。想像して俺はにやけていた。

「やっぱり俺の感じ方って、変なのかな」

黙って俺はりっちゃんの肩を叩いた。

「俺もたぶん、なぐちゃんと変わらないことしてると思うけど、でも、ぜんぜんそんな気持ちにならなかったんだ。やっぱり、俺は変なのかもしれない」

りっちゃんがいわゆるふつうの猥談についてくるのは、めずらしいことだけど今日が初めてではなかった。今年の夏あたりから何度かその手の質問をされている。露骨に話すわけではないけど、聞きたいことはたくさんあったんだろう。俺の猥談レベルからすると小学校五年時に卒業したような質問をかましてくれた。

夜中に変な夢を見るのは異常なのかとか、りっちゃんの名誉のため具体例は出さないけれど授業中に妄想が浮かんだ場合どうやって乗り切るのかとか。女子の肌に触れたとたん反応してしまうのはなぜなんだろうとか。大抵は俺とふたりっきりの時だった。

その手の話については、プロフェッショナルの本条先輩に聞けばいいのに、と振ったら、「何言われるかわかんないよ。『お前本当にガキだな』の一言だって」

とのこと。頷ける。

俺があっさりと通り過ぎてきたところで、りっちゃんは今立ち止まり悩んでいるところらしい。砂利道をさくさく歩いていくだけのことなのに、ちょっととんがった石を踏みつけただけで立ち止まり、拾って虫眼鏡で観察。そんな感じだ。まあ、本条先輩に相談したら全く別のことをアドバイスされるだろうけど。

——どうしてこういうチャンスを逃したんだ、ばかやろう！とか、言われそうだな。

「この前うちの父さんが買ってきたインストロメンタル、かけようか」

枕もとの灯りをもういちどスイッチ入れて、俺はラジカセにテープをはめ込んだ。すでにダビング済みだった。レコードの針を無駄にはできないし。

クラシックのアレンジものだろうか。チェンバロの演奏でところどころフルートの音色が差し込まれている。題名がどんなもんだか俺は知らない。唄も入っていない。音もかなりでかくしないとメロディーが聞き取れない。けど、お互いの吐息が聞こえる部屋の中では中くらいのボリュームでも大きすぎるくらいだった。雑音がちゃらちゃら入ってくる。ぎりぎりのラインまで音を下げた。

「たぶん俺が彰子さんと一緒に過ごすってことになったら、こういう感じでBGM流すと思うなあ。レコードでムードを高めるといいかもしれないよ。曲とかかけたの」

「そのつもりだった。けど、まずいかなって思って」

りっちゃんはそれ以上答えなかった。

膝を抱えてじっと空を見据えていた。クラシックではバロックが好きだと話していたりっちゃんのことだ。今流れている曲は、きっと好みの世界だったんだと思う。ちょっと響きの薄いきらきらした音色のチェンバロ。今の時代はマイナー扱いされている楽器。今時じゃない、メロディ

「けど、清坂さんは喜んで帰ったんだろ」

「だったらいいな」

「それでいいじゃん」

——たださ、相手が今時だったら辛いよな。

なんとなく、この曲は清坂さんあまり好きでなさそうな気がしていた。

本当だったら俺なりの憶測を話したかった。秋に羽飛とやりあったきっかけの会話を。ずっと二学期から考えていた俺なりの推理を。できればりっちゃんが今まで気付いてなかった感情への答えを。

けど、そんなのを他人から訳知り顔で唱えられたってむかつくだけだろう。俺だったら絶対にいやだ。だから、俺は黙ってりっちゃんの話聞くことに専念した。できれば、こうすればいいのという本音を隠したままで。いつか助言してほしい、みたいなことを言われたらその時には全部吐き出すけれども、今はまだだめだ。

——まだ、付き合うつもりはあるみたいだしな。

クリスマスの献立やプレゼントやら、りっちゃんは一切照れもせずはにかみもせず俺に話してくれていた。仮にも自分の彼女についてだったら、多少なりのどきどき感覚は持っていたはずだ。でも俺の感受性が鈍いのか、どうも評議委員会の企画準備をしているのとおんなじ風にしか聞こえなかった。次期評議委員長としての義務を必死に果たしているりっちゃん。清坂さんに対しても、羽飛に対しても、もしかしたら俺に対しても。好かれるための「義務」を果たすため必死に身をすり減らしている、そんな感じがした。嫌われないように、ああすればいいこうすればいいと、マニュアルを集めてその上で行動しているような。

——俺にはそんなことしなくたっていいよ。

口に出してしまえばいいのだけど、たぶんりっちゃんは絶対に違うと言い張るだろう。

ライナーノートの訳を無理にこしらえなくたっていい。今このひと時だけで俺はりっちゃんを友だちだと思っている。いつか気付けば十分だ。

1

D組の南雲とすれ違った。ふっとため息をついた後、時計を覗き込み慌てておる。走りたいんだらう。呼び止めた。

「南雲、悪い、これから規律委員会か？」

「そ、いそがないとしばかれるしな」

長髪とはいえない狐みみたいな髪型がぼわんと揺れた。仮にも規律委員が、違反まっしぐらの髪型で許されるのかお前、とつっこみたくなるのだが、女子には大人気だ。人気がすべてを決定する。

南雲はしぶしぶ立ち止まった。ごくろうにも俺のところに三步、戻ってきてくれた。

悪いが呼び止めたからには長話させていただく。

ついさっきまで、D組の教室にて、女子と話をしていたようすをたまたま俺は感付いてしまった。どういう会話なのかは知ったことじゃあない。ただし、南雲の学校内における立場および「学内アイドル」としての扱われ方を考えると、当然ふたりきりで話をする理由は一つしか思い当たらない。せっかくなんだから あったかく見守ってやれよ、とは大人のご意見だがそんなの俺は知らん。まずは証拠を集めて追求するのが俺の推理方法である。

「難波もこれから評議委員会か？ うちの立村ならもう先に行ったけどな」

「先に本条先輩から呼び出されてるんだろ、あいつ同期よりも本条先輩命だもんな。俺たち愛されてねえよ」

ははっと南雲は声を立てて笑い、

「もっともだ」

と頷いた。

「じゃあ、悪いが先に行くわ、ちょっと時間食っちまったから」

「おいちょっと待った」

俺は後ろに回ってひょいと南雲の両肩を捕まえ、軽く締めた。本気なわけがない。笑いながら南雲もいやいやする。

「いきなりここでプロレス技はなしだぜ、難波」

「今、D組で誰かと話していたよな、しかも女子と。何かまた、いつものパターンか？ 全く華々しいのう」

俺の方を振り返り、南雲はかすかに眉をしかめた。他人にはあまりつっこまれたくないことらしかった。言わなくても態度でわかる、このしぐさ。男前だ。ブレザーのポケットに手を突っ込み、つんつんとつま先で床を蹴る。

「俺が推理してやろうか？」

「いいよ、そんな関係ねえだろ、それより俺の規律委員としての命がかかっているんだわ、遅刻これ以上やらかしたら、思いっきり扱われるしさ、悪いけど邪魔しないで先に行かせてくれよ」

「いそぐならてきぱきと白状しろよ、それとも俺の独断と偏見に満ちた推理を聞きたいか？」

「青大附中のシャーロック・ホームズ殿、その推理は悪いけど後でゆっくりとき。ほら、もう先に立村が評議委員会の教室に」

言いかけた南雲の口を後ろからふさいだ。本気でいやいやする南雲。こうなったら逃がしはしない。めったに南雲に関するスクープをつかむことなんてないのだから、チャンスを逃しはしない。

「あのなあ、また女子を、泣かせたんだろ。お前も罪な奴だな」

まずはひとつ、ジャブを打つ。

「罪ったって、いや、その、別に」

照れくさいんだろうか。面倒くさそうに、「はあ」とため息を吐いた後、南雲は俺に向かい、ゆっくりとつぶやいた。

「難波、お前俺が女子に人気あると思っ込んでるだろ。誰でも手を出す変態だと思ってるだろ」

うんざりって顔だった。そう思われるだけの前科がこいつにはあるのだからしかたない。「そんなことない」と訴えたところで、南雲の現在の状況は否定が難しいだろう。第一、俺はB組だっていうのに、他クラスの南雲情報を入手しているってのが何よりもの証拠だ。D組とは合同授業がそうあるわけではない。D組 評議の立村から噂を聞く程度だが、あいつも口の軽い方ではない。南雲が先月三年の女子と付き合っていて、最近別れて、ただいまフリーという情報だとか、告白されまくりの嵐だとか、女子でないと関心を持たないような内容を、俺はいつのまにか聞き知っている。何気なく耳を澄ませているだけで流れてくるこのニュース、なんとかならないものか。これも「火のないところに煙は立たない」って証明だろう。

きゃあきゃあ騒がれていながら、男子連中からやっかまれないのはこいつの性格にも理由があるのだろう。もともと男子との付き合いを最優先し、女子受けを無理にしようもしない。告白されて丁重にお断りしても、その女子たちのことを貶したり悪口言ったり決してしない。付き合い上男子同士の間では、自分の彼女についてかなり悪口言まくるのがポーズなんだが、南雲はそういうことを決してしない。この辺もポイントアップの一因だろう。

「そうか、また女子に捕まっていたんだな。ご愁傷様」

凶星。またまた困りきった顔で唇を尖らせる。当たりか外れかその辺も少し探って見たいものだ。

「お前、そういえば今、フリーの身だと噂に聞いたんだが、どうやら本当らしいな」

前髪を少しかきあげてみた。我が敬愛するシャーロック・ホームズ様はいつもパイプをくゆらせているのだが、そんなことしたら停学になっちゃう。せめて頭脳だけでもあやかりたい。

「まあ、いろいろと、な」

「女子たちがわんざと詰め寄せて、お前の彼女に立候補しているってわけか」

これも外れていないだろう。実際、B組の女子たちがしょっちゅう噂しているのを耳にする。

——D組の南雲くん、今フリーだって。今がチャンスよね！

——うん、かっこいいもんねえ。完璧だもんね！

否定はできないのだが、男子は青大附中において南雲ひとりだけじゃないだろと言いたい。どうせそんなこと言ったら女子どもに冷たく「もてないくせに」と笑われるのが定めだろう。——そういう女子のみなさん、自分の顔を鏡で見てから考えろよな。つりあいってもんも大切だぞ、つりあいも。

修羅場をこさえたくない俺は、決して言いはしない。

南雲はさらに困りきった風にうつむいた。ギブアップだなこれは。

「で、お前はずっと女子を冷たく振りつつけていると。選び放題だもんなあこれは」

「選び放題ってそれは女子に失礼だけど。難波ホームズ君」

——「君」をつけるのは「ワトスン」だったの。

「いいかげん女子とのお付き合いに飽きたとか、そういうところもあるのかなと俺としては推理したってわけだ。どうかな、南雲」

南雲はしばらく口をもごもごさせ、俺の手を払いのけた。首を思いっきり振って、天井を見上げた。俺の肩に手を置いて、片目だけ見つめるかっこうでささやいた。

「難波、お前、顔も名前も知らない女子からつきあいかけて、素直にOKできると思うか？」

「へえ、そんな存在感薄い女子相手だったんだ。お前女子選び放題だもんな。好みじゃあなかったんだ？」 「とにかく知らない人に言われても普通困るだろう？」

「残念ながら俺には経験がないので、その辺推理でしか判断つかねえよ」

南雲は肩をすくめた。ははん、どうやらこいつ、好きでも嫌いでもない女子、顔も知らない女子にたった今、告白されたばかりらしい。俺の推理が正しければの話だが、即刻お断りして、ダッシュで逃げ出そうとしたところらしい。もっと推理させていただければ、

「お前の顔の好みじゃあなかったんだな。残念」

かすかに表情がほころんだ。だろ、だろ？ 共感を求めるその顔。

「俺、顔より心の人間だし」

「誰も信じねえよ」

——ルックス最優先主義じゃないかお前なんてさ。

突っ込みたかった。余所見した際に南雲の奴、すったかたまったと駆け出して廊下を駆け下りようとしていた。俺も追いかける。あいつは結構足が速い。階段をからから降りた後、踊り場から思いっきり手を振り返し、

「難波、人生、本当に長いんだ。いつかお前もわかる日がくるぞ！」

意味不明な言葉を発し、また駆け下りていった。辛いのか、そんなにも。

2

——けど、誰だろうな、南雲に告白した相手。また、自分の顔を省みずにチャレンジした勇氣ある奴は誰だろうな。

時計を見たところ、そろそろ評議委員会が始まる時刻だ。まだ四月に入ったばかりで、新入生

たちも落ち着かない有様。とりあえずはなじんでいる二年評議連中と固まってしゃべることが多い。今年的一年評議は見た感じやる気のない奴ら中心で、今後の評議委員会に関しては暗雲立ち込めていると言ってよい。ただ幸いにして、俺たち二年連中は妙に男女関係なく団結力があるので、しばらくはこいつらと一緒に船に乗り、くだくだ言いながらがんばって大海原を進んでいこう。

リーダー格のA組評議・天羽が懸命に場を盛り上げようとしているし、年上の女子先輩たちにはC組評議・更科が小型犬風の笑みでもって人気を博している。三年の男子先輩たちにはD組評議の立村が真剣に教えを求めている。悪いが男子連中、誰も南雲みたいに華やかなお話なんてありゃあしない。そんなもの、全く求めちゃあいないだろう。俺も同じだ。なにせ我が敬愛するシャーロック・ホームズ様は一生独身だった。頼むから男色、すなわちワトスン君やモリアーティ教授との危険な関係を疑うのだけはやめてくれ、と訴えたい。

すぐに三年A組の評議委員会開催室へ向かってもいいのだが、少々忘れ物がなくもない。中身はばれても没収されるものでは決してないのだが、うちのクラスで持っていることを見られたらばつが悪いのもまた確かだ。

——小学生用の算数参考書なんて、B組連中に見られたらしゃれにならねえよ。

自慢じゃないが俺は理系が得意だ。小学校時代はトップを外したことが一度もない、泣けそうなほどの優等生だった。残念ながら青大附中に入ってから周りの連中が半端じゃなくできる奴ばかり、上の中レベルでふらふらしているのが情けない。いつかは狙いたい。狙えるだけの力をつけたいもんだ。まあいいか、評議委員会同学年の中では俺がトップであることが心の救いでもある。がしかし。ガリ勉野郎ばかりのクラスB組において、俺の地位が低いのもまた事実。悔しいが、努力あるのみだ。言っとくが、成績を良くして自慢したいってわけじゃあない。我が敬愛するシャーロック・ホームズさまに近づくためには、ありとあらゆる知識が必要なんだって、どうかわかってやってくれ！

うちのクラスの連中から、

「ああら、難波ってば、今だにこんなレベルの低い参考書使ってたってわけかよ、けっ」

馬鹿にされたくはない。人間としてむかつくガリ勉はいないB組だが、お笑いのネタにされちまうだろう。

——ったく、あいつにはこのレベルで十分なんだよ。ばーかが。

たまたま昨日、図書室で友だちとしゃべっていたら、A組とC組の女子評議が二人、顔をつき合わせて懸命に数学の問題集と格闘しているのを見かけた。いつもだったら「じゃあな」の一言で見逃すところなんだろうが、何となくそいつらの言動にびりりとくるものあって、何気なく後ろの席に座って様子をうかがった。何事も自分の眼で見たもので確認しないとまずいだろう。

「来週ね、追試だから本気出してがんばらなくちゃ！」

大きく一つに束ねた髪を何度も縦に揺らしているのが、C組の霧島だった。

「この前の実力試験？」

「うん、毎日寝ないでがんばったんだけど、調子が出なかったみたいなんだ。クラスの平均点下げちゃったみたいで、みんなに申しわけないなって思って」

——当たり前だろうが。お前に数学の才能なんてもともとねえだろ！

「そうかあ。私でよかったら、わからないところ、教えてられるよ。私もあまり数学得意じゃないんだけどなあ」

「ありがと、小春ちゃん。小春ちゃんどういう参考書使ってるの？」

体を斜にして、俺はA組女子評議の西月がかばんから取り出した、青い表紙の数学参考書を見て絶句した。

いや、大げさじゃあない。

——おまえ、何もなあ、「トップを狙うための参考書」をこいつに預ける気かよ！

うちの学校でお勧めの参考書は確かにそれだ。西月がそれを使っているのは理解できる。青い表紙の、「トップを狙うための参考書」と呼ばれる部類のものだ。俺もしっかり使用している。かなり難しい因数分解やら空間図形とか、へたしたら高校生レベルの数学問題まで含まれているのだ。もちろん青大附中に入るだけの実力を持つ奴ならば、このレベルの参考書を使わないとまずいのは理解できないわけではない。がしかしだ。

——霧島なんかに、これが理解できると思うのか？

激しく「無駄な抵抗はやめろよおい！」と制止したかった。断言するが、霧島の頭では青い表紙の参考書なんて理解できるわけがない。一年間俺が、霧島の様子を見て判断した結果だ。

「ゆいちゃん、ほら、このあたりの問題出るんじゃないかなあ？」

「なあにこれ、なんでXとYがこんなにたくさん並んでいるの？」

「それはねえ……」

西月の説明は決してわかりづらいものではない。小学生の家庭教師くらいならできるだろう。がしかしだ。

——わかるだろ、あいつが小学生以下の頭しかないってことくらいな。

「うーん、ごめんね、小春ちゃん、もっかい説明して。今度こそ、今度こそ覚えるから！」

「うん、何度でも大丈夫だよ、ゆいちゃんあのね……」

——いや、違うんだ、根本的になんかが違うんだ。

さすがに評議委員同士の間人間関係を悪化させたくはないので、俺は黙って席を立った。通りすがりに軽く挨拶だけしておいた。

——こいつ、小学校からやり直す必要があるんじゃないのか？ 足し算と引き算、割り算と掛け算、小数点と分数、ごっちゃにしながら解いていた。努力は認める。認めるがしかし。

——C組の先生連中は何も言わんのか？ こいつの能力ではうちの学校の授業に着いていけるわけねえって。西月の友情溢れんばかりの努力は認めるが、来週だろ？ 試験って。まずめちゃうちゃ初歩の初歩からやり直さないと、話にならねえだろ。

一度も追試なるものを経験したことのない俺が言うのもなんだが。追試とは一度試験で出した問題を繰り返し出すのが普通だと聞いている。前回の試験結果を頭にまず叩き込んで、あとは数

字を入れ替えしてパターンを暗記する。これが数学の王道だ。

霧島にもっとわかりやすい参考書なりなんなりを渡してだな、せめて追試くらいは逃れさせてやるのが、親心でもんじゃないのだろうか。そういうことを、教師が放棄しているとしか俺には思えん。

だからしょうがないのだ。

教師が何にも気付こうとしないから、評議仲間の俺が、するだけなのだ。

問題はあいつが、まっとうに小学生用の参考書を読みこなせるかどうかだが……正直なところ、それもめっちゃくちゃ怪しいと思う……仕方がない、こういうことは人間として、評議委員会の一員として、言い出しっぺの俺があいつの家庭教師代わりになるという、えらいしんどい役を引き受けなくちゃあいけないだろう。半端でなく気の強い霧島はさぞや文句言うだろう。「余計なお世話よ！ 私だって青大附中に受かったんだから！ やればできるのよ！ 難波くん数学得意だからってまた私を馬鹿にしてるでしょ！」とかわめくだろう。

露骨に噛み付かれて怪我しそうな面倒事を引き受けられるのは俺しかいないだろう。

——今日の評議委員会でな、あいつが嫌がろうが明日、図書室で徹底してしごいてやんねえとあいつ、きっとすべるぞ追試に。追試すべったらどうするんだ、あいつ評議から下ろされるぞ。いきなり評議委員の面子が変わったら大変だが。まったく手間の掛かる奴だぜ！

3

確かに顔を覚えていない女子に告白されても、どうしたらいいかわからないだろう。別の奴だったら「告白されただけでもラッキー、とにかく女子ならまずはもーらい！」としっかりいただく奴もいるだろうが、そこが俺の知っている南雲の男らしさなのかもしれない。

——存在感のない顔なんだろうなあ。けどいくら南雲でもな、すごい美人だったらまた代わるだろうなあ。ほら、「日本少女宮」レベルの顔だったらな。

あまり背は高くなくていい。髪の毛は長いほうがいい。ポニーテールも悪くはない。できればふわふわした古きよき時代のイングランド風ファッションがよい。「不思議の国のアリス」の、テニス画アリス。もしそういう女子が存在したら多少気が強かろうが、多少口が悪かろうが気にしないだろう。これから俺がしつけりゃいいんだから。

——まあ、そういうタイプだったら南雲もあっさりOKしていただろうな。女子好みってのは、男子ともども似たようなもんだしな。けどどんな女子だろ。

やっぱり置き忘れていた紙袋をかばんに押し込み、さっそく三年の教室へ向かうことにした。階段を昇り、評議委員会開催中の三年A組教室に入ろうとした。と、反対側から女子らしい影がちらつくのが見えた。俺が上がってきたのはA組側、向こうから来たのはD組側の階段だった。人気もない。たぶんうろついているのは評議委員くらいだろう。少しうつむきかげんで、両手で顔を覆うようにしてとぼとぼ歩いている女子。小柄で、ポニーテール姿の女子。——あいつか

？

髪の毛を頭のでっぺんに一つにまとめ、少し揺らすようにしてうつむき歩く女子。

真っ正面に立ちすくんでいる俺の視線に気付こうとしなかった。三年D組の斜め向かいに位置している水のみ場で足を留めた。

俺も足音を忍ばせて、ゆっくりとB組、C組の前を通り過ぎた。ふつうだったら気付くだろ
うに。その女子は目をこすりながら、一度鏡を正面から見据えた。俺が側にいることも意識して
いなかった様子だった。そのまま、片手で蛇口をひねり、水を一杯に流した。はね散らかす水で
制服も袖口も、髪もみな、ぐしょぬれ、さかなっぽい顔に見えた。

三回、四回、五回。まだまだ水が冷たい時期だったのに、髪の毛と胸のあたりがびしょびしょ
になるくらい顔へ水をたたきつけた。俺は水のみ場の隣のところでただ黙ってあいつを見つめて
いた。

——こいつなのかよ。

かばんの中に入っている紙包みが、重たかった。

「な、何見てるのよ！ 難波くん、こ、これから評議でしょ！」 隣に立っても気付くのにかなり
時間がかかった。鈍い霧島は水浸しの顔をぶるぶる振りながら叫んだ。廊下には俺と霧島しか
いないし、しかも意味不明の洗顔を燃えていたあいつのことだ。どういう状況なのか理解して
いないのだろう。俺だってそうだ。推理はしているけれども、さて、なんと言えればいいんだかわか
らない。ホームズ様だったら果たしてこういう場合どういふのだろう。

「早く来いよ、評議委員会、始まっているぞ」

俺は背を向け、A組の教室へ向かおうとした。が、何か言い忘れてしまったような気がした。
口の中が熱くなって、怖い。まさかさっき、俺が南雲としゃべっていたところなんて見ていない
だろうな。まさか、俺が後をつけるような格好になったなんて気がついてねえだろうな。大丈夫
だろう。こいつの頭はにわとり並だ。一本調子で一つの目標に対して燃え上がらせるのは得意ら
しいが、頭脳プレイについては全くのとんちんかん女。その辺はゆうゆうと推理済みだった。

「わかってる、ちょっと、先に行っててよ」

「なんで顔なんか洗っているんだよ」

はっとした表情で、霧島は自分の頬に手を当てた。目と唇に、慌ててこすり取るようなしぐさ
をした。かき、かきと頭の中で俺の推理が働いていくのを感じる。唇が妙に赤い。まぶたがかす
かに桃色だった。爪の先がやたらとぴかぴかしているのは水に濡れたせいではないだろう。そ
して、動いた瞬間漂った香り。

「お前、まさか」

風呂場のせっけんの匂いだった。水のみ場の丸いレモン石鹸とは違う。お歳暮とかお中元で届
く高級な石鹸のあまったるい香りだった。学校の中には存在しない成分だ。霧島しか、所有して
いないこの香り。

——化粧なんかしてたのかよ。

——南雲なんかのために。

「駒方先生がうるせえからしっかり落とせよ」

俺はそれだけ言い残し、霧島を置いてA組の教室へと入った。すでに評議委員会は始まっていた。女子評議の席は確かに、C組の場所だけ空いていた。

——あいつ、まともに頭はたらかねえくせに、勉強なんてろくすっぽ理解できないくせにさ。ただひとつのことしか熱中できない単細胞のくせにさ。

あいつがもし入ってきたら、きっと駒方先生もびっくりするだろう。女子の化粧なんてよくわからねえけど、良く見たら唇はまっピンク色だったし、目も何となくでかく見えたし、心なしか色も真っ白く見えた。いや、化粧なんかしなくたって変わらなかつたんじゃないだろうかとも。ただ、明らかに自然じゃなかったのは香りだった。きっと南雲もあの匂いをかいだに違いはない。ちっとも心動かされることなく、霧島を振ったに違いはない。「顔に覚えがないから」という理由で。記憶に残すこともなく。

——南雲なんかのこと考えてる暇あったら、来週の追試の勉強しろよな。

「難波、どうした、顔色悪いなあ。失恋したのか？」

穏やかな調子で駒方先生が話し掛けてくる。違う、相手が違う。周りが妙に受けている中、俺は前髪を何度もかきあげながら扉の方を見つめ続けた。

——色気づきやがって、ちくしょう。

1

西月先輩からいただいた黒地に金の絵柄がついた手鏡は、少し大きめだった。丸い鏡に柄が細く繋がっている。今時はやらない落ち着いた柄だけど、梨南の好みにはぴったり合っていた。

言葉を発しない西月先輩は、E組の教室にくるなりすぐ、梨南に袋ごと手渡した。

「ありがとうございます」

丁寧に頭を下げてお礼を言った。返事は返ってこなかったけれども、こっくり頷く姿は以前の先輩と変わらなかった。いただいたものはすぐその場で確認するのが礼儀だ。梨南は素早く紙包みを開くことにした。西月先輩はすぐに三年A組の教室へ戻ってしまうけれども、自分はまだここにいる。梨南なりの考えで、すぐに開けたほうがいと判断したからだった。

——でも、どうしてなのかしら。

西月先輩を見送り、自分の授業の準備をしながら、静かな教室で梨南は思った。

——西月先輩、こういう感じの柄はお好きでないはずなのに。

普段から西月先輩の好みは明るくポップな感じのものが多かったような気がする。梨南のように重くしっとりした味わいの色合いは、「もう少し可愛い色の方が杉本さんには似合うよ！」とアドバイスされてしまうものだったし。でも梨南の好みを変えるつもりはさらさらなく、かといって西月先輩の趣味の悪さを否定する気もなく、なあなあにしておいた。女子に対しては、特に可愛がってくださる先輩にそんな失礼なことを言えるわけがない。梨南は納得する相手に対しては礼儀を守るのだから。

——たぶん、私の好みを理解してくださったのね。

どんなに理解し合えない相手であったとしても、自分の主義を貫いていれば必ず理解してくれる相手と出会えるはずだ。いや、これは西月先輩のことを言っているわけではない。ただひとつの真理として、心に納めただけだった。

E組.....にまわされてすでに二ヶ月が経った。

他の生徒たちに対しての説明は、「大学の授業を受けたり、特別に補助の必要な生徒に対しての放課後用クラス」ということだったけれども、梨南はすでに事実を知っている。

なにせ、わざわざ駒方先生が梨南の家まで足を運んで、逐一説明してくれたのだから。

それこそ、そんなことまで話さなくたっていいだろうにとあきれられるくらいに。

白髪交じりの駒方先生が入ってきて、梨南ひとりしかいないのを確認して、穏やかに笑った。

「おや、いいもの持ってるねえ、どうした？」

すぐに目を留めたのは、箱に入ったままの鏡だった。少し大きめで机の上においたままにしていた。別に隠すべきものでもないし、青大附中は持ち物検査でさほど厳しいことも言われない。

見せびらかすのも一興だ。梨南はあっさり答えた。

「はい、西月先輩から、修学旅行のお土産にいただきました」

「ほう、小春からかあ、どれどれ、見せてもらえないかな？」

薄形の箱の蓋を開けた。和紙に包まれた格好。一枚ずつ横に開き、まずはそのまま駒方先生の方へ立てて見せた。近づいてくる駒方先生は押し頂くように受け取り、鏡をじっくりと眺めた。

「梨南にはずいぶん地味だねえ、こういうのが好きかい？」

「はい。今時の下品な色合いや恥かしくなるようなデザインものに比べたらましです。気品があります」

「そうか、小春も梨南の好みをよく知っているんだね」

駒方先生は以前、美術担当をされていた。定年退職後、なぜかE組担当のためにだけ講師として残っているという。裏を返すと梨南のような「普通の人たちには害を与える害獣」の飼育係といったところだろうか。今のところ、かの桧山先生相手のような戦いを挑む必要はないけれども、ただその裏の考えを読む必要は感じている。現在の二年B組二十九人を、梨南から守るためにという理由でこしらえたというE組だ。どんなに真実を訴えたところで、自分がこの世に存在しなくてもいいという扱いをされるのならば、受け入れるほかあるまい。頭を下げて嘘を飲み込まれるよりは、たとえ異人扱いされても自分のほしいものを求めればいいのだ。

「梨南はなあ、もう少し可愛い感じの方が、似合うと思うんだがなあ。せっかくだいいものたくさん持っているのに、もったいないぞ」

「これが私のポリシーですから」

やはり、この先生も男なのだ。理解できないのだ。梨南の好みも、美学も、なにもかも。

駒方先生はもう一度鏡を丁寧に眺めた後、

「てっきり、上総が買ってきたんだと思ったよ」

かつての評価していた先輩の名を出した。

2

E組というクラスが、いわゆるやっかいものの寄せ集めに過ぎないということを気づかなかった訳ではない。最初、優秀な生徒を集めるためのクラスなのだと思います。嬉々として授業に出ようとしたところ、集まってきていたのは青大附中の授業についていけない人ばかりだった。もしくはほとんど話をしない生徒、もしくはずっと窓を眺めていて一日中過ごす人。しかも最初五人くらいいた生徒は、いつのまにかひとり、ふたりと減っていき、現在は梨南一人だけとなってしまった。別に彼らは退学したわけではなかったらしい。親の嘆願により、無理矢理自分のクラスに戻ったらしい。梨南もそれを望まないわけではなかった。唯一他の連中と違ったのは、両親が梨南をE組へ置くことを強く願っていたからだった。その点、両親を一生憎むことに決めるに値する結論だったし、もしそうするならば全てを憎んでも悔いはない。

「今日はどこから勉強するかな？」

「数学と理科は問題集を全て解きました」

駒方先生は美術の先生だから、いわゆる五教科の授業をパーフェクトに網羅しているわけではない。数学に関しては三年A組を受け持っている狩野先生がかなり丁寧に教えてくれる。また他の授業については、二年B組で「受けてもいい」ことになっている。どうやらその点だけは、担任の桧山先生が不承不承に受け入れたことらしい。本当は一切梨南をE組へ閉じ込めてしまい、他の生徒から引き離したくてならないのが見え見えなのだけど、そうできないのが一応教育としての立場。梨南なりにそのあたりは理解し、とことん利用することにしている。

どうせこの学校にいられるのはあと一年半なのだ。その間に自分なりにやりたいこと、勉強したいこと、見つけてさっさと公立のトップ校・青瀨東高校に進めばいい。

——未練なんてない。

さんざん梨南を憎み、蹴飛ばし、全てを奪った青大附中に、愛情なんてかけらもない。

梨南はきっと唇を噛むと、丁寧に清書したノートを取り出した。

自分の味方になってくれるもの、それは一つ、成績だけだ。

成績だけは、嘘を言わない。自分を守ってくれるもの。

一時期信じてても、すぐに裏切る人間たちとは違うのだから。

授業だけは受けさせてもらえる。それは「教育を受ける権利」だ。私立の青大附中に授業料を払っている以上、それはお約束だろう。しかし、桧山先生がのたまうには、

「一人のために二十九人の犠牲者が出ることは許されない」

のだそうだ。つまり、梨南ひとりが教室にいるだけで、二十九人のクラスメイトが迷惑するのだそうだ。空気がにごるのだそうだ。どうせ自分が評議委員から降ろされた段階で、無視すれば澄むことだろうにいったい桧山先生は梨南のどこが不愉快なのだろうか。その後釜を狙ったようにはるみが評議委員となり、わざとらしく「梨南ちゃん、言いたいことがあったら言ってね」と笑顔を向ける時、梨南はその場で首を締めてやりたくなる。押えているのはひとえに、あの人に嫌われたくないのと犯罪者になりたくないという、それだけだ。

——殺したい。

その気持ちを、口に出したらいけないのだろうか。

唯一の味方だった花森さんも、今は三味線の修行のため転校してしまった。

「佐賀さんと仲良くした方がいいよ」

「佐賀さんに逆ったら新井林に殺されるよ」

「もし、佐賀さんと仲良くしないんだったら、私たちも杉本さんと話できないよ」

他の女子たちの言葉が連なる。別にそれならばそれで構わない。自分の考えをまげるくらいなら、これきり一切口を利かずに過ごしたっていい。男子たち、はるみに頭を下げるくらいなら、その場で窓から飛び降りて死を選ぶ。四月から梨南は、裸のままの彫刻刀を身を守るため、持ち歩いていた。時代劇に出てくる腰元が、しっかりと懐剣を抱えているように。死を覚悟して、この日々を過ごすべし。

「梨南は勉強を一生懸命がんばるけどなあ、たまにはゆっくりと、話をしようよな」

何考えているんだろうこの先生は。ゆっくりと問題集を開き、ノートの採点を機械的に行なった後、駒方先生は梨南の前の机に腰をおろした。

「なんですか」

身構える。たとえどんなに優しい言葉をかけようとも、誰かさんのようにすぐ寝返りを打つのは見え見えだ。ずっと評議委員長にしてくれると信じていた立村先輩のように、いきなり評議から降ろすとか言い出すような相手ばかりだ。梨南が一度でも信じたら、相手はすぐに嫌いになる。好きでいてくれそうな振りをして、すぐに裏切る、いつものパターンだ。

特に駒方先生は、どこぞのカウンセラーさんと同じようなことを親へ説教していたではないか。

「毎朝梨南がお花を活けてくれるだろ？ いい雰囲気だよ。ああいうことは得意なんだろう？」

「常識です」

厳密に言うと、今までは自宅でそういう風に玄関の花活けをしていた。しかし例の事件が起こった去年の冬から、両親は今まで梨南にやらせてくれていたことをすべて取り上げた。大好きだったオペラにも連れていってもらえなくなった。その代わりに毎日テレビ番組がえんえんと流され、わざとらしく母に引きずり出され似合わない下品なトレーナーやジーンズを押し付けられ、着るように強要される。そんなもの見るのもいやなので放置しておく、今まで日常着にしていた上品なワンピースを全て取り上げられてしまった。「普通の女の子と同じこと」をしてもらわないと困る、のだそうだ。そんなことで簡単に根をあげる梨南ではなく、今度はさっさとその洋服を奪い返した。最後の手段はハンガーストライキだった。本当に死んだっていいと思っていた。自分に似合わない行為と格好をさせられるくらいならば。遺書も書いた。それが利いたらしく、洋服関連のことに関してはなんとか勝利を得た。

その復讐として、現在のE組への島流しとなってしまったらしい。

だから今は、親も全て敵なのだ。戦いは二十四時間、続くのだ。

「梨南はいつも、女の子らしく振舞っているからなあ、本当はみんな、大好きだって言いたいんじゃないか。ほんといつも思うぞ、もったいないなあとなあ。こんないい子をなあ」

白々しいお世辞は聞き飽きた。切り捨てた。

「男たちに頭を下げればいくらでも好きになってもらえるんですが、そんなことするくらいなら、私は死にます」

筆箱の中の彫刻刀をちらっと見遣った。

「梨南が死んだら、先生は悲しいぞ。先生だけじゃあない。みんなが悲しむ……」

「万歳三唱することがわかってます。でもいやなものはいやです」

事実を言ったまでだ。少なくとも、新井林健吾は大喜びするだろう。桧山先生も一応は教師の顔をして葬式に出るだろうが、あとで祝杯をあげるのには目に見えている。女子たちもみな、泣いた振りをするだろうが、ほっとすることだろう。今の二年B組の様子を垣間見ればすぐにわかる。梨南が授業を受けにきた時と、出ていった時、ざわめきの質が全然違う。えらい人がきて猫かぶっている連中が、終わった途端「ふああ」と大きくざわめくのと同じのりだ。一瞬だって、

梨南と一緒にいるのはいやなのだろう。お互い様だ。お互い、死ねばいいのにと感じあっている。今更どう思ったってしょうがない。

「いやいや、小春も、上総も、みんな悲しむと思うぞ」

「西月先輩はともかく、立村先輩は裏切り者です。信じません」

きっぱりと答えると、事実を認めざるを得なくなったのか、駒方先生は寂しそうにうなだれた。事実を否定できないことなだから、しょうがない。

一時間目が終わった。この日はB組のロングホームルームということもあり、梨南は参加しないでほしい旨、桧山先生に言われていた。一応は二年B組の所属ではあるけれども、基本的にはE組の駒方先生管理で動くこと、と定められていた。本当にこういう学校の教育あっていいのだろうか。もし青潟市の教育委員会に訴えたらどうなっているだろう。かつて小学校六年の時、菊乃先生を吊るし上げようと努力した両親が、桧山先生に対してはびくびくしているのが梨南には納得行かない。それどころか梨南を精神的な問題を持つ生徒として扱うことにしている事実がもっと許せない。あのカウンセラーとかいうおじさんは、梨南にひとつの病名をつけたらしく、その病名がなにやら大掛かりなものだったらしく、両親は一切従えなくなってしまったらしい。そんなことを信じ込むなんてどうかしている。本人が異常を感じていないのに、勝手に周りの人たちが騒ぎ出し、一つの箱に閉じ込めようとしているわけだ。違うと証明する手段は、今のところ一つしかない。学年トップの成績だけだ。

3

二時間目、この時間は数学だった。すでに自分で中学三年分の授業は終わらせていた。本当だったら立村先輩のように大学とまではいかなくとも、高校の授業を受けさせてもらえればいいのに、と思っていた。これも桧山先生によってブロックされている。曰く、「公立高校進学を予定している生徒に、高校の授業を受けさせるのはマイナスになる。むしろ、心身の乱れを取り除くほうに力を入れるべきだ」とのことだった。勘違いもいいところだ。もし梨南が青大附高へ進むことが可能だったら、また態度も変わったのだろうが、その辺はいたし方ない。数学の勉強は狩野先生に手伝ってもらって、参考書とプリントを用意してもらうことになっている。どちらにしても、二時間目は数学の授業だ。出なくていい。

煙草を吸いに出ていった駒方先生が戻ってくる前に、梨南は鏡を鞆へしまいなおした。

西月先輩の見立ててくれたこの手鏡、なぜか手にしっくりなじみ、抱き締めたくなる。

今まで西月先輩をはじめとする女子の先輩たちからいただいたプレゼントに、そういう気持ちを感じたことは一度もなかった。たぶん柄や雰囲気合わなかったのだろう。清坂先輩の好みはやたらとギンガムチェックの赤い布を使ったものだし、西月先輩はピンクもの一辺倒だし、霧島先輩のは少し男子の好みそうな原色風だし、轟先輩は黒と紺とか、根本的に重たい色ばかりだ。どれも梨南の求める古風な風合いの色はなかった。同じパステルでも明るくなり過ぎない鶯色とか、オレンジ色というよりももう少し淡い橙色。柄も英語の恥かしくなるようなロゴの入ってい

ないもの。横文字を画像として受け取るならまだしも、意味を理解して読むと幼稚園児の言葉みたいなもの、そういうのを持ち歩くこと自体、梨南の主義に反する。

これからうちに持って帰り、誰にも見せないようにしよう。

どうしても秘めたものにしておきたい衝動に駆られた。

ひとりでいることは苦痛でもなんでもなかった。

「梨南ちゃん」

かすかに戸が開き、声が聞こえた。聞きたくもない声だった。梨南は聞こえない振りをした。

「梨南ちゃん、聞こえてるのはわかるわ、入っていい？」

勝手に入ればいいことだ。この学校、他クラスの生徒が教室訪問することを禁じていない。

はるみが、静々とドアのノックをきちんと閉め、立ち止まり梨南がそちらを向くのを待っていた。

誰よりも憎く、そして殺してやりたい相手。

梨南は座ったまま、じっと見返した。こめかみに力を入れ、その目にきりきりと穴をあけてやるような音を耳に響くのを想像した。全く気づかないのか、はるみの口許には薄笑いすら浮かんでいる。

「駒方先生、まだいらしてない？」

「見ればわかることでしょう」

丁寧に答えた。うっかり余計なことを口走ると、松山先生と新井林の二重攻撃を受けるはめとなる。以前と同じスタンスだったら堂々と立ち向かえたけれども、完全に梨南のことを無視されてしまっている以上、自分が自動的に悪役になってしまうことだけは避けたかった。

「じゃあ、待ってる」

うっとおしいにもほどがある。最大の裏切り者であるこの佐賀はるみ。かつて精一杯新井林を中心とするいじめっ子グループからかばってやり、納得行かないことはとことん口でやり返し、小学校の卒業式では蛆虫入れられた靴を脱がせてやろうとしたのに、すべてをかなぐり捨てて新井林の味方となった、許しがたい女子。今だに「梨南ちゃん」と「ちゃん」付けで呼び、親切な振りをしてさんざんいたぶりつくそうとする女子。一度はとことん友だちだと信じただけに、その反対の憎しみは一気にオセロの色を塗りつぶすと同じだった。もう二度と、白に戻る日はこないだろう。

髪の毛を男子受けするお団子に編み上げて梨南の席へ近づいてきた。そのまま梨南ははるみを睨みすえた。近づかせる気はなかったけれども、ここは学校だ、暴れてはなるまい。はるみは全く気にせずに、さっき駒方先生の腰掛けた机の前にすくっと立った。

「あのね、梨南ちゃん。聞いてると思うけど」

「用は私なの、それとも駒方先生なの」

「私、B組の評議委員として先に梨南ちゃんに話すわ。だから聞いてね」

評議委員。単語が鼓膜にぶつかるたび、梨南の喉元を何か叩く。どんとどんと。

「明日、水鳥中学の人たちが交流会の最終準備で学校にくる予定なの」

「そんなの関係ないでしょう」

聞きたくもない。

「本当は健吾も、評議の二年生のみんなも、梨南ちゃんには隠したほうがいいと言ってたけど、私はちゃんと話しておいた方がいいって思ったの」

はるみは耳もとのほつれ毛を直すようにして、もう一度梨南の瞳を柔らかく見つめた。

こうやって、梨南からすべてを奪い取り、からっぽにしてE組に押し付けた張本人が目の前にいる。本来ならば評議委員長として認められる自分の夢も、新井林健吾を土下座させて今までのことをざんげさせるという希望も、すべて、はるみによって。

「それ以上何か言いたいことあるわけなの」

聞きたくもない。

「それでね、一つだけ約束してほしいの」

「はるみなんかに約束する必要なんてないわ」

ちょうどそこへ、煙草の箱を片手に、駒方先生が戻ってきた。

「どうしたんだい、はるみ。そろそろ教室へ戻らないとまずいだろう？」

「先生、よかった。今、証人になっていただけますか？」

——証人？

耳を疑った。今、「証人」と言わなかつたらどうだろうか？

はるみは駒方先生の側に寄り添った。少し離れたので梨南は少し呼吸しやすくなった。かわりにぞわぞわと背中に走る、白い煙のような気配。これははるみのいつもの手だ。梨南を叩きのめしてまた、全てを奪おうとするための。一度はそれを信じて全て裏切られた。もう誰も、信じてはなるまい。弱くならない自分でありたい。

「明日の、水鳥中学の人たちとの最終打ち合わせのことなんですけど」

ここの部分だけをはるみは駒方先生に向けて言った。後、梨南に向かい合い、

「梨南ちゃん、絶対にその場所近辺に近づかないでほしいの」

——やはり、奪うんだ、すべてを。

梨南は唇をかみ締めた。身体の中に詰まった毒々しいものを全て、はるみの口に流し込み窒息死させてやりたい、そう思った。教室の中をすべて毒ガス一杯に充ちた状態にしたかった。毒ガスの部屋、そして自分も今、死にそうで死なないようなガス一杯の部屋にいる。

いくらガスを吸わせても死にそうにないはるみは、さわやかな微笑みのもとさらに告げた。

「このイベント、もし水鳥中学の人たちがいやだと言ったら、その場で終りになってしまうの。だから、梨南ちゃんには一切触れてほしくないの。評議委員みな、それが心配だって言ってるの。だから本当は、梨南ちゃんに内緒にしようって言ってたのよ。でもね」

はるみは少し首を傾げ、すぐにまっすぐに戻した。背を伸ばした。

「私、それはだめだと思ったの。梨南ちゃんに隠しても、もしばれた時に責められるのは水鳥中学の人たちだし、評議の先輩たちだと思うの。でも最初からちゃんとそういうことを、筋を通して話しておけば、梨南ちゃん決して迷惑をかけるようなことはしないと思うの。そうでしょう？」

」

「話はそれだけ？」

「だから、梨南ちゃん、約束してほしいの。先生の前で」

駒方先生は最初驚いた風に口を尖らせていたが、すぐ大きく頷いてはるみへ微笑んだ。やはりこの先生もグルなのだ。決して信じてはいけない。その証拠を発見したようなものだ。

「何を約束するわけ？」

「もし水鳥中学の人が来たとしても、決して顔を出さないでって。知らないふりしてって。お願い、評議委員会のためなの。今後の交流のためなの」

「誰がそういうこと、あんたに吹き込んだわけ」

「吹き込んでないわ。健吾は最後まで私じゃなくて自分が行くんだって言い張ったけど、でも」
——新井林が？

そうっと、心臓の音が掠れてしまうような気がした。

「健吾とだったら話し合いにならないと思うし、なによりも健吾、梨南ちゃんを絶対にいじめないって心に誓っているから、その誓いを破らせるようなことはしちゃだめだと思うの。だから、私が来たんです」

来たんです、の部分は明らかに駒方先生意識の口調だった。

「約束して。絶対に、水鳥中学の人たちに近づかないって。それ聞くまで私、帰らない」

一瞬、血まみれになったはるみを見たような気がした。もちろん気のせいだった。

はるみは目の前でふらふらしないでしっかりと立ったままだった。

「評議委員なんてもう関係ないから、知らないわ」

「だめ、お願い。そうしないともう評議委員会で交流会が出来なくなっちゃうのよ。立村先輩が全部責任を」

「私を裏切った人なんてどうでもいいからそんなこと」

「関崎さんにも迷惑がかかるのよ！」

声音、強く、響いた。

——関崎さん。

鞆の奥に、オーデコロンを染み込ませて、そっと畳んでおいている大切な手紙。

「関崎さん、本当は受験勉強が大変で、時間もないんだけどどうしても評議委員会のためにきて下さるって言うのよ！ それを梨南ちゃんの行動で台無しにされたら、もう二度と関崎さんは交流会なんかに参加してくれないのよ」

はるみの勝ち誇った表情がゆれて映る。「関崎さん」その名を口にすればするほど、梨南の心が揺れるのを楽しんでいるかのように、はるみは声を強めて続ける。何を楽しくて、駒方先生の前で言い放つのか。何をしたくて、関崎さんの名前を出すのか。それだったら最初から、来るも来ないも教えなければいいのだ。偶然顔を合わせることはあるかもしれないが、それを責めることは互いにできないだろう。なぜそこまで偶然の出会いすらも、拒絶しようとするのだろう。異様なまで力の籠っているはるみの言葉に、梨南は堅く口を閉ざした。

——答える気、ないわ。

「梨南ちゃん、私、梨南ちゃんと一緒に卒業したいの」

「よくそんな嘘言えるわね」

「梨南ちゃん、これ以上問題起こして退学になってほしくないの。中学だけはせめていっしょにいたい」

脳の中できると、めまぐるしくバトンのように回りつづける、彫刻刀。

——私を救ってくれるのならば。

何度も心臓の鼓動と一緒に、まぶたの奥でまわる彫刻刀を操った。

「ほら、はるみ、あまり梨南をいじめたらだめだぞ。早く教室へ戻りなさい」

なだめるように駒方先生がはるみに話し掛けている。激しく止めることはない。つまり駒方先生もはるみの味方だという証明なのだ。この教室、二対一。誰も守ってくれる人はいない。いつか、遠い未来にあの人が全てを受け止めてくれる日が来るのは信じている。でも、あの人の姿はまだ、水鳥の方にしか見えない。全ての可能性をかけて、梨南が費やしているたった一つの夢。おちおちはるみに奪われるのはもうごめんだ。

「あんたに約束はしないけど、とっくの昔に私、立村先輩と約束してるから安心して」

言葉を口にするのもいまいまして、梨南はまっすぐに何も感じないように答えた。

「関崎さんが卒業するまで、私は一切あの人に会わないこと、約束しているから。立村先輩の間はそうするから。あんたたちの言うことは無視するけど、立村先輩との約束は、守るから」

はるみの表情が大きく膨らみ、笑顔で溢れた。

「よかった！ やはり梨南ちゃん、わかってくれたのね」

「さっさと消えて」

梨南の言葉に気を悪くしたでもなく、はるみはにこやかなまま、駒方先生に一礼をしてE組の教室を出て行った。

4



関崎乙彦という名を知ったのは、あの人を見つめてからずっと後のことだった。

——あの、俺も、うまく言えないけど。

何度もとちりながら、唇を振るわせるようにして、

——俺はあまり、女子にその、好意、もたれたことないから、だからあの。

両手をぎっちりとげんこつにしたまま、肩をこわばらせるようにして、

——だから、好意は嬉しい。嬉しいんだけど、でも、今は、そういうこと考えることができなくて、つまり、その。

一度も梨南から目をそらすことなく、とつとつと、

——俺、公立だから、どうしても、受験しなくてはならないから、それに。

学生服の黒い色が少しかけていた腕の部分。ふれたかった。

——俺のうち、貧乏だから、奨学金貰ってあの、青潟東に受からないとまずいから、だから本当にごめん。

あやまってくれなくたってよかった。梨南が青大附中で待っているのではなくて、青潟東に合格して追いかければいいだけのことなのだから。

——俺、君の気持ち、どうしても、こたえられない。ごめん、本当にごめん。

だからきちんと伝えたのだ。

——私、関崎さんを追いかけて、青潟東に進学します。

と。

——今は好きになってもらわなくたっていいんです。青潟東で私のことを待っていてもらえればそれでいいです。

とも。

それがそんなにおかしいことだったのだろうか。

そんなに引き離されなくてはならないことだったのだろうか。

あの人をあきらめるなんてことをどうしてしなくてはならないのだろうか。

あ人はただ、梨南のことを知らないだけなのに。

初めて新井林よりも強く、新井林よりも頭がよく、新井林よりもずっと暖かい性格の男子と出会えた喜び。

どうしてみな、奪おうとするのだろう。



はるみが出ていってから梨南は、狩野先生が用意してくれたプリントを三枚、机の上に広げた。何ごとも起こらなかったかのように振舞うのが梨南の美学だった。あのはるみの残り香を消すのに一番いいのは、やはり勉強だった。成績だけは、はるみにも新井林にも勝つことのできるたった一つのものさし。それを奪われないためにも、全力投球する。

「梨南、今日はよく耐えたな、えらいえらい」

「別に普通のことです。ああいう頭のおかしい人の言葉は相手にしないのが一番いいんです」

まだ心の奥には血のりの広がる光景が焼き付いていた。たったひとつの心の包帯。はるみが消える夢。口に出したら狂気と思われるから堅く閉じている蓋のようなもの。駒方先生はゆっくりと梨南の側に椅子を持ってきて座った。家庭教師だと、ほんとに思う。

「梨南、今みたいにしっかりと答えができれば、大丈夫だよ」「いつも私そうしてますが、勘違いしないでください」

不愉快だ。駒方先生はいつも、梨南のことを子ども扱いにする。もともとこの先生は生徒のことをファーストネームで呼ぶくせがあり、立村先輩なんかはいつも怒っていた。その気持ちはわかる。嫌いな名前を第三者から呼ばれる嫌悪感をこの先生、気づいていないのだろうか。答えたくないと思うものの、答えないと礼儀に違反する。仕方なく答えるのみだ。

「今みたいに、はるみにきちんと接することができれば、あとはかんたんなんだよ」

「あんな屈辱を浴びせられるくらいなら死んだほうがましです」

「ほら、死ぬって言葉を使ったらみんなが悲しむよ」

ふざけるなど言いたいのを我慢した。梨南の美学は礼儀だ。どんなに失礼な振る舞いをされても、礼儀正しく芯の通った言葉遣いをしようと心がけている。だが、心の形に一番近い言葉は「死」でしかない以上、どのような表現も正しくないと思う。はるみを殺したい、ずたずたにして、血まみれにしてやりたい、そう思う心も押さえつけなくてはならないのだろうか。それとも駒方先生は、梨南の「死」という言葉を脅しと思っているのだろうか。いつも筆箱の中に、彫刻刀を持ち歩いている事実を知らないのだろうか。覚悟だということすらも。

「いいかい、梨南。はるみも、健吾も、そりゃあもちろんきついことをいう奴もいるだろう。でもそれはね、しょうがないんだ。梨南がふたりのことを嫌いだ、と思っている間はどうしてもみな、同じような気持ちになってしまうんだよ。だけど、もしな」

言葉を切ってやさしく梨南に微笑んだ。最初はこれで、梨南も騙されそうになったのだ。この先生こそ、まともなのだと思われそうな気がした。大抵それは裏切られると覚悟しておけば間違うことはなかったし、その通りだった。

「もし、梨南がな、『いいよ、かまわないよ』と思うことができたたん、きつとはるみも健吾も、他の梨南を傷つける人も、みな変わるんだ。人の心は鏡みたいなものだよ。ほら、さっきの、小春から貰った鏡、出してみてごらん？」

言われた通りに、鞆から取り出した。先生はじっとその鏡の柄を握り、窓辺に向けて空を映した。少し曇りがかった、重たい空が映っていた。

「ほら、今は雲が重たいだろう？ 銀色の絵の具を使いたい気分だよなあ」

「青濁には梅雨がないですから」

冷たく言い放ってやった。

「でも、この中に青空を映したら、どうだろう？ 空は青空だってことだよなあ」

「当たり前です。そんなこともわからないのですか」

「だったら、青空ばかり映してやったらどうだろうなあ。梨南、そりゃ、気持ちの中はどしゃぶりのことだってあるだろ？ でもそれを鏡に映してしまったら、周りの人たちはみなどしゃぶりのいやあな気分になるわけだよ。でも、梨南が雨ではなくてもっと違うものを映してやれば、周りの人はみんな違う気持ちになってくれる。ほら、あそこの梨南が持ってきてくれた花束。きれいな百合だね。あの百合を映すと」

「百合に決まっています。あたりまえではないですか」

鏡の真ん中には、今朝梨南が活けたばかりの白い百合の花一輪、飾られていた。

「そうだろう、だから梨南も、百合の花を一輪、鏡に映してあげるようにすると、みんなも梨南のことを百合だと思えるようになるんだよ」「そんな非現実なことがあるわけありません」

きっぱりと答えた。

インフルエンザで入院した時にやってきた、うさんくさいカウンセラーのおじさんと同じことを言っただって、梨南は一切信用する気がない。

——自分が変われば、他の人も変わるんだよ。

ふざけるな、と追い出したかった。

あれだけ努力をして、あれだけ正しいことをしようとして、あれだけ常識のない人たちに説明をしようとして。

何度も繰り返した結果が、このざまか。

「私はそんなこと信じません。努力すればするほど、すべてを取り上げられたのが私のこれまでです。それならば当然、戦うのが筋でしょう」

まっすぐ、はっきり、梨南のいつも通りの言葉で答えた。

この言葉遣いが「頭おかしいんでないの」ということで、学校からも病院行きを勧められた原因だと、後日、聞いた。

「いやあ、梨南こんなにいい子なのに、みんなに黒百合だと思われているのが勿体無くて、先生、泣けるんだよなあ」

「黒い百合のどこがいけませんか」

はるみや新井林に頭を下げて、「ごめんなさい、私が悪かったの、もう一度友だちになってね」とでも言えば周りは喜ぶんだろうか。

気に入らないパステルカラーの下品なトレーナーとジーンズ姿で家の中を徘徊すれば、両親は満足するんだろうか。

どんなに憎いと思う気持ちすらも捨ててしまえば、楽になると勘違いしたことを言う大人たち。

黒百合を無理矢理脱色しようとして白い鉄砲百合にしようとする、やから。

「私は嫌われること恐れてません。平気です」

もう一度繰り返した。

「あいつらに頭を下げる時は、死ぬ時です」

それ以上顔を見るのもうっとおしくて、梨南はプリントに向かい、問題を解き始めた。

5

三時間目、四時間目はB組での授業だった。ノートと教科書を持って一番後ろの孤立した席につき、授業を聞く。先生たちも心得てか、梨南を最初から存在しないような形で扱っている。どうやら先生たちの間でも、「杉本を不必要に刺激すると、他の二十九人の生徒たちに迷惑がかかる」ということで協定を組んでいるらしい。もちろん半分以上の勉強は自分で進めているし、時には三年の先輩に聞いたりもしているから全く困ることもないのだが。こんなんで本当に教育委員会に訴えられたら、どうするんだろうか。孤立した状態の中で冷静に計算している自分を見る。

つまり、害獣は消えたほうがいいのだ。

二十九人の生徒たちが傷つく代わりに、一人の生徒が見えないところで泣いても、平気なのが民主主義というものなのだ。

それならば、こちらはその形を利用させてもらおうと決めた。

——私は、ひとりでいい。馬鹿な男子や裏切り者の女子とは縁を切る。

時折、優しそうな笑顔で振りむくはるみに心の血のりを浴びせた後、梨南は教室を出た。給食はE組で食べることにしている。

給食を食べ終え、一人分の食器を食器置き場へ持っていった後、E組の教室に戻ると、狩野先生と立村先輩が教壇のところで何か話をしていた。修学旅行が終わったばかりで、他の三年生たちは日焼けしているのに立村先輩だけは生白いままだった。

「立村くん、この問題が解けるようになると、一ランク上へ行けますよ」

「わかりました」

肩越しに覗き込むのは礼儀知らずなので、気づくまで待つことにした。すぐに勘付いてくれた。

「杉本、しばらく」

「お久しぶりでございます」

九十度ふかぶかと礼をする。ついでに狩野先生にもする。狩野先生はやさしくこっくりと頷くと、

「杉本さんにはあとで、プリントの追加を渡しますから、職員室へ放課後來て下さいね」

かなり細くやせこけた姿を見送った。修学旅行で心身ともにストレスがたまっただのではないだろうか。

見送る立村先輩の手には、小学三年生でも解けそうな文章題のプリントが数枚収まっていた。

本当は顔を見るのも腹が立つのだがしかたない、礼儀である。

「どなたかお待ちですか」

「うん、杉本を待ってた」

何を考えているのだろう評議委員長様。この人に騙されて一年間、梨南は評議委員長になるための修行をしていたはずだった。立村先輩も入学当初から梨南のことを可愛がってくれたし、ふたりで「おちうど」という喫茶店でおしるこをすすりつつ話をしたりしていたはずだった。それが一変、評議委員長を新井林に指名しただけではなく、わざわざ桧山先生のところへ行って梨南をひきずり降ろそうとしたとは、人間として最低、侮辱するにもほどがあると言いたい。あえてそれを無視して話をするのは、ひとえに向こうの方からフレンドリーに話し掛けてくる以外の何ものでもない。どうやら立村先輩は、人に嫌悪されるという感情を理解できないらしい。梨南にとことん嫌われても関係ないというくらい、脳天気な性格らしい。なにが「俺だけは絶対に杉本のことを嫌いにならないから」なんだろうか。世の中の人間はすべて梨南の敵なのだから。全てを奪い取り、新井林とはるみに全てを与えてしまった張本人をどうやって許せというのだろうか。

あのカウンセラーさんも「許してあげると楽になるんだよ」と勘違いしたことをのたまっておられたが、いいかげんにしてほしい。はるみと新井林を許したら、自分にちりひとつ残らなくな

ることを理解しているのだろうか。今の梨南には、憎しみをエネルギーに変えて戦う以外にすべがない。たったひとつ、関崎さんへの想いを白に、全ての人間に対する憎しみを黒に。「許し」てあとで痛い目に遭わされて、最後の一枚まで剥ぎ取られるくらいなら、死んだほうがまだ。

立村先輩はやたらともそもそと梨南の周りをうろついている。先日の修学旅行中また何かとんでもないことをやらかしたのだろうか。梨南が立村先輩を高く評価し、「男子としては唯一まともな人間」だと信じていた頃ならば、クラスのいざこざに巻き込まれても、清坂先輩とのお付き合いなんていう信じがたいことも、精一杯かばいたいと思えるだろう。かつての自分はそうだった。でも今は、またいつか裏切られてしまうであろう相手でしかない。西月先輩と天羽先輩のことだってそうだ。自分と関崎さんのことだってそうだ。いつか、もしかしたらまた、ずたずたに心を引き裂くかもしれない。血まみれになり、泣き喚く心の自分を見出すかもしれない。もう二度と、男子を信頼するなんてごめんだ。たったひとりの人を除いては。

「あのさ、杉本、明日の午後だけど、空いてるか？」

「何かあるのですか」

できるだけ冷静を装って返事をする。お下げ髪がかすかに耳もとで震えるのが感じられる。

「この日は悪いんだけどさ、ちょっとだけつきあってほしいんだ」

立村先輩の相変わらず不細工で脳天気な顔は、妙にゆがんでいた。一時期はまっとうに見ることもできた顔立ちなのに、どうしてか最近はだんだん崩れてきているように思えてならない。自分の美学概念が狂ってないとしたら、どうして清坂先輩のような女子がこんな不細工な男子を選んだのか、理解に苦しむのも当然だろう。

「ちょっとだけとは」

「うん、杉本には早い段階で話しておくつもりだったんだけどさ」

そこまで口にしたところで、立村先輩はふと、机の上に目を向けた。さっき給食を一緒にした西月先輩たちにも見せた鏡の箱、出しっぱなしにしていたのだった。

「あれ、気に入ったか？」

なにが「あれ」なのだろうか。西月先輩のプレゼントだというのに。何様のつもりなのか。

「ええ、大変気に入ってます」

立村先輩の瞳を一切逸らさぬように、梨南は答えた。全く逸らさず、優しい視線で持って見返す立村先輩はやはり、どこか、感覚がおかしいのだ。そうとしか思えない。梨南のことを一切嫌わない男子なんて、存在しては、いけないのだから。

「私の好みを完璧に理解してくださっている方が下さったものですから、大切にいたします。当然のことです」

「そうか、やっぱりそうか、よかった」

なにが良かったというのだ。立村先輩がくれたわけでもあるまいに。もし立村先輩が選んでくれたのだったら、当然お礼を言うだろうし、そのセンスをもう一度……そう、十一月以前と同じように……評価し、「男子としてまともな感覚の人」として受取るだろう。でもくれたのは西月先輩だ。西月先輩のこと、および女子の先輩たちのことを梨南は「センス以前の問題」として心

から慕っているつもりだ。憎しみに閉じ込められた中で、女子の先輩たちだけは梨南を追い出そうとせずに、守ってくれようとしている。いや、守られなくてもなんとかなるし、激しい血しぶきを想像の画像に浮かべることができれば大抵耐えられることなのだけれども、女子の先輩たちの愛情を受け止めるだけの場所はしっかり心に用意しておいている。立村先輩のことも、かつてはちゃんと席を空けていたが、今は椅子をたたんでその辺に放置しているだけのことだ。

「たぶん、それがいいなと思ったんだよな」

また何をふ抜けたことをおっしゃっておられるのだろうか。もちろん立村先輩が梨南と同じ感覚の持ち主だということは知っているけれども。梨南が抗議の意味で無言でいる間、立村先輩はちらっと梨南の髪を撫でるように眺めた。

「話を戻します。まっすぐ見てください」

もう一度梨南ははっきり言い放った。

「なんで、明日、先輩なんぞとお付き合いせねばならないのでしょうか」

「いや、それはさ」

ぴんとひらめくものがある。

「明日、水鳥の方々がいらっしゃるからですか」

隠し事はしない。はるみと同じようなことを告げにきたのだったら、これ以上侮辱を受ける気はないので、さくっと切り捨てる。

立村先輩は言葉を失い、ただ黙っていた。

そうだ、この人は最後の最後で、梨南を裏切った。

たった一つ、欲しかった関崎さんへの道筋をも、すべて指きりで断ち切った。



——杉本、いいか。関崎を今から呼ぶから、ひとつだけ約束してくれないかな。

——馬鹿にしないでください。何を約束するんですか。

——今、関崎が話をしたいと言って、外にいるんだ。その時何を言うかわからないけど、あいつはきちんと礼儀正しく話してくれる奴だから、杉本もそれに相応しい態度で受け取ってほしいんだ。

——立村先輩なんかに命令される筋合いはありません。

——いいから聞くん。その時にきちんと、話をして、向こうの望むことを考えてほしいんだ。命令なんかしない。それだけ、それだけできるか？

——人間同士の会話なのですから当たり前です！

——それなら、約束できるよな。もし関崎が受けられない、と言ったら、それが向こうの望むことなんだからな。ちゃんと、受け入れてほしいんだ。もう二度と会ってほしくない、そういわれたらそれが望むことなんだからさ。だけど、俺は杉本のこと嫌いにならないから、それだけは約束するよ。わかったか？

◆

幼稚園児でもあるまいし、指きりなんてさせられる羽目になるとは思わなかった。

三月のあの日。たったひとつ、握り締めていたものひとつを、無理矢理手放せと命令されることに、どれだけ耐えられるというのだろうか。あれから立村先輩は、関崎さんとふたりきりで話をさせてくれた。関崎さんは「現在のところは保留」と言ってくれたから、梨南も梨南なりに受け取って、また後でと解釈した。それをなぜ、責められるのだ？

新井林やはるみたちに無理矢理引き離されなくてはならないのだ。まだ何も始まっていないのに。関崎さんが梨南をたったひとり、受け止めてくれる人だとわかっているからこそ、邪魔するのだろうか。許せない。立村先輩も梨南は信用して裏切られた。今更のようにご機嫌とりするのだろうか。さりげなく関崎さんの情報を流してくれたり、今のように余計な話をしたりするのだろうか。

「杉本、どうしてそれ知ってる？」

「佐賀さんから聞きました。評議委員会で本当は隠しておきたいことだったらしいですね」

梨南は立村先輩に向かって言い放った。自分が毒ガスを撒き散らすのだったら、この場で全て吸い込んで即死してほしかった。この人にははるみに対するように血まみれの画像を重ねることはできない。また、かつて「まともな男子」と信じた記憶が蘇り消されてしまうから。関崎さんのかたちと重なるから。

「確かにそうだけど、でもなんでだ？」

「私に一切近づかないでくれと命令されました」

顔がひきつっている。頬がへこんだ。不細工な顔が一層崩れている。見苦しい。

その顔のまま梨南の前にかがみこむと、立村先輩は声を低くして尋ねた。

「それ、いつだ。修学旅行中か」

「ついさっき、二時間目の休み時間です」

胸がむかむかしてくる。結局ははるみの言い分を飲むしかなかった。飲んだのは一重に、立村先輩との約束。関崎さんに近づくな、とは言われなかったけれども、関崎さんの受験が終わるまでは一切言葉を発しないと約束したし心に誓った。だから、立村先輩を通して垣間見するだけではないか。それすらもはるみはやめろと言うのだ。

胸が詰まる。りりしい「ローエン格林」様の姿が蘇る。目の前の立村先輩を切り裂き、関崎さんの姿を側で見つめたい。手紙だけではなく、生身の姿である人へ。

「関崎さんがご迷惑になるそうです。受験が終わるまでは私も会わないと決めてますし、その点は立村先輩とお約束しているはずですよ。でもなんででしょうか。その一方で立村先輩、私になんでこんなことさせようとするんですか！」

声が震えているのが、自分でもわかる。とどめようとする立村先輩の視線が痛い。

「私、先輩と約束したのに、なんで破らせようとするんですか！　そこまで私を殺したいのですか」

「違う、違うよ、杉本、そういう意味じゃないよ、ただ」

「私からすべてを取り上げて、今度は最後のものまで奪おうとするのですか」

「あ、あのそれは、誤解を招く表現かと」

「知りません！ 立村先輩をもう信用しないと決めてますから、もう知りません！」

できるだけ、声を大人にして席に戻るつもりだった。しつこく立村先輩は梨南の顔を見つめながら、

「ごめん、そうだよな。杉本は約束を決して破らないものな」

もう一度梨南に目を留め、机上の鏡を見つめ、出ていった。

6

鏡を包んだ薄紙の下に小さく折手紙が挟み込まれていた。西月先輩のメッセージカードらしかった。さっきあけた時には気がつかなかった。

——これは、立村くんと私がふたりで割り勘で買ったものです。

私はちょっと杉本さんにはおばあさんっぽすぎると思ったんですが、立村くんが絶対この柄でないといやだと言ってきかなかったので、しかたなくそうしました。あとで立村くんと会うことがあったら、さりげなくそのこと言ってあげてね。

誰もいないE組の教室で、梨南は鏡をもう一度取り出した。

ほたると水草の描かれた、金色の絵。

心にすうっと染みとおる。

抱き締めて、すべての毒を鏡の面に吸い込んでもらいたかった。

ブラウスを通じてかすかに感じる冷たい感覚は、一瞬だけ梨南を一年前の自分に戻してくれそうだった。

たったひとり、やっと自分を評価してくれる人だと思えた瞬間を、思い出させてくれそうだった。

1

轟先輩が私に声をかけてきた。

「佐賀さん、悪いんだけど、コピーの手伝いしてもらえないかなあ」

干し柿を顔にしたような轟先輩の様子は、私が一学年下だと思えないくらい腰が低かった。前からこの先輩は、下級生にもそうだった。みんなから馬鹿にされていることを気づいているのだろうか、とふと思った。

「わかりました。お手伝いします」

たまたま教室には私しかいなかった。他の三年女子先輩たちは、私の顔を見るのも不愉快なようでさっさと出て行ってしまった。二年の女子たちも、習い事とか塾とかそれなりの理由をつけていったし、私は健吾を待っていたからどうしても残らなくてはならなかったわけだったし。

轟先輩だけがなぜか、大量のコピー用紙を抱えている。

「ありがとう、助かる。明日までに製本しておかないとまずいんだけど、私ひとりじゃあ、ねえ」

珍しいことだなんて思う。いつもだったら評議委員会関連の資料は三年の先輩たちがどんどんこしらえてしまうはずだった。下級生評議たちの出番はほとんどない、とも聞いていた。だから先輩たちが修学旅行に出かけている間、こっそりと話を煮詰めなくてはならなかった。ある程度形をこしらえておいて、先輩たちに「このやり方でやりたいんですがいいですか」と提示しなくてはならなかった。健吾がどうしてもひとりでやりたがったこともあって、私はただ黙って話を聞いていただけだった。でも、私たちの言うことを先輩たちが聞いてくれるとは最初から思っていない。あっさり退けられてしまうだろう。健吾はそのあたりに気づいていない。

「どのくらい作るんですか」

「そうだね、だいたい五十部くらいかなあ」

それならたいしたことない。私は轟先輩の猫背姿を追いかけながら、襟元のリボンをぴんと伸ばした。さっき鏡で自分の全身をチェックした。乱れは、ない。

2

コピー室に入り、轟先輩はコピー機のカバーを取り外した。うちの学校にはコピー機が五台備え付けられていて、先生の許可さえあれば無制限で書類を複写することができる。

「大丈夫、ちゃんと許可証貰ってるから」

轟先輩は私の問いにすぐ答え、胸ポケットの生徒手帳に挟んだ「許可証」を出した。

以前はあまりうるさい規則なんてなかったと聞いている。あまりにもコピーの量が増えすぎたので先生たちがうるさくチェックを入れるようになり、百枚以上刷る場合は必ず「許可証」を貰

わなくてはならなくなった。もっとも私と健吾が共同でこしらえている「青大附属スポーツ」...
...週一回の割合で掲載している学内スポーツ紙.....については、暗黙の了解でそれほど問題は
なかった。

「最近はやだよねえ。細かいことばかりいろいろ言われてねえ。佐賀さんもそう思うこと
ない？」

「いえ、別に。私、これが普通だと思っていますから」

下手なことを口にする、危険だと評議委員会の中ではいつも気を遣っていた。私なりの防御
策だった。いくら私を守ってくれる王子様が傍らにいたとしても、その剣が鋼でないことを知っ
ている。私も懐剣を取り出せるようにしておきたかった。

「そうなんだあ、じゃあこれを五十枚ずつ上からコピーして、机にどんどん並べていってもらえ
ないかなあ」 間延びした言い方で、轟先輩は前歯をしゅうしゅう言わせた。この先輩は、子ど
もの頃に歯の矯正をしてもらわなかったらしくて、歯並びが信じられないくらい乱れている。ふ
つう歯というと、前からずらっと並んでいるのがふつうなんだけど、轟先輩の場合笑うと前歯二
枚が唇からはみ出し、脇の牙にあたる部分がでこぼこに引っ込んでいる。しゃべる時、その隙
間から不気味な音がする。先輩自身は気がついているのだろうか。ただでさえそれで不気味がら
れていることを。もともと轟先輩は他の女子たちからも、陰でさんざん笑われているのを私は何
度も耳にしている。女子としては成績がかなり良くて、噂では将来司法試験を目指すそうだ。自
立できる仕事をしたいそうだ。なんとなく納得する。

私は一枚ずつ言われる通りにコピー機の透明な板部分へ紙をセットした。

「あ、そっち向きじゃない、横向きにするの」

「すみません」

間違えた振りをした。先輩たちと何かをする時は、時々弱いところを見せると、ほんの少しや
りやすくしてくれるのがいつものパターンだった。誰も自分より下の存在がいると思ひ込みたい
のだろう。私も同じかもしれない。

轟先輩はとりたてて何も感じないようで、私がコピーした紙束を丁寧に並べていき、二つ折り
にまとめはじめた。十枚ずつ揃えて指の腹で折り目をこすり、ぱぱぱっと広げて、今度は生徒手
帳を取り出しごしごしと一枚ずつ手押ししていた。相当時間かかりそうだ。

——健吾に連絡いれておいたほういいかも。

鞆は置きっぱなし。私が教室に残っていることくらいはわかるだろうけど。

最近健吾も次期評議委員長になるための勉強が忙しいらしく、私とは去年ほど一緒に歩く機
会も少なくなった。それはそれで気にならない。健吾自身はかなり落ち着かない様子だった。た
まにふたりっきりになる時は、突然信じられないような行動を取ろうとする。どういうこと？と
問われると、口に出せないようなことをだした。健吾がやきもちやきなのは今更でもないけれど
、していいことと悪いことがあるんじゃないのではと、私は思う。

——「おしおき」の続きをするだなんて、言われたくないな。

だいたい十枚くらい刷った。まだ大量に残っているようだった。こんなにこしらえて本当に必

要なんだろう。轟先輩も、三年先輩たちに好かれていない私よりも、他の女子に頼めばよかったのに。

ドアがいきなり開いた。

「すごいな、もうここまで刷ったんだ」

立村先輩が立っていた。六月のだいぶ暑い時期に、長そでのシャツとネクタイを隙なく着付けて、鞆を抱えてちらっと私を見た。一礼すると、かすかに笑って机の前にかがみこんだ。

「佐賀さん、どうもありがとう。助かるよ」

平和そうな口調だった。

3

立村先輩は机の側に畳まれていたパイプ椅子を引っ張り出し、座り込んだ。手伝おうと言わないのはどうも、先輩らしくなかった。私も立村先輩と直接話をするようになったのは半年くらいだけれども、大抵の場合すぐに、「あ、これは俺やるよ、いいよいいよ」とか言って仕事を取ってしまう癖の持ち主だ。なのに今は、轟先輩の手伝いなんて一切せずに楽しそうに眺めている。せっかくだったら紙を折るなりなんなりしてくれればいいのに。私だったらそう頼むだろう。それとも、清坂先輩との関係もあってあまり私の手伝いをするのはよろしくないと思っているのだろうか。立村先輩が私のことをあまり快く思っていないのは重々承知だけでも、それ以上に私に君の悪い親切をしてくださるのはもっと気持ち悪い。

理由は、あるから、疑問ではないのだけど。

「轟さん、早いよなあ。どうしてそうぱっぱと作業が進むんだ？」

「こういうのしか私、取りえないから」

「そんなことないよ、十分過ぎるよ。俺なんてこれ何時間やったってたぶん終わらないよ」

両腕をテーブルにぺたっとくっつけ、浮き輪をかかえるような格好で立村先輩は机にうつぶした。修学旅行が終りまだ一週間も経っていないのに、なんだか先輩たちの人間関係が微妙に変化している。私だけだろうか。健吾は全然気がついていないみたいだけど、たとえば轟先輩と立村先輩との間に流れる気安い雰囲気とか、清坂先輩に対してさりげなく椅子を勧めたり通路側を歩いたりとかして守っているようすとか。もともと立村先輩はレディー・ファーストをモットーとする人だから決して珍しいことではないのかもしれないけれども、かすかにその色合いが空色から夕焼け色に染まった風な雰囲気が漂っている。

「轟さん、俺も手伝おうか」

「いいよ、立村くん、それだったら半分、佐賀さんと一緒にコピーの手伝いしてもらえないかなあ。そっちの方を進めてくれると助かるんだ」

「わかった。そうだな。五台もあるんだよな」

——それは余計なお世話かもしれない。

「いいです、先輩、私がすべてやります」

本心を見抜かれていなければ、たぶん当然の返事。轟先輩は返してきた。

「委員長をこき使ってあげなさいよ」

いびつな柔らかい空気が揺れる。

立村先輩は私の隣のコピー機から、緑色のカバーをはがした。きつこちらはほとんど使用したことがなかったのだろう。埃が溜まっていた。電源を入れるとぎしぎしと機械が身体を整えるような音がした。しばらく使用されていなかったのだろう。

「音がずいぶんうるさいよな」

「はい」

会話が聞き取れないほどの大きさだったことを、私はあえて言わなかった。

「じゃあ半分、プリント貸してもらえないかな」

「はい」

ゆっくりと開きながら、立村先輩は横にぴたりと原稿を合わせ、慎重に枚数ボタンを選んでいった。B4の大きさを舌を出しつづけるコピー機に、何か話し掛けていたように見えた。

4

立村先輩イコール、梨南ちゃんの王子様。それ以上の関心はなかった。

一年の頃から梨南ちゃんのことを可愛がって、暇さえあるといろいろ話し掛け、さんざん酷い言葉をぶつけられてもいつも笑顔で梨南ちゃんの姿を探す人。評議委員会に入ってみてさらに思ったのは、梨南ちゃんに一番相応しい人。イコール、私とは全く共通点を見つけられない人。

ある程度私も、健吾から立村先輩という人がいかに風変わりであるかを聞いてはいた。なにせ、あの梨南ちゃんを懐かせるすべを持っている人なのだ。もっとすごいのは、梨南ちゃんがさんざんわがままを言って困らせても、それを楽しんでいるようなところが見え隠れする。私も八年間梨南ちゃんにつきあってきたけれど、最後まで彼女の行動を「楽しい」と思うことはできなかった。いや、もちろん友情らしいものとして認識はしてきたのかもしれないけれど、ある時期を境にそれが単なる勘違いであることに気づいてからは、もう二度と理解できない感情として捕らえるようになった。あの感覚を、プラスの方向で受け取る人がいること自体私には信じられなかった。

健吾も理解できないと言う。私の味方をしてくれる人はみなそうなのかもしれない。

はっきりしているのは、立村先輩が決して私と共感しあうことはないということだけだった。

全部コピーが終り、轟先輩が手際よく間に五十冊分のコピー本を束ね、あとはホチキスで留めるところまで差し掛かった時だった。すっとんきょうな声を上げた。

「ごめん、もうひとつ忘れてたわ」

「どうした？」

頭を抱える轟先輩。だんごむしっぽく見えた。

「表紙、忘れてたわよ、悪いけど教室に戻って持ってくるから」

「持ってきてくれるか？」

もちろん、もちろん、といった風に轟先輩は頷いた。

小走りに教室から出て行くのを立村先輩は黙って見送っていた。轟先輩のことをあんな風に見つめる人ではなかったと思う。なにかきっと、あったのだろう。覚えておいたほうがいいかもしれない。

これでお役ごめんというところだろうか。私は立村先輩の顔を見上げて尋ねた。

「私は、どうすればいいですか」

もういいよ、先にお帰り、みたいな言葉を期待していたのは認める。

たぶんいつもの立村先輩だったらそう言ってくれただろう。私と一秒だって顔を合わせていたとは思っていないはずだから。

「少し、いいかな。誰もいないしな」

口許をかすかにゆらすような笑みをもらすと、立村先輩は机にもたれた。コピー機のカバーをかけて、そのまま両手を置いた。立村先輩を背にする格好になっていた。なんとなくじっくり顔を見るのには抵抗があった。梨南ちゃんがわめくほど、立村先輩は不細工でもないし、むしろ整っている方に属すると思う。ただ、整いすぎて人間っぽく感じられず、あっちに言ってと言いたくなるような顔立ちというのもある。立村先輩はその系統だった。

「もし用事がないのでしたら帰ってよろしいですか」

「少しだけいいかな。あまり時間はかかんないから」

静かだけど、鍵をかちりと落としたような口調だった。

「この前の交流会準備の時のことだけど、確認しておきたいんだけどさ」

もう立村先輩は、笑みを浮かべていなかった。生身の人間なんだけど、少女漫画のキャラクターと同じような冷たい雰囲気、白いシャツと生白い顔からゆらぎ、浮かんでいた。

「なんで、杉本にああいうこと言ったのか、それを聞きたかったんだ」

「ああいうことって、なんですか」

口にしながら、とうとう来たか、そう覚悟していた。

「関崎に会うな、と言ったんだろう？ 評議委員会の名前を出して」

5

「申しわけありませんでした」

早いところ謝っておいたほうがあとあと面倒でないだろう。私は素直に頭を下げた。

「謝る必要はないよ。評議委員会で起こったことは俺が責任取ることになっているから、本当のことを知りたいだけなんだ」

立村先輩の口調は穏やかだった。

「新井林にも確認したんだが、あいつ、自分が悪いと一方的に言い募るだけでさ、らちがあかなかったんだ。それで他の二年に聞いて初めて、佐賀さんの話が出てきたというわけなんだ。それ、本当だろうか？」

「はい、そのとおりです」

本当のことを言えば、隠すこともないのだ。確かに私は梨南ちゃんに向けて、「学内に関崎さんが来ても、決して追いかけてたりしないで」というニュアンスのことを話したけれども、ちゃんと証人として駒方先生を置いたし、とりたてて梨南ちゃんも騒ぎ立てることはなかったし、無事に合同交流会最終打ち合わせは終了したしで、めでたしめでたしのはずだった。この点においては、私の失策ではないと考えている。二年評議全員の意見として、「なんとしても杉本から水鳥中 学生徒会の皆様をお守りしなくては！」という総意があって、そのために一番近かった私が話を持ちかけた、ただそれだけのことだ。もし他の先生たちに意見を聞いたとしても、それほど問題があるとは言われなかっただろう。評議委員会に関係のない人たちが、茶々をいれても迷惑だし、特に梨南ちゃんには前科がある。本当は健吾が直接、梨南ちゃんに話をするつもりだったらしいけれども、それは私が止めた。どんなに健吾が言葉を選んだとしても、今までの流れ上げんか腰にどうしてもなるだろうし、梨南ちゃんも健吾に対してだけは感情的になってしまわないとも限らない。また、その時に健吾がついうっかりと口走ったことを逆手に取られて「いじめないでけんかに勝つと言い張った奴がまたいじめをするとはね！」とせせら笑われたりしたら男の面子が立たないだろう。このあたりも考慮して、私が行動したというそれだけのことだ。

三年の先輩に話をしたら、すぐに却下されるのは目に見えている。特に立村先輩の梨南ちゃんびいきは誰もが知っている。でもそのひいきの引き倒しで結局、梨南ちゃんにはろくなことが起こらなかったのもまた事実。

「杉本はもう評議委員会には関係ないんだから、会う会わないを口出しするのは間違いじゃないかと思うんだけど、どう思う」

「いえ、梨南ちゃんは一度人を好きになったら、何をするかわかりません。八年間一緒にいた私がそう考えたんです」

私はゆっくりと言葉を選んだ。たぶんすぐ轟先輩が戻ってくるだろう。その時にあまりにも陰悪な雰囲気となっていたら、絶対怪しまれるだろう。今のところ女子の先輩たちにその事情はばれていないらしい。梨南ちゃんにしては珍しく告げ口もほとんどしなかったらしい。もちろん言い訳はしようと思えばいくらでもできるが面倒なことを遠ざけるにこしたことはない。

「立村先輩も、だから一度は、梨南ちゃんを関崎さんから引き離そうとしたんではないですか？」

思い切って口にしてみた。

「私もそれの方がお互いにいいと考えたからです」

「それはどうして？」

「迷惑をかけてしまい、せっかくの交流会がだめになったら、私の方が悔しいからです」

思わず失言してしまった。これは、禁句だ。慌てて取り繕う。

「私は評議委員になって、毎日が本当に楽しいんです。交流会の準備もそうですけれども、いろいろなことを自分たちの手で作り出していくことがこんなに面白って思ったのは初めてでした。立村先輩、私はずっと今まで、人にかばわれる立場でいました。でも、評議委員会ではかばわれないで、自分自身の意見を口に して、すぐにそれが取り上げられる、そんな面白さを知ること

ができたんです」

優等生っぽいお言葉をつらつらと並べた。本当の部分が八十パーセント。その一部には不純物が混じっていることも自覚済みだ。まっすぐ水鳥の街に繋がっていることも、ある一軒の書店へと糸が伸びていることも。

「他の人たちは知りません。でも、この交流会を成功させて、どうしても私、これからどんどん繋げていきたいってそう思うんです。それを、梨南ちゃんのような後先考えない行動をする人に壊されてしまうのだけは、どうしてもいやでした。友だちとしてもそうです。先輩ご存知ですか。梨南ちゃん、こんど問題を起こしたら、無条件で退学になるという噂を聞いています。E組でも面倒見切れない場合は公立に出すという話も噂として流れています。そうなったらもう、誰もかばいようがないんです。私、できることは精いっぱいやっておきたいんです」

一方的にまくし立ててしまった私。こういう姿を健吾の前では見せたことがない。あえて隠すようにしている。知っているのは、水鳥のあの一人だけだ。私の隠れた、もうひとつの顔を教えてくれた人。

「そう考えてくれるのは、ありがたいよ。佐賀さん、たださ」

一通り聞いてくれた後、立村先輩は無表情で問い返してきた。

「杉本が傷ついている可能性というのは、考えなかったのかなって思ったんだ」

「考えました。もちろん、じっくりと考えました。でも」

私はかみ締めておいた答えを、ゆっくりと答えた。

「本当のことをきちんとってあげるのが、友だちとして、当然のことだと思ったんです」

——友だち？

一瞬迷いが走った。すぐに打ち消した。言葉が飛行機雲みたいに少し途切れた。

「先輩、私も梨南ちゃんに対して残酷なことをしているというのは認めます」

ここで少し、低めておいたほうがいいだろう。私は扉に視線をやりたいのをがまんしつつ、呼吸を整えた。

「私がもし梨南ちゃんと同じ立場だったら、きっと関崎さんに会いたいだろうし、ほんの少しでも顔を見たいというのは当然だと思います。もし梨南ちゃんがふつうの人だったら、きっと会わせてあげてました」

——ふつうの人。

心に隙間なく埋めこまれる言葉。

立村先輩はぴくりともせず聞いていた。

「梨南ちゃんがもし関崎さんと会ったとしたら、きっと露骨に愛情表現をして、大変なことになるのは目に見えています」

「大変なことってなんだ」

「新井林くんと同じようなことになる可能性です」

どこまで話しておけばいいのだろうか。以前立村先輩に、何かの折りに話したことがあるけれ

ども、男子は忘れっぽいからきっと覚えていないだろう。繰り返しておくことにした。

「立村先輩は梨南ちゃんのことを良くご存知ですけど、小学校時代のことはあまり知らないのではないかと思うのですが」

「噂だけだな、それと本人の自己申告」

「梨南ちゃんは、一度人を好きになると、酷いことをたくさんして確認しようとするんです。こうしても、ああしても、決して逃げないんだって確認したいみたいなんです。私はそれ、早い段階で気づいていたのでそう思うことができましたけど、関崎さんが同じように思ってくれる可能性は少ないと思うんです」

「確かにな」 言葉すくなくに相槌を返す立村先輩。

「わかってくれる人同士だったらいいんですけど、全く知らない人に同じようなことをされたら交流会が台無しになってしまいます。口で言ってわかる人ならいいですけど、梨南ちゃんには通じないんです。説得してもだめなんです。梨南ちゃんに一番いいのは、命令することなんです。大人の人をきちんと間に挟んで、ぐうの音も出ないようなところで正論で説明するのが一番いいんです。そうしたら」

言葉を切った。少し立村先輩の目が釣りあがっているように見えたからだった。

「梨南ちゃんは、私の言うこと決して聞きません。馬鹿にしている人のことは決して言うこと聞かないんです。でも、大人の人とか、納得する人とか、あと約束したことについてはすぐに頷いてくれます。廊下の右側を歩くとか、お箸は右手で持つとか。規則が大好きなんです梨南ちゃんって。だからちゃんところから、こうしなくてはいけないという規則を決めてあげると、文句言いながらもすぐにやってくれるんです」

「それでか」

「はい。だから、駒方先生の前でちゃんと説明しました。関崎さんが迷惑だし、これ以上問題起こしたら梨南ちゃんも退学になるし、いいことなんて何もないので、やめてくださいって」

「それで納得したのか」

「はい、前もって立村先輩が梨南ちゃんとお約束してくださってましたから、楽でした」

立村先輩は黙って目の前の畳んだコピー紙を一枚とって、すかして見た。

「約束って」

「梨南ちゃんが言ってました。立村先輩と約束したって。ちゃんと関崎さんとは学校にいる間、決して会わないって。理不尽な約束でも、梨南ちゃんは一度結んだら、絶対に破りません」

立村先輩は大きく頷いた。

「杉本は約束を守るからな」

6

「じゃあもうひとつ聞くけど、佐賀さん」

立ち上がりパイプ椅子を畳むと、立村先輩は私の方に近づいてきた。まだカバーをかけていないもう一台のコピー機に片手をかけ、じっと私を見つめた。思わず私も髪の毛に手を当ててしま

った。どうしようかな、って思った時につい出てしまうくせだった。

「率直に言って、杉本をどうすれば、一番いいと思うかな。俺も正直なところ、女子の気持ちがよくわからないし、その辺佐賀さんがもし、杉本を守る立場だったとしたらどうしてたと思う？

評議委員会という立場を別として」

「評議委員会という立場？」

言われている意味がわからず、私は問い返した。立村先輩は目を伏せてうんうんと頷き、またしっかりと顔を上げた。

「ずっと前にさ、佐賀さん言ってただろ。杉本は赤ちゃんだから、同類の子たちと一緒に置いておいたほうがいいとかさ。結果的に今の杉本の扱いは、佐賀さんの言う通りになったわけだよな」

この先輩、思ったよりも頭がいい人かもしれない。私は用心深く顔を見返した。もちろん笑みを絶やさないように。

「梨南ちゃんがかわらないとわからないことだと思います」

「そうだな」

短く切って、質問の方向を変更してきた。

「じゃあ質問変えようか。もし佐賀さんが、杉本の性格を直すことができるとしたら、どういう風にやる？」

「梨南ちゃんの性格を、直すんですか？」

「かなり迷惑かけられたらしいと聞いてるからな。佐賀さんだったら経験上いろいろ言えるかなと思ってさ」

「あの、ええと」

どもりながら言葉を搜した。いったい何を目的でこんなことを聞いてくるんだろう。お気に入りの梨南ちゃんを傷つけられたから？ それとも先輩としてのプライドから？ 単純に梨南ちゃんの扱いについて悩んでいるから？ どちらでもないのだろうか。立村先輩は言葉を発する口許だけ動かし、じっとコピー機に張り付いたままだった。人間に戻らない、銅像のままだった。

「あの、ありのままの梨南ちゃんでもいいのよって、言います」

あたりさわりのない言葉で、そして、一番逃げ場のある言葉。奇麗事をまずは口にした。

「ありのままの杉本？」

「はい、だって、梨南ちゃんは、いつもなれない自分にばかりなろうとして、傷ついてます」

違う、もっと違う意味がある。立村先輩の銅像状態はまだ一切変わらなかった。

「なれない自分にばかり、って何になろうとしてるんだ？」

「うまくいえないんですけど、梨南ちゃんは新井林くんと同等の人間になりたくて、ならないんだって思うんです」

「新井林と同じ？」

立村先輩の言葉は反復するだけ、意味が伝わってこない。焦った。

「はい、梨南ちゃんは新井林くんより上の人以外、好きになれないんです」

秘めておきたかったことなのに、喉元に指をぐいと突き刺されたみたいに、脅されて吐き出し

てしまっている。

「新井林以上の人以外って？」

「はい、梨南ちゃんがなぜ、関崎さんを好きになったかっていうと、新井林くんに関崎さんが持久走で勝ったからなんです」

——なんで言ってしまったんだろう。

私だけが勘付いた秘密。

八年間梨南ちゃんを覗つづけてきた私だから理解できる、たったひとつの秘密。

立村先輩はやっと人間にもどったらしく、こっくりと頷いた。

「けど、新井林くんを始めとする人たちは、梨南ちゃんが好きになれないんです。だから、関崎さんもきっと、好きになれないんだと思います。梨南ちゃんを好きになれる人は、きっと新井林くんたちからすると軽蔑されるような人であって、それでもいいんだってこと梨南ちゃんが納得しない限り、きっと無理なんだって思います」

言葉はすらすら出たように聞こえただろう。立村先輩の表情に和らぎが浮かんだのはたぶんその通りだからかも。私が今、心に秘めていた言葉を吐き出したことに、気がついているのだろうか。

——なんで立村先輩なんかに。

胸一杯、悔しさが溢れてきた。飲み込み、必死にこらえた。吐き出せれば楽なのに、健吾ではだめだった。私のことを理解していると思い込んでいる健吾、本当の私を健吾は知らない。健吾よりずっと、遠くを見通して、梨南ちゃんをどうすれば一番迷惑にならないで済むかを処理できる自分を知らない。知られてはいけない。私は健吾にとって、守らなくてはならないかけがえない恋人なのだろう。おしゃかさまの掌から飛び出たくてならない孫悟空のように、言葉だけが一気に溢れた。とめどなく。

立村先輩はしばらく考え込んだ後、「ありがとう」と答えてくれた。

「佐賀さんのおかげで、だいたい事情が把握できた。でもそのことはまだ、杉本に言わないでくれないか。佐賀さんにとぼっちりがくるとまずいから、俺が折を見て話す。それと、前から言おうと思っていたんだけどさ。佐川とのことは、今の段階では新井林に言わない。その点は安心してもらっていいから」

すうっと、背中に冷えたものが走る。

首を締め付けられたような苦しさ。立村先輩はまだ私を見据えたままだった。もちろん柔らかい表情のままだけど、口許には明らかにかちりとした硬いものを見た。梨南ちゃんのことを話す時、見つめる時、いつもそう言う口もとをしていた。梨南ちゃんのためならば人を殴ることもできる人だったっけ。忘れていた。梨南ちゃんのためだったら、濡れ衣をかけられても平気な人なのだ。

轟先輩の戻ってくる気配はしなかった。私は自分が追い詰められていることに、いまさらながら気がついた。

——なぜ、そう問い詰めるんだろう？

当り障りのないように言葉を返せばいいはずなのに。

そうできるのが私なのに。

どうすればいいんだろう。

立村先輩は微動だにしなかった。うまく言えないけれど、先輩の身体周りから立つ空気が全く揺れていなかった。部屋の湿気か、それとも匂いか、わからない。服の揺れも呼吸の時に動く喉も、なにひとつ動いていないように見えた。私以外の誰もが、息をしない無機物化したかようだった。だんだん凍り付いていきそうだった。もう少しで、夏なのに。喉が詰まって、言葉がうまくでなかった。

「言ってもいいです。私」

知らず知らずのうちに湧き出る私の負けん気。どうして知らん振りできなくなったのだろう。健吾の前では決して顔を出さないのに、どうして立村先輩や梨南ちゃん、あの人の前ではするんと出てしまうのだろう。自分がコントロールできない強気な私。

「もし先輩が、新井林くんにそのことを話されたとしても、私は困りませんから」

立村先輩は少し驚いた風だった。私がもう少しおどおどすると思っていたのかもしれない。もしかしたら梨南ちゃんだったらそうしてたかもしれない。かつての私だったら泣きそうになっていたかもしれない。でも、もう私は梨南ちゃんが横取りした席を奪え返した自分。もう怖いものはなにもない。

「学校を退学させられるようなことをしたなら、私も反省します。他校の生徒と殴り合いのけんかをするとかだったらまた問題になるかもしれませんが、私、梨南ちゃんのように恋愛だけが全てではありませんから、もし知られても平気です」

少しはす向かいとなり立村先輩は数秒黙っていた。私の眼を探るように見つめた後、
「俺も去年の段階で退学食らっていてもおかしくない立場だけどさ、ばれたらばれたでその時だと思っているけどな」

「もしおっしゃりたいんでしたら、どうぞご自由になさっていただいて結構です」

ささやかな笑顔だけは忘れなかった。どんなに心が震えていても、両足をつけたまますっくと立ち、微笑むこと。それが私の懐剣。

「わかった、もう戻っていいよ。ありがとう」

全身力がすうっと抜けていき、あやうく足が震えそうになった。なんであの立村先輩の前で、ふらふらしてしまうのか自分がわからなくていらだたしかった。立村先輩は扉を開けて廊下を覗き込み、

「轟さんが戻ってきたみたいだし、あとはいいよ」

解放してくれた。

ここでさっさと理由をつけて帰ってもいいのだけれども、あのことを言われた以上もう少し様子を見た方がいいとも思った。

なんで私は、あの立村先輩に対してあそこまでびくついてしまったのか、理由がわからなかった。

単なる梨南ちゃんの王子様で、評議委員長で、でも評価は今ひとつで、私自身も健吾より下のランクの人だと認識していた人。

たまたま、私の窮地を見られてしまったという程度のことだ。

——もし、健吾に知られたらどうするんだろう？

想像してみる。立村先輩があの人……水鳥中学の佐川さん……と私の付き合いを知っているのは明白だ。佐川さんが裏で一生懸命手を回してくれたおかげで、今のところ誰にもばれなくて済んでいる。立村先輩は確かに私と佐川さんが会っていることを気づいていたようだけど、たまたま別の身代わりの人が出てきてくれたおかげで健吾にも怪しまれず、かえって情報源として重宝がられている。佐川さんにも彼女がいて、私にも彼氏がいて、ただたまたま水鳥中学生徒会とのルートができたということ。健吾と佐川さんとの繋がりを受け持つ私。立村先輩が関崎さんを通じて繋がっているのは別ルートで手を回すことができたというそれだけだ。だからこそ、梨南ちゃんを引き離すという荒業も私ではなく健吾の方から発案できたわけだった。

——なんで隠しとおせなかったんだろう。

立村先輩にかまをかけられた時、「またそんな嘘言うんですか！ いいかげんにしてください！」とどうして言い返せなかったのか。

それができない私ではないはずだった。

最初から、覚悟はしていたはずだった。逃げ場のない場所をしっかりと見られてしまった三月のあの日、もしも健吾に知られてしまったらどうすればいいんだろうと最初はおびえていた。なのに、四月以降自分の中で確実に変化が起こってきている。目の前の巨大な壁を、指先でつんとつついたとたんがら崩れた瞬間を、私は確かに見た。梨南ちゃんも、健吾も、すべては張子の虎。私が恐れるには足りない、七年間かけられていた魔法を、私は自分で解いた。きっかけは梨南ちゃんの本性を見出した時だった。

今まではずっと梨南ちゃんに復讐されるのが怖かった。私の大好きな服の色も、可愛い文房具の形も、エレクトーンの音色も、「くだらない」と見下される理由がどうしてもわからなかった。なんで健吾に逆らわなくてはならないのか、どうして男子が馬鹿に見えるのか、私には理解できなかった。それでもあわせないと、もっと大きなものに噛み付かれる恐怖に取り付かれていた。

でも卒業式の予行演習の時、無意識に自分の本能通り、私は梨南ちゃんを捨てた。

梨南ちゃんは「裏切った」と言ったけどその通りだった。

予想通りの復讐が怒涛のように降ってきた。今までの私だったら、恐怖で動けなくなっているはずだった。クラスの女子たちから無視されることも、梨南ちゃんに嫌われることも、本当だっ

たら恐ろしいことのはずだった。味方は健吾だけのはずだった。なのに、心地よく過ごしている自分がいた。どうせ嫌われてしまったのならばしかたない。そう思って言いたいことを言ったりしてただけなのに、だんだん自分の周りに味方が増えてきて、そっと守ってくれるようになったのはなぜなのだろうか。気がつけば、もう梨南ちゃんが生まれたばかりの子猫にしか見えなくなっていた。嫌われたら自分がゼロになる。そう思い込んでおびえていた相手が、実は劣等感の塊で何もできない、全てを持つ私に嫉妬していた人間であることを理解した。

評議委員という場所。 本当は私が入っていくに相応しい場所だった。

梨南ちゃんは確かに頭がいい。成績はいい。でも、それだけだ。

お母さんが「あの子は施設の、成長の少し遅れている子とそっくりだから」と呟いていた。たくさんそういうタイプの子たちを見てきたお母さんの言葉を当時の私は理解できなかった。でも同じことを、今の私は感じている。梨南ちゃんは本当のことという、自分で周りを仕切るよりも、同じようなタイプの子たちの中でそっと真綿に包まれて守られている方が向いている子なのだ。そして、私は本当のことならば、梨南ちゃんに関わることなく、遠めで眺めていればいい。そういうはずだった。

なのに梨南ちゃんは、私と健吾のもともといた場所に、どうしても割り込みたいと願った。

私の座っている椅子を奪い取ろうとした。

ピアノをどうしても上手に覚えることができなくて挫折したから、エレクトーンをマスターできた私に対して嫉妬した。それだけのこと。

可愛らしい文房具を持つことをお父さんお母さんに許されず、しかたなく自分の持っている真面目な格好のものを正当化したい、それだけのこと。

要は梨南ちゃんが、もといた場所に戻って、その場所と周りの人々に相応しい行いをしていれば、すべてが丸く収まる、それだけのことだ。

どんなに健吾に好きになってほしいとねだっても、梨南ちゃんによってくるのは同じような嫌われ者の男子たちばかりだった。「ありのままの梨南ちゃん」を好きになってくれるのは、みんなから遠ざけられるタイプの男子ばかりだ。それでいいんじゃないかと私は思えるのだけれども、梨南ちゃんにそれは耐えられならしい。私はちっともいいと思わないけれど、梨南ちゃんが楽しければそういう男子を選べばよい。たとえば立村先輩のようにしつこく面倒を見てくれる人だっているわけだ。私はちっとも立村先輩なんてかっこいいなんて思わないけれど、人の好みはそれぞれだ。ああいうタイプが向いていると思えば、手を伸ばせばいい。無理に健吾を振り向かせようとして、永遠に嫌われつづけるよりは楽なのに。

関崎さんを好きなのは、健吾が評価してくれるから。

立村先輩を受け入れないのは、健吾が見下しているから。

そうだ、健吾をすべてのものさしとして生きている梨南ちゃんにとって、自分なんてちっともない。

私は健吾の机にそっと片手を置いた。

必死に守ってくれたことは感謝している。こんなに大切に育てて、私は満足すべきなのだろう。評議委員会に入らなければ、きっといい子のはるみで十分満足できたのだろう。おしとやかで、それでいて大人しい子。今まで私に与えられた今までの称号。

もしかしたら、佐川さんのことを知られてしまうかもしれないし、その時は直接恨みを受けることも覚悟しなくてはならない。

怖くなかった。

明日のエレクトーンお稽古帰り道、駅前の書店に寄る約束をしている。今度の交流会について、裏の打ち合わせをひそかに進めるつもりだった。佐川さんはきっと、私に本当の答えを導きだしてくれるだろう。

——あの人に、相談しなくては。

健吾が駆け込んできた教室の扉に手を振りながら、私はこれからのことについて相談すべきことを整理しはじめた。立村先輩が私にゆさぶりをかけてきたことについて、一番的確な答えを出してくれるのはあの人しかいないと、私は知っているから。そう、たとえあの人のが成績がトップクラスでなくても、工業高校に進学予定だとしても、梨南ちゃんとは違う、気にならない。

健吾は、私のものさしではない。私は、私のものさしで選ぶ。

——梨南ちゃんとは、違う。

「霧島くん、私も、授業中、してしまったことがあるのよ」

凜と言い放った佐賀会長の言葉を、僕は息を止めたまま聞いていた。

「誰にいじめられたわけでもないし、すべては私の責任だったわ。ちゃんとトイレに行きたいと先生に言えばよかったのに、言わなくてそのまま座ったまましてしまったの。自己責任よ」

「会長、それは」

まったく表情を変えず、気品ある態度を崩さない佐賀会長。言葉が流れてくるのが信じられない内容だ。

「でも、クラスの人たちはみなやさしい人ばかりだったし、それほど引きずらないですんだの。そうね、今思えば私は、運がよかったの」

ゆっくりと言葉を選ぶ。他の女子たちに比べて、礼儀たたくそれだけで気持ちよいこの態度。

僕の頭の中にある、「女子」とはまったく異なる存在だった。

その佐賀さんが、まさか。

「渋谷先輩をかばうための嘘ですよ」

つっぱねたかったが、佐賀会長は首を振った。

「新井林くんに聞いてみればわかるわ。本当よ」

——嘘だろ？ だってまさかだろ？ あの会長が。

僕の概念では絶対にありえないことだった。僕の知っている限り佐賀会長以上の女子は存在しない。

いや、彼女は「女子」という概念から外すべき存在だった。

小学生レベルの漢字もルビを振らないと読めない頭の悪い女子が姉だった。青大附中には裏金を使って入学したもののついていけなかった馬鹿な姉。結局学校からも見放され、現在は底辺私立女子高に通っている。我が家の恥だ。さっさと卒業して、さっさと結婚して、霧島家から出てってもらいたい。誰もがそう思っているはずだ。

だから女子に幻想を持ったことは、生まれてこのかた一度もなかった。

僕に手紙を送ったり、つきあいをかけてきたりする女子に対しても、まったく感情が動かなかった。

——どうせ、みな、うちの姉貴みたいにばかばかりだ。

馬鹿な頭を隠すために、懸命に威張ってごまかそうとし、結局ばれてしまうのが落ちだ。

だから僕は、頭の悪い女子との交流を一切断っていた。しかたなく生徒会がらみで付き合いざるを得ない女子もいないわけではないが、それなりにきっちりつけじめをつけるようにしてきた。そうだ、まさに。だから、だ。

——会長が、もらしたことがある。まさか。

この発端は、一年上の先輩で現在書記を担当している渋谷先輩の大失態だった。

僕は下級生ということもあり仔細を確認したわけではないが、噂によるとかなり真実味のある情報が流れてきていた。

まず、渋谷先輩は修学旅行四日目に、ホテルの客室にていわゆる「おねしょ」をしでかしたそう。それならよくあることだろう。その後、同じ部屋の女子に頼み込み入れ替わったという。どうしてばれたかという、渋谷先輩は一日目にも同じ失敗をしていて、その際に布団を濡れたまま旅館にしまいこみ、知らん顔をしようとしていたからだという。

話を簡単にまとめただけでも、まったくもって「馬鹿」としか言いようがない。

いまだに夜尿症が治っていない、それだけでも情けない話だがそれは置いておく。

保健の都築先生にはすでにばれていたらしく、その日の帰り、渋谷先輩は呼び止められ弁償およびその行為について厳しく叱責されたそうである。もちろんばれないように気遣いはしていたようだが、そんなのすぐにばれるだろう。次の日から一週間ほど、渋谷先輩は学校を休み、ことは公となったわけだ。

つまり、「自分の失敗を人に押し付けて、しかも観ない振りをしようとした」その態度を責められたということだ。

夜尿症の問題うんぬんではない。人間性の問題だ。

僕は別にそのこと自体を責める気はない。だが、そういう人格の人間と一緒に仕事をするのが苦痛だっただけだ。

さらに言うなら、僕を直撃していかにも能力がありげな態度をとる、それが気に入らないだけだ。

能力の有り無しはすでに、僕にははっきり浮かび上がっているというのに。

——彼女は、姉貴と同じ場所の人間だ。

そのことに女子は一切気付こうとしない。それどころか持ち上げようとする。能力があるのだと嘘で塗り固めようとする。

結局そういう行為が続いた結果、評議委員会が生徒会に事実上の吸収をされてしまった事実を、誰も見つめようとする。

だから僕は、評議委員会の二の舞を踏ませたくない、そう考えていたのだ。

それゆえに、僕は渋谷先輩にくぎを刺しておく必要性を感じていた。きちんと自分のいるべきポジションに戻るべく、きちんと助言をしていたに過ぎない。彼女が書記で、僕が副会長である以上、多少の力差はあるし、それは佐賀会長もわかってくれているようだ。しかし、当の本人が一年先輩という事実を肩にきて、威張り腐った口調でいろいろと命令をする。それは違うのではないだろうかと何度か僕は言い返したが、例の事件が起こるまではまったくもって、認めようとしなかった。

僕がつい口走ってしまったのは、いわば必然といえよう。

——お言葉ですが、自分の過ちをきちんと認められずしかも人に押し付けようとするような

人と、僕は仕事をしたくありません。僕は、渋谷先輩と一緒に生徒会室にいることに耐えられません。もしこれから先、共同作業を一緒に行いたいならば、自分の立場を反省して、その上でこれからのことを考えてください。先輩であることと、能力の差とは、関係ありません。

僕が、能力あるものとしてみとめるのは唯一、佐賀先輩だけだ。

きちんと僕より力がないことを素直に認めるだけではない。いろいろな人たちに好かれ、大切に扱われているのがその証拠だ。

佐賀先輩は男子をきちんと敬うだけの礼儀をわきまえ、それ以上に僕たち後輩の能力をきちんと認め、好きにやらせてくれている。

いわば「象徴会長」と言えるだろう。彼女は象徴であることにより、生徒会を守る能力を持っているのだ。決して渋谷先輩のようにずうずうしく割り込んでいって、自分がすごいとか頭がいいとか言いふらそうとしない。

そんな佐賀会長が、まさか。

立ち直れないくらいの衝撃だった。僕は半分口を開けていたと思う。

「佐賀会長、僕は」

「そういうことなの。私は副会長のお姉さんを知っているし、正直、つらいこともありました。だから、お姉さんと同じ風に渋谷さんが見えてしまうのもわかる気がします。それは、私もよくわかります」

そうか、姉貴をこの人はよく知っていたのだ。一時期評議委員だったはずだし、あの無能姉貴にずいぶん嫌がらせをされたらしい。馬鹿は馬鹿同士くっついたがる習性だとかで、結局は同年代の女子と自殺を企て……さっさと死んでくれれば丸くおさまったんだが、こうやって注意を引いて同情を求める態度もむかつくが……トラブルを最後の最後まで悪化させて追い出された。ざまあみろと僕は面と向かって何度も言ってやったが、まったく気付く気配すらない。

「でも、だからといって、渋谷さんを同じ扱いとしてしまうのはつらいわ。だって誰もが同じ失敗をしてきたかもしれないのに」

「会長、そういうわけでは」

僕が言いかけると、悲しそうなまなざしで佐賀会長は続けた。

「もちろん私も、副会長にとって渋谷さんが迷惑だということも感じないわけではないの。ですから、なんとかしたいとは思っているんです。たとえば、彼女に直接、書記以上の任務を求めないでほしいとか、霧島副会長の業務に手を出さないでほしいとか。もちろんそれは、生徒会長として言うつもりなの。それは仕事ですもの。でも、彼女の性格をうんぬんするのは間違っていると思うわ。だって、直しようがないんですもの」

「直しようがない？」

努力しないだけではないのかと尋ねたいが、相手は佐賀会長だ。黙っている。

「どんなにほしくても手に入らない人たちというのがいるの。私、それを小学校時代とっても感じてきたの。現在与えられている評価で十分なのに、どうしてもそれ以上に認めてもらいたがる人がいるの。でも、そんなもの、誰も与えたいとは思わないから自分たちで我慢してほしいとい

うしかないの。それを嫌がった人たちが暴れるだけ暴れて、結局壊してしまったのが評議委員会だったと思うの」

「佐賀会長、僕もそう思います」

「渋谷さんは、書記の仕事をするだけならば、十分能力がある人だと思うの。だからそれ以上の仕事に手を出さないという約束さえしてもらえれば、かえって霧島くんの役には立つはずよ。私、それは確信しているの。友だちとしてではなくて、役員としての評価として」

「まあ、一応先輩ですからね」

「それだけまず我慢してほしいの。その上で、改めて私の方が渋谷さんに言います。書記としての職務だけまっとうしてと伝えます。そうすれば、いいでしょう？ ビジネスとして、割り切れるでしょう？」

僕はしばらく黙っていた。目の前で涼やかに語りつづける会長の瞳に見とれていた。

——こんなに完璧な人なのに。

「そのかわり、霧島副会長にもお願いしたいの」

「何をですか」

「もう二度と、修学旅行関係のことで、彼女を責めないでほしいの」

ぐさりと来た。思考停止した。

「私もこういう話をするのは恥ずかしいけれど、霧島副会長ならわかっていただけると信じてるから言うわ」

「僕がですか」

「そう。私も五年生の時に失敗した時以来、たまに言われるの。五年の時におもしろしくせになって。恥ずかしいわ。でも本当のことだから言い返せないのよ。ちゃんとトイレに行きたいと言わなかった私が悪いんだとわかっているから、責められているようで惨めなの。でもね、あとで新井林くんたちから聞いたけど、男子同士でそういうやりとりはそれほど重いものではないそうね。だから、あまり気兼ねなく言ってしまうのかもしれないわ。でも女子にとって、その言葉は死になさいというのと同じ意味合いを持つの」

「自己責任のくせにですか」

まずい、会長を責めてしまうように聞こえる。会長は気にしないように見えた。

「そうなの。だって恥ずかしいもの。お手洗に行きたいというところがばれてしまうことも恥ずかしいの。それに渋谷さんの場合は、自分でコントロールできないところでの失敗よ」

「違うでしょうそれは。僕も都築先生から聞きましたが、普通夜尿症をもつ人は前もって、先生に報告する義務があるそうです。僕の通っていた小学校でもありましたが、修学旅行の時はきちんと報告していたはずです。夜中に起こしてトイレに連れて行くというのも仕事としてあるそうです。それを怠ったというだけで、まず自己管理を責められるべきでしょう」

「霧島副会長、そうね。それはその通りね」

頷いた会長は小首を傾げ、そっと耳元の髪の毛に触れた。

「女子としては、たぶん知られなくなかったのねと思うけれど、自己管理をする上では渋谷さんは間違いを犯したわ。報告義務を怠ったことについては私もかばえないわ」

「ですよ、だからですよ。僕が言いたいのは」

まくし立てた。

「僕は渋谷先輩が布団に地図を描いた点においてはそれほど追求するつもりもありません。トイレットコントロールのしつけができていない情けない人だとは思いますが、それは僕と関係ないところです。しかし、自分のしたことに責任が持てず人に物を押し付け、しかも自分の保身しか考えていない渋谷先輩の言動を、僕は生徒会役員としてどうしても許すことができないんです」

「そうね、霧島副会長は、きっと渋谷さん自身のことが好きでないのね」

「ええ、大嫌いですよ、無能な女子はただでさえ嫌いですからね」

「それならば、役員としての仕事の中でのみ責めればいいわ。それならば私は止めないから。ただ、修学旅行の件は、生徒会役員としての失敗ではないわ。三年の一個人、一女子としての、失敗なの。それを忘れてはいけないのよ。一個人の失敗をどういう理由があろうとも、仕事に絡めて責める権利は、霧島副会長にはなくてよ」

佐賀会長の言う通りだ。残念ながら言い返す言葉が見当たらない。

「わかりました。その件については反省します。申し訳ありません。その代わり、生徒会役員としての枠を越えた行動をされた時には、僕はためらうことなく、抗議しますので、その旨お忘れなきよう」

威厳を保つように言ってみた。佐賀会長も頷いた。相変わらずの静かな微笑みが残っていた。

「それとひとつだけ、僕なりの意見を伝えておきたいのですが」

「なあに？」

やんわりと、あどけない声。ふとこの瞬間、火がともされたような気がした。

——今こそ、言う時だ。

僕が渋谷先輩に発した言葉の多くは、おそらく「修学旅行でのおねしょ」に絡めてののしったように伝わっているのだろう。佐賀会長がいきなり、自分の失禁経験を告白したのも、そこに絡んでいるのだろう。もしこれが佐賀会長の言葉でなければ、僕も無理に訂正を必要とは思わなかっただろう。実際、姉の同級生で評議委員だったという女子の先輩も……どう考えてもしそうにない顔しているまともな人に見えた……五年の時教室で失態を犯したというし、その段階で僕は彼女に対する尊敬の念をなくした。所詮、ただの頭の悪い女子と認識したに過ぎない。しかし、佐賀会長に関しては、なぜかそのランク引き下げが行われなかった。それどころかむしろ、僕という男子に対して堂々と言い放った態度がりりしく、むしろ心地よく感じた。

そんな風を感じられた女子は、佐賀会長しかいなかった。

それはすなわち。

「僕は、佐賀会長のことが好きです」

一息に告げた。

「仮に、渋谷先輩の行為が佐賀会長であったとしても、僕は佐賀会長のことが一人の女子として好きという気持ちは変わりません。半年後の改選で僕が佐賀会長以上の力を得た時に、ぜひ一度、ご検討ください。それまではきちんと、副会長としての仕事をやり遂げます。以上、よろしくお願いいたします」

言った後、顔が火照ってきた。心臓がどきまきしている。かばんを持ち、僕は慌てて生徒会室を飛び出した。

——とうとう言ってしまった……。

すでに佐賀会長には、評議委員長の新井林先輩がいるというのにだ。

もちろん、思惑がまったくないわけではない。しつこく渋谷先輩が僕に張り付くのをやめさせてほしいから、カモフラージュというのも考えなかったわけではない。だが、新井林先輩率いる評議委員会を不要に敵にする気もない。となると、僕の告白は決してプラスのものではなかったはずだ。それでも、言わずにはいられなかった。

この世の中で女子ほど馬鹿な存在はないと思ってきた。自分で責任も取れず、何も考えることができず、男子に甘んじられて何一つ片付けられない無能な存在。だから男尊女卑と呼ばれる思想が存在するのだし、それを否定できないのならば素直に言うことを聞いて迷惑をかけるなといったかった。僕の馬鹿な姉もそうだ。あんなに能力がなく、それでいて自分を認めてもらいたがる醜さに、殺意すら感じていた。だが、生徒会に入り、僕は初めて、どんなしくじりをしていてもまったく価値の変わらない女子と出会うことができたのだ。姉貴を初めとする馬鹿な女子と同じ「おねしょ・おもらし」の失敗をしているにもかかわらず、動揺せず、堂々と認めて、心まっすぐに生きている女子と出会えた。それがたとえ、一年上であろうともかまわない。女子以上の女子、完璧な女子だった。

この人以上の存在は、絶対にありえない。

もしかしたらもう二度と、出会えないかもしれない。

腐った女子だらけの中で、たったひとり見つけた完璧な輝きを、たとえ先約済みと呼ばれようが決して失うわけにはいかない。

——改選で、僕は生徒会長となる。その日にはきっと。

——終——

ナミーががたがた震えていた。

早く、着替えさせなくちゃ。

「ナミー、一度、お風呂場に行こう？」

隣でいびきをかきながら眠っているハルに聞こえないように、私は小さな声でささやいた。

浴衣姿で、足元が少しかかっている。汗をかいたわけじゃない。原因はわかっている。

——そうだよ、シート、もってくるわけ、ないよね。

私はすばやくかばんから自分の着替えを取り出した。

「少しシャワー浴びた方がいいと思うんだ」

「そんなことできるわけないでしょ！」

とがった声で返事をするナミー。きっとパニックに陥りそうなのをこらえているに違いない。ナミーはもともと、そういう子だ。最初は自分がしたことを決して認めたがらない。きっとジュースをこぼしたとか、いろいろな言い訳をするに違いない。でも、その時期が過ぎてから、初めて泣く。きっと受け入れられないんだと私は思う。

でも、確かにそう。今ぐっすり眠りつづけているハルが、目を覚ましてしまうかもしれない。

「でも、ぬれてたらまずいよね、先生のところに報告に行こうか」

「そんなこと、できるわけないじゃない！」

小声で、それでもきっとナミーは言い返した。

「そうか、そうだよ」

私も納得した。きっとそうなのだ。ナミーはどんなことがあっても認めたくないのだ。

十五歳、おねしょが直らない自分を。

私はすばやく、ナミーの浴衣と自分のとを取り替えた。ナミーも放心状態からだいぶ立ち直ったようで、

「私、私」

何度もつぶやいた。におっている。これだと確実にばれてしまうだろう。量も相当なものだ。それほど飲み物を取ったわけでもないのに。でも病気だからしかたないのだ。ナミーを責められない。

たとえばおもらし、これは途中で「トイレに行きます」と言わなかった自己責任。

だから私は同情しない。

だけど、おねしょは違う。

どんなに気を遣ったって、どんなに水を控えたって、やっちゃうときはやっちゃうのだ。

五年くらい病院に通っていたけど、それでもだめだってことは。

ナミーを責めるわけにはいかない。

だけど学校はそんなに甘くない。みんなナミーの自己管理がなってないからだとか、たらすなんて気持ち悪いとか、いろいろと悪口を言うに決まっている。

特に修学旅行四日目のおねしょ。これは言い訳が見つからない。

「なんとかするわよ、ナミー、とにかく私の言う通りにして」

ナミーはこくっとうなづき、下着とパットを持って、トイレに駆け込んだ。

——なんとかすると、言っても、どうしよう。

まずはかけ布団を重ねた。これはまずい。びしょり。急いで処置しないとまずいんだけど、でもハルがいる以上大きな音は出せない。

——ハルにだけは知られたくないって言ってるもんね。

ハルは気持ちよさそうにおねむしている。

もし私ひとりだけだったら、ある程度ごまかせる。大急ぎでシーツをもみ洗いし乾かし、ぎりぎりまで乾かして、あとはジュースを思いっきりこぼす。その後で「先生ごめんなさい」と言うのがセオリー。

あと、もうひとつの方法が、私とナミーとの入れ替わり。つまり、おねしょは私の仕業にするという方法。

私がやっちゃったってことで、直接先生のところに言いに行く。そうすればナミーは無傷で済む。私は生まれてこのかたおねしょもおもらしもやったことがないし、ちょっと説得力がないかもしれないけども、まあ最後の夜だしごめんなさいと泣いて謝ればなんとかなる。

「ナミー？」

着替えたナミーはうつむいて、しょんぼりと出てきた。ぐっしょり濡れたままの浴衣は私のに換えたので、見た目何があったとも思えないけれども。

「私ちゃんと、水控えたわよ。お茶も飲まなかったわよ。何もしなかったわよ！」

「わかってる、ナミー」

「私、ちゃんとしたのよ。きちんとしたのよ」

「ナミーは悪くないわよ」

あの日と同じだった。ナミーの家に初めて泊まりおしゃべりをした夜のことで、気がつくとも床までしっとりぬれていた布団にびっくりして、慌てて起こした日のこと。目の前でお母さんにお尻を叩かれてたこと。泣きじゃくって、濡れたパジャマのままで「私ちゃんと、薬飲んだ、ちゃんと、私」言い訳していたナミー。

きつつらいんだと思う。

きっとみじめなんだと思う。

私は学校でナミーのもっていたものを全部取り上げてしまったわけだし、さらにどんどんいろんなものを手に入れている。だけどナミーは最初からあれしかなかった。あの日、私は、すべてを受け入れる覚悟をした。

ナミーを守るって。

私が奪ってしまったものの代わり、ナミーに私が全部あげるって。

それに、私がおねしょしたって、周囲にはあきれられちゃうかもしれないけれども、仲良したちを失うことないから。男子たちには噂されちゃうかもしれないけど、それは仕方ない。うちのクラスの男子なんて興味ないし、ひらきなおっちゃえばいい。ネタにもできる。私のキャラクターなら大丈夫。

だけど、ナミーは無理だ。

ナミーの優等生雰囲気がかくずれたら、あの子はまたすべてのものを失ってしまう。

おねしょ、なんて、絶対にしそうにないイメージ。

それがくずれたら何もなくなってしまう。好きな人も、何もかも。

どうしようか、さて。

「ナミー、先生たちには話して、ないんだよね」

恐る恐る尋ねた。

「何をよ！」

「おねしょのこと」

「あたりまえよ！ とっくに直ったわよ！ そんなの！」

ナミーが二年の宿泊研修の時に失敗しかけたのは知っている。違うクラスだったけど、真夜中にそっと私の部屋に来て相談してくれたから。でもそんな大事にはなりそうになかったので知らん振りして押し入れに入れておけばいいとはなしておいた。

治ったんだと思ってた。

きっと気がゆるんでしまったんだろうな。

「なら、大丈夫よ」

「どうしてそんな無責任なこといえるのよ！ あんたはいつだって大丈夫大丈夫って言うてるけど、大丈夫だったことなんて！」

気が立ってるんだ。ナミーは。落ち着かせなくちゃ。私はナミーの抱きしめている濡れた浴衣を受け取り、いつもの脳天気な顔をこしらえた。

「いざとなったら私がおねしょしちゃったことにすればいいし、乾かしておいて知らん振りしてもいいし。どっちがいい？ ナミーのしたいようにすればいいよ」

この瞬間ナミーの顔にはほっとした表情が浮かんだ。

やはり、私がやるしかないよね。

「でも、そんな、できるわけじゃない！」

「いい？ ナミー？ 今日はここで私とナミーがおしゃべりしていたことにするの。で、ベッドの中でしゃべっているうちに、いっしょにねちゃって、私がおねしょしたことにするの」

「そんな」

「でも、それしかないわよ。いい、ナミー、今から演技開始よ。おねしょしたのは私なの。なくさめてるのはナミーなの。いい？ 絶対に、そうするのよ」

ナミーは何も言わなかった。ただ呆然としたままだった。

「いい、行くわよ」

戸を出たところでぴくっと引いた。他のクラスの子たちがこっそりうろついている。

「まずい、隠れてて」

なんだろう、じゃま。

「出られない？」

「うん、出られない。もう少し様子を見ようか」

時計を見ると、今は二時半。

ナミーももじもじしながらそこに立っている。

「佐賀さん、起きてない？」

起きているわけがない。いきなりぱたといびきが止まったかと思ったら、今度はまた大きな口をあけて「があっ」と唸る。戸を開ける時に聞こえたら、そっちの音で隣の部屋の子が目を覚ましそう。

「うん」

「私、やはりできない」

「じゃあどうするの？」

真っ正面から目を見つめて尋ねた。

「おねしょしたことがばれたら、霧島くんに振られちゃうよ。それに」

もうひとつ、ぐさっとくることを言う。

「ナミー、ハルにも嫌われたらどうするの？」

しかし、動かない。こまった。何度かうろうろしようとしたのだけど、外には出られない。そうこうしているうちにだんだん時間は経って行く。

「ドリ、あのね」

遠慮がちにナミーが切り出したのはその時だった。

「知らん顔して、シーツだけどこかに隠せない、かな」

「え？」

「だって、乾かせば、大丈夫かなと思って」

真剣な顔をしている。

ちょっと待ってよ。もちろん乾かそうと思ったら洗面所にあるドライヤーで乾かせるかもしれないけれども。

「ダメだよ、そんなことしたら。たいへんなことになるよ」

「シーツだけかくせばいいのかなとも思うんだけど」

ナミーは何度も言い募った。

「だって、そうしないとまずいもの。だって」

「ナミー無理だよ。汚したんだからしょうがないよ」

「だから生理だったってことにしたら？ それでもダメかな？ ねえ、ダメかな」

全身震え出した。こんなに肩からがたがたロボットみたいに揺れ出したナミーを見たのは初めてだった。喉から搾り出すように、ハルが気づかないように、小さい声だけど、歯と歯がかちかち言っているようにも見えた。

ナミーは必死なのだ。

自分のおねしょがばれないようにするために、必死にいい方法を考えている。

私も真剣に考えているけれども、けどどうしようもないよね。

ものがね、おしっこだからね。どうしようもないよね。

だってにおうし、ばれてしまう。それだったら早い段階でさっさと片付けてしまえばいい。先生だってわかっているはずだ。

「わかった、大丈夫」

これは少し心配なのだけど、やるしかない。

私はすばやく計画を立てた。

「シーツをたたんでおいて、どこかに隠しておこうか」

——宿泊研修と同じように。

ぐっしょり濡れたシーツを畳み込み、すばやく私はベッドの下においた。

そこで隠す方法があるはず。

——大丈夫、あの時だってばれなかったんだから、今回だって。それにもし万が一ばれてしまったとしたらその時は、私が責任を取る。絶対、ナミーを守るから。

私が転校してきてから、ナミーは今まで持っていたものを全部、なくしてしまった。

仲良くしてくれた友だちも私が奪った形になってしまった。

決してそんなつもりなんてなかった、なんて言葉、言い訳になんてならない。

それは、私が一番よくわかっている。

もう許してくれないかもしれないけど、私は償いをするために青大附属に入学した。

だから。

「ナミー、いいこと思いついた。いい？ 私に任せて」

ハルは相変わらず口を開けたまま、ごうごう鼻を鳴らして眠っている。可愛く賢いハルにこんな秘密があるなんて最初はびっくりしたけど、そういうところ、あったっていいよね。寝ている時はちょっとうるさいかな、って思ったけど、今ならかえってラッキーかもしれない。どうか、目が覚めませんように。